
物語を紡ぐもの

c.m.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語を紡ぐもの

【Nコード】

N4064K

【作者名】

c.m.

【あらすじ】

これは本来の物語ではない。
有り得ない時間。有り得ない世界。
それでも、彼らは出会った。紡がれるべき物語のために。

本来では巡り得ぬ者たちの邂逅とともに、物語は幕を開ける。

本作品は多くの作者様の協力の元に作られた三次創作です。

三次創作の苦手な方、オリジナルキャラや展開が苦手な方はお

控えください。

イラスト公開

すごい唐突かつ突然ですが、タイトル通り『物語を紡ぐもの』のイラスト公開になります。

> i 1 9 1 1 5 — 2 4 3 5 <

まあ、ベリアエル・バトオなんですけどね……。

主人公差し置いて何故か敵キャラを描いてしまった。こいつA、Sでは多分出番ないのに……。

まあ、主人公は一人描くと全員書かなくちゃいけないるので、結果的には敵キャラを書いて正解だったのかもしれない。

キャラクターアップ版

> i 1 9 1 1 6 — 2 4 3 5 <

そしてこちらがバトオのアームド・デバイス『ダインスレイフ』です。

> i 1 9 1 1 4 — 2 4 3 5 <

型月系の『魔法使い』と言う事で、デバイスも機械っぽい物ではなく、古風な感じに仕上げてみました。

どうも基本的なデザインが Fate ぽくなってしまつて、模様にも結構こだわってみました、どうでしょう？

イラスト公開 ヴェノム

タイトル通りのイラスト第二弾！

今回は『物語を紡ぐもの』ならび『SPIRITUAL ARM
S』の敵キャラ、ヴェノムのイラストです。

> i 1 9 2 0 7 — 2 4 3 5 <

コンセプトはズルそうだけど弱そうじゃない奴……けど上手く出来てるかどうかと問われれば微妙。

例によってローブ前面のトライバルタトゥっぽいデザインは、Fate Zeroの言峰の刻印をそのまま模写。

ホントは真っ黒なローブでも良かったのですが、地味すぎるためこうなりました。

全体的な顔のデザインは思ってた以上に早く決定。ロン毛に関してはストリートにしようと思ってたのですが、ナヨナヨしすぎるのでモジャ毛に変更。

しかしウザいなこいつの髪。マクス、ちょっとバリカン持ってきてくれ。丸めるから。

そんなこんなで顔は殆ど出来上がったのですが、眼だけが中々決まらず、凜々しい太眉から糸目、果ては爬虫類系のギョロ目など、分類分けしたのが7パターン近くなり、最終的には一番狡猾そうなの決定。

キャラの眼にこんなに悩んだのって今回が初めてだよ。

> i 1 9 2 0 8 | 2 4 3 5 <

ていうか描いてて何ですが、このローブの構造が気になってしょうがない。

どつやって着てるんだろつか……？

【修正しました】イラスト公開 御剣 仁

イラストも第3弾へ！ 今回は『物語を紡ぐもの』ならば『とある最強系主人公達の放蕩記』のキャラ、御剣 仁のイラストになります。

なのですが、見直すとあまりにもアレだったんで修正を加えて見ました。

> i 3 6 7 2 2 — 2 4 3 5 <

具体的にどう変わったのかはこちらを参照して下さい。

> i 3 6 7 2 4 — 2 4 3 5 <

もうあれですね、髪の毛とか古い奴虫が張り付いてんのかといたくなる様な不自然さw

足とか滅茶苦茶細くて違和感がバリバリw尻もでかいしw

と、まあそんな未練たらたらな内容だったのですが、背中ของマークに関してはきっちり残しました。

だって、あれですよ。これ御剣のはやてに対する歪んだ愛の表れですから（笑）。

あ。何か腕の象形文字ッぽいやつ、あれ『はやてLOVE』って書いたのを複数重ねて読めなくした奴ですw

こちらはキャラクターアップ版

> i 3 6 7 2 3 | 2 4 3 5 <

次あたりは桜ちゃんの修正かな……サービスショット付きでw

イラスト公開 マクス＝トレンジア

イラストも4弾……最早恒例とかしてきましたが、今回は『物語を紡ぐもの』ならび『SPIRITUAL ARMS』のキャラ、マクス＝トレンジアのイラストです!!

> i20534 — 2435 <

うん。何か色々とすまんかった。

どうでも良いけどタオルはホームセンターダイキ製。ガチな用務員は目の付け所が違うZE。

多分花壇の手入れをしながら松田聖子の『赤いスイートピー』を歌っていると信じて疑わない。

そしてそんな彼を見てヴェノムは腹筋が壊れるぐらい爆笑したとかしていないとか。

需要があるかどうかは置といて、キャラクターアップ版。

> i20533 — 2435 <

さて、色々とぶざけまくりましたが、こちらがマクス＝トレンジアの正式な画像です

> i20531 — 2435 <

デザインの初期コンセプトは絶対に優男にはしない、という点だったのですが、描けば描く程『ベルセルク』のガッツや『VP』の

アリュージェになってしまい、四苦八苦しまくったキャラ。

なんか怖い外見ですが、荒野を旅する男、という点から言ってもやはり逞しい顔や肉体出なくてはならないだろうと、厳しい感じに仕上げてみました。

……しかし柄悪いなコイツ。これで王子様かよ。

多分世界一白馬の似合わない王子。迎えに来られてもお姫様は絶対困るんじゃないだろうか？

つうか外見設定が18という事だったけど、こいつ絶対20半ばか、後半行ってるよな……。

こちらはキャラクターアップ版

> i 2 0 5 3 2 — 2 4 3 5 <

しかし二枚組って、ある意味今までの中で一番豪華な気がする……。

イラスト公開 霧河・A・桜

イラスト5弾、今回は『物語を紡ぐもの』ならび『ネギまの世界
に行ってきた』のキャラ、霧河・A・桜のイラストです!!

> i 2 4 7 2 5 — 2 4 3 5 <

さて、色々と言いたい事はありますが、まずは一言。

誰だ手前!!

何そのきりつとした顔!? 真面目さ120パーセントな出で立ち!?

本編でのライトさとお馬鹿っぷりが微塵も感じねえ!? 代役でも立てたのか!?

……なんて事はありません。ええ、ありませんとも。いわゆる『だまつてりや美人』タイプです。

あと、真面目な時はちゃんと真面目です。単にc・m・が普段バカやらせてるだけです。

実は作者、男は幾らでも描いてる癖に女の子を描くのは中学校の時以来だったりします。

ボデーラインとか顔立ちとかめちゃくちゃ四苦八苦しましたよ……あと、胸のポリウムとか。初期のころに比べて倍近く大きくなっています。

太ももけしからん事になってます。うん、実にけしからん。女の作者としてはジェラシーこもりっぱなしだよ。

尻小さいし。ウエスト細いし。

まあ、プロポーションとかはこれ位にしておいて、一番困ったのは何と言っても武器！

メカニックなデザインの日本刀とかどんなんだよ！？ と色々考え、結局現行の銃で形の合いそうな奴を組み込んでみた。

多分黒くて誰も判らないだろうから書いとくと、刀のメカな部分は『モーゼルC96』参考にしました。

あと、桜ちゃん名前に因んで桜も描いてみたり……実は時間が一番かかったのがここだったりします。

こちらはキャラクターアップ版

> i 2 4 7 2 6 — 2 4 3 5 <

VOL 1 001 Prologue (前書き)

本作はリリカルなものと、多くの二次創作の主人公と作者さまが織りなす三次創作です。

また、本作には最強 チート ご都合主義 厨二病 魔改造が乱立し、ガールズラブまであるので、そちらが苦手な方はお控えください。

……まどろみの中。深い深い穴の中。音一つないその場所で、私はうつすらと瞼を開く。

ここは何処なのか。どうしてここに居るのか。

求めるべき答え。考えるべき現状。何一つ分からないままに、私はここに立ちつくしている。

正直に言ってしまうえば、私は訳が判らなかつた。

自分が今まで何をしていたのか、何処の誰で、どういふ生活をしてきたのか。

そんなことは判っている。というより、記憶喪失でもしなければ判らなくなる事はない。

だというのに、私は今困惑している。

抜け落ちているのは、記憶の前後。なぜココに居るのか？ どうやってココに来たのか？

日常を思い出す事は出来るのに、一番重要なきっかけが見当たらない。

まあ、判らない事を考えても仕方ない。

そう割り切る事で、取りあえず自分の身の回りを確認する。

服装はいつもと同じ。会社に赴く時のスーツという格好は、少なくともここに来るまでは会社での仕事か、それに準ずる行為を行っていたという事になる。

ただ、判らない事が一つ。普段であれば持ち歩く鞆が、どこにも見当たらないという事。

デスクに着いていたのなら判らなくもないが、普段用いる万年筆やボールペンが未だに胸ポケットに刺さっている。

万年筆はともかくとして、ボールペンはメモを取る際はよく用いるものだ。私は自分の物以外は極力使わないので、デスクに着いていたのならボールペンはポケットに付いている筈がない。

つまり自分はデスクに付かず、何処かに赴く訳でも無いのにスーツを着て、手帳を持った状態でココに居る訳だ。

「手帳？」

口に出して気付く。そうだ、手帳を見ればいいんじゃないか。

日頃であればうんざりする程にメモを取っている私だ。日々のスケジュールだけでなく、その日の動向さえ記載された手帳には、目を通せば自分がココに居る理由の手掛かりにはなる。

手帳の印は三月十四日で終了。デジタル時計に表示された日付は三月十五日、午前九時半。

本来ならデスクに鞆を置いて、仕事に取り掛かる頃だ。

大した収穫はなかったが、取り敢えず情報は手に入った。後は、

「え？」

唐突に、その人物は、私の目の前に立っていた。

一体いつからそこに居たのか？ 手帳を確認した時か？ それとも、もつと前からか？

これでも私は耳には自信がある。いや、耳だけでなく身体的な機能には自信があるのだが、ともかく目の前の人物は私に気づかれずに目の前に立っていた。

「失礼。少々お尋ねしたい事があるのですが、宜しいでしょうか？」

目の前の人物……おそらくは少年と呼んで差し支えない頃の男性だろう。鈴の音を転がすように玲瓏な声は、この静かな闇によく響く。

黒絹を櫛げたような黒髪。白人とまではいかないものの、日本人としては有り得ないほどの白純の肌。色素の薄い、それでいて深

い黒瞳は吸い込まれそうな神秘性としてだけでなく、目を合わせてはならないと感じさせるような、魔性めいた印象を与えさせる。

異性にとつては目を引く半面、近付き難い印象を持った、そんな感じの子だ。

一見すれば、これ以上ないほどに女性的な顔つきだが、男性だという事を誇示するように、服の上から鍛え上げた肉体を覗かせていた。

何より、おかしいのはその服装。ハイネックの黒いシャツとジーンズ。そして黒革のジャケットと軍靴という出で立ちは、まるで……

……ある人物を、連想させた。

「大丈夫ですか？ お加減が優れないようですが」

「え？ ええ。大丈夫よ。それより、私も質問したい事があるのだけど、いいかしら？」

頭に浮かんだ人物を消していく。何を馬鹿な。いくらあの子に似ているからと言って、そんなことが、

「自分に応えられる事でしたら。ああ、そういえばまだ自己紹介をしていませんでした。」

自分は北澤^{きたばわ} 直也^{なみち}と申します。貴女は？」

そんな、もっとも有り得ない名前を、彼は口にした。

「う、そ……」

有り得ない。いくらなんでも、こんな事はない。あって良い筈がない！

「嘘よ……だって、貴方は……」
「自分が、どうかしたのですか？」

微かな戸惑いと、僅かな猜疑心を向けた瞳。だってしょうがないでしょう？

貴方は、だって……貴方は！！

「……みやもと宮本 ちくさ千草」

掠れる様な声が、口から零れる。満足に返事が出来なかったためか。それともこちらについて知りたい為か。

自身を北澤直也だと名乗った少年は、僅かに一步近づく。

「宮本千草さんですか。名前から察するに、女性なのですね。

いや失敬。元から視力がそこまで良くはないのですが、どうもこちらからは貴女がうまく見えないのです。こう言っては気に障る事でしょうが、まるでテレビのノイズか何かのような感じでした。」

こちらが女性だと判った事と、戸惑っている事を感じたためだろう。先ほどよりも声質は柔らかく、何処か友好的な雰囲気を感じさせた。

「私……私は……」

貴方を知っている。いえ、私以上に、貴方を知らない人間はいない。だって。

『 これで、全員揃いましたね』

そして、私は聴いた。ここで起きた元凶と、これから起きる、物語の声を。

『さて、皆さんには、何を伝えるべきでしょうか？ それとも、何を語るべきでしょうか？』

その声は軽く、それでいて重く、そして、幼い声だった。いや、声という表現には語弊がある。

例えるならテレパシーと言ったところか。耳からではなく直接脳に情報が送られるような、そんな感じだ。

年の頃は十を満たず、美しいと言って差し支えない身体に、一枚布のサリーを纏った子供は、男にも女にも見えた。

だが、特筆すべき点はそのではない。目の前の子供を異常とさせる点。人ではない別の何かだと、そう確信づける点を、この子供は持っている。

それは、羽。いや、この場合は翼と呼ぶほうが正しいだろう。自身さえ覆い尽くすほどの三対六枚の巨大な翼。

そして、深淵とさえ呼んで差し支えないこの場所を照らす輝きは、その子供自身が放っている光だ。

光は反響し、先程まで包んでいた闇を一瞬で照らしあげている。私たちが居るのは、ガラスでできたドームのような空間だったようだ。

「……天使？」

誰が口にしたのか。声には微かなノイズが走る。音を消すというより、ボイスチェンジャーか何かで声の特徴を無くしたような感じだ。

そして、子供はクスクスと笑っている。十中八九、今の眩きに対してのモノだろう。あどけない童女のような笑みには、同時に微かな哀しみの表情が覗く。

『皆さんが、どう呼ぶのも構いませんが、まずは先程の声に関しての疑問に答えましょう。』

端的に言ってしまうえば、皆さんには意味が無くなってしまっからですよ。声や姿、ヒトとしての記号はね』

「待ってくれ。意味が無くなると言ったが、どういうことかな？それに、私はどうか知らないが、姿がはっきりと捉えられる者も多くいるが？」

質問したのは肩甲骨あたりまで伸びた髪と、銀縁の眼鏡をかけた男性だ。前髪を伸ばしている為か、右目にも髪がかかっていて、全体的に黒を基調としたイメージが浮かぶ。

『そうだね。うん、まずはそこから話そうか。といっても、こればかりはこっちより皆さんの傍に居る方のほうが判りやすいんじゃないかな？ だって、貴方達が作ったんだし』

楽しむように、何かに期待するように、子供はただ、端的に告げる。

その言葉が……亀裂を生むと知っていながら。

「な、に……？」

『だからさ。姿の見えている君たちは、傍に居る姿の見えない方たちに作られたんだよ。』

いや、描かれた、と言ったほうが正しいかな？ まあ要するにね、物語の住人なんだよ、君たちは」

「莫迦な……そんな事が！」

『嘘だと思っなら訊いて見るといい。君たちの過去、語りたくもない真実やこれまでの軌跡。その全てを知っている筈だよ。ココに居る“紡ぎ手”の皆さんはね』

言葉を聞かなかったかのように。あつて欲しくないと、そう願う叫びを無視するように、その声は、言葉という暴力は、ココに居る“彼ら”を撃ち抜いた。

「嘘だ……嘘なのでしょう？ 千草さん……。お願いだ。嘘だと言ってくれ、でなくば、でなければ、俺は」

……貴女を、許せなくなると。震える声で、北澤直也という少年は、私のほうを向いていた。

「いい」

いいえという言葉を出し切る前に、私は地面に叩き付けられた。受け身を取ったため、痛みこそないけれど……もっと、身体とは別の場所が、今は痛かった。

「何故！ 何故嘘だと言ってくれなかった！？ 偽りでも良い！ 偽善でも何でも構わなかった！！」

なのに貴女は言ってしまった！ 何故貴女は口にした！？ どうしてこんな現実を突き付けた！？ どうして……」

瞳はつらく、深く、ただ認めたくはないと。そんな答えを聞いたかったのではないと、私に語りかける。

零れる事の無い雫。決して零さぬと誓わせた筈の少年の瞳には、小さな雫が浮かんでいた。

「貴方へ……背負わせてしまったから。いろんな事を背負わせて、色んな痛みを与えて。」

結局、貴方が望むものを私は示さなかったから。困難な道ばかり、歩かせてしまった。

だから 貴方は恨んで良い。

赦してとはいえない。だから、だからもう」

貴方は 罪を感じる必要はない。

憎しみでも、悲しみでも良い。私には何を向けても良い。

だから真っ直ぐに生きて。もう終わらせるから。幸せな日々を、描いて見せるから。

「貴方には、前を向いていて欲しい」

「そのような事、出来る筈がない……貴女が、貴女は知っている筈だ。俺に救いなぞ相応しくない。救いなぞ、願ってはならない！

貴女には言つて欲しくなかった。たとえそれが嘘でも、自分のしてしまつた事を、自分の見てきた“理不尽”を！ 誰かの所為にしたくはなかった！

でなくば……そうでなければ許せない。あの子は、どうしてつ、あの子たちはッ……！」

救われなかったのかと、私にしか判らない訴えを、彼は投げかけた。

誰もがこちらを見ていた。困惑していた者。剣に手をかけた者。口角泡を飛ばそうとしていた者。

全てが、自分を描いた者への問いかけを忘れていた。
あるのはただ、重い静寂。もう誰も言葉を発しない。皆が言いたかった事。伝えたい理不尽さは、形はどうあれ、彼が私に示したものと同じだった筈だから。

『もう、いいかな?』

そして、全ての元凶は口を開く。話を進めるために。これから私たちに、何かをさせるために。

『ここに皆さんを集めたのは、それぞれの“紡ぎ手”と“住人”に話をして欲しかったからじゃない。君たちには、して欲しい事があるんだ』

「少しいいかね? “紡ぎ手”と“住人”というのは“著者”と“キヤラクター”だということは理解した。だが、何故私には著者が居ない? 周りの反応を見るに、私はしっかりと見えているように感じるのだが?」

最初に質問をした男性が再び問いかけた。確かに、他の人たちには傍らに“誰か”が立っているのに、彼の横だけは誰も立っていない。

『それは簡単だよ。ここに集まったのは、“こちらがして欲しい事を行っても良い”と考えている者だけだ。

物語を描く“紡ぎ手”であっても、その意思がない限りココには来ないし、来れはしないよ』

「つまり、私は君の話に乗ると、そう考えているのかね？」

『うん。だって、そうじゃなきゃ君は来れない。本来なら反映される意思是“紡ぎ手”だけなんだけど、どうやらこちらの提案は君にとって有益なものらしいね』

「成程。それで、君の提案とは？」

おそらく、誰もが尋ねたい内容。ココに集めた目的を今、目の前の子供は明かそうとしている。

『 見せてほしい』

「なに？」

『判らないかな？ 見せてほしいんだよ。貴方達の物語を。そして、これからを』

皆が、その言葉に押し黙る。見せて欲しい、というのはココで物語を描いて見せる、という事だろうか？

その考えを口にする、子供はそうではないと首を振った。

『私には、判らなかった。何故貴方達が愛されたのか。何故私ではなかったのか。』

どうして。どうして土から生まれた者の子である貴方達を、あの方は愛したのか。

……私と貴方達の違いは何だ？ 完全とは言いがたく、老い、朽ち果て、争いを続け、あの方の子が全ての罪を背負いながら、貴方達に救済を届けたというのに。

なのに、何故貴方達は争う？ 何故あの方は貴方達を、そんな貴方達を愛した？

……もし違うのなら教えて欲しい。見届けさせて欲しい。あの方が愛した貴方達が、幾星霜もの月日を経て、どう変わったのかを。

私はもう、ココからは出られないのだから』

それは初めての眩きであり、嘆きであり、本心だった。愛されない悲しみ。選ばれない苦痛。日々を越え、時を過ごし、この場所でただ歳月を重ねてゆきながら、かつて全てを捧げる筈だった、いえ、真実捧げていた誰かを、この子は今も想っている。私は、それを理解してしまった。そして、この子の正体さえも。

「そう……貴方、ルシファーだったのね」

その答えに行きついた事が、予想外だったのか。その子は、私を静かに見つめていた。

『私を知ってるの？』

「……知っているわよ。“明けの明星”“光の運び手”七つの大罪に於いて“傲慢”を司る墮天使。

神への反逆によって地に墮とされ、星の中心へと墮ちた際の穴は九層の地獄となった。そしてここは、最下層。氷によって閉ざされた牢ね」

自分を知っていたことへの喜びか、それとも別の感情は判らない。ただ、少なくとも私の言葉は沈鬱だったこの子を笑顔に変えるだけの何かがあったようだ。

『ちょっと違うかな？ 七つの大罪っていうのは、ヒトが初めから持っているモノでしかないんだ。言うなれば“裏と表”の裏。“善と悪”の悪かな？

君たちの始祖があの実を食べた際に持っているもので、墮天^{わたし}使^{たち}が持つものじゃない。それをこちらの所為にするのは、人間が自分の所為じゃないと感じたがる、一つの驕りに過ぎない』

手厳しいけど、それが正しいのかもしれない。人はつい、誰かの所為にしてしまう。こんな筈じゃなかったって。もっと違う結末があったかも、って。

それを選択したのが、自分だとしても。

……あの子が、私に向けかけたように。

『ちよつと脱線しちゃったね。君たちには私が用意する舞台に行つて欲しいの。』

君たちの想像した、世界の一つへ』

「世界？」

『そう、世界。“管理局”“第97管理外世界”“魔導師”……君たちの記憶から引き摺り出したんだけど、もう想像がつくよな？』

「……何故、その世界へ？」

『君たち“紡ぎ手”と一部の“住人”が共通して知っている世界だったから。』

ここを選んだのは、単に皆さんが共通して知っている世界の中で一番多かったのがココだったというだけ。他意はないよ』

微かな笑みは何の為か。少なくとも悪意ではなく、楽しみにしている絵本を覗くような顔で、ルシファーは答える。

『ここから先は、君達次第。どんな物語を描いてあゆんでも良いし、何を望んでも良い。君達はここで一旦別れるけど、自ずと惹かれ合い、やがて出会う。』

私はここで見ることにしかできないけど、君達はきつと、“美しい”と、そう感じる事のできる物語を見せてくれると思う。だって

君たちを、あの方が愛したから』

光が溢れ、全てを包んでいく。きつと、この子とはもう逢えない。

私達が旅立って、物語を描いても、この子はココで、やがて終わる絵本を見ることしか出来ない。

それなら

「それなら見てて。きっと、貴方に素敵な日々を見せてあげられると思う。」

救われないモノなんてない。奇跡は叶う。祈りは届く。私達は、そうやって物語を描いていくんだから」

言葉は誓いに。私だけでなく、ココに居る多くの“紡ぎ手”がその言葉に頷いた。

『ねえ。名前、教えて？ 私はまだ、貴女の名前を知らないから』

……やっぱり、私はダメな奴だ。

出会ったばかりの、家族や友人との別れも済ませないまま、こんな面倒なことに巻き込んだ子供に、涙ぐみそうになっている。

嫌いな相手には容赦なんてない筈なのに、泣き出す子供には、どうしていいか判らなくなってしまう。

だけど、そういうのも含めて、私は私なんだ。

だから 何も出来ないけれど、せめて最後は、本心を伝えよう。

「宮本千草。私は、貴方を忘れない。神様は貴方を拒んだけど、私は貴方を受け入れる。だから、見ていて。きっと、皆が笑える物語にして見せるから。」

ずっと笑顔で居られるような、そんな物語にして見せるからっ…

…！」

だから、笑顔でいて。もう辛い顔はしないで。私は子供の泣く顔なんて、見たくないからっ……………！

『ありがとう。きっと、私は“幸せ”なんだと思う。私は泣く事が出来なかったけど、誰かが泣いてくれる事は、“幸せ”なんだって判るから。』

さよなら　　チグサ。待ってるよ』

光は包み、私たちは旅立つ。

最後に見たあの子の笑顔は、とても　　嬉しそうだった。

VOL1 001 Prologue (後書き)

c.m.「さて、プロローグと言う事で短めでしたが、いかがだったでしょうか？」

直也「作者が主役……最初から無茶苦茶だな」

c.m.「まあこの作品の没タイトルが『主役？ 作者ですが何か？』だからね。」

ちなみにボツ理由はコメディじゃなくてシリアス主体だからよ
「よ」

直也「他の作者がやりたくても出来なかった事を……痺れも憧れもせんが、異常にも程がある」

c.m.「そこをあえて通すのがこの企画よ。主役は主人公だけではなく作者も務めること。今までに誰もしなかった事を存分にするのがこの作品を作った理由よ」

直也「あの墮天使がキリスト教の墮天使をほぼ忠実に再現して居るのもそのためか……」

けど天使の姿が異なるな。ルシファーは美しい肉体を持った男性であって子供ではないだろう？」

c.m.「あなた、ガチムチで全裸な男が見たいの？」

直也「ごめんなさい」

c.m.「よろしい。」

それはさておいて、今回天使を細かく描写したのは、よくほかの作品で神様や死神やらが出てくるけど、宗教的に見た神様や悪魔ってどんなのかっていうのも伝えたかったのが理由ね」

直也「墮天使の話はこれ位にして、今回はほとんどキャラが出なかつたようだが、なぜだ？」

c・m・「一度に出すと收拾がつかなくなるから仕方ないのよ」

直也「そうか。今回出たのは俺とHagalaazさまの『とある最強系主人公達の放蕩記』の御剣 仁さんぐらいだな。

次回は誰からだ？」

c・m・「次回は『SPIRITUAL ARMS』の著者である神崎はやてさんが主役です。他の方に関しても、回を重ねることに出していいこうと思います。

今回の作品を書くにあたり、協力していただいた神崎はやて様、Kyo様、Hagalaaz様、笑う男様、久住祐治様、水玉様にはこの場を借りて心よりお礼を申し上げます」

直也「こちらからは作者さまにしか伝わらないかもしれませんが、タグに関するお詫びを申し上げます。

今回の作品で使用するタグの募集を行ったのですが、10文字以内で15件までしか入力できなかったため、殆どが使用する事ができませんでした。

皆様にはこの場を借りてお詫び申し上げます」

c・m・「それでは、今日はこの辺りで。失礼致します」

直也「P・S・感想の方ではキャラを連れてきたり自由に遊んでも

結構です。存分に楽しんでください」

002 強き力 弱き心

深い。とても深い森の中で、僕は目を開く。

ココが何処なのか。生きているのか。そんな疑問ばかりが頭に浮かぶ。

「 丈夫……すか？」

耳に届く声は微かに。声質から幼い少女だという事が判るが、今の自分にはぼんやりとしか判らない。

「 じゃあねえな。離れてな」

次に聞こえたのは男の声。野太い、というほどではないが、それでも先程の声の後ではどうしてもそう聞こえてしまう。

「 おい！ さっさと起きろ！」

「 うあッ……！？」

振り上げられる拳と耳を劈く様な大声。いや、流星に起きますよ。これは。

だって

「 幾らなんでも、地面に拳がめり込むような一撃は勘弁してほしいのですが……」

唸る筋肉と豪快な一撃。取り敢えず、手首まで埋まるようなのは流星にアウトです。

……主に自分の顔が。

「ちゃんと外しているだろうが。それと、いい加減に起きろ。さつきから何度も姫さんが呼んでたぞ」

「あ……すみません」

取り敢えず横に居る桜色のキャミソールを着た少女に謝……え？少女？

うん。別に幻覚を見ている訳でも自分の目に幼女好きな方専用のフィルターがかかっている訳でもない。

が。紛れもなく自分目の前 正確には精悍な男性の横 に立っているのは九歳ぐらいの年端もいかぬ少女である。

「何故に？」

「それはこっちの台詞だ。気付いたら服装が変わっているし、姫さんはちっさくなっちまった。お前さんなら何か知ってるんじゃないかと思つて起こしたんだが」

じろりと睨まれたので首を横に振る。幾らなんでも身に覚えがない物はないのである。
「というか。」

「何でスーツ？」

「知らん。こっちに来た時からそうだった。俺も姫さんも、ついでにこいつもな」

彼が右手に持つのは木製のケースだ。中身こそ見せて貰えなかったが、どうやら彼の愛剣が入っているらしい。

「……仮説なんです」

「構わねえ。今は情報が欲しい」

「あの天使　正確には墮天使らしい　が『何を望んでも良い』
って、言っていましたよね？　多分なんですけど、こちらでも満足に
行動できるように、とか。こんな物があると便利だなんていうのが
具現化されてるんだと」

「じゃあ何か？　姫さんが小さくなったのは、姫さんにそういう願
望が、」

「ありません！」

無いらしい。そうなるよ……

「マクスさんの趣味……嘘です。剣に手をかけないでください」

「まあ、そういった事は置いておくとしてだ。お前が“紡ぎ手”。
俺たちの著者でいいのか？」

「あ……」

そうだ。肝心なところを自分は忘れていた。どんなに親しげに話
そうと、彼らは自分が描いた架空の人物。だが、こうして現実に居
る以上言いたい事はあるだろう。

……あの少年と、同じように。

「そうビクつくな。お前さんに言いたい事は特にねえよ。」

俺だって多くの本は読んだし、その中には幸福じゃない物語もあ
った。けどな、だからってそいつに罪がある訳じゃねえ。

幸福なだけじゃ共感はされない。例え幸福な結末を迎える者にも
困難はある。そんなのは当たり前前の事だ。それにあれだ。あの天使
が居るってことはお前だって神様に作られたものだろう？　結局は
同じだ。誰かに作られなきゃ生きる事も出来やしない。

なら負い目を感じることはねえ。俺が聞きたい事は一つ。お前の
名だ」

「神崎龍也……君達を書いている時は、神崎はやてと名乗ってた」
「龍也か。そっちの方が良いな。そのガントレットにも合ってる。
しかし、あの時は同じぐらいの背丈に見えたんだが、まさかこんな
ガキだったとはな」
「は？」

今、何と言った？

「どうした？ お家に帰りたくなっただか？」

「あの、いま子供と」

「いや、どこからどう見ても子供だろう。何ならその池を見る。
月明かりでよく見えるぞ」

言われるがままに池を覗く。多少揺れてはいるが、それでも背丈
や大まかな特徴は判る。

齢は十ぐらいだろうか？ 日本人らしい黒髪の短髪と黒目の少年
が、月明かりに照らされた池に映る。

だが、問題はそこではない。自分が見ていたのは、別の個所。
バックルのサイドに付けられた、金属製のプッシュスイッチ。左
腕に装着された、竜を模った赤いガントレット。そして、それが当
然だというようにジャケットの中にはカードデッキがあった。

知っている。いや、自分に限らず、幼い子供であるならば誰もが
知るであろうそれを、しばし見つめる。
子供向けの玩具とは違う、鈍い金属のような輝きと重量。そして、
何よりも違うのはその存在感だろうか？

これは違う。ただの玩具ではなく、手放せば自分さえ食い殺され
る。そう感じさせる何かが、カードにはあった。

「龍騎に……カブト？」

間違いない。ガントレットやカードデッキに関しては見れば判るし、ベルトの両サイドについている物も記憶にあるクロックアップの形状と一致する。

だが判らない。あの天使は『何を望んでも良い』と言った。けれど、自分は何も表立っては願っていない。これが無意識の願いだというのなら、僕は英雄願望でもあるのだろうか？

あれから色々と確認して分かった事がある。どうやらこのカードやガントレットは 未だに試していないが 本物だという事。そしてもう一つは。

「鞆と手帳……か」

目の前にある二つの持ち物。一つ目は大きめの鞆。

こちらには自分やマクスを含めた、戸籍等の身分証明書や印鑑、通帳の類だ。

預金残高の桁が寝て暮らせる程になっていたが、そこは気にしない。

問題は帯剣許可証の方で、こちらもマクスを含め、全員分あった。お姫様の分はいらないと思うのは自分だけだろうか？

二つ目はポケットに収まる程度の手帳で、人数分ある。

どうやら初めから全員のポケットに入っていたようで、それぞれ文字や内容が違うものの、全員の現状や持ち物について書かれていた。

手帳によればここは海鳴市の裏山で、三十分ほど歩いた先には民

家があるという事。

そしてこれは自分だけのようだが、使える技や能力に関してだ。内容は事細かに載っているが、別段急ぐ事はない。

今は

「ッ！ 伏せる！」

その言葉に、一二もなく地に伏せる。

目に映るのは漆黒。影絵のような全体を月明かりに移したそれは、一言でいえば泥の塊だった。

原形を留め切れないのか。全身を泥でコーティングしたような体表は、所々で溶解し、また磁石で吸い寄せられるように集まって行く。

生き物らしい部分があるとすれば、猛禽めいた赤い両眼ぐらいの物だろう。

映像で見るよりは幾分か小さく、まだ成長していないのか、恐らくは一つ目なのだという事を感じた。

大した事はない。決して大した事はない。そんな事は判っている。だが、それでも自分は おぞましいと。正直に言えば、ある種の恐怖さえ感じていた。

だが、その恐怖は長く続かない。何故なら。

「封印すべきは忌まわしき器。ジュエルシード！」

この場を収めるべき人物。その声を、自分は聴いていたのだから。

《Sealing mode · Set up · Stand by ready》

声は幼く、頼りなさげだというのに。

「ジュエルシード、封印！」

……何処かで、その声に頼ってしまった自分が居た。

封印に関しては滞りなく完了した。

これは後になって知った事だが、やはり今回のジュエルシードは覚醒したばかりで力の弱い代物であつたらしい。

「あの、大丈夫ですか？」

問い尋ねるのは、金褐色と翡翠の瞳の少年。ユーノ・スクライアと見て間違いないだろう。

顔には見られた事の焦燥感と、こちらに対する気遣いの念が伺える。

「ああ。こちらに怪我はないんだけど、いくつか質問していいかな？ あの黒い塊とか、その手にある宝石の事とか」

「そうですね。あ、僕の名前はユーノ・スクライアと言います。あなた方は？」

「僕は神崎龍也、それでこちらが、」

「マクス＝トレンジアだ」

「レインシア＝リ＝グランヴァールです」

全員が並び、各自に自己紹介する。正直、体育の点呼みたいな感じだと思った。

ユーノは、何故こんな時間　現在の時間は午前二時　ここに僕らが居るのかを問われたが、そこはマクスが機転を利かせてくれたおかげで説明する手間が省けた。

掻い摘んで言えば、僕とレインシアさんがキャンプで迷子になり、保護者であるマクスが探しに行ったというところだ。

「そうですね。それであの黒い塊に関してなんですが、」

言い出したユーノの口が止まる。

原因は単純にして明白。ここに存在してはならない者。突如現れた異物に、全員は目を向けた。

「おや。これはこれは」

それは歓喜であり嘲笑。微かに浮かべた微笑は同時に唾棄すべき流信的な感情の表れか。

声質からして、恐らくは男性だろう。

全身を覆い尽くす漆黒のローブ。顔こそ仮面から見えぬものの、微かにはみ出した紫の髪が視界に止まる。

まさか　この男は。

「何故だ……？　何故、テメエがここに居る！？」

「おやおや。まさかとは思いましたが、やはり貴方でしたか。

こちらはどうぞ？　貴方には随分良いところでしょう？　何せ悲劇を彩る数が少ない。

とはいえ。一度作れば砂漠の砂ほど生まれ、探せば星程の出会いがあるのですが、やはり直に味わうとなると限られる。まあ、だからこそ穢し甲斐があるのですが」

「……質問に答えな。でなけりゃ」

滲み出る殺意。剥き出しの憎悪。下手をすればそれだけで人を殺せるであろう殺意を前に、男は怖気が走るような柔和な笑みで応える。

「ふむ。こうなる、という事ですかね」

その瞬間　　男の腕が消えた。

否、それは消えたのではなく、端に目で捉えられなかったと言うだけに過ぎない。

事実、男の腕は存在し、その振り上げるといふ動作よって作り上げられた惨劇が、目の前に広がっていたのだから。

「な……」

絶句する。何という事の無い一動作。ただ微かに腕を振り上げたにすぎない行為でありながら、人の胴ほどもある大木が直線状に薙ぎ払われ、大地にはそれが刃によって起こした事を誇張するように、数十メートルほどの亀裂が走っている。

「ふむ。やはり椅子に座ってばかりでは訛りますか」

「ぬかせ。以前より腕が上がっているだろうが」

その発言が壺に入ったのか、男は片手で腹を抱えながらくつくつと愉悦と興奮の混じった笑みを零す。

「ああ良い。良いですねえ、その顔。微かな不安と静かな憎悪が溢れている。

堪らない、実に素晴らしい顔だ。ですが」

それでは駄目だと、男は無機質な顔で語りかける。

「本当に良い顔は、失う事への恐怖です。この様な、ね」

振るう腕は微かに。まるで釣り師か、新体操のリボンを扱うかのような優雅な動作で動かした剣は、数メートル近いその刀身を蛇の如く撓らせながら、こちらへと迫る。

「ッ……!!」

反撃も何もない。元より攻撃は視界では捉えられず、反撃に出るにはあまりにも速い。

故に、この場で僕自身がとるのは、地を転がり、這い回るという選択肢しか残されない。

「良い判断です。なら、」

「おい……余所見すんなよ」

声の主は男の後ろに。いつ回り込んだのかは自分には判らないが、背後からの一撃は、男を驚愕させるには充分なものだったようだ。

「流石。なら、最後まで足掻いてみせなさい」

「自分の身を気遣えよ！」

右足が跳ねる。マクスの繰り出した右足刀は男の水月を撃ち抜き、そのまま大木を砕きながら遙か後方へと蹴り飛ばした。

「姫さん！ 龍也！ 早くここを離れる！」

「マクス、貴方は!？」

「奴の相手だ」

一二もないままにマクスは駆け出す。それも当然。今の自分は何もできず、彼女もまた巻き込まれればタダでは済まない。

戦士でない者は戦場に立つ事は許されず、力なき者は等しく死に絶える。

故に、戦士たる彼はここを離れた。力なき者を死の運び手から遠ざけるために。

そして。それは自分もまた力なき者に位置付けられたことに他ならないと、ただ歯を食い縛りながら理解した。

だが、だからと言ってここで腐る事は許されない。それをするのは余程の馬鹿か、先を見通せぬ愚か者だけだ。

「レインシアさん。ユーノ。ここから離れよう」

「けど！」

「早く！ 彼の行為が無駄になる！」

食い下がりかけるユーノに叱咤し、姫様の手を取ろうと手を差し伸べたところで、

「その前に、そちらのジュエルシードを頂こう」

唐突に。目の前に現れた男に、殴られた。

「グッ……！？」

「ッア！？」

無論。殴られたと言っても素手ではない。正確には男の手にした槍の払いによって吹き飛ばされたという事。

尤も、それは自分を狙つての事ではなく、ユーノ諸共無力化させることであつたのだろう。

「こ、んのお……！」
「待てユーノ！」

突然の暴力に対する怒りからか。犬歯を剥き出しに睨みつけるユーノの手を掴むと、ベルトバックルのサイドに付けられたプッシュスイッチを押す。

作動するかは判らない。ぶっつけ本番になってしまったが、それでもやらないよりはましだ。

クロックアップを作動させ、すぐさま立ち上がる。否、立ち上がるうとしたが、上手くいかない。

まだ動けるところからして骨に異常はないようだが、それでも膝はガクガクと震えている。

……情けない。この程度の痛みさえ耐えられないなんて。

自嘲気味に笑みを浮かべようとしたが、痛みの所為か上手く行かない。

クロックアップを作動させた事で、周囲の動きは非常に緩慢に見える。相手の口の動き、一步を踏み出す動作。枝から舞い落ちる木の葉まで、全てが等しく緩やかに動く。

ふと見上げれば、男の存在は異常だった。兜から具足に至るまで全身を覆う紫の鎧に、西洋の騎士が持つような、恐らくはアームドデバイスであるうランス。

またイレギュラーかと嘆息しつつも鎧に手を当てる。こちらもまた手帳で確認しただけの、魔道書も無いぶっつけ本番。だが、今は迷ってる暇はない。

「ザケル！」

口より紡ぐは雷の呪文。右手から迸る紫電は男を仰け反らせ、微かにたたたらを踏ませたものの倒れはしなかった。

「ッ……」

腕に微かなしびれが残る。

……こんな初級の技さえ満足に使えないのか。
ならば。

「ザケルガ……!!」

ゼロ距離射程での対人呪文。直線的な軌跡は複数の敵を殲滅するのには向かないが、一点に凝縮した雷はあらゆるものを貫く槍と化す。

さながら大口径の銃弾を受けたように、今度こそ男は吹き飛ばされた。

「じゃあ……逃げさせてもらおうよ」

追い打ちをかけるという選択肢はない。どの道今は安全圏に移らなくては意味がない。

傷の問題があるが、この男一人という確証はないし、マクスと戦っているあの男の事もある。わざわざここに残って危険度を上げる必要はないのだ。

「少し、重いな……」

ユーノはともかく、レインシアさんが聞いたら張り倒されるだろう。

だけど今は許して欲しい。ラウザルクで身体強化を施しているとはいえ、傷も癒えないまま二人を担いで動くのは正直辛いのだ。

どれほど歩いたのか。麓にはいつ着くのか。先の見えないまま、山を下る為に道沿いに歩いてきたが、何処まで行けるものか？

「はあはあ……」

呼吸が荒い。クロックアップはともかくとして、ラウザルクはそう何度も使えないらしい。

「なんでだ？ ……なんで？」

……こんなにも、自分は情けないのだろうか？

傷は浅い筈だ。敵も追っては来れない筈だ。なのに、なのに自分は焦っている。

すっかりしろ、神崎龍也。こんな物語の主人公なら苦もなく切り抜ける。舞台に立った以上、力を手に入れた以上はそれが出るだろう。だから。

こんな。雑兵の十や二十に囲まれた程度、どうってことないだろう！

「は、っはアッ」

呼吸が荒く。意識が高揚しているせいか、思考が断線している。ハイになるのは良い。むしろ傷の痛みは感じない。

問題は一つ。今、この状況の掴めていないユーノとレインシアさんをどうするかだ。

「いつの間にも、こんな」

ああ。そう思うのも当然だろうな、ユーノ。

「ごめん。レインシアさん、ユーノ。逃げ切れなかった」

状況の読み切れない二人に、短く謝罪する。正直、意味だけはしつかり伝わる筈だ。

そして、今自分が取るべき行動も決まっている。

「ユーノ。レインシアさんを逃がさなくちゃならない。連中の言う“ジュエルシード”はあの青い石の事だろう。渡せとは言わない。だから、取り敢えず」

「連中の気を引かせろ、って言うんでしょう？ 判っています。僕も、貴方達を巻き込んでしまった責任がありますから」

彼が頭の良い子供で安心した。ここで駄々を捏ねる様な奴ではない事は判っていたが、それでも気持ち程度の安心はできる。後は。

「こいつらを、何とかしないと」

手にはカードデッキがある。魔術も、中級ならあと一回ぐらいは使えるだろう。

だから。

「レインシアさん。僕が道を開きます。だから」

「お断りします」

短く。それでいてきつぱりと言われた言葉に、僕は耳を疑った。

「駄目です。幾ら貴女でも、今回ばかりは」
「黙りなさい！」

本来の彼女では考えられない様な、聞く者を拒絶する様な声。
普通なら考えられない挙動に、僅かにたじろぐ。

「そんな震えるような手で、何が出来るんですか！ 貴方みたいな子供に何が出来ると言っんです！ 一生懸命頑張っつて、手を震わせながら強がりを言っつて、それで何かが変わるのは普通に生活を送っつていてる時だけです！」

こんな場所で、こんな風に子供を困んでいる連中に、貴方が何か出来るんですか！？」

私には確かに力はありません。だけど、私は大人です！ こんな体になっつて、どうしようもない位、足手まといに見られるかもしれないけど、それでも貴方たちみたいない子供を守るぐらいの力はあります！」

そう言っつて、レインシアさんは右手の宝石を構えた。
込められる魔力。振るわれる力。自分が知っつている彼女には無い、別の力。

光と共に現れたその姿は、幼ささえ在るものの、かつて誰もが目を引いたであろう高貴さと、騎士の如き凛々しさを兼ね揃えていた。デバイスと言っつこの世界特有の“魔法の杖”を構え、彼女は静かに言葉を紡ぐ。

「サルワーティオー。彼らを護っつて」
《了解しました》

護るという意思。その言葉は単純でありながらも一つの祝詞とな

り、自分とユーノを包み込む。

そう。自分とユーノだけだ。レインシアさんはバリアジャケットこそ纏っているものの、肝心の防御術式は一つとして存在していない。

「そんな……そんなの、認められる訳ないでしょう!? 貴女はどうなる!？」

「こんな事をして、一体何に、」

「けど。貴方たちは、怪我をしなくて済むから」

「ッ」

息を飲む。こんな、こんなときまで、自分ではなく見ず知らずの子供と、子供の振りをした大人を助けようとするなんて。そんなの。

「認められる訳ないでしょう! 貴方は知らないだけだ! 僕は臆病なだけで本当は」

本当は、貴女と同じ大人なんだと。そう言おうとしたのに、そう言いたかったのに!

何で、何でこんな事をするんだ!

「転移、術式……」

足元に描かれる魔方陣。その術式の意味を、ユーノは正しく読み取った。

「行きなさい。そして、決して捕まってはいけませんよ」

その言葉に返す暇もなく、僕とユーノは、別の場所へと飛ばされる。

最後に。とても優しい、まるで泣きそうな子を慰めるような、そんな顔をした女性を残して。

Side - out

子供たち　正確に言えば一人は大人なのだが　を離れた場所に飛ばし、レインシアは息を吐く。

細かい座標の指定はなく、ただ安全圏にと指定したが、恐らくは上手くいつているだろう。それは理論ではなく感覚。

自分ならばできる。そして現に出来たのだという実感が、彼女の中に行き渡る。

後は目の前の存在をどうするか。思案しかけたところで、

「隊を二つに分ける。ここから南西に五キロほど離れた山。もう一人は距離こそ遠いが、だからと言って本命と見るな。

迅速にジュエルシードを回収しろ」

唐突に、レインシアの正面に立った人物が指示を出した。

個性のない鎧の中で比較的線の細く作られた鎧の主。他の騎士が槍であるのに対し、その人物は弓を手にしていた。

甲冑にこそ隠れているものの、恐らくは十代半ばと言ったところだろう。若干の幼さの残る声は瑞々しいものの、言葉には氷の刃めいた伶俐さがある。

「な……」

「どうして気付いたのか判らないといった顔だな。二人同時に、それも異なる場所に転移した手腕は見事だ、子を逃がさんとした啖呵も含め、称賛に値する。」

だが、術式に無駄がある。はつきり言って丁寧すぎるな、教科書通りであるが故に応用が利いていない。おかげで魔力の痕跡が辿り易かった」

例えるなら、魔法とは一種の計算だ。

10という数字を求めるのであれば、 2×5 とするなり、 $6 + 4$ という風に行えば良い。

だが、レインシアはそれをしなかった。10という数字を求めるのに延々と1を足し続ける。そんな手間のかかりすぎる行為を彼女からしてみれば魔法を使ったのは初めての為、致し方ないと言えはそれまでだが 行ってしまった。

故に判り易く、読みやすく、無駄がある。

子供の為の計算ドリルのように、実に簡潔極まりない内容だった。

“気付かれたのなら、もう一度転移を”

場所が知れたのなら、こちらからもう一度転移すれば良い。それを行うために、レインシアはもう一度杖を構え持とうとし、

「行っていいと誰が言った？」

唐突に、彼女の目の前に弓を突き付けた。

否。突き付けた、という表現は正しくはあるまい。事実、レインシアの目の前に居る女性は、その弓で彼女を射抜こうとしていたのだから。

それが出来なかった理由は一つ。レインシアが張り巡らせた、防御魔法による物に他ならない。

「成程。その防御、並の術者によるものではない。私は、いや、恐らくは誰であろうとその術式を突破する事は不可能だろうな」

だが、と。その女性は甲冑の下から微かな笑みを覗かせる。女性の右手が上がる。それが何を意味するのか、レインシアにも判ったらしい。

「威力は低くとも構わん。転移する暇を与えるな」

「ッ！」

指揮者の如く振り下ろされる右腕。

体勢を立て直そうとするも遅すぎる。この場を包囲する二十七名、その全員が矢継ぎ早に、しかし規則正しいリズムを取るように攻撃してきたのだから。

「ふむ。綻び程度は出来るかと思っただが、まさかこれ程とはな。

追跡した二分隊に伝える。五分以内に終わらせると」

「既に任務完了しています。こちらに向かわせますか？」

その言葉に、レインシアは耳を疑った。

いや、彼女でなくとも否定したい内容だっただろう。当然と言えば当然だ。彼女が転移術式を発動させてから二分と経っていない。

その間に二人を……

「殺し、たのですか……？」

その言葉を否定して欲しいと、敵である相手に、縋るような声で彼女は口を開く。

「無益な殺生はしない。

……私を含め、ここに居る者たちは失った痛みを知っているのにな」

「え？」

真意を確かめる事は叶わない。撤収だ！ という女性の一喝と共に、彼らはこの場から霧消するように消えていたのだから。

ただ一つ、レインシアが気がかりだった事。最後の、あの一言を呟いた時。

あの女性はどこか 悲しそうだった。

S i d e - R y u y a K a n z a k i

ここがどこかは判らない。あの転移術式が上手く発動したのか。ともかく先程とは違う森に居る事は間違いないだろう。

「……最低だ」

口から出る声は誰にも届かず、夜闇に吸いこまれ、消えていく。それは逃げてしまった事でも、本当の事を告げられなかった事でもない。

僕は、僕はその時！ あの転移が発動した時に……！

「……ホツとしたんだ」

自分は、安心してしまった。あの時、逃げられた事に。あの人が残されているのに！ 我が身可愛さに！

ガン！ と拳を木の幹に叩きつける。鍛えていない拳からは皮膚が裂け、血が滲むがそんな事は知った事ではない。とにかく今は！

「戻らないと、レインシアさんが」
「いや。その必要はない」

声を遮る様に現れたのは、複数の騎士。
先程の連中と同じ甲冑を纏っていることから、恐らくは追っ手だ
という事が判る。

逃げちゃ駄目だ。今度こそ、逃げてはいけない！
ジャケットからカードデッキを取りだし、前に突き出す。後はた
だ、あのヒーローたちと同じようにすればいい。

「変……がッ!？」

それは迅速であり、一方的だった。持ちつる手段は何であろうと
使わせない。例え格下であろうと、一切の行動を赦さない。実に合
理的で呵責のない一撃。

甲冑を身に付けた拳の一撃は重く、鉄アレイかメリケンで殴られ
たような痛みが響く。
肺から漏れた呼吸は全身を脱力させ、ゆっくりと地面が近くなっ
た。

ばしゃり、と。恐らくは前日に雨でも降ったのだらう。泥の地面
に身を預けながら、僕は目の前の騎士を見据える。

「ほう。見た目の割に頑丈だな。だが動かぬ方が賢明だ。肋は確実に
砕けている」

ああ。それでか。容赦のない一撃の所為で、痛覚が麻痺している
らしい。正直、さつきから内側でベキベキと音を立てる骨が煩わし
かったところだ。

右腕を上げる。ただの一度でも良い。一太刀でもこいつに一撃を
入れなければ、自分の気はすまないし、レインシアさんの方にも向

かっつてしまっ。

「ザケ　ぐっガアアアアアア！」

右腕を踏まれ、のみならず完全に砕かれた。

聞くに堪えぬ　とはいえ肉体が幼い為、それほど煩わしくはな

いが　絶叫。

金切声めいたそれは森に響き、やがては吞まれて消えていく。

「仲間からの報告は受けている。その右手。どういう術式かは知らんが、雷撃を放てるらしいな。」

俺にもお前ほどの息子がいたから手は抜いているが、それでも敵である以上は容赦出来ない。赦せとは言わんよ、恨みたくば存分に恨め」

動けなくなつたのを確認してだろう。バインドでも使えば良い物を、拘束さえする必要ないと言わんばかりに槍の一振りでこちらの持ち物を全て検査し、ジュエルシードの存在がないと知るや否や、引き揚げにかかった。

「あちらが本命か。まあいい……こちらも後で向かう。引き揚げてくれ」

呆れ半分。納得半分と言ったところか。彼の仲間を引き揚げ、自分と、自分に直接手を下した男が残される。

殺されるのか。それとも他に何かあるのか。どちらにせよ、まともな事にはならない。そう思っていたのに。

「済まないな。これで明日には治るだろう。こんな事を言う資格はないが、早く良くなってくれ」

軽く振られるランス。その一振りで自分は光に包まれ、傷の痛みが引いていく。

「そして、願わくば」

もう二度と、出逢わないでくれと。何処か遠い眼差しを、甲冑の下から向けてきた。

「ま、て……」

その声が届いたのかどうか、最後まで分からない。男はただ踵を返し、この場を立ち去る。その足音は、どこか重たく聞こえた。

S i d e - o u t

「つつ　　あ」

肺から押し出された空気を取り込み、ユーノ・スクライアは木の幹に身体を預ける。

既に立ち上がる気力さえないのか、ずるずると木に預けた身体が滑り、地に腰を下ろす形となる。

“このままじゃ、駄目だ……”

既に満身創痍。抵抗する間もなくジュエルシールドは奪われ、レイジングハートも損傷している。

デバイスは良い。壊れたと言っても自動修復機能があるし、最悪

明日の夕方には回復するだろう。

問題はユーノ自身の傷だ。全身をバインドではなく物理的にダメージを負わされている。

二日までには完治することだったが、その間に連中に先を越されるだろう。

残りのジュエルシードは二十個。その全てを、連中に奪われる訳にはいかない。

“ 誰か、僕の声を聞いて。力を貸して……魔法の、力を…… ”

それは醜いと言ええる他力本願。誰かを巻き込む事を前提とした声。

だが、それを否定できるのは第三者だけだろう。少なくとも、あの青い宝石にはそれだけの危険が孕んでいる。

全身から力が抜け、視界が狭くなってゆく。後に残ったのは、赤い宝石と、一匹のフレットだけだった。

そして。この二人の決着も、予期せぬ方向へと流れる。

方やスーツに身を包んだ、精悍な男性。

方やローブと仮面によって姿を隠す、陰湿な男。

互いに息を切らす事も無く、また傷らしい傷も負ってはいない。

だが、だからと言って両者が何事もなく平和的な交渉に出たかと言えは否だ。

焦土と化した大地。まるで空爆にでも遭ったかのように薙ぎ倒された木々は、数キロに渡って築き上げた年月を無に帰された。

恐らくはもう、この地に草木が生える事はあるまい。

隠蔽も何も無い、純粹な力と力のぶつかり合い。ただ人災と呼ぶしかない二人の争いが、この場に惨劇と言う爪痕を残した。

「まったく。貴方とはもう少し遊んでいたかっただのですが、少々夢中になり過ぎてしまったようです。」

まあ、連中を甘く見ていた私にも責任はありますが、ともあれこれはよろしくない。

正しい持ち主ならいざ知らず、無粋な第三者に渡ったとあっては私が来た意味が無くなってしまいます。

少々名残惜しいですが、今日はこの辺りで失礼しますよ。」
「逃がすと思うか？」

長々しい独白には嫌気がさしたと言わんばかりに、マクスは剣を構え直す。だが男もまた、せつかな方だと言わんばかりに肩を竦める。

「こちらは二十年近くも待ったというのに、気が短いですね。」

ですが、今の貴方では私には勝てませんよ。せいぜい腕を上げて下さい。“魔導師”の連中を相手にね。」

返答を待つ事さえなく、男は消える。この場には憎悪に顔を歪める男性と、荒れ果てた大地が残された。

草木も眠る丑三つ時から一時間ほど経った頃。

山中に踏み入る三つの影があった。尤も、彼らは先刻のような騎士や得体の知れぬローブの男のような不審者ではない。

いや、ある種に於いては彼らもまた普通とは呼べぬ存在ではあるのだが、先の連中に比べれば健全者と言って差し支えあるまい。少なくとも、見ず知らずの人間を助ける事の出来る善人には違くないのだから。

「子供？ 何でこんなところに？」

「考えるのは後だ。美由希、包帯と薬品を。恭也、運ぶのはこちらでやるから荷物を頼む」

恐らくは親子であろう。深夜の、しかも人の寄り付かぬ山中に子供が倒れているという異常事態でありながら、彼らの対応は実に迅速なものだった。

「持ち物はこれだけか。……これは玩具、かな？ 随分と精巧に出てくるが」

「こつちのはカードみたいだし、多分そうだと思う。けど恭ちゃん、何か変だよ。」

これ、何て言うか怖い」

美由希と呼ばれた少女は、手にしたカードを見て肩を震わせる。

これは異常だ。持つてはいけないものだ、本能が叫び声をあげている。

「ああ。厄除けをしていない品みたいな感じだ。オカルトっぽいけど、今はそんな事を行っている暇はないだろう。とにかく家に帰ろう。この子の事もある」

そして、一同は山中を下り、家へと戻るべく踵を返した。

これより物語は先へと進む。まずは一名。

この時より、錆びついた秒針は時を刻む。やがて巡るべき物語を進めるために。

物語を、終わらせるために。

002 強き力 弱き心（後書き）

c.m.「皆様お待たせいたしました！ ようやく第二話の投稿で
ございます！」

直也「明るいノリで言ったところで誤魔化されると思っな。なんだ
このバイオレンスっぷりは！ 二話目でこれか！？」

c.m.「なに言ってるの？ 人死も流血も何もないじゃない。そ
れに主人公やヒロインはともかくとして、作者は一般人なのよ？
普通は素人は何もできなくて当然。」

私だつて国外出張で紛争地帯に何度か行つたけど、最初の一
週間は怖くて震えてただけだったし、今だつて怖い物は怖いわ。何
事も経験して強くなるものよ」

直也「まあ確かに現役軍人の素手と銃を持った子供が対決したら大
抵は前者が勝つだろうし、スペック 強さというのも理解できるが」
c.m.「戦いの中で傷ついて成長するのが主人公よ。これから徐
々に成長していくから安心しなさい」

直也「まあ、成長に期待と言つたところか。次回も神崎さまが主役
か？」

c.m.「ええ。ここで他の人に行つてもいいんだけど、後味が悪
いし、一段落着くまで神崎さまが主役よ

ちなみに更新は週に一度のペースになりそうです。仕事もあ
りますし、下手をすると国外出張もありますので」

直也「成程。その辺りは仕事の都合もあるし、仕方ないか

まあ、本編はここまでにしておいて、感想をしていたいた皆様にお礼を言わなくてはな」

c・m・「勿論。神崎はやて様、Kyôさま、Hagalazさま、水玉さま、久住祐治さま。

感想を書いていただき、誠にありがとうございます。これからもがんばって行きますので、よろしくお願いいたします」

直也「自分からもありがとうございます。皆さんに文章力や構成について誉めていただき、嬉しい限りです」

c・m・「それでは、今日はこの辺りで。失礼致します。」

003 小さな勇気 大きな一歩(前書き)

今回はNGシーンもありますので、あとがきも是非読んでください。

003 小さな勇気 大きな一歩

どたばたと慌しい音で、わたしは目が覚めた。

携帯電話に表示された時刻は、午前四時。お日様が顔を覗かせる時刻でもなければ、目覚ましのアラームが鳴る様な時間でもない。瞼を擦りながら目を覚ますわたしに、微かに声が聞こえてきた。多分、まだ夢から完全に抜け出していないせいだと思う。けどその声は、未だに耳に残っている。

「あの子、助けてって言ってた」

見えたのは、林の中。聞こえたのは、助けを呼ぶ声。

それは多分夢だと思うし、もしかしたら本当に叫んだのかもわからない。

けど、どちらにしても今は判らない。

今自分が行うのは、少し早いけど着替えて、一階の様子を見に行く事だろう。

そう考え、わたしは一階へと着替えて降りる。そこに居たのは、自分と同じぐらいの男の子だった。

「え？ ええ!？」

えと、どういうことかな？ ソファで寝てるのは男の子で、あれ？ ここつてなのはの家だよな？

ふと自分でも可笑しなことを考えつつ、辺りを見回す。今ソファで寝てる男の子は何処の誰かとか、どうしてここで寝てるのかとか、そんな事を考えながらアタフタしているうちに、お姉ちゃんが

ひよっこりと現れた。

「あ。なのは、起しちゃった？」

お姉ちゃんはわたしの顔を見て、少し申し訳なさそうにした。けど、今はそれより。

「この子、」

「ああ。その子ね、深夜にトレーニングに行ってたなら、森の中で倒れてたの。」

幸い怪我は軽かったし、持ち物と一緒に運んできたんだけど」

そういうお姉ちゃん言葉に、わたしはもう一度この男の子を見る。

短くカットされた髪に、おそらくは同じ黒い瞳があるのだろう。当たり前と言えばそれまでだけど、典型的？ な日本人に違いない。だけど、その子は何処か変わっていた。

それは容姿とは別。この子は、わたしたちと……うっん。多分、お姉ちゃんや、お兄ちゃんと違う何かを持つてる。

それが何なのか、わたしには判らない。そして、何処か自分と同じだという事も。

そのどこかが今は判らないけれど、後から考えれば、わたしはこの時、気付いていたんだと思う。

きっと。この子がきっかけだったんだって。

結局。あの子は目を覚まさなかった。

無理に起こすのも気が引けたし、お姉ちゃんやお兄ちゃんが言うには、怪我をしていたらしいから遠くで眺めていたけど、こうして授業を受けている間でもあの子の事は気になっていた。

けど、好きとかそういうのでは決してない……多分。

ただ心配なだけ。けれど……それ以上に気がかりなのは……。

あの左手の、赤い、竜を模したような機械。多分男の子向けの玩具だと思うけど、何か恐かった。

まるで、気を抜いてしまえば食べられてしまうような。ライオンか何かを強引に鎖で繋ぎ止めたような、そんな怖さ。

勿論、そんなものは気の所為だって事ぐらいは判るけど。

それでも　　わたしは恐かった

「なのはちゃん、どうしたの？」

「え？」

「え？　　じゃないわよ。急に黙り込んでうんだもん。どうかしたの？」

深く考えすぎちゃったみたいだ。わたしの座っている横のベンチから声がした。

何処かおとなしい感じのする若干のウェーブのかかった黒髪の女の子、月村すずかちゃんと、金砂のような髪を片側に結んだ快活な女の子。アリサ・バニングスちゃん。

どっちがどっちの発言かは、言うまでもないと思うけど、どうやら二人には心配をかけちゃったらしい。

別に隠す事も無いので、二人には今朝の事を伝えることにした。

あの怪我をした不思議な男の子の事を。

「ふーん……つまりなのはは、その男の子の事が気になって私達の話聞いてなかったと」

「あ、アリサちゃん。そんなに怒らないで……けど、何でその男の子怪我してたのかなあ？」

「すずかちゃんの言う事も尤もだ。わたしだってそんな事は判らない。だけど……。」

「お父さんが確認したんだけど、鞆の中に通帳や印鑑が入ってたんだって。」

「それで、お金持ちだから狙われたんじゃないかって」

これにはお兄ちゃんも同意してた。勝手に持ち物を見るのは気が引けたみたいだったけど、あの場合は仕方ないと思う。

けど、それ以上に驚いていたのが。

「それと。“たいけんきよかしよう”っていうのが入ってたみたい。剣とか刀とか、そういう刃物を持ち歩いても良いですよって言うのが、保護者の分だけじゃなくて、男の子の分まで」

「帯剣許可証ね……鮫島も持ってるらしいけど、あれ、そうそう簡単に手に入らないらしいわよ」

それはそうだと思う。うちではお母さんとわたし以外は全員持つてるから気にならなかったけど、刃物を普段から持ち歩いて良いなんて言うのは、よっぽど良い人じゃないと危ないと思うし。

「何だか、怖い事になりそう」

「すずかちゃんが、どこか震えたように呟く。」

「多分、それは正しいのだと思う。これから先に起こる、運命を考えれば。」

結局。何処か身の入らない調子で授業を終え、塾へと足を運ぶ。何処か空気が重苦しいのは、やっぱりあの男の子が原因だと思う。……やっぱり、話すべきじゃなかったかな？

「あ。こっちこっち。ここから通ると、塾への近道なの」

内心そんな事を考えつつ、アリサちゃん達と一緒に林道を通る。けど。

「ここ……夢で見た……」

もう一人の男の子。名前の知らない誰かが、私に助けを呼んだ場所。

“ 助けて！”

「え？」

どこからか聞こえた声。頭の中に直接響くような、不思議な声。

「なのは。どうしたの？」

「今、何か聞こえなかった？」

けれどアリサちゃん達には聞こえなかったらしい。

僅かに頭を振る二人に対し、わたしは耳を澄ませる。

あの声は何処から？ もう一度、今度はちゃんと聞こえるように

意識を集中させる。

“ 助けて！”

声のする場所へと、一二もなく駆けだす。

誰かを助ける事に、理由なんてない。だから、わたしはこうして駆けている。

気付けば林道の奥へ来ていたのだろう。目の前には、首輪をつけた小さなイタチ？ のような動物が倒れていた。

怪我をしているみたい。

そつと手を差し伸べると、その子はわたしの方へと目を向け、また倒れてしまった。

「なのは、どうしたの!？」

「あつ……この子怪我してる………」

これが、二度目の出会い。わたしの運命を変えた、二人目の出会い。

あのあと、取り敢えず獣医さんの所に連れていくことになった。獣医さん曰く。

「怪我はそんなにないけど、かなり衰弱してるみたいね。一晩中、一人ぼっちだったんじゃないかな？」

とのこと。先生に皆でお礼を言い、一先ずあの子の元へ向かう。

「先生？ これって、フェレットですよ。どこかの、ペットなん
でしょうか？」

「フェレット……なのかな？ 変わった種類だけだ。

それに、この首輪についてるのは、宝石？」

アリサちゃんの問いに、獣医の榎原先生はフェレット？ 手を差
し出すと、ピクリと顔を上げ、辺りを見回した。

周囲をぐるりと、まるで観察するように見回すと、わたしの方へ
と目を向ける。

「なのは、見られてる」

「あ……うん」

どんな反応をすればいいのだろうか？ アリサちゃんに言われた手
前、このまま何もする訳のもいかないし。

とりあえず、おずおずと指を差し伸べる。そっと、恐がらないよ
うに。怖がられる事の無いように。

その気持ちが届いたのかは判らないけれど、この子は指を静かに
舐めると、また机の上に伏してしまった。

「取り敢えず安静にした方が良さそうだから。明日までは預かって
おくわね」

「……はい。ありがとうございます」「」「」

三人が顔を見合わせ、お礼を述べた。

塾への時間が、もう差し迫っている。先生に手を振り、また明日
来る事を伝えると、わたし達は踵を返した。

結局。学校のとくと同じく、塾にもあまり身が入らなかった。

正確にはあのフェレットを誰が引き取るかで揉めていたのが原因だった。

本来うちは飲食店を経営しているので、ペットはご法度なのだが最終的には籠に入れて、わたしがしばらく面倒を見るのならという約束の下、うちで預かる事になった。

夕食を済ませ、アリサちゃんとすずかちゃんにうちで預かれるようになった事と、明日一緒に迎えに行く事をメールで約束し、ベツトに向かおうとしたところで、

“聞こえますか？ 僕の声が、聞こえますか？”

あの男の子の声がした。昨夜の声と、昼間の声と、同じ声。

“聞いてください。僕の声が聞こえますか？ 聞いてください、僕に少しだけ、力を貸して下さい”

あの子が、喋ってるの？

“お願い！ 僕の所へ この近くに、危険が、もう”

そこで、声は途絶えた。結局あの声は何だったのか判らないまま、わたしはベツトへと倒れ込む。

あの声は何なのか、そんな事は判らない。だけど、今やるべきなのは
！

ベットから起き上がり、服を着替え、夜道を駆ける。
未だに、あのソファアの男の子が起きる気配はなかった。

S i d e - R y u y a K a n z a k i

目が覚めた。どうやら誰かが助けてくれたらしく、自分は今、ソファアに身を預けている。

逃げて、しまった……。

胸にこみ上げる罪悪感。己の不甲斐無さに顔を歪めるも、状況が変わる事はない。

とにかく今は、身を起こすことが先決だろう。ふらつく頭と、痛みを堪えつつ立ち上がるうとしたところだ。

“聞こえますか？ 僕の声が、聞こえますか”

その声が、耳に届いた。

「ま、さか 今日なのか!？」

途切れることなく響くSOS。ここが何処なのかは重要ではない。
今、やらなければならないのは !

「行かなくちゃ、あいつらが……」

あの騎士たちは、ジュエルシールドを狙っている。そしてあの仮面の男、ヴェノムも。

急げよ。何を立ち止まってるんだよ!!

「ここまで来ると、本当に自分が嫌いになる」

なんて事だろう。これだけの危機を前にして。何も知らない女の子が、巻き込まれそうだっていうのに！

まだ自分は、目が覚めないのか？

「あ。目が覚めたの？ よかった。ええと、神崎龍也君、でいいのかな？ ごめん失礼だと思ったけど、君の持ち物を見させて、」

そんな事、今はどうだっていい！

この人が誰でどういう人なのかは判っている。そして、今の状況も。自分がやるべき事も。

いい加減にしろよ神崎龍也。これ以上に待たせるつもりなら……

「あ、大丈夫？ 良くないなら、もう少し休んで」

「すみません。榎原動物病院は何処ですか？」

状況がよく掴めていないのだろう。彼女、高町美由希さんは僅かにきょとんとした顔で、こちらを見た。

「えっと……」

「早く、間に合わなくなる！」

もう恥も外聞も知った事か。即座にテーブルからカードデッキを持ち出し、裸足のままベランダから外へと向かう。

「待って！ 君の怪我は」

「完治してる！ 早く場所を！」

慌てた様子で場所を告げる美由希さんに内心謝りつつ、ベランダ

から外に立つ。

右手にはカードデッキ。左手にはドラグバイザーが装着されている。

一般人には知られるな？ こちらの世界に巻き込むな？

下らない良識なんぞ知った事か！ もう あの子は巻き込まれてるんだよ！！

カードデッキを前に突き出し、意識を集中させる。

鏡なんぞ必要無い。失敗を恐れるな。ぶっつけ本番だろうが関係あるか。

魔術は威力が低くても出せた。クロックアップだって機能した！ 言い訳なんぞ考えて、自分にブレーキをかけるなら、女の子の人ぐらい救って見せる！

「変身！」

高らかに紡ぐ、自分だけの祝詞。かつて見たヒーローのように。物語の主役のように。

胸を張って誇れるような、そんなヒーローになって見せる！

現れたベルトにカードを差し込み、己の姿を組み替える。

鏡の如く反転した自分の像。影は重なり、戦装束をこの身は纏う。

全身を包む、真紅のマント。僧衣カシツクの丈を短くしたような上着と、

同色の漆黒のパンツ。

唯一白いのは、その手袋だろう。両手に詰められたそれはさながら貴族の纏うような高貴さを醸し出している。

これが……自分の鎧。戦うための装束。

ライダーにでもなるのかと思ったが、これでも充分すぎるものだろう。少なくとも、美由希さんに化け物扱いされる事はない。

「君、一体……」
「お話は後で」

短く区切ると、意識を掌へと集中させる。この掌は、いや、掌に限らず力の使い道は脳へ伝わってくる。

態々あんな手帳に頼ることなどない。説明書を読まなかったって、ゲームぐらい出来るだろう。

何故自身に帯剣許可証があつたのかを確信するとともに、祈る様に手を合わせ、静かに離す。

手の内側に集まる光。それがコンタミネーション現象という特殊な技法だという事が今になって分かった。

虚空より引き抜かれる刃。己の表皮と融合し、普段は決して見る事の叶わぬ刃が、自身の手の内にある。

月光へと照らされた、白銀の刃。波刃の紋様は間違いなく日本刀の証であり、反り具合や長さから打刀ではなく太刀だと推察する。

銘を獅王雷牙。積み上げた年月も伝統も無い、幻想を生き、幻想によってのみ存在する妖刀。

身の丈ほどの刀を肩へと担ぐと、掌と同じようにマントへ意識を集中させる。

そこには気遣いも何もない。元よりこれは道具。扱うことに躊躇いも無く、気を伺う必要などない。むしろそれこそが価値を貶めている。

理不尽にも捉えられる扱いは、逆にいえば信頼の証。この程度の結果を出せぬ物が、こいつらにある筈がない！

「飛べ」

短く告げられた命令を前に、マントは風を掴み取り、流星の如く夜空へとこの身を運ぶ。

目指す場所は一つ。あの少女のもとへ。

この夜道の中で、少女を見つめる事は大したことではない。
何せ人気がないのだ。街頭に照らされた道を息を切らし、走り抜けるような人間なぞ、上空からなら一目で判る。そして、それは見つかつた。

追い立てるのは漆黒の泥。あの日と同じような形状だが、大きさが二回りほど違う。

恐らくは今のところ、イレギュラーも感づいていないのだろう。

もしくは前回と同じく封印してから回収するか、それとも他に目星をつけたのか。

いずれにせよやる事は変わらない。

目の前には理不尽があり、その理不尽に追い込まれる存在がある。ならば取るべき行動も、一つだけだ。

S i d e - N a n o h a T a k a m a c h i

一度は駆けたこの道を、今度は全力で逆走する。

あれが一体何なのかとか、何が起きているのかとか、そんな感情よりも、逃げなくちゃという感情が強くなっていく。

けど、それも仕方ないと思う。わたしの後ろ、赤く光る瞳をもつた、巨大な何か。

自分に迫ってゆく何かにわたしは全力で逃げていた。

「君には資質がある。お願い、僕に少しだけ力を貸して」

資質？ 何の？

このフェレットが喋れるという事は、あの黒いのが病院を壊したときに知っていたけど……。

「僕はある探し物の為に、ここではない世界から来ました。でも僕一人の力では思いを遂げられない。

だから、迷惑だと判っているんですが、資質を持った人に協力して欲しくて。

お礼はします。必ずします。僕の持っている力を、貴女に使って欲しいんです。

僕の力を、魔法の力を」

「魔法……？」

本来なら存在しないもの。この世にはある筈のない物を告げられ、思わず反芻する。

だけど、だからと言って立ち止まってはいけないかった。

あの黒い何かが、頭上からこちらへと向かってくる。

避けるとか、防ぐとか、そんな事では間に合わない。自分には何も出来ない。

コマ送りになる時間。目の前に迫るモノを前にわたしは目を閉じる。

痛いかな？ とか、父さんたちは哀しむかな？ とか。そんな言葉が頭に浮かぶ。けど、何も起きなかった。

「ザケル！」

多分、自分と同じぐらいの年の子の声。目を閉じても判る、大きな光。

バチバチと鳴り響く電気の声に、わたしは微かに目を開く。

そこには、まるで物語の中にしか出てこないような格好をした、男の子の姿があった。

Side - Ryuya Kanzaki

右手ではなく、剣を介した呪文。初級魔術である筈のザケルは、ただそれだけの違いでこうも威力が変わるモノだろうか？

いや、それだけじゃない。あの時は逃げようとする意志があったから、自分が臆病だったから、あんな小さな魔術にしかならなかったんだ。

蜘蛛の巣状に砕けたアスファルト。円形にひび割れたクレーターからは、あの黒い塊がぐちゃぐちゃと音を立てながら、組織を再生させようとしていた。

「まあ、想像はしていたけどな」

問題はあれをどうするかだ。単純に攻撃してコアを曝け出すまで吹き飛ばすのもいいが、肝心の封印役は……。

「何やってるんだユーノ！ 早く戻って封印しろ！」

こいつの技量はともかくとして、封印するだけなら問題ないだろう。何せ、現実的な対処はこちらであるのだ。だって言うのに……。

「すみません、龍也さん。今この子に協力を」

「女の子捕まえてなに言ってるんだ！ こいつだけじゃなくて紫の騎士だっているんだぞ！ 巻き込ませる気か！？」

「けど、今は魔力が……」

「うつさい！ さつさと元に、」

「ッ！ 龍也さん！ 後ろ！」

「しまっ！？」

思わず振り返るが、もう遅い。既にあの黒い塊は再生し終え、こちらに容赦ない一撃を叩き込んできた。

「ぐっ げがっ、」

胃が潰れる。丸一日何も食べていなかったのが幸いした。もし食べてたらと思うと、肝が冷える。

けど、思考は曖昧。はつきり言って泥酔状態と似た様な感じだろうか？

バリアジャケットを着てるとはいえ視界はぐらぐらと揺れるし、平衡感覚なんて完璧に狂ってる。だっていうのに。

ああ、何でこう、化け物ってのは手加減してくれないのかな？

直後、第二撃を受け、アスファルトにめり込んでいく。

普通じゃない。だってバリアジャケットを着てるんだぞ。こいつは速度重視の奴でも手榴弾ぐらい防ぐし、防御重視なら対戦車砲だって防ぎきる。

だが、この相手の一撃に物理的な威力はさほど無い。

つまり。こいつはバリアジャケットの術式を突破する何かがある。こちらの術式を中和してるのか。魔力任せに強引に砕いているのか。恐らくは後者だろうが、原住生物を取りこんで強化しても、ここまで強くはならない筈だ。

誰かが手を加えた。意図的に、魔術に関する何かでジュエルシートを強化した。

でなければここまでのダメージは負わない。あそこまで早い再生能力は有り得ない。

だからこそ、僕は決断する。自分が言えた義理じゃないが、素質だけの素人が関わって良い問題じゃない。だから

「止めろって言うてんだろっが！ 聞こえないのか！！」

もはや自身の耳さえも聾する絶叫。直情的な、自身の中でさえ片手で数えるほどしかない怒りを、思い切りぶつけた。

「だって、こうしないと貴方が、貴方だって、巻き込まれただけじゃ」

ああそうだと。確かにあの時あったのは偶然だった。けどな。

「それを承知で、君の話を聞いたんだ。それを承知で、君を助けた！ 結果的には失敗だったし、痛い目にもあった。けどな」

だからって。それは無いだろう。そんな

「女の子に重荷背負わせるなよ、男だろうが！」

それは下らないエゴ。女子が聞けば、莫迦にするだろう下らない矜持。

だが。

「そんな事は判ってます。けど、じゃあ何か方法があるんですか！
？ 今回だけでも良い！ 魔力が回復すれば一人でも動けます！
今だけでも」

「まっつてよ。わたし、そんなの認めないから」

ああ。それは当然だろう。勝手に巻き込んで、用が無くなったら使い捨てて、そんなの認められる筈が

「困った人が居るのに、その人たちが陰で苦しんでるのに、放っておける筈がないでしょう!？」

その言葉に、今度こそ僕は完璧に打ちのめされた。

それは純粹なる想いの形。自分のような紛い物のヒーローではなく、純正なる原石。

あらゆる曇りを打ち消してしまう最高の貴金属。

確かな英雄。物語の主人公しか持ち得ない輝きがそこにあった。

そして だからこそ気付いてしまった。

所詮は偽物。取るに足らぬ贋作は、本物の宝石には決して及ばない。

「は、はは……」

もはや乾いた笑みしか零せない。何を粹がっていた？ 本当に主人公になれる気で居たか？

笑わせるな。己のようにさして辛い経験もせず、磨き上げた何かがある訳でもない平凡な人間が、主人公に取って変われるとも思っただか？

石ころはダイヤモンドにはなれはしない。当然だ。初めから素材が違う。

磨きあげれば石でも見栄えは良くなるだろうが、自分はそれさえしてこなかった。

下らない妄想だ。何もかもにおいて自分はこの子の足元にも及ばない。

投げやりになりかけた思考の中で、上にのしかかった塊を見る。自分もまた、こいつと変わらない。虚栄と言う泥で塗り固め、自己を隠した臆病者。

ほら、何もかもが、自分と同じじゃないか。

「教えて。魔法を！」

けれど、そんな劣等感に苛まれた感情さえ、その声で掻き消された。

動けなくなつた身体から、微かに動く首だけを向けて、自分は声の方へと意識を向ける。

「我、使命を受けし者なり」

ユーノの声を反芻するように目を閉じ、祝詞を紡ぐ一人の少女。思えば疑問だった。彼女は怖くないのだろうか？ 恐ろしくはないのだろうか？

「契約の下、その力を解き放て」

未知の出来事。自身の日常を壊す、理不尽な非日常。事件さえなければ、恐らく彼女は普通に過ごし、普通の人生を送る筈だった。普通は確かに退屈だ。なんて事の無い日常は刺激を求めるには少なく、目を惹くものが少なすぎる。

自分もまた、そうした日常に飽いていた一人だ。だからこそ、あの天使に選ばれた。

曖昧な現実。より未知を求めんとした故に、既知である日常を置いてきた。

けれど、果たしてそれは正しかったのか？

日常は、確かに目新しさは無いけれど そこにあつたのは、
かけがいのないものではなかったか？

「風は空に、星は天に」

ようやく判った。自分がこの世界に来たかった理由。この少女と
出会えた意味。

何故自分が、この子を巻き込むことに躊躇したのか？

輝ける原石。何者にも追いつけぬ至宝の存在。

ならば、何に躊躇する？

かけがいの無い日常。満たされているからこそ判らず、遠くから
見た存在に、己の疑問を伝えたかったとするならば。

この子にこそ そうした日常を、与えたかったのではないか？

「そして、不屈の心はこの胸に」

この日より、彼女は手にするだろう。自身の中に眠る天賦の才。

魔道を極めんとする一つの頂。その道への門を。

けれど、それが成功するからと言って、本当にその道が正しいの
かは判らない。

もっともつと。色んな道があつた筈だ。

翠屋を継ぐとか、

先生になるとか、

お医者さんになるとか、

警察官になるとか、

道なんて、幾らだつてある。色んな風に枝分かれして、色んな風
に繋がつて、そうして幾つもの未来が出来る。

君が選ぶこの道は、その中の一つの道。けど、この道は一本道だ。

行けばただ真つ直ぐに進むだけ。

分かれているように見えるけど、良心が後ろを押す限り、結局一つの場所へと流れつく。

自分は　それが嫌だった。

何故、こんな小さな子が決断しなくてはならないのか？

何故、こんな小さな子が重荷を背負う必要があるのか？

独善で、傲慢だという事は判ってる、けれど。

それでも僕は　彼女が傷つくのが、嫌だった。

「この手に魔法を」

運命は変わらない。秒針は動き出した。

ならば。せめて彼女の隣に立とう。

彼女が挫けない様に。前を向いて、胸を張って進めるように。だから。

「レイジングハート、セット・アップ！」

《Stand by ready・Set up》

お節介かもしれないけど、努力するよ。

今は遠くても。いつかは、君の隣に立てるように。

そうして。自分の目の前に、白い少女は現れた。

手にしたのは、魔法の力。不屈の心を胸に抱いた、正真正銘の主人公。

……情けない。彼女が立っているのに、自分は地面に這いずるの

か？

追い求める先にあるモノ。その存在が目の前にあるのに？

答えは　　、否だ！

「ラウザルク！」

全身を魔力が包み、肉体を強化してゆく。もう一撃だって喰らうてやらない。

ここから先は、こちらの番だ！

妖刀を構え、外敵を見やる。

こんな泥に構っている時間は無い。残り二十個、その全てを封印するまで、このイかれた争奪戦は終わらないんだから！

切り上げから唐竹へと繋げる虎牙破斬。さらにそこから再生をする前に切り崩すべく連撃の爪竜連牙斬へと移り、駒切りとなった泥からジュエルシードを引き剥がすべく、バックステップを取ると共に脚力を頼りに中空へと跳躍する。

それはあらゆるものを焼き尽くさんとする鳳凰の焰。普通ならば身に纏えず、この身は普通ではない。

故に使う。己が持ちつる技を、剣技とさえ言えぬ出鱈目な術を。

「鳳凰天駆

！」

己が身を焦がさんとする焰を纏い、残された泥を引き剥がすべく急降下と共に全てを燃やし尽くした。

結局封印はなのはさんが行う事になり、一段落着いたわけだが。

「すごい……けど、何で初めから使わなかったの？」

ユーノの反応も当然だが、慣れてはいなかったからだと伝えておく。

それを言うならばクロックアップさえ使えば勝負を早く決められたし、ドラグバイザーを使うという手段もあった。だが。

「来ないな。あいつら」

あえて剣技や魔術にしたのには 焦っていた、というのもあるが あの子の騎士が来るのを考慮していたからだ。

一回の戦闘ではカードは一度しか使えない。そのために敢えて剣技と魔術で決着を付けたというのに。

「何でかな？ この前は」

「ユーノッ！ 下がって！」

微かに魔力の残滓が漂う。大きい、恐らくはオーバーSランクと言ったところか。

これから出逢うべき敵を見据えるために、虚空へと目を向けたところだ、

「おいおい。随分と良い目になったが、向ける相手が違うぜ」

「マ、クス……？」

そこに居るのは 多少の髪の毛の乱れがあるものの 無傷なマクスだ。彼に次いで後ろからひょっこりとレインシアさんが顔を出した。

「なんていうか。こうしてると本当に親子ですね　　って痛い、痛いですレインシアさん！　杖はそうやって使うものじゃありません！」

尤も痛みは全くないし、こうポカポカと杖で叩かれても微笑ましいといしか言いようがないんだけどね。

「……まったく。心配して来てみれば、いきなり失礼ですね」

「否定は出来ねえがな。それより、ここに来るまでの間に騎士の連中は片付けといたぜ。」

引き際も良かったし、次辺り対策を立ててくるだろうが。まあこうして揃ったんだ。無事で何よりだな」

成程。どうやら見えないだけでこの二人には相当お世話になったらしい。

森の時もそうだったけど、ここまで器の違いを見せられると愕然としてしまう。

まあ、それは置いてだ。

「……これ。何か判ります？　ジュエルシードが取り込んでたみたいなんですけど？」

大方の予想はついているものの、微かな期待を込めつつマクスに見せたが。

「ダイヴァイライト……それも原石ではなく加工された物だな」

やっぱりか。ダイヴァイライトは神術　マクスやレインシアさんが用いる、魔術とは対をなす力　の力を底上げする物だ。

ジュエルシードに比べれば月とスッポン位の差はるが、危険物に

は違いない。

「大方、ジュエルシールドの力をこいつが底上げしたってところか。あの野郎ならやりかねねえが、何だってこんな面倒な事を」

マクスの言い分も尤もだ。あの狂気に染まった男なら、まず人の苦しむのを見たがるだろうが、あくまでそれは趣味の範疇に過ぎない。

ダイヴァイライトなどでは及びもつかない様な物質を目の前に、わざわざ手持ちの品を消費してまでこちらに向かわせるなど、あの打算まみれの男には考えづらいが……。

「こちらが複数個回収するのを待っている……とか？」

「……普通ならそう考えるのが妥当だな。あいつは“魔導師”じゃねえ。恐らくは封印をこちらにさせてその後で奪う腹積もりだろうよ。普通なら、な」

尤も、それさえも推測の域は出ない。あいつの事は人より知っているが、マクスの言う通り常識を当て嵌めていい相手じゃない。

「あの。少し良いですか……？」

「ん。ああ、そういえば自己紹介がまだでしたね、僕は」

「いえ。そうじゃなくて……少し、ここに居ると不味いかも」

「あ……」

壊れた電柱。砕けた壁やアスファルト。そして遠くから鳴り響くサイレン。

意識の全てが警鐘を鳴らし、全身に冷たい汗が流れ出る。

「逃げよう」

誰からともなく言い出し、一目散にその場を後にした。

003 小さな勇気 大きな一歩（後書き）

c・m・「第三話の投稿！ 神崎さま、ようやくの活躍です！」

直也「とかいいつつ精神的に酷い目にあわせるのは変わらんな。ド
Sめ」

c・m・「そんなに褒めないですよ。照れるじゃない。それに、二
回戦った程度で覚醒されちゃ詰らないのよ。」

徐々に強くなっていくからこそ主人公はカッコいいのよ。

直也「誉めてない。それに、今回は何かやりたかった事があるんじゃないのか？」

c・m・「ええ。本当は私が登場してから公開しようと思っていた
んだけど、せっかくだからNGシーンを用意したわ」

直也「ああ。あの自虐ネタオンリーの奴か。まあ、ここで言うのも
なんだし、見て貰いますか」

c・m・「それでは、スタート！」

NGシーン

切り裂く夜風に肌寒さを少し感じながら、私は路上を歩いていた。
何気ない帰り道。だが、それさえも耳に響くSOS信号を前には思
わず全力疾走するしかないだろう。

そう。私、宮本千草は走っている。

多くの読者は週一という更新の遅さから私の事を忘れていても

しれないが、一応プロローグでは主役的扱いだったし本作の著者なので空気化は避けたい。

私はイン……何とかさんにはなりたくない。あんな名前さえ忘れられて最終的には、『誰?』としか言われない末路はまっぴらごめんだ。ペンネームがイニシャルそのまんまのc・mだからってそっちでは呼ばないで欲しい!

私が宮本千草だ! と俺がガンダムだ! 的な絶叫をしつつ学生時代は百メートルを十二秒フラットで走り抜けた脚力で全力疾走中だ。

だが! 今私は人生の絶頂期に居る!

そう! 魔法少女ですよ! あの魔法少女ですよ!!

判りますか!? あの魔法少女ですよ!! 大事なことなので三回言いましたが、私は今その階段へと駆け上がるうとしているのです!!

ああ……恥ずかしくもなんと素晴らしい響き。元は二十後半でありながらこの世界に於いては学生時代もかくやという肌年齢と肉体を維持している私は 実年齢はそのままでも 充分行ける筈!! 十九と言う年齢で少女名乗っている痛い三人だっているのだから、私にもチャンスはある!!

そう思っていた時期が、私にもありました……。

『無理です、出直してきて下さい』

「ちょ、レイジングハート!? この人の魔力値はオーバーランクだよ! 魔導師としては最高なんだよ!」

『ふ……ユーノ。貴方の目は腐っているんじゃないですか? 淫獣と化して脳にまでダニが回りましたか?』

よく見なさい。肌年齢や肉体が十代後半から二十代前半とはいえ、

実年齢は2 歳といったところでしようが。

S t Sでも十代後半になってしまふ女に握られて熟女好きの連中がディスプレイに食い入るように見つめられて来た時でさえ、私はマスターにいい年こいてそんな誰得なサービスシーン見せつけてんだと唾を吐きたくなつたのに、現時点で2 歳のオバサンに握られるなんて有り得ません。

私は断固拒否します。つうかS t Sになつたらヴィヴィオに私を継承するよう何故誰も言わなかつたんですか？ アンタらが好きな幼女のサービスシーンですよ？ 視聴率が鰻登りですよ？ 企画者馬鹿なの？ 死ぬの？

まあ、そんな愚痴はどうでもいいですね。つうかここまで聞けば判んだろ。誰もババアのサービスシーンなんざ期待してねえんだよさつさと帰れ。そして今のうちにまだ旬の白い悪魔を連れてきなさい。A ' sまでなら使われて上げますから」

そして、私の中の何かが切れた。

「いい度胸だ。つうか淫獣、その杖か貸せやコラ」

「は、はい！ どうぞ！」

『ふ……一話早々にして淫獣と認めるとは、所詮日陰者ですね。まあ空気系ヘタレキャラには何も期待しちやいませんが。』

それで？ 私をどう使う つて、イダダダッダダッ……

……！？ 軋んでる！ 何か亀裂とか走つてるんですけど！？ つうか何やってんですか！？ 貴女数字取る気あるんですか！？ こんな事したらお気に入りどころか評価数も激減しますよ！？ 何気にランキング入り目指してんじやなかつたんですか！？』

「そんな淡い夢、プロローグ時点での視聴者の数字で消え去つたわもういい。私に萌えの才能が無ければ、こっちで数字を稼ぐのみ！」

『そんなバイオレンスコメディ誰も期待しちやいねえんだよ熟女！』

！既にジユエルシードが戦意喪失して土下座モードで“どうぞ納めください”とかつて感じて身体突き出して自己封印モードに突入してんだよ！！ 事件解決してんだからさっさと帰れ！！！」

「うっせえ、何気に英語から日本語モードに突入してるから楽し丁度良いやと思っただらここぞとばかりに毒吐いてんじゃねえぞ馬鹿杖。そんなに私が相応しくないなら私らしい武器にモードチェンジにしてくれるわ」

『止めるっつってんだろうが！ いい加減私は疲れただよー！！』

初めにこの企画持ちあがった時に担当が“燃える魔法少女”とか言い出した時に何かヤバいなとは思っただらマスコットは淫獣で魔法少女は悪魔でしかもババアになるまで握られるなんざ聞いてなかったんだよー！！

私が目指してんのはちよっぴりエッチでハートフルなラブコメか少女漫画チックなロマンスものなんだよ！！ それがこの企画の所為で固定砲台みたいな砲撃かましたり自動小銃みたいなマガジン付けられてガンダム最終回のフィニッシュ技みたいな砲撃を連射で撃ちまくりやがって！！ 企画者出てこい！！

……つつか、マジでやめて ！ 私はずかちゃんみたいな御淑やかな子に握られたいのだよ！？ あの子何気にポイント高いし！！ 地味だけど』

そんな事は誰も聞いちゃいねんだよ。そんなに魔改造して欲しくないなら全力でしてくれるわ。

『やめろ

！！

！！！！！！！！！！』

立ち込める黒い霧。溢れる金色の闇。これどう考えても主人公とかヒロインじゃなくてラスボスの登場シーンだろと言う場面に於いて、それは現れた。

直径二メートルはあろうかという巨大な鉄球には残酷さを醸し出すが如く無数のトゲトゲがウニのように突き出し、その鉄球に繋がった鎖が私の持つ杖の先端に繋がっている。

モーニングスター！。名前こそ爽やかなくせして相手に見せるのは目覚めの朝ではなく、脳漿ブチまけた後で地獄へGOさせる驚異の撲殺武器である。どう見てもヒロインが持つ様なアイテムじゃねえ。

「ふ。ふふふ……ええ、判っていましたよ、判っていたんですよ。所詮私は嫁ぎ遅れた女。ヒロインになる資格がねえ事ぐらい判りましたとも」

目から零れる心の汗に熱さを感じつつ、『だったら最初から握るんじゃねえ』というレイジングハートの声を黙殺する。

つつか、この杖。まだ自我を保って居やがったか。

「さて。始めるか」

こちらを見てビビったのか、部屋の隅でガタガタ震えて命乞いなぞしているジュエルシードに杖を向ける。

なんかこうジャラジャラと音を立てる鎖の音に若干恍惚になりつつ、杖と言つ名の鉄球を振りおろした。

あまりに残酷な為、効果音のみお届けいたします。

ドン！ グシャ、グシュ！

ブン……！！ ベキベキッ！！ グチュ、ブツシャアアアアア

……！！

「終わったわ」

『ええ。私の淡い期待も、新たなヒロインが魔王を越える魔神とい

う結末によつて幕を下ろしました。

もうヤケです。新タイトルでバイオレンスコメディを目指しましょう。私と貴女なら“撲殺天使”や“大魔法峠”さえ目じゃありません。これからイギリスに行つて吸血鬼と一緒にナチの野望を潰したり、ロアナプラでラグーン商会の連中と共に血と硝煙の世界を築きあげましょう」

そうして私たちは歩きだす。ジュエルシード？ プレシア？ 知つた事か！！ 私はこれから最後の大隊との決戦に向かうのだよ！！

次回！ 魔法少女リリカルなのは改め、『撲殺乙女 修羅街道！』
『新たな世界を見逃すな！』

第一話は『吸血鬼とデストロイ』『勇気の証はKILL THE MALL（皆殺し）よ』

直也「なんだ、この企画は……」

c・m「言いたい事は判るわ。私も書き終えてから正気に戻つたし、自虐ネタに走り過ぎたもの」

直也「むしろこつちが本編でよくないか？」

c・m「それは駄目。本作が食われるわ」

直也「まあ、NGシーンはここまでにしておくとして。そろそろ作者さまのお礼に行こうか」

c・m「そうね。神崎はやて様、Kyoさま、Haggalazさ

ま、水玉さま、笑う男さま。

感想を書いていただき、誠にありがとうございます。これからもがんばって行きますので、よろしくお願いいたします」

直也「さて、次回で神崎さまの話が終了し、Kyoさまへと移ります」

c・m・「それでは、次回をお楽しみに。失礼致します！」

004 説明と理解（前書き）

更新が遅れてしまい、申し訳ありません。

穴埋めはNGシナリオでお楽しみください。

で。現場から何とか逃げ切り、現在高町家の玄関に居る訳だが…

「だから、いきなり特撮ヒーローみたいに变身して飛んで行っちゃったんだってばー!!」

「美由希……少し疲れてるんじゃないか？　なのはには俺から言っておくから、今日はもう寝た方が……」

「だからホントなんだってばー!!」

……どうしよう。これ。

「あの、少しよろしいでしょうか？」

「あ。なのは！　それに龍也君も！」

助けが来たと言わんばかりに目を向ける美由希さん。だが。

「えっと……そちらの方は？」

まあ当然と言えば当然だろう。いきなり子連れのスーツを着た男が立っていたら、誰だっって戸惑う。

「マクス＝トレンジアだ」

「レインシア＝リ＝グランヴァールです」

「あれ？　ひょっとして、龍也君の保護者さんですか？」

どうも鞆の中の証明書から身内だと判断したらしい。取り敢えず、説明の手間が省けたようだ。

「あー……。そうなるな」

まあ、マクス本人は心底嫌そうだったけど。

「それよりなのは。どうしてこんな時間に家を抜け出したんだ？」

質問したのは彼女の兄である恭也さんだ。発言そのものや表情は硬く、怒っているようにも見えるが、何だかんだで心配だったんだろう。

顔には微かな安堵の表情が浮かんでいた。

「あはは……。流石に、信じて貰えないよね」

「だけど言わなくちゃ話にならないだよ」

自分にしか聞こえない音量で、なのはさんはこちらに話しかけた。当然。内緒にしておくという選択肢はなかった。自分が変身するのを見られているし、あのイレギュラー達が襲ってくることもある。だから。

「自分から、お話します」

「君は……。もう怪我は良いのか？」

「お陰さまで。感謝しています」

「そうか。立ち話もなんだ。中に入ろう」

恭也さんに勧められ、玄関へと足を運ぶ。が、その前に。

「あの。ティッシュか何か頂けませんか？ 裸足で外に出てしまったので」

やれやれと言ったように、美由希さんがタオルを投げて寄りこしてくれた。

足をふき、玄関へと上がると、リビングへと集まる。美由希さんや恭也さんだけではなく、そこには高町家夫妻である土郎さんと桃子さんの姿があった。

「改めて自己紹介を。僕は神崎龍也と言います。助けて頂き、ありがとうございます。」

「こちらが」

「マクス＝トレンジアだ」

「レインシア＝リ＝グランヴァールです」

自己紹介を済ませ、向き直る。

ソファーに座っていた高町一家も、順に挨拶を済ませ、本題へと移ることにした。

「いくつか、聞きたい事があるんだが」

「その疑問にはお答えしますよ。その前に土郎さん、奥さんが可愛がっているフェレットをこちらに」

桃子さんに抱きしめられたユーノを回収し、床に下ろす。さて。

「ユーノ。戻ってくれ」

「え……でも」

「」「喋った!?!」「」

……まあ、驚くよな。普通。

「良いから戻ってくれ。話が進まない」

こちらの言葉に戸惑いながらも、ユーノは元に戻る。途端、一般人である二人だけでなく、なのも絶叫した。

「ゆ、ユーノ君って、男の子だったの!？」

「うん……そうだけど。初めて会ったとき、そうじゃなかったっけ?」

「違うよ! フェレットだったよ!」

「あー……少し良いかな? 話を進めたいんだけど?」

あたふたとしているのはさんを横目に、他の高町一家に向き直る。

とはいえ自分に出来る説明は僅かだ。事の顛末の全てを語る事は出来ても、自身が本来知り得る筈の無い情報を告げる事は出来ないのだから。故に。

「ユーノ。ここまでの経緯を説明してくれないか? 君がこの世界に来た理由を。」

あのジュエルシードとかいう宝石の話を「

そうしてユーノは語りだす。自分が着た経緯。あの宝石の正体を。

「つまり要約すれば、事故か人的被害にあつた危険物がここに流れ着き、その危険物の発見者である君が回収を行うために来た。」

そこで出会ったのが龍也君一同で、その危険物を狙った一行が君たちを襲い、強奪。

結果。今に至ると「

恭也さんが話をまとめ、こちらを見る。言いたい事は……まあ大体分かる。

「何故君達がそこに居たんだ？ それにユーノ君は他の世界から来たという事だが、君達は戸籍もあるし俺たちと同じ世界の住人だよな？」

「ええ。僕はそうなんですが、マクス達は違うんです。

その……詳しくは話せませんが、偶然の一致で落ち合ったというか。戸籍に関しては本物なんですが」

歯切れが悪い。こればかりは本当の事を言う訳にもいかないし……。

「色々訳有りのようだし、言及はしないでおくよ。

けど可笑しいだろう。まず一つはその宝石……というより危険物だが、それは何処に運ばれる予定だったんだ？」

それは僕でさえ知らない事実。大方の想像はつくが未だに語られていない暗部でもある。

「時空管理局の古代遺物管理部……主に今回のような危険物を運搬する役職で、今回もそちらに依頼していたんですが」

「結果は現状の通り……か。だが、それなら何故時空管理局は動いていない？」

曲がりなりにも事故にあった以上は救難信号か何かで知らせるだろうし、そういったものの目録がある以上、危険物と知れた時点で動く筈だ。

君達に行っても仕方のない事だが、正直対応が遅すぎるだろう？」「確かに。ユーノが気付いている時点で事故が起きたのは他の連中

が知っていてもおかしくない。騎士連中も含め、かなり情報が出回っているし。

これで動かないのは不思議ですね」

恭也さんの言葉に同意するとともに、今回の事件について考える。だが思考に埋没するよりも先に、ユーノが口を開いた。

「伝え、ました……。今回の事は、第一に知っている筈なんです。けど未だに返答がない。そちらにはエキスパートが向かうという事は伝えられましたが、未だに応答がないんです。それに……」

そこでユーノは言い淀む。まるで何かに恐れるような、恐怖にも似た表情で。

「ここは、おかしい。貴方も含め、この土地にいる人間は異常です。なのはさんだけじゃない！ 貴方自身オーバーランクだと判るし、マクスさんやレインシアさんだってそうだ！

何もかもが出来過ぎている。偶然にもジュエルシードがばら撒かれたのはこの地に限定され、さらに異常なまでの能力者や外敵が募っている。これじゃあ……」

まるで出来過ぎたゲームだと、そうユーノは口にした。

「……同感だよ。今回のジュエルシードに関しても人為的に異物が取り込まれていた。

裏で誰かが何かを目的に動いている。さて、選択肢は二つあるけど、どつする？

一つ。いつ来るか判らない管理局を頼り、ここで待つ。

二つ。こちらが独力で回収。ならびに敵を撃退する。

当然、一つ目が無難だけど……」

「駄目だよ……それで、困ってる人や、苦しむ人が、大勢出てきちゃう」

ああ。その通りだよ。だから。

「皆さんにお願いしたい事があります。なのはさんに、ジュエルシードの回収を協力する許可を下さい。

微力ですが、僕が護ります！ お願いします！」

高町夫妻に頭を下げ、返答を待つ。だが。

「駄目だ。危険な目には合わせられない」

「判っています！ 封印できる状態までは、」

「違う。こちらが言っているのは君の事だ。娘を危険な場所に送りたくないという気持ちはあるが、それは君に対しても同じだ。

力はあるのかもしれないが、君は子供だろうか？」

「それは……」

言い淀む。伝えられない事柄とはいえ、やはり本当の事を伝えなければ反論のしようがない。

完全に八方塞がりだろうか？ そう考えた時。

「なら、俺が出れば問題ねえ訳だ」

唐突に、横から助け船が入った。

「マクス……」

「勘違いすんじゃないねえ。お前はともかく、その嬢ちゃんが危険だつていうなら俺が付いてればいい。何せ最強だからな、俺様は」

その不遜な態度をどう取ったのか？ 少なくとも、先程までの剣呑な空気は無い。

「最強……か。君は自分がそうだと？」

「試して欲しいか？」

挑発的な笑みに対し、土郎さんはやんわりと頭を振った。柳に風と言ったところだろう。

どことなく物足りなさそうなマクスに対して、土郎さんは話を戻した。

「まあ君達がそうまで言うなら問題ないか」

「父さん！」

「恭也。なのはも流されるまま言ってる訳じゃないんだ。

時には見守ることも必要だよ」

「だが、子供が危険な場所に向かうんだ。納得は出来ない！ こちらにも手伝える事ぐらいあるだろう！」

恭也さんの言い分も尤もだ。曲がりにも御神流の使い手である彼らがいれば百人力だろう。ただし、それも相手が特殊で無ければの話だ。

「お気持ちは嬉しいですが、前線には立とうとしないで下さい。

“魔導師”のバリアジャケットはそこらにある防弾チョッキとは訳が違います。

速度重視の物でも手榴弾の直撃でさえ傷一つ付きませんし、防衛重視の物は対戦車砲ですら防ぎ切りますから」

……そう。彼ら高町家もまた普通ではないとはいえ、敵は統率が取れ、複数で行動する騎士たちだ。

あの鎧の重装備ぶりを見る限り、その機構は防御重視。

あれでは対戦車砲はおろか、防御魔法抜きでそれ以上の砲撃さえ受け切る可能性がある。

御神流の奥義である“徹”のような内部に衝撃を与える技法ならダメージを与えられるだろうが、空を飛ばれてはそれも無理だ。

「……つまり。俺たちは戦えないということか」

「悲嘆すること自体が間違いです。」

敵は例えるなら災害の類。自分たちのような特殊なスキルがない限り、戦う事は出来ません」

誰も好き好んで台風や地震の発生する様な場所にはいかないし、津波が起きる日に海には行くまい。

連中と立ち向かうのはそれと同義だ。人の身に余るものを直視する事は無い。

「まあ。そうは言っても協力自体は出来るんじゃないか？ ジュエルシードとか言うのは覚醒するまで場所が判らない。

だが裏を返せば覚醒までは危険が少ないし、敵がそれに気付く可能性もまた低い。

無理に探そうとはせず、軽く見て回る程度の気持ちで探してもらえば良いさ」

「判った。こちらも見つけ次第報告する。ああ、それと。なのは」

戸惑いがちに恭也さんが、なのはさんの方を向く。何処か歯切れの悪い口調は、未だに迷っていると言ったところか。

「なのは。……無理はしなくて良いし、辛かったらすぐに言っただぞ」

「じゃあ」

「ただし、隠し事はするな。困った事があつたら言つ事。いいな」
「うん！」

この人。本当に優しいよな、よくシスコンとかつて言われるけど、こうして見る限り家族想いで妹想いな、頼れるお兄さんって感じた。

「じゃあ。話は纏まったわね。ところで、龍也君たちは泊まる家つてあるのかしら？」

「あ……」

桃子さんの言つ言葉に愕然とする。正直考えていなかったため、手帳を確認する。

手帳には家に関して一言。

『流れに任せる』

頼りにならない事この上ない内容だった。

「多分。無いです……」

「あら。それなら、家に泊まっていかない？ もし良かったらけど、一日と言わず、事件が解決するまでは」

願つても無い提案だ。敵がここを襲つ可能性は低いだろうが、連携して事に当たる以上は理想的とさえ言える。ただ。

「よろしいのですか？ 見ず知らずの他人を泊めるなど」

「もう知ってるわ。それに、貴方にはなのはを助けに行つて貰つたしね？」

あ。お相手つて言つのは無しよ？ こちらは誠意で行つたのだし、それは今も変わらないわ」

……本当に、敵わない。
きつと、この人たちはこういう存在で、最後まで、こういう風に生きていくんだろうな。
いつまでも、善人として。

「お言葉に甘えて。改めて、よろしくお願い致します」
「よろしくね！ 龍也君！」

向けられた満面の笑顔に、微かに目を向ける。ああくそ、どうい
う顔をすればいいんだ。

「あらあら」
「まあ」
「へー」

桃子さんから順にレインシアさんと美由希さんが笑っている。
ああ判ってるさ。自分がどんな顔になってるかぐらい！

「ま。頑張れよ」
「龍也君。恭也は手強いぞー」
「父さん！」

マクス。応援は嬉しいけど……いや嬉しいのか？ どうなんだそ
の辺。

まで。よく考えろ……背丈や年齢こそ十歳だけど自分の実年齢は
あれなんだぞ！
つまり僕は……。

「あれ？ どうしたの？」

「いえ……」

自分は違う筈だと内心自己嫌悪に陥りつつ、案内された部屋に向かっていた。

Side - out

「ふむ。所詮は道具。手を加えた程度ではあれが限度ですか」

鳴り響くサイレン。夜空よりも輝く地上の星を眺めながら、彼は紅い三日月を背に口を歪ませる。

「まあ収穫はありました。厄介なのは紫の騎士ですが、連中は大したことは無いでしょう」

その独白が誰かの耳に届く事は無い。だというのに男はオペラの主演のように手を広げ、空を仰いだ。

絶望を求め、血を求め、狂気を求め、嘆きを求めた。あらゆる負を求めながら、男はここに立つまでに至った月日を夢想する。

「ああ苦しかった。待ち望んでいた。ようやく全てが叶うのですね」

それは本来ならあり得ぬ行為。何者にも束縛されぬ狂人が、ただ天を仰ぎ何かに傳えている。

胸の前で切る十字は敵を血で染めるようにも、己を自傷するようにも見えた。

そして、男は口を開くただ一つ。背徳と暴威に身を委ねる男が、己に最も似合わぬ言葉を。

A m e n .

三日月の如く開かれた口元は、それ以上の言葉を紡がなかった。

004 説明と理解（後書き）

c・m・「長らくお待たせしました。第4話の投稿でございます」

直也「長すぎだ。大した文章量でもないのに散々待たせておいてこれか？」

c・m・「ごめんなさい。実はこれには理由があつて、今まで住んでたアパートから仕事先近くのマンションに引っ越して、その作業に追われてるのよ。」

未だに段ボールが家の横に積んであるわ。しかも仕事もハードだし」

直也「それでか……。ひょっとしてこれからも更新が遅れるのか？」

c・m・「ええ。読者の皆様には本当に申し訳ないのですが、これからは不定期更新になりそうです」

直也「自分からも謝らせて頂きます。本当に申し訳ありません」

c・m・「せめてものお詫びに、今回短かったので前回のNGシーンの続きを書いてみました。それではどうぞ」

NGシナリオ

撲殺乙女 修羅街道！！『002 吸血鬼とデストロイ 』トバ
ルカイン暁に死す！』

ここは常夏。私達はモンスーン気候特有の湿っぽい夏の日本を離

れ、現在南米ブラジルの首都、リオデジャネイロのホテル『リオ』へと気ままなバカンスを送っております。

私達、そう私達だ。あのバカ杖を含めてしまえば納得は行くかもしれないが私はあの杖に人権なるモノを認めた覚えは無い。

では何故複数形なのか、その理由は。

「お姉さま。一緒に泳ぎませんか？」

「姉貴！ フェイトもこう言ってるし、一緒に泳がないかい？」

そう。リリカル勢ならばお馴染みであるフェイト&アルフコンビである。

何故ここにこの二人がいるのかを説明すると長いので色々と端折って説明しよう。

あの後。このバカ杖に入っていたジュエルシードも含め、計二個のジュエルシードと共に海鳴市を去る筈だったが、そうは問屋がおろさなかった。

深夜でサイレンの音が鳴り響き、警察やら消防署やらでこつた返したところで何とフェイトが月村邸どころか一話開始からこちらに襲撃。

テンパった警察が発砲したがバリアジャケットにそんなもんが効く筈も無く、機動隊やら自衛隊やらで無茶苦茶な場所になったので取り敢えず一人と一匹を連れて逃走。なんとかその場をやり過ごした。

ユーノ？ 置いてきましたか何か？

で。事情を聴いたり虐待で出来た背中傷を治したりして、結局こっちも放っておけなくなり、ジユエルシードの回収の協力。クロノやら管理局やらが出てきたため、フェイトを保護して貰おうかと思っただけが……。

「あら、それならぜひ管理局に入らない？ 貴女ぐらい優秀な魔導師なら働き手はいくらでもあるし、多少嫁ぎ遅れていても熟女好きな人も多いから心配無いわ。ババ専の人だっているし」

言葉にあるアリアリとした蔑みの毒舌。もうお分かりですね？ キレましたよ。ええキレましたとも。

「黙れバツイチ。そんなに嫁ぎ遅れた奴を見て楽しいか？ どうせ管理局が忙しいとか旦那がいるからとかはこじ付けでモテないだけだろうが年増」

『流石はマスター。中々鋭いですね。確かにこの女は見た目若くとも中身は熟女。』

実年齢を考えれば売れ残ったクリスマスケーキやバレンタインデーを過ぎたチョコレート並みに価値はありません。私からすれば両方とも大差はありませんが』

もはや火に油どころかガソリンをぶちまけた拳句にダイナマイトまで放り投げるレイジングハートによって、管理局との全面戦争は勃発。

プレシアのフェイトは知らない宣言で画面が消えたのを合図に、鬼の形相でアルカンシエルを装備したアースラ突撃モードでこちらを追い回し、戦艦対人間という有り得ねえバトルが繰り広げられた。海鳴市は私が結界を張っていなければ一夜にして火の海になっていたに違いない。

最終的にフェイトのマンションから時の庭園へ逃げる事に成功。その後、全二十一個のジュエルシードをフル活用してプレシアが次元震を引き起こそうとしたものの、私のドロップキックで難を逃れた。

そしてまあ都合のいい事にジュエルシードを全て手中に収めた私に対して、フェイトに私を殺すようプレシアは命令したのだが……。

「嫌です。この人は私の姉になってくれると言いましたし、ずっと一緒に居てくれると約束してくれました。他人の貴女より、私はお姉さまに全てを捧げたい」

と、まあ今まで構ってあげた為か、惚れられてしまった。確かに私は寂しそうにいつもしていたからお姉さんになってあげるとは言っただが、そういう意味では断じてない。

フェイトさん。私に百合属性は無いんですけど。ていうかお姉さまは勘弁して下さい。

そして最終的には管理局の武装局員が乱入。こちらが転移術式で逃げようとするや否や、リンディの奴、管理局員やプレシアごとアルカンシエルをぶっ放しやがった。

あの『人がゴミのようだ』発言は永久に私の中から消えない事だろう。

結局こちらは辛くも生き残り、時の庭園と武装局員は行方不明と言う形で幕を閉じた。

ちなみにレイジングハートで管理局のデータベースにハッキングした結果、どうやらあの事件の主犯は私になっているらしく、『時空管理局最大の敵』として現在十萬ルーブルの賞金がかけられている。私は何処のスーパーカの悪魔だ。

こんな感じで認識障害の魔術をかけつつ国外へ逃亡し、一息ついた所でホテルのプールで悠々とバカンスを楽しんでいる訳だが。

「しかし、逃走中の時もそうでしたが、うちのマスターは本気で女を捨ててますね。

つつか何ですかそのゴツゴツとした手や割れた腹筋は。女として恥ずかしくないんですか？ 匂が過ぎて諦めの境地にでも達しましたか？」

余計なお世話だ。とバカ杖の言葉を一蹴する。

よくトリップパーなんかは元が駄目オタやニートの連中が強キャラになるのが主流だが、私は魔力資質の高さや能力以外……詰まる所自分の体に関してはしっかりと自分で鍛えている。

こちらにトリップするまでは会社にちゃんと勤めていたし、学生時代は小学校入学から空手を嗜み、中学から剣道、高校では柔道を行い、大学では合気道にも手を出した。

これだけ聞けば一か所に留まらず、長続きしなかったように聞かれるかもしれないが、小学校から始めた空手は中・高・大学生時代は寮などで道場に通えなかった時もトレーニングや型稽古を欠かさなかったし、近場にある同流派の支部の道場に顔を出したり、他流派の道場に出稽古にも行った。

社会人になっても一日だって武を手放した事は無い。私は生涯現役でいるつもりだ。

赤ん坊みたいにごろりと丸く、大きくなった手。肘や脛など所々が黒ずんだ箇所。確かにこれらは女性として恥じるべき点かもしれないが、武道家としては誇れるものでもある。

まあ、これ以上この話を続けると脱線し続けてしまうし、こんなのはこの物語には合わないので話を戻そう。

例えば今、この微笑ましい空間で目から血涙を流している色黒男とか。

「もう勘弁して下さい……！ これ以上は、これ以上はア……！」

「なにを言ってるのかしら？ ナンパついでにこちらにポーカー仕掛けてきたのは貴方でしょう？ しかも自分はお金の代わりに身体を見せてほしいとかって言い出したんだから、こっちが脱ぎ切るまでは終われないっていう最初の契約を反故にする気？」

それに泣き叫ぶのならもう少し気合を入れて叫びなさい。豚のような悲鳴にはまだ遠いわ」

察しの言い方はこの時点で男の正体を看破した事だろう。ここ南米におけるボスキャラにして最後の大隊『ミレニウム』の構成員、トバルカインその人である。

あのアーカードに血を流させたという点やクライマックスに於いてトランプで武装ヘリを撃ち落とすという強キャラっぷりを発揮した男だが、今となってはトランプ模様の入ったトランクス一枚に帽子が一つという如何にも大負けしてますといった状況である。

「ほらほらどうしたの？ 私はシャツを捨てて要望通り結構きわどいビキニまで着てるのよ？ あと少しじゃない。っと、また私の勝ちね。」

それじゃあハートのクイーンを貰うわ。さあて。次で貴方の大切なハートのキングが私の手に落ちちゃうわね？」

「ヒイ……？」

実はこのゲーム現金を直接賭けてはいない。実のところこっちに来た際に寝て暮らせるだけの金額が通帳に入っていたというのもあるが、この男のトランプにはかなりの魔術効果が付与されているため、そっちの方が欲しかったというのが最大の理由である。

「ああああ……そ、それは！ それだけは！ そのキング・オブ・ハートは我が師、東方不敗マスターアジアより継承したものである！ 後生です！！ どうか、どうかそれだけはご勘弁を！！」

マジで？ まさかあの東方不敗から継承とは……待て、それだとドモンはどうなったの？ まあ別にどうでもいいか。

「けどそうなるかと貴方も流派東方不敗を継承したの？」

「貴方も？ まさか……貴女も流派東方不敗を伝授して頂いていたとは！ 先達のご拝顔に預かり、誠に恐縮でございます！ 先の無礼をお許し下さい！！」

いや違うし。土下座とかされても困るんだけど、トランクス一枚の男は好みじゃないし。この男自体好みから外れてるけど。

「いえ私は」

「なにも仰らないで下さい！ 貴女様の鍛え上げられた雌獅子のようなお身体、巖の如き拳！ 武人としてでなく、一人の女性としてしか見なかった私の曇った眼でもようやく理解できました！ ただの観光客と思っておりましたが、こうしてはおれません！

今日中にこのホテルからお引き揚げ下さい！ この最上階に住まうのは人ならぬ身、『化物』にございます！ 貴女様の腕を信じぬ訳ではございませんが、何とぞお願いいたします！」

「ま、まあ……そういう事なら」

「ありがとうございます！ 流派東方不敗の名に懸け、此度の戦い、我が勝利で終わらせる事をここに誓いましょう！ して、貴女様のお名前は！？」

「み、宮本千草だけ……」

「チグサ・ミヤモトですな！ その名、我が生涯に於いて忘れる事

は無いでしよう！　これは先の愚行に対するお詫びにございます！
我が名、トバルカイン・アルハンブラと共にこのカードを預かって
いただきたい！」

差し出されるトランプには紛う事なきキング・オブ・ハートのマ
ーク。何と言うか……ここまで誤解されると悪いというか、もうカ
ードは手に出来ないというか。

「いえ。私はこれを預かれないわ。これを持っていいのは、キング・
オブ・ハートを継承した貴方だけよ」

滝の如く溢れる滂沱の涙。私の発言が壺に入ったのか、ガシッと
手を掴んで離さなかった。

「何と言うお言葉！　私は、私は光栄でございます……！　ではチ
グサ殿、いずれお会いしましょう！」

そういつて無数のトランプと共に消えて行ったトバルカイン。台
詞だけならカッコいいが、トランクス一枚に帽子というスタイルが
全てをぶち壊しにしていた。

「あ、姉貴。あいつ、姉貴の知り合いだったのかい？」

「お姉さまって、奇抜な方とお知り合いだったんですね」

「いや、違うから。断っじて違うから」

こうして、何とも言えない微妙な空気のまま、私達のバカンスは
夜を迎えて行くのだった。

そして迎えた深夜。避難勧告の出たここに敢えてまだ残っているのは、これから繰り広げられる戦いを見届ける為か、それとも特殊部隊の流血を避ける為か。それはさておき。

「フェイト。取り敢えずその刺激的すぎるネグリジェと下穿きは貴女には早いから止めなさい」

「え……？ お姉さま、ひょっとして子供っぽい方が好きですか？」

いや。そもそも私に百合属性は無いし。第一私の趣味は年下の可愛い男の子だから。

シオルターとかシユレディングーとか。

……ちなみに淫獣は唯一の例外である。あ。あの魔法使いな子供先生も例外だから二人か。

『そうですよ。マスターも女を捨てるとはいえ一応は自称乙女素材が良いくせして嫁ぎ遅れたのはシヨタコンが最大の原因ですね。というかシヨタコンはキモがられますよ？』

「黙れバカ杖。男のオタの99.9パーセントがロリに目覚めるように女のオタがシヨタに目覚める事も必定よ。第一、今時の男はバカテスの『秀吉』とか、ギルティの『鯽』とかシヨタに目覚めていくせに女のシヨタコンを否定する権利は無いわ。

故に私はこの一件が終わった後にシヨタの帝国を模索してるの。

所謂逆ハーレム計画の為に」

「あ、あの……私は？」

「いや。誰もフェイトを置いていくなんて言っていないから」

私の発言に心底安堵するフェイト。正直、今の私はつらいです。百合属性ないし。

が、そんなほのぼの？ とした会話もアルフの叫びによって終止

符を打った。

「姉貴！ 何か変な匂いがする！ あのトランクスの変態が言ったの嘘じゃなかったようだよ！」

「ふん。やはり始めたか『化物』を斃すのは『人間』だが、『人間』を滅ぼすのも『化物』の務めか。征わよアルフ、フェイト。バリアジャケットの装甲を限界まで引き上げなさい」

既に戦闘状態となった二人を確認すると、レイジングハートを手にドアを蹴破る。

そこには。

「なっ……！？」

「ぐ、グール！？」

その光景にフェイトとアルフは驚いたのだろう。無理も無い。吸血鬼を斃す為に突入した部隊は一人残らずグールだった。

「ク……！ こんな所にまでアンブレラ社の陰謀が！？ T・ウィルスが感染する前に、ここを隔離しなくては！」

『マスター！ 救急スプレー三つ手配してハーブを三色組み合わせておきました！ これで全回復とHPゲージが一ポイント増加します！ さらにこんな事もあるつかと新機能を追加しておきました！』

なに！？ まだ二話だと言うのにここに来て新機能だと！？ 無限口ケットランチャーや無限マシンガンは一周目をクリアしなければ手に入らない筈では！？

『ふっふっふ……マスターの言いたい事は判ります！ しかし、その不可能を可能にするのがジュエルシード！ この新機能の為に一

個消費してしまいましたが、この装備なら惜しくは無いでしょう！
』

変形ロボットよろしくガシャガシャと形を変えていくレイジングハート。

この未来感あふれる特徴的な形状に銀の光沢、も、もしや!?

『そう。バイオ4プロフェッショナルを攻略した者にのみ授けられるステキ未来銃P・R・L412！今回は私の変形形態と言う事で、チート改造も施しました!』

「装弾数と連射速度、被弾範囲は？」

『無論無限です。通常の小銃と同じくセミ・フルオートのみ受けられるだけで、連射変化が可能！サイドのつまみを回せば被弾範囲の縮小、拡大もできます。最大でアルカンシエルの砲撃、最小で拳銃の一発と同程度の範囲までの調節が可能です!』

「威力は？ デイバインバスタークラスか？ スターライトブレイカークラスか？」

「通常でデイバインバスタークラス。最大でスターライトブレイカー五十発分の砲撃も可能です!」

「パーフェクトだレイジングハート。これならばアーカードさえ討ち滅ぼせよう」

『感謝の極み』

「つて、ゲールが来てる！ 来てるつてば姉貴い!」

ふ……お化け系が怖いとは、可愛いところがあるじゃないの、アルフ。

もうちょっとそんな貴女を愛でていたいけど、私の妹分達に手を取上げようとするなんて……。

「こんばんは。そして、さようならゲール。貴様らは私の妹分に喰

らいつこうとした。

その行為、万死に値する！ ぶち殺すぞ腐肉が！！」

放たれる銀の閃光。既に死の軍隊と化した者が、骨肉の一片も残さず消し飛んだ。

S i d e - o u t

紅き月夜。草木さえ凍てつく夜の中、その男は玉座より降りる王の如くホテル入口から威風堂々と現れた。

身を包む装束は紅。今宵この地で繰り広げられた惨劇にふさわしくもおぞましい形相を浮かべ、人ならぬ魔性の笑みを以て階下を見やる。

この王に臣下は無く、されどかつての王と同じ行為を以て人々の心を掌握した。

暴君を暴君足らんとするモノ。それは恐怖によって民衆の根幹を支配することである。

ブラム・ストーカーの吸血鬼のモデル、『グアド・ドラキュラ』
よろしく側面のポールに警官隊を串刺しにしたこの男を、テロのホテル占拠と言う誤情報を元に集った報道陣がどのような目で見るのかは想像に難くない。

そして、その吸血鬼の呼び声に一人の男が馳せ参じた。

トバルカイン・アルハンブラ。流石にギャンブルで負けた時の姿ではなく、香港などで見かけけるような民族衣装さながらの長衫に身を包んでいる。

そこにあるのは本編見せた気軽なものではなく、むしろ死地へと望む武道家のそれである。

「ほう……随分と気負っているじゃないか」

「お初にお目にかかる『吸血鬼』アーカード。貴方に敬意を表し化け物を差し向けたのですが、ご満足いただけましたかな？」

「連中では私を殺せん。HELLSING本部での教訓が活かされていないな。化物を倒すのは、いつだって『人間』だ」

成程、と微かに歪めた口元を正す。これより先、ここからは自分にとって組織の方針以上の事があると言うように。

「申し遅れた。私の名はトバルカイン・アルハンブラ。近しい者からは『伊達男』などと呼ばれております。貴方が突き止め、ここへ来た『ミレニウム』の隊員でもある。

だが……今の私はそんなものではない。流派東方不敗！ マスタ―アジアが一番弟子！ トバルカイン・アルハンブラ！ 我が師と流派、そして先達の名に懸け貴様をここで討つ！！」

懐から零れ落ちる無数のカード。それはアーカードが改造銃の銃爪を引くより先に全身を覆い、トバルカインが右手を横一文字に薙いだのを合図に襲いかかる。

巻き起こる粉塵。砲弾を用いたかのような爆発は、それがただのトランプではないことの証明であり、トバルカイン自身の技量である事を窺わせる。

濛々と立ち込める粉塵が晴れ、微かにトバルカインの口元が歪む。それは仕留め切れなかった事への不甲斐無さか。それとも戦いが続く事への歓喜か。

いずれにせよ関係は無い。今日の前にある現実。『吸血鬼』は生きていたという事実こそが絶対なのだから。

切り裂かれた頬から微かに零れる血をアーカードは指で掬うと、侮蔑をこめた眼でトバルカインを見やり、口を開く。

「成程、お前らだったか。ならばこの私が相手をするのは道理だな。一度亡ぼされた程度では何も分からんか……」

言うや否や、アーカードは漆黒と白銀の銃を構え持つ。都合四発。左右二発ずつ発射された弾頭はトバルカインを撃ち抜き、絶命させる。

否、絶命させる筈だった。

「かかった」

「……!？」

絶命する筈であったトバルカイン。だが、そこにあるのは無数のカードによって崩れて行くハリボテ。本来の彼の姿は何処にもなかった。

ゆっくりと、崩れ落ちるハリボテの最後の一枚がアーカードへと風に乗るような緩やかさで流れる。

先程までのトランプによるものとは違い、ただのカードには短い走り書きがあった。

『最上階にて待つ』と。

S i d e - c h i g u s a

迫りくるゲール共をレーザーで薙ぎ払い、最上階へと目指していく。本来なら入口へと向かい、脱出するのが筋なのだろうが戦いに巻き込まれるのはごめんだし、アーカードの共犯にされては堪らない。

なので私は現在フェイト達と一緒に屋上へと昇って飛行魔術で脱

出する予定である。どの道ここに残ったのは警官隊を助けるためだったのだし、初めからグールになっていた以上ここには何の用も無い。

屋上に二人が来るのはもう少し先だろうし、早いうちに逃げ出してしまおう。

……と、思っていたのだが。

「さあ歌い踊れ伊達男。豚のような悲鳴を上げろ」

今、まさに私の目の前で南米ボスとの決戦が繰り広げられようとしているのだった！

「ちよ、何なんだい！？ あの男！？」

後ろのアルフの叫びが聞こえたのだろう。二人はこちらに振り向くと、驚いたような顔をした。

「何故貴女がここに！？ 逃げるよう言ったではありませんか！！」
「成程。人間のようだが何故ここにいる？ いや、後ろの二人は違うな。私と同類……劣悪ではあるが……ふむ。どうやら一般人ではないようだ。」

婦警、遊んでやれ」

ちょっと待て

！！ 私は貴方と共闘してナチの野望を止める筈だったのに何で敵扱いされにやなんの！？ つうかよりも寄って新入り吸血鬼とはいえあのセラスとデストロイな対決をしなくてはならないというの！？

さて、落ち着け宮本千草。まずは話し合えば……。

「らあああああああああああああ！！」

駄目でしたー！　なんか女性らしく可愛い叫び声を上げながら大砲みたいな銃をバンバン撃ってるんですけど！？　ていうかハルコンネンは流石にバリアジャケットを貫いちゃうって！！

『マスター！今こそ若いだけの女に引導を渡す時です！　あの何でもデカけりや良いと勘違いしている巨乳に難癖付けて日頃の鬱憤を晴らしましょう！　私を差し置いてリア充化するなんざ断じて認めねー的な感じで！！』

「黙れバカ杖！　せつかく人が穩便に話をしようと考えていた時に水を差しやがって！　そもそも私はあの巨乳婦警の事なんざどうでも良いんだよ！　あの隊長は好みじゃねえし、鬱憤溜まってんのはお前だろうが！！」

『嫌ですねえ。私は鬱憤何か溜まってませんよ？　ほら良く言っじやないですか“人の不幸は蜜の味”って』

とことん性根が腐ってやがるな！！　つうかフェイト達を避難させ！？

「不味い！」

「えッ！？」

フェイトはともかくとして、アルフにそこまでの機動性は無い。獣としての俊敏性は高くともこの弾雨を潜れはしないし、何よりこいつらは人間でないものに容赦は無い！

絶望が脳裏をよぎる刹那、だが。

「なあああめええええるううううなああああ！」

その一瞬は、第三者の手によって食い止められた。

無数の弾丸を切り裂くトランプ。その大半は相討ちという結果によつて消失したものの、この場にいる全員を護り抜いたという快拳を考えれば瞠目に値するものである。

「トバルカイン……なんで」

「兄弟子を死なせる程、私は人間であつた頃を捨ててはいない。貴女は知っているでしょうが、我が師は既にこの世に居ない。そして流派を受け継ぐ者はもう私と貴女ほどの筈だ。

ここで貴女達を死なせる事は、マスターアジアに私が最強となるという誓いを立てた事を反故してしまう。女性の一人や二人を護れぬような軟弱者に、最強を語る資格は無い！」

「成程。ならばお前は何だトバルカイン？ 化物の身でありながら人であつた事を忘れられないか？ その婦警のように」

トバルカインの発言が琴線に触れたのが、アーカードは僅かに怪訝な口調で問い尋ねる。

貴様はこちら側ではないのか、と。

その問いに、トバルカインは自嘲めいた顔つきで返した。

「いや。もう日の光なぞ当に棄てた。朝日に背を向けた者に、二度と日の光は戻らない。

そんなことは承知の上だ。だが」

彼は語る。自分はもうお前と同じだと。取るに足らぬ化物だと言つた上で、今までの中で一番強い口調で言つた。

「日の光を愛し続ける者を、こちらに引き摺り込ませはしない！ 流派東方不敗の！ キング・オブ・ハートの名に懸けて！
アーカードよ、貴様をここで討つ！ この者たちに手は出させん！」

手にしたランプが輝きを放つ。夜を白に染め抜く光は右手に収束し、シャツフルの紋章をトバルカインの右手に宿す。

「これからが本番か。婦警、下がっている」

「チグサ殿。手出しは無用。ここはお下がりにください」

奇しくも両雄が言った言葉は同一。そしてその言葉とともに傍らに立つ両者もまた同時に下がる。

張り詰める空気。恐らくは最初で最後の一撃であり、決着も一瞬。故に、両者はこの場に於いて己の持ちうるカードを出す。

「クロムウェル
拘束制御術式一号、二号、三号解放！」

相手は鬼札ジョーカーいかな相手であろうと叩き潰せる究極の手札。

何人にもかなわず、一切の慈悲も無く叩き潰す一手。

その手札を前に、トバルカインもまた手札をさらす。迎え撃つカードは最初から一つ。

唯一にして絶対。己が信じる最強のカード。例え力で押し負けようと、力に屈することなど無いと、その右手のみならず、総身が意志の光となって輝きだす。

「流派！ 東方不敗が最終奥義！」

闇の中、吸血鬼となって尚輝く黄金の光。それを美しいと、私は素直にそう思った。

「石波！ 天驚オオオけええええええん

！！」

放たれる一撃は大気を震わせ、アーカードへと迫る。全てを飲み込む黄金の光。

何人にも覆せぬ純然たる一撃、あらゆる毒をもってさえ穢せぬ至高の光は、しかし。

「見事だ。お前が人間であった頃ならば、私は倒されていただろう。だが駄目だ。

化物を倒すのは、いつだって人間だ。人間でなければ、ならないのだ！」

そう。アーカードが語る様に、化物は人間でなければ倒せない。人間としての心を棄てていなかったとしても、それは変わらない。

一度だって光から背を向けた者は　　もう帰れないのだから。

漆黒が、黄金を飲み込む。

「あ……………」

輝きが消えてしまう。

「駄目……………」

日の光が、闇に溶けてしまう。この時の事は、後になっても思い出せない。

どうして私は、それを駄目だと思ったのだろうか？ 日の光から背を向けた者。多くの犠牲の上に成り立つ化物。そんな彼を……………。

「駄目……………！」

……どうして、助けたいと願ったのだろうか？

私の叫びに振り替える両者と、セラス・ヴィクトリア。

即座に銃を構えるセラスをレイジングハートのモーニングスター形態で階下へと弾き飛ばし、トバルカインの血を微かに啜り取ったアーカードへと銃形態へと変形したレイジングハートで吹き飛ばす。咄嗟だった為に狙いが僅かに逸れてしまったのだろう。

身体の大半を失いつつも平然とした調子で微かに口元を歪めると、アーカードはやるべき事はやったと言うように階下へと落ちて行った。

「どうして、私を助けたのですか？ ……私は、化物なのに」

「判らないわ。ただ、必死だっただけ」

もうトバルカインは動けない。影によって肉体の三分の二を奪われ、微かであっても血を吸われたために最後の大隊の情報を与えてしまった彼は、間もなく処断されるだろう。

いや。処断の必要さえ無いのかもしれない。間もなく夜が明ける。日の光は吸血鬼にとつての天敵だ。彼はもう焼かれる事も無く、最期の時を迎える事になる。

誰からも必要とされず、ただ……孤独なままで。

「申し訳、ありません。勝利を誓ったのに、負けてしまいました…

…」

「良いわよ、貴方は私の妹達を助けてくれたじゃない

化物であっても、人間の心のままできてくれたじゃない」

上半身だけとなったトバルカインを抱え、静かに髪をなでる。
少しは気分が和らいだのだろう。硬いままだった表情にほんの少し、笑みが混じる。

「ふふ。しかしこうなることは判っていました。かつて師が亡くなった時、蝕まれた師を見て思ったのです。人は弱く、限りがある。達人と呼ばれ、最強の名を冠する者でさえ、時には勝てない。

ならせめて自分は最強であり続けたいと思った。我が師が、流派東方不敗こそが最強だと願っていたかった。

ですが、私は間違えていました。人間であった時の弱さと共に、人間であった時の強ささえ置いてきたのだと。そんな事に、私は気付けなかった。

チグサ殿……貴女に出会うまで」

「そんな事はないわ。貴方が私と出会ったのは一瞬よ？ それは貴方が初めから気付いていたものでしかないわ」

「そうかも知れませんが……ですが、人間のまま強くなろうとする貴女は、かつて師と共に歩んだ私を思い出させて貰いました。

あの吸血鬼の言う通りだ。『化物を倒すのは、いつだって人間』人間で言う事に耐えられなかった弱い自分が、最強の化物を倒す事は出来ないのに」

「それでも……貴方は戦った。最期まで、戦い抜いたじゃない。

確かに負けたし、貴方は人間でいられなかった弱い化物かもしれないけど、人の心は、忘れなかったじゃない」

声が震える。自分は今どんな顔をしているのだろうか？ 少なくとも目の前の男性が困ったような顔をしているから、良い顔ではないと思う。

「私は……幸せ者ですね。化物に、そんなものは必要が無い筈なの

に」

褐色の頬に、雫が落ちる。それが自分の流した涙だと判るには時間がかかった。

「最期に、貴女に頼みがあります。流派、東方不敗を、キング・オブ・ハートを貴女に継いでほしいのです」

私には……資格がない。流派東方不敗なんて、私は見たことしかない。

けれど、これが最期となるのなら、せめて優しい嘘で終わらせてい。

手渡されたトランプを握り、力強く頷く。精いっぱい笑顔で、力の限り抱きしめて、最期まで嘘を貫こう。

そして。私達は日の出を見やる。訪れる朝を、最期となる暁を忘れないように。

「美しいですね」

「ええ。本当に綺麗」

身体が灰となり、末端から崩れて行く。不死である彼が、今朽ちようとしている。

「ならば……！」

こんなのは私のキャラじゃないし、私には似合わないけれど。

「流派！ 東方不敗は！」

それでも、この人には笑顔でいて欲しいから。

「王者の風よ！」

ほんの少し、ちょっとだけいつもと違う自分でいよう。

「全新！」

それは酷い偽善で。

「系裂！」

下らない自己満足かもせれないけど。

「天破侠乱！」

せめて、私だけは覚えて居ようと思う。こんなにも莫迦で愚直な化物を。人であった化け物を。

「見よ！ 東方は、赤く燃えているっ

！！」

そして、彼は事切れた。後には何も残らず、彼の身体は風に流され、朝焼けに溶けて行く。

フェイトもアルフも、一言も喋らない。私の後へと黙ってついて来る。

最後。一度だけ彼の居た場所を振り返るさんさんと輝く朝日を見つめ、私は空へと飛び立つ前に静かに言葉を紡ぐ。

「Auf Wiedersehen Kamerad」(さようなら。戦友)」

誰に届く事も無い言葉は、もう見えぬ彼と共に、風に流れて消えて行った。

直也「なんでギャグ全開の話がこんな風になった？ つうかトバルカイン、漢すぎんぞ」

c・m「ええ……本当に何でこうなったのかしら。自分でも判らないわ」

直也「というか、続けるのか？ 本当に本編が食われるぞ」

c・m「判ってるわ。これ以上続くようなら二次創作として独自展開させるつもりよ。」

さすがに本編よりNGのほうが長いのは不味いし」

直也「それが賢明だな。」

ではNGシーンはここまでにしておくとして。そろそろ作者さまのお礼に行こうか」

c・m「神崎はやて様、Kyoさま、Hagalazさま、水玉さま、久住祐治さま、笑う男さま。」

感想を書いていただき、誠にありがとうございます。これから急がしくなりますが、続けて行こうと思えますのでよろしくお願ひいたします」

直也「次回はついにKyoさまへ！ 神崎さまとはまた一味違った感じの物語をお楽しみください」

c・m・「それでは、次回をお楽しみに。失礼致します」

005 迷子の選択

そこは広く、仄暗く、そして何かが犇めいているような、そんな威圧感があった。

円形に広がった空間。まるでオペラハウスめいたエントランスホール。

壁や床の装飾などを見る限り悪趣味とは言えず、むしろ気品めいたものがあるのだが、広間そのものが紫や赤などの陰鬱な配色のせいか、空間全体が暗く感じてしまうのが減点だ。

これでは古城と言うよりも魔城の呼ぶ方が正しいのではないかな？ そんな感じさえ思わせてしまう。

だが、その印象は正しいのだろう。この主の事を考えれば、むしろ洗練された古城よりも魔女の城と言った方が雰囲気としても合っている。

そう。魔女だ。今自分の目の前に居る妙齢の女性、プレシア・テスタロッサは正しくその印象に当て嵌まる。

まあ、ここに来た時から会う事になるのは判っていたのだが……。

「さて。貴方たちは誰？ どうしてここに居るのかしら？」

貴方たち、と複数形になっているのは、自分の横に居る人物の所為だ。

名前を氷上京谷。自身の描いた主人公であり、思い描く限り反則と言える存在でもある。

そして俺は……。

「聞いているの？」

手にした杖がバチバチと帯電する。不味いな……どうやら癩に障ったらしい。取り敢えず頭を下げつつ口を開く。

「申し訳ありません。だけど、自分でも何が何だか分からなくて……。もし宜しければここが何処なのか教えて頂けませんか？ あ。あと帰る方法とか知ってます？」

お邪魔ならすぐに立ち去りますから」

「嘘をついてる……訳ではないわね。脈拍や瞳孔も安定してるし、息使いも普通。」

さしずめ次元漂流者と言ったところかしら」

凄い。曲がりなりに科学者と言ったところが。もしかしたら心理学あたりも専攻していたのかもしれない。嘘をつかなかつたのは成功だったようだ。

「けど。魔力量が異常ね。本当に素人？ いえ、デバイスも持ってないようだし素質だけか。まあいいわ、貴方たちは、」
「失敬、宜しいか？」

唐突に独白が遮られる。現れたのは紫の騎士甲冑を纏った男性だ。年齢は四十半ばと言ったところだろう。鎧の上からあっても鍛え上げられた肉体が見えているし、手にした槍についたカートリッジシステムからして、ベルカの騎士のような存在なのかもしれない。尤も、単にカートリッジシステムを組み込んでいるだけのミッドの魔導師という線もあるのだが。

「もう戻ったの？」

「例の品だ。これで間違いない。まずは一つと言ったところだが、いずれ他の部下からも届くだろう。これで目的に近付いたな」

「そうね。それで、これはどうする?」

プレシアさんがこちらに杖を向けながら尋ねる。

「やばい。プレシアさんはともかくとして、横の奴はイレギュラーだ。」

オリジナルなのか、それとも他の作者や主人公と所縁のある奴なのかは判らないが、こちらを見ても何の反応も無いところからして、同類と言う事は無いだろう。

少なくとも、俺が京谷に感じたような親近感をこの男には持てなかった。

「侵入者か?」

「いえ。どうやら次元漂流者の様ね。ここの魔力に充てられたのか、それとも偶然なのかは判らないけど」

「管理局員、という線は無いな。デバイスも敵意も無い。隠しているなら大したものだが……ふむ。大まかに見て両者共にSランクオーバーか。」

「正確な計測機器を持ち出せば詳しく判るかも知れないが、何にせよここで逃がすのは得策ではない。が、下手に敵意を持たれても困るな。」

「そちらに二人に聞きたいが、こちらの仕事を手伝う気はないか? 要望があれば極力応えよう」

「願っても無い。このまま引くのは芸がないし、こいつらを潰して事件を解決するのは別の人間の役目だ。今ここでやったところでハッピーエンドには程遠い。」

「内容による……といっても決定権は無いのでしょうかね。」

「ではここから元の世界に返してもらおう手段と、あとは身の安全を保証して欲しいのですが」

「いいだろう。他に何かあれば揃えよう」

「いいの？ この連中は信用しきれないし、何より素人だけど？」

プレシアさんの言う事も尤もだ。自分たちのような魔力は高い？
だけの人間が役に立つとは思えない。

「だからこそだ。探しものに必要なのは人手だ。万が一使えなかったとしても捨て置けばいい。こいつらの目的が帰還である以上、目的が果たせれば噛み付く事はないさ」

騎士の言い分にプレシアさんは渋々と引き下がる。

おかしい。俺の知る限りプレシアさんはこの手の人間に耳を貸すほど真つ当な人間ではない……と言っては失礼だろうが、我を通し切る人種だと思っていたのだが。

まあ、話は通じるのだし。そういう意味で考えれば、むしろ喜ばしいのだが。

「こちらに聞こえるように言っているのは、牽制のつもりですか？
保障という意味合いもある。返答を聞こう」

元より決定権は無いのだ。一二も無く頷くと、相手は満足そうに
こちらを見た。

「良い返事だ。では、君達の出身を聞こう」

「えっと……こっつて地球ですよね？ 日本の海鳴市って判ります
？」

俺の発言に二人は顔を見合わせる。当然と言えば当然だろう。こ
いつらの探し物は其処にあるのだから。

「これは……偶然かしら？」

「出来すぎるきらいもあるがな。何にせよ都合だ。監視はこちらで用意したいところだが、セレノは現場で指揮を執っている。現地での活動も含め、あの子に任せたいのだが」

「そうね。フェイト！ いらっしやい！」

怒号めいた叫び声と共に、一人の少女が現れる。

長い、腰まで届くような金砂の髪を両端に結び、ルビーのような瞳を持った黒衣の少女は一定の位置まで近付くと、プレシアさんに向かつて口を開く。

「何ですか？ 母さん」

「貴女に仕事があるの。母さんがジュエルシードを集めてるのは知ってるわよね？」

「だから貴女にも探ってきて欲しいの。その子たちと一緒に。いいわね？ フェイト」

「はい。母さん」

何処か無機質な声でそう答えた少女は、こちらに一瞥を寄こすと、すぐさまプレシアさんへと向き直った。

「戸籍や現金に関しては用意しているものを使いなさい。じゃあね、フェイト。母さんを待たせないで。その子たちと一緒に目的地まで行きなさい。」

案内はグラフィイーがするわ」

「こっちだ」

先程の騎士　グラフィイーと言っらしい　はこちらに背を向け、門へと先行する。

おそらくは現地に飛ぶための転送ポートへ向かうためだろう。正面の門へと真っ直ぐに進んで行き、フェイトと共に騎士の後へと付いていく。

「くそつたれ……」

先程まで一言も喋らなかった京谷が毒づく。その原因は判っていない。

振り返った少女の背中。衣服にこそ隠されているものの、僅かに虐待としか取れない、鞭の跡があったから。

転送ポートに着くと、赤い犬が駆け寄って来た。おそらくはこの子がアルフだろう。

長くも撓やかな体と燃えるような鬣は、大型犬と言うよりも狼と呼ぶに相応しい。

僅かにフェイトと目を合わせると、顔を綻ばせ、こちらを見るや否や訝しむ様な顔つきになった。

考える事が顔に出る奴がいるが、こいつはその典型だと思う。

「では行くぞ」

その言葉に全員が頷き、転送を開始させる。光に包まれると同時に自分達は知らない場所に立っていた。

恐らくは夜中なのだろう。照らされた月は紅く、禍々しいまでの極彩色に彩られ、星もその威圧感に身を潜めたのか、一つさえ光を見せない。

「ここからはそちらに一任する。まあそうは言っても集めたジュエルシードを一定期間に提出し、報告しなくてはならないがな。

……もし会ったのが嫌ならば、こちらに」

「……いい。母さんには、わたしが直接届けるから」

グラフィイーの言葉を遮るように、フェイトが口を開く。

その言葉に微かに耐えるようにグラフィイーは拳をさらに強く握るが、それ以上は何も言わず、今後の動向について口にした。

「……今後はこのアパートを拠点にしる。現金と戸籍は持っているから問題ないだろうが、最悪、認識阻害の魔法で部屋を確保するよ。うに。」

以上だ。健闘を祈る」

その言葉を残し、男はこの場を立ち去った。どこか後ろ髪を引かれるような気持ちだったのだろうが、消えた以上は以上の面倒を見るつもりはないという事だろう。

男の魔力？ が完全に消えた事を実感的に理解し、俺は京谷と顔を見合わせる。

「さて、取り敢えずは」

「ああ。まだ話は終わってない」

そう。俺は京谷とまだ話をつけていない。お互いに言いたい事は

あつたのだが、場所が場所だけに控え、プレシアさんが来るまでに荷物を隠し、今に至つたのだ。

「言いたい事は多いだろうが、君だつて本は読むだろう？」
「読む以上は書き手がいる、か？ 当然だが、納得できるもんじやない。」

けど、ま。正直きつい思いもしてなかつたし、こういう展開を望んでた自分がいるのも事実だ。

あの天使、“紡ぎ手”しか来る来ないの自由は適用されないうってけど、あれ嘘だな。自分の中でこの状況を心地よく思っている節がある。

けど納得もしてない。だから一つだけ聞かせて貰う。俺はあつちに居ても楽しくやれたか？」

「むしろやりたい放題だつたけどな。楽しくもドタバタと日々を過ごすつてとこか。」

少なくともひどい目には 一部を覗いて 遭わない」
「そうか……」

微かな逡巡。だがそのシリアスな雰囲気も次の一言で一気に吹っ飛んだ。

「ラブコメもアリか？」

「……お前、オタだつたな」

色々超人すぎる奴だつたために忘れがちだが、根っここの属性はこ
うなのだ。当然、俺が答えるのは。

「目指せハーレムルート！ 貴様の朴念仁も相まって強烈なるフラ
グ構築ルートが」

「何故俺を呼び付けたア……！」

「グリパアアアアア………！？」

振り抜く右ストレート。吹っ飛ぶ俺。見事なまでのコメディ―直線だった。

「男の夢だろうか！ 何で呼んだ！ どうせならそっちの方はよかつたわ！！」

「うるせえ………今さっきの言葉を思いっきり埃被るまで柵の上に置きやがって。

「フーかフェイトが引くぞ」

「安心しろ。この会話をする前にすっかり防音の魔法をかけている。会話が聞こえるのは俺とお前だけだ」

ジーザス、つまりこいつのオタ属性を聞いているのは初めから知ってる俺だけか。

「……まあこっちの事件にかかわっていくのも楽しいし、良しとするか」

「つまり水に流すって事で良いな。鞆を確認するぞ」

取り敢えず和解？ した後に鞆の中をチェック。

中に入っているのは身分証明書と通帳、印鑑の類。通帳に関しては遊んで暮らせる金額だ。

「ふざけている程にサービス精神旺盛だな。後は………手帳か」

「なんか能力についてとか色々書いてるな。そっちは？」

「こっちもだ」

取り敢えず俺の？ 手帳から覗き込む。

書いているのは能力についてで、どうやら俺の能力は以下の三つ

らしい。

『能力その一・異能（神聖）の力を持つ道具なら何でも作り出せる
「宝具生成」

能力その二・全ての世界の魔法を使える「異能再現」

能力その三・全ての世界の機械を自由に出せる「機械天使」（例・
ガンダム）』

「……おい」

「言うな。言いたい事は判っている」

何だこの反則級の能力は！？ 確かにあの天使は“何を望んでも
良い”と言ったが、だからと言ってこれは無茶苦茶だろう！！

「よつぽどチート願望が強かったんだな。まあ良んじゃね？ どう
せ俺のも同じ能力だし、少なくとも死ぬような眼には遭わないだろ
？」

……いや。確かにそうなんだが。

「後は使い方が。意識を集中すれば使えると思うが……これからど
うす、グボハ……ッ！？」

またしても吹き飛ばす俺。どうやら今度はアルフが腰にタックルを
かましてくれたようだ。

けど。

「なに言ってるのか、聞こえないんだけど……」

「ああ悪い。多分これこっちの声だけじゃなくてあっちの声も聞こ
えないと思う」

そんな曖昧なモン使ってたのか。いや、こいつにはあまり常識を期待しない方が良い。

京谷が軽く手を振ると、耳元でガウガウと大絶叫してきた。

「話を聞きな！　つて、さっきから何度も言わせんじやないよ！」

「あ、アルフ……落ち着いて」

主の言葉が小さくて聞こえないのか単にヒートアップしてるだけなのかは知らんが、どうやら話を聞かなかった　聞けなかったともいう　アルフさんは痛くご立腹の様だ。

何でも良いが降りろよ。

「けどさあ!？」

「ごめんなさい。俺たちが悪かったです。だから降ろして？」

恥も外聞も無いままに地べたに這いずったまま許しを乞う。

傍から見れば背中が犬が乗っているだけなのだが、見方によっては女性に足蹴にされて踏みつけられているようなものだ。

いや。自分にそっちの属性はありませんよ？　ホントに。

「まあ。フェイトに免じて許してやるか。ところで、あんた達は何者なんだい？」

「迷子？」

尋ねられたので即答したのだが、今の発言は軽率だったらしい。なんかふざけると噛み殺すぞこら、と言わんばかりに犬歯を剥き出しにしている。

「いや、そいつの言ってる事は間違いじゃないぞ？　何か次元漂流

者？ とか言うのらしいし」

「ナイスだ京谷。さあこれでちゃんと伝えただし、俺の背中から降りて！ 何か色んなものに目覚めちゃいそうだから！！」

「ふうん……まあいいけど。で？ 何で次元漂流者がこんな事に付き合ってるんだい？」

「だからここに帰して貰うのが手伝う事の条件なんだって。詳しくは聴いてないけど、何か探し物を見つけるのに人手があった方が良いとかで、協力することになったんだけど」

「あんたら……運が無いね」

「普通なら同意するところなんだが、俺も京谷も巻き込まれたのではなく、巻き込まれる事を前提にここに来ているので何ともバツが悪い。」

「まあ仕方ないし、これからの事を考えるよ。まずは自己紹介をしようか。」

俺は氷上京谷。で、こっちは」

「Kyo……じゃなくて、天宮恭介。そちらは」

「あたしはアルフ。ご主人さまであるフェイトの使い魔さ」

「あ、フェイトって言います」

これで自己紹介は終了。ところで。」

「あの……いい加減降りて貰えませんか？」

どうせ踏まれるなら人間形態の方で……もとい、正直苦しいので降りてください。」

「……判つたよ」

何故にそんな洪々と？

取り敢えずこのマンションの一室を借り、辺りの空間に魔術的でないし、それに準ずる能力を持つものが知覚出来ないように限定された結界を張る。

魔術における結界は物理的な壁などでは効果が無いし、どんなに強く組んでも莫迦みたいに強い一撃を撃たれば突破される。

ならどうするか？ 答えは簡単だ。

元から誰にも気付かれなければ良い。本来ならこういった能力を使用するのは高度な技術が必要なのかも知れないが、生憎とこちらは反則な能力を持っている。

それは魔力も例外ではなく、恐らくは一生放出していたとしても消える事は無いだろう。

少なくとも使ってみた俺自身、そういう確証がある。

「はあ……便利なもんだねえ」

「否定はしないよ。さて、まずはそちの目的や集めている物に関して聞かせてくれるかな？ 細かい説明は受けてないんだ」

「そうだね。取り敢えずあんた達と集めるのは、全部で二十一個ある、ジュエルシードって言う青い寶石さ。」

何でもこいつは、願いを叶える為の疑似的な願望器らしいね」

「そいつはまた。けど何だってそんな物を？」

知ってはいるが聞いておく。本来なら訊きたくもない事だが、普

通の人間が疑問を持つであろう事を聞かなければ疑問を抱かれてしまうからだ。

「知らないよ、あの鬼婆の考えてる事なんか！ あいつがフェイトに何してると思う！？」

「アルフ……母さんの悪口は、言って欲しくない」

まだ言いたい事はあったのだろうが、アルフは其処で口を噤んだ。

「今日はもう遅い。探すのは明日からでも良いだろうが、今日はもう寝よう」

場の静寂に耐えきれなかった。というのが本音だが、どちらにせよこれ以上は話を続けるべきではない。

俺が告げた言葉に頷くと、アルフはフェイトと共に二階へと上がっていった。

二人が寝静まったのを確認してから防音の魔法を施し、京谷と向き合った。

「さて。これからの方針は決まったし、現状確認と行こうか？ 一応聞きたいんだけど、京谷はどこまでの記憶があるんだ？」

「それは俺自身の持っている記憶、で良いんだよな？ 一番新しいのは、訳のわからない死神に能力を与える事を約束させられたところまでだな」

つまりは原作の記憶は無い訳か。まあ良い。それは別に大した問題じゃない。

今のこの姿を含めてな。

「しかし随分と整った顔立ちだな。女性が八割は振り返るんじゃないか？」

京谷の言い分も尤もで、今の俺は歳こそ十九のままだが、外見が大きく異なる。

肩口辺りで切られた長めの黒髪と紅い瞳。体つきも鍛えていると言った様には感じられないが、高めの身長も相まって全体的にすりとした均整のとれた体つきだ。

「まあ、そっちも同年代には意識を向けられそうだがな」

異性に意識を向けられる、と言うのなら京谷も充分そのカテゴリーに入るだろう。

多少小柄ではあれど、日本人離れた金褐色の髪と黄金の瞳はそれだけで目を引くし、女性的な顔立ちも相まって充分に将来有望な存在と言えるだろう。

「年齢的な問題もあるけどな。そっちは十九でこっちは九歳ってところか」

「顔や年齢はもう良いだろう。それよりも重要なのは今後だ。」

イレギュラーが紫の騎士だけなら万々歳。けど本当にそれだけか？」

「他にもいる……可能性はあるな。むしろ一人や二人であって欲しいところだが、何でイレギュラーなんか湧くんだ？」

京谷の疑問はもっともだろう。普通に考えて“楽をしたい”と考

える奴はいても、“苦しい事や痛い目に遭いたい”と考える奴は普通じゃない……いや、中にはそういうのを望む奴が居てもおかしくないが、それは除外しておく。

「こちらが介入した事で本来とは別の連中が入る隙間が出来たってところかな。

強引ではあるが、今のところは何とも言えないし、やる事は変わらない」

「ああ。ジュエルシードを回収する事。あとは魔女の野望を止めても良いし、なのはやフェイトに任せても良い。だが」

「問題はイレギュラーへの対処。最悪フェイト達や管理局じゃ敵わない相手が出るかもな。

「そこで頼みがあるんだが」

「フェイトを頼むってところか。いいよ。あいつは嫌いじゃないし、むしろ好きな部類に入る」

それは恋慕というより、気に入った人間と言う部類なのだろう。おどけた表情の中には、微かに決意の影が映っていた。

「……それが適任か。ちなみに護る役は俺がするって言ったら？」

「おいおい」

冗談だ、と肩を竦めつつ、窓から街を眺める。紅い月夜。星すら覗かせぬ空にも拘らず、地上は人の営みが齎す星が溢れている。

正義の味方なんぞ、気取るつもりは毛頭ないが。

「この街ぐらいいは、護れるようにならないとな」

言葉と共に、カーテンを閉める。さて、もう寝るとしよう。

「じゃあお休みつと、明日は早いぞ」
「そうだな。ところで」

京谷の発言に振り向くと、彼の視線の先を見やる。目の前にあるソファは一つ。二階はフェイトとアルフがいる。

「
」

しばし、熟考。

「よし。京谷、今からフラグ立ててこい。俺はこのソファを使うから」

「ざけんな！ そんな真似が出来たら世の彼女なし（おとこども）は苦労せんわ！！ お前が行け！！」

「それを貴様が言うか。第一俺の好みは年上だ。ロリに興味は無い」
「行くのか！？ 年上なら行くのかこの野郎！！」

防音と同時に物理的な結界を百枚ほど重ね張りし、二階と一階に魔術的な遮断を施すという高等技法をたがが一つのソファを奪い合うために使用し、あまつさえ魔力をフル稼働させて下らない事この上ない激闘を開始する。

深夜二時。草木も眠る時刻でありながら、草木を問答無用で叩き起こす激闘は、花瓶一つ傷つける事も無いくせして核弾頭百発分を軽く撃ち合う威力の大激闘に発展する。

その後、二名の莫迦野郎の闘争は二時間ほど続き、やがて睡魔に魔されつつドローで幕を下ろした。

翌日。眠そうにしていた俺たちをフェイトとアルフは不思議そうに見ていたが、それは激しく余談である。

005 迷子の選択（後書き）

c・m・「お待たせしました。第5話ようやくの投稿です」

直也「ようやくKyoさまか……しかし扱いがひどいな」

c・m・「ごめんなさい。あんまりにもギャグ要員として動かさやすかったから」

直也「反省はないのか……」

c・m・「ギャグとしてはまだぬるいわ。どうせならいつものNG位はやって貰わないと」

直也「あのレベルを毎回やるのはきついと思うんだが……そろそろ感想のお礼の方に行こうか」

c・m・「そうね。神崎はやて様、Kyoさま、Hagalazaさま、水玉さま、久住祐治さま、笑う男さま。

感想を書いていただき、誠にありがとうございます」

直也「ところで、神崎さまからロリコンではないという抗議が届いているが？」

c・m・「何言ってるの？ ヒロイン選択時にロリを選択した時点で充分ロリコンよ。」

ちなみに異論は認めないわ。この作品でロリをヒロイン指定した方はすべからくロリコンの称号を贈るつもりだからそのつもりで。ギャグになった際はその設定でふんだんに遊ぶつもりだから」

直也「酷い……」

c.m.「ちなみに君も例外じゃないわ。君は普通に年を取るから
StSで29歳。15の少女を口説くオッサンとしてかなり酷いパ
ターンのロリコンになるから。」

では今日はこのあたりで失礼致します。」

直也「最後に一番ひどい爆弾を置いていきやがった!？」

006 それぞれの道先

朝が来た。もはや何日目なのかを数える事は無駄だと判ってはいるが、それでも身に染み付いた生活習慣を変える事は出来ないらしい。

午前五時。普通ならば多くの人間は眠っている時間に起床し、洗濯物を一通り二階のベランダへと干し、玄関やら庭やらの掃除を始める。

あの手帳に書いてあった通りの住所に来たのだが、まさか一軒家とはな。

「あら、直也さん。今日も早いんですね」

玄関の掃除中に、かけられた声に振り向く。お隣さんの声だ。

この時間に掃除を始めているのは習慣によるものなのだろう。息子さん方を見るにそれなりのお歳を召されている筈なのだが、それを差し引いてさえ二十代半ばではないかと思える若さを保っているのは、一重に健康な生活によるものなのではないかと考えてしまう。

「おはよう御座います、高町さん。ゴミ捨て場の掃除ですが、明日は当番ですので、お忘れのないよう、お願い致します」

「ええ。もちろん。けど、お若いのにしっかりしてるのね。」

家の子たちはその辺りすっかりしてるけど、最近はお貴方みたいな若い子は珍しいってご近所の皆さんも言ってるわ」

「自分は日頃から同じような生活を送っているにすぎないのですが……、おはようございます」

「やあ。おはよう！ 直也君、今日も早いね」

気さくに声をかけてきたのは、先程まで話していた高町桃子さん

の夫である土郎さんだ。

剣術を息子さん達に教えているという事らしく、この時間帯からトレーニングをしているのだとか。

尤も、鍛え抜いた体躯を見れば彼らがそういった事をしているのはすぐに判るのは、武を嗜む者の常だろう。彼らもまた自分が鍛えている事を一目で看破した。

以来、何度も手合わせを申し出てきているのだが、生憎と自分の剣はそのような場に用いる程、立派なものではない。

ただ迅速に。一切の理解の余地も無いままに敵を屠り、殺す。その為の剣だ。

だからこそ、彼らの申し出は断っている。だと言つのに。

「ところで。良かったら今度家に来ないか？」

「申し訳ありません。自分の剣は、人に見せられるほど立派なものではないので」

「そうか……。気が向いたら、いつでも来てくれ」

「はは。恭也がここまで気に入るとはね」

「そついう父さんも気になつてるんだろ？」

この通り。新聞勧誘も真つ青の申し出が毎日の如く来る。特に長男の恭也さんの申し出は非常に強く、下手をすれば押されかねないほど。

「さて。それじゃあ行つてくる」

「気を付けてくださいね」

トレーニングと言う名の山登りに赴く三人に、笑顔で手を振りながら恒例の言葉を投げる。

願わくば、互いに剣を見せる日が来ない事を切に祈るばかりである。

さて。一通りの掃除を終え、朝食を作り、今に至る訳だが……。

「これから、どうするかだ」

今自分がいる一軒家は、狭くも無ければ広くも無い。理想的とさえ言える環境だが、体を鍛えるのには少々不向きだ。

とはいえ、庭は一人で真剣を振るなり何なりしようと周りから判らない程の高さの塀がある上、鍛えるには工夫次第でどうとでもなる。

その辺りは応用力の問題でしかないが、それはさておき。

「謝らなければな……」

自分が怒鳴りつけてしまった女性。あの時はそうする事でしか理性を持たせることが出来なかったとはいえ、今となっては後悔と自己嫌悪しか残らない。

物語は決して幸福なだけではない。主人公ともなればそれは顕著で、むしろ平凡な日常を過ごしている方が稀だ。

そんな事は判っている。理解もしている。だが……。それで納得が出来るかと問われれば別物だ。自分ひとりならばまだ許せる。どれ程辛くとも、それは己だけが耐えれば問題など無い。だが、自分と言う過去の中で、自分に関わった者が不幸になってしまったなら？

親。兄弟。あるいは友と呼べるものまで。

自分と言う存在を彩る為の、中には二、三行で纏められてしまう

モノ。

捉え方によつては、付属品とさえ思われがちな彼ら。彼らとて物語はあつた。それを単に物語だからという理由で不幸に遭い、片付けられる事を誰が良しとすると言うのか？

出来る筈がない。多くの当事者はそう答え、憤りを感じるだろう。尤も、第三者である読み手には関係のない話だ。彼らは在り来たりなものを望んではいない。

そんなものは自分の日常でとつくに経験しているし、意味がない事だという事も又、自分は理解している。

結局は堂々巡り。繰り返す自問自答は意味など無く、故に結論は繰り返し同じとなる。

納得など出来る筈もなく、認めたくもない事実だが。

それでも。自分は謝るべきだろう。

何か変わるという訳でなく、自分の生き方も変えられない。

だが、自分を縛るモノとの決別は必要だ。

これまでが上手く行かなかつたのなら、これから上手く行くようにすればいい。

もう自分は、あんな堂々巡りをする必要はないのだから。

「……行くか」

念のために革手袋をポケットに仕舞い、居合刀袋を肩に下げつつ和紙を懐に収めると、玄関を潜つて外に出る。

あの墮天使の言葉が正しいのならば、互いに惹き合つのだろうし、街に出れば誰かと会う事もあるだろう。

その中に出会つのが“敵”と言う存在ならば、そこから先もまた、己の領分だ。

午前七時。何時もより少し遅い時間に、私は目を覚ました。

身体には全くたるさなどは無く、むしろ清々しささえ覚える。肉体的な黄金期を過ぎてからでは考えられない程に健康的だったが、少なくとも今となってはそれが同然なのだと自覚する。

この身体に目に見えた変化こそないが、普段鏡を見ている女性なら、自分の肌の張りや皺の数ぐらい一目で看破するだろう。

それが自分のものであれば尚更だ。きつい化粧は肌に悪いし、見た目としても悪い。

なので私としては薄化粧でどれほど効率的にその辺りを隠せるかが、日頃の課題だったりするのだが。

「今は気にする必要も無いのよね……」

鏡を見てため息をつく。鞆の中にあつた身分証明書には実年齢そのままに記載されていたものの、肌の瑞々しさは二十代前半から、工夫をすれば十代後半でも行けるのではないかと言う感じた。まあ尤も……。

「こっちは……どうにかならなかつたのかしら？」

そう。今鏡の前で下着一枚で居る自分を見て思うのだが、正直、こちらまで肉体的黄金期の頃と何も変わらないとはどういう事か。

百七十センチ背超える長身は、モデル体型と言えば聞こえはいい細くも撓やかな二の腕や太腿。そこもまあ許せる。だが、一つだけ残っているのだ。学生時代からの最大のコンプレックス。

二十後半になってさえ、まだうっすらと残っていたこの……。

「流石に減点だと思つ訳よ。女性で腹筋が割れてるって言うのは」

しかもそんなとこまで現役に戻っているのか、腹筋は学生時代の時よろしく、一番鍛えていた頃のままである。

「まあ。完全に見た目が変わるよりは良いけど……」

どんなにコンプレックスがあろうと親から貰った体だ。ケチをつけるのは罰あたりと言うモノだろう。第一、鍛えたのは自分なのだし。

学生時代を思い出す。小学校までは空手を六年間続け、中学には先輩の伝手で剣道を始め、高校時代は女子高で心機一転と思いきや柔道部のスカウトでなし崩しに入り、長身と言う事も相まってそっちの属性は無いのに女性にモテ、大学に入ってから居合道に合気道。

ぶっちゃけて言わせて貰う。何だこのスティックかつ女つ気のない人生は！？

私は格闘漫画の主人公か！？

……と。自虐的な回想に耽った所で何かが変わる訳でもない。

化粧やら何やらと一通りの支度を終え、スーツを着る。タイトスカートは着心地としては悪くないが、痴漢に遭ったりストッキングが伝線したりすると変えるのが面倒なので、スラックスを履いて身だしなみを確認する。

良く言えば男装の麗人。悪く言えば鉄の女。見た目としては実に色気のない、仕事一筋といった感じの女だ。

テーブルの上の懐中時計をポケットに入れ、靴を履き、玄関を潜る。

さて、何時も通り会社へ 行こうとして立ち止まった。だって。

「うー……眠い」

「大丈夫？ 隈が出来てるけど？」

「あんたら。ちゃんと寝ときなよ？」

「すみません。お恥ずかし限りです」

何でこう、ばったり会うのだろうか？

偶然にしてはあまりにも出来過ぎな人形のように可愛らしい

羨ましいともいう ツインテールの少女と、その少女に連れ添う背の高い赤毛の女性。

そして見た事は無いが、恐らくこちら側だろうという確信を持った、二人の男性。

何でそう思ったのかはよく分からないが、少なくともそうなのではないか？ という印象をこの二人に抱いた。

……まあ、そもそもこの男性達がこの少女達 フェイトとアルフ に関わっている時点でこちら側なのは確定なのだが。

それは向こうも同じだったのか、こちらに対してははじめまして、などと気軽に挨拶をしてきた。

恐らくは少女と同年代、九歳かその辺りだろう。日本人離れた金褐色の髪と黄金の瞳持った女性的な顔立ちの少年だ。

将来有望ではあるが、私としては今のままの方が好みだったりする。

と。そんな事はどうでもいいか。

「はじめまして。ご家族でお出かけ？」

「ええ。街を回るついでに、ちょっと探し物を。そちらはお仕事ですか？」

「これから出勤です。まだ余裕はありますけど」

後ろにいた肩口辺りで切られた長めの黒髪と紅い瞳をした十代後

半の男性が、こちらの返事に対して答えた。この少年と負けず劣らずの美形であるが、もう少し早い時期の姿を見てみたかった。実に惜しい。

しかし……探し物か。

「そうですね。早く見つかるといいですね」

「ありがとうございます。お暇でしたら、お誘いしたのですが」

「よろしいのですか？」

「勿論です。よろしかったら、今度の連休にでも」

「それは是非」

と。そこまでお互い笑顔だったのだが、後ろにいた二人はいつまでかかっているんだという風に睨んでいた。

こちらは別に怖くも何ともないが、男性はそうでもなかったらしく、ビクビクしていた。

「それでは。また後日に」

「え……ええ」

少し釣り上った声で乾いた笑みを浮かべる男性を後にエレベーターへと乗り込む。

連休……温泉旅行か。

さて。マンションを出て一息ついた私と言えば、これからの事を深く考えていた。

いや、これからの事、というのは少し間違っている。正確にはそ

の前。ルシファーと別れた時から、会う事のなくなったあの少年。
私が描いた、あの子の事。

悪いとは思っている。もし自分が逆の立場だったなら、絶対に納得できる筈は無いし、あれ以上の事をしていただろう。

だから、謝らなくてはいけない。事態が好転する訳でもない。何かが変わる訳でもない。自分が赦される訳でもない。

けれど。それでも謝らなければならない。赦されたいから、何かを得たいと願うから行動を起こすのではない。

どうしようもない位に滅茶苦茶にしてしまった人間を、ただの一言で全て赦して貰おうなどという虫の良い話は、何処にも在りはないのだから。

街へと赴く足取りは次第に速く、軽くなってゆく。仕事が終わったら、あの子を探してみよう。

そんな事を思いながら、私は中心街へと足を運んで行った。

Side - out

「朝が辛そうだと思ってたら、いきなりナンパかい？ 良い身分だね」

「アルフさん。お願いですから指を鳴らすのは止めてください」

現在。早朝と言う事であまり人気のない。とはいえ、普段からここには人は来ないが、マンションの屋上で天宮恭介は見事なまでの土下座モードに入っていた。

それはもう外人でも見たら一発で判るほどに美しい土下座だった。

「で？ 何であんな長話をしたんだい？ しかもジュエルシードの

事も伏せながら伝えてたよね」

「やっぱり頭良いつすね。率直に言いますと、あの方もこちら側だと思えます。あくまで勘なんですけど、協力も見込めるかと」

「あ。こいつに同意する訳じゃないけど、それは俺も同感。あの女性、多分何かしらの能力を持ってると思うぞ。」

まあ。年上が好みのこの男は単にナンパがしたかったただけかもしれないけど」

「当てつけか……昨日の俺に対する当てつけかこの野郎」

と。そこまで三人で話している中でフェイトが割って入って来た。

「でもあの人、そんなに高い魔力資質を持ってるようには見えなかった。少なくとも、わたしが二人に感じたような強い力は無かったから」

アルフはともかくとして、京谷と恭介には意外だったらしく、二人は驚いたようにフェイトを見た。

「ホントに？」

「うん。一般人よりは高いと思うけど、多分私やアルフよりはずっと低いと思う」

「けど京谷や恭介の言った通り、他の連中と違う感じがしたのは確かだよ。何て言うか、あの女はでっかく見えた」

「え？ それって身長の問題じゃないの？」

本人が聞いたなら間違いなく中段正拳突きでふっ飛ばされそうな発言をさらりとしつつ、アルフの発言に恭介は首を傾げた。

「いや、そうなんだけどさ。何かオーラって言うの？ 正面から見ると普通より大きく見えるんだよ」

試合前の武道家じゃあるまいし、と三人はアルフの言葉を聞き流す。結局、ジユエルシードの回収に繰り出すまで、アルフのもやもやは消えなかった

尤も、この言葉が図らずとも正しかった事が後々判るのだが、それは現時点では関係の無い事である。

午前十一時。風芽丘図書館で眉間に皺を寄せた男性の姿があった。肩甲骨あたりまで伸びた髪と、銀縁の眼鏡をかけた男性だ。前髪を伸ばしている為か、右目にも髪がかかっている、全体的に黒を基調としたイメージが浮かぶ。

元より理知的な顔立ちも相まってか、図書館と言う場所は彼によく似合っている。

だというのに、彼の顔には微かに戸惑いの色が見える。

理由は彼自身あるのではない。彼の眼の先。二段ほど先にある本棚で車椅子から座ったまま手を伸ばしている少女に原因がある。

“何故、ここに居る？”

確かに彼女がここに通っているのは知っていたが、狙ってここに來ていた訳ではない。

むしろ逆に彼女がここに来るのは夕方頃だと見計らっていたからこそ、ここに来たと言ってもいい位だ。
だというのに。

「放っておく……訳にもいかないか」

日曜とはいえ、昼前と言う時間的な問題あつてか、辺りには人はいない。

受付の者に頼んでも良いが、それよりも自分が動く方が早いだろうと考え、少女が手を伸ばしている先の本を取った。

「これでいいかな？」

「あ、ありがとうございます」

発音からして関西圏の人間なのだろう。若干の訛りのある発言に内心くすりとしつつ、どういたしまして、と笑顔を向けると、彼女も同じように笑顔を向けた。

それは在り来たりなものであつたし、事実そいつたものである事は、彼も彼女は理解していた。

だが知らなかった。いや、お互いに気付いていなかったと言ふべきか。

男性にとって笑顔を向けられたのは、“こちら”に来て初めてのモノであり、少女にとってその笑顔は、久しく向けられていなかったモノだった。

だからだろう。すぐに立ち去ろうと決めた男性はここにもう少し居ようと考え、少女はもう少し話してみようと考えた。

偶然の一致。それが、この二人の始まりだった。

結局。一時を回つた辺りで、二人は別れる事になった。

逆にいえば、一時に回るまで、二人はこの場所に居たという事になる。

あの子の二人の会話は、とにかく平和なもので、普段は何を読んでいるのかとか。どこに住んでいるのかと言った事を、どちらともなく話しているだけだった。

それでも時間は過ぎて行った。それは短かったのだろうし、そう感じただけでそれなりに長い時間だったとも取れる。

「それじゃ。また……と。」

そういえば自己紹介がまだだったな。私は御剣 仁という。君は？」

「あ、そういえば肝心なのがまだでした。わたしは八神はやて言います。昼前や夕方に、ここに居りますから、また来てください！」

笑顔で手を振るはやてに御剣 仁と名乗った男性も手を振りつつ、図書館を後にした。

手にしたのは、一冊の本。また来ようか、と内心考えつつ彼はこの場を離れる。

先程から感じた、一つの違和感。その中心地へと向かう為に。

S i d e - R y u y a K a n z a k i

ホイッスルの音と共に、僕は目の前の試合をぼんやりと眺める。

自分と 肉体的な面で 同年代の少年たちが、サッカーをしていた。翠屋JFCという高町士郎さんがコーチ兼オーナーをしているサッカーチームと、桜台JFCと言うサッカーチームとの試合らしいのだが……。

「あの……なにか？」

正直、横からの視線が怖い。以前なのはさんが怪我をした僕の事を月村すずかさんとアリサ・バニングスさんに伝えたそうで、気軽に自己紹介したのだが、返って来たのは。

『あんだ。なのはに手エ出したら承知しないわよ』

と。凄くドスの利いた声で言われました。

何！？ 何なの！？ 僕ってそんなに信用ないの！？

……いや。判ってるんですよ。単になのはさんが心配なだけだって事はね。

『にやはは……龍也君。そんなに気にしなくて良いよ』

念話を使って話しかけてくれるなのはさんの気持ちだけ受け取りつつ、これからの事を考える。

現在集めたジュエルシードの数は三つ。本来なら現時点で五つ集まっている事を考えれば、はつきり言って少ない。

最初の一個は仕方ないとして、もう一つも例外なく紫の騎士が持つていったらしく、こちらが現場に着く事には姿を消していたというのが現状だ。

そして。今回もジュエルシードを狙ってくるだろう。

ゴールキーパーを務める少年。その鞆の中に、ジュエルシードがある筈だ。

取り返しても良い。今から行動すれば、事件は解決する。

思い立ったら即決行。クロックアップを作動させ、鞆の中をチエック……したんだが。

「ない……」

どこを探しても見当たらない。

ラウザルクを駆使してキーパー本人から隅々までチェックしたと
いうのに、全く見つからない。

「莫迦な……」

最悪、クロックアップが切れる可能性があるもので、すぐさま応援
席のベンチに戻り、何事も無かったように試合を見物する。

だが、内心の焦りの色は隠しきれなかったらしい。

『どうしたの？』

『いや。あのキーパーの子がジュエルシードを持ってるんじゃない
かと思っただけ、勘違いだったみたいだ』

なのはに念話で伝えつつ、考える。既に回収されたのか。それと
も他の人間が持っているのか。

答えが出せないまま目の前の試合が終了する。今日の間、事件が
起こらない事を祈りながら。

十二時。試合終了後に勝った記念に翠屋へと集まり、チームメン
バーが食事を取る。

まあ勝ったお祝いな訳で、自分やなのはさんは外でお食事である。
ちなみにマクスはと言うと。

「ごめんなさいね。手伝ってもらって」

「なに、このスウィーツは最高なんだな。この程度でよかったら
幾らでも手伝うぜ」

スウィーツ欲しさにお手伝い中でした。ちなみに手伝う理由はスウィーツが欲しいからという理由もあるけど、居候させて貰っている手前、恩を返したいらしくスウィーツの代金もきっちり払っている。

要するに無料奉仕中という訳だ。その辺りはレインシアさんも例外ではなく、中でウエイトレスさんをやっている。

で。僕も最初は手伝おうとしたのだが、なのはさんをガードする役がいなくなるからという理由で却下された。

確かにあの紫の騎士をユーノに任せるのは抵抗があったし、別に良いと言えば良いのだが、何とも居心地が悪い。

あのゴールキーパーの少年が気がかりなもの、理由の一つではあるのだが。

「で？ この後はどうするの？」

食事を終え、サッカーチームのメンバーも解散し始めた為、一応皆に尋ねてみた。

どうやら、ずさかさんやアリサさんは予定があるらしく、二人ともここで別れるらしい。

つい先日マクス達と一緒に覚えた念話を使い、尋ねる。

『マクス。抜けられる？』

『こっちは問題ねえ。姫さんも連れてくか？』

『頼むよ。何か変わった気配は？』

『さつき小僧と一緒に帰って行った嬢ちゃんに、青い宝石と似た気配があった。勘違いかもしれねえがな』

なるほど。そっちだったか。横に居るなのはさんも念話の情報を受け取ったのか、一緒に椅子から立ち上がる。

「じゃあ。僕らも」

「うん」

「さすがさんたちと別れ、一先ずあのゴールキーパーと一緒に着いて行った女の子の二人の元へ着いていく形で歩く。」

「さて。覚醒次第回収と言う事になるだろうが、今回は早めに終わるから良しとするか。」

Side - out

「高層ビルの立ち並ぶ海鳴市中心街に街並みを見下ろす二つの影があった。」

「いや、正確に言えば少女の使い魔を含め四つなのだが、それはこの際置いておこう。」

「彼らがこの場にいるのは翠屋でサッカーチームが食事を取っているのを発見し、日曜という曜日から今日この場でジュエルシードが覚醒する事を予期しているためなのだが、それを知らない二人は正確には一人と一匹。は怪訝そうな顔つきで残りの二人を見た。」

「本当にここにあるの?」

「尋ねたのは金砂のような髪を両端で結んだ少女、フェイト・テスタロツサだ。彼女からしてみればこの疑問は尤もで、使い魔であるアルフも同じように口を開く。」

「何の根拠があるのか知らないけどさ、見つからなかったらタダじゃおかないよ」

「心配するな。それより広域探索の魔法をかけておいてくれ。フェイトは遠距離封印魔法の準備を。結界は俺が張る」

「俺は？」

「京谷は遅延魔法ディレイスペルを装填してくれ。最悪、白い悪魔だけでなくイレギュラーが来るかもしれない」

各人に指示を出しつつ、天宮恭介は一息をつく。彼が張り巡らせるのはマンションの時とは逆。

つまり魔術的な素質を持つ者や、事件に関わろうとする者。あるいは関わってしまう第三者以外を街の中心部に近付けさせない。あるいは出て行かせようとする魔術だ。

つまり逆を言えば、当事者であればこちらに来る確立が、格段に跳ね上がるという寸法である。

勿論、戦闘になる事を考慮しているため、物理的な結界を街全体に施す。これなら建物の窓ガラス一枚割る事は出来ない筈だ。

「ところで。白い悪魔ってなんだい？ 随分穏やかな響きじゃないが……」

先程の発言に対しての物か。僅かに裏返った口調でアルフが尋ねる。

「まあ所謂、魔王候補かな？ 今は大したことは無いが、将来的にとんでもない奴になる事は確かだ。少なくともそういう奴がこの町に居る。」

何で判るのかって聞かれそうだから答えるが、俺は魔力を持った奴が判るんだ。特異体質って奴だな。まあ、今回のジュエルシールドもそういう感じだと思ってくれ」

無論、口から出まかせだが、アルフ達は感心したような眼で二人

を見た。

「じゃあアンタはジュエルシードの位置が全部判るのかい？」

「いや。それは無理。流石に強い力ならともかく、普段隠れてるのは探し様がない」

「そっか。じゃあ仕方ないね」

一通りの作業を完了させ、各々の配置に着く。

この初仕事で、多くの者たちが交錯する闘いの幕開けとも知らずに。

006 それぞれの道先（後書き）

c・m・「約一カ月ぶりの更新。第6話の投稿でございます。
が。いつもと同じでは味気ないので今回はゲストも登場！
さあマクスさん。どうぞこちらへ！」

マクス「いいのか？ このコーナーに俺を出して？」

c・m・「もちろんよ。何と言っても次の回ではあの京谷君との対
決！ しつかり英気を養ってもらうために呼んだんだから」

マクス「ほう。あいつとか」

c・m・「ええ。さあて、それとは別件で、君のとこの作者さんに
これ、渡してくれる？」

マクス「英気を養えと言っておきながら顎で使うのか、あんたは。

なに？ 『ロリコン認定証3級』！？」

c・m・「ふ……。ロリにときめいておきながらロリコンを否定す
る初心者にはまだ『3級』といったところね。

ちなみに最高は1級を飛び越えて10段まであるのであし
からず。

さあ。神崎さん、貴方の退路は断られた！ 潔くロリコン紳
士の階段を駆けあげれ！」

マクス「その理論だと八神はやてにときめいた御剣 仁も『3級』
認定者じゃねえのか？」

c・m・「そうね……。彼には郵送で送っておくわ。ちなみにこれ、燃やしても再生するしブラックホールに叩き込もうが手元に戻るから」

マクス「鬼だ……」

c・m・「ま。貴方への用はそれ位にしておいて、次回の戦いへの意気込みをきかせてくれる？」

マクス「ふ。俺は最強だからな、誰であろうと勝つ」

c・m・「良い答えね（ここまでは予想通り……）」

それで、この戦い話終わったら、どうするの？」

マクス「そうだな……。俺は、この戦いが終わったら、翠屋で特製ケーキを頼むんだ……。って、まて！ この流れは!？」

c・m・「計画通り……（夜神月風に）」

マクス「てめえ図ったな!？」

c・m・「ふ……。さあて、お帰りはこちらの乗り物でどうぞ！超VIP扱いよ」

マクス「トラックじゃねえか！ つーかまて！ このトラックはまさか!？」

c・m・「そう！ チートキャラ御用達にしてテンプレ！ 転生トラック（感想版移動用!）」

遠慮せず撥ねられる!」

海鳴市の中心街の街道を歩く、二人の子供。年の頃は九か十歳と言ったところだろう。

何処にでもいるような少年少女だったが、その二人の会話は仲睦まじく、友人と言うよりもそれ以上の印象を感じ取れる。

周囲がそれを微笑ましいと取るか、妬ましいと取るかは個々人によって変わるが、大多数が感じる印象は恋仲か、それに近い物だと受け取るだろう。

或いは、まだその域に行っていないだけなのかもしれないが。

ともあれ、その二人を陰から眺める影があった。その影は四つ。

彼らはある目的の下で少年少女を尾けているのだが、肝心の要件を切り出せないでいた。というのも。

「何か、出て行きづらい」

二人の子供と同じ年の頃の少女、高町なのはは、二人を眺めながらぼそりと呟く。

その発言は彼女だけでなく、彼女と共に尾行していた三人も同じ心境であるのか、無言で頷いた。

「傍から見たら完全に出歯亀だしな、どうする？ 今の状況で切り出しにくいのは判るが、このままだと最悪被害が出るぞ」

「うーん……龍也君、何か方法ない？」

長身の男性、マクスの問いになのはは項垂れつつも、横にいた一つ年上の少年、神崎龍也に尋ねる。デバイスも起動済み。レイジングハートも封印作業を待機の状態で完了させている。よって、あとは封印するだけなのだ。

「行けない事は無いけど、最悪胸ポケットに入ってたなら不味くない？ 色々」と

「そうは言いますが、このままでは被害が出ますよ？」

そしてその神崎龍也の問いに、その横に立つ鳶色の髪と瞳の少女、レインシアは至極当然の答えを投げ返す。

この会話自体がもう数回繰り返されている為、堂々巡りとなってしまうのだが、答えは出ないまま平行線となり、今もずるずると延びている状態だ。

結局、出来る限り身体に触らずに済ませろという結論で、神崎龍也が行くことになったのだが。

「仕方ないか。それじゃあ、行ってくる」

「あ！ 龍也君、あれ！」

その言葉に振り替える。見れば、発光した青い宝石を持つ二人の男女。

その光景を前に、マクスは顔に手を当てた。

「……タイムアップだ。まあ取りだしたのは胸ポケットだったからどの道こうなっても仕方ねえのかもしれないねえが。」

龍也。取り敢えず完全に覚醒する前に奪ってこい」

言われなくとも、と言わんばかりにクロックアップを作動させ、全速力で二人の元へと向かう。

否、向かう筈だった。

「な!？」

誰ともなく口にされた、驚愕を現す叫び。

当然と言えば当然だ。ここに居る四名。その全員の行く手を阻むように、巨大な石柱が周囲を囲んでいたのだから。

「そんな……こんな事をしたら、周囲に被害が」

「心配するな。手は打っている」

フェレットの状態で結界を張るべく対処しようとしていたユーノの発言を、上空から見下ろす青年は一蹴する。

歳は十代後半と言ったところか。日本人らしい黒髪ではあるものの、赤い双眸に魔性めいた輝きを宿したその青年は、周囲のビルさえも霞むほどに高く築き上げた石柱の上に降り立つと、再び彼らの方に目を向ける。

「はじめまして。と言っても、そちらの三人にとっては初めてではないかもしれないが、自己紹介をしておこうか」

俺は天宮恭介。作家だった頃はKyoと名乗っていた。そちらは？」

天宮恭介と名乗った青年は、自分と同じ“紡ぎ手”に名を問うた。そこに嘲りは一切無く、友好的な態度であった事に周囲は拍子抜けするが、立場を考えれば当然かと納得した。

「神崎龍也。作家だった時は神崎はやたと名乗ってた」

「龍也君、作家さんだったの!？」

「いや、なのは。僕はアマチュアであってプロじゃないから。」

えと……Kyoさんってあの?」

「ああ……そういえば良く感想をくれたね? ま。そんな世間話は良いか。」

さて、これからが本題」

指を鳴らすと同時に、周囲の石柱が霧散する。見渡した周囲に映るのは巨大な樹木。

ビル群に覆われたコンクリートジャングルを押し退けるように乱立した巨大な樹木は、二人の子供を中心に中心街を侵食していた。

「ちょっと待て！ どこが手を打ってるって言うんだ！ これだけの状況で被害が」

「ここに誰かいるのか？ 俺達を除けば君達位だと思うが」

その言葉に、辺りを見回す。確かに周囲には人っ子一人いない。これだけの被害になれば大混乱となってもおかしくは無いというのに、街は寒気さえ覚えるほどの静けさを保っていた。

「うそ……」

「驚く事でもないだろ。いい加減こちらは話を進めたいんだ」

そう言っつて天宮恭介は腕を伸ばす。示す先は二人の子供を取り込み、成長し続けるジュエルシード。

本来であれば間近に居た筈の二人だが、今となつては樹木の高さの所為か、遙か彼方に感じられる。

「全長三百メートルと言つたところか。ギネスに乗せたいぐらいだ」

ちなみに世界一背の高い木と名高い、米国カリフォルニア州、レッドウッド海岸に立つセコイアの巨木『ヒュペリオン』は全長115.55メートルである辺り、目の前の木は文句なしに世界最大を銘打つていいレベルである。

「ま。そういう訳で、そこにいる魔王候補の少女に遠距離砲撃と言
う名の封印をして欲しいんだけど、どうよその辺？」

「ま、魔王！？」

「なのは、反応しなくていいから。それより封印をお願い」

と。ここまでくれば順調に封印完了かと思いきや、先程まで圧倒
的威圧感と共に何かこいつ凄くね？ と言った感じに実力を見せつ
けて空中に仁王に立つが如く佇んでいた青年が、横からのドロップ
キックに敗北した。

「グボハツ……！？」

「あんた何連中に譲ってんだい！ 馬鹿だろ、馬鹿だったんだねい
や馬鹿以外の何者でも無いね！！」

赤いロン毛を靡かせて空中に佇む、モデルも真っ青になるほどの
美しいプロポーションの女性。

だが、先程のドロップキックと極道関係者も真っ青の鬼の形相に、
この場にいた全員が引いていた。

「いや……だってフェイトは遠距離系の魔法が得意じゃなさそうだ
つたし、あの子供たちに怪我をさせる訳にもいかないだろ……」

「うっさいねえ。どうせ記憶を消すんだし、封印した後に回復させ
れば問題無いだろう！」

「……出来れば弁解の余地を。正直、封印した後横から搔っ攫う予
定でした」

『せこっ！！？』

この場にいた全員が突っ込む。正直、がっかりだと言わんばかり
の表情だ。アルフさえも口をあんぐりと開けている。

「ねえ。あたしが言うのもなんだけど、恥ずかしくないの？ 人として」

「元が狼の貴女に言われると心外ですけど、取り敢えず自分は結果重視なんで」

つまりプライドなんぞ当の昔にドブに棄ててますが何か？ と言ったところだ。

色んな意味でがっかりな男である。

「で？ そのホワイトデビル。話は戻るけど、早く封印してくれない？」

この結界を維持するの疲れるんだけど」

「今度は悪魔！？ かなり失礼だよあの人！？」

なのはの絶叫を余所に、耳の穴を穿るジェスチャーで無言を決め込んでいる。

ここまで来ると呆れを通り越して清々しいレベルである。

「ていうか。あの如何にも居間で煎餅かじる片手間にリモコン操作してるおっさんと同程度の労力としか思えない位涼しい顔してる癖に辛いとか、よくもまあこのうと言えるな」

「ほえ？」

突然の声になのはは首を向ける。そこにいたのは、彼女と同じ年の頃の少年と少女だ。

方や、金砂のような髪を両端に結んだ赤い瞳の少女。フェイト・テスタロッサ。

方や、金褐色の髪と黄金の瞳を持つ少年。氷上京谷。

眉目秀麗。

そんな言葉が如何にも似合いそうな一組の男女に、思わず全員がため息を零す。

唯一人を除いて。

「なあ、お前、前にどっかで在った事ねえか？」

「奇遇だな。俺もそんな気がしてた」

向かい合う両者。

マクスは大凡の常識では考えられぬ闘志を向け、その口角を釣り上げる。

京谷はその挑発を受けたうえで、尚一層禍々しく口元を歪ませる。両者が感じた事は一点。

“目の前の相手を知っている”

普通ならば大した事ではないだろうし、そう感じたとしても気に留める事はあるまい。

だが、この二人に限っては別だ。何故なら

「決着、つけるか」

「ああ、そうだな」

この二人は、かつて戦った事があるのだから。

無論、それを知るのは“紡ぎ手”のみ。本来経験する筈だった世界を、当の本人は知らない筈だ。

だが、この二人は覚えている。記憶ではなく経験が。こんなこともあったな、と言うほどに臙げではあるが、それでも記憶の欠片は消えてはいない。

「なのは、ジュエルシードをお願い。あと、出来る限りマクスから離れて」

「龍也君は？」

「安心しろ。俺が神崎さんにも結界を張っというてやる」

会話に割り込んだ事になのはは顔を膨らませるが、正直その申し出はありがたかったので、神崎龍也は頭を下げる。

「あと、その少女、なのはだったな。魔王呼ばわりして悪かった。謝罪する」

「ほえ？ な、なんかやり辛いんだけど」

先程までの印象とは打って変わり、真面目となった恭介になのはは困惑するも、すぐさまレイジングハートをジュエルシードへと向ける。そして。

「フェイト。あの男の相手は俺がする。あの白い少女は、」

「判ってる。こっちで何とかする」

お互いの役割を確認し、両陣営はそれぞれの相手と相克する。

そしてここに、最強のカードが出され合う。

相うつ両者は共にジョーカー。互いの物語における最強は、ここに決着をつけるべく向かい合う。

「始めるか」

「そうだな」

死闘開演。その決着は、未だ見えず。

「全力で来い。出し惜しみをすれば、死ぬぜ？」

長剣を肩に担ぎ、不遜に顔を歪めるマクスの言葉。

だがそれは確かに真実だ。この男ならば、そこいらの雑兵如き片手で事足りるだろう。

そう。相手がたかが雑兵ならば。

「そうか。じゃあ本番と行こうか」

空気が変わる。髪をなでる温かな風も、肌を焼くには程遠い日差しも、その全てが無意味となる。

ここは戦場。既に安穩とした時間なぞ、当の昔に失われている。それを先の一言が、京谷が周りに認識させただけという事。

「Sinistra emittam.（左腕解放）

・（）『冥府の石柱』（）

静かに紡がれた詠唱。一から行うものではなく、あらかじめ呪文を詠唱し完了させる事で、短縮を可能とさせる高等技術。

だが問題はそこではない。確かにその技術そのものは高度。非凡と云って過言ではないものではある。

だがこの場に於いて異常なのは、それを唱えた事によって顕現したもの。数十を超える石柱は辺りのビルと同程度の大きさでありながら、砲弾めいた速度で襲いかかる。

「全力で来い。出し惜しみをすれば、死ぬぞ？」

恐らくは意趣返しなのか、先に言われた言葉と同じように問いかけた。

違いは一つ。今の氷上京谷は、マクスのような遊びは無いという事だけ。

「面を上げる、佗助……………！」

その魔法の直後、無手であった京谷の右手に一振りの刀が現れる。否。果たしてそれは刀と呼ぶべきものなのだろうか？ 歪に曲った刀身。拵えや造りは日本刀のそれであるものの、明らかに速さと鋭さによって切り裂く日本刀には不釣り合いすぎる釣針めいた刀身は、例えるなら数字の『7』に近い。

「ちいッ！」

甲高い鋼の衝突音と共に、隠す事もせず苛立ちに舌を鳴らすマクスを前にして、内心京谷は息を漏らす。

一見すれば魔法と共に刀を出した京谷に分があると見えるが、事実は違う。

あの石柱の豪雨の中を事もなげに潜り抜け、あまつさえその石柱を足場に数十メートルもの上空から見下ろす京谷へと駆け上がり、一太刀を浴びせようとしたマクスこそが異常である。

あの一瞬。もし一声遅れ、刀を出すのが遅れていれば、その時点で勝敗は決していた事だろう。

「こ、のおッ！」

上段から打ち込まれ、姿勢を崩しかけた身体を京谷は轉身。マクスと上下が入れ替わる形で、さらに追い打ちをかける。

すなわちマクスを下に、京谷が上となる様に。

「ぬうッ！」

この場は空中。魔道を用いる京谷ならばいざ知らず、マクスにしてみれば絶対絶命とさえ言える展開である。

羽無き者は地に落ちる。まして鳥でも蝶でも無いマクスにとって、重力という法則は避けられぬ事象である。

だが、それを待つ程に京谷は甘くない。自由落下に身を任せる形のマクスに対し、跳ぶ八工を叩き落とすかの如く追い打ちをかけた。

「てめえ！」

「落ちろ筋肉達磨！」

不遜な物言いと共に叩きつける刀身をマクスは辛うじて受け止めるも、その勢いまでは殺せない。

地に落ちる流星の如く地面へと叩きつけられ、血反吐を吐きながら即座に剣を構え直す。

否。構え直そうとした。

「な!？」

「遅い！」

振り下ろされた刀身を辛うじてマクスは受け止め、返す刀で長剣を横薙ぎに払う。

それを皮切りに二合、三合と繰り出される剣戟。

繰り出される白刃の閃光は暴風であり、小規模な竜巻でもある。

その悉くを、京谷は魔力によって強化された肉体で難なくとは行かぬまでも受け止め、凌ぎ切る。

「そろそろか」

「……ぐッ!?」

地に切先を付け、引き摺るように長剣を持つマクス。

その様はさながら、巨大なバーベルに腕力を根こそぎ奪い取られたスポーツ選手の様でさえある。

そして、その表現は事実正しい。

彼の腕は、剣を振り上げる事さえ出来ないのだから。

「ったく。いい加減にしろよ。既に一トンは超えてる筈だっつーのに、まだ手放さないのか?」

「てめえ……まさか」

「御名答。つーか気付かない方がおかしいか。」

この侘助は斬りつけた物の重みを倍加する刀でな。一度斬れば倍二度斬ればさらに倍。

重さに耐えきれず、倒れた相手は詫びる様に頭を差し出す」

故に侘助、と。抑揚のない口調で、京谷は語る。

真つ当な戦士なら、卑怯と罵るであろう。真剣勝負の中で相手の弱体化を狙うなど、誇りを賭して戦う者のやることではない。

だが、これが正しいと京谷は思う。確かに立場として敵対している、この相手は悪人ではない。

京谷自身納得はいかないが、これで勝負がつくのであれば、それが一番理想的な終わり方であるのだから。

だが。

「ありがとつよ。お陰で威力が増したぜ」

「な!?!」

振り下ろされた長剣は地面を砕き、その亀裂は優に数メートルを

超える。

有り得ないと。今度こそ、予想外の事態に瞠目する。

一トンを超える剣を振り下ろした事に、ではない。例え核弾頭を落とそうとも、ガラス一枚割る事の出来ぬ空間に、亀裂を走らせた事が、である。

もし彼が過去の対戦を覚えていたならば、この結果にはならなかっただろう。

かつての戦い。自身が傷つけた空間の惨状。戦いの爪後として出来たクレーターは、果たして何が原因だったのか。

「くそ！」

そう。この状況こそが、かつての戦いの焼き増しだったという事を。

だが、武装を変える暇はない。

既に繰り出されるマクスの剣が、これまで以上の剣速と威力で迫っていたのだから。

「さて、気付いているか？」

目の前で繰り広げられる死闘を横目に、未だ空中に漂うだけの天宮恭介は、神崎龍也に問う。

「何がですか？」

「気付いてないか。まあ、かなり離れているから仕方ないかもしれないな。」

ここから南西の方角……約三百メートルぐらい離れた屋上で戦っている奴がいる。

殆ど動いていないし、目の前の戦いに比べたら地味すぎるがな。

一人は俺と似たような服装の男……というか少年。君も知ってるだろ、こつちに来る前に、酷く作者と言い争ってた奴だよ。

もう一人は……紫の髪と黒のローブだが

「ヴェノムが!？」

「知っているのか？」

知らない筈がない。この世界に来て第一にあつた危険人物。あれを最もよく知るが故に、神崎龍也は口角泡を飛ばす。

「不味いです! 早く行かないと!!」

「落ち付け。俺たち以外にも見物人がいる。唯一作者とセットじゃなかった男だからな。記憶には嫌でも残る。多分、頃合いを見て加勢するだろうさ」

一見すれば非情とも捉えられる発言。だが、今も目の前の戦いではなく、離れた戦場の趨勢を見極めようとしている辺り、黙って見続けるつもりはないのだろう。

おそらく、万が一見物している銀縁眼鏡の男が助けに入らなければ、長距離魔法で迎撃くらいはするに違いない。

「さて、そろそろ宴も酣だな」

天宮恭介の言う通り、両陣営の戦いは、今決着を迎えようとしていた。

繰り返される剣戟は互いに非凡。竜巻と竜巻のぶつかり合いは周囲を巻き込み、窓ガラスを余波で碎きながらも、猛攻の手を止める事はない。

「しつげえ……!!」

「どっちがだ!!」

どちらも譲らず、どちらも曲げぬ。このままでは千日手となる戦いはしかし。

「きゃあ!」

唐突に、空からの悲鳴が両者の手を止めた。

「くッ!？」

「間に合わない!？」

マクスも京谷もこの事態は想定していた。例え最強同士で決着はつかずとも、両陣営の魔導師には明確な実力差があることを。

無論。落ちる者は決まっている。飛び方を覚えたばかりの小鳥が、空を駆ける最速の燕に敵う筈はないのだから。

「なのは　　!」

そして、神崎龍也もまた、この結末を見越していた。

いち早くバリアジャケットを纏い、マントを翻しながら少女を受け止める。

「否。受け止める筈だった。」

「え？」

「ほえ？」

驚きは二つ。一つは当然、助けようとした神崎龍也のもの。そしてもう一つは、

「まったく。花を散らすには若すぎるわよ、貴女」

予想外の人物に助けられた、なのは本人の声だった。

「あの……貴女は？」

「となりのお姉さん!？」

なのはの疑問と共に声を大にして叫ぶ天宮恭介。だが、助けた本人にとってその呼称は不服らしく、苦い顔をしていた。

「その美少女ゲームのタイトルみたいな呼び方は止めて。私には宮本千草って言う名前があるの。」

「……と。なのはちゃん、だっけ？ 大丈夫？」

「は、はい」

「あ、あの。ありがとうございます。宮本さん」

色々と疑問に思う事はあるが、取り敢えずはお礼を言うのが筋だろうと考え、神崎龍也は頭を下げた。

が。アルフにとっては疑問は手早く片付けたいのか、それとも協力を仰げると 暫定ではあるが 聞いていた相手が敵側を助けた事が不服なのか、荒げた声で言う。

「で。何だつて一般人がこんなところに居るんだい？ あんたもジューエルシードを狙ってるとか？」

「貴女の持つてる青い石には興味ないわ。私がここに居るのは会社の窓からなのはちゃんか落ちるところを見たから助けただけ。」

「訳有りなら話も聞くし、手を引けと言うなら見なかつた事に、」「いえ！ 出来れば関わって下さると嬉しいです！！ とうるか協力して下さい！！」

「……あの人は、貴女の身内？ 今朝も見ただけど」「……遺憾ながら、その通りだよ」

両者沈黙。頼むからあのバカを何とかしてくれ、と泣きそうな目でアルフは訴える。

「……苦労してるのね」

「……判るかい？」

「協力するわ」

「助かるよ」

契約成立。大雨振って土砂固まる。

バカとハサミは使いようとは、よくぞ言ったものである。

「さて。じゃあ今日の所はお暇するわ。なのはちゃん、ごめんね。」

けど、貴女とは仲良くしたいと思ってるの。これ携帯の番号。困った事があったらかけてね」

「は、はい……」

赤外線ではなく敢えてメモ帳の紙を破って渡し、颯爽とその場を去る妙齡のスーツな女性。

彼女が立ち去った後、誰とは言わず上を見上げた。

「あの人、三階から飛び降りなかったか？」

「……………」

その発言に、全員が沈黙する。確かに飛び降りたであろうビルから唯一空いている窓は三階。

常識的に考えて子供を抱えて飛び降りられる高さではない。

「まあ、あれだ。そういう能力持ちなのかも、」

「あの女、魔力を感じなかったんだけど」

「……………」

アルフの発言と共に再度沈黙。この話題はもう出さないようにしよう、と全員心の中で決める事にした。

「さて。俺達は帰る事にするが、極力関わらない方が良い。イレギユラーも多く動いてるからな」

「そもいかないですよ。少なくとも、ヴェノムにはこちらが居る事が原因でここに居るんだと思いますから」

そうか、と呟き、天宮恭介はコートを翻すと共に消えていく。転移術式を用いたのだろう。数秒と持たず、彼らはこの場から消える筈だ。

その中で、氷上京谷は目の前の相手を見据える。

またしても決着のつかなかった相手。自分と同じく最強を冠する異世界の戦士を。

「納得、いかないな……」

「俺もだ。また、相手をしてやるよ」

「次は、俺が勝つ」

両者共に拳を突き出し、見つめ合う。

次こそは決着をと、そう互いに誓いながら、消えるまで目を離さなかった。

「わたし、負けちゃった……」

「そうだね」

「結局、失敗して、男の子たちも助けられなかった」

確かにそうかもしれない。ジュエルシードは奪われ、あの男女も自分の手では助けられなかった。

だが。

「それでも、止めないんでしょ。ジュエルシードを集めるの」

「うん。龍也君も、協力してくれる？」

勿論だと、茜色の世界の中で、なのはの言葉に頷く。

自分には責任がある。あの男、ヴェノムを呼び寄せる一端になってしまった事。

なのはに結局はこの道に進ませてしまった事。

最初に逢ったあの日から、この子を護るといふ誓いは変わらないのだから。

「今は帰るぞ。皆待ってる」
「うん」

だから、今は動き続けよう。前を見つめるために、先に進んでいく為に。

そう決意して、神崎龍也は帰路についた。

007 邂逅と対決（後書き）

c・m・「長らくお待たせしました。第7話の投稿でございます」

京谷「そしてゲストとして俺参上。つーか決着付けられなかったな」

c・m・「ごめんなさい。バトル初回で大技使うとあとでネタに詰まっちゃうのよ。

マンネリ化するのはヤバいし」

京谷「それでか……。今回のバトルはうちの作者の番外編を元に書いたのか？」

c・m・「ええ。それっぽい描写があるのもそのためね。クレータ
ーとか爪痕が出来た理由を考えて、私なりに解釈してみたの」

京谷「成程。だけど、何で俺がここに居んの？ 直也は？」

c・m・「あの子は次回の、ヴェノムとの対決に控えてるわ。どうせ後書きでバカやってるんだから弱いんだろ？ と思われるのが嫌みたい」

京谷「……ひでえ」

c・m・「まあ、あの子は本当は弱くないんだけどね。

彼の实力が知りたい方は、『僕は勇者なんかじゃない』VO
L2 009と010。それと最新話をご確認ください」

京谷「宣伝？」

c・m・「そう思われても仕方ないわね……。」

けど直也君が『俺は雑魚ではない』って言うんだもの」

京谷「必死だな。

ではそろそろ作者さまのお礼に行こうか」

c・m・「ええ。神崎はやて様、Kyoさま、Hagalazさま、水玉さま、久住祐治さま、笑う男さま。霜花さま。

感想を書いていただき、誠にありがとうございます。

初めて制作関係者以外から感想が届きました！！ 作者としても感涙で御座います！ 本当にありがとうございます！！」

京谷「というか、本当に身内以外からの感想がないよな。不人気？」

c・m・「言わないで。気にしてるんだから……。」

京谷「え〜……。もし何かご意見や、こんな事がして欲しいというご要望があれば、感想版にどしどし送って下さい。

どんな些細な事でもお待ちしています」

c・m・「さて。ここからは笑う男様にご報告を。メッセージボックスに送る予定だったので、時間がたち過ぎてしまったのでここに書かせて頂きます。

チャットに関してなのですが、正直、話し合う事は既に全部出し切ってしまった、こちらで思いつく事が無いのが現状です。

なので、話し合う事がある場合はメッセージボックスにて頂ければ幸いです。

正直なところ、出張続きで時間が取れないのです。本当に申し訳ありません」

京谷「……社会人とはかくも時間に縛られるものか。それでは今日はこの辺りで、またお会いしましょう」

京谷「……ところで、本当にビルの三階から飛び降りれるの？」

c・m「火事になった建物から子供を抱えて飛び降りた事ならあるわ。あのときは二階だったけど」

京谷「リアルで出来るのかよ……」

008 『死神』と『剣軍師団』

時間はジュエルシードの開放。氷上京谷一行とマクス＝トレンジア達が対峙した時から三十分程遡る。

俯きながら歩く若人。ややかけ足になる中年の会社員であろう男。すれ違う彼らから奇異の眼差しを向けられる事も無く、北澤直也は街路を歩く。

本来ならば手にした得物の物珍しさから見向きぐらいしてもよさそうだが、彼らは一瞥さえ寄越さないまま、彼の横を通り過ぎる。

彼自体は平凡な格好であり、黒一色で統一された服装である事以外、外見上は至って普通なのだからそれも納得できる。

但し、長方三角形の形をした居合刀袋を肩から提げていなければ、の話だが。

本来、こう言った物は街中では目につく。

美術学校に通う者が持つ画板や、楽器ケースを街中で見た事がある者は判るだろうが、足を止める事はなくとも、横目に流し見るぐらいはするだろう。

それが平時ではお目にかからない物ならば尚更である。だというのに。

「……無関心主義が流行りか？」

そんな下らない事を一人ごちながら、北澤直也は市街地の中心に来た。

別段、ここに用があつた訳ではない。ただ彼は人が多そうなところを、という理由で誘蛾灯に誘われる蛾のように足を運び、ここに流れ着いただけだ。

だが、それは正解だったのかもしれない。

この街を現状を見たならば。

「まるで死都」

暖かな日差しの陽気を孕んだ風も、今やゴーストタウンと化した街並みでは冷たさしか感じない。

活気のある街並みは今、ただ沈黙しか返らぬ廃墟同然の姿であった。

北澤直也はその一角。ビルとビルの上に建てられる予定の、未だ建築中のビルの中へと、立ち入り禁止の看板を無視して踏み込んだ。恐らくは最先端の建築方式を採用しているのだろう。鉄骨やコンクリは剥き出しているものの、ビニールシートに覆われたビル内部に日差しは入らない。

一昔前までは下から造る建築方式だったが、今では屋上から造られるようになったため、最上階のコンクリの床が階下までの日差しを遮っているのだ。

「やっ」

僅かに手首や足首を伸ばし、身体の状態を確認する。

結論は問題なし。ここに来てすこぶる体調が良い。

“今日は吉日か？”

それともこれから厄日になるかもしれないと考えつつも、四方に組まれた鉄骨を見やる。

まずは一段目。業務用の梯子や足場を無視し、一足飛びで二階建て相当の鉄骨に飛び乗る。

次いで二段目、三段目と続き、最上階へと到達。周囲を確認し、業務用の足場へ飛び移り、屋上へと足を踏み入れた。

明らかに異常。もし他の人間が見たならば、魔法か手品を使ったのか、それとも猿か何かに見間違えたのかと首を傾げた事だろう。それほどまでの異常を己の肉体の身を頼りに、しかし汗一つ掻かずに行くと、ここに自分を招き寄せた元凶　目の前に落ちている、青い宝石を　手に取った。

そして、もう良いだろうと考え、後ろを振り向く。

「覗きが趣味か？　それとも、奇怪な行動をしている不審者を問い質したかった善良な市民が、何の因果が見つかる筈のない不審者を前に身を乗り出してしまったとか？」

「いえいえ、どちらでもありませんよ。単に落とし主が落し物を取りに来ただけです。」

出来れば返して頂けませんか？」

男は奇妙だった。全身を覆い尽くす漆黒のローブ。顔こそ仮面から見えぬものの、微かにはみ出した紫の髪が視界に止まる。

「如何にも、といった不審者に、その発言は説得力が欠けるな。」

出来れば説明を。事の次第によっては、そちらに渡して見なかった事にする」

「貴方の様な物分かりの良い少年は助かりますよ。」

その宝石は、まあ、言うなれば巨大な燃料の様なものでしてね。こちらとしては何としても取り戻したいのですよ。もしタダで返すのが御不満であれば、それ相応の報酬も出しますし、この石の恩恵を分けても構いません」

「恩恵？」

思わず反芻した言葉に、男はにやりと仮面の中で口元を歪めた。中々どうして、この少年、内に何かを抱えていると見える。

「ええ。その石があれば、大抵の事は叶うでしょう。そう……例えは死者の蘇生とかもね」

「！」

“成程。氷のような口調や表情に比べ、内側は中々俗っぽい”

「ああ。それだけではありませんよ。その気になれば望む事が全て叶う。」

全く新しい楽園を作る事も、誰もが泣かない世界も作れます。まあ、これだけでは数が足りませんが、どうです？ もし協力してくれるなら、幾らでも貴方の願いを叶えると約束しましょう」

だから選べ、と仮面の男はあくまでも友好的に語りかける。

もしこれが平時の北澤直也ならば、一笑に伏した事だろう。そんな馬鹿げた話、三流小説家の物語でも有り得ないと、そう断固として拒否した筈だ。

だが今は違う。彼は自分が造られたものである事も、ここが常識の通じない世界だという事も知っている。
だからこそ。

「何が望みだ？」

抑揚の無い声で問う。ここが最後の分水嶺だと。そう自分に結論付けて。

そして、仮面の男は語る。

楽園を作りたい、と。

「今ある全てを壊したい。何もかもを棄てたいのですよ、この狂った世界を。全てを棄てて、楽園を得たい。素晴らしいでしょう？」

貴方も是非こちらに来て、
「もういい」

その瞬間、男の首からぎちぎちと音の響き、何かの軋みを上げる音が響いた。

「まったく……予想通りでしたね。聞きたい事を聞き、用が無くなれば首を刎ねる。」

私がバリアジャケットを纏っていなければ成功したでしょうが……」

そう言って、男は首に手をかける。

ブチブチと言う糸の切れる音と共に、にやりと笑い、

「残念です。貴方は私達と非常に近い……同類とさえ言っているのに、何故判り合えないのか」

瞬間、大気を裂く音と共に、一振りの剣が顕現する。

分類するならば架空の武器である蛇腹剣に近いのであろうが、あれには刀身を連結する関節部がない。

あくまでも鞭のように、薄く撓やかな刀身が柄から伸びているのだ。

その剣は手首の返しと共に大蛇の如く蠢き、宙空に躍る刃は瀑布の如き飛沫を散らす。

大気を裂くことに起こる破裂音は、それが音速を超える証でもあった。

そして、仮面の男は唐突に腕を振り上げる。いや、目の前の少年はその振り上げる動作さえ見えたかどうか。

マクス・トレンジアさえ瞠目した剣の一閃は、それだけでコンクリートの床を溶かし、足場の三分の一を消失させる。

床の溶け具合からして、毒を噴出させる呪文を剣に施していたの
だろう。あれでは跡形も残るまい。

そう考え、男はジュエルシードを回収すべく未だ煙の立ち込める
場へ足を運ぼうとし、

「な
」

目の前にある破れた居合刀袋を、しばし呆然と見つめた。

「
貴様！」

奇襲と言う意趣返しが失敗した事への苛立ちだろう。次こそは仕
留める、と。

毒蛇の如き剣を振り上げようとし、

「たわけ」

その直後、剣を手にしていた筈の右腕が、床へと落ちた。

「今のは……」

そして。その光景を見つめる一つの影。

肩甲骨あたりまで伸びた髪と、銀縁の眼鏡をかけた男性だ。前髪
を伸ばしている為か、右目にも髪がかかっている、全体的に黒を基
調としたイメージが浮かぶ。

名を御剣 仁という。

彼がここに居るのは、ジュエルシールドを巡る戦いを遠巻きに観戦しようという、所謂、野次馬根性のようなモノだったのだが、まさか自身の間近でも対決が起こっているのは予想外だったと言っている。

未だに轟音の響く彼方の戦いは、最早どうでも良い。あれは善と善のぶつかり合いだ。

引き際も両者の魔法少女のどちらかの決着と共に幕を下ろすだろう。

それはいい。それは問題ない。

だが、今日の前で行われているのは別だ。彼自身が見たのは途中からである為、事の顛末は判らないが、それでも片方の、あの仮面の男がどういう人種かは見て取れる。

外道。人も道を踏み外し、己の悦楽の為の犠牲を厭わぬ者。

それがあの男の正体だと御剣 仁は結論付ける。だが、彼の関心は其処にはない。

「あの少年……」

“ 一体いつ刀を抜いた？ そもそもどうやって、相手の背後に立った？ ”

判らない。確かに魔力的性はある。

ランクに換算すればA - と言ったところだろうが、それを言えば仮面の男はSランクオーバーだ。もし魔力による動きなら反応できない筈はない。

第一、どうやってバリアジャケットを抜いた？ あの刀はデバイス以上の何か 例えば自分の様な宝具 だとも言うのか？

いや、あの刀の歴史は浅い。製造は幕末の頃であるう。いかな業

物とは言え、そこまでの神秘を内包しているとは思えない。
ともあれ、これからだと。そう内心この戦いを楽しんでいる自分
に苦笑しながら、彼は眼下の戦いに目を向けた。

「たわけ」

憫笑の吐息と共に言葉を吐き出し、北澤直也は血振りを済ませる。
元より彼の刀身に返り血は殆どない。鮮やかなまでの切断は出血
の時間さえ遅らせ、斬られた本人は数瞬の間、己がどうなったのか
さえ認識できなかつた程なのだから。

刃筋から数滴零れ落ちた僅かな血も、その一振りですべて完全に取れる。

その血は吸うに値せずと、侮蔑を込めるかのように。

「ぐ、あッ……」

未だ目の前で血に落ちた片腕に見向きもせず、出血を止めるよう
専念しながら仮面の男は少年を見据える。

瞳に込めるのは憎悪と怨嗟、そして理解出来ぬが故の畏怖。

果たして何時斬られたのか？ 痛みを味わう程の時も、斬られた
感触さえ無かつた。

故に、仮面の男は困惑する。
だが。

「く、くくくくくッ！」

その口元から零れ出るのは歓喜。満たされなかったものを満たした充足感が、今、仮面の男を支配する。

「良い、良いですねえ！ やはり貴方は同類だ！
好きなんでしょう？ 判り合えないものを壊すのが！ 楽しいでしょう！？ 人を騙すのが！

嗚呼……やはりそうだ。初めから貴方はジュエルシードも、私の事も関心は無かった。自身の望みさえ棒に振っている。ただ私が必要以上に壊すから殺そうとする。

判り合えないと分かったから壊すんですね」

ならばこそ、貴方は誰よりも私達に近いと、祝福を授ける神父のように、仮面の男は歓喜に打ち震えた。

「嗚呼、ならば」

ここからが本番だと、仮面の男は爪先で蹴りあげた剣を残る左手に構え持つ。

瞬間、耳を劈く轟音が、辺り一面を支配した。

それは剣が生んだ暴風。音速を超え、余波は砕けたコンクリを爆弾の如くに撒き散らす。

振り回される剣は、その全てが乱雑な扱いに見えて自身を覆う結界の役目を果たしていた。

剣によって作られた結界。それは尚ご丁寧な事に毒の術式を施したままである。

例え遠のこうとも毒と破片に総身を貫き焼かれ、近付こうと踏み込めば駒切りにされて五臓六腑を晒すだろう。

「さあ、踊れ！ 躍り狂え！ 道化のように舞って見せる……！」

正に攻防一体の究極系。かのマクス＝トレンジアでさえ、この暴威には絶命する。

そう信じた男は、残る望みさえ、かたうで地に落とした。

「は………？」

それは奇跡とさえ呼ぶべき異常。男からすれば悪夢に他ならぬ現実。

誰が知ろう。誰が判ろう。

飛来する礫と毒の弾雨を、毒蛇の如くうねる剣を、その全てを斬って捨てたなど。

「……莫迦な」

最早痛みさえ無い中で、ただ仮面の男は呆然と地に落ちた二つの、今やただの肉片でしかない腕を見る。

自分を止める者はいないと、仮に居たとしても、それは自分がかつて全てを奪ったあの男だと、そう信じていたというのに。

なのに。何故、自分の腕は動かないのか？

「驚いている所悪いが、先程の問いに関しては、答えは否だ」

“貴様に近い？ 壊し、殺す事への歓喜だと？”

ふざけるな、と北澤直也は切先を向ける事で言外に否定する。

近いから、理解出来ないから壊す。とんだ茶番だ。欠片も理解できていない。

誰よりも近いのではない。誰よりも遠いのだ。

殺人に歓喜などない。欺瞞に充足なぞ求めない。

ただ、貴様は奪う者だと。そう判ったが故に刃にかけただけの事。理解出来ないのではなく、遠くから見えるが故に理解できただけ。近すぎれば目が眩む物でも、距離を置けば全体を捉えられる。だからこそ、何よりも理解できるからこそ、北澤直也は刃を抜いた。

血と怨嗟の上に立つという、唯それだけが共通する者として。

「貴様が悪鬼。俺は修羅。」

共に六道に堕ちる身であれど」

屍山血河を踏み越えて、地獄を生きた者として、

「堕ちた先にて悪鬼を滅し、剣の山にて獄卒と死合」

「ただ、さらなる地獄、修羅道を生きた者として、

「六道を這い上がり、閻魔さえ討とう」

それこそが多くの命を奪った、『死神』の責務だと。そう断言するように。

「幕引きだ。道化は地獄で踊り狂え」

その啖呵と共に、今度こそ彼は刃を掲げ持つ。

ここまで長引かせたのはこの男の窮地に誰かが駆け付けるのでは踏んだ為だ。

先程からこちらを見つめる視線がそうだと考えていたが、未だに静観を決め込む以上は違うのだろう。

少なくともここへ来る意図がない以上、目の前の相手に専念でき

る。

いずれにせよ詰みだ、とそう白刃を奔らせる。

否、奔らせようとした。

「クックククククッ」

「チィッ……!!」

止まりかけていた筈の両腕の出血。それが北澤直也の全身に降りかかるうとする瞬間、両者は地を蹴って飛び退く。

当然だ。血を燃料とした呪いは強酸の毒。触れば肉を腐らせて骨に達し、全身に行き渡って死に絶える。

両者の飛び退いた先は異なる。北澤直也は後方へ、そして仮面の男は。

「 甘いですねえ、本当に」

そう。最早、手の届かぬ上空へと。

「頃合いか」

何故、己の腕が落とされたのか？ 当然ながらに疑問を抱くであ

ろう事柄。

だが、その答えに気付いたのも又、仮面の男自身だった。

あれには魔力を感じない。魔力適性こそあるものの、デバイスもバリアジャケットも無い。

つまり、魔法ではない。そして、自らの用いる『神力』とも異なる。

あれはただ斬っただけ。

大方、鋼糸が通じなかったから、より斬撃に優れる刀を使ったというだけの 無論、ある程度の細工はしているだろうと考えてはいるが それだけの事ではないのだろうと仮面の男は予測し、それ故に畏れる。

確かに魔力も神力も無い。銃弾の一撃で倒れ、ナイフに刺されれば出血で息絶える程に弱い存在だ。

だが、だからこそアレは違う。積み重ねた歴史と研鑽が、磨き上げた密度が、他の誰よりも違うのだ。

持ち得るのは『武』。

北澤直也にとつての武器であり一本の綱。信仰の類にさえ昇華し、魔を凌ぐほどに至った業。

おそらく、こと接近戦に限れば、あれはマクス＝トレンジアをも凌ぐだろう。

だが、それ故に弱点もある。

確かに積み重ねた研鑽は一線を画する。その強さは最高位とさえ言っている。

しかし、あれは『魔』を理解していない。操る事は出来ないのだ。如何に剣は神速であろうと、空を飛ぶ事が出来るのか？ 如何に速く駆けようと、追尾し続ける魔弾を躲しきれるのか？

そして、逃げ場の意味を無くす程の広範囲魔法を、回避する事は出来るのか？

答えは否。魔の薫陶を知らぬ者に、この術を防げはしない。

空に描かれる極大の魔方陣。魔導戦艦をも溶かす毒の雨と霧は、間違いなく北澤直也に死を齎す。

最早、打つ手なしと、そう刀身を下げかけた所で。

「やれやれ。諦めるのは良いが、その前に上を見たまえ」

突然の言葉と共に降り注ぐ、剣の弾雨。

武に生き、最もその道具が身近であったからこそ、北澤直也はその事実気付いた。

降り注ぐ剣はその全てが業物。否、そのような単語さえ尚これらを貶めるだけだと、そう一目で看破した。

この剣は、その全てが伝説なのだ、と。

「な!？」

驚きは誰のものであったのか？

飛来する剣雨に魔方陣を砕かれた仮面の男のモノか？

剣雨に目を奪われた北澤直也のモノか？

その剣雨を足場に北澤直也が上空へと駆け上がるのを見た、御剣仁のモノか？

いずれにせよ、それぞれの取るべき行動は決まっている。

仮面の男は眼前に迫る北澤直也に毒の弾丸を撃ちだす。狙いは眉間……に見せかけた左手。北澤直也は刀で弾こうとするが、足場の不安定さから力が入らず、刀を落とす。

「く!？」

「貰った!!」

「どうかな？」

その言葉がそれぞれ誰のものなのか、最早語る必要はない。
次の一手。

刀を落とした以上、詰みの一手を仮面の男が打とうとするのは道理であり、

御剣 仁が北澤直也に幾本かの武器を送るのも自然と言え、
それを受け取った北澤直也が、魔剣で仮面の男の胸を斬り裂いたのは、必然と言える事だった。

「逃がしたか」

既に原形を留めぬ屋上で、御剣 仁はぼつりと呟く。

あの瞬間。胸を斬り裂いた際に溢れた鮮血は北澤直也を巻き込もうとしたが、御剣 仁の用いた熾ロー・ファイアス天覆う七つの円環によって事なきを得た。

咲き誇る花弁の一枚一枚が古の城壁に匹敵する盾を前にしては、
流石の鮮血を媒介とした毒も侵入しきれなかったのだろう。

結果としては万々歳だが、やはり取り逃がすには危険すぎる存在であった為、あの状況下で首を刎ねられなかったのは痛い。

「助太刀、感謝致します」

「何、例には及ばんよ。私としても君の戦いを静観していたのでな。
目の前で死なれては目覚めが悪い」

「それでもです。貴方が居なければ、自分はあそこで命を落としていたでしょう。」

御恩を返したいのですが、如何に？」

ふむ、と御剣 仁は顎に手を当てる。どうにもこの少年、義理堅い。

おそらくは生真面目なのだろうが、無理に断るのも悪い。だが。

「それよりも」

「この状況の打開、ですね」

円形に二人を取り囲む、紫の騎士。

いや、正確には騎士かどうかは判別できないが、少なくともフルプレートのアーマーと槍を見る限り、そう表現するのが妥当だろう。

「目的は何か？ と聞くのは筋違いでしょうか？」

「君の持つ石が狙いなのは間違いなさそうだ」

冗談交じりに背中越しに顔を合わせつつ、溜め息を零す。

今日は厄日決定だな、と北澤直也は愚痴を零した。

「その宝石を渡して頂きたい。抵抗しなければ、身の安全は保障する」

「その発言は武器を下ろしてフルフェイスの兜を外してから言って貰いたい。」

今の状態でそれを言われようと、信用度は限りなく零だ」

北澤直也の皮肉に、前に出た指揮官らしき、一人だけ鎧の違う人物 声や身体のラインからして女性だろうと、北澤直也は見切りを付けた は前に出て兜を取る。

目についたのは、燃えるような赤。兜から溢れた長髪は風に乗る、その香りを届かせ、武骨な兜からは想像もできない程の可憐な顔立

ちは、西洋人形のような細かさを見せていた。

年齢は十六、七程だろうか？　もしかしたら必要以上に引き締まった顔立ちと厳格な空気が少女らしさを邪魔しているだけで、本来の年齢はもっと低いのかも知れない。

だが、それも含めてこそこの少女の美しさなのだと、北澤直也は納得する事にした。

少年の視線に気付いたのか、彼女はトパーズの様なオレンジの瞳を向ける。

「返答はまだか？　こちらは要望に応えたつもりだが？」

「あ、ああ……」

不覚だと、北澤直也は自身を恥じる。外見の美しさに魅惚れる程、真つ当な人間だとは思っていなかった筈だが、どうやらまだ青いらしい。

「一つだけ、良いか？」

「一つだけなら」

微かな戸惑い。この少女が見せる、他人を寄せ付けぬ空気そのものが原因なのか、それとも他の何かなのか？

その事実が氷解したのは、次の質問終わってからである。

「この石に、何を望む？」

本来ならば、ここで力づくで奪っても良い。少女の率いる騎士は二十名。

たかが二人とは言わないが、先程の戦いを見ていなければ、出来ない事はないと誰もが考えるだろう。

それをしなかったのは、北澤直也が興味本意ではなく、あまりに

も真摯に訊いたからだ。

少しの逡巡の後、少女は口を開く。

「願わくば、一度。」

叶うならずっと。

私は、大切なヒトと一緒に居たい」

ただ、それだけだ。と少女は風に乗る様な、静かな言葉で囁く。

「判った」

そして、彼は石を手渡した。途中で騎士達は槍を向けるも、それさえ意に介さぬと言うように。

「良いのか？」

「その夢がどんなものかは判らない。だが、その言葉に嘘はなかった。」

君は本心を他人である自分に打ち明けた。その礼と心に潜った謝罪の為に」

両手で、しかし、しっかりと少女に手渡す。

「願わくば、敵対しない事を願っている。君の道に幸福がある事も」

「お互いに、な」

微かな笑顔と共に、少女は踵を返し、騎士たちと共に立ち去っていく。

燃える様な茜の空は、少女の笑顔に相応しかった。

「やれやれ。あの石がどういうモノか知っていて渡したのかね？」
「あの仮面の男から聞いた限りは。ですが、少なくとも悪用はしないでしょう。」

万が一そういう事態になれば止めるまでです」
「頼もしい限りだ。」

が、如何に君とは言えあの人数では無理だろうよ。今回の件で実感した筈だ。

如何に腕が立とうと魔導を知らねば戦えん。そこで、だ」

そうして御剣 仁は提案だ、とばかりに人差し指を立てた。

「先程言っていた礼も兼ねて、うちの古美術店で働いて貰いたい。人手が足りなくてな。」

報酬と言っては何だが、私を知る限りの魔導を教授するし、道具も揃える」

「宜しいのですか？」

「構わんよ。君だけで奴らを片付けてくれるなら尚良い。」

こちらも予定が詰まっているのでね。それに、こちらも気になっている事がいくつかある。例えば、君が落とした刀などね」

「これですか？」

そう言うと北澤直也は地引網を引くような動作を取る。

初めのうちは何なのか判らなかつたが、どうやら目視出来ぬ程の極細の鋼糸で刀を絡め取っていたらしい。

ビルの壁面からすると上がって行く刀を手にとると、血振りをして和紙で拭い、鞘に収める。

「蜘蛛か、君は？」

「誉め言葉として受け取らせて頂きます」

さて、兎にも角にも忙しくなるな、と。

そう両者は考えつつも、古美術店であるビルへと向かっていく。

その中で、ただ一つ御剣 仁は気がかりな事があった。あの時、仮面の男の胸を斬り裂いた剣。

幾本もの宝剣や名刀の中で、何故あの魔剣を手にとったのか？
その疑問を抱いたままで。

光の差し込まぬ場所。正確には使われなくなった廃ビルの中で、仮面の男、ヴェノムは布の破れたソファーに寝そべる。

いや、正確には身体が起こせないだけだ。

今のところデイヴアイトの力で再生能力を底上げしているものの、一度斬り落とされた腕を繋ぐのは容易ではない。

「手酷くやられた物だな」

「感謝してますよ。たとえ腕を取り戻していても、時間が経ち過ぎていては意味がありませんからね」

その友好的ですらある口ぶりに、傍らに居た男は、馬鹿を言え、と無表情に吐き捨てる。

「貴公が必要としているのは俺の能力だろう？ いずれにせよ、貴様が居なければ今後の計画に差し支える。あと何日で動ける？」

「当分は前線には立てませんね。心苦しいですが、今後は貴方にお願しても良いでしょうか？」

「こちらは忙しいのだが……まあ良い。ついでに済ませておいてやる」

「良く言いますよ。どうせ趣味でしょう？」

そう言いつつ、ヴェノムは男の両手を見る。恐らくはその手で、また幾人もの命を刈り取って来たのだろう。罪の無い幼子……それも少女だけの命を。

「貴公には判らんよ」

「でしょうねえ……私は選り好みをする気はありません。絶望は等しく訪れるからこそ平等です。」

ともあれ、頼みましたよ。“元”管理局、伝説のエース。ベリアエル・バトオ殿」

皮肉げなヴェノムの言葉に、男は何も返さなかった。

008 『死神』と『剣軍師団』（後書き）

c・m・「今回は早く終了！ 第8話の投稿でございます」

京谷「そしてゲストとして俺参上、再び。つーか出番ないのに出ていいのか？」

c・m・「勿論。直也君が出ると舞い上がっちゃいそうだしね」

京谷「成程……。しかし今回のバトル、ぶっちゃけ直也強すぎね？」

c・m・「ええ。正直、他の作者さまのキャラだと口調や行動パターンとかで、動かすのに時間がかかつちゃうんだけど、彼の場合自分のキャラだからかなりすんなり出来たわ。

ちなみに直也君はこっちで活躍すると、その分原作で不幸になるから」

京谷「成程、一応バランスは取れてるのか。しかし今回は御剣 仁も出たな。つーかあの二人、コンビ組むの？」

c・m・「もち。この小説初の『クールコンビ』結成！ 冷静な上に後方支援と接近戦で役割分担できるし、いざとなれば背中を合わせて戦えるというバランスのとれたコンビよ」

京谷「……唯でさえチートな奴らが輪をかけてヤバく。つーかA、sで敵に回したくねえ」

c・m・「最強クラスのチートが何言ってるのよ。それに貴方の所の作者も相当異常よ」

京谷「否定出来ないのがつらいな。つーか接近戦だとマクスより上って感じの描写があったけど、強いのもってどっち？」

c・m・「何でもありだつたら余裕でマクス。遠距離から撃ちまくったり、止め刺しに近づいてきた所を広範囲砲撃すれば勝てます。遠距離で弾幕張れば結構いける」

京谷「接近戦オンリーの弊害か。まあ、そうでもしないと無敵すぎるからな」

さて、ではこれからは読者兼作者さまのお礼にGO！」

c・m・「ラジャー。神崎はやて様、Kyoさま、Haggalazさま。

感想を書いていただき、誠にありがとうございます。これからもがんばって行きますので、ぜひよろしく！」

京谷「というか、何で今回はこんなに早いんだ？」

c・m・「一番の理由は自分のキャラだからね。次の理由が、いつ出張で飛ばされるか判らないから、早いうちに出しておきたいのよ」

京谷「確かに二カ月待ちとかは悲惨だしな」

c・m・「ええ。今回は説明会になりそうな予感！次が終われば多分温泉です！」

京谷「サービスシーンはもう少し待つように。それでは今日はこの辺りで、またお会いしましょう」

月に照らされた世界の中、北澤直也は、案内されたビルへと入る。恐らくは廃ビルを買い取ったのだろう。

商品を並べる机は壁面に折り畳まれ、棚に関してはまだ全てが組み立て切れている訳ではないのか、一部を除いてその殆どが未完成の状態で放置されていた。

「開業前なのでね」

僅かに苦笑しながら答える御剣 仁と共に二階へと上がり、リビングのソファ―に腰を下ろす。

話し合うべき事は山ほどにあったが、一先ず情報を整理する事にした。

ジュエルシードの事。

お互いの名前や現在の状況。

そして。

「つまり君は魔法や超能力と言った特殊な能力は持たず、与えられたのは資金と住居、そして書類の類と言う訳か」

成程、と言ったように頷く御剣 仁に対し、北澤直也は愕然とした様子で手帳を見る。

それは北澤直也の物ではなく、目の前の御剣 仁の物だ。

「何ですか。この出鱈目な能力は……」

『剣軍師団』。座への接続による宝具召喚及び、本来の所有者の能力コピーを行う能力。

これだけでは何のことなのかは判らなかったが、補足説明を受ける事で北澤直也は理解する。

座とは時間軸とはかけ離れた別の次元。

神性の高い者。星寄りの者は人類を守護する者の最上位である英霊として祭り上げられ、それ以外の下級の存在が守護者として存在する、いわば精霊の世界。

そして宝具とは、過去伝説となった偉人や英雄たちが振るう武器であり、神話の具現。

それ自体が伝説となった、いわばシンボルとさえいえる物。

有名どころを上げるならば、アーサー王の聖剣や神武天皇の布都御魂が当て嵌まるのだらうと、北澤直也は想像した。

だからこそ恐ろしくもある。自分が見た宝剣、魔剣その全ては伝説だと感じた。

そして、それが正しいという事も。

「確かに君からすれば異常だらうよ。私は武器を出せるだけでなく、本来の所有者の能力も得られるのだからね」

そう。重要なのは其処だ。如何に伝説の武器であるうとも、使い手がおざなりならばそれまでの事。

素人相手なら伝説であろうと何であろうと、近接戦闘を挑む以上は百度戦おうと負けぬ自信は北澤直也にはある。

が、それが英雄そのものの対決となれば話は別だ。

単騎で万軍を凌ぎ、時には奇跡の業を以て戦場をかける神代の戦士。

それを相手にする事なぞ、不可能とさえ言っていいだらう。

無論、戦う事なぞないと信じたいが。

「しかし判らん。君はあの仮面の男との戦いで、バリアジャケットを抜いた筈だ。」

高位の魔導師であれば対戦車砲ですら傷を付けられぬ防護を、魔導の薫陶もなしにどうやったのかね？」

御剣 仁にとって、最も重要なのはその一点。

初めは刀に秘密があると思ったが、結局仕組みは感知できず、本人も魔法には無縁の存在だと言う。

ならば、何故？

「……やはり、この刀によるものかと」

北澤直也は、テーブルの上に刀身を寝かせる。

白塗りの鞘と柄巻きの拵えは、その見栄えもさる事ながら、現代ではそうお目にかかれぬであろう小柄や筭も取り付けられていた。

「元は神社で奉納されていたのですが、火事で焼け落ちた際に復興に尽力した我が家の一族に、お礼にと送られた物です。」

時代こそ新しいですが、御神体として破魔刀と奉ぜられ続けているため、おそらくは信仰からそうした力が宿ったのでしょう。

この刀は本来、我が家には残ってはおりませんでした。大東亜戦争の折、佐々木家の長男が海軍航空隊で少尉に昇格した際、祝いと必ず帰って来れるようにと、曾祖父が渡しましたが……」

「戻って、来なかったのだな」

ええ、と北澤直也は相槌を打つ。鞘についている筭も、曾祖父が桜の木を彫って作った物だ。

いずれ佐々木家の長男が帰った時、自分の妻に渡してやるように、と。

「詮無き事です。ともあれ失った筈の刀は自分の手に渡り、今はこうして使う形になっていきます」

「しかし、こう言っては何だが、君の家の家宝だろう」

例え自分達が作られた存在であっても、というニュアンスを含ませて言った言葉に、北澤直也は憐憫を浮かべながら答えた。

「ええ……宇川は今や、自分しかいません」

「済まない。野暮な事を聞いたな」

いいえ、と穏やかな顔つきで応える北澤直也ではあったが、空気が重い。

確かに作られた存在なのかもしれない。だが、その人物がかけてきた時間も、流した涙も、その全てが、『偽り』の一言で片づくのならば。

その生きた過程の中で失ったモノは、果たしてどこに行くのか？
少なくとも、北澤直也はそれを認めないだろう。

全てはレールの上だったから。そう言って全てを清算する事は容易い。

だがその全ての罪を。かつての慟哭も、葛藤も、その全てを棄てると言ふ事は、

その全てを、無価値にすると言ふ事ではないだろうか？

「申し訳ありません。妙に重くなってしまいました。話を替えましょう」

「……そうだな」

静寂に包まれた場を取りなすべく、思考を切り替える。

何はともあれ、これからの事を考えなければならない。

「まず出勤に関してだが、先程も言った通り開店前だな。

基本的に午前中に作業をして貰い、午後は魔導に関する訓練を執り行うという形にしたいが、構わないかね？」

「勿論です。しかし、魔導の訓練とは、どのようなモノを？」

「ふむ……」

どうやら具体的なものはあまり考えていなかったのだろう。しばし顎に手を当てて考えると、おもむろに背後の空間からアクセサリを取り出す。

「これは？」

手渡されたのは、翼を模ったシルバーアクセサリだ。翼の大きさをチェーンに関しても派手すぎる事は無く、デザインについても好ましく思える。

「君はヘルメスの靴を知っているかな？ 正確には靴と言うよりサンダルだが、それは原典から後に派生したものでね。

魔導師で言うところのデバイスと呼ばれる所まで流転していった品だ」

「ペルセウスがメデューサを退治する際に送られた品ですか。しかし、宜しいので？」

「構わんよ。私には原典がある。後に派生し、流転していったモノはオリジナルがあれば複製も容易だ。身につけて見たまえ」

言われるがままに身につけ、次の指示を待つ。

《Please set up a password.》(パスワード)

ードを設定してください)》

「成程。確かに所有権を君に手渡した際に移したが、情報も初期化されている訳か。」

まあ問題あるまい。好きなパスワードを入力したまえ」

好きなパスワード、と言われ、北澤直也は下あごに手を当てる。

必要以上に長すぎるのもどうかと思うが、下手に短いと漏洩した
際が事だ。

「なに、気にする事はない。デバイスと言っても、それは練習機の様なものだね。」

飛行等のユニットと、気圧変化や風圧防護の為の簡易バリアジャケット位しか装備できん。あくまでも初心者用の入門キットだと思
つてくれれば良い」

ならば気兼ねなく、と北澤直也は思うままに口にする。

「Let's jump together.
Until the die that death tear
s us up」

《The password was entered. (パスワードの入力を確認)》

Thank you for your consideration.
ion. Master) よろしく願います。マスター)》

「『共に空を駆けよう。死が引き裂くその日まで』か……。
随分と情熱的だな」

「そうでしょうか? ともあれ。」

It is very well just here. (これからは宜しく頼む)「

《HuHu... It is OK in Japanese.》
ふふっ……日本語で大丈夫ですよ》

北澤直也の発言に、先程の事務的な音声とは打って変わった落ち着いた女性の声流れる。声質からして、十代後半から二十代と言ったところだろう。

印象もさることながら、こうして会話ができる以上、先程とは違って愛着が持てる。

「AI搭載型か。これなら私がない間も指示に従って練習が出来るな」

「ありがとうございます。では、そろそろ仕事を始めたいのですが」
「待ちたまえ。流石に今日はもう遅いのでね。仕事は明日からだ。」

それに、まだ訊きたい事はある」

何か？ と首をかしげる北澤直也に、一振りの剣を突き出した。

あの時、ヴェノムの胸を切り裂いた魔剣。普通ならば決して手に取るうとは考えぬであろう、その剣を。

「仮面の男を斬った剣ですね。これが何か？」

「ああ。これを君が使ったというのが問題なんだ。」

はつきり言っつて、これは普通ではない。他の宝具もそうだが、君に渡そうとした物の中には聖剣もあつたし扱いに慣れているであろう刀の類もかなりあつた。

だと言うのに、何故呪われた魔剣を？ 私が見た限り、これは君の手の届く範囲とはいえ、取り辛い位置にあつた。なのに何故？」

そう。北澤直也は魔剣を執る必要などない。むしろ彼の性質や技から考えれば、同種の名刀か、そうでなくとも妖刀を取るのが筋だろう。

扱い慣れぬ西洋剣の、しかも魔剣などと言つ忌避すべきモノを手
に取る必要性はない。
だというのに。

「自分には……、これを悪しき剣だとは思えません」

それは本心からの吐露。北澤直也にとって、その発言は紛う事な
き本心だった。

そして、だからこそ御剣 仁は困惑した。

何故この剣を前に、こんな事が言えるのか、と。

「……判った。明日は十時にこちらに来てくれるかな。
今日はもう帰って良い」

どこか遣る瀬無く感じるも、これ以上の追及は溝を深めるだけだ
と判断したのだろう。

一階まで北澤直也を見送った後、御剣 仁はリビングのテーブル
に置かれた魔剣を見やる。

銘を無毀アロンダイトなる湖光。

かの騎士王の聖剣と起源を同じくしながらも、友の兄弟を殺めた
為に魔剣へと染まった、汚れた聖剣の姿があった。

北澤直也が立ち去った後、鮮血の月が空へと浮かぶ。
紅い、血の通う様な月の下、そこに彼らの姿はあった。

「もう終わりか。しかし、こいつら何だったんだ？」

「さて、ね……暁葉。怪我は？」

心配無い、と手を振りながら暁葉と呼ばれた少年は、少女へと向き直る。

恐らくは九歳程だろう。ポニーテールのように後ろに結った長髪は振り向くと同時に風になびく。

見た目を言うならば、至って普通と評価していい。

むしろ外見的に異常なのは、暁葉という少年の身を案じた少女の方だ。

風にたなびく髪は、銀と言うよりも白。

西洋人形めいた顔立ちに、少女の身に付けたゴシッククロリータの服は似合っではいるが、闇に溶け込んでいるせいも、可憐さよりも不気味さが際立つ。

誰が知ろう？ 二次性徴さえ迎えていない彼らが、今まさに数名の紫の騎士達を肉塊に変えたなど。

少年の傍らに転がる騎士は、その身を果実か何かのように寸断され、

少女の傍らに転がる騎士は、その身を潰されてオブジェに変貌した。

そう。彼らは異常。人間の身に余る超上の力の所有者。

少年が抱くは、『直視の魔眼』。その瞳は死を具現化し、不死身の者にさえ死をもたらす。

そして、少女は人間ですらない。

彼女は世界の守護者。世界そのものを護るために星が生み出した、バグフィッシュプログラム。

星との契約が果たされている限り、彼女は真実不死であり、人を相手にするならばまず無敵と言える力を持つ。

そして、彼らと共に行動するもう一人の存在こそが、この場における最悪と言つていい存在だった。

積み上がる屍。無人となった空間を作り上げた悪魔の姿を、鮮血の月光が照らし出す。

炎髪蒼眼。自然では決してあり得ないであろう組み合わせの、しかし美しいとさえ表現できる矛盾の造形によって作られた、先程の少年少女と変わらぬ年の少年を。

彼は『紡ぎ手』。墮天使によってこの世界に呼ばれし、一つの物語の筆者。

先日まではただの一般人に過ぎなかった彼は、己の力を遺憾なく発揮していた。

「ククク……」

口から零れ出る歓喜。手に染まる鮮血を眺めながら、彼は真実笑っていた。

殺人に酔う。殺人に満たされる。

己の世界では良識ゆえに味わう事の出来なかった行為に、彼は今手を出した。

そして彼は　　その背徳の虜にされた。

一目見たならば、それは異常だと激昂するだろう。避けたいと言っだろう。

だがここにそんな良識を持った人間はいない。

黒髪の少年は死を齎す事以外に取り柄は無く、故に殺人を許容し、白髪の少女にとって、少年以外は取るに足らぬ瑣末事なのだから。

そう。だからこそ、彼らは敵対する事無く、共に行動しているのだ。

何故ルシファーは彼らの様な存在を呼んだのか？ その理由は至極簡単なものである。

墮天使は善悪によって『紡ぎ手』を選ばない。

所詮、善悪の価値観などは瑣末事であり、時代と共に移ろうのだから。

だからこそ、墮天使は一つの基準で『紡ぎ手』を選ぶ。

それは『渴望』。

現実への逃避。未知への道。決して成し得ぬ望み。

元の世界では決して叶わぬ願望。それを誰よりも強く抱く者こそが、この世界へと来る資格を得る。

故に。この世界に来るのは『善』のみに非ず。

例え『悪』であろうとも、望みを抱く者ならばその資格を得るに足る。

そうして彼らはやって来た。

この世界で唯一、『正義』を否定する紡ぎ手が。

009 魔導の翼 鮮血の月夜（後書き）

c・m・「過労で死ぬる！！ 第9話の投稿でございます」

京谷「そして最早お馴染み俺参上、再び。完全にレギュラー化したな。

まあいい。直也、お前の出番はもう無いぞ？」

c・m・「ちなみに君がここに居るのは無印ヒロインのキャラがいる癖に空気だからよ」

京谷「まさか……ここに登場する資格とは！！？」

c・m・「ええ。空気キャラに資格が与えられるのよ。

ちなみにSPIRITUAL ARMSのレインシアちゃんを来させるっていうのは却下よ。このコーナーの紅一点はあくまで私。他の女はお呼びじゃねえ」

京谷「必至だな。しかし今回は水玉さんのチームが初登場。ていうかまんま悪役なんですけど？」

c・m・「本人の要望で正義キャラは完全にアウトらしいからね。まあ、あの人たちは主人公キャラとは言えないし、別のパターンとして活躍して貰いましょう」

京谷「……なんか嫌な予感しかないんだが。

それはそうと、御剣さんって、あんな能力持ってたっけ？」

c・m・「あのデバイスの事？ あれはFateのhollowで

ギルつちが士郎君の花札（原典）を奪って、現代版を渡したシーンがあったから、そこから取って来たの。

『後に派生し、流転した物は民に与えられるべき』如何にも王様らしい発言ね」

京谷「成程。つまりあれはギルガメッシュの能力の一つと言ったところか。

まあ、それはさておき、神崎さまからマクスが弱く感じる、と言った感想を頂いたけど、実際どうなの？」

c・m「それね。前回言ったけど、実際の所、スペックだけ見れば直也君が一番弱いだよ。

前回の戦いで空を飛んだヴェノムに手も足も出なかったのが良い証拠。

あくまでも接近戦（魔法や超能力はなし）での最強格であって、御剣さんが来てくれなかったら死んでたわ」

京谷「成程。けど魔法や超能力もあの刀で斬れるんだろ？」

c・m「ええ。だけどやっぱり斬れる量に限界はあるのよ。

直也君の攻略パターンとしては、

- 1・戦闘は確実に遠距離から。近距離では相手にしない。
- 2・遮蔽物や隠れられるところで戦わない。平原ならなおよし。室内はNG。

- 3・出来るだけ長期戦に持ち込む事。

- 4・威力よりも手数で勝負。逃げ場を塞いで弾幕を張れば高確率で倒せる。

以上の事を守れば大丈夫よ」

京谷「いや、倒せるって……不味くね？ 味方じゃないの？」

c・m「知った事ではないわ。言っとくけど、非殺傷設定は解除しないように。」

ひとたび殺し合いになれば手足が千切れても喉笛を噛み千切つて殺しにかかるわよ。殺し合うのではなく確実に行動不能になる選択をなさい。あの子、殺す時は子供でも殺すから」

京谷「バイオレンス過ぎだぜ……」

c・m「ま。この世界ではそこまでしないでしょ。ここは元の作品とは違って優しい世界だからね」

京谷「（その割にバイオレンスだよな……）さて、ここからは読者兼作者さまのお礼に行こうか！」

c・m「そうね。神崎はやて様、Kyoさま、Haggalazさま。水玉様

ご感想、誠にありがとうございます。今後ともよろしく！」

京谷「ようやく温泉か……あれ？ 月村邸は？」

c・m「見所が無いからスキップ。一応行ってはいたけど、ジュエルシードは初日で紫の騎士に持ってかれてるわ」

京谷「……あいつら。仕事速いな」

c・m「できる人たちは違っつてことよ。次回は温泉回！ サービスシーンに過剰な期待はしない様に……」

京谷「覗いた奴はゲイ・バーのママとのデート券をもれなくプレゼントするとの事だ（ホテルの予約あり）。

それでは今日はこの辺りで、またお会いしましょう」

010 海と温泉はサービス回 それが世界の常識(こんなタイトルですまん)

今回はギャグ回です。シリアスを望む方、キャラ崩壊を気にする方は前半を見た後、Uターンすることをお勧めします。

そして最初に謝っておきます。Kyoさま、Hagailanzさま。
マジでごめんなさい。

「龍也くーん！ 準備できた？」

「はい！ 大丈夫ですよー！」

桃子さんに返事を返しつつ、着替え等を入れたバッグを手に提げ、玄関口に立つ。

理由としては今日から全国的な連休に入るため、喫茶翠屋を店員さんに任せ、家族旅行に行く事になったからだ。

「忘れ物は無い？」

「大丈夫ですよ、美由希さん。僕やマクスには、殆ど荷物はありませんから」

今回は単なる家族旅行ではなく、月村邸の皆さんやアリスさんも来る事になっている。

そして玄関口には、僕たち以外のもう一人の少年の姿があった。

「おはよう御座います。皆さん、宜しくお願い致します」

「おはよう直也君。いや、恭也が君を誘ってみたいと言いだした時はびっくりしたが、迷惑ではなかったかい？」

「そのような事は決して。自分の方こそ、せつかくの家族旅行だと言つのに」迷惑では？」

「なあに。なのはの友達も来るんだ。構わないさ」

「あの……出来れば僕達にも紹介して貰えませんか？」

正直、割って入るのは気が引けたが、こちらは面識が無いので尋ねる事にした。

いや、正確にはこちらが一方的に知っていると言った方が正しい

だろう。

こちらに来る前、あの墮天使が真実を告げた時に激昂したのが、目の前の彼だったから。

「失礼。自分は北澤直也と。貴方がたは？」

「僕は神崎龍也と言います、こちらは」

「マクスⅡトレンジアだ」

「レインシアⅡリⅡグランヴァールです」

「わたし、高町なのはです」

これはどうも、と直也さんはこちらに歩み寄り、握手を求めると誰にも聞こえない様な声量で、耳元に囁く。

「君は、こちら側か？」

「……はい」

その言葉に、こちらも同意する。

おそらくは初めから判っていたのだろう。確証は無くとも、僕らは雰囲気でお互いがそうだと判ってしまうのだ。

「仮面の男には気を付けてくれ」

「……もう会いましたよ」

自分でもうんざりとした顔つきになっているのが判る。あの野郎、所構わず現れるな。

「あ、すずかちゃん。アリサちゃん」

「おはよう。なのはちゃん……と、そちらの方は？」

すずかさんがこちらの方を向いて尋ねる。おそらくは直也さんが

原因だろう。

穏やかな、如何にも無害そうな顔つきでお辞儀をする。

「北澤直也と申します。宜しければ、貴女方のお名前を窺っても？」
「月村すずかと言います、直也さん」

良い名前です。と笑いながら、直也さんはアリサさんを見る。自分の方に反応しなかったのか、といった表情だが、その猜疑の念は次の一言で氷解する。

「This is my first time seeing you. I'm...」(お初にお目にかかります。私は、)「
「日本語で大丈夫よ。私はアリサ・バニングス、貴方は、直也で良いのかしら」
「御記憶に預かり、光栄です。ミス・バニングス」
「よろしく、それとアリサで良いわ」

無視されている訳ではないと言う事が判った為だろう。流暢な英語で話しかける直也さんにアリサさんが一礼すると、同じように直也さんも微笑を浮かべながら礼をした。

「なのはが中学に行く時には家庭教師でも頼もうかな？」
「父さん。その前に美由希に勉強を教えて貰った方が良いんじゃないか？」
「恭ちゃん！ あれ位なら私も言えるってば！」

一同が笑いながら、車に乗り込む。
先日行った月村邸には何もなかったし、せめて今日位は平和であつて欲しいが、そう言う訳にはいかないんだろうな……。

さて。一同、車に乗り込んだ訳ではあるが、ここで問題が発生する。

用意した車は四両。それぞれが車に乗り込むも、誰が乗るかによって必然的に車内の空気は変わるものなのだ。

まず一両目。高町夫妻、ならびに美由希となのは。そして神崎龍也の五名である。

が、正直この空間においては、なのはのお嫁さんがどうか、といった発言から神崎龍也の居心地が悪くなり、なのはが顔を真っ赤にした事以外は正常と言える。

二両目。こちらは、月村家のメイドであるファリンとノエル、そして恭也の恋人である月村忍の三人である。

軽自動車の手前、致し方ないと言えばそうだが、恋人がいないことに不満な月村忍が、法定速度を三割増しのスピードで山道を駆け抜けてメイドの一人が目を回した事以外は普通と言えた。

三両目。こちらはアリサ家の運転手である鮫島と、月村すずかにアリサ、そしてレインシアと言うメンバーであり、団欒としつつも一番平和と言える車両である。

そしてラスト。四両目は……。

「そう言えば、君とはまだちゃんと話していなかったな。恭也と呼んでくれ」

「では自分も直也、と。マクスさんは……」

「俺も呼び捨てで良いぜ。堅苦しいのは合わねえんでな」

北澤直也を運転手に、マクス、恭也の三人が肩を揃える究極のデ
ンジャラズゾーン！

例えテロリストがこの車を爆破しに来ようとも、二秒で計画が頓
挫するであろう最悪の面子である！

「ところでよお……直也つつたな。テメエ、出来るだろ？」

「マクスも判るか。俺も道場に来るよう再三誘ってるんだが、上手
く躲かれてな。」

なあ、もし良かったら一試合しないか？ 実はトランクに木刀も
詰め込んできたんだが」

退路を塞ぎ、布石を打つ事で勝利を得る。

この為だけに敢えて恋人と同じ車両に乗らなかったのは秘密であ
る。言えば確実に月村忍は高町恭也を殺しに来る……というより旅
館に着いた先にトランクの中を見られ、用意した木刀で殴られるこ
とになるのだが、それはこの物語には関係ないので割愛する。

「恋人と旅行に来ているのでしょうか？ そのような事ばかりでは見
限られますよ？」

のらりくらりと直也は躲しつつ運転を続ける。

尤も、北澤直也自身、二人の実力を知りたがっていた為、あまり
変わらないのだが。

「つねえなあ……そう言わずに付き合えよ。俺の剣も見せてやる
からよオ……」

「アア……それは是非見たい」

「では自分は審判役で」

極道者ですら逃亡するであろう闘志と圧力を撒き散らしながら、最後尾である車両は山道を駆けていく。

その間、飛びだし注意の看板の前で飛び出そうとしたイノシシがビビって失禁した揚句に森に引き返し、小動物達は泣き叫びながら巣を少しでも離れた場所に移すべく森からの逃亡を図り、鴉共はさつさと殺し合って屍肉を貪らせると集まって来たのは激しく余談である。

そうした一行を、眺める三つの影。

右から、アルフ、フェイト、京谷の順である。

彼らは天宮恭介の指示の下、この連休に合わせて動き、高町家の泊まる旅館を探り、一足先にやって来た。

来たのだが……。

「なんで言い出した当人が居ないんだい？」

「さあ、なんか昨日の夜から姿が見えないんだよ。机の上には『後は任せる』って紙が置いてあったし、訳が判らん」

重苦しい溜息と共に愚痴を零しつつ、京谷はフェイトを見た。

何処までも真面目な彼女らしく、母の為のジュエルシードを必死に探そうとしているのは、傍で見ていた京谷は知っていたが、根を詰め過ぎではないかという心配もまたあった。

「なあフェイト。ちょっと背中向けてくれるか？」

「いいけど……」

背中を向けるフェイトに対し、京谷はゆっくりと手をかざす。痛みは引いているだろうが、一通りの傷を見えない程に回復させる。跡が残っているのは入り辛いだろうという考えからだ。治療を終えて頷くと、もういいぞ、と向き直させる。

「行ってこいよ、温泉。たまには息抜きも必要だしさ。な、アルフ」
言いつつも休ませてあげてくれ、とアイコンタクトを取り、アルフも頷いた。

「そうだね。あの旅館、室内と露天風呂と両方あるみたいだし、連中の目を見計らえばそれなりに休めるんじゃないかい？」

「けど、ジュエルシードを、」
「昼間は俺が動くさ。アルフ、予約はしておくから頼めるか？」

任せといて、と手を振りながら有無を言わず転移するアルフを見届け、京谷は遙か遠い虚空を見据える。

「さて、あの大バカ野郎に天誅を下さねばな」

そう言う京谷の顔は、悪魔の如き笑みを浮かべていた。

さて、高町家御一行が旅館に着いて荷物を置き、露天風呂の更衣室に入ると、一人の女性が先約として着替えていた。

「あ、あなたは！」

「あら、奇遇ね。なのはちゃん」

無論、偶然でもなんでも無く連休に合わせてそれらしい旅館に予約を入れただけなのだが、なのは達がそれを知る筈は無い。

「あれ、なのは知り合い？」

「この前高い所から落ちそうになった所を助けてあげたのよね」

「あ……っん」

確かに嘘はついていない。が、ビル三階分の高さは一般人が助けられる高さかと言えば首を傾げる所ではあった。

「そうですか。どうもありがとうございます。私、なのはの姉の美由希っていいいます」

「美由希さんね。私は宮本千草、千草で良いわ」

そう笑顔で挨拶しつつ、取り敢えず着替える事にしたのだが、そこで宮本千草は硬直する。

確かに自分は胸こそ大きくない物の、学生時代はかなりプロポーションに気を使っていた。

運動部に所属する女子最大の弊害。脂肪に並ぶ最強の敵。

すなわち、筋肉である。

千草はかなり気を使っていた。新体操のコーチに見た目に見えない筋肉の着き方を訊き、食生活に気を使い、身体の肉が固くならないよう一時間以上のマッサージを毎日続けてきた！ だと言つのに！！

「はあ……やっぱり武術ばっかだと肉がついちやうか」

ふざけんな！！ とコメカミにマスクメロンばりの青筋を浮かび上がらせ、ロッカーにコインを入れる事無く鍵を開けた。というか扉ごとぶち抜いた。

「ひ……！！？」

その光景を前に、美由希は顔を青ざめる。初めは理由が判らなかつたが、千草の身体を見て判つたのだらう。

確かに盛り上がらないように苦心してきたとはいえ、やはり限界はある。というか、アスリート顔負けの鍛え方をしていれば誰だつてこうなる。

引き締まっていると言えば聞こえはいいが、チョコレートの板ほどではないものの、割れた腹筋。

合つ服が見つからないと言つほどではないが、普通の女性とは雲泥の広い肩。

腕や足の筋肉は太くはないものの、筋肉のラインが浮かびあがっていた。

「あ、あの……」

「ごめんなさい、驚かせちゃって……」

謝る前に謝られた以上、美由希にはどうする事も出来ない。

今度からもう少し発言に気を付けよう、と考えた美由希だが、現実はいかにも非情なモノ。

彼女の身体はどう控えめに見ても、運動をしているとは言いがたい程、モデル並みの体だったのだから。

さあ読者諸君お待ちかねだ。とくと見るが良い。
なに？ 文字だけでは判らん？ ふざけんな？

バカ野郎！！ 心の目を持って！！ さすれば道は開かれん！！
その腐乱した脳内に焼き付ける！！

引き締まった美しいライン。ふっくらとした大きな胸。
その肉付きは彫刻の様だとも言ってよく、あらゆる芸術家たちが
感嘆の声を漏らすだろう。

そして、ここに居る者が悩ましい下着の姿になった時、これを読
む者は心から思い浮かべるが良い。

赤、黒、白。日常で目にする色ですらこのばかりは神秘的なもの
に見え、ただの布切れですら億の財に匹敵する輝かしいものに映る
だろう。

さあ、楽しみたまえ諸君！！ ここからは台詞付きで未開の地に
招待しよう！！

「良い身体をしてるなあ」
「そうでもないですよ。高町さんこそ、凄いですね」

響く声は高らかに。温泉と言うモノは心を癒すだけでなく、この
気分を高揚させるものなのだ。

さて、それではこれより、喜劇の舞台を開けるとしよう。

「ほう。フンドシとは渋いな」

「しかも赤フンか。縁起も担げそうだな、直也君」

「別段、同性に見られて困る物ではありませんが。多少はご遠慮して頂きたい」

HAHAHAHA！ まんまと騙されおつたな！！ 男共！！

そんな美味しい話がこの世にある筈がなかるうが！！

男の筋肉にときめいた者は感想版に挙手する事だ！ そして己が惨めさに膝を付け！！

血涙を流して絶望するが良いわ！！

「さて、さつさと入るかな」

唯一筋肉の無い二人。ユーノと龍也はそうして脱衣所から温泉へと向かっていった。

遠い何処かで誰かがデスクトップを叩き割ったような音が聞こえた気がするが、多分気のせいだろう。

「ふう。流石に疲れが取れるな」

「そうですね。やはり温泉は良い。しかし士郎さん、何故温泉に小太刀（木刀）を？」

「いやなに。露天風呂と言えば毎年ふらちな輩が出るものでね。去年は恭也と二人で十人ほど叩き潰したんだが、今年は嫌な予感がしてね。」

いま恭也が真剣を持って巡回している所だ。交代で見回る様になっている。

お陰で女将から旅館のタダ券が毎年贈られてくるんだ」

成程、と思いつつ神崎龍也は思う。

この温泉にそういう輩が出たならば、恐らくその者に訪れるのは死、あるのみだろう。この温泉に居る男衆は自分も含め、化物の犇めく魔境と化している。

もし仮に出るとするならば、それは余程の運の無い男が、もしくはそれを知った上で楽園を目指す漢だけだと。

そして、この世に漢は居た。

旅館から数キロ離れた地点。

長髪を風になびかせ、威風堂々と立つ姿は、異性が見たならばすぐさま声をかけるだろう。

……今の彼がやっている事を知らなければの話だが。

「クソが……………！！！！」

何故だ？ どうしてこうなった！！？ と天宮恭介は膝をつき、小型のノートPCを粉々に砕く。

この日の為に、あらゆる努力を惜しまなかった。

地上十センチを百万画素で捉える人工衛星。

バイオマテリアル（生物化学）の英知を結集し、普通の木や石と

何ら見分けのつかず、三六〇度あらゆる方向から撮影可能な高性能多角化カメラ。

どのような壁であろうと透視可能な、鳥類に偽装したカスタムビデオ。

もし特許を取れば年収数兆円は行くであろう技術を『覗き』と言う行為に注ぐその情熱は、世の（変態と言う名の）紳士から称賛と敬意を称えられそうなものだが、やってる事はただの犯罪です。

つーか自重しろ。ドスケベ。

……と、どこかで誰かが突っ込んだような気がするが、過半数の人間はもっとやれ、などとほざいている事だろう。

というか、そっちの方が多数だと天宮恭介はテレパシーを受け取った……様な気がした。

「やはり……機械の目に頼ったのが間違いだった」

そもそもお前の存在が社会的な間違いだと言う事を教えるべきだろう。

だが、天宮恭介は確信する。これは全宇宙の意志なのだ。男共は俺が敢えて白羽の矢を向けられる事を望んでいる、と。

「何故気付かったのか。」

何かに、誰かに頼る事が、俺の心を直に焼き付けるか？
リスク無き勝利に、何の価値があるというのだ？」

そうして反芻するうちに、天宮恭介は強く拳を握りしめていた。
そう。手の皮がむけ、拳から血を流すほどに！！

「そうだ。例え待ち受けるのが地獄の番人であろうとも、身を溶かす硫酸の海であろうとも、そこに見えるモノは輝かしい筈だ！！
駆けなければならぬ。そしてその理想郷に辿りついた時、勝利の拳を振り上げよう！」

己の道は、ここまで来た行程は正しかったと、最後に胸を張って笑えるように！！」

だからこそ、天宮恭介は駆けだした。

待ち受けるのが如何なるチートであろうとも、この身に決して敗北はないと、そう信じるが故に。

「かつて男たちが夢見た地へ、俺は今先んじる！！」

ここに、世界最強のバカが誰か決定した。

「俺A。第一防衛ライン突破。送れ」

「俺B。第二防衛ライン突破不能。ルート からルート に変更する。送れ」

「俺Z。俺A、俺Bの情報を確認、俺Bのルート変更を認める。オバー」

無線機による通信を切り、天宮恭介は森を駆けぬける。

先程の会話は別にふざけているのではなく、影分身によって増やした自分から送られてきた通信である。

分身は総勢七名であり、ABCDEFGHIJというコードネームに分かれていた。

本来ならば分身数を無限に増殖できるのだが、視覚や聴覚の感覚を共有し、それぞれが完全に自立できるスタンドアロンタイプを一瞬で量産するのは、流石の天宮恭介にも限界だったらしい。ちなみに俺Zは本体である天宮恭介である。

Side - 俺A

俺Aは現在、山道を駆けている。高所からの見物は最もセオリーであり、それ故に読まれやすいが、安定したポジションと退路を確保できるという点においてはこれ以上ないスポットである。そして、だからこそ判っていた。

このポジションが、一番読まれ易いのだと言う事も。

「対地雷！ くそ、ハーグ陸戦協定は何処へ行った！！？」

大声で毒づくものの、喰らった以上は仕方ない。恐らく死者を出さないよう設計されているのだろうが、魔法障壁に身を包んだ俺Aには無力……

「これは、対魔術貫通術し、ぎゃあああああああああああ
！！」

薄れゆく意識の中で俺Aは想う。

確かに目には焼き付けられなかった。メイドさんの我が儘ボディも、放送限界を軽く突破する（俺は年上派だが）ロリボディも、武術少女のスレンダーボディも、この瞳には映らなかった。

だが判る。同じ俺たちだからこそ、確信する。

本来は旅館の中を通り抜ける作戦だったのだが、リスクの大きさから断念し、今は魔法で地下を掘り進めながら移動する手段を取っていた。

「もうすぐだ。待ってるよ、皆」

走り抜けるのと同等の速度で地下を掘り進んでいく。

だが俺Bは気付いていなかった。穴を掘る時に最も重要な、ある作業が必要だと言う事を。

「じ、この音は!？」

間違いない。この洞穴が崩れかかっている!!

「なぜ!? 敵の罠か!？」

専門の知識が無い事が仇となったのだろう。洞穴を掘る際は、天井や側面に添え木をするなどといった事を行い、生き埋めになるのを防がなければならないのだ。

混乱した思考の中、脱出を試みようとするが、既に遅い。

なぜなら俺Bは崩れる泥に顔が埋まった。最早呪文を詠唱する事は叶わない。

さらに言えばこの上は男湯。ゴツイ男の裸を見るぐらいなら死んだ方がましである。

“さらば、俺達よ。あとは……たのん”

その言葉を願う間も無く、俺Bは消滅した。

「まさか……俺Aに続き俺Bまでも」

「油断するなよ俺C。幾らなんでもこのペースは異常だ。」

俺Bはともかくとして、俺Aの地雷は確実に人為的な物、周りを注意して行動を！？」

そう言いつつも俺CとDはすぐさま足を止める。何故なら。

「温泉旅行。と言う訳ではなさそうだな……引くならば良し。通るならば」

斬り裂くのみ、と北澤直也は言外に告げる。しかし、そんな事で怯むくらいならそもそも覗きなんざやってはいない！

「「我ら、己が道を進むのみ!!」」

「ならば死ね」

宙に舞う白刃と風斬り音。こと接近戦における最強格の存在は、その一太刀で三人の胴を切断する技を持つ。

だが侮るなかれ。北澤直也が達人なら俺CとDは超人にして変態。エロの力は己の身体能力を最大で千倍に高めるのだ!!

「なにぃ!?!」

驚くのは当然だろう。かつては神速と評され、師である曾祖父でさえ初見では見切れなかった居合の業が、この様なモヤシ体系の男（実際の所、北澤直也や旅館の客が異常な筋肉なだけで体格は普通に躲されるなど。

「何を驚いている。次はこちらから行くぞ!!」
「くッ!」

二名より放たれる魔の弾丸。対飛び道具系の極意である『矢止め』を用いても弾き切れぬ弾幕に北澤直也は逡巡し、やがて意を決したように口を開く。

「あッ!? お嬢さんのスカートが爆風で!!」

「なにに!!?」

無論振り向いた先には誰もいない。

当然フェイクだ。むしろ引つ掛かる方がどうかしている。

そして、から空きになった背中に北澤直也が破魔刀で斬り裂くのも当然と言える。

「き、貴様」

「……死んで脳味噌を洗いなおして来い」

「裏切りやがったな、全世界の男のソウルを!!」

「は?」

何を馬鹿な事を言ってるんだこいつらは、と言っ北澤直也を差し置いて、バカ男二人の呪詛は止まらない。

「例え八十歳のババアであろうとスカートが捲れば振り返るのが男!!」

貴様はたった今、全世界の男の純粋な眼差しを土足で踏みにじったのだ!!」

「……」

呆れて声も出ない。要するに自分は変態だと言いたいのか？

「「畏れるが良い！！ 例え俺達が倒されようと、第二、第三の俺達が、俺たちと同じ志を持つ者が、いつか全世界の女性のスカートを見えそうで見えないレベルのミニスカにし、チラリズムのロマンあふれる突風が一定時間に吹き続ける時代を作る事を、ここに宣言する！！」」

はははははははははは！！ と言う高笑いと共に消えたバカ二人を最後まで見つめつつ、北澤直也は溜め息を零す。

「もはや俺への恨みとか関係ないな、あの野望」

Side - 俺 E

「よくぞ言つた俺C、俺Dよ！！ それでこそ真の漢！！」

残存勢力は本体を含め四名、しかし、ここで敗れたならば、散つて行った者たちの魂は、果たしてどこへ行くと言うのか！？

「行かなければ。多くの俺が無駄死にでなかった事の証明の為に！！」

どこぞのパイロットが聞いたら石どころかバズーカを撃ちこみそんな発言をしつつ、俺Eは駆けていく。

だが、その進路も又、塞がれる。

高町家長男にして御神の剣士。高町恭也によって。

「この先は女湯だ。道を間違えたならすぐ戻れ」

言いつつも両手の小太刀は既に抜いている。少しでも可笑しな真似をすれば、瞬時に刃を奔らせるだろう。

だが。

「そうはいかん。例え、この身が朽ちようと、貴様にだけは負けるわけにはいかんだ！」

全力で駆けだし、魔力で強化された肉体で攻める。

「くッ、この身体の何処にこんな力が!!」

「チートをなめるな!! お前に居たい事は山ほどあんだよシスコン軍曹!!」

彼女持ちで美人姉妹やメイドさんにも慕われてるリア充が!!

貴様に判るか!? モテねえ一人っ子の気持ちが!! お兄ちゃんと呼ばれたい男の渴望が!!

正月には彼女を下さいと神社に祈り、バレンタインデーで義理チョコすら貰えずに自分で買いに行き、祭りや海でリア充が溢れかえる中で一人焼きそばとカレーを食べ続け、クリスマスにはPCの前で二次元とデートをして、初キッスのディスプレイの味が未だに残り、大晦日に一年の敗北人生を振り返る男の気持ちが、リアルハレムの貴様に判ると言うのか!!!!!!

血涙を流し、肺炎で口から血を吐きつつ鬼の形相で迫る俺Eに押しされ、高町恭也は若干引いた。

「あー……ご愁傷様です?」

「判ったか!? モテない男の気持ちが!! ならば通してくれ!

！」

「いや、覗きは犯罪だ」

「ざけんなアあアあア！！！」

一撃一撃が岩を砕く猛攻。それを辛くも受け止める恭也こそ異常だが、さすがに相手が悪い。

地に片膝をつき、小太刀を落としかけるものの、その寸前に後ろから聞こえる、恋人の声に立ちあがる。

自分はここで引けない。もし引いたなら、大切なヒトはどうなるのだ？

「俺は、負けん……！！！」

そう。本来なら勝てぬ相手であろうと、ある条件があれば奇跡は起きる。

それはすなわち、女神の加護。勝利の女神がほほ笑む限り、いかな相手にも負ける事はない。

斬られた身体が崩れていく中で、俺Eは穏やかな顔でほほ笑んだ。

「やはり、リア充は憎らしいな……しかし今わかった。俺に彼女が出来なかったのは、別れを悲しむ者が居ない様にする為だったのだな」

「……いや。嗜好の問題だろう」

「良い所で水差すなアアアア！！ やっぱてめえは敵だリア充ううウウウ！！！」

まともな突っ込みに怨嗟の声を上げつつ、俺Eは跡形もなく消え去った。

「皆、皆が……!!」

「落ち付け、俺F!! 今ここで涙を流すのは容易い!! だが、消えていった俺達の魂は、一体どこに行く!!」

「お前はつらくないのか!! 同じ俺だろう!!?」

「だからこそ、さ……」

進むしかない。止まる事は出来ない。もし一度でも立ち止まったら、俺はもう進めない。

立ち止まってしまえば、ここまでの道のりが嘘になる。多くの俺が遺した想い。

それに報いる為、立ち止まる訳にはいかんだ!!」

「俺G……」

「征くぞ、俺F」

「おう!!」

意気高揚と肩を並べ、突き進む二人。進むべき道はただ一つ。いざ我らが理想郷へ!!

「そうは行かねえ。姫さんがまだ風呂に浸かってる筈なんでな」

ちなみに筈と言うのは確証が無い為である。

「マクス=トレンジア」

「ほう……てめえはあの時京谷と一緒に居た奴か。あいつはどうした?」

「一応キャラの崩壊には気を使ってんだよ」

「それに止められると面倒だしな」

「後半が本音だな……。まあ、引くか行くかで対応が変わるが、ど

「つする??」

「「愚問!!」」

「良い覚悟だ!!」

今のマクスには遊びはない。先手必勝！一撃を以て一人を仕留め、時間差で攻撃を仕掛けてくる敵を逃げ決めて撃破する。

否、撃破する筈だった。

「ぐは……!?!」

「やれやれ。まさか今年も出るとは……お嬢様のお身体が心配だったので付いてきました、これは正解でしたな」

「アンタは……」

「失礼。マクス殿。バニングス家運転手しております、鮫島と申します」

無論マクスはそう言った事が訊きたかった訳ではない。

このマクスにとって重要なのは、この老人がどこから現れたかの一点に尽きるのだ。

が。そんな事は知らねえとばかりに致命傷を受けた俺Fは血反吐を吐く。

「悪いな、俺G……どうやら、ここまで、のッ……かはッ!!」

「喋るな!! 今止血を、!?!」

差し出された手を止められる。己の死期を悟ったのだろう。

俺Fは愁いを帯びた笑みで、口を開く。

まるで、ここから先は聞かなくともいいと言う様に。

「なあ……俺達がやろうとしてる事なんざ、小せえ事だ。

女は男より多く生まれる。一人の男が、本来女に苦勞する事はねえ筈だ。

だが、俺達は何でこんな事をしてる？」

「……戦う為だ。この不平等な、ただイケ面だけの奴らが、世界の女を牛耳っているからだ」

「俺F……」

「だから……どうか伝えて欲しい。イケ面だけがこの世の全てではないと……！」

ブサ面にもこの世界に生きて祝福を受ける権利があるのだと！！
社会からダニを見るような眼を向けられ、ネカフェ難民になろうともオタグッツは死んでも手放さねえと誓えるような、そんな聖人達が笑顔で明日を迎える為に、俺達は止まる訳にはいかねえんだ！！

「……ああ、判ってるさ。キモオタと呼ばれる者たちが堂々と胸を張り、生き抜ける夢を見せる為にも、我々は止まる訳にはいかんだ！！」

「ああ……本当に安心した……」

そうして、俺Fは眠りに就く。その頬には、俺Gが流す涙の雫が照れていた。

まるで流す事の出来なかった涙を、今は流せぬと誓った涙を、代わりに流すかのように。

「俺F……」

僅かに手を握り、誓いを立てる。全世界のブサ面のため、立ち上がる遺志を今まさに俺Gは受け継いだ。

「どうする？ もう後が無いぜ？」

「黙りな、マクス＝トレンジア」

高密度の魔力が溢れる。それは木々が折れるほどの突風となり、地面の木の葉は一瞬で舞い上がる！！

「俺F。俺もすぐ行くぜ。この男共を道連れになあ……！！」

「自爆する気か！？」

思わず身構えようとするが、それでは駄目だと肌で感じ取ったのだろう。

神速の如き速さで駆け、長剣をただ貫くことに専念する。

心臓の鼓動。噴き出す大量の汗。その瞬間にマクスの心に去来したのは何だったのか？

そして、溢れだす光に剣を突き立てると、光は急激に収まって行った。

「まさか、直前に貫くとは……万分の一のタイミング、流石だ。マクス＝トレンジア」

「流石に肝が冷えたがな」

「くそ、この自爆魔法は、浴びた男全てをブサ面にする能力があったと言うのに……」

「これ以上ない位迷惑な自爆ですな。」

して覗き魔どの。貴方は何故破れたと思えますか？」

鮫島の言葉に、俺Gは首をかしげる。この男の言う事が、理解出来ないと言う様に。

「それは、貴方がイケ面だからですよ。過去は不細工だったのかもしれませんが、現状の貴方は女性が振り向く顔です。」

いかに崇高な？ 信念を持つと、所詮貴方には関わりの無い事。それに気付かなかった事が、貴方達の敗因なのです」

そうして、俺Gは消えていく。その顔を絶望に歪めたまま。己の信念が砕けていく音と共に。

Side - 俺Z (要するに本体)

「違う……俺は、おれは!!」

木々の間を駆け抜けながら、俺Z……本体である天宮恭介は葛藤する。

確かに己はイケ面である事を望んだ。

だってそうだろう？ そんなのは当然の願望。ブサイクと言われる者なら男女を問わず望む事である。

しかし。それは違うのではないか？ どんな顔であろうと、胸を張って進む事。

それこそが真に正しい事ではなかったのか？

……俺達は、間違っていたのか？

「違う!!!!!!」

そうだ。俺達は違う。例え間違っていたとしても、ここまで来た過程に嘘はなかった。

思い出せ。同じ志を持った仲間を!!

俺Aは地雷によって爆破されながらも、最後まで仲間が勝利する事を信じていた。

俺Bは生き埋めにされ、助かる道が残されて居ながらも男の裸を見ないと誓い、より苦しい選択を自らに課した。

俺C、Dはロマンを追求し、その野望を高らかに叫んだ。

俺Fは全てのブサ面への救済の心を忘れず、俺Gはその遺志を継ぎ、自爆という決断を選んだ。

彼らは皆一人の漢として、英雄としての本懐を遂げた。だというのに、自分はこんな所で諦めるのか？

「否！！！！」

そうだ。俺達は進むと決めた。だから俺は行かなくてはいけない。同胞の血と屍を越えて進む事。それこそが自分の信じる道だと言う様に。

そう。だからこそ、俺はこの最大の敵を倒さなければならぬ。

「やはり、貴様だったか……氷上京谷」

「ま。気付かない筈はないよな。他は偶然として、最初の地雷はやりすぎた。

一応警告のつもりだったんだが、諦めが悪すぎだ。一般人を装って旅館の客に情報をリードしていなければ、だれか一人は突破されてたかもな」

「衛星やビデオも貴様が？」

「当然だろう。お前がアニメの温泉回のサービスシーンを限定保存したDVDを引出しから見つけ出した時点でこうなる事は判ってたしな」

「まさか……」

「引け。今なら人質（DVD）は返してやる」

本来なら悪くない取引だ。いかに温泉が魅力的とはいえ、過去十年分（90年代〜03年まで）の温泉回と海のサービスシーンを厳選し、三百時間かけて編集したDVDが人質？ に取られているのだ。

普段ならば、ここは引いて体勢を立て直すところだろう。

そう……普段ならば。

「それだけは……出来ない」

「ほう？」

「もしここで俺が引けば、遣された想いはどうなる？」

散って行ったAの信念は、Bの希望は、C・Dの野望は、Eの叫びは、Fの求道は、Gの絶望は、彼らの魂は何処に行く？

だから……俺は止まる訳には行かないんだ」

「良い覚悟だ」

そうして、氷上京谷はディスクを叩き割る。

決戦のゴングは、ここに鳴り響いた。

そこは夢か幻か。天宮恭介は、薄れゆく景色の中でそれを見た。男の望むパラíso。果てなき世界の中にある、全て遠き理想郷。

そこには何もかもがある様に見えた。

もしかしたら自分は、今見ている景色とは別の場所に居るのかも
しれない。

けれど、それでもよかった。

この道は、この行程は間違いではないと。

今、胸を張って言えるのだから。

……なんて現実には甘くはない。

氷上京谷、以下マクスや直也と言ったチート連合軍に袋叩きにさ
れ、街頭に高く吊るされた彼は三途の川の近辺で地獄すぎる現実か
ら遠のく為に、妄想の世界に逃げ込んでいるだけである。

……尤も、閻魔でさえこっちくんなど匙を投げるこの男が地獄に
行く筈もなく。

結局、三途の川をターンして戻って来やがったのは語るまでもな
い話である。

c・m・「サービス回終了!! 第10話!! いやいよ二ケタに突入だ!!」

京谷「ふざけんな!! まんまと騙されたわ!!」

c・m・「ふつ……この私がそんな在り来たりな選択をするとも思ったの？」

良い事。真のSS作家とは読者の斜め上空を大気圏突入する位かつ飛ばすのが基本よ」

京谷「限度があるわ!! 良い身体してると思ったら直也かよ!!」

c・m・「しかも禪。渋いわ。」

ちなみに白はトランクスで黒はボクサーパンツよ」

京谷「知りたくもねえ情報ありがとよ!! つか本編全然進んでねえ!!」

c・m・「それは次回に持ち越し。今回はあくまでギャグよ。」

と、いうことで本当は前回公開する予定だったボツシーンを、ギャグと言う理由で合わせて公開するわ」

京谷「ボツ? それって前回のシナリオの?」

c・m・「ええ。本当はボツにせず、そのまま投稿する予定だったんだけど、読み返したらあまりにギリギリだったから止めたわ」

京谷「成程。それでどうせならギャグ回だし良いかって乗り出すことにしたのか」

C・M・「そう言う事。それではどうぞ!」

x x x

御剣 仁が北澤直也にデバイスを渡すシーンです。

「これは？」

手渡されたのは、翼を模った『銀の指輪』だ。サイズが合うのか不安になったが、何とか薬指には入った。

「君はヘルメスの靴を知っているかな? 説明中略」

「説明中略 しかし、良いのですか? こんな物を自分に」

「構わんよ。私には原典がある。説明中略」

それに、君とはこれから長い付き合いになるのね」

言われるがままに身につけ、次の指示を待つ。

『Please set up a password.(パスワードを設定してください)』

「成程。確かに所有権を君に手渡した際に移したが、情報も初期化されている訳か。」

まあ問題あるまい。好きなパスワードを入力したまえ」

好きなパスワード、と言われ、北澤直也は下あごに手を当てる。
必要以上に長すぎるのもどうかと思うが、下手に短いと漏洩した
際が事だ。

「なに、気にする事はない。デバイスと言っても、それは練習機の
様なものでね。」

飛行等のユニットと、気圧変化や風圧防護の為の簡易バリアジャ
ケット位しか装備できん。あくまでも初心者用の入門キットだと思
ってくれば良い」

ならば気兼ねなく、と北澤直也は思うままに口にする。

「Let's jump together.
Until the die that death tear
s us up」

『The password was entered. (パスワ
ードの入力を確認)』

Thank you for your consideration.
ion. Master)よろしくお願いします。マスター)』

「共に空を駆けよう。死が引き裂くその日まで」か……。随分と
情熱的だな」

「ええ。これから、長い付き合いになりそうな気がしたので」

互いに顔を見合わせつつ、笑い合う。

そうだ。共に駆けていこう。互いの信じる道を目指して

x x x

c・m・「……と。いう感じだった訳よ」

京谷「思いつきりBLじゃねえか!! 発言がギリギリ過ぎんぞ!」

c・m・「だから没にしたのよ。

実際、直也君って合法シヨタだし、流石に危険すぎるからね。
Hagailazさま。マジでごめんなさい」

京谷「ギャグ回だから言えるボツシーンの恐ろしさ……。というかうちの作者も含め、今回は酷い……」

c・m・「ついやってしまったのよ……乗りで。Kyoさま。本当にごめんなさい」

京谷「もうやりませんって言わねえのが怖いな……。さて、そろそろ読者さまのお礼に行こうか!」

c・m・「ええ。神崎はやて様、Kyoさま、Hagailazさま。水玉様。ご感想を頂き誠にありがとうございます。今後ともよろしくお願いします」

京谷「それでは今日はこの辺りで。アデュー!」

天宮恭介が旅館の外に高く吊るされている頃、僕は旅館を歩いて
いた。

別段、何かしようと思っていた訳ではない。ただ単にこれからの
事を考えていただけだ。

「どうするか……」

いまこの旅館には多くの関係者が集まっているだろう。先程マク
スが恭介さんをつまえたと言う話をしてきたので、それは間違いな
い。

尤も、それに関しては危機感と言うよりも落胆の方が大きかった
のが事実だが。

本当に何をしたかったんだ？ あの人は……。

しかも尋問しようにも夢の世界に旅立っているらしく、明日の朝
まで放置する事にしたらしい。

紫の騎士の事など、訊きたい事は山ほどあると言つのに、だ。
まあ考えていても仕方ないな、と。縁側の角を曲った所で、

「あ。龍也君、これからお風呂？」

一瞬、思考が空白になる。

おそらくはお風呂に入って来たばかりなのだろう。微かに濡れる
下ろした髪から、うっすらとシャンプーの香りが漂う。

「あ……」

「どうしたの？」

「いや……なんでもないよ」

思わず目を背ける。まさか見惚れていたなんて夢にも言えない。
ああクソ。こんな事だからマクスにバカにされるって言うのに…
…。

「うーんとね。多分その子はなのはちゃんに見惚れてたんじゃない
?」

そんな言葉が、目の前から聞こえてきた。

「えっと、貴女は……」

「宮本千草よ。貴方は、龍也君で良いのかしら?」

女性……千草さんの言葉に頷く。そうだ、確かこの人は。

「その節は、ありがとうございました」

「いいのよ。私が助けなくても貴方は飛んで行ったでしょうし。

やっぱり男の子なら大好きな女の子は自分で護らないとね」

「そ、そうなの!?!」

「ちよっ……!?!」

いきなり何を言い出すんだこの御婦人は……!

というか、なのははこっちを驚いた顔で思いつきり見てるし、あ
あもっ!?!

「か、からかわないで下さい」

声がいっきりに裏返ってしまったが、これ以上弄るのは拙いと思
つてくれたのだろう。

ごめん、ごめんと片手でお辞儀をしながら謝ってきた。

「ちょっとおふざけが過ぎちゃったわね。」

けれど、年長者からアドバイスをしておくわ。老婆心と言っても良いけど。

自分が信じる事を突き進む中で、迷う事もある。それが正しいのかどうかって……。

皆同じだけど、躓く場所は違う。人に言われた時、自分で気付いた時、何かにぶつかった時。その何処かで人は迷う。そんな時は、どうする？」

その問いは自分ではなく、なのはに向けたものなのだろう。

千草さんの瞳は僕ではなく、なのはを捉えていたから。

「えっと……判らないです」

答えに悩みつつも、誰と目を合わせる事も無く、なのはは下を向く。

大抵こういう動作を取る人間と言うのは、悩みを抱いた時の対応も決まってくる。

「そっか。なのはちゃんは良い子だから、一人で抱え込んだりもかもね」

その答えは、正しいのだろう。自分も含め、なのはの過去を知っている以上は当然ともいえるが。

「そんな真面目なのはちゃんだけど、龍也君はどうしたい？」

「多分、誰かに相談したりすると思います……内容によりますけど」

恋愛相談なんかは普通しないしね。特に男子は。

「それも正解の一つ、かな？」

多分なのはちゃんにはそれが一番良いのかもしれない。けど」

「けど？」

「他の人の言葉を鵜呑みにするのだけは駄目。参考に意見を聞いた
り、相談するのは良い事だけど、流されちゃう事が一番ダメなの。

勿論、頑固すぎるのも駄目なのだけど。だから、ね」

そうして千草さんは、なのはと僕の頭の上に手をのせる。姉や母
親と言うよりも、学校の先生のように。

「しっかりと、自分が何をしたいのか？ 何を信じるのかを
考えて。

無駄な事なんて、何も無いんだから」

そうして、千草さんはにこやかな笑みで立ち去って行く。その姿
は、本当に先生みたいだった。

「あれ？ なのは、どうしたの？」

「え、ううん。何でもないよ」

千草さんが離れに向かった後、アリサさん達に遭遇した。恐らく
は旅館を探索していたのだろう。横にはさすがさんもいた。

「なんかぎこちないけど……まさか、龍也！ あんたなのはに何か
したんじゃないでしょうね！」

「してない、してないってば!!　というか、何で僕が出てくるんだよ!？」

それ以前にどうしてそう目の敵にするんだよ!!

「ちょっと来なさい!　なのは、こいつちょっと借りてくわよ!」「え!？」

驚きつばなしのなのはの返答を待つことなく、ずるずると引き摺られていく。

おそらくは縁側の一角だろう。丁度なのは達の死角になる場所に着くと、手を離してくれた。

「なんでそう目の敵にするんだよ」

「言いたくないけど、あんたが来てからなのはがおかしいのよ。最近妙にそわそわしてるし、私達にも何か隠してる。

あんた、何か知ってるでしょ?」

「いや、別に、」

「とぼけないで!」

声を押し殺している為か、アリサさんの叫びはそう大きくなかった。けど、だからといって怒っていない訳じゃない。

僕の目の前には、きつく歯を噛み締めているアリサさんが居たから。

「だって、あんたが来てから、なのはがおかしいのは判ってた……悩みなんて誰だってあるし、言い出せない事なら仕方ないって思う。けど、それでも心配なの。なのはは　私の友達だから」

それはアリサさんにとっての本心で、決してなのはの前では言え

ない事なんだろう。

そして、少しばかり自分が嫌になった。面倒そうな対応をして、アリサさんの気持ちも考えなかった事に。

その原因の一端は、確かに自分にもあったのに。

「ごめん。僕も、なのはの悩み事に関わってる。

今はまだ言えないけど、全部終わったら答えるから。だから、その時なのはがどんななのでも、受け止めてあげて欲しい」

それだけが願いだという気持ちを込めて、僕は呟いた。

「……判ったわよ。少なくとも、あんたがなのはに嫌がりそうな事はしないって事は確信できたし、私なのはを拒むなんて、有り得ない事だもの。

だから……待ってるわ」

ありがとう、と言いかけた所で、指を指された。これだけは言うておく、とでもいう様に。

「なのはが怪我したら許さないからね」

「ああ……判ってる」

言われるまでもない。自分がここに居るのは、ただその為だけなんだから。

S i d e - C h i g u s a M i y a m o t o

なのはちゃん達に軽い助言をした後、曲り廊下でアルフと出会う

た。

恐らくはお風呂上がりなのだろう。傍に居るフェイトちゃんも、ほんのりと顔を赤らめていた。

「奇遇ね。どうだった？　ここの温泉」

「悪くないね。けど、何だっただの子達に肩入れするんだい？　あんたはこっち側だろ？」

さっきの話を聞いていたのか、微かに警戒を見せるアルフに肩を竦める。まったく、どうしてこう極端なのか。

「私は確かに貴女達を手伝うけど、誰かと仲良くなる事はいけない事じゃないでしょう？」

話し合う事は大切よ」

「優しくして貰ってる人たちの所で、ぬくぬくと暮らしているガキんちよに、何が判るって言うんだい！」

それは、誰よりも近くで主人を見てきたから言える事なんだろう。その苦しみを、受け入れて貰えない悲しみを、誰よりも近くで知っているから、彼女はこうして私に怒っている。だけ。

「食わず嫌いは駄目よ。誰だっただ辛い事はあるし、悲しい思いをしてる子だっている。

それに、そういう幸せは誰だっただ欲しいものよ」

受け入れて欲しい。優しくして欲しい。

暖かい陽だまりで過ごす事は、決して甘やかされている訳じゃない。誰だっただ、そうして欲しいと、いつか自分がそうしたいと思う事だから。

「陽だまりで暮らす事は、罪なんかじゃないわ」

「けど、それが出来ない奴は、どうすりゃ良いのさ!？」

「そうね……」

そうして、私は二人を抱きしめる。優しく、出来るだけゆっくりと。

「なら、私が受け入れてあげる。もし迷惑でないのなら、私が貴女達のお姉さんになってあげるわ。」

それで、良いかしら？」

「なッ!？」

「え!？」

あー……。やっぱり驚かせちゃったか。

ひょっとして私は大失敗をしてしまったかもしれない。なのはちやんの時といい、年長者ぶりすぎた。

「その………会つてすぐの奴が、いきなりさ」

「うん。わたしも………ちよっと」

まあ、それが当然よね。

「ごめんね。困らせちゃって。」

でもそうね。多分、貴女はともかく、フェイトちゃんのお穴は私じや完全には埋められない。フェイトちゃんに必要なのはお姉さんじやなくて、もつと深い所まで自分を受け止めてくれる人だもの」

「深い、ところ？」

「ええ。まだ詳しい事は聞いてないから判らないけど、貴女は一途

な分、他のモノが中々目に入らないんだと思うの。

だから、もし貴女の目に他の物を映らせようとするなら、それ以上の物じゃないといけないから」

今はまだ判らないけれど、フェイトちゃんの中で大きくなる存在は、いつかきつと見つかると思う。たとえば……

「あれ？ 京谷、どうしたんだい？」

アルフの言葉に、唐突に振り返る。そういえばこの子、以前なのはちゃん達と一緒に居た男性と戦ってたっけ。

「いや、恭介を見つけたんで取り敢えず袋叩きにしてきた。

まったく、こつちの手を煩わせるなど言うのに……あれ？ たしか貴女は、」

「宮本千草よ、貴方は京谷君で良いのかしら？」

「ええ。そう言えば自己紹介がまだだったっけ」

「そうだったね。私はアルフで、この子がフェイト。私のご主人さまさ。」

それでこつちが京谷ね」

「アルフ。あのバカが抜けてるぞ。まあ良いけど、あと一人、天宮恭介って言うのが居る。」

一応、ジュエルシードって言う宝石を集めてるんだけど、説明した方が良いか？」

「ええ。お願いできる？」

無駄な会話になりそうだったけど、一応訊いておく。

ジュエルシードの事、フェイトちゃんとアルフの事。そして京谷君たちの身の上の事など様々だったが……。

「紫の騎士？」

「ああ。フェイトの母親がそいつらと手を組んでるらしい。

なあアルフ、俺はそいつらの説明は受けてないんだけど、詳しい事は判るか？」

「いいや。あたしもあいつらの事は知らない。

ただ、かなり前からフェイトの母親はあいつらと行動してたみたいだね。何か目的があるみたいなんだけど……」

「判らず仕舞い、か……。まあそっちは考えても仕方ないし、ジュエルシードを探そうか」

そうね、と同意した所で、唐突に声をかけられる。見た所息を切らしているようだけど、この男性は確か……。

「ふう……やつと抜け出せたな。

しかし捕縛結界にプラスしてグレイプニルを使うとかやり過ぎだろう。身動きが全く取れなかったぞ」

ちなみにグレイプニルとは北欧神話において魔狼フェンリルを繋ぎ止める際に使われた、決して切れる事の無い紐の事である。

「お前……化物か？」

「京谷に言われたくはないな。さて、ジュエルシードを探しに……。と。たしか貴女は」

「宮本千草よ。貴方の事は聞いてるわ。恭介さんで良いかしら？」

「ええ。それでは自己紹介も済みましたし、ジュエルシードを探しますか」

そうして私達は各々歩き出す。何処か、煮え切らない何かを抱えながら。

それが不安だと言う事を、今は気付かないままで。

S i d e - o u t

宮本千草達が旅館の周囲を探索していた頃、時を同じくマクスⅡ
トレンジアも館内を探索していた。

無論、何の用もないままに闇雲に探索などしない。基本的に戦闘
や粗野な言葉遣いが目立つ彼だが、元は頭脳派な人間なのだ。

彼が館内を探索している理由は二つ。一つは捕まえた筈の男が逃
亡を企てた為、その追跡を行う事。そしてもう一つは、

“嫌な予感がするぜ、今回はよ”

本来なら勘だけでは動くべきではないのだが、今回は別だ。

肌に絡みつく気配。まだ自分の知らない何者かが、この旅館には
居るといふ確信はあった。尤も、それを立証する為の確証もないの
だが。

“ともあれ、皆さんの周囲だけでも見て回んねえとな”

と、そんな事を考えていた所で。

「あら？ どうしたんですか、マクスさん」

「姫さんか」

偶然と言う訳ではないだろう。先程までの落ち着いてたレインシ
アの表情は、今は何処かそわそわした物になっている。

「ちょっとばかり調べ事をな。それで、偶然つぼく探し出して何がしたいんだ」

「バレちゃいましたか……あの、もしよろしければ、少し付き合っ
て頂けませんか？」

その発言に、マクスは少しばかり考える。現状を鑑みるならば最
優先にすべきは旅館に危機が無いかどうかの確認だ。

しかし、もし何らかの異常があればここにいる人間が把握しても
良い。

マクスも含め、この旅館に集っている人間は鼻が利くのだから。

「いいぜ。姫さんの要件が終わった後でも出来るしな」

“それに、姫さんを護る事がそもそも見回りの目的だったしな”

そんな事を思いながら、レインシアに促されるままにマクスは付
いていく。

手を引く彼女は子供のような笑顔で 事実子供なのだが マ
クスを見ていた。

“たまには悪くねえな”

どこか穏やかな面持ちで付いていくマクス。しかし、彼は目的地
にてその足を完全に止める。

いや、止めると言うよりも逃げるが正しいだろう。マクスの目の
前ののれんには、『男』や『女』といった文字は無く、代わりにと
ある表札がかかっていた。

『混浴（ただし、両者同意に限る）』と。

全力で振り返る。流石にこれは拙いと考えるマクスではあったが、レインシアは元々手を引いている為、意味はない。

「どうしました？」

「いや、姫さん。あんたそういう性格じゃねえだろ？」

彼の知る限り、レインシアはもう少し控えめな人物であった筈である。まさか偽物か？と疑うマクスであったが、仕草などは何処からどう見てもレインシアそのものであった。

「良いんです、今日は……今日位は、付き合ってもらえませんか？」

確かに彼女が自分から言い出す事は少ないだろう。基本的には控えめな女性なのだし、無理難題でない限りは訊いてやっても良いという考えはマクスにもある。しかし。

「どうした？ 急に」

そう訊かずにいらなかったのは、彼女の態度によるところが大きい。

レインシアは俯いたまま、マクスの背に額を付け、何も話さなっていた。

やがて幾許かの時が経ち、マクスは肩を竦める。

「判ったよ……」

ここでいつまでも立ち往生をしているよりも、早く要件を終わらせた方が良く考えたのだろう。

取り敢えずは温泉へと入り 無論、着替えは見ていない 背

中合わせに湯につかる。

「なあ……なんだってこんな事したんだ？」

その疑問は唐突に。レインシアの気が一番緩んでいる時を狙ってのものだろう。

微かに身を強張らせ、彼女はマクスの背に体重を乗せた。

「……マクスさんと楽しみたかったというのもあります。

けど、本当は不安だったのかもしれない」

何が、と問うのは野暮と言う物だろう。今の彼女は一言一言を振り絞っているのだ。ここで割って入るべきではない。

「私は……ずっと助けられてばかりです。この世界に来るまでに貴方に助けられ、国も救って貰って、私の我が儘でお城に住んで貰って、満足に御持て成しも出来ないまま、ここに来る事になりました。けど、こつも思っただんです。この世界でなら、マクスさんの為に何か出来るんじゃないかって。

なのに、私は何も出来なかった。デバイスという力を手に入れても、本来の力は使えなくなっていました。多分、元の年齢に戻るまでは使えないでしょう。

ずっとずっと……私はマクスさんに何も返せていない。

それが　　何よりも怖い」

そう。それこそがレインシアが一番恐れている事。渡り鳥のように遠くへと飛び立つ存在を、自分が引きとめる事は出来ない。

故に何か出来ないだろうかと探し求める。自分が目を向けられない日が来る事を恐れながら、唯一つの想いを胸に抱いて。

「安心しな。あの野郎がこっちに来ている以上、俺が動く事は有り得ねえ。」

姫さんが傍に居て欲しいってんなら、居てやるさ」

そう言いながら笑うマクスに対し、レインシアの表情は沈鬱なままだった。

マクスとレインシアが温泉へと入る頃、日差しは既に傾き、茜色の空を映していた。

「良い景色だな」

《Yes》

少しの眩きに、デバイスが相槌を打つ。基本的に旅館の周りは宿泊客用にある程度は整備されているものの、一歩離れば完全には森の中へと入る。

北澤直也が今こうしているのも、デバイスの練習に来た為だ。

「いいで、良いか？」

《Yes、Let's prepare（ええ、準備して下さい）

》

首に掛けられたアクセサリを手に、謳う様に呪文を紡ぐ。

「Let's jump together. Until the
e die that death us up.

(共に空を駆けよう。死が引き裂くその日まで)

現れるのは銀の翼。あくまでも手の平に乗る程のサイズのそれは、彼の履く軍靴の側面へと装着された。

そうして北澤直也は、意識を集中する。

本来、ある程度の才能のある者は意識をせずとも基礎的な魔法は成功する。

これは極端な人物を例に挙げるが、高町なのはなどは念話を一瞬で成功させ、さらには数日のうちに遠距離砲撃、飛行術式、封印作業をその身に収めている。

だが、魔導に身を置く者であれば、それが如何に異常なのかが判るだろう。

魔法とは一種のプログラムだ。自然摂理や物理作用をプログラム化し、それを任意に書き換え、書き加えたり消去したりすることで、作用に変える事。

つまり魔法とは一種の学問であり、意識をする事無くこなせるというのは、説明を受けた者からすれば匙を投げたくなるようなものである。

無論、北澤直也もそれは変わらない。

才能がある者が一瞬で開花しようとも、才能が無い者にとっては日々の積み重ねがモノを言う。

そして、才能の有る無しで言えば北澤直也はお世辞にも才能があるとは言えなかった。

それは別段、頭が悪いという訳ではない。

元より彼はK大学の医学部に上位の成績で合格しているのだ。当然、五教科の中に入る数学の成績も良いし、応用力に乏しい訳ではない。

だが。

「やはり上手く行かんか」

“御剣さん曰く、たとえ空戦適性が無くとも使いこなせるということだったが……”

流石にここ数日の殆どの時間を使っても身体を浮かせることに精一杯だった以上、自分に才能が無いのは嫌でも判る。

本来なら機能として付いている簡易バリアジャケットも、装備出来ていないのだから。

「何が問題だ？ 計算式や術式の構築は完璧……の筈。」

魔力に関しても万人が使えるよう設定されている以上、Eランクでも問題は、」

《I understand. (あ、判りました)》

「何？」

ここ数日練習しながらも成果が上がらない事に、首を傾げるような口調だったデバイスが唐突に口を開く。

《In short, an image is inadequate. (つまり、イメージ不足なんですよ)》

Without a strong and concrete image. (もつと強固で具体的なイメージが無いと)》

その後、北澤直也はデバイスの説明を簡潔に纏めることにした。確かに彼は知識量や演算能力に関しては問題なく、一級品と言えるが、肝心のイメージを行う部分でどうしても躓いてしまうと言う事らしい。

例えば空を飛ぶ魔法 彼が使いたいのもこれ を使うとする。しかし、その魔法を使うに当たって、『人は空を飛べない』という意識が北澤直也の中にあり、それが結果として術式そのものを崩

壊させてしまおうらしい。

どんなに優れた知識や技術であろうとも、それを支える基盤が無ければ始まらない。

それは皮肉とさえ言える事だろう。魔を断つ剣を持ち、人間には到底出来ないであろう動きを己の研鑽のみで達成する人間が、万人に使えるものを扱えないと言うのだから。

「最悪だな……」

確固たる現実。築き上げてきた良識。それが己の中にある物ほど、魔法を行使する事は難しくなる。

高町なのはが魔法を苦もなく成功させたのも、子供らしい感受性の高さが幸いしたのだろう。

尤も、その理論は北澤直也に魔導の壁の高さを見せつける結果になったのだが。

そうして、夜が来た。

栈橋の上、フェイトがジュエルシードを発見。意図的な覚醒の後、封印作業に移る。

ここまでは良い。ここまでは完璧だった。問題があるとすれば二つ。

一つは各班に分担しての搜索であったため、フェイトの横には京谷とアルフしかいなかった事。

そしてもう一つ。高町なのは達が来た為に、ジュエルシードが覚醒したままになっていた事。

「来たか……」

だが、彼らはその重要性に気付いていない。気付いていたとしても目の前の事態の方が脅威だと感じていたのだろう。

ジュエルシードを手にすること。両者にとって、それこそが最も重要なことから。

「マクスは居ないのか？ 旅館には来ている筈だ。さっさとあいつを出せ。」

お前達じゃ役不足だぞ」

そう言外に言い放つ氷上京谷であったが、何も貶めているのではない。

事実として自分に拮抗できるのは現状の戦力ではマクスのみであり、他が相手では早く決着が着きすぎてしまう。

それでは意味が無いのだ。この旅館内に潜む、自分達の知らない勢力を引き摺りだすには。

「君の相手は僕だ」

そう言い、神崎龍也はカードデッキを構える。

「変身！」

かつて戦った時以来の装束。本格的な戦闘は最初の時のみであるものの、問題ないと判断する。

証を立てる、胸に誓え、ただ一人の少女を護り抜くと、彼女の傍に立つ者として。

「成程。正に正義のヒーローだ。」

しかし判っているか？ その配役になるには、その信念と同等の力が必要だと言う事を」

瞬間、空中に無数の石柱が顕現する。

“ あれは……マクスの時の ”

規模や総量は前回の時とは比べるまでもない程に少ない。恐らくは結界の担当が居ない為、必要最低限に落としたのだろう。尤も、相手からしてみれば侮辱以外の何物ではないが。

「……いいんだな。それで」

だが、神崎龍也はそれで良いと考えた。油断をしてくれると言っ
ならば結構。

元よりこの身が果たすのは少女の護衛であって、自身の勝利ではないのだから。

そうして二人は駆けた。その想いを、一度として口にしないまま
で。

神崎龍也と氷上京谷が戦闘を開始した時、二人の魔法少女もまた、
空を駆けた。

「ねえお願い。少し、話を聞いて！」

「貴女がロストロギアの欠片……ジュエルシードを集めている限り、

わたし達はそれを賭ける敵同士でしかない」

そう言いながら、フェイトはバルディッシュを静かに向ける。ここから先は杖で語りたいと言う様に。

「違う！ 敵とか味方とかじゃなくて、ちゃんと話し合いたいのに！」

「それは、無駄な事」

「無駄じゃない！！！」

そう。決して無駄ではない。かつてなのはそう教わった。信じる事を成せと、無駄な事は何もないのだと、そう教えた人がいるから。

「だから、色んな事を教えて欲しい！ わたしは高町なのは！ 貴

女の名前は？」

「フェイト・テストロッサ」

フェイトは短く、だがしっかりと返した。彼女もまた知っている。自分は一途であるが故に、周りが見えないと。それを否定出来なかった自分が居る事を、誰よりも理解しているが故に。

「フェイトちゃん……だね。わたしは色んな事が知りたいの。」

わたしは、龍也君達がやってきて、ユーノ君ていう、いま貴女の隣に居た狼さんと戦っている男の子に出会って、最初はお手伝いのつもりだったけど、自分の周りの人や、自分の暮らしている街が傷付くのが嫌で、いまは自分の意志で、ジュエルシードを集めてる！」

それだけが全てではない。もっと多くを言う事も出来る。だが、自分だけが話すだけでは駄目だ。

自分が話して、相手の事を訊いて、そうしてお互いを判り合いた

いと思つてゐるから。

「ぶつかり合う事は、仕方ないのかもしれない。けど、なにも判らないまま、傷つけ合うのは嫌だから！！ 訊かせて！ 貴女の事を！！」

そうして、なのはは駆けだす。杖ではなく手を伸ばして。もっと判り合いたいと、そう願うが故に。

そして、アルフも又その光景を見ていた。戦おうとする自分の主に、手を伸ばす少女を。

それを見たとき、声を上げて叫びたかった。

そんな優しくしてくれる人たちに囲まれている奴に、何かを伝える必要はないと。

けれど聞いてしまった。

陽だまりに生きる事は、罪ではないと。

誰もがそれを望むと言う事を。

だからこそ、彼女は自分の課せられた役割に徹する。一人の使い魔として、この小動物を止める事を。

そして、光の戦いがあるならばその逆も然り。

燦然と輝く月夜の下、紫の騎士は窮地に身を置いていた。

“くそ…… B班と連絡が着かなくなっていたのはこういう事か！！”

あの日。新都で北澤直也からジュエルシードを受け取った少女は、兜の下の顔を強張らせる。

二つのジュエルシードの確認。一つは現在フェイトが交戦中である為に差し置き、残る一つを確保する事に専念した。

だが、ここに来て誤算があった。B班の消息がつかめない為に自分一人で確認し、その後応援を呼ぶ手筈になっていた。

だが、ここに来て連絡が着かない。今回は勢力が未知数であると断定し、応援は少数に留めたのが災いした。

“おそらく……彼らは来ない”

発見されたB班のメンバーの死に方は凄惨を極めた。

ある者は全身を寸断され、ある者は全身を飛沫になるまで潰された。

だが、最も悲惨なのはその二つとは別の死に方をした者だ。

とび出した眼球、破裂した内臓。それだけですら想像を絶すると言つのに、彼らはそれ以上の苦痛を味わった。

誰がその痛みを想像できよう 彼らは、全身の血管を破裂させられて死んだのだ。

「どうしたどうしたア！！ 逃げ廻るだけじゃ殺せねエぞ！！」

「この、悪魔のような少年に。」

“出来れば使いたくはなかったが”

295

子供を傷つけるといふ行為に気は乗らない物の、防戦一方では埒が明かない。

加えて、目の前の相手は手加減が可能な存在ではないと判断したのだらう。弓型のアームドデバイス『ミュラン』を構え、弓を引く。

瞬間、虚空より出現した矢は弾雨となって、炎髪蒼眼の少年へと迫る。

“設定は非殺傷。万が一にも傷を負う事はない。今はジュエルシードを確保して撤退を”

そう考えていたが故に、彼女は放たれた筈の矢が、自分に跳ね返った事に困惑した。

“なッ!?”

冗談にも程がある。射出された矢の総数二百。威力こそ通常時より劣るものの、決して躲すことも、ましてやその全てを跳ね返す事など不可能な筈である。

“ちい”

射出された矢の軌道を変更。ジュエルシードは惜しいが、今は撤退した方が身のためだ。

尤も、それを赦すほど目の前の相手は優しくはなかったが。

「つねねエなア。もう少し楽しんできなよオ!!」

そう言いながら、少年は河原の小石を蹴り飛ばす。

バリアジャケットを着ている以上、その攻撃が通る筈もなく、事

実それは通らなかつた。
だが。

“まるで、散弾銃”

明らかに人間の脚力では表現できない暴力。
本来なら有り得ない力を前に、少女は思わず目を見張る。

「さてここで問題です。私は果たして、何をどうしているのでしょうか？」

質問に答える義理はない。引き絞った弦を離すと同時、放たれた矢は跳ね返る。

まるでそれが答えだと言う様に。

「正解は見たとおりの反射……は正確には答えの一つです。

正しくはベクトル変換。私はあらゆる『向き』を操る能力を持っているのですよ、弱虫な騎士どの。

運動量、熱量、電気量、この世のあらゆる『向き』は私が触れるだけで変換される。

まあ、デフォルトでは『反射』に設定していますがね」

“なんだ……それは。それでは『無敵』ではないか”

もはや呆れて声も出ない。例えば核弾頭を落とそうと、あれは無傷で生還する。

斃す方法があるとすれば、真空缶の中に放り込むか、宇宙に叩きだすくらいしかないだろう。

ともかく、酸素を無くしたり寿命が尽きるまで待つくらいしか、あれを打倒する手段はない。

勝算の見えぬ展開に最早これまでかと絶望しかけた時、ざり、と河原の小石を踏む音が聞こえてきた。

「熱量や電気量はベクトルではなくスカラ量だ。理科の勉強をし直せ」

「はあ？ いきなり出て来て来て何ですか貴方は？ タイミングを見計らって正義の味方の登場でもしたかったんですか？」

「顔見知りか居たのでな。少し話してもと思ったただけだ。子供はもう寝る時間だろう。早く帰れ」

無論、北澤直也は話し合う気なぞ毛頭ない。

既に彼の刀は鯉口を切っている。おそらく、少しでも妙な真似をすれば容赦なく抜くだろう。

「刀を持って話したがる人間など聞いた事がありませんね。銃刀法違反者」

「帯剣許可証は持っている。法の範囲内だ」

「そうですか。けど、私はそちらの騎士に用があるのですよ。人の物を横から取るのはイケない事でしょう？ おいたをすれば叱るのが筋です。」

まあ、納得いかないなら仕方ありません。取り敢えず、死んどけ黒助エー！！」

瞬間、足元の砂利が一斉に爆散する。おそらくは衝撃の『向き』を変換しているのだろう。即座に飛び退いた北澤直也と紫の騎士の後方では、弾け飛んだ小石に大木が薙ぎ倒されていた。

「……常識外れだな」

「こっちに来てまでんなモン求めてんじゃねえ！！ しっかりと楽しめやアー！！！」

そうして少年は文字どおりの意味で射出された。
足にかかるベクトルの変換。一瞬にして七メートル近い距離を詰
め、その腕を振るう。

「くっ！」

間一髪、髪を数本絡め取られただけで終わるものの、やはり油断
は出来ない。

あの華奢な腕に触れられれば最後。例え核シェルターであろうと
紙細工のように引き千切られ、肉体はその一部を持っていかれる。

「おらおらどうしたア！！ じつとしてたら潰されちまうぞオ！！」

奮われる手は掌低ではなく鉤爪。人体を引き肉に変え、五臓六腑
を撒き散らすであろうそれを、危なげなく回避し続ける。

「ちい、ちょこまかと……！！」

「引け。出来ればもう童は斬りたくない」

「そうかい偽善者、なら死んどけ！！」

距離を取る北澤直也に、少年は手を広げて立ち止まる。

元より傷一つ付かぬ反射の鎧に身を守られているのだ。無防備で
あるとどういふ事はない。なにより、北澤直也は傷つけることな
く事を収めるつもりなのだから。

だからこそ、その選択は失敗だったと言っていい。

周囲に渦巻く風、その異常な風速が何を意味するのかを。

“ そつきたか！ ”

へし折れた大木。舞い上がる砂利。それらは確かにただの木であり石だ。

ただし、それは通常時の事。風速八十メートル。純粹な風の暴力はコンクリや車、果てはビルや住宅などを容易く破壊する。

まさに少年は今、小規模な台風そのものであった。

そして、北澤直也はその暴力にさらされた。弾丸の如き石も、砲弾の如き木も、彼は一切防げない。

当然だ。彼はバリアジャケットを纏っていないのだから。

そうして。騎士の目の前には、ソレがあった。
物言わぬ存在。台風にさらされた北澤直也の肉体は今やピクリとも動かない。

当然だ。木片は彼の身体を針鼠の如くに突き立て、砂利は彼の身体に無数の穴を開けたのだ。

流れ出す血は河原を赤く染め上げ、飛び散る肉片は大地を穢す。

それに引き換え、少女は無傷。当然だ。バリアジャケットに護られた彼女に、たかが台風程度の暴力は通じない。

おそろしいほどに呆気ない。これで、こんな事で、人が倒れると言うのか？

そう感じていたのは、少年もまた同じだった。

「なんだこりゃあ……散々期待させやがって、ただのパンピーかよ。それとも手前はキャラじゃなくて作者でしたとも言っ気か？ 違っよなあ？

あの墮天使さまの所であんだけ吠えたんだ。なら起きろや主人公。

寝てねえでさっさと立て！」

そう言いながら腹にガスガスと蹴りを入れる。勿論、彼は立ち上がれない。

少しばかり蹴った所で飽きたのか、北澤直也に唾を吐き捨て、少年は消えるとはかりに蹴り飛ばした。

「さて……と。手前は違うよなア。こんな所で終わりじゃねえだろっ？」

にやりと笑う少年を前に、騎士の少女は弓を番える。

“ああ……終わりではない”

覚悟は決まった。この少年は生かしておくべきではないと、少女はそう決心する。

だが、それはこの場で終わらせるといふ事ではない。

まずは牽制し、敵に防御の体勢を取らせ、次いで北澤直也を抱えて撤退。

前回のジュエルシードの借りを返す意味合いにおいても、それがベストだと判断する。

放たれた鏃は九。その全てが非殺傷設定を解除した必殺でありながら陽動。流星の如く飛来する九矢は少年に触れることなく、砂塵を撒き上がらせるにとどまる。

否。留まる筈だった。

「見え見えだぜ、あんた」

誰が想像出来よう。必殺足る矢に自ら中りに行くなどと。

だがそれは完璧。完全な『反射』ではなく、ベクトルを変換され

た矢は少女を貫くべく迫る。

だが、矢は少女を貫かない。彼女の前には、その身を護るべく、一振りの刀が突き立てられていたのだから。

「グゲツ……ガ、ハツ……」

「気張るじゃねえか。いいぜ、その度胸に免じて引いてやる」

未だ猛禽の如き瞳を向ける北澤直也。だがそんな彼をあざ笑うかのように、少年は視界から消え、少女は安堵の吐息を漏らす。
だが。

「なんて、冗談に決まってるだろうが、ボケ」

完全な不意打ち。頭上からの一撃は北澤直也に防御の暇を与えず、その肉体を四散させる。否、させる筈だった。

「へえ。まだ動けたのか」

間一髪のところまで致命傷は避けたものの、無傷とはいかなかったのだろう。

肩口から上腕にかけての肉をこっそりと持って行かれ、出血はより酷くなる。

だが、問題はそこではない。

彼の身体には 時限爆弾が仕掛けられているのだから。

「グツ、ギ、ゲボ、ガアアアアアアアアアアア………!？」

突然の絶叫、地を引き裂くような叫びと共に、北澤直也は身を転がせる。

「おいおい……今更かよ」

おそらくは怪我に耐えきれなかったのだらうと考え、止めを刺すべく歩き出そうとし、ぴたりと足を止め、向き直ると、口元を歪める。

少年と騎士の中間、あの矢を全て打ち消した、一振りの刀を手に取りそうとし、

それを阻むべく、騎士の少女は先に刀に触れた。

「ち」

せつかく己の刀で首を刎ねてやろうと考えていた所を邪魔されたのだ。

ここまでくれば興ざめも良い所だが、それなりに持った方ではあるし、取り敢えず距離を詰める。

そして、その後ろを騎士は追跡する。

“させはしない！”

何故ならまだ自分は返していない。ここで死なれては借りを返せない、少女は少年へと迫り、

「あばよ。バアカ」

その瞬間、虚空へと消えていた。

“な……に……？”

納得がいかない。確かにあの少年は北澤直也を殺そうとしていた。なのに何故？ と少女は周囲を見渡した。

だが何もない。本当に消えたのか、と疑問に思いつつも、取り敢えずは目の前の人物を保護するべく、手を差し伸べようとし、

「待ちなさい！ その人をどうする気ですか!？」

そう捲し立てる人物が、目の前に現れた。

「え?」

そうして騎士は、目の前の少女を見る。鳶色の髪と瞳を持つ少女、レインシアの姿を。

「お前は……」

「待ちな。まずは説明よりテメエの目の前に転がってる奴が先だぜ」

そう言いながら、レインシアと共に現れたマクスは前に進み出る。それ以上何かするのであれば、その首を刎ねると言う様に。

「そうね。私もその子には用があるし、おいたをするなら赦せないけど」

「あ、あれが千草さんの所の子ですか？ 確かあの墮天使のところで言い争ってましたよね?」

そうして、全く同時に宮本千草と天宮恭介が現れる。

彼らは口調こそ軽くはあるものの、皆が同じ瞳で少女を見据える。

自分達は、お前を赦せないと。

「ち、ちが……」

「何が違うのですか？ こんな場で、そのようなモノを持って」

進み出るレインシアが、その手の先にある物に指を指す。
北澤直也の刀。本来なら決して少女が持つ様な得物ではない物を。
あまりにも出来過ぎた光景。目の前にある理不尽を前に、彼女の
脳は元凶たる少年の言葉をリフレインする。

『あばよ。バアカ』

あれはこういう事だったのだ。全ての罪を彼女に押し付け、自分の存在を完璧に消し去る為の策。

すぐ近くに誰かが来た事を看破し、敢えて派手な戦闘で引きつけ、
頃合いを見て少女が北澤直也を助けようとしたのを利用した。

冷静に考えれば、すぐに否定は出来る。

自分ではないと、倒さなくてはならない人間は違うのだと、声を
上げて叫びたかった。

だが、ソレは出来ない。既に目の前の人間は少女が敵だと思っ
ている。

今何かを言った所で、この状況では良い訳にすらならないだろう。

そうして、彼女はその場から轉移した。刀を投げ出し、声を上げ
る暇さえ無く、唯その場から逃げ出す為に。

差し伸べようとした北澤直也の手に、最後まで気付かずに。

S i d e - N a o y a K i t a z a w a

白濁する思考、全身が解けるような虚脱感。

もはや幾度目かも判らぬ死の感覚に、慣れ親しんだ何かを感じる。

そつだ。自分はいつだつてそつだつた。弱い身体を引き摺りながら、分不相応な願いを抱いていた。

自分は、一度として誰かを救えた事が無い。

何をしても上手く行かない。普段の事はそつなくこなせるくせに、いざ誰かを助けようとするそつと躓いてしまう。

何故かは判らなかつた。だが、それがようやく判つたのだ。自分がそつ作られたから。

物語の中で、自分はそつという存在だつた。何をしても、どんなに努力をした所で、自分は誰も救えない。

だから、せめてここでは誰かを助けたいと思つていた。なのに、どうしてこつ　　上手く行かないのだろうか？

知りたいか？　その秘密を

唐突に、頭の中から声が響く。得も言えぬ感覚。脳髓に混じる異物。

ソレは無論比喩であつた物の、そつとしか思えぬ実感に、俺こと北澤直也は困惑した。

故に、こつ問うのが筋だ。お前は何なのか？　と。そつして声は、ゆっくりと口を開く。

解けない筈の問いを解き明かした者

まるで答えになつていない。だが、その答えが間違ひではない事が判る。

ならば充分。少なくとも相手にはこつらを騙そつとする意図はない。

だから訊く。知りたい、と。

簡単だ。君達は負債を背負わされている

負、債……？

然り、君にとっては不運としか言いようがないが、今言える事はそれだけだ。

宿命とでも言おうか。この世界に来た際に、一部の者がそれを手にしなくてはならなかった。確か、もう幾人かいた筈だ。例えばいま一人の少女の為に戦う少年。

誰よりも力を望みながら、決してある事に届かない。君と同じだよ、報われぬ少年

な、に……？

いずれ応えよう。この空間では時間を感じる事はないが、流星にこちら暇ではない。では、次は互いに意識できる場で会える日を楽しみにしている。

『紡ぎ手』と共に来た『住人』が一人

そうして声が消えた後、何もない場所で、掴めない何かに手を伸ばす。

最後まで応えて貰えなかった、一つの疑問を掴もうとして。

どうして、誰も救えない。あの日の少女も。目の前の騎士の、隠れた涙さえ。

S i d e - o u t

騎士が去った後、意識を失った北澤直也をレインシアは診た。

「ひどい……」

目視さえ躊躇うような状況。全身に突き立った木片もそうだが、何より脇腹がごっそりと持っていかれている。

滴る血。命の水は身体から今なお溢れ、口から紅い泡が零れれている。

これで生きているのは、最早奇跡と言っている。

「姫さん、アンタのデバイスとか言うのじゃ治せねえか？」

「出来る？ サルワートイオー」

《出血を止める程度でしたら可能です。が、この少年は肝臓や腸と言った内臓の一部を消失し、脊髄にも損傷が見られます。

おそらくは私が止血を施しても、一分は持たないでしょう》

「そんな……」

絶望に打ちひしがれる。何故、ここまでする必要があるのか。

どうして自分は何も出来ないのかと、レインシアは俯きかけた時、

「どいてくれ」

唐突に、彼女の肩に手をかけられる。

黒衣を纏った長身の男。天宮恭介は小瓶を懐から取り出すと、後ろの女性へと向き直る。

「いいんですか、千草さん？ この選択を取れば、今度こそ貴女は恨まれ続けるかもしれませんか？」

「そうね……この子は親から貰ったモノを何よりも大切にする子だ

から。

けどね　それでも私は、この子に生きて欲しいの。

今度は丈夫な体で、人と同じ位の人生を生きて欲しいから」

その言葉に天宮恭介は頷くと、静かに水を滴らせる。

『エリクサー』。あらゆる万病を治し、不老不死さえ手に出来ると言われた秘薬。

これ自体は流石にそこまではいかない物の、瀕死の人間を真つ当な状態に引き戻すぐらいは造作もない。

「その代償に、この子は本来以上の肉体を手にしてしまう事になるけどね」

「どういう、事ですか……？」

「貴女は、確か新都で会った……」

「レインシア＝リ＝グランヴァールです。どういう事ですか？　この人が本来以上の身体になるって……それは悪い事なんですか」

レインシアの言い分も尤もだろう。傷の治療と引き換えに寿命が縮むと言つのならいざ知らず、デメリットどころかメリットしかないものに、何の問題があると言つのか？

「宮本千草よ。そうね……貴女には……いえ、貴方達には言っておいた方がいいかもね。」

私がこの子の作者……要するに『紡ぎ手』だと言つ事は気付いてるでしょうけど、私は物語の中でこの子にいくつかの負債を背負わせたの。

その一つが、これ。この子は数年と持たない。生きるだけならそれなりに持つけど、少なくとも二、三年後は植物人間になるわ」「なっ!?!?」

たとえ傷を完璧に直しても、北澤直也は数年と持たず死んでしま
う。

これは生まれついで、未成熟児として生まれた時からの宿命。
真つ当に生き抜くには北澤直也は脆く、そして弱かった。呼吸で
さえも苦痛となり、僅かな運動さえ肉体を擦り減らすほど。

如何に人体を鍛え上げ、鋼のごとき肉体を身に纏おうと、内側だ
けはどうにもならない。何所かが飛びぬけて悪いのではなく、肉体
そのものが崩壊寸前だということ。

生きている限り器官は傷つき、臓腑は悲鳴を上げ続ける。

病ではないが故に治す手段はなく、磨り減った間接にボルトを打
ち込み、骨には鉄骨を刺し込むといった治療を受ける事で、稼働を
許された人体。

強く、強大にさえ思えた存在はその実、度重なる措置を受けねば
生きられぬ程の弱い存在だった。

「……どうして、そんな事を？」

あまりにも理不尽。どうして物語の中にまで、そうした悲劇を求
めるのかと、レインシアは問う。

だが、その答えも又単純なモノだった。

「人は時として生きながらに理不尽を背負う」

ある者は障がいを持ち、ある者は貧困にあえぎ、ある者は事故や
病に身を落とす。

人とは誰しもが理不尽の上に立ち、そうした理不尽を背負うモノ。

「私はこの子を通して、そうした理不尽な現実を多くの人たちに知
ってほしかった」

それは、そうした理不尽を描く事は、多くの人間には受け入れられない事だろう。

大衆が求めるのはハッピーエンド。

笑顔と共に終わる幕引きこそが、この世の何者にも受け入れられるべき舞台なのだから。

けれど、現実はずう。

宮本千草はそうした理不尽を仕事で見て来ている。

地雷で手足を失った子供。

泣きながら銃爪を引く少年兵。

干からびた骨と皮だけの身体で、老婆のような二十代の女性が、泣き叫ぶ赤ん坊を抱いていた。

そうした現実を、宮本千草は見続けた。

一人の記者として、その姿を見続け、書き続けたからこそ、誰よりも理不尽を憎むからこそ、彼女は北澤直也と言う存在を描いた。

この世に理不尽はあり、その理不尽の上に立つ人間が居るのだと。そうした理不尽を多くの人間に知って貰う為に、彼女は物語を書いたのだ。

「けど、この子は理不尽から外れる事を望まない。

どんなに苦しくとも、それが親から貰った身体だから。だからこそ、この子は特別なモノを望まない。

親に感謝して、自分とは違う理不尽を背負う者を助けたいと願っているから」

だからこそ、北澤直也は真実を知った時、宮本千草を憎むだろう。もう親から貰った身体ではない。今の身体は、全て違うものに変わってしまったから。

多くの悲劇が生まれる中で、自分だけが特別扱いされる事を、誰よりも望まないから。

「ごめんね。目が覚めたら、思いっきり殴っても構わないわ」
「もう良いか？ 流石に京谷達が気になる。よく判らないが、胸騒ぎがする。」

完全に傷の治った少年の髪を撫で、宮本千草は立ち上がる。

「そうね。行きましようか。レインシアちゃん。こんな事を頼める義理じゃないけれど、この子を旅館まで運んでほしいの。病院への連絡は、私がしておくから」

「判りました……けど、私は貴女が嫌いです」

「そう……私は貴女が好きよ。その正しさも含めて、ね」

そう言つて、宮本千草は天宮恭介と共に去つて行つた。
残された者に、一度として振り返らないままで。

「がッ……！？」

地へ落ちる身体。遠のく空に手を伸ばしながら、神崎龍也はその先の少年を見つめる。

決して届かぬ領域。最強の名を冠する存在へ。

“ どうして……一体、何が足りない？ ”

考えられる事は多くある。絶対的な力量の差。如何ともし難い能力差。

しかし、それらを差し引いたとしても、ここまで差が開くものな

のか？

“ どうして……僕は…… ”

こんなにも、勝利が遠い。

手を伸ばそうと何も掴めず、この身はただ虚空へ落ちる。

「 な、のは…… 」

空の先、巻き込まぬようにと遠く離れたその先には、未だフェイトに語り続ける彼女の姿があった。

「 お願い……訊かせて、フェイトちゃんの事を！ 」

一体幾度繰り返したのか？ 叫ぶ声は慟哭に近く、それを聞く少女も又、きつく奥歯を噛みしめた。

「 わたしは…… 」

唯母の為に戦う事。母の為に、ジュエルシードを集める事。それだけが少女の願い。

それを、口にしようとした瞬間、極大の光が周囲を包む。

「 ジュエルシード！ 」

「 封印しきれなかったの……！？ 」

結界に包まれていない今、ここで暴走すれば周囲への被害が出る事をいち早く悟ったのだろう。

両者は杖を向け、封印作業に入るべく駆けだす。

そして、両者の杖がジュエルシードを挟み込む形で交差したのは、偶然にしては最悪と言っているいい形だった。

天を貫き、街一つを包む極光。次元震さえも引き起こす衝撃は、当然中心に居た二人の少女を飲み込んだ。

「うあああああああああああああああああ！！」

「うつつあ……………！！？」

罅割れる杖、弾け飛ぶ両者を前に、二人の少年は駆けだす。

「なのは

「フェイト

！！

！！

天と地。傷ついた少女を助けるべく、それぞれが駆けだす。

神崎龍也は、空から落ちる少女を受け止めるべく大地を疾走し、

氷上京谷は、より高く飛ばされた少女を助けるべく天へ飛び立つ。

そうしてその差が、この結末の明暗を分けた。

「大丈夫か」

「うん。京谷、ジュエルシードを」

まだ封印は終わっていない。罅割れたバルディッシュを待機状態に戻し、ジュエルシードの元へと駆けだした。

「いくぞ」

「うん」

それは自殺行為にも等しかっただろう。覚醒したままのジュエルシードを、二人掛かりとはいえ、素手で封じ込めようとするのだから。

だが、二人はそこで諦める事はない。何故ならフェイトにとって、それは果たすべき使命であり、京谷にとって、フェイトは助けたいと思う人間なのだから。

だからこそ、二人は諦めない。

それが例え、どのような目的であれ、どのような経緯であれ、二人はこの道を選んだのだから。

ジュエルシードを、集めるという選択を。

そうして光が収まると共に、崩れ落ちるフェイトを両手に抱き抱えた。

封印の完了。あまりにも無謀な行為だったが、それでも二人は成し遂げたのだ。

「良く頑張ったな」

そうして京谷は微笑む。その腕の中で、一つの宝石を握りながら眠る姫君に。

収束する光。遠くからでは手を握っているかのように見える二人を、神崎龍也は見つめていた。

不甲斐無いと思う。もし自分に力があれば、状況は逆であった筈

なのに、と神崎龍也は唇をかんだ。

だが、この選択は間違いでないとも思う。自分は京谷のように、少女と宝石の両方を手にする事はなかった。

けれど、それでも自分は嬉しいのだ。この少女が無事である事が、やがて二人の勝者は地に降り立ち、神崎龍也を見た。心配するような、何処か申し訳なさそうな瞳で。

「大丈夫か？」

「ああ……なのはは無事だ」

短く返すも、言葉は続かない。

ただ静かに、氷上京谷はそうか、と、零すとフェイトと共に虚空へと消えていった。

その手に、しっかりと一人の少女を抱き抱えて。

「さて……帰るかな」

未だ腕の中で眠るなのを見つめ、神崎龍也は踵を返す。否、返そうとした。

「おや？ もう終わってしまいましたか。それでも急いできたつもりですが」

「君は？」

目の前に現れた炎髪蒼眼の少年に対し、神崎龍也は問いを投げかける。

だが判つてもいた。この少年が、自分と同じ存在だと言う事を。

「水無月珠樹。作家であった頃は水玉と名乗っていましたかね。まあ、細かい自己紹介は後で良いでしょう。いまは用件だけ済ませたいので」

そう言いながら、少年、水無月珠樹はポケットからある物を取り出した。

光り輝く宝石、ジュエルシード。

「何が、目的なんですか……？」

「いやなに、戦力が多いに越したことはないでしょう？」

こちらに来てからと言うもの、この石を目当てに紫の騎士達に襲われましてね。

出来れば今後協力して行きたいのです。そちらの返答は？」

願つても無い事だ、と神崎龍也は思う。

マクス達を疑う訳ではないが、ここから先、あの騎士達を自分たちで相手に出来るかと言われれば、確かに不安はあったのだ。

「助かるよ。僕は神崎龍也、これからよろしく」

「よろしくお願いしますよ、龍也君」

笑いながら握手を求める水無月珠樹。

その口元は、三日月のように歪んでいた。

011 月下の惨劇（後書き）

c・m・「今回はいつもの二倍の長さ！ 第11話！！ いやいよ佳境に入ってきました！！」

京谷「……なあ、今回直也が死にかけなんですけど

ていうかグロいんですけど」

c・m・「ふっ……コードギアスを見てみなさい。学園祭とかギャグ回の後には必ず凄惨な回が待っているのよ。」

『血染めのユフィ』とかね。まあ、その為だけに二話に分ける所を強引に一話に収めたんだけど」

京谷「そうかい。つーか水玉様が悪すぎる。流星に引くぞ」

c・m・「悪役希望は向こうの望む所よ。」

むしろ感想版で他の読者様から名指しで死ね発言が出てくるぐらいの悪役じゃないと一人前の悪とは言えないわ」

京谷「それもどうかと思うが……ていうか温泉回なのに都内でのバトルも入ってんですけど」

c・m・「仕方ないでしょ。都内のジュエルシードは水玉様のグループが回収しちゃった所為でもう無いもの」

京谷「それで繰り上げになったのか……ということは、次回から時空管理局が出る訳？」

c・m・「ええ。そろそろ笑う男様のグループも出さないと不味い

だろつから」

京谷「成程。ところで……いくらなんでも直也の扱い酷くね？」

あと、神崎さん負けすぎじゃ……」

c・m・「直也君に関してはほつとくとsttsに行くまでに死亡しちゃうし、神崎さまに関してはストーリー上負けて貰わないと困るのよ。」

一応、理由もあるし」

京谷「つまり伏線か」

c・m・「そう言う事。それでは、これから読者様のお礼に移らせて頂きます。」

久住祐治さま。神崎はやて様、Kyoさま、Hagalazさま。水玉様。ご感想を頂き誠にありがとうございました」

京谷「ところで、最後に訊きたいんだけど、今回ロリにときめいた人多くない？」

c・m・「そうね……そろそろ二級の認定証を準備した方が良さかしら？」

京谷「……荒れるな。色々と」

012 背負った罪と両者の溝

「どう？ 皆。今回の旅は順調？」

自動式のドアを潜りながら、一人の女性が軽く声をかける。

尤も、軽い口調なのは彼女だけだ。今この場に居る面々は、それぞれの仕事についているのだから。

「問題ありませんよ、艦長。ただ、前回観測された次元震ですが、二組の集団の姿が目撃されています。」

この調子だと、再度ぶつかり合う危険性が高いかと」

オペレーターの言葉を聞き流し、艦長と呼ばれた彼女は専用の座席に着く。

そう、ここはひとつの艦。尤も、唯の艦と言う訳ではない。

例えるならば、宇宙船と言う者が一番概念としては近いのかもしれない。

ただし、星から星へと渡るのではなく、宇宙と言う一つの世界から全く異なる世界へと航海を行う艦。

正式名称、時空管理局・巡航Ⅷ級Ⅷ番艦。次元空間航行艦船『アースラ』。

時空管理局とは次元世界における司法機関であり、ミッドチルダ他、幾つかの世界が共同で運営しているものであり、例えるならば国連が近いと言える。

今回の彼らの目的は次元震の発生地帯の確認、および発生源であるロストロギアの探索である。

「しかしリンディ艦長。何故今頃になって調査を？ こう言うっては何ですが、我々が対処するには遅すぎるのでは？」

艦長に対してお茶を運んできた女性が、苦い顔つきで苦言を呈する。

が、その女性の言う事が尤もである辺り否定は出来ない。リンデイは溜め息を零しながら、運ばれてきた紅茶のカップに口を付ける。

「許可が出なかったのよ。あちらには既に中将が直々に調査にあたっててる。」

私達の出る幕は本来なら無いし、そもそも事件が解決していなければおかしいのよ」

「つまり……我々に出動許可が下りる程、状況は切迫していると？」

「そう言う事よ、エイミィ。」

中将からしてみれば、私達には危険度の低い任務に当たって欲しかったらしいんだけど、そうも言っていられないみたい。

さつき通信で直接指令が下されたわ。何でも負傷されたらしくて、今は療養中。

しかも第一級指名手配犯がうろついているらしいわ。

名前位聞いたことあるでしょう？ 『ベリアエル・バトオ』。

多分、中将に深手を負わせたのもこの男でしょうね」

瞬間、話を聞いていたエイミィのみならず、オペレーター達の手が止まる。

無理からぬことだ。時空管理局内において、その人物の名前を出す事が如何に恐ろしいかは、訓練生時代から彼らは知っているのだから。

「あの……ベリアエル・バトオですか……………」

「そう。時空管理局武装局員にして“元”伝説のエース。かの三提督とも懇意にしていながら、唐突に全てを裏切った史上最強にして最悪の局員」

教官から教わったままの言葉をすらすらとリンディは口にしながらも、やはり面持ちは周りの者たちとは変わらない。

ティーカップを持つ彼女の手は、微かであるものの震えていた。

「まあ……未だに多くの人間から狙われ続けている訳だし、おいそれと姿を現す事はないでしょう。それより、彼らはどうしてるの？」

話題を切り替えようと軽やかな口調で訊ねるも、やはりエイミイは沈んだままだった。

何と言うか、会社の倒産といった、遙か先の巨大な危機よりも目の前の問題を片付けたがる会社員そのものの表情だ。

「相変わらずですよ……顔を合わせて以来、喧嘩しっぱなし、というより、片方が片方を一方的に殴り続けてます。

流石に命の危険があるので別けて拘留しようとしたんですが、殴られる方は『別にかまわない』の一点張りで……」

つまりは何の進展もない、と言う事である。

「仕方ないわね……このままじゃ何も判らないし、取り敢えずは身元だけでも聞いとかないと。クロノ、頼める？」

「あ、駄目です艦長。クロノ君、何でか知らないけどあの二人に凄く嫌われてて、全く見向きもしませんでした」

がつくりと肩を落としながらも、リンディは仕方ない、とエイミイに使いを頼む。

「まったく……今はそれどころじゃないっていうのに……」

彼女の言葉は、艦内の全局員が同意する所だった。

「何とか言ったらどうだ？」

人が二人入る分には少しばかり広く感じるスペースの中、少年は青年に対し、苛立ちを隠す事もなくぶつけていた。

「……」

それに対し、青年の方はあくまでも無言。唯自分はそれを受け入れると言った様に、何か抵抗するまでもなく、少年の暴力と罵倒を受け続けていた。

「言い訳をするなり何なりあるだろう？ 『あれは所詮作り話だ』

『現実ではない』。

簡単な言い草だな。実際にそれを味わう身からしたら溜まったもんじゃないが」

やはり青年は何にも答ええない。当然だ。初めから青年は受け入れ
ている。

目の前の少年にあったその時から、覚悟を決めていた事だった。

「何とか言え」

「……済まない」

瞬間、殴る音が辺りに響く。青年は頬を腫らし、青痣を作り、鼻

を折られながらも何の抵抗も見せていない。

当然だ。この青年はそれだけの事をしたのだから。

青年の名は、まの槇野来栖。

ブラウンの髪が特徴的な日本人だが、それ以外は多少顔立ちが良いだけの、至って普通の人間である。少なくとも外見上は、と付くが。

そして、少年の名は東東興輝。

年齢は九歳前後だろう。茶色の髪と翠色の目をした少年は、その顔を憎悪に歪めながら、依然として暴力を青年に奮っていた。

「ち。……もういい、どうせ終わった事だしな」

「本当に済まない……」

いい加減に少年、東興輝も疲れたのだろう。多少は反抗でもするのかと思っていたが、相手が木偶の坊ではやる気も失せると言うものだ。

尤も、これで全ての怒りが晴れた訳ではないが。

「良いつつってんだろが。どうせもう何も戻らねんだ。

元々割り切ってた事だしな」

そう言いながら、東興輝は一つしかないベッドに寝転がる。

そう、彼らは作者と主人公。あの墮天使によってここへ運ばれた者たちの一組。

東興輝が槇野来栖を殴っていたのも、そもそもそれが原因だ。

北澤直也が宮本千草によって理不尽を背負わされたように、東興輝も又、槇野来栖によって不幸を背負わされていた。

最愛の妹　　その死と言う形を。

「そろそろ頭は冷えた？」

頃合いを見計らっていたのだろう。エイミイは留置所の鍵を開け、二人を見る。

結果は思った通り。一方的な暴力こそないものの、二人の間には谷よりも深い溝が残ったままだった。

「……何の用だ」

「艦長がお呼びなんですよ。手持ちの品を見る限り、貴方達は唯の次元漂流者で間違いありませんし、幸いにも貴方達の故郷は私達がこれから調査に当たる所なんです。

ですから、今来て貰って少しの質問に答えて貰えれば、すぐに帰れますよ」

可能な限りの笑顔で応えるエイミイに対して、二人は重い腰を上げる。

その顔つきは依然として、沈鬱なままだった。

「よかった。来てくれなかったらどうしようかと思っただわ。

私は時空管理局提督……まあ早い話、次元を股にかける警察官といったところかしら？」

ま、そんな肩書きはどうでも良いかな。リンディ・ハラウン、それが私の名前よ」

笑顔で握手を求めるも、片方は虫の居所が悪いのか横を向き、もう片方はバツが悪そうに俯いていた。

「あらあら。もし良かったら、二人の名前を訊かせて貰える？」

「……東 興輝だ」

「槇野来栖です……」

その反応にリンディはやれやれと溜め息をつき、取り敢えずは説明に移る事にした。

「誠に勝手ながら、君達の所持品からある程度の事は判ったわ。

メモ帳に関してはプライバシーにかかわるし、拝見してないから安心して。

取り敢えず、戸籍や身分証明証を見る限り全て本物。

魔導師としての資質はあるけど、管理外世界の出身みたいだし、取り敢えず貴方達を送り届けることに異存はないわ。

けど、今は無条件で貴方達を返す訳にはいかない」

その言葉に、二人はぴくりと肩を動かす。

おそらくは管理局へのスカウトか何かだろうと考えたが、リンディが語ったのは想像とは全く異なる内容だった。

「今君達が居る世界……正確には君達が住んでいる都市には、かなり危険なモノが放置されている。

我々はそれを回収しなくてはならないのだけれど、それはこちらでやるから問題ないわ。

私が言いたいのは、それを求めてやってくる者達と、現在捜査中の危険人物が、貴方達の街に居る可能性が非常に高い。

もし貴方達が強く望むのであれば、護衛を付けて送り届けるけど、正直お勧めは出来ないわ」

そついう彼女の言葉は、本心からくるものなのだろう。

少なくとも二人は、リンディの言葉が嘘ではない事を悟った。

「その危険人物というのは？」

「……知ってどうする気？」

その口調は心配と言うよりむしろ関わるな、と言いたげだったが、東 興輝はそれを無視しつつ言葉を紡ぐ。

「街中で見かける……なんて事は万が一にもないと思うが、それでも知らないよりは知っておいた方が良好いだろ。」

街で被害者を出してしまうのを見え見ぬ振りするより、そっちに情報を届けた方が良好と誰だって思う」

尤も、それは一般常識内の範囲での回答でしかないが。

「いいわ。ただし、万が一見かけたとしても絶対に関わらない事。あれを人間とってはダメ。歩く災害以外の何物でもないわ」

言いながら、リンディはエイミィに資料の一部を持ってこさせる。恐らくは一ページ目の男が件の危険人物なのだろう。

黒に紫がかった特徴的な髪と、右目の傷が印象的な人物の写真を二人に渡し、リンディはファイリングされた資料をめくりながら、一つ一つ説明をしていった。

「この男の名は、『ベリアエル・バトオ』。公式記録から察するに現在の年齢は二十六の筈だけど、この男が写っている資料がそれ以前にもあることから、虚偽の可能性が強いわ。」

罪状は管理外世界における殺人と時空管理局の逃亡……早い話、殺人を犯して行方を眩ました、ってとこね。

公式記録では、殺されたのは全て女性……しかもその全員が十代前半かそれ以下。典型的な快樂殺人犯だけど、問題はそこじゃない」

そう説明しながらも、彼女はその手を震わせる。出来ればこれ以上、この男の話題を出したくないと言う様に。

「この男はね……時空管理局の武装局員、つまり、戦闘を専門とした局員の中で最強の実力を持っていた人物だったの。

管理局伝説のエース。三提督でさえ、この男の足元にも及ばないと言わしめるほどに。

実際、この男がいた頃の管理局はこれ以上ない程に重宝した筈よ。どのような死地であろうと、この男にとって全てが瑣末事。テロリストや反管理局勢力の全戦力を一人で壊滅させた、なんて馬鹿げた話が出回ってたけど、事實は小説より奇なりとは良く言ったものね。

公式戦績で、この男に沈められた艦の総数、約八百艦。

しかもその殆どが主力戦艦と言う、何ともふざけた話よ。

当然白兵戦の腕前も一級。この男の使用していたデバイスは非人格型アームドデバイス『ダーインスイレフ』。

形式は管理局内で一般化しているミッド式ではなく、ベルカ式なんだけど、貴方達に言っても判らないわね。

簡単に言えば、魔法の杖であり剣と言ったところかしら？

この男の場合は後者だけど。形状としては両刃の細身の西洋剣ね。……と。ここまでで何か質問は？

「何故、そんなにも細かい情報を？」

東 興輝からして見れば、それは当然の疑問だろう。本来なら顔写真を渡して、連絡を取る為の手段を提示すれば良い。

わざわざ手間をかけてここまでの情報を提示する必要性はない筈だ。

「貴方達が捕まえて見よう、なんて好奇心を持たない様にするため

よ。

さっきの説明で殆ど伝えたけど、相手は完璧な災害。時空管理局からしても、放ってはおけないけど捕まえようとすれば最高戦力の局員を失う事になるから、男が出現した周辺に虚偽の避難勧告を出したりして被害を最小限に食い止めるぐらいしか方法が無いのよ。現在、この男には組織・個人を問わず賞金が懸けられてるけど、はつきり言って無駄よ。

フリーの賞金稼ぎや名うてのハンターたち。果ては犯罪組織連中もこの男が賞金首になった当初は追いかけたけど、すぐに収まったわ。

……全員死体で帰って来たから」

最早絶句するしかない。常識外れだとは二人とも感じる所であったが、悪人である分、下手な小説の最強主人公よりもタチが悪い。

「……ひとつ、訊きたい」

「この件に首を突っ込まないならね」

「ああ。最初にその男が殺したのも……やっぱりそうなのか？」

押し殺す声は、恐怖よりも怒りに近い。

唯一つ思うのは、その男が赦せないと言う事だから。

「ええ……次期エースと目される子でね。この男に良く懐いてたわ。なのに。どう言う訳か、この男はその子を殺したの」

そして、東 興輝は拳を握りしめる。

詰まる所、この男は自分を慕う人間さえも殺したと言う事だ。有象無象でもなく、自らを慕ってくれる人間を。

脳裏に焼きつくのは、かつての記憶。唯一人の妹を、本当に下ら

ない理由で死に追いやられた頃の記憶がふつつと蘇る。

「判った……なら、早く捕まる事を願うよ」

「ありがとう。転送の準備が出来たわ。」

場所は海鳴市の郊外だけど、貴方たちの家までは歩いて十五分もすれば着くと思うから」

「ああ。それと、護衛は良い。その距離なら自力で帰れるよ」

そうして、東 興輝と槇野来栖は転送用の魔方陣へと移動し、艦内から姿を消す。

その瞳がどういった感情を見せていたかを、リンディは理解していた。

「良かったんですか、リンディ艦長。あの二人をそのまま帰して」

「ええ。確かに魔導師としては申し分ないけど、今のままじゃ会話なんて出来っこないし。」

一度帰って貰ってから勧誘するのも悪くないでしょう。エイミィ、その時はお願いな」

「了解です。けど、クロノ君は反対するんじゃない」

「当たり前だ。たとえどれ程高い資質を持つと、彼らが民間人であることに変わりが無い以上、巻き込みたくはない」

先程の話を聞いていたのだろう。黒髪の少年が、割って入った。

「判ってるわ。あの子たちの監視はこちらですから、ジュエルシードの探索を任せるわよ、クロノ」

「判っています。僕は、その為にここに居るんですから」
そう言いながら、クロノは転移用の魔方陣に乗り込む。
時空管理局執務官として、多くの人を護る事。

その決意を、胸に抱いて。

012 背負った罪と両者の溝（後書き）

c・m・「ようやく笑う男様の登場！ 第12話の更新です!!」

御剣「そして今回は私が司会を務めさせてもらう。

だからといって、私を空気扱いはしない様に」

c・m・「まあここに居る事が空気の確固たる証明なんだけどね。

さて、今回は笑う男様の登場ですが、この二人が中が悪いのは過去設定を見てから決めていた事だったりします。」

御剣「そういえば直也も相当怒っていたようだが、確かに悲惨な過去が一個人の考えだけで決まっていたとすれば当然の行為だろうな」

c・m・「ええ。はっきり言ってしまうえば、私も最初から直也君と一緒にだったら今回のような感じになっていたでしょうね。

むしろ、この対応が自然ともいえるわ」

御剣「成程……しかし、今回は話が進まなかったな」

c・m・「仕方ないわ。今回は笑う男様の登場回だし、多く詰め込み過ぎると、その分シナリオの質が下がるもの」

御剣「それでか……。そういえば、最近感想版で笑う男様の姿が見えないな」

c・m・「そうね、お身体でも悪いのかしら？」

御剣「夏風邪など、体調には気を遣わなくてはならない時期だから

な。

それと少し気になったのだが、今回のベリアエル・バトオと言う男は、どういう経緯で参戦が決定したんだ？」

c・m・「彼に関してはKyoさまの原案のキャラで、何かとチートな奴だったんだと、本編に登場するに当たって、さらに魔改造しちゃいました。」

もはや容姿と技と幼女殺しと言う点ぐらいしか、初期からの設定は残ってなかったりします。」

Kyoさま、本当にごめんなさい」

御剣「つまり、やり過ぎたと言う訳か」

c・m・「ええ……その代わり、彼には私が考えた特別な配役で動いて頂きます。」

彼の発言や、細かな伏線は要チェックです。この物語、協力して頂いた多くの作者さま、ならびに読者さまを喜ばせるべく、鋭意制作していきますので、今後の物語にご期待下さい」

御剣「作者さまさえも知らない未知の結末、この物語の真のテーマは、徐々に明らかになって行きますので、ぜひ最後までご覧になって下さい」

c・m・「それでは、これから読者様のお礼に移らせて頂きます。」

神崎はやて様、Kyoさま、Hagalazさま。水玉様。

そして今回初めて感想を書いて頂きました、ジョージ・ワシントン三世さま、ご感想を頂き誠にありがとうございます。

三次創作と言う手の出しづらいジャンルに関わらず、感想を頂いた事を誠にうれしく思います」

御剣「自分からもお礼を言わせて頂きます。それでは今日はこの辺りで、失礼致します。」

c・m・r・p・s・神崎さま。8人の創造者に関してなのですが、正直読む時間が取れず、まだ読了出来ていないのが現状だったりします。時間があれば読ませていただきますので、しばしお待ち下さい。

本当に申し訳ありません」

静かすぎる月夜。

アリサ・バニングスは月村すずかと共に習い事を終わらせ、自宅へと足を運ぶべく運転手の鮫島の待つリムジンへと乗り込む。

「なのはにメール？」

「うん。なのはちゃん……前より塞ぎ込んだみたいだから」

連休での温泉旅行から、もう数日が経過した。

とはいっても、本来の日程よりも早く帰ってしまった為、良い思い出だったかと返されれば、言葉に詰まる事だろう。

あの日、日付が変わるか否かという深夜に、事件は起きた。

高町恭也が誘った少年、北澤直也が気を失った状態で旅館へと運ばれてきたのだ。

運んだのは、高町家の居候であるマクスとレインシアの二人。

外傷こそなかったものの、その服はボロ雑巾のように破れ、血に染まっていたことから、一時は大騒ぎとなった。

彼を病院に運ぶため、朝一で鮫島が車を回し、旅行は当然のことながら中止。

傷の経緯や詳細については語られなかったが、野生の動物に襲われたか何かだろうという結論に達した。

勿論嘘だ。そんな事に気付かない程、アリサもすずかも馬鹿ではない。幼いとはいえ、否、幼いからこそ、子供と言うものは周りの変化に敏感なのだ。

マクスが高町士郎へ告げた言葉も、一部ではあるものの訊き取っていた。

宝石、襲われた、治療は済んでいる。

大まかではあるものの、自体を察する事は出来た。

これが人為的な物であること。マクスや神崎龍也は、この事件に関わっているからこそ、高町家に居る事。

……そして、なのはがそれに巻き込まれているという事。

あの日のなのはの顔を、忘れることなど出来はしない。

どうしようもなく自分を責める表情。自分さえしつかりしていれば、こんな事にはならなかったのに、と唇を噛み締めた姿を見たとき、そこに自分が関わる事は出来ないのだと、アリサとすずかは悟った。

だからこそ、彼女達は待ち続ける。自分の友達が全てを終わらせた時、本当の意味で、笑顔で迎えられるように。

だが。

「ねえ鮫島……私は、なのはが帰って来た時に笑顔で居られると思う??」

それは一つの不安。素直な感情を他人に見せる事が出来ないからこそ、いざそうなった時、自分は天邪鬼になってしまうのではないか。

そうする事で、自分は主立ちを傷つけてしまうのではという不安に、アリサは静かに言葉を零す。

「大丈夫ですよ……お嬢様がお優しい方である事は、私は存じております」

「ありがと……けど、相談する時ぐらい、本音で話してくれていいのよ??」

その言葉に、鮫島は思わず嘖き出す。何を言うのですか、と笑み

を向けて。

「私はお嬢様が生まれてから、ずっとお傍に居ましたよ。

旦那様に長らく会えず、泣いていた日も。

奥様に手を引かれて笑っていた時も。

私は貴女を見続けていました、だからこそ言えます。貴女はお優しい方だと」

そうして僅かに顔を後ろに向けた後、運転に戻るべく前を向けようとし、

唐突に、ブレーキペダルを全力で踏み込んだ。

「きゃッ!?!」

「すすか!?!」

けたたましく鳴り響く地面とタイヤの摩擦音。その衝撃は、アスファルトに尾を引く擦過痕が物語っていた。

「あなた……鮫島、どうしたの?」

鮫島は取り合わない。助手席のボックスからケースを取りだすと、車内に設置された非常ボタンを押しこむ。

「お嬢様。ここから先、ドアを開けて左側の道を進んだ先に森が御座います。

携帯にはGPSが付いておりますし、屋敷の者が駆け付けるまでに五分はかからないでしょう」

「何を、言っ……」

「お行きなさい!」

その言葉に、びくり、とアリサは肩を震わせる。今まで一度だつて、怒ったりはしなかった人。

例え悪さをして、自分の性格を見越して、悪い事を悪いと気付かせてくれた人。

そんな人が、自分に怒鳴っていると言う事が、既にこの状況の異常性を示していると、アリサは感じ取った。

「一緒には、行けないの……？」

それは戸惑い。もう逢えないのではないかと言う不安から来る、少女の声。

それに、鮫島は笑顔で振り返る。

「そうですね。お嬢様が素敵なお相手を見つけるまでは、私は死ねませんから」

「莫迦……」

かつて、自分が今よりも幼かったころの事を、アリサは思い出す。本来ならば、その言葉を多くの娘は父に告げるものだ。

だが、アリサは違った。

仕事で会えぬ父の代わりに、傍に居た男性。

傍から見れば、孫と祖父のような関係の人間に彼女は言ったのだ。

『大きくなったら、貴方の』

『

思わず思い出して、頭を振る。昔の事だ。どうやら目の前の運転手が馬鹿な事を言い出すから、思い出してしまったらしい。

「Don't get yourself killed.」(死ん

だら、駄目なんだから)

I'll never forgive you if you do, SAMEJIMA (絶対に許さないんだからね、鮫島)「All right, my master (心得ております、我が主)」

友達に聞かれるのが恥ずかしかったのだろう。英語で叫ぶアリサに、鮫島は笑みを含んだ声で返すと、行きなさい、と再び叫ぶ。

その背中が遠ざかるのを感じながら、鮫島は来るべき脅威を見つめていた。

「一応はお礼を言うておきます。これで、心残りが一つ消えました」
「礼には及ばん。今際の際、主従の別れを無粋な形で引き裂くのは、俺の望むところではない」

そう言いながら、鮫島の前に現れた男は、その殺気を隠そうともせずに立ちはだかる。

この男を見た者がいれば、誰しもが口を揃えて答えるだろう。

あれは焔ようだ、と。

立ち合うだけで肌を灼く感覚。舌の根が乾き、全身から汗が噴き出す。

戦ってはならない。あれは別格なのだ、心の中で警鐘を鳴らし続けていた。

身長はおよそ百八十と言ったところか。黒と紫が入り混じった髪と、右目から頬にかけて斬り裂かれた疵。

誰が知ろう。この男こそが管理局の“元”伝説のEースにして歴代最強の局員、ベリアエル・バトオだと言う事を。

ベリアエル・バトオが指を鳴らすと共に、正面のみならず四方に広がる焔。それはやがて円を描き、巨大なコロセウムを作り上げた。

「貴方の望みは……私と戦う事ではなく、お嬢様方とお見受けしましたが？」

「肯定だ。本来ならば無用の手間はかけん主義だが、従者としての死に場所を貴様が求めると言うならば話は別だ。

先の娘とは親しかつたのだろうか？ その意を汲めぬ程、俺は無粋ではない。

ならば我が胸に刃を突き立ててみせる。姫を救いたくば、魂さえ賭けて望め。

貴様に相応しい死に場所を与えてやると言うのだ、よもや逃げはすまいな？」

元よりこの状況では逃げる事なぞ出来まい。

だが侮るなかれ、伝説よ。

貴様の目の前に立つのもかつての伝説。

その武勲は勲章では語られぬ血と鉄の大地で、多くの兵士から受けた歓声と怨嗟の声によつてのみ知らしめた、究極の兵士。

「まだ私の名を告げていませんでしたな。これが闘技場たるのであれば、名乗るのが筋と言うもの」

そうして老人は、その両の袖から二対四本の鉤爪を出す。

否、それは確かに分類するならば鉤爪ではあるが、形状を言うのであれば爪という表現は不適切だろう。

あれは牙。戦場と言う大海で、全てを喰らう鯨の牙だった。

「かつて旦那様の元に身を置き、生まれたばかりのお嬢様を奥様から抱きかかえた時、私は誓った。

もう二度と、我が牙を見せる日はないと！

お嬢様が歩くのは陽だまり、血に染められた大海に生きる者は、もはや必要ないのだと、私は自らの牙を引き抜き、二度と剥かぬと証を立てた！！

しかしこの日より、私は再び牙を剥く。アギトを開き、貴様を血の大海に引き摺り込もう！！」

「良き覚悟。この窮地にあつてよくぞ吼えた。その啖呵、実に見事だ。

故に、地に落ちた名であるが名乗ろう。我が名はベリアエル・バトオ、貴公の名は？」

この身は鯨。黒き海に引き摺りこむ者。其の名は

「『アギト』の鯨島、推して参る！！」

駆けだす鯨島を前に、ベリアエル・バトオはほぼ同時に地を蹴った。

かつて中世の頃、騎士同士が見せた馬上試合。

互いが槍を持ち、相手と交差する形での決闘を、この焔のコロセウムに則って行った。

無論、そこに遊びはない。

これは決闘。互いの誇りと魂がぶつかり合う場ならこそ。

「グ……!?!」

そこに、手を抜くと言う最大の侮辱を為す程、ベリアエル・バトオは堕ちてはいない。

「……はやり、魔導師ではなかったか」

振るった筈の右腕を引き裂かれ、地に片足を付ける鮫島とは裏腹に、ベリアエル・バトオは至って無傷。

当然だ。不可視の鎧を纏う以上、通常兵器で傷を付けようなぞ、ましてや兵器以下の武器で、この男を傷つけるなど不可能だ。

管理局が質量兵器を禁じたのは、それが脅威だからではない。

邪魔なのだ。あれは敵兵のみならず、他の町や市井の民さえ無に帰す。

たとえ道徳的目的を以て扱ったとしても、侵略目的を以て扱ったとしても、必ず被害が出る。

そもそも、質量兵器が脅威だと言うならば、ベルカの騎士は当の昔に絶滅している。

それが為されていないことから、あれが取るに足らぬ玩具である事は想像に難くない筈だ。

だと言うのに。

薄く、爪で引っ掻く程度の傷が、ベリアエル・バトオの頬に出来る。

微かに赤くなったそれは、血こそ滴らせなかったものの、紛れもなく鮫島の手による物の証明であった。

「……ほう」

それは本来ならば有り得ぬ事象。障壁を発動させていないとはいえ、鮫島は確かにベリアエル・バトオのバリアジャケットを抜いたのだ。

唯一つ、研ぎあげた己の牙のみを頼りに。

そして、その矜持は男に届く。

赤黒く変色した白のジャケットが消失し、紫のシャツ一枚となった事実。

バリアジャケットを解除した。

「決闘に鎧を着込んだ無粋、心より詫びさせて貰おう。加えて、」

そうして男は、虚空より顕れた剣で己の肩を切り裂いた。

鮫島と全く同じ個所、同じ深さの傷を、そうして作り出す。

「仕切り直しだ。誇れ、その牙は確かに俺に届いたぞ」

構え持つ剣はダインスレイフ。己が強敵と認めた者のみに抜く最初の得物を、男は確かに鮫島に向けた。

「来い。大海の覇者」

言われるまでもなく、鮫島は再び大地を蹴る。神速の踏み込みによってアスファルトは無残に砕け、その姿は残像となって視界から消える。

“上!”

視界で捉えられぬ速度を見切ったのは、直感のみでは納得できな

い。

これは経験。ベリアエル・バトオが踏み越えてきた戦場の数が、そのまま経験となって生きている。

だが鮫島もまた、越えてきた戦場では見劣りはすまい。

かつてイギリスで孤児として育ち、教会に引き取られながらも、戦場を渡り歩いた。

神父の、同じ孤児たちの制止を振り切り、彼らに明日の食事を与える為だけに、ただ戦い続けた。

最初は外人部隊として活躍し、協定違反した敵を直接撃ち殺してからは、フリーの傭兵として戦った。

磨き上げられる殺人技巧。ベトナム戦争時において彼は一切の銃器を使う事無く、己の『牙』のみで敵部隊を殲滅させた戦場の覇者。引退した現代においてさえ、『アギト』の鮫島の名は各国の首脳や元帥以上に兵士たちに畏敬の念を禁じえぬ存在として語り継がれている存在。

正に、生ける伝説。

故に、鮫島もまた男の行動を予測する。真上からの『牙』は受け止められたが、それはあくまでも片腕。

残る片腕をその顎を縦に爆ぜ割ると言わんばかりにアッパー気味に振り上げ、当然の如くに身体を仰け反らされて回避される。

だが。

「貰った……！」

一坤投擲。相手が回避するのに合わせ、最初に受け止められた手に対し腰を捻る事で引き、空手の正拳突きめいた動作を取る。

この間、僅か一秒。相手は未だ回避行動を取っている為に防御できず、仰け反った体をどう戻そうと、タイムラグが発生する為、決

して防ぐ事は叶わない。

乾坤一擲。放たれた牙は男を貫き、完全なる勝利を鮫島に告げる。否、告げる筈だった。

「な!？」

有り得ない。男は身体を完全に仰け反らせ、そのまま片手をついてバック転を慣行、鮫島の射程圏から離れたばかりか、体勢さえ立て直す。

引き換え、鮫島は腕を突き出したまま。

如何に動きが速かろうと、相手の剣の方が速い事は、誰の目にも明らかだ。

男が剣を奔らせる瞬間、鮫島の脳裏をこれまでの記憶がよぎる。

それは方に刻まれた秒の世界。刹那と言うにもさらに短い時間の中で、鮫島は一人の少女を垣間見る。

『大きくなったら、貴方の』

』

瞬間、鮫島は自身に活を入れる。

この腕が引き裂け、足が千切れたから何だと言う。

護るべき者の明日を想え。斃すべき敵を見る。

己がここで諦めたならば、護るべき者たちはどうなるのだ!!

「があああああああああああああ!！」

怒号と共に地を転がり、体勢を立て直そうとするも、片足が前に進まない。

恐らくは足の腱を痛めたのだろう。戦闘は絶望的と言っていい。だが、それがなんだと言う。

先を向ける。

あの体勢では次の動作にラグが生じる。そう信じていたが故に、

「シ……ッ！」

背後から脇腹を抉ろうとする一撃へ、微かに意識を遅らせた。

「ほっ」

当然の如くに防御するが、先の展開とはまるで違う。

剣の軌道を変えたが故に防御が遅れ、のみならず体勢さえも崩される。

そして、それを見逃す程、鮫島は甘くない。

振るわれる『牙』。その突きは喉笛と水月へ吸い込まれる。

故に、ここで詰み。ベリアエル・バトオの剣は両手剣だ。

あれ一本で双腕の牙を防げぬし、躲そうにも自身は空中。

もし水面蹴りを防がずに受けていれば、体勢が崩されたとしても

ここまでの窮地に立たされる事はなかった。

すなわち、この一手を打つ為にこそ鮫島は全てを注いだのだ。

そして。

「惜しかったな」

それを防がれる事こそ、鮫島の敗北を告げるのと同義である。

確かに鮫島の牙は肉を裂き、骨にまで届かせた。

しかし、それはあくまでもベリアエル・バトオの両腕。

剣を手放し、肉を裂かれようと急所さえ護りきれぬなら良しと、

両腕を盾にしたのだ。

『牙』は抜けない。腕に力を入れ、筋肉を硬直させる事で刃を抜かせない様になっている。

正に肉を切らせて骨を断つ戦法は、敵ながら天晴れと言わざるを得まい。

そして、残る足での蹴りが、鮫島の肋を砕ききると同時、両手の牙は、その反動で中程から折れた。

魔力が込められていないとはいえ、ベリアエル・バトオに体術の心得が無いかと問われれば否。

戦場で武器を失った時、頼る物が無い者が生き残れる筈はないのだから。

十メートル近く蹴り飛ばされ、地面をボールか何かのようにバウンドしながら鮫島は転がった。

既に決着はついたと見たのだろう。

周囲を囲んでいた焔は、鮫島を蹴ると同時に消失させていた為、彼が焔に吞まれる事はなかった。

こつこつと、軍靴の響く音がする。それは紛れもなくベリアエル・バトオのもの。

己に止めを刺しに来たのかと、そう考える鮫島が、朦朧とする意識で、自分を見下げる男を見た。

“ 殺すか…… ”

最早声は出ない。だが、この男が手にした剣で貫くと言っているのであれば、それは好機。

己を貫く剣を掴み、地面に引き摺り込んだ後に喉笛を食い千切る。死に掛けの人間とは思えぬ強かさを内に隠し、無力を演じながら待つ。

だが男は来ない。手を一切下す事の無いままにしばし見つめ、両腕に刺さったままの牙を引き抜くと、鮫島の元に落とす。

彼は『悪』なのだから

。

013 アギト（後書き）

c・m・「作者どころ主人公さえ登場しねえ！ 第13話の更新だ！！」

京谷「そして僅か一話なのに戻って来ちまった！？ これは暗にお前の出番は殆どないと告げているのか！？」

c・m・「いえ。別に今回は誰でもよかつただけよ。出番はちゃんとおあるわ。」

さて、今回は主人公連合の出番なし！ 魔改造キャラと悪役のガチバトルで御座います」

京谷「その名も鮫島。なのはWikiにおいて、その紹介文わずか二行と言う奇跡のモブキャラ！」

c・m・「しかし、この作品においては話は別！ その正体たるやチート主人公もびっくりの強キャラ！ ぶっちゃけ、素手だとチート組では歯が立ちません。」

むしろ、マクスや直也のような接近戦メインキャラでもアウトです。武器持ちなら話は別ですが」

京谷「魔改造……それは決して行ってはならない行為なのかもしれない。ぶっちゃけ仮面ライダーもびっくりの改造だな。」

つーか、あんだだけ笑う男様との対戦フラグ立てておいてこれかよ……」

c・m・「ごめんなさい、笑う男様のチームはもう少しだけ待って下さい」

ちゃんと出番はあるので」

京谷「ところで今回、質量兵器は怖くない発言があったけど、実際どうなの？」

c・m「あれはあくまでも私個人の独自設定です。公式とは関係ないので本気にしないように。」

まあ、実際に質量兵器の方が上ならとつくの昔にベルカなんて必要なくなってるでしょうしね」

京谷「でも、一概には言えないよな。管理局も規制してるし……」

c・m「まあね。古代ベルカでも質量兵器を使う連中との争いがあつたつて言うし、小型の核なんて悪夢以外の何物でもないわ」

京谷「ちなみに小型の核は戦時国際法で禁止されていたりします。危ないし、密輸なんかされたらまずいからな。」

さて、次はベリアエル・バトオについて」

c・m「彼に関しては元が管理局の武装局員……という過去設定だったので、口調を出来る限り厳肅な軍人っぽくしつつも、やっつてる事は悪役といった感じにしましたが、Kyôさま、どうでしょうか？」

御不満があれば言つて下さい」

京谷「ちょっと狂気が足りない気がするよな。何と言うか、正々堂々過ぎると言うか」

c・m「その辺り、賛否両論出そうね……まあ、やっつてる事は悪そのものなだけだね。」

鮫島さん叩き潰すし、幼女殺そうとするし」

京谷「何かとシヤレになってないよな……この作品」

c・m・「まあ、そう言わないで。」

さて、ここからは読者様のお礼に移らせて頂きます。

神崎はやて様、H a g a l a z さま。感想を頂いた事を誠にうれしく思っています。ありがとうございました」

京谷「それでは今日はこの辺りで、失礼致します。」

014 紅き姫君の復活

「はぁ……はッ、はッ」

「大丈夫、アリサちゃん？」

走る。疾走と言うにはおこがましい速度であるが、それでも二人の少女は走っていた。

吹き抜ける風は冷たいが、熱を持つ肌には心地いい。

手に握るのは携帯一つ。自分たちの居場所を示すものであり、唯一の命綱でもある。

「平気よ。ちょうど隠れそうな幹があったわ。一先ずそこで」

難を逃れようとしたところで、

「いや、残念ながらそうはならない」

その男は、目の前に現れた。

「な……鮫島は……」

「俺がここに居る以上、答えは知れている筈だが？」

「嘘よ！」

信じない。信じられない。他の者ならばいざ知らず、あの鮫島が破れる筈はないと、そうアリサは誰よりも信じるが故に。

「ふん……」

血の着いた彼の眼鏡を投げられた時、彼女の心は砕けた。

そう言つて、男は手を振りかざす。本当に一瞬。全てを灰に帰す魔法を、ただ指揮者が指揮棒を振るうが如き動作で済ませようとする。そして、すずかはそれを感じ取る。肌を焦がすような大気の震え。全身から水分が抜けていく感覚。クリアになつて行く思考と、スローモーションになる世界の中で、ただ相手を見つめる。

本当にこれで良いのか？ 自分には何か、出来る事はないのか？

瞬間、すずかの心臓がドクンと跳ねる。全身の血が波打ち、沸騰する。自分が自分ではない。もっと別の何かになる感覚の中で、彼女は空を見上げた。

今日は十六夜。満月ではない。

“ああ……この月は、今の私に相応しくない”
現実が書き変わる。日常を歪める。欠けた月が紅みを帯び、徐々に形を取り戻す。

“こんな日は、満月であるべきだ”

さあ月よ、本物の姿を見せつけよう。君の主が姿を見せるぞ。そんな欠けた姿で、彼女の前に現れるのか？
それで彼女の心を射止められるのか？
否だろ。う。そうだろ。彼女の躍る舞台に、僅かな姿しか見せぬのは、役不足に過ぎると言うものだ。

「私の友達に……」

さあ振るえ、その力を。この月の下、誰が舞台の主役かを見せつけよう。

肌は雪よりもなお白く、その歯は刃の如く鋭く。

爪はマニキュアより紅く、そして獣より長く鋭く。

そして、その瞳はより紅く。

「手を出すな

！！！！！」

今宵、紅き満月の下で一人の姫君が誕生した。

麗しき吸血鬼。夜の一族の末裔にして最も濃き血の主。

弱り果てた一族にあって、始祖と同等の力を持つ者。

ドラキュリーナは、現代に蘇ったのだ。

ベリアエル・バトオは身を強張らせる。

無論それは一瞬のこと。この男に恐れはない。あるのは脅威。

狩る側が狩られる側に対抗しようとするのはよくある事ではあるが、目の前の少女は先の存在とは異なる。

これは魔人。人としての血と魔としての血を持つ異端の混血。

故に男は容赦がなくなつたかと問われれば否。

元より情け容赦なく殺す筈だったのだ。今更主旨を変える事などあり得ない。

有るのはただ一つ。友として、同じ人間として死ぬことになる筈だった少女が、自分とは違うモノになったとき、それを人間のままの少女が受け止めるのか、それとも、その少女の心の中で友では無くなってしまふのか？

それだけが、気がかりだった。

せめて痛みもないうまに。もう一人の少女が、違うモノになってしまった事に気付く前に、全てを終わらせようとしたところで。

「すずか、逃げて

！！」

心の碎かれた少女が、そう叫んでいた。

しっかりと前を向き、己の為に違うモノになった少女を。

以前と変わらない。心配そうな目で。

「は……ッ！」

鉤爪が迫る。鯨島のそれと比べ、速さは劣るものの威力は同等かそれ以上。

それを受け、ベリアエル・バトオは吹き飛んだ。

「くッ……！」

対処に遅れる。前に目を向けられない。

実力は圧倒的に男が上。如何な手を使おうと、少女の爪牙は自身には届かない。

だというのに。

“落ち付け、前を向け！”

その手に、力が入らない。

ああ、何と麗しき友情。これが舞台ならば拍手と共に喝采を上げるだろう。

そして涙をのみながら、悪魔のような男が倒される事を願う筈。だが、そうあってはならない。

“この二人を殺さなければならぬ。そう決めた筈だ”

その為に、己はここへ来たのだから。

しかし、ここに来て男は月村すずかの実力を見過っていたと言っている。

欠けた月の姿が戻る、その意味を。

木々の梢が静かに揺られ、重なる木の葉は拍手の如くに囁いた。今は無風。断じて自然現象などではない。

「アリサちゃん。其処を動かないでね」

そう優しい声で友に語り、すずかは紅い瞳で男を見ると、静かに、だがはつきりと呟いた。

「枯れ落ちろ」

その瞬間、男は僅かにたたたらを踏んだ。

吸われているのだ。吸血鬼が血を吸う様に、いまこの空間全体の命を、この少女が吸っている。

例外があるとすれば、それはアリサの周辺ぐらいの物だろう。彼女の周囲に生える草を除き、他の全てが無残に枯れている。

おそらく、あの草の生える場所から一歩でも出た時、アリサはそ

の身をミイラの如くに乾かわせる。

だが、枯れ落ちる木々は彼女に恨みを向けはしない。

この森に棲む獣から蟻まで。広がる大木から草の一つまで、望んで彼女に命を差し出す。

最早人間が頂点に立った世界。自分たちこそが頂点と思いあがる世界に、ようやく姿を見せた霊長の頂点。

自然を愛し、自分たちと対話し、心の中で自分たちを枯らせることに涙した彼女を、どうして恨む事が出来ようか？

人間は自分たちの意思を気にせず、ただ欲しいままに狩り続ける。だと言つのに彼女は今、心から枯らす事に悔いている。涙を呑んで、前を向いている。

貴女こそ我らが主。故にこの身を差し出し、貴女を王と認めよう。我らが麗しき姫君。 ドラキュリーナ。

“ありがとう。私より永きを生きし自然よ”

静かに。だがしっかりと森に感謝の念を送りながら、彼女は怨敵を見据える。

「この夜は私の世界。貴方がどう動こうと、あの月がある限り私に吸われるだけです。加えて」

瞬間、大量の杭が男を刺し貫こうとした。バリアジャケットと咄嗟に発動した防御術式の賜物だろう。

木々の杭は男を指し貫く事はなかったものの、術を行使した分だけ力が抜けていく。

「これがお前の能力か？」

「素敵でしょう？ この夜は力を吸った相手が強ければ強い程効果が出るんだけど、貴方は規格外のようにですね。」

本当ならとづくに灰になっている筈なのに」

正しくブラム・ストーカーが描く串刺し公そのもの。しかし、この少女は従来、大人しかつた筈。

先程の怯えるだけの口調とは、方向性が百八十度変わっている。

「成程、力に吞まれている訳か……」

「何の事？」

「とぼけるな。口調程度ならまだ判らん事はないが、力の使い方が豪快すぎる。

俺は一瞬しかお前を見ていないが、本来ならもう少し繊細な筈ではないのか？」

それは男の勘だったか、あながち間違っではない。

先程まではただの少女だった筈が、ここまで完璧に力を使いこなせる筈がない。

恐らくは、魂に刻まれているのだ。その力と吸血鬼としての本能が。

「だとしたら？ お友達を助けるのに、繊細も豪快もないでしょう？」

貴方のような人には、と付け加え、身体から大量の杭を出す。

“効果は吸血……”と言うより吸精か。あれは吸った力の分だけ自分の力にするようだが、魂まで吸われる事はないらしい”

ならば安心だ、と言う様に男は立ち上がる。

少なくとも最大の不安要因は消え去ったのだから。

「その杭も効果は同じ……か？」
「ええ。刺した所から吸ってあげます。まあ痛いかもしれませんが」

だが、少女は気付いていない。この男と自身が、最悪の相性である事を。

「知っているか？ 吸血鬼は弱点がある。

とはいえ、十字架は生前がキリスト教徒であった者にしか効かんし、ニンニクや聖餅も地域によっては効果が薄い。

だが、共通している物もある。一つは銀、そしてもう一つは「

瞬間、わずか周りを焰が取り囲む。

この男の魔力変換資質は『炎』。最もポピュラーであると同時に、汎用性が高いそれは。

「吸血鬼の弱点だ」

「ぎ、あッ……」

燃える。彼女の身体が燃えていく。

末端が炭化し、全てが灰になるまで数秒と持つまい。

だが焰が彼女を包む瞬間に、それは起きた。目を眩ませる閃光と共に、肌を感じる浮遊感。

機械による疑似的な翼を持った少年が、月村すずかを抱えていた。

閃光の正体はスタングレネード。対テロ・暴徒鎮圧武器の定番に

して最高峰。

巨大な光と音響は敵の視力と聴覚の低下だけでなく、酷いものになれば嘔吐や昏倒も併発させるのだが……。

「まるで効果がありませんね」

「うるせえ。取り敢えず一旦引くぞ。槇野、手前は、」

「駄目です！ アリサちゃんがまだ下に居ます！」

唐突に、東 興輝に抱きかかえられていた月村すずかが割って入る。

だが、彼女の言葉に、興輝はため息と共に指を指す。

「それならあいつが救助済みだ。忌々しいが、さっきのスタングレネードと言い、一応は役に立つらしい」

そうして指を指した先には、槇野来栖に抱きかかえられたアリサの姿があった。

ただし、その顔は好きでもない男に抱かれていた為か、痛く不満そうであったが。

「……一応お礼は言っておくわ」

「どうも。素敵なお嬢さん。それで、」

「槇野、話は後だ！」

会話を遮る様に、否、事実遮るつもりで声を発したのだろう。

眼下の森では、こちらを見据える男の姿があった。

「最悪だな。こっちは両手が塞がってるぞ」

「それなら、しばらく飛び回って頂けませんか？ あの月が出ている限り、あの男はいずれ灰になるだけですから」

成程、と納得し、興輝は旋回を開始するも、すぐさま下に目を向ける。

男の正面に、魔方陣らしきものが浮かび上がり、その規模は徐々に膨れ上がる。

「避けて下さい！」

槇野来栖の言葉に、東 興輝は慌てて回避行動に移る。

瞬間、それは起きた。

男から放たれる一条の光。摂氏にして数億度を超える火炎の線は紅き月を飲み込み、そして。

「月が、砕けた……？」

あまりにも非常識。あまりにも荒唐無稽。

いかにあの月が魔力による疑似的な物とは言え、それを造作もなく砕くなど。

「嘘……」

確かに月村すずかは覚醒したばかりの雛。始祖と比べれば術式の精密さには雲泥の差があるとはいえ、あの月は疑似的とはいえ月。

その強度も又、それに比類するものであった筈なのに。

「来ます！」

槇野来栖が叫んだ瞬間、地を蹴る爆音と共に男が上空へと身を躍らせる。

こちらに来るまでは時間にして、二秒はかかるまい。

“間に合わない！”

槇野と興輝、両者が絶望的な表情を見せた時、それは起こった。
空間の凍結。

男と興輝達を阻む形で現れたそれは、時間にして男に一秒程度しかロスを与えなかっただろう。

しかし、一秒もあれば充分と言える。

「その子をこちらへ！」

「クソつたれ！ 借りにしとけ！」

そう言うや否やずかを投げると、彼女は突如現れた魔方陣に吸いこまれ、次いでアリサもその魔法陣へ投げ込まれた。

「空間転移……時空管理局か」

そう言うや否や、男の目の前に黒髪の少年が現れると、汎用型のストレージデバイスを突き付ける。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。

ベリアエル・バトオ、貴方を第一級級指名手配ならび殺人未遂の現行犯で拘束させて貰う」

その光景を眺め、男はため息と共に、視線を二人に移す。

「どうする？ あの二人が何処に居るのか、お前に判るか？」

「この真下。丁度木々に隠られる位置だな。灯台下暗しとは良く言ったものだ」

相手の動揺を促すため、敢えて自信過剰な口ぶりで興輝は言ったが、すぐさま看破される。

「ち。クロノ、もう一度だ。次は艦内にでも、」

「その必要はない。いや、無くなったと言っべきか。」

レールそのものを壊す事は出来なかったが、切り替える程度は出来た。

お前たちに理解できるよう言えば、殺す必要性はなくなったと言っべきか」

「何？」

興輝が訝しむように見るのを気にも留めず、男は踵を返そうとし、一度だけ振り返る。

「ああ。それから管理局の者に礼を言っておけ。」

レールを切り替える一端を担ったのはお前たちだけではないのだからな」

そう言つと、今度こそ男は消えていく。恐らくは空間転移か何かだろう。

どちらにせよ、周囲に気配もなく、下に居るアリサやすずかが無事である以上は、本当に消えたらしい。

「さて、色々と話したい事があるが、まずあの二人を迎えに行つて上げてくれ。」

「話はそれからだ」

「いいのか？」

興輝の疑問も尤もだろう。本来なら事情聴取と言つ形で身柄を拘束しても良い筈だ。

何せ追跡されている可能性を考慮して、散々複雑な転移をしたのだ。

アリサやすずかを助けたのも、狙って行ったのではなく、単に森の中で攪乱する為に行動を取っただけである。

「構わないさ。彼女たちを助けたのは君達だ。お礼を言っつて貰う権利ぐらいはある」

クロノに促されるまま下に降りた後、すずかとアリサは興輝達に駆け寄って来た。

「あの、ありがとうございました」

「別に良い。それと、あつちの子は何で塞がってるんだ？」

丁寧にお辞儀をするすずかの後ろ、一二も無く遠くへと駆けだしたアリサの姿が見えた。

「あつ……その、鮫島さんが大変なんです！ 助けて頂いて、頼むのも何なんです、ちよつと来て頂けませんか？」

そう言われ、すずかと共に駆けだす、というより、すずかを抱えて興輝は飛ぶ。

時間にして十秒とかからない間、そこに倒れた男性の姿があった。

「さ、め。じま……？」

男性の上に、蹲る様に身を寄せるアリサ。

戻ってくると、死んではならないと、そう約束したのに。

なのに、貴方は死んでしまうのか？ と。

涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃに歪めながら、彼女はただ泣き叫ぶ。

「槇野。……治せるか？」

「元の姿ではない、という条件付きなら」

そう言って、槇野来栖はアリサの傍らに立つと、彼女を引き剥がす。

「どいて……鮫島が、」

「彼を治したいでしょう？ まだ死んでいませんよ」

その言葉に、アリサは食いつく。治せるのか？ と。食い入るよ
うな、縋るような眼で見る彼女に、槇野来栖はしっかりと頷く。

「彼が、元の姿で貴方へ向く事はない。それでも？」

「何でもいい！ 私が何かしなくちゃいけないなら、何でもするか
ら……だから！」

助けて、と。彼女は一言呟いた。

「判りました」

そう短く言って、彼は小瓶の水を振りかける。

たったそれだけ。だが、それだけで事は足りた。傷は治り、呼吸
も徐々にではあるが回復し出していた。

「今日一晩は安静にさせなければなりません。家の方に連絡は着き

ますか？」

その言葉と共に、アリサは携帯電話を開く。

だが、それも徒労だ。上空には、アリサの家の人間が寄越したのか、ホバリングするヘリの姿があった。

「これで一件落着ですかね？」

「ああ……赦してやるよ、妹の事」

「いいのですか？ 貴方は一生をかけて恨む権利があるのに」

「その分別の人間を救ったから……それに、俺が腐ってもあいつは戻らない」

そう言って、東 興輝はその場から離れようとし、

「あー……誠に申し訳ないんだが、ここに居る全員、艦長がお呼びだ。」

そちらが来れないのは状況を見れば判るので、一先ずその男性を安静にした後、会いに来たいと言う事らしいんだが「

うんざりした様子で、声をかけられた方に振りかえった。

「……空気読め。カツコ良く去ろうとするのが基本だろうが」

「そのまま逃げるつもりだったんだらう？」

「空気が読めないのは僕じゃなくて艦長に言ってくれ」

“まあ、こいつには助けられたしな”

内心感謝しつつも、それを口に出さず、取り敢えずは鮫島をへりに乗せるべく準備する。

さて、ここからどうなる事やら。

014 紅き姫君の復活（後書き）

c・m・「イェーイ！ 第14話の更新です！！」

マクス「そして今回は俺か……まあ確かに出番が少ないしな」

c・m・「諦めて。それがこのコーナーの宿命なの。

さて、今回も主人公連合の出番は殆どなし！ 魔改造キャラと悪役のガチバトル再び！」

マクス「笑う男様とのバトルかと思いきや、活躍したのは月村すずかか……。

しかし、吸血鬼として覚醒か。あの能力、公式には存在してねえよな」

c・m・「ええ。本来の夜の一族は身体能力の向上のみ。しかも鉄分が摂取出来ないからという理由で吸血行動を取っているだけだから、純粹な吸血鬼とは言い難いわ。

この物語に出てきた能力はあくまでも二次設定ですので、誤解の無い様に」

マクス「まあ、あんなトンデモ能力が本編にあつたら、魔導師の出番終了するしな。

つーか、あの能力はどっから持って来たんだ？」

c・m・「今回の月村すずかちゃんの能力はオリジナルではなく、私的神作品である『Dies irae 完全版』の登場人物。

ベイ中尉の能力を丸ごと持って来ただけです。オリジナルではないのであしからず」

マクス「Dies知らない奴は二コ動に行くか、wikipedia
aにでも行ってくれ」

c・m・「ちなみにベイ中尉の詠唱も入れようかと思いましたが、
流石にやり過ぎなので控えました。

けどあの詠唱は滅茶苦茶かつこいいので是非動画で聴いて下
さい『死森の薔薇騎士』はガチで凄いです」

マクス「ていうか、今回笑う男様、殆ど見せ場が無かったな」

c・m・「流石にすずかちゃんでも乗りすぎちゃったわ。次は女の子
を護りながら戦わせるんじゃないかと、もっと気兼ねなく戦える舞台
を作らないと」

マクス「そうだな。あいつらの武装は効果範囲広いし。

というか、おいしい所はクロノが持って行ったな、今回」

c・m・「彼に関してはアンチが多いけど、実際は凄くいい子なの
で、この作品では結構活躍する機会が多くなります。

私はとら八時代から彼の事を知ってるしね」

マクス「そう言えは、なのはの恋人だったんだよな、本来は」

c・m・「そうね、旧作のファンからすれば彼がエイミーとかいう
モブ如きと結婚したのには納得がいかないわ。

つーか何よあの女！ というか企画者！ クロノ君の好みは
『年下の凛々しい女の子』という設定だった筈でしょうが！ 何
『年上の明るい女』と結婚させてんのよ！？

私はある女との結婚なんぞ断じて認めねえ！ かつてカッ

ブル論争でクロノxなのは派だった私は断じて認めませんとも！

つー訳でこの作品でクロノはエイミィとは結婚なんぞ絶対にさせねえ！」

マクス「おい……うちの作者、なのはを狙ってたはずだが……」

c・m・「泥沼になるまで三角関係を楽しみなさい。恋敵が居た方が恋愛は燃えるのよ。」

言つとくけど、この作品は恋愛ゲームで言えば攻略難易度は最高に高いから。

ちよつとでも気を抜けばすぐフラれるし、下手にお風呂を覗いたりすると一気に好感度が下がるから」

マクス「正にデッド・オア・アライブ。振られたとしても作者勢は割り切る様に。……まあ、よっぽどの事が無い限りは大丈夫だがな。

さて、ここからは読者の質問に移るぞ。前回の鮫島はエアギアか仮面ライダーかと言う質問だが、これは？」

c・m・「名前に關してはエアギアから取りました。鮫でアギトなのはそこからです。」

ただし、死角からの攻撃や武器なんかに關してはオリジナルです。ちなみに鉤爪のデザインはプレデターのあれを想像して貰えれば判りやすいかと」

c・m・「さて、ここからは読者様のお礼にGOです！」

神崎はやて様、Hagailazさま。Kyoさま、笑う男さま、感想を頂いた事を誠にうれしく思っています」

マクス「それでは今日はこの辺りで……さて。てめえ、何でここに居る？」

興輝「いや、作者に落とされて……」

マクス「このルール判ってんのか！ 今回主役はってた奴が何で来てんだよー！」

興輝「いや、だから無理やり……」

マクス「おいc・m。ルール違反者はこの作品の中でどういう扱いを受けるか教えてやれ」

c・m「具体的に、空気でもないのに了解を得ずにここに来たキャラクターは、自ら空気と認められた事になり、

- ・基本的な出番が少なくなる。
 - ・戦闘シーンなど、尺を取る部分をカットされる。
 - ・ヒロインの好感度が下がる。
 - ・他のキャラと好感度が下がる（仲が悪くなる）。
 - ・原作キャラに出番を奪われる。
- といったマイナス要因が付くわ」

マクス「と、言う訳だ。まあ今回は狙ってきた訳ではないし、ペナルティは無しにしておくが、どうする？」

c・m「そうね。ドラえもんよろしく、四次元ゴミ箱にでも叩きこんでおきましょう」

興輝「あの……ゴミ扱いはちょっと」

c・m「仕方ないわ。せっかく穩便に済ませようとしたのに。マクス、四次元便器に流しておきなさい」

マクス「了解した(にやり)」

興輝「ちょ、待て！ ていうかマクス！ 俺達会った事無いよな！
？ 俺が何かしたか！？」

マクス「うるせえ！ 本編で出番が少なく、こんな場でしか活躍出来ねえのに、のこのこと出てくんじゃねえ！！」

最近じゃ作者にすら引き立て要因扱いされ、序盤の活躍が嘘のように消えて空気化している俺の気持ちがお前に判るのか！？」

c・m・「(……………気にしてたのね)」

興輝「要するに八つ当たりじゃねえか！ ちょ、待て、本当に流され、ゴボゴボ……………」

マクス「良い男は水に流す。これが基本だ。便器で顔洗って出直してこい」

c・m・「……………今までで一番むごい終わり方ね」

意識を失ったままの鮫島をベッドに寝かせ、槇野と興輝は部屋を出た。

リビングに居るのは、未だに鮫島の看病を続けるアリサを除いた、先の事件に関わった者全員。月村すずか、槇野来栖、東 興輝と管理局員……正確にはリンデイ、エイミィ、クロノ。そして月村家の一同とアリサの両親だ。

ここに来た際に、自分たちの身の上で起こった事や管理局の説明は終わっている為、説明する必要はない。

来客用のソファに座る管理局員と興輝達に、保護者一同は頭を下げた。

「ありがとうございます。お陰で娘たちは助かりました」

「気にしないでください。それがこちらの仕事ですから」

「俺たちも、偶々出くわした結果、助ける事になっただけです」

そう言いつつも、やはり素直な感謝の念という物は、こそばゆいものがあつたのだろう。

興輝は頭を掻きながら横を向き、槇野はそれを見てくすくすと笑っていた。

「……その男が再びやってくる可能性は無い？」

そう月村忍が尋ねると、リンデイは顎に手を当てて提言する。

「そうですね。出来れば、彼女たちを管理局で預ける事も、」

「その心配はいりません、艦長。あの男は二人を殺す意味は無くなつたと言っていましたから」

が、その提言を横からクロノは止めに入る。
渋い顔をするリンディだったが、クロノに取っては知った事ではない。

「そう。それなら安心。けど、すずかの事は、どうしたら良いかしら?」

月村忍の不安も尤もである。

夜の一族。吸血鬼そのものである彼女の一族の力は、はつきり言
って一般人には受け入れがたい。

この国には退魔の一族や忍者が当然のように存在しているとはい
え、やはり奇異の目は避けられない。

最悪、彼女を拒む人間が出てくる可能性は当然の如くにあるのだ。
まして、年々薄れていた吸血鬼としての力が、ここに来て隔世遺
伝によって歴代最高の力を得てしまった。

だが、そんな事は瑣末事だろうと言わんばかりに、興輝は口を開
く。

「それは本人が決める事だろう?」

君はどうしたいんだ? という風に問う興輝に対し、月村すずか
は少しだけ戸惑い、だがしっかりと、ここに居る全員に対して口を
開く。

「私は、皆と友達でいたい。普通に学校に通って、休みの日に一緒
に遊んで、塾の日には、ノートを見せ合って、たまには喧嘩もして
……そんな日々を、これからも送りたいから、だから! アリサち
ゃんや、なのはちゃんに本当の事を伝えたいです!」

その言葉に興輝は微笑む。

その決断は正しい。隠したい事、言いたくない事だとしても。自分が他とは違うモノだとしても。

その勇気を持って話せば、きっと判って貰える筈だ。

「そうか……きっと、受け入れてくれると思う。君の友達なら」

こんなにも、真っ直ぐな子の友達なら。

「はい！」

そうして、すずかは興輝に微笑んだ。花の咲くような、眩しい笑顔で。

「さて、それで今後についてですが」

そう言ってリンディは全員へ意識を向けさせる。

本来の意味で空気を読めていないのはクロノではなく、この女ではあるまいかと興輝は感じながらも、ドギマギとした心境を隠す事が出来たので内心ほっとしつつ、何処か煮え切らない表情でリンディを見た。

「まず、今回取り逃がした危険人物に関してですが、今後彼を見かけた場合は我々にご一報ください。

無論、無理には言いません。今後、貴方方は通常の生活に戻って頂いて結構です。

次に、その二人に関してですが、もし良ければ今後あの男への調査を兼ねた協力体制を取って頂けませんか？」

「協力？」

その言葉に首を傾げる興輝を前に、リンディは柔和な笑みを浮かべる。

「ええ。貴方達の力を見せて頂きました。

「この世界には、貴方達のような方が多く居るの？」

「さあな……少なくとも、十人は居た筈だ」

あの日。自分と自分の世界の真実を知った日。

あの墮天使の下に連れて来られたのは、確かそれ位だった筈だと、興輝は記憶の糸を手繰る。

「その人たちは何処に？」

「知る訳ないだろう。十人って言うのは多分それ位は居る筈だって事だ。当てにするな」

無論嘘だが、この女がそう言った事を知りたがっているのは目に見えている。

でなくば、こんな事は言わないし、そもそもこの女が力のある人間に固執する性質なのは判っていた。

「そうですね。それで先程の、」

「艦長、自分は、」

「クロノ執務官。この場での上官への進言は認めません」

有無を言わせぬとばかりに口を塞ぐリンディ。

それを見て、興輝と槇野は内心ため息をついた。

「いいぜ。認めてやる。ただし、あくまでも協力だ。

「そっちが気に入らない真似をしたら即刻、縁を切らせて貰う」

「私も同意見です。貴方方の指揮下に置かれるのではなく、あくま

でも協力である事を忘れない様に」

念を押す様な槇野と興輝の言葉に、リンディは笑みを浮かべながら頷いた。

尤も、クロノの方は苦虫を噛み潰すような表情だったが。

そして。区切りがついたかと思いきや、唐突にそれは起きた。

個室のドアを蹴破るかのように飛び出してきたアリサ。

その表情は、今にも泣き出しそうなほどに切羽詰まっていた。

「お願い、来て！ 鮫島が……鮫島の様子がおかしいの！！」

その言葉に、アリサの父親は慌てて駆けだす。

この後、興輝達は、信じがたいモノを目にする事になるとは知らずに。

息が荒い。呼吸が乱れ、発汗は留まるところを知らず、魔されながら眠る鮫島をアリサの父である、デビット・バニングスは見た。

「鮫島……」

思えば、随分と長く働いてくれた。

駆け出しの企業化で会った頃、自分のビルがテロに遭った時、偶々ガードマンをしてくれていた彼のおかげで命が助かり、その後は

ボディーガード兼運転手として勤めてくれた。

自分に妻が出来た時、仕事とは関係ないにも拘らず妻を護り、娘が出来てからは娘の運転手として働いてくれた。

今、自分がこうして暮らしていけるのは、彼が居たからだと言っている。

そして、その恩人が苦しんでいる。

娘が涙する程の恩人が、今、ここで。

「お願い……起きて、起きてよお………」

震える声で発する泣訴。そんなアリサを前にしてさえ、鮫島は動けない。

やがて震えが徐々に収まり、汗も引いていく。

だが楽観は出来ない。これで鮫島が目を覚ますどころか、二度と目を開かない可能性もあるのだから。

「そろそろですか………」

槇野がそう呟くと共に、ドクン、と鮫島の全身が跳ねる。

手足が震え、ビクビクとベッドを小刻みに軋ませる。

「鮫島!？」

叫ぶアリサの声が届いたのか、鮫島は声の方に首を向けるも、依然として眼は開かない。

やがて、震えと共に徐々に変化が訪れる。

手足や顔に刻まれた皺が消え、白い髪は黒へと変わる。徐々に若く、徐々に小さく。

身体の震えは電気ショックを与えたかのように大きくなり、身体の変化は如実に現れる。

そして。それは起きた。

「成功……ですね」

その槇野の言葉を、果たしてこの場に居た誰が訊いていたのか？
少なくとも三分の一の人間は、目の前の事態に着いて行けては無
いだろう。

何故なら。

「お嬢様………？」

彼は、若返っていたのだから。

「鮫島、なの………？」

アリスの疑問も尤もだ。見た目自分と同じ年ぐらいの少年が、あ
の恰幅の良い老人だったなどと、何処の誰が信じられようか？

「はい………しかし、これは一体？ 旦那様？」

「鮫島、お前なのか？ 私が判るか？」

「デビット・バニングス………私の仕える、お嬢様のお父上であり、
私がかつてお仕えしていたお方です」

そう答えるも、やはり鮫島自身、動揺は隠せないのだろう。

無理からぬことである。あの皺がれた声は、今や鈴の鳴るような
美声へと変わり。

その顔つきは、少女と見紛う程の美貌を持っていたのだから。

「私の事、判る………？」

「勿論です。ご心配をおかけして、申し訳ありません」

なら、と彼女は区切る。これだけはどうしても、確かめておきたいと言う様に。

微かに声を震わせて、未だに自分が覚えている、あの事を。

「わ、私が……、」

それはひどく不格好だったと思う。あの日、あの時のような笑顔でそれを言う事は、今の自分には出来っこないのは判っている。

だけど、静かに耳元でアリサは囁く。かつての己の言葉。ほんのささいな、けれど、消える事の無い記憶。

「When it grows . . . (大きくなったら……)」

今は恥ずかしくて、こんな形でしか聞けないけれど……。

“それでも、貴方が覚えてくれたなら”

「『It will become your bride if I grow.』(大きくなったら、貴方のお嫁さんになってあげる)」

その言葉を、彼は覚えてくれていた。

誰にも聞こえぬよう、耳元で速く囁かれる言葉。

その言葉に、アリサはどれ程救われただろう。

覚えていてくれた。自分だけの、空回りではなかった。

本気ではない事ぐらい判っている。子供をあやし付ける様なものだと言う事ぐらい理解出来る。

“けど、それでも良い。貴方が、覚えてくれたなら”

これ以上、望むモノなんて、ない。

自分と同じ背丈ぐらいの子供を抱きしめて、アリサは泣き叫ぶ。涙と鼻水でぐちゃぐちゃになって、普段なら決して誰にも見られたくないような顔で、ただひらすらに泣き叫んだ。悲しくないのに、嬉しいのに、それでも涙が止まらない。

そんな彼女の髪を、鮫島はゆつくりと、優しくなでる。

昔、父親が家にあまり居られなかった時、父を待ち続けて泣くむ彼女へ、こうしていたのを思い出しながら。

勿論、昔とは違う。あの大きな手も、たくましい背中も、とても小さくなってしまったけど。

それでも、この暖かさだけは変わらないから。

ひとしきり泣く叫んだために疲れたのだろう。

無垢な姿で眠るアリサを膝にのせながら、鮫島は頭を下げた。

「この度はお嬢様を護り切れなかったばかりか、見ず知らずの貴方方まで申し訳ありませんでした。

そして、お嬢様と、私の命を救って頂いたこと、感謝に堪えませ
ん」

「いえ。こちらは偶然居合わせただけですし、貴方の命に関しても、幼児化というデメリットを背負わせてしまいましたから」

鮫島の礼に、槇野は思ったままを言い返す。

「着かぬ事をお伺いしますが、私の身体はどうなっているのでしょうか？」

「本来なら完璧に治すのが筋なのですが、貴方の傷は致命傷であった為、肉体を幼児化させて傷をリセットする他ありませんでした。幸い記憶などに影響はありませんし、寿命に関しても問題なく…というよりも一度人生をリスタートする形になるでしょうね。申し訳ありませんが、戻す手段が無い為、運転手の職には大人になるまで就けません」

そう。今の鮫島はアリサやすすずかと同じ九歳児なのだ。流石に今のまま、車の運転をする訳にはいかない。

「その点は心配ない。鮫島には数え切れない程の恩があるのでな。戸籍に関してはこちらで何とかするし、生活も我が家で面倒を見る」

「旦那様……」

「そんな顔をしてくれるな。この程度では埋め合わせなどまだ出来んよ」

そう言って微笑むデビットを横目に、リンディは頃合いを窺って口を開く。

「鮫島さん……でしたね。起きてすぐに悪いのですが、今回の件でお伝えしなければならぬ事があります」

「伺いましょう」

そうして管理局の話……主な所では彼らの組織体系や存在意義、そしてリンディ達が就いている任務の後、今回すずかやアリサを襲った人物の説明を行うと、鮫島は判りました、と一息をついた。

「つまり、今回貴方はロストロギア……いわゆるオーバーテクノロジーの産物であるジュエルシードを回収し、本来送り届けられる筈であった場所へ届ける為にここへ来た。

そしてベリアエル・バトオ……お嬢様と、お嬢様のご学友を襲った男は、ジュエルシードが搬送される際に起きた事故を起こした可能性が濃厚……と。

「以上でよろしいですか？」

要点をまとめた鮫島に対し、ええ、とリンディは頷く。

「成程……それで、そちらの御二方はそれを手伝う為に協力体制を取ると？」

「知らぬ存ぜぬで通しても良いんだが、放っておいた時に出る被害がシャレにならないからな。

それに、今回の働きを見ても、こいつらに任せっきりなのは不安すぎる」

さりげなく無能扱いする興輝の言葉に、渋い顔をしながらクロノは口を開く。

「待ってくれ。一応、君達の窮地にも間に合ったし、そこまで頼りない事は無いだろう？」

「お前みたいな奴が揃っているなら問題ないけどな、実質トップなんだろ？」

他の連中はお前の足元にも及ばない。だから増援を呼ばずに来た。

違うか？」

その言葉にクロノは口を噤む。

確かにその通りだ。本来なら大人数で捜索に当たるであろう問題を、クロノ一人で任に当たったのは被害を出さない為。

ベリアエル・バトオと言う存在は常軌を逸している。それを間近で見た興輝や槇野だからこそ、そうした予想を立てる事が出来た。

勝てないまでも、出逢えば被害者と共にその場を離脱できる人員。そんな奴は、現状の戦力の中で切り札と呼べる人間だけだ。わざわざ死体を増やすような真似をする必要は何処にもない。

それが判っているからこそ、リンディは槇野と興輝の二人に協力を求めた。

決して死なぬとはいかぬまでも、生存率の高い人間だと言う事を見込んで。

その意図を、鮫島は正確に汲み取った。

「そして。それを私にも求めたい……と、先程の話から察すると、そう言う事なのでしょう？」

「誠に不甲斐無い事ではあります。自分達の力不足を痛感していますから。」

勿論、お礼は致します。個人的ではありませんが、一定の金銭と、今回の任に当たってそちらに使用して頂くデバイスを贈与致します」

無論、管理外世界でのデバイスの使用・所持等は、任務従事者以外は本来認められる事ではないのだが、やはり背に腹は代えられないという思いがあったのだろう。

元より悪用するような人間ではない事が判っている以上、問題は無い。

「判りました……とでも言わなければ、梃子でも動きそうにありま

せんね。

旦那様、しばらく暇を頂く形になりますが、宜しいでしょうか？」
「危険だ……それに、お前が居なくなればアリサが悲しむぞ」

誰よりも鮫島の身を案じ、誰よりも強く平和に生きて欲しいと願う少女。

自身の膝元で目を瞑る少女に、鮫島はそっと尋ねる。

「申し訳ありません、お嬢様。貴女様の平穏を護るため、少々離れねばなりません……」

そう囁くと、アリサはうつすらと瞳を開けて上体を起こした。

「判ってるわよ……鮫島が、私やすずかの事を考えて協力しようとしてる事ぐらい。」

それに、鮫島が強情な事も。だから、約束して。
ちゃんと戻ってきて。それで……そのときは、

“ 今度は、ちゃんと伝えたいから ”

今だって子供だけど、あんな風にムードも何もないままに言うなんて、認められる筈がないから。

「だから……」

上手く言葉に出来ないけれど。

そんなアリサを、鮫島は抱きとめる。言いたい事は、気付いているのだから。

「必ず、必ずや戻ってきます。」

ですからお嬢様、しばしお待ちください。貴女との約束は、必ず
お守り致します」

それが、自分に出来る唯一の事なのだから。

「で。突然こっさり全員を部屋から連れ出した理由は訊かなくても
判るんだが……ぶっちゃけ、お前がそう言うところに気が回るとは
思わなかった」

「そうねえ……何て言うか、クロノはそう言うのは向いてないと思
ってただけど」

散々な言い草な興輝とリンディであったが、クロノに関しても月
村すずかから、頼まれたただけなので強く言い返せなかった。

「ところで、月村すずかさん……だっけ？ そっちはどうするんだ
？」

「えっと、取り敢えずは探すのを手伝うくらいはしようと思います。
意外な所に落ちてるかも知れませんが」

「そうね。その辺りは、私から恭也に伝えとく。多分、協力してく
れると思うから」

そう月村忍は言う物の、実際、恭也が以前からこの一件に関わっ
ているため、その事を知った彼女は後々かなり不機嫌な日々が続く
事になるのだが、それは割愛する。

「それと、興輝君だっけ？ もし良かったら、すずかを護ってくれ

ないかしら？

勿論、普段は私がすずかの傍に居るから」

「ん？ ああ、別に良いぞ。こっちもどの道色んなところを見て回るつもりだしな」

そう一二も無く了承すると、すずかは興輝に頭を下げた。

「ありがとうございます。あの、興輝君って呼んでも良いですか？」
「じゃあ、俺もすずかかって呼ぶよ。月村さんだと判り辛いし」

そう言って、お互い笑い合う。

恐らく、ジュエルシードはかなりの数が回収されている筈。

残りをどれ程多く回収できるか。それが、この事件の勝者となるだろう。

残るジュエルシードは、あと僅か。

015 涙と約束（後書き）

c・m・「涙と約束……それは、純粋な乙女の心に残り続ける至高の宝石。第15話、スウィートな仕上がりでお届けしました」

レインシア「そして今回は特別ゲストとして、私レインシアがお送りいたします。

ここでの女性陣の出演は空気とかは一切関係ないのでお間違えのない様に。

ところで、何故私をゲストに？」

c・m・「今回はあくまでもハートフルなストーリーだからよ。

幼い想い出を秘めた少女と、その言葉を忘れず共に過ごした男性。

そんな内容をあんな朴念仁共に任せておける訳ないでしょう」

レインシア「言ってますね。はっきり言って、この男性陣は恋愛に関しては鮫島さんの爪の垢を煎じて呑むべきです。

一体どうしてこの男の人はあんなに駄目なんでしょうか？」

c・m・「あれじゃない？ その気の無い振りしてれば女性が寄りてくるとかいう馬鹿な妄想に浸ってるか、頭のネジを戸棚の上に置き忘れて埃を被らせてるかのどっちかよ。

女を舐めるなって言いたいわ。……ていうか、レインシアちゃんも大変ねえ。一緒にお風呂まで入ってて見向きもしないとか、普通ああいうアピールしたら判るでしょうに。私なら見限ってるわよっ。」

レインシア「まあ、マクスがああいう人だと言うのは割り切ってますから。」

でも、確かに多いですよー。女性の心が判ってないっていうか。

女心と秋の空っていいですけど、それは女の人と一緒に紅葉を見たいのに、男が何故か空見てるだけって感じがしますし、やっぱりその辺り鮫島さんを見習うべきです。こう、伝えきれない所も判ってあげる部分と言うか、女性への包容力というか」

c・m・「うん。やっぱりこういう会話は女性同士でしか出来ないのが良いわ。」

けど、この作品の男共は特に駄目な連中が集まってからね……バカばかりよ、ホント」

レインシア「あれ？ でも御剣さんとかは本編ではやてちゃんの好意に気付いてましたよね？」

c・m・「あの人は対応はともかくとして、好意に気付いているだけ及第点ね。」

まあ、気付いた後でどうするかが一番重要なんだけど」

レインシア「そういえば、直也さんとかはどうなんですか？」

c・m・「あれは確かに一途だけど、何と言うか引つ張り過ぎなよ。こう、別れた女性の事をずっと思い続けている感じと言うか……良く言えば純情だけど、悪く言えば粘着しすぎ」

レインシア「それはそれで困りものですよ。というか、本当にダメ男ばかりですね」

c・m・「ホントよ。連中がここに来たら雰囲気は確実にぶち壊し
そうなもの」

レインシア「想像したくないのに想像できてしまうのが嫌ですね。

けど、ここ最近ホントに主人公組が活躍してませんね」

c・m・「そうね、一応は次の次から他のキャラが登場予定なんだ
けど、今回アリサのデレをたっぷり書いたから、このまま主役交代
してしまおうかと思った事が15話書いて二十回ぐらい考えたわ」

レインシア「流石に……それはちょっと」

c・m・「冗談よ。ま、主人公組が活躍してないけど、その辺りは
アリサのデレ分を補充できた事で我慢しなさい。

ここまで強烈なデレはそうは無いわよ。

ちなみに鮫島以外には基本ツンだから。男共は自分にもデレ
てくれ！ とかいう期待はしない様に」

レインシア「まあ、好きでもない男性にデレる必要性って皆無です
しね。

ところで、鮫島さんが九歳児になってしまいました
ビジュアル的にはどんな感じですか？」

c・m・「私的にはHELLSINGのショルターをさらに幼くし
た感じです。ショルターはネットに画像があったりpixivで検索
すれば確実に出るのでそつちを参考にして下さい」

さて、ここからは読者様のお礼に移ります。

神崎はやて様、Hagailazさま、ジョージ・ワシントン

三世。感想を書いて頂き、汗顔の至りでございます」

レインシア「ジョージ・ワシントン三世さまは、こちらの作品に出たかったと言う嬉しい言葉を頂いてしまいました。ありがとうございます」

c・m「けど、この作品はあくまでオリジナル主人公じゃないといけないっていう制約があるのよね。

残念だわ」

レインシア「仕方ないですよ。幾ら魔改造キャラやTSでも、それを許可しちゃったら版權の主人公で埋まっちゃいますから」

c・m「そうね……DIOさまとかは特に良いキャラだけど、何人も来られると流石に困るし」

レインシア「ですね……ジョージ・ワシントン三世さま、その応援の気持ちをしっかりと受け取って完結へ目指して行きますので、これからよろしく願います」

c・m「今回はストーリーではなく、鮫島の設定を大公開しようと思います。

本編では語られなかった過去、そして彼の人生ドラマを是非ご堪能下さい」

レインシア「それでは今日はこの辺りで、失礼致します」

015・05 魔改造キャラファイルVOL1 “アギト”の鮫島(前書き)

今回はストーリーではなくキャラ紹介です。

本編では語られなかった内容を、心ゆくまでご堪能下さい。

アリサ・「さて、今回は番外編！ というわけで、私達が今回送るのは？」

鮫島「私、鮫島の経歴で御座います。いやはや、私如きモブにここまでなさるとは、本編も書かずに作者は何をしているのでしょうか？」

アリサ・「完璧主義も考えものね。こんなの見なくてもストーリー上まったく問題ないからって、飛ばされたら苦勞が水の泡でしょうに」

鮫島「おっしゃる通りです。それでは、これ以上お話を続けるより、実際に見て頂きましょう」

アリサ・「それでは、これが私の自慢の従者です！」

魔改造キャラVOL1

鮫島

鮫島……それは、なのはwikiで長年勤めてる運転手と言う在り来たりな表現で終わる悲しきモブキャラ。

というリリカルなのは本編の設定をここで語っても仕方がないので、ここでは設定の時点で魔改造された鮫島をご覧いただく。

彼は性こそ日本名ではあるが、実際の所イギリスの孤児であり、教会に引き取られた子供だった。

ちなみに両親ともに日本人であり、鮫島と言う性は彼本来の性なのだが、肝心の名前の方は親に授かる間もなく捨てられた（正確には授かる予定だったのかもしれないが、本人に伝わる間もなく捨てられたため、どの道意味をなさなかっただろう）。

そのため彼の名前は立場によって変わるものの、本来の名前はない。

その苛酷な出生からか、性格が随分と荒んでしまうかと危惧されたが、引き取り手の孤児院の経営者（教会の司祭）が非常に人道的であったため、誰よりも優しく、勤勉な少年へと育つ。

だが、孤児院は経営が厳しく、彼は自らの食いぶちと教会へ援助金を送るため、当時募集のあったフランス外人部隊へと入隊を決意する。

無論、司祭はこの事に反対したが、彼は決して人を殺さぬことを誓い、渋々ながらに入隊を認めさせた。

その後は部隊に残るため（当時の入隊希望者には貧しいものが多かったため）死に物狂いで訓練を耐え、総身に傷を残しながらも、十代半ばにして一流の軍人と呼べる才覚と能力を有するようになった。

この時の彼は格闘技術が抜きんでており、アサルトライフルで武装した現役軍人さえ素手で圧倒するほどであった。

この後、各地の戦場に駆り出されるも、人を殺さぬよう物資補給路の確保などと言った後方支援へと徹していたが、敵が協定違反をし（戦場であればさして珍しくもないが）民間人を襲ったためや

むなく射殺。

以後、教会に援助を行い続けるも、手紙を出す事はなくなった。

ちなみに物資の補給と聞けば多くの方は地味とか下っ端の役割かと思われるかも知れないが、戦場において最も重要なのが物資の補給であり、エリート連中でなければ着くことなど到底できないポジションである。

単純に考えて前線で戦う人間の食糧とか弾薬とかの問題もあるし、戦争の基本は如何に補給路を潰せるかが勝敗の分かれ目になるため。

この一件以後、外人部隊を脱隊。

その後はフリーの傭兵として各地を転々としていたが、戦場を越えるたびに生き残る術（人殺しの術と同義だが）に磨きをかけ、ベトナム戦争時においては一切の銃火器を使用せず、五体と、己の肉体を最大限活用するための鉤爪のみで敵部隊を殲滅する魔人となっていた。

ちなみにこの時から彼は己の武器と性から『“アギト”の鮫島』と恐れられるようになる。

また戦場における彼はその戦闘能力もさることながら、決して卑怯な手段を行使せず、卑劣な相手であるうとも正々堂々を貫き、敵を屠ったことから、現役を退いて二十年以上たった今でさえ、傭兵や現役軍人の間で『“アギト”の鮫島』はビッグネームとして各国の首脳や元帥以上に兵士たちに畏敬の念を禁じえぬ存在として語り継がれている。

ベトナム戦争以後も各地を渡っていたが、たまたま伝手で警備を務めたビルにテロリストが乱入。

社員の五分の一がテロリストとして紛れ込んでいた事も含め、絶望的な状況でありながら、人質を監禁した会議室から彼は当時駆けだしの経営者であったデビット・バニングス（言うまでも無くアリサの父である）に対し、無線で三十分だけ待つ様に伝え、行動を開始。

一時間に一人ずつ射殺すると声明した百名以上のテロリストを一人も殺さず、一切の音も無く、カーテンの一つさえ傷つけることなく制圧した。

この事件の折り、どうして誰も殺さなかったのかをバニングスに問われると、鮫島は

「私はここを護る任に就きました。社員を傷つける事は契約に反します」

と答え、以後バニングスから絶大な信頼と評価を得るとともに、バニングス家のボディガード兼運転手を務めた。

バニングスが結婚し、アリサが生まれてからは妻子を守るよう頼まれ、アリサが成長してからは彼女専門の運転手となった。

なお、運転手となってからの彼は、その達観した職業意識と、自身の人生観からか、

『アリサお嬢様には決して血を見せてはならない。この子が歩くのは光の世界だけだ』

と決意し、以後自身への戒めとして、鉤爪を使う事は無くなった。

……と。ここまでが鮫島・魔改造バージョンの設定なのだが、その有り余るチートスペックと過去の悲痛さゆえに、何でこいつが主役じゃねーんだよ！

と、突っ込む読者も居られる事だろうが、そこはモブキャラ好きの作者の事。

「モブはモブだからこそそのカッコよさがあるんですよ！ 主役にはない生き様を肌で感じ取ってくれい！！」

と無茶苦茶な論理を押し通し、本来なら主役にさえなれるキャラをわざわざこんな化け物共の巣窟へと叩き込んだ。

ちなみに現役時代の彼はランボーよろしくへりを弓矢で撃ち落としたり、007なみのエージェント五十人を三日で殲滅したり、悪の秘密組織を一人で壊滅させたりと最強っぷりを遺憾なく発揮していたのだが、そこを書くとき話以上の話になるうえに主人公たちが置いてけぼり食らうので割愛する。

高町一族（管理局の白い悪魔も含めた）にも匹敵する最強クラスの間人であり、素手のみなら北澤直也やマクス・トレンジアでも勝てないのだが、本編では相手が悪すぎたとしか言いようがない。

ちなみにもしアリサをヒロインとして選択した男共（言わずと知れた化け物作者と主人公）がいたら、というのは読者が当然として疑問に思うだろう。

もちろんそこは溢れる従者魂を持つ鮫島の事。

「お嬢様の幸せの為！ 私はあえてこの身を引こう！！」

などと言つ台詞を言う筈がなく、当然の如くこの男は甘くない。
もし男が寄ってきたら。

「この私の屍を越えて征け!!」

みたいな流れになつていた事は確實であり、寿命を削る覚悟で肉体を覚醒させ、赤い彗星よろしく三倍の速さと某サイヤ星の力カロツトさえ太刀打ちできぬ肉体強度とパワーを得、ラスボスを遙かに超える強さで恋敵を追い詰める。

そして血みどろの殺し合いに発展した揚句にアリサは二人の男の愛に揺れ動き、アリサの親父も巻き込んで昼ドラ的流れにまで追い込まれ、ラストは浜辺で溢れる想いを拳に込めて地球破壊規模の殴り合いをしながらも決着を迎え、

「お嬢様。どうかお幸せに」

とかホザキながら砂浜に倒れ、自分を抱きとめるアリサお嬢様に己の本音を伝えつつ、沈む夕焼けと共に遅すぎた青春と命を散らせ、エンドロールが流れた事だろう。

……って、これじゃあ思いっきりこいつが主役だろうが!!

とまあ、ここまで書いておきながら アリサをヒロイン希望した作者と主人公はいなかった訳で、結果的に大団円を迎える事は確実になったのだが、どこか物足りなさを感じるのは作者だけだろうか……？

一応、笑う男様が後半に東 興輝のヒロインにと申し立ててきたが、当の昔に募集の締め切りが過ぎていたし、ずずかの立場が無

くなるので問答無用で却下した。

鮫島「……と。これが私の設定の全てなのですが。何でしょう？
この無駄に作り込んだ設定は？」

アリサ「……この作者は設定厨だからでしょ。北澤直也の設定とか、
これの三倍はあるらしいわよ？」

鮫島「明らかに時間の無駄で御座いますな」

アリサ「……実にその通りね。さて、設定も終わった事だし、帰りま
しょうか」

鮫島「そうですね、それでは皆様、ここまでお付き合い頂き、誠に
ありがとうございました」

アリサ「次回からは普通のストーリーに戻りますので、是非ご愛
顧ください。それでは、失礼致します」

鮫島「ところで、VOLUMEとありましたが、まさか続くのでしょうか？」

アリサ「……可能性としては十分に有り得るわね……」

016 届かぬ想い

時間は温泉旅館でのジュエルシート騒動の次の日……アリサとすずかの襲われる日の前日に遡る。

ここは海鳴市の都市部にして中枢。月光に照らされ、人々の多くが寝静まる時間帯にありながらも、未だこの区画の人間は眠りに就く事は無い。

遠見市のアパート、最上階。その展望から見下ろす町並みはさながら地上の星であり、ある種イルミネーションのようにさえ思える。尤も、その一室に住む住人に取って、そのような事は瑣末事であったし、のんびりと景色を眺められるような立場にはないのだが。

掌に灯る、微かに暖かな光をフェイトの手の平や腕と言った部位にかざす作業を一通り終わると、氷上京谷は良し、と頷いた。

「これで大丈夫だな」

「うん。ありがとう、京谷」

「助かるよ。あたしじゃ、そう言う事は出来ないからさ」

治療を終えた後、痛みが無い事を確認して、アルフとフェイトは頭を下げた。

とはいえ、京谷にとってはフェイト達の怪我を放っておくほど薄情ではないし、進んでやっている事でもある為、こう怪我を治す為にお礼を言われるのは、どこか遣る瀬無い。

「もっと、頼ってくれて良いんだぞ？」

「ありがとう。けど、もう充分だよ。明日は母さんに報告に行かないといけないし」

「結構、集まったからな」

現在、集まったジュエルシードは五つ。協力し合っている紫の騎士の集めたジュエルシードは六つ。

短期間によくぞここまで集めたモノだと感心する所ではあるが、やはり残り半数近いジュエルシードが発見できていない以上、不安は尽きない。

「お前にも、無理ばかりさせちゃったからね」

そう言って、フェイトは待機状態にある罅割れたバルディッシュを撫でる。

あの日、高町なのはとの衝突で次元震を引き起こすまでに至った衝撃は、当然ながらバルディッシュに甚大な損傷を与えていた。

時間の経過と共に回復はするだろうが、やはり無理はさせられない。

「明後日で完治……といったところか。」

なあ、明日の報告、俺も付いて行っていいか……？」

「良いけど、どうして？」

「……協力者だからな」

そう短く区切り、京谷は黙る。

本当は違う。京谷はこれから起こる事の多くを知っている。彼女の過去も、これまで受けてきた仕打ちも。

それが心配だからこそ、京谷は付いていく。その本心を隠したまままで。

そうしてフェイトとアルフが眠りに就いた後、天宮恭介は先程からずつとそこに居たかのような自然さで、ソファに身を預けていた。無論、最初からそうであった訳ではなく、空間転移によって長距離移動を連続で行ったただけだ。

「首尾は？」

「あらかた探したが、やはり見つからない。紫の騎士連中に捕獲場所を確認したんだが、位置にずれがある。

管理局か、高町の方が、」

「もしくは第三者、だな……」

予想していたことだったが、やはり簡単にはいかない。自分たちもそうだが、今この街には最低でも十人近いイレギュラーが割り込んでいる。

さらに言えば、紫の騎士のような自分たちとは一切無縁な連中が関わっている可能性も否定できないのだ。

「このままに放っておけないな。気になったんだが、旅館の折、十五か十四位の男……ここに来る前、千草さんと喧嘩になって奴がズタボロで見つかったんだよな？」

「ああ。最初は騎士の副隊長がやったとばかり思ってたんだが、どうも違うらしい。

隊長曰く、副隊長のデバイスはミッド式で非殺傷設定は基本解除する事はないらしいんだ。

副隊長に罪を擦り付けて逃げた第三者が居るってわけだ」

「そしてその第三者は見つからず……か。その男、北澤直也だった？ 意識は戻らないのか？」

当然の疑問である。もし目を覚ましたのであれば傷の治療代程度に情報を聞き出せばいいのだから。

だが、その疑問に対して恭介は頭を振る。

「無理だな。さっき確認したが、意識が戻っていない。

傷は治っても重傷だった事に変わりはないんだ。当分は満足に動けないだろうな」

つまりは無駄。自分達は一から情報を集めなくてはならないし、よしんば北澤直也が目覚めたとしても、その頃には自分たちがイレギュラーに遭っている可能性が高い。

「ま。そっちはこちらでどうにかするさ。お前はフェイトを護ってやれ」

「ああ……判ってるぞ」

そう言いつつも、どこか歯切れが悪い。

それがどうしてかは判っていても、京谷にはそれを解決する事は出来ない。

「なあ……どうしたら、あいつは笑顔になるのかな？」

だから、そう訊く事で、気分を紛らわせるしか無くて。

「その為に、行動しているんだろう？」

そう答えられる事も、判っていた。

「そつだな」

短く返した表情は、やはり物憂げなままだった。

S i d e - R y u y a K a n z a k i

「なのはは、どうしてる？」

「さっき寝たみたいだよ。だいぶ疲れてたみたいだから」

そうか、と短く返す。あれから、あの旅行から色々あった。

直也さんが病院に運ばれて、なのはは随分とショックを受けていた。

当然だろう。自分のすぐ近くで、事件に巻き込まれた人を見てしまったんだから。

幸い、外傷は無い状態だったからトラウマになる様な事は無かったけど、マクスから聞いた話では相当ひどかったらしい。

……下手をすれば、あのまま死んでしまっていた程だったというのだから。

「関係者だったのが唯一の救いだね。あの人も、龍也やマクスさんと同じ人なんですよ？」

「ああ……確かめたけど、間違いないよ。あれは自分たちと同じだ」

尤も、彼は作者ではなく、主人公のようだったが。

「なのははに、その事は？」

「伝えたよ。一般人じゃないから心配するなって。」

傷も無かったし、数日中には目を覚ますって。けど、それが問題じゃないだろ？」

きつと、それでもなのはは自分を責めて、抱え込んでしまう。
あの子は優しいから。誰よりも、他の人が傷つく事を良しとしな
いから。

……そんなあの子だから、僕は。

「龍也？」

「……ああ。ごめんなユーノ、心配掛けて。僕は良いから、もう休
んで良いよ」

そう言つて、静かにリビングに置かれたレイジングハートを見る。
罅割れたデバイスは治療をしているし、明後日には回復するだろう。

「五つ、か……」

「あれから、休まず集めてたもんね。レインシアさん達と」

そう。現状デバイスが使えるのはレインシアさんだけが、こち
らが探した後で封印作業を任せれば問題ない。

デバイスが使えず、自分の足だけで探すのは相当苦労しただろう。
今日も今日で、学校が終わつてすぐ、一人で出歩ける範囲を探し
て、その手に握りしめて戻つて来た。

「疲れただろうな……」

「すぐ寝ちゃったもんね」

これまでの事を思い返し、静かに拳を握る。

僕は、一体何をしているんだろう？

なのは、僕は君に何がしてあげられるのかな？

その疑問を胸に秘めたまま、僕は眠りに就く。
明日は、一緒に探そう。それ位しか出来ないけど、せめてそれ位はしたいから。

S i d e - K y o y a H i k a m i

朝が来た。どうしようもない位気分は最悪だが、提示報告である以上は行かなくてはならない。

「それじゃ、あたし達は残ってジュエルシードを探すけど……京谷頼むよ」

「判ってる。まあ、上手く話すさ」

そうアルフに返すも、やはり何処か落ち着かない。

フェイトは何処か嬉しそうにしている、母親のお土産にと、ケーキまで買っていると云うのに。

「京谷、行くよ」

「……ああ」

そうフェイトに短く返し、魔法陣の中へ入る。

これから起こる事への不安を、胸に秘めたまま。

そうしてこの城に着いた時、やはり不機嫌な顔でこちらを見るプ

レシアと対面した。

「席を外して貰えるかしら？ 親子水入らずで話したいの」
「ジュエルシードを渡すだけだろ？ なら俺が居ても、」
「京谷、お願い」

俺の言葉に、フェイトは割り込む。何時もの様な、こちらを心配する様な、申し訳なさそうな瞳ではなく……。

どうして、そんな瞳をするんだ？

……その瞳は、俺が邪魔だと告げていた。

「……駄目だ。俺は、」

「出ていって！ 母さんと話したいの！」

どうして、そんな声を出すんだ？ 俺は、俺はただ……。

「なあ、」

「お願い」

その無機質な言葉に、今度こそ俺は踵を返す。

「判ったよ……」

そう短く告げて、部屋を出ると、予想していた怒鳴り声と音が聞こえて来て。

俺は、問答無用で閉じられた門をぶち抜いた。

「ぶざけんじゃねえぞ……！」

何が水入らずで話したいだ、クソつたれ！　こうなる事は判つてんだよ！！

フェイトを縛りつける拘束魔法を引き千切り、プレシアを壁に叩きつける。

「あいつは、お前の娘だろ！　手前が水入らずで話したいつつたのは、娘なんざ何とも思つてねえって伝えたかったからか！？」

足元に落ちた、踏みつけられたケーキの箱を指さす。

あれをフェイトが、どんな顔して選らんだか、アンタに判るか！？

フェイトがアンタの事を話す時、嬉しそうに話して、困ったように笑つてた。

いっつも、いっつも。あの子はアンタばかりを見て、アンタばかりを話してた。

……俺なんかではなく、アンタだけを見てたんだ！！

「何でフェイトの気持ちを考えない！　そんなにフェイトが……！！」

顔面が砕け、一撃で死ぬような魔力を込めて殴りかかるけど。

「やめてー！！」

その声が、俺の手を止めさせた。

「もう……やめて。母さんを責めないで」

ずると、壁にもたれかかるプレシアから手を離す。

どうしてだ？　なんで怒るんだよ？　こいつはお前の事を何とも思っていないんだぞ？

何でお前は……。

「フェイト……どうして」

そう訊かずにはいられなくて。蹲るフェイトに、手を差し伸べようとして。

「……触らないで下さい」

なあ？　どうしてそんな、丁寧な口調なんだよ。

一緒に協力しただろ？　食事の摂れないお前に料理を作って、おいしいって食べてくれて。

最初はぎこちなかったけど、徐々に笑い合えるようになって。なのに……。

「もう、良いです。ジュエルシードは、わたしが集めます。

母さん、わたし、頑張りますから」

「良いわ。その子は解放してあげる。元々使える様な奴じゃない事は判っていたもの。

その代わり、ちゃんと残りを集めるのよ？　あと十個。良いわね

？　フェイト」

「はい……母さん」

そう短く告げて、フェイトはエントランスを後にする。

けど、そんなんじゃ納得できなくて、お前に一言言いたくて。

「何でだ……あいつはフェイトの事を」

それだけは、言っておきたくて。

「京谷には、判らないよ」

その一言が、俺の胸に突き刺さった。

もうフェイトは振り返らない。俺とは口も利きたくないと言う様に、早足で転移用の魔法陣に駆けていった。

「……俺は」

俺は知っている。お前の過去も、受けてきた仕打ちも、全部知っていて……。

全部……知ってるだけじゃねえか。

壁に背を預け、ずるずると座り込む。

どうして気付かなかった？ 俺はフェイトの過去に同情して、ただ力になればと考えていた。

けど、それだけだ。ただ過去を知っているだけで、フェイトの全てを知った気になっていた。

本当は違うのに。あの子はもっと、色んな事を考えて、色んな事を想って、今日まで歩んで来た筈なのに。

「なのに」

下らない嫉妬。あの時、プレシアに殴りかかったのは、フェイトを助けたかったからじゃない。

勿論それもあっただろう。だけど、本当は妬ましかった。

フェイトが、あの母親の事ばかりを話すのが。フェイトが、あの母親の事を一番に想うのが。だから俺は、プレシアに手を上げた。

「……最低だ」

なんて下らない自己愛。なんて下らない暴力。それが、護りたいと思った少女を傷つけた。

俺は卑怯だ。全てを知った気になって、あの子を救おうと粋がつて、結局は決められたレールの上に乗っただけ。

いずれは勝手に終着する舞台に乗りかかって、所々でフォローして、それで全て解決できると思いがった。

それで……あの子の一番になりたいと願ってしまった。

“ 京谷には、判らないよ ”

認めよう。確かに俺には判らない。お前の気持ちも、その意志も、何も考えずに行動した。

そんな事を考えているから、俺の言葉は……あの子には届かなかったのだ。

世界中の人間を敵に回したって、勝てる力を持っているのに。

……たった一人の、女の子さえ救えない。

S i d e - K y o s u k e A m a m i y a

「どうしたんだい？」

「客のようだ」

投げ掛けられたアルフの言葉に短く返す。最初にこの世界に来た時出会った騎士の男、確か名前は……。

「グラフィールトレイ」

「先日も会っただろう。一々警戒してくれるな」

「何でここに？ ジュエルシードならまだ発見できていないが」

「君に言っても仕方がないが、先のジュエルシードの確保の為に仲間を数名失った。」

今朝方も二人発見されたよ。死に方は同じ……同一犯で間違いないな」

話には聞いていた。遠見市でジュエルシードを発見したというメンバーが、遺体で見つかったと。

「今回は旅館。君達が確保しようとした旅館で、もう一つのジュエルシードを確保すべく、副隊長が数名と動いた。結果……」

「まんまと餌にかかった。副隊長は民間人を殺しかけた人物と言う濡れ衣を着せられ、未だに塞ぎ込んでいるのを心配して戻ったと」

「……別に、心配だった訳ではない」

……ベタだな。この人も。

そんな事を考えたからか、少し気分が穏やかになった。けど。

「なあ……何であんたら、ジュエルシードなんて物騒なモン集めてるんだ？」

その答えの行きつく先は大体判っている。プレシア・テストロッ

サという人間が何を追い求めているかを考えれば、答えも当然の如くに帰結するのだから。

「失ったモノを取り戻す……そう言えば判るだろう」

嫌という程に、だ。

「本気か？ それはもう完全に魔法だぞ？」

あんたらの使う物ではなく、というニュアンスを含ませて喋る。

「判っている。だが、だからと言って諦め切れるものでもない。

僕も含め、ここに居る者は理不尽に全てを奪われているのだからな」

だからこそ、こいつらは手を伸ばさずにはいられない。

失ったモノ、取りこぼしてしまったモノを忘れられないからこそ、こうして動いているのだろう。

「野暮なこと訊いたな」

「構わんさ。同情して貰いたかった訳ではない。ああ、それから……」

「？」

「お前たちはもう自由だ。プレシア・テストロッサからの伝言でな。本来の要件はそれだ」

そう言って、グラフィイーは転移魔法で消えていった。

何の受け答えも、無いままで。

「だってさ。……アンタ、これからどうすんだい？」

何処か物憂げな表情で問うアルフに向き直る。
本来ならここまでで充分だ。元々こちらに送り届けると言う条件の下での協力。
過半数ものジュエルシードが集まった今、協力は必要ないと言えるだろう。だが。

「いや、続けるよ。乗りかかった船だしな」

「……良いのかい？」

「ああ。アルフや千草さんだけじゃ不安だからな」

それが単なる好奇心からなのか、それとも悲劇では終わらせたくないからという、有り触れた正義感から来るものなのかは判らないけど。少しだけ、それとは違う何かがあったから。

「ありがとうね。恭介」

きつと、その言葉を言ってくれたのが、嬉しかったからだろう。
素直にお礼を言うアルフなんて、とても珍しかったから。
……だから、何処かむず痒い気持ちになったんだ。

S i d e - o u t

日は変わり、時刻は夕暮れ時へと移る。

ジュエルシードは完全に回復し、なのは達一行と水無月珠樹達一行は海鳴臨海公園へと訪れた。

常日頃ではデートスポットとして人気があり、なのはの兄である恭也も忍とこの公園で出逢ったという経緯があるのだが、いまはど

うでも良い。

彼女達は、遊びに来た訳ではないのだから。

「あれか……」

そう言つて、神崎龍也は目の前の木を指さす。

梢を腕とし、幹に人間の様な顔を浮かび上がらせた大木。

公園の一角にはあまりにも相応しくない絵面だが、おかげで見つかりやすかった。

「さつさと済ませよう」

言葉と共に神崎龍也は駆けだす。

それは突風。刃を抜き、木へ迫る今の彼は鬼気迫る様相でさえある。

そう断言できる程、彼の存在はすば抜けていた。大蛇の如くのたうち迫る根も、槍の如く胴を貫かんとする枝も、彼には届かない。

或いは斬り倒し、或いは燃やす。

自分出来る事はこれ位しかない。だからこそ、神崎龍也はそれを徹底的に行う。

脇が甘くなる程に。

「龍也君！」

その言葉に振り向くも、もう遅い。

四肢を光の輪に拘束され、動けなくなった所へすかさず木へ止めを刺し、ジュエルシードを封印された。

「お前ら……」

「悪いね。こつちも事情があるんだ。」

まあ、あのお嬢ちゃんは取り合ってくれそうにないけど」

アルフの視線の先には、こちらに杖を向けるなのはの姿があった。

「あの……フェイトちゃん。一先ず、杖を下ろして」

「……判った」

既に封印は完了している。

このまま前回の次元震のような焼き増しになるのは好ましくないと考えたのだろう。

両者共に杖を下ろすと、お互いへと向き直る。

「ねえ、今度こそ話をしたいの。譲れないのは判ってる。

けど、わたしは貴女と、ちゃんと話がしたいから。わたしが勝ったら、話を訊いてくれる？」

そうして両者は、再び杖を構え合う。

一触即発。どちらともなく駆けだし、その杖が交差する。

否。交差する筈だった。

「そこまでだ」

涼しげな表情で両者の間に立つ、漆黒のバリアジャケットを纏う少年。

まるで赤子の手を捻るかのように無造作に、なのはのレイジングハートを素手で掴み。

振り下ろされたバルディッシュを、振り向く事も無く自身のデバイスで防ぎ切った。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。

「ここでの戦闘行為は危険すぎる。双方武器を収めてくれ」

そう言って、クロノは両者のデバイスから手を離す。

その言葉になのはは応じる様にデバイスを待機状態に戻し、フェイトは、その場から離脱する為の行動に移った。

「フェイト！ 一旦引くよ！」

「判ってる」

ジュエルシールドは離脱時に回収した。後は引くだけで充分だ。

そう、引く事が出来たなら。

「お待ち頂けますか、お嬢さん」

その行く手を、炎髪蒼眼の少年が遮る。高々と振り上げた片腕は無論容赦する事無く、少女を挽肉へと変える。

だが。

「待て！」

「……何のつもりだ？」

その手を遮るのは、以外にも彼に生み出された存在。

結った髪を揺らしながら、暁葉はその一撃を受け止める……事はせずに受け流した。

「いま殺す気だっただろうか？」

その言葉に、水無月珠樹は鼻で笑う。何を今更。あれだけ多くの騎士を殺して、今更そんな事を言うのか？ と。

だが判っても居た。この少年が自分のしたい様にする人間だと言

う事も、何処か甘さが抜けきらない人間だと言う事も。

「それ位にしておいたら？ 流石にそれ以上暁葉に手を出すなら、私が相手になるけど」

「フィオナか……流石に守護者相手にドンパチやる気はねエよ」

ゴシツクロリータに身を包んだ白髪の少女が爪を出したのを見たのだろう。

勝てない事は無いが、デメリットの方が大きいと判断し、水無月珠樹は矛を収める。

「待つて、フエイトちゃん！」

「悪いな。ここは引かせてやってくれ」

叫ぶなのはに返すのは、天宮恭介。

彼が姿を見せなかった理由は、転移する為の退路の確保である。

「そうは行かない！」

そう言いながらクロノは捕縛魔法を完成させる。

管理局きつての魔導師の捕縛。彼の師を除けば、決して解除出来ぬと断言できる魔法は、しかし。

「グレイプニルには程遠いな」

「な!？」

まるで蜘蛛の巣を散らすかのように、一瞬で霧散した。

「では、御機嫌よう」

そうしてフェイト達は消えていく。文字通り、跡形もなく。

「リンディ、探知呪文は？」

『無理ね。多重転移を行ってるし、術式も違う』

フェイト達が去った後、クロノはアースラに通信を送るも、帰ってきた答えは芳しくない。

『まあ、事情を聴くだけならその子達にも出来るし、こちらに連れて来てくれる？』

「……了解」

重苦しい溜息と共に、クロノはなのは達に向き直る。

また巻き込まなければならぬのかと心の片隅で、懺悔の念を抱きながら。

「そう言う訳だ、話を聞かせてくれるか？」

その要望に、なのは達は頷く。この事件を、解決に向かわせる為に。

016 届かぬ想い（後書き）

c・m・「選択肢一つで地獄行き！ 第16話、投稿完了」

御剣「そして今回は私か。いい加減空気扱いにも慣れてきたな。人間の環境適応能力とはつくづく恐ろしい。

しかし……京谷は今回悲惨だったな」

c・m・「こつこつ貯めた好感度も一つのミスで急降下。何この無理ゲー。そう思ったのは作者も同じです。

まあ、これは前々回の感想で御剣さんとHagalaさまが言っていた、異性の感情はどちらも判らない、という言葉そのまま物語で使用してみました」

御剣「何気ない言葉も物語の幅を広げるきっかけになる訳か。

今回の例は使われる者にとっては堪った物ではないが」

c・m・「そこが良いのよ。やっぱり読者の言葉は勉強になるわ」

御剣「まあ、肝心の感想は殆ど来ない訳だがな」

c・m・「この作品が不人気なのは今に始まった事ではないけどね。

というか、読者様は不満があれば言っただけで頂いて大丈夫ですよ？ 私は別に怒りませんし、慣れてますから」

御剣「Arcadiaでは壮絶なまでの罵詈雑言だったからな。今更どうこう言われた所で堪えんか」

c・m・「まあ、あつちには容赦ないから心が折れるんだけどね。…

： ホント、勉強にはなるけど容赦ないし」

御剣「人は打たれて強くなる事を身を持って学んだ訳だな。まあ、悪言を言われる度に道場で新米を締め続けていたのはここだけの秘密だが。」

それは置いておくとして、京谷が悲惨な分、Kyoさまがフラグ立ててなかったか？」

c・m「何でかしらね？ アルフとは友達感覚だった筈なんだけど、息が合いませんでしたのが問題だったのかも？」

これはこれで面白いし、アリじゃない？」

御剣「恋愛関係はこれ位にしておくとして、鮫島さんの設定には皆に驚かれたな」

c・m「作者冥利に尽きるわね。けど、神崎さまには作者として厳しいけど言っておかないといけない事があります。

上から目線になってしまいかもしれませんが、技を多く追加すると、キャラの設定を掘り下げるのは全く異なります。

むしろ技を追加しすぎると、キャラの方向性を見失いがちになってしまう為、出来る限りキャラに合った技を設定するか、むしろ何でもありにして方向性を絞った方が良いキャラが出来ます。

そして一番重要なのが、そのキャラクターの価値観や物事を決定する基準を、過去を作る事で決定するのがキャラづくりの基本にして王道です。

以上。キャラ設定づくりの一口口座でした」

御剣「一口？ とうか、結構厳しいぞ、その発言」

c・m「その方が良いのよ。神崎様には期待してるし、良いシナ

リオに良いキャラは必要不可欠なもの」

御剣「応援しているからこそその発言か。まあ理解は出来るが」

c・m・「勿論、気に入らなければ無視して頂いても構いません。これはあくまでも私の主観ですので」

御剣「では次に行こうか。笑う男様から『凄い人とながるから』という発言を頂いたが、これは過去にそう言ったのか？」

c・m・「うん……。それなんだけど、言った記憶が無いのよ。会合のデータはきちんとWordに記録して保管してあるんだけど、見当たらなかったの」

御剣「つまり、忘れていると?」

c・m・「笑う男様、本当にごめんなさい」

御剣「管理不足か……。作者として如何な物かと思っぞ」

c・m・「大変反省しております」

御剣「さて、そろそろ読者の皆様へのお礼に移るぞ」

c・m・「了解です。」

Kyoさま、神崎はやてさま、Haggalazさま、笑う男様。ご感想を頂き、ありがとうございます。

Kyoさま、Haggalazさま、暑さ対策は万全ですので大丈夫です。心配して下さり、ありがとうございます。」

御剣「それでは今日はこの辺りで、失礼致します」

017 選択と決意

時空管理局次元航空艦アースラ。そこに、彼らの姿はあった。

先頭のクロノに続く形で、なのは達一行は続き、最後尾……とい
うより、彼らから少し離れた状態で水無月珠樹達一行が歩いていた。

「不服そうだな」

そう先頭に聞こえない様な声で曉葉は投げ掛けると、何を言わん
やと言っばかりにシエリスは鼻を鳴らした。

「当然でしょ。数十年しか生きられない人間が時空を管理するなん
てね」

それは守護者である彼女の意地でもあったのだろう。

人が時空を管理するなど傲慢でしかない。

だが、それを訊いた所で管理局はどうと思う事もない。例え彼女
の正体を知り、彼女の声を訊いたとしても、彼らは動じはしないだ
ろう。

技術が進み、未開の地が消えることに人がその視野を広めるのは
歴史が証明している。

そうして領地が出来、国が出来、秩序が作られる。

見えない神に任せて安穩と惰眠を貪るよりも、自分たちの手
で道を切り拓くのが人間だ。

そして治安の維持とは必ず必要になる。それが軍隊であれ、警察
であれ、彼ら管理局であろうとも、やるべき事は変わらない。

全ては秩序の為に。人が人としての世界を構築する為にルールが
必要である以上、それを管理する者が居て然りなのだから。

「着いたよ。ああ、君達もいつまでもその格好では窮屈だろう。バリアジャケットは解除していいよ」

クロノの言葉に、龍也やなのははバリアジャケットを解除し、一息をつく。

「艦長。来て貰いました」

流石にこの人数では入りきらないと判断したのだろう。クロノが案内したのは艦長の執務室ではなく、局員の使用する合同会議室だった。

そして、そこに着いた時、なのは達は驚きの声を上げる事になる。何故なら。

「アリサ、ちゃん………?」

「なのは!?!」

そこには、本来居る筈の無い人物がいたのだから。

「え!?! どうして!?!」

「それはこっちの台詞よ! 龍也、もしかしてなのはもあの通り魔に巻き込まれたの!?!」

「通り魔?」

驚く両者ではあったが、これ以上話を食い違わさせるのは拙いと判断したのだろう。

クロノは両者の間に割って入り、一先ず席に着くように言った。

「クロノ、御苦労さま。

そしてこんにちは、皆さん。私は時空管理局提督リンディ・ハラ

オウン。名前で判ると思うけど、クロノの母親ね。

取り敢えず、面識の無い子もいるみたいだから自己紹介をして貰いましょうか」

そう言つて、一人一人名前を告げていく。今回会議室に集まったのは、なのはから始まり、龍也、マクス、レインシア一行。そして。

「水無月珠樹です。こちらが、」

「冥利暁葉だ」

「シエリスよ」

そう短く答え、彼らと別の経緯からこちらに来る事になった者たちへと流れる。

初めはすずか、アリサと続き、次いで興輝と槇野が挨拶を済ませた。

そして、今回一番の衝撃が訪れる。

「アリサ様の元運転手をしておりました、鮫島と申します」

「何い

?!?!?!?」

!

艦内に奔る衝撃。全員が目を丸くしながら見つめる物の、目の前の人物はどう見ても九歳前後の黒髪の少年である。以前と変わらないのは眼鏡ぐらいの物だ。

「おい……何があつた?」

第一声を上げたのはレインシアという前例があつた為に比較的落ち着いていたマクスだ。

とはいっても、周りと比べて落ち着いていただけで、多少の動揺は見られたが。

「私が若返りの薬を使わせて頂きました。かの英雄王ギルガメッシュも戯れにと使っていた物だそうですが」

サムズアップする榎野にマクスはどういうことだ？ と意識を向ける。

「まあ、これから私達がこちらに来た事情は説明しますが、彼はとつともなく凶悪な通り魔からアリサさんを護るために身を犠牲にし、重傷を負いました。ですが」

「傷が深すぎたからリセットしたって訳か」

「ご明察の通りです」

そうして彼らはお互いに情報を交換する。

神崎龍也達となのは、ユーノの出会い。ジュエルシードの搜索と目的。

突如指名手配犯に襲われたアリサ達と、次元漂流者だった興輝達の経緯。

それらを一通り纏めると、各々が運ばれた紅茶に口を付けたり背を伸ばしたりと、一旦手を休め始めた。

「こんな所で全部かな」

「けど驚いちゃった。なのはちゃんが魔法使いになってるなんて」

「わたしも、すずかちゃんが吸血鬼だったなんて知らなかったから怖い……？」

微かにおびえた声で、すずかは問う。ここが分水嶺。これから先、本当に友達として過ごしていけるのかという不安を織り交ぜた問い

に、なのはは慌てて首を振った。

「そんなことないよ！　すずかちゃんは、恐くなんてない！　わたしの友達だよ！！」

「なのはちゃん……」

「よかったわね、すずか」

涙を滲ませるすずかを撫でながら、アリサは微笑む。

これで終われるならば大団円だが、まだ問題は多く残っていた。

「しかし……紫の騎士ですか」

「ああ。それと、お前さんたちが遭遇したバトオとかいう男も気になる。」

流石にこのまま放っておく訳にも行かねえだろ。ジュエルシードとか言う宝石にしたって、それによって引き起こされる災害は世界を飲み込む程だって言うくらいだしな」

マクスの発言は尤もで、問題はまだ山のように残っているのだ。残されたジュエルシードも、まだ半数近く見つかっていない。

「私達、管理局員と興輝君達が協力して見つけてられたのが、今のところ一つだけ。」

そしてなのはさん達が見つけてくれたのが五つで、水無月さん達は一つ。」

計七つのジュエルシードが、ここに揃っている訳ね」

彼らは知る由もないが、紫の騎士とフェイト達が発見したのは合計十一個である。

つまり、残るは三つ。場所は。

「残るは海。陸地はこれだけの人数で当たっている以上、そこに絞られるね」

神崎龍也の言葉に、一同は頷く。

「けれど、もう充分よ。後はこちらで何とかするし、貴方達は日常の生活に戻ってくれて大丈夫よ」

「けど……」

その言葉には納得がいかないとばかりに、なのはは食い下がる。

当然と言えばそうだろう。初めは確かに巻き込まれただけとはいえ、ここまで確かな覚悟の下で行動してきたのだし、何よりフェイトとの決着も付いていない。

そして、その意思が判っているからこそ、リンディは二の句を告げる。

「そうね。急に言われても納得は出来ないでしょうし、今夜一晩ゆつくり考えて、それから結論を」

「いい加減にしてくれ!!」

瞬間、ダン! と会議室の机をクロノは叩く。その相貌は、明らかに怒りに満ちていた。

「艦長、貴女のやり方には賛同できない! そんな事を言って、この子たちがどういう判断を下すかは判っているでしょう!」

「クロノ執務官、」

「権限なんてどうでも良い! 管理局は民間人を巻き込む様な組織ではない筈だ!

もしそれが管理局全体のやり方だと言うのなら、僕は執務官としては動かない!」

ぎりぎりとお歯を噛みしめながら、クロノは訴える。

こんな事をする為に、管理局に入ったのではない。自分は父の、多くを巻き込まない為に任に当たり、殉職した父の背中を見ていたからこそ、この職に就いた。

“確かに最初は負の念からだった。父の死、『闇の書』の事件はきつかけだった。

けど……多くの人を護りたいからこそ、僕はここに居るんだ”

だからこそ、クロノ・ハラオウンは母を認めない。

確かに彼女の行動は的確だ。慢性的な人員不足である以上、優れた人材は必須であるし、フェイトとの繋がりもあるのだから困としても最適と言える。

万が一危なくなっても、航空艦内に転移してしまえば、重傷を負う事も無い。

こちらの損害を一切出す事も、協力者への配慮もした上で完璧な結果を出す。

だが、だからといってそれが認められる訳ではない。

「民間人が関わって良い問題じゃない。艦長、それは貴女が一番良く判っている筈だ」

多くの厄災を、悪意を見ているからこそ、それが判る筈だと、そう訴えるクロノに対し、リンディはしっかりと見つめ返す。

「そうよ。多くの人間が犠牲になる。だからこそ、最善の行動に移る。」

子供の論理だけで大人は動けない」

多くの厄災を、悪意をその目で見ているからこそ、リンディは臆することなく答えを返す。

たとえ道徳から外れようと、結果として多くを救うのならば、甘んじて悪役になる。それこそが大人だと言う様に。

「なら……」

「決裂よ、クロノ執務官。上官への命令違反として、貴方には謹慎を」

「待ちな」

その言葉をマクスは遮る。このまま行けばどうなるのか、その答えが、安易に予測出来たが故に。

「まだ俺達は協力しねえとは言ってねえぞ、なあ龍也」

「ここまで来たんだから、最後までやるよ、なのはは？」

「わたしは、フェイトちゃんともう一度話したいから」

決まりだ、と誰からともなく言った。

「君達は、どうするんだ？」

水無月達の方へ龍也は問う。短い間だったが、協力して貰っていた以上は訊かなければならない事だ。

「ん？ ああ、私達は好きにさせて貰いますよ。」

訊いた所によればこちらは人手が足りないそうですし、一先ずは協力と言う形で

「ありがとうございます。今日はもう遅いし、こちらで待機するのなら、アースラのスペースで余っている所を貸すけど？」

その提案に乗ったのは、興輝と槇野。そして水無月、暁葉、フィ

オナの五人である。

「じゃあ、今日はこの辺りで、」

『報告します！ 岬付近で九歳前後の少年が出現！ 目的はジュエルシードの確保と思われませす！』

解散を言い渡す直前の通信と共に会議室に送られたその映像に全員が釘付けになる。

雷雨の中、雨風を意に介す事もなく淡々とジュエルシードを収める少年。

氷上京谷が、そこにいた。

S i d e - K y o y a H i k a m i

時間は夕暮れ時、天宮恭介がグラフィーに開放を告げられた時刻まで遡る。

石畳に彷徨う視線。あの拒絶の言葉を受けた後、自身の力で海鳴市まで転移し、何をするでもなく歩き続けていた。

自分が何をしたいのか、どうするべきかが判らない。

当てもないままに歩き続け、そうして誰も居ない公園に辿りついた。

「もう……終わってたんだな」

微かに残る魔力の残滓。戦いの爪後は、ここで何が起きていたのかを如実に知らせていた。

そうして、目の前に一人の女性が現れた。いや、以前からそこに居たのだろう。

どう言う事かは判らないが、この女性に魔力探知は効かないのだ。

「一人？」

「ええ……千草さんは」

何をしているのか、と聞こうとして止めた。ここに居る以上は、自分とそうは変わらない筈だ。なのに。

「貴方を待つてたの。多分、遅かれ早かれ来たと思うから」

そんな、有り得ない事を言ってきた。

「なんで……」

「理由は無いわ。ただ、貴方の相方が良い雰囲気になってたから離れて、それから何時の間にか置いてけぼりにされちゃったの。」

「……って、こんな事ばかり言っちゃってたら愚痴になっちゃうわね」

「別に、良いよ」

本来なら敬語を使うべきなのかもしれないが、千草さんは気にしなかったようなのでそのままの口調で答えた。

「ありがとう」と呟くと、こちらに缶を投げてきたので、片手で受け取る。

「ナイスキャッチ」

そう言って、千草さんは自分の分の缶のプルタブを開けた。

黙っていても仕方ないのでこちらも開ける。ちょっと甘過ぎると

思って銘柄を見たが、ココアのホットだった。

「……幾らなんでも、子供すぎるだろ。俺、ホントは十代後半だぞ」
「そう？ 美味しいわよ？」

そう言う千草さんはBOSSのブラックコーヒーだ。夕暮れ時と相まって実に絵になっている。というか、渋すぎだった。

「……本当は、どうなんだ？」

「そうね……多分、貴方達が解放された原因は別にあると思ったから。」

それに、報告に行ってるって恭介さんから聞いてピンと来たの。貴方なら絶対に止めに入るってね」

短く答えながらコーヒーに口を付ける。まあ、流れを知っている人間ならそう考えるのが妥当だよな。

「結果は玉砕だったけどな。……フェイトに言われたよ『貴方には判らない』って感じでさ。」

確かにその通りだったんだ。俺、あいつの気持ちとか、そう言うの考えてなかった」

最低だ。自分の事ばかり考えて、今だって、こうして目の前の女性に、年上だからという理由で愚痴をこぼしている。

「人間そんなものよ。何時だって他の誰かが何をして欲しいのかを考えて、些細な事で傷つけるのを怖がって、時々喧嘩して……そんな風に生きていくの。」

常に正解を選び続けられる人間なんて、何処にもいないわ」

けれど、それが成功してしまうのが物語だと、千草さんは吐き捨てるように言う。

「私はそんなご都合主義は嫌い。何時だって誰だって、不安定な物の上に立ってる。」

だから思いやりって言うのが持てるし、人が人を傷付けない様に生きていける。

……駄目ね。今は聞き流してくれて良いわ。つまらないオバサンの説教だとも思ってた頂戴」

ぼんやりと海を眺めながら、どこか寂しげな笑みを浮かべた。
やがて、ぼそりと呟く。

「けど、これだけは聞いて。貴方は間違ってるんじゃないと私は思う」

「……俺は、自分のことしか考えてなかったぞ」

「それでも、あの子が大切だったんでしょ？」

確かに俺はあいつを大事に想ってたさ。けど、大事に想う事が正しいとは限らないじゃないか。

だから、あいつは俺を拒絶した。あいつの事を考えなかった自分に、あの子は怒ったんじゃないか。

「それは、フエイトにとって邪魔なモノだった。俺は、」

「それは間違いじゃない。誰だって自分を認めて欲しいと思うし、一生懸命頑張っている、心の何処かで別の何かを求めている。」

それは決して間違ってるんじゃない。人間として正しい感情の在り方よ」

「じゃあ、どうしろって言うんだよ……!?!」

確かに千草さんの言い分は判るし、間違ってもない。

だけだよ。それで何かが変わるのかよ？ 結局は自己完結して、行き着くところに行つて、ただレールに乗っかって事件解決して、それでどうにかなるのかよ!?

「私は別に、貴方に自分の価値観を押し付けようとは思わないわ。ただ、言っておきたかったの。貴方の選択は間違いじゃない。人は清濁を併せ持つて初めて人よ。善しくない人間なんてこの世にはいない。」

あの子の一番になりたいと言う事も、あの子の為に頑張りたいと言う気持ちも、全部あの子を想っているからこそ持てる気持ちだから。

そんな気持ちがあるから、貴方はここに来たんでしょ?」

そう言つて、千草さんはコーヒを飲み干すと、ゴミ箱に投げ込んだ。

「俺は……」

まだ、何かしたいのかわらなくて。進む道が定まらなくて。それでも。

「フエイトに、何かをしてやれるか……?」

進む事が出来るのか? こんな俺でも……。

「頑張れ若人。私は応援しているぞ!」

語尾を弾ませながら、千草さんは去っていく。

こちらの顔を見た時の彼女は、とても清々しくて、何処か満足げな笑顔だった。

そうして、俺はここに居る。

吹き荒ぶ風。轟く雷光。これらは全て自分が引き起こした物ではなく、近年の異常気象が齎した局地的な台風が原因らしい。

尤も、それも今日までだ。台風一過よろしく天気予報には明日は快晴とあるし、問題ないだろう。

おそらく、原因はジュエルシードそのもの。俺の目の前の巨大な竜巻の中心には、光り輝く三つの宝石が浮かんでいた。

「……面倒だが、手間が省けた」

結局はレールに乗ったまま。一気に攻め込んで舞台を壊したりする事は出来ない。

「l i c l a c l a l a c l i l l a c」
リック・ラク・ラ・ラック・ライラック

だってそれは自分の役目じゃないから。それを行うのは主人公で、自分はいくまでも間男だ。

「
s
μ
（来たれ虚空の雷、薙ぎ払え）」

だけど、それでも自分はこうしていたい。あの子の、フェイトの為に進んで行こう。

迷惑がられるかもしれないけど、それでも俺は、こうしていたい

んだ。

だって、俺は。

「『雷の斧』」

その先を考えるより早く、俺は天空を裂く極光の斧を振り下ろした。

その光景を、アースラに居た全員が見ていた。

天を貫き、海さえも断つ雷の戦斧。誰が知り得よう。その一撃は威力ではなく、発生の速さを念頭に置いた技だと言う事を。

そして、そこにあの少女が現れた。金砂の髪と、黒衣のバリアジヤケットを纏う者。

「フェイトちゃん!？」

叫ぶなのはの声は、当然届かない。だが、その二人は傍から見ても明らかに異質なものだった。

「様子がおかしい」

「どういう事? あの二人は、仲間では無いのですか?」

マクスの言葉にレインシアは疑問を投げかけた。

当然と言えばそうだろう。初めて会った時の二人は、ぎこちないながらもお互いを何処か信頼し合っていたように見えた。

だが、今は違う。

フェイト・テストアロツサは、氷上京谷に対して信頼とは別の感情を見せている。

それは。

「拒絶……かな」

そうクロノは呟く。そしてそれは事実正しい。

フェイト・テストアロツサは、そのデバイスを氷上京谷に向けていたのだから。

「なのは、出るよ」

「うん！」

「お待ちなさい」

結託して出ようとするなのはと龍也を、槇野は片手で制止する。

「どついつつもりですか？」

「ああ、そんなに怖い顔をしないで下さい。この基地から一々許可を取って行くのは面倒でしょう。」

私が道を作ります。あ。バリアジャケットを着て浮遊魔法をあらかじめ使って下さいね。

「じゃないと潰れたトマトになりますから。海の上でも」

瞬間。彼の前方、なのはと龍也の正面の空間が罅割れる。

ビキビキと不吉な音を立てながら広がるそれは、徐々に範囲を広げ、最終的には大人一人でも充分に通れる『スキマ』が出来た。

「何……これ？」

なのはが驚くのも無理は無い。その罅割れた空間の中には、無数の目が蠢き、こちらを見つめていたのだから。

『スキマ生成』。簡単にいえば空間の境界に裂け目を作り、離れた場所を繋げる能力です」

尤も、この能力を持って操るのはただの距離のみではないのだが、彼はそれをこの場で言うべきではないと判断した。

「まあ、気持ち悪いと感じられるかも知れませんが、害はありませんし一瞬です。」

「さあどうぞ」

「ありがとうございます！」

「あ、待ちなさい！」

リンディが叫ぶも、もう遅い。なのはと龍也は既に飛び込んだのだから。

「……………どういうつもり？」

「別にただの協力関係ですし、そちらの命令に十から十まで従う必要は無いでしょう。それに分が悪くなれば引き戻しますよ」

柳に風とばかりに、槇野はリンディの言葉を受け流す。

「物語に悲劇は要りません。素晴らしいハッピーエンドへの道筋を期待していますよ」

その言葉を、水無月珠樹は不快そうな顔で聞いていた。

「フェイト……」

「ジュエルシードを回収しに来ました」

あまりにも無機質な口調。短く、そして淡々と告げられた言葉に、京谷は肩を竦めた。

「そうか……手早く済ませろ。終わるまで見ておいてやる」

言葉を見無視し、回収を完了させる。その作業をする横で、アルフは京谷に目を合わせると、済まなそうに口を開く。

「ごめんね。フェイトは、本当は良い子なんだ」

「ああ……知ってる」

回収を終え、踵を返そうとするフェイト。だが、そうするより先に、京谷は言葉を投げかけた。

「良いのか？ 残りが来るぞ」

その言葉にフェイトは振り向く。目の前には、見知った二人。

白いバリアジャケットを纏った少女と、マントと鎧を纏う少年。

高町なのはと神崎龍也が、そこに居た。

「そろそろお互いに取り尽くしただろ。決着をつける頃合いだと思っぞ？」

「京谷……あんたまさか、管理局に……」

「それに関しては全面的に否定させて貰う。今回の件で管理局が動

くのは目に見えていた事だし、むしろ遅すぎた程だ。

次元転移……ではないな。俺と同じ奴に頼んだか？」

「正確には『紡ぎ手』の方だけどね。こっちのジュエルシードは七つ。そっちは？」

「これで十四個だ。完全に集まったな」

龍也の問いに京谷は返す。つまり、ここで決着をつけなくてはならないのだが。

「今日は遅い。明後日、お互いのジュエルシードを賭けるのはどうだ？」

確かにその方が得策ではある。数としてはフェイト達の方が勝るものの、万全を期すためには全てのジュエルシードが必要となる以上、いずれ決着を付けなければならないのだ。

「私は、構わない」

「そうだね、フェイトちゃん。決着をつけよう」

二人の同意の言葉に京谷はオペラ歌手のように諸手を挙げて二人を向く。

この先に用意された戦い。その舞台の審判にして当事者である為に。

「両者合意と見ていいな。集合の場は海鳴臨海公園。決戦の場は海鳴市の海上、時刻は午前十時だ。」

ああ……それから」

京谷は二人に視線を外し、虚空へと向く。時空管理局アースラの監視が覗く位置へと。

「どうせそこに居るんだろう？ マクス、お前とも決着をつける。場所も時刻も同じだ、忘れるなよ」

勿論相手の声も聞こえず、顔さえ見る事は叶わない。

だが判る。猛禽の笑みを浮かべた男が、いま京谷を見ている事が。

「それじゃあ、解散だ。今日はもう遅いんでな」

一から十まで京谷が主導権を握ったまま、今宵の舞台は幕を下ろした。

「どついう事だい？ あんな決闘、まず網を張られるのが落ちだろう？」

如何にも納得がいかないという表情で睨みつけるアルフだが、京谷はそれに臆する事も無く向き直ると、指を鳴らした。

「これからの会話はフェイトには聞こえない。あくまで俺とアルフは口論をしていた。

そう言う風に見せる」

「なんだって、そんな……」

「良いから聞け。お前も判っているだろうが、フェイトの母親は無茶苦茶だ。

あの仕打ちは惨いモノだし、今回の一件は管理局にバレている。次元干渉犯罪は重罪だ。数百年近い幽閉は基本だし、それ以上の事

もあり得る」

それはアルフにとっても織り込み済みだったのだろう。管理局の追跡能力は侮れない。

たとえここから別の世界に逃げたとしても、いつかは足が着く。

「なら、どうしたら……」

「簡単だ。明日、千草さんと一緒に管理局に行けばいい。

事情を話し、情報を提供する事でフェイトが強引に事件の一端を担わされていた事。

そして今回の事件の情報提供者として減刑を求めれば良い。最悪の場合、俺が管理局とプレシアを敵に回してでもフェイトは助ける」

その言葉に嘘は無い。自分がすべきこと。したい事は、あの公園で宮本千草から答えを得たのだから。

「本当に、助けてくれるのかい……?」

「約束する。あの子を悪だと言うのなら、俺が全ての罪を引き受ける」

それが俺の役目だと、この関わってはならない物語に関わった責務だと言う意味を込め、京谷ははっきりとアルフに告げた。

そして。

「俺たちだろうか？ 俺も管理局と直接敵対したんだ。お前がフェイトの罪を背負うなら、俺はアルフの罪を背負うまでだ。

アルフ達は、被害者なのだから」

「……… 恭介」

それで良いのかと、それではアンタらはどうなるんだ、とアルフ

は訴える。

だが、その訴えを彼女の悲痛な顔を見ても、二人は動じない。むしろ、清々しいまでの笑顔で答えた。

「忘れたのかよ。俺と恭介は」

「忘れましたか。俺と京谷は」

そうして、二人は同時に言う。これだけは絶対だと、そう信じるが故の言葉を。

「「最強だ」」

そして、その一部始終を、遠くから見ている者たちがいた。

紫の甲冑と、身の丈より長いランス。

彼らは『ガルフ』と呼ばれ、ある目的からプレシア・テストアロツサと協力している組織である。

「良いのですか？ 隊長。全てのジュエルシードを賭けるなど。

十四個あれば、確実とはいかないまでも、」

「確実でなければ意味は無い。例え一パーセントであっても、いや、その一パーセントが、我々と同じ悲劇を生み出す」

その言葉に、部下であろう人物は胸元のロケットに手をやる。そこには、己の全てがあった。

「……そうですね。我々は、そうした犠牲を無くすために、ここに

居るのですから」

「ああ。プレシア・テストロッサにはこちらから言っておく。

最悪、フェイト・テストロッサが破れてもジュエルシードを確保できれば問題は無いからな」

了解、という部下の言葉を背に、グラフィーはその場を立ち去った。

もうすぐだ。もうすぐ、全てが終わる。

絶望に彩られた日々、あらゆる人々が平等に味わう苦痛を、これから自分たちの手で取り除き、取り戻すのだと、グラフィーはアルトレイは拳を握りしめる。

「待っているセレノ、プレシア。お前たちも僕も、ようやく戻れる」

あの 暖かな陽だまりの場所へ。

017 選択と決意（後書き）

c・m・「決戦間近！ 第17話の完成だ！！」

御剣「そしてまたしても私。京谷の覚悟を垣間見た一瞬だったな」

c・m・「人は悩み、そして打ち据えられながらも強くなる。HagaIazさまにはマジでお礼を言つといて。本当に助かるから。ていつかここで言います。ありがとうございました」

御剣「何気ない言葉はつくづく重要と再認識したか。良い心がけた」

c・m・「そして神崎様にはいらぬ発言をしてしまいました。本当に申し訳ありません」

御剣「さて、今回は京谷と公園でコーヒーを飲んでたわけだが、活躍の場が少ないのはキャラクターの橋渡し役だからか」

c・m・「まあ、他人はともかく自分は活躍させ辛いだよ。俺TU EEになっちゃうし」

御剣「仕方のない事が……しかし、自分の事をオバサン発言していたが……」

c・m・「ロリにトキメキまくってる男共からすれば二十後半は立派な年増よ。」

ホント、ロリコンばかりね」

御剣「……実に手厳しい発言だな。ところでKyoさまが自分は面

倒事には介入しない性質だとおっしゃっていたが？」

c・m・「人間、目を背けてしまえば良い事でも、その人が辛い目に会う事が判っているなら助けたくなくなるのが心情よ。

車に撥ねられそうになった子供を助けたりね。

これを見て喜ぶ奴はクズ。助けない奴は震える弱虫か、諦めてしまった奴。そして助けられなかった人は運が悪かったか、勇気を振り絞るのに時間がかかり過ぎた人。

さあ、Kyoさまはどれでしょうか？」

御剣「まあ、助けるだろうな。というか、そうと信じたい」

c・m・「私としてもそう信じるが故にKyoさまにはこの選択を取って頂きました。主人公と肩を並べるならこれ位はして貰わないとね」

御剣「成程。さて、今日は早いですが、このあたりで読者の皆様へのお礼に移る」

c・m・「イエス・サー。」

Kyoさま、誤字報告ありがとうございました。修正しました。神崎はやてさま、Hagailazさま。ご感想を頂き、ありがとうございます。ごぞいます。

次回も楽しみにして下さいね」

御剣「それでは今日はこの辺りで、失礼致します」

018 決戦の前日 前編(前書き)

ちよつとした報告。

勝手にランキング、付けてみましたがどうでしょう？

018 決戦の前日 前編

決戦の前日。日の出を迎えるか否かと言う早朝にあって、アルフは一人で千草の下を尋ねた。

おそらく今は寝ていてもおかしくは無い。だが、フェイトに気付かれない時刻となれば必然的に早朝になる為、やや気後れしつつもこの時間を選んだ。

緊張しつつもインターホンを鳴らす。二度目を鳴らす事になると予想していたが、思いの外一度で相手は出て来てくれた。

「多分、来ると思ってたわ。上がって頂戴」

気さくな笑顔で話しかけると、千草はリビングへと入って行き、アルフもその後が続く。

「ココアで良いかしら？ それともホットミルクにする？」

「あ……じゃあ、ホットミルクで」

了解という返事と共に、すぐさまホットミルクを運んできた。

「なあ……ひよっとして、京谷から全部聞いてたのかい？」

「ええ。携帯のメールで知らせてくれたわ」

確かにその方が確実ではあるし、管理局もノーマークだと言えるだろう。尤も、例え把握していたとしても、全く問題は無いだろうが。

「一応、貴女達の事情は京谷君から聞いているし、ジュエルシードを集めているのが母親の為と言うのは最初に聞いたわ。」

でも、貴女の口から教えて欲しいの。貴女の見たプレシア・テスタロッサと、京谷君や恭介さん。そして、フェイトちゃんの事を」

そうして、アルフは全てを話した。所々声を荒げていた事は自分でも気付いていたが、千草はそれを意に介す事無く、全てを訊き終えた。

「自分から悪役になる……か。凄い決断ね」

「けど……そんなのって無いだろ？ あんなに一生懸命フェイトの事を考えて、恭介だって、巻き込まれただけだ！なのに、何でこんな事に首を突っ込んで、何の得にもならない事をしなくちゃいけないんだい!？」

アルフの顔が悲痛に歪む。誰も望んではない。自分たちは、そこまでして貰って安穩と暮らせる筈が無いのに。

「あたしは……嫌だよ。フェイトだけならまだしも、あたしみたいな使い魔に何だって恭介は身代わりになるんだよ。

あたしは……あの男には平和に生きて欲しいんだよ」

「大切なのね　あの人か」

沈黙は肯定。微かに目尻に浮かぶアルフの雫を千草は指で掬うと、カップを置いて立ち上がる。

「女性の部屋に勝手に入るのは、マナー違反よ」

虚空へと繰り出される突き。それは完全に隠れていた筈の騎士の甲冑の隙間を縫うように叩き込まれ、次いで繰り出された手刀は完全に意識を刈り取った。

「まさにお涙頂戴の話だけど、私はそんなバッドエンドは認めない。頑張っている子達には最高の物語をプレゼントしなきゃね」

そうして千草はスーツの上着を羽織ると、銀時計をポケットに入れて部屋を出た。

ここから先の物語を、悲劇にしない為に。

S i d e - N a o y a K i t a z a w a

目が覚めた時、自分がどのような場所に居るのかを理解した。

ここは海鳴大学病院。自分がこの世界に来てから定期的な検診を受けている場であるという事。そして。

「具合はどうか？ 正直、私は君がこのような暴挙に出ると思わなかった」

この部屋に存在する人間、御剣 仁の存在をいち早く察知した。

「……何故、ここへ？」

「従業員が倒れたとあっては見舞いに来るのが雇い主としての道理だろう。」

それとも、不服かね？」

いいえと、答える。その言葉は自分でも判る程かなり沈鬱な物だったが。

「具合はどうだ？」

「軽すぎます。正直、生きていく心地がしません」

「だろうな。医師の許可を得て、君の事を訊かせて貰った。多少強引になってしまったがね。」

「ここには以前から通っていたそうだな」

御剣 仁が何を言わんとしているのか判ったのだろう。耳を塞いでも良かったが、意味が無いので上体を起こして目の前の相手を見た。

「医師も驚いていたよ。内臓や循環器系は通常通りに機能し、四肢の骨もセラミック製の人工骨から天然ものに総交換されている。」

「拳句、縫合痕まで綺麗に無くなっていると来た」

「……………」

「何故、言わなかった。君の身体は持つて数年。生きるだけなら二十年は持つが、確実に植物状態だと見込まれていたそうだな」

「私なら全て問題無く治せた、という自負があったのだろう。」

「ましてやこれだけ重要な事を今の今まで隠しておきながら前線に立とうとするなど、馬鹿を通り越して無謀だ。」

「俺が全力で動けるのは持つて十五分。そのタイムリミットを過ぎれば内側から崩壊する時限爆弾を抱えていたのだから。」

「仮面の男の時もおかしいとは思っていた。一瞬で決着をつける事も出来たのにそれをしなかったのは、これが原因だな」

「そう。確かに全力で動き続ければ決着はつけられた。それを敢えてせず、ペースを守りつつ戦っていたのは、自身の持つ爆弾が原因であるが故に他ならない。」

「余裕ぶった戦いも、舞台役者のような発言も、全てはその為。自らの弱点を察知されない様にする為の虚飾ゆえだ。」

「まあ、そんな事はどうでも良い。私がここに来て、君に対して若干の怒りを覚えている原因はこれだ」

ポケットの中に使ってしまった物を、御剣さんは投げて寄越す。銀の翼のアクセサリ。それはあの夜、俺が旅館に置いて行ったものだ。

「何故身に着けなかった。空を飛ぶのに難儀していたとはいえ、バリジャケット位は出せただろう。」

ソレはあくまで空気抵抗を抑え、気圧の変化に対応する程度の物でしかないが、君が受けたと言う竜巻を多少は防げたはずだ」

そう。御剣さんが納得がいかないのはそれなのだろう。最初から信頼されていなかったのか、それとも他に何か事情があったのか。いずれにせよ、手渡した物を無碍にされては、収まりが着かないのは当然である。

だが、そうではない。俺が『彼女』を置いて行ったのは、もっと下らない理由からだ。

「……道具は、所詮道具だと考えていました。知性があるうとそれはプログラム。道具ならば幾ら傷つこうが問題ない」と

だが、それに耐えられなかった。軽口を言い合い、共に学び、互いを知り、様々な物を見……

「……『彼女』を道具と見る事が出来なかった」

握りしめたアクセサリに力が入る。決して壊さず、傷付けず、まるでガラス細工を扱う様な力加減で。

「だから……連れて行きたくはなかったのです。自分は人殺し……
傷付けることしか出来ない存在です。」

馬鹿者としか言えぬでしょう？ そんな感傷で、命を棄てたので
すから」

そして、その結果がこれだ。もうこの身体は親から貰ったもので
はない。

どれ程傷ついていても、どれだけの欠陥があっても、この身体に
不平不満を言う事は無かった。

自分を生んでくれた親。たとえ作りものだったとしても、その事
実は変わらない。

一步を踏み出すごとに響く身体の悲鳴さえ、自分が生きている証
明だと実感できた。

だから俺は言ったのだ。生きている気がしないと。枷に慣れた身
体は、その枷が無くては生きている事を実感できないのだから。

「ああ……大馬鹿だな。君も言いたい事があるだろう？ 存分に言
いたまえ」

《Master…Just who do you think
you are!？》

（マスター……一体何様のつもりですか!?!）
《……………》

傷ついて欲しくなかったと、そう思っていた自身の気持ち。だが
それは、果たしてこのデバイスに取って、望んでいた行為だったの
か？

このデバイスは、一言も……。

《When I wanted me to help when,
did I ask you?》

(私がいつ、貴方に助けて欲しいと願いました?)《

このデバイスは何も言っていない。ただ自分が全てを決め、自己完結してしまっただけ。

相手の想いを、何よりも理不尽な形で踏みにじったのは、一体どこの誰だったのか?

《:Am I unreliable? (私は……頼りないですか?)《

「そのような事は……」

《Don't deceive! (誤魔化さないで下さい!)《

思えばこの時、初めて自分のデバイスの声を聞いた。相槌を打つのも、笑うのでもなく、叫ぶという声を。

《I am a tool for practice. It is the common tool which can perform just merely flying.

(私は練習機。ただ飛ぶことしかできない、有り触れた道具です。)

:By that, if I do not have necessity, please say.

(……だから、私が必要無いなら、そう言って下さい)《

そこで判ってしまった。このデバイスの本心。練習機であるからこそ、いつかは忘れ去られてしまう。

初めて共にした感動も、共に分かち合った苦悩も、全てはやがて消え失せる。

決して彼女を手にする者は、その喜びを他の者へと乗り換えて行く。

そうして忘れ去られるのだ。多くの者の旅立ちと引き換えに、そ

の苦しみをリセットし続けて。

確かにある心を、痛みと共に削りながら。

「……そのような事は無い」

同情から発したのではない。報われない悲しみ。受け入れられない日々には絶望する事は、誰であろうとある。

だが、そんな事で言葉を発した訳ではない。

俺は誓ったのだ。共に駆けようと、その約束を一番に破った者が言える立場ではないが、確かにそう言ったのだ。

死が引き裂くその日まで共に飛ぶと。ならば、その約束は果たさなければ嘘になる。

「すまない……俺が莫迦だった」

しかし……と俺は口を開く。彼女と御剣さん。その二人へと。

「俺は……人を傷つけることしかできない。誰も、誰一人として救えない人間だ……それでも」

いいのか？ と。血に濡れ、重いだけの翼になってしまっても、青空を赤に染めてしまう翼になっても良いのかと、そんな人間を傍に置いていいのかと、二人に問う。

《Gladly, Master (喜んで、マスター)》

「君が悪人にはなれん事は、あの騎士の少女との会話で判っている。それより、名前が無くては彼女も不憫と言う物だ。一つ、気の利いた名を付けてやれ」

「……名前」

思えば、俺は一度として彼女の事を呼んでいない。翼を身につける時も、共に苦悩を分かつ時も。

何と言う事だろう。そんな肝心な事もしないまま、空を飛べると思っていたのだろうか？

どれ程大きな翼であろうと、片翼では飛び立てない。

鳥は一对の翼を持つが故に大空を舞う。そんな単純な事さえ気付かずに、己は飛び立とうとしていたのか？

「はは……」

笑い草だ。イメージだの何だのと難しい事はいらなかった。ただこの翼を信じてやれば、それで良かったのに。

《Master? (マスター?)》

「悪かった。君の名は」

共に、空を駆けるその名前は

「『マルコキアス』、君に送る名だ。気に入らなければ、断つてくれて構わない。」

何せ、悪魔の名だ」

《Marchocias?》

「ルシファーと共に墮天した天使だな。地に堕ちて尚忠義を忘れず、勇敢に駆ける騎乗獣。偽りを好まず、誠実を以て主に報いる気高き女騎士……成程、確かに彼女にとってこれ以上相応しい名はあるまいよ」

そして、愛されなかったが故に生涯唯一の反逆を行った騎士。

立場こそ違えども、ルシファーと共に神に挑んだ事に変わりはない。

く、その原因も又、ルシファー同様愛故の物だった。

「……と。御剣さんの仰る通りだが、如何に？」

《Thank you. My master (ありがとう。マスター)》

「決まりだな。それから、こちらの女性にも礼を言っておけ。瀕死の君を治す一助を担ったのだからな」

こつこつと、革のローファアの靴音が床に響く。男装の麗人。スカートではなく、スラックスを穿いた女性は、一目見ればキャリアウーマンか何かだと思っただろう。

尤も、自分にはこの女性が何者かなど、一目で看破していたが。

「……貴女は」

「お久しぶり……なんて言えないわね。まず謝っておくわ。これまでと、この日の事を」

知っている。俺という存在を決定づけた人。

この苦痛を。俺の周りに起こる理不尽の全てを決めた人。物語だから。そんな言葉の一つで、多くの人間を死に追いやった。だが。

「……いや。構わない」

「どうして？ 貴方には私を怨む権利がある。その身体の事も、貴方の犯した多くの罪も、私が背負わなくてはいけない事よ？」

ああ。そうなのだろう。あの末路も、犯してしまった罪も、全てこの女性が担うべきなのかもしれない。

だが。それだけは駄目だ。

「俺は自分の手で人を殺した。貴女に言われたからでも、押し付け

られたからでもない」

でなければ嘘になる。彼らが生きていた事も、彼らが犯した罪も、それら全てが造られた物だと言うのなら。失った命は、遺された想いは、彼らの未練は何処に行く？

誰もかも、何もかもに忘れられ、死という結末だけを残した彼らの魂は何処に行く？

俺が奪い、俺が無くしてきた命は、俺自身が覚えていなければ、全て消えてしまう。

だからこそ。

「俺の罪は俺で背負う。貴女には決して譲らない。何より、謝らなくてはならないのは俺の方だ」

造られたからと言い訳にして、何もかもを放り投げようとした。

下らない自己保身で、貴女に罪を被せようとした。

決められていた事だからと。自分で下した行為さえ棚に上げ、何もかもを切り捨てようとした。

あまりにも醜い選択。下らない自己保身。

その全てを謝らなくてはならない。そうする事が、自分とこの女性との清算だ。

「申し訳ありませんでした。自分は、貴女に押し付けてしまった。

僭越ではありますが、この身に出来る事があれば、何なりとお申しつけ下さい」

それが唯一の誠意である以上、頭を下げよう。

「けど、それじゃ……」

「良いのではないかな？ 君もそうする事を望んでいるのだろうか？」

御剣さんの言葉に、ええ、と頷くと、やがて決心したように千草さんは口を開く。

「なら……お願いがあるの。このままだと不幸になってしまいう女の子がいる。

けど、私だけじゃ力不足になるかもしれない。だから、貴方も来てくれる？」

「それは……あの騎士の事ですか？」

「え？」

まるで全く思い至らなかったとばかりに千草さんはこちらを見た。

「騎士って……あの紫の？ 貴方に傷を負わせた」

「仰る意味が判り兼ねます。自分に傷を負わせたのは炎髪蒼眼の少年であって、紫の騎士ではありません」

瞬間、千草さんの表情が凍る。いや、凍ったのは表情だけではない。微かに指先を震わせ、口元を押さえる。

「そんな、だとしたら……」

「ふむ……どうやら行き違いがあったらしいが、話して貰えるかな？」

御剣さんの言葉に千草さんは全てを話す。あの温泉旅行の深夜。自分が傷を負った時の出来事を。

「成程。詰まる所、千草さんは直也に深手を負わせたのは紫の騎士と勘違い……というより、件の少年がそうなるよう仕向けたのにまんまと嵌ったと言う訳か」

「ええ……情けない話だけど、そう考えれば、あの騎士の追い詰められた様な拳動にも納得がいく。本当に悪い事をしたわ」

「いえ。真に罰するべきは件の少年。貴女がそれを恥じる必要は無いでしょう」

そう言って、俺は立ち上がる。軽い。まるで身体が羽になったような感覚。

一步を踏み出すと言う行為は、こんなにも単純で簡単だったとは……。

「調子は、どうだ？」

「万全です、御剣さん。ここまで軽いとあっては、足があるのか不安になってしまいます」

既に痛みは無い。全身に刻まれた曾祖父との鍛錬の痕も、肩を貫いた弾痕も。何時間もの手術の痕も、一步を踏み出すことに聞こえた骨の軋みも、張り裂けそうな臓腑の悲鳴も。

その全てが、この身体には無い。

「それは重畳……と言っていていいかは判らんが、選別だ。持っていくが良い」

そう言って御剣さんは長方形のアタッシュケースから一振りの剣を持ちだす。これは、あの日の……。

「アロンドアイト無毀なる湖光。君なら、この剣がどういう物かを説明するまでも

あるまい？」

無論だ。ブリテンの王の下に集った円卓における最強の騎士にして汚名を受けし騎士。サー・ランスロットの剣。

親友の兄弟を切った事で聖剣から魔剣へとその身を墮とすも、未だ竜殺しの性質と剣その物の力は落ちていない。

「ですが、何故これを？」

「覚えているか？ あの仮面の男との戦いで君はこれを執った。どういう理由かは判らんが、この剣と君は相性が良い。

魔剣を渡す事に抵抗はあるが、万一何かあってもこちらで対処する」

差し出された剣を手に取る。自分には大きすぎる得物ではあったが、何故か良く手に馴染む。まるで、腕の延長か何かのように。

少しばかり振って感触を確かめようと思ったが、そうしようとした束の間、この剣は光と共に霧散した。

「な……」

「驚いたな……まさかここまで相性が良いとは。

所有権は君に完全に移っている。意識を集中してみたまえ。自分の中にある剣を執りだすイメージを」

謂われるがままに目を閉じ、あの剣をイメージする。漆黒の魔剣。冷たさと悲しみを帯びた、あの剣を現実に引き摺りだす。

「出来た……」

手を伸ばした先。何も無かった虚空には、先程と寸分違わぬ剣があった。

「完成だ。例えその剣を弾き飛ばされたとしても、君が思い描けばすぐさま引き寄せられるだろう。」

「そうそう出来る物ではない。剣と使い手の疎通が完璧だったからこそその結果だ」

「しかし、何故この剣は自分を………？」

「さてな、千草さんは何か判るか？」

「いいえ。確かに私は彼に魔剣を握らせる筈だったけど、それは直也君が物語の中で手にする筈だった物。」

「左手にガンダールヴもないし、今の彼に魔剣を操れるような特殊な能力は無いわ」

「つまりは完全な偶然。俺とこの魔剣は、幸か不幸か偶然にも巡り合ってしまったと言う訳か。」

「そろそろ腰を上げねばなりません。」

「申し訳ありません、御剣さん。バイトを休んでいるだけでなく、こんな物まで頂いてしまって」

「構わんよ。こちらも後々には君に手伝って貰う事が多くなる。その魔剣を渡したのも、いずれ必要になるからだ。」

「先払いか、少し早目のバイト代だと思ってくれば良い……と、そろそろか」

その発言に首をかしげそうになるも、病室の前には、こちらを眺める車椅子の少女の姿があった。

やや茶色がかったショートヘアの少女は、御剣さんとこちらを交互に見つめていた。

「もう退院ですので、構いませんよ」

にこやかな笑みを浮かべつつ少女に呼び掛けると、少しおどおどした表情で少女は来た。

「もう良いのか？」

「あ、はい。今日はいつもより早かったです。それで御剣さんが何処に居るか聞いて、看護婦さんが、」

「ああ、皆まで言わなくて良い。今日は私の所の従業員が退院すると言うので、見舞いに来ただけなのでね」

「北澤直也と申します。宜しければ、お名前をお窺いしても？」

「そんな丁寧にせんでも良えですから、楽にして下さい。わたし、八神はやていいます。」

よろしゅうお願いします」

「宜しく。じゃあ、俺の方も楽にしてくれて良いよ。お互い苦しくならず済むのが良いからね」

にこやかに話しかける半面、はやてさんの症状を診て取る。

恐らくは下半身不随。いや、大腿の部分は服に隠れていても動いているのが判ることから、正確には膝から下だろう。

脊髄損傷かとも思ったが、上体に運動障害が見られない所や、骨に異常が無い所を見るに、神経に異常があるか、何か別の要因があるといったところか。

「？ どうしたんですか？」

「いや、何でも無いよ。ひょっとして、以前御剣さんがやる事があるって言ったのは、」

「ああ。以前図書館で会ったのをきっかけに、話す事が多くなつたな。」

流石にこの年齢の子を一人出歩かせるのには抵抗があったし、病院への送り迎えも含め、こうして出来る範囲で行動している」

「わたしは良いって言ったんですけど、御剣さんがどうしてもって

言うてくれたんです。

今では、とても感謝してます」

成程、つまりここに来たのは俺だけではなく彼女も居たからという訳か。

「図書館という事は、本はよく読むのかな？」

「はい。御剣さんも、わたしが薦めた本を読んでくれて良う話相手になってくれるんです」

「なら今度俺も話を聞かせてくれるかな？ 身近に読書家が居なくてね」

御剣さんと、はやくさんを交互に見ながら言葉を交わす。おそろく、この子には何かあるのだろう。

自分に出来る事があるのなら、出来る限りはしてやりたい。

「なんや嬉しいな……：：： 気い使わんで良えんですよ？」

「良いんだ。俺も話し相手が欲しかったからね。御剣さん、構いませんか？」

アイコンタクトを取りながらだった為、断られる事は無いだろう。

「そうして貰えると助かる。流石に私一人では、周りから奇異の目で見られてしまうのでね」

…… 大丈夫だとは思うが。そちらの趣味でもない限りは。

「では、自分はそろそろ」

「武運を祈る。帰って来てからもやる事は多く残っているのにな」

そうして俺は病院を後にし、千草さんの車に乗り込むと、紅い髪の女性が助手席に座っていた。

「お初にお目にかかります。自分は」

「ああ、良いよ。大体の事は千草から聞いてるから。こっちの事情は……まあ行きながら話すよ」

女性の言葉と共に、千草さんはキーを回す。どつやら高町家へと向かうらしい。

ここから先、この物語を幸福な結末にする為に。

018 決戦の前日 前編（後書き）

c・m・「今回は前・後篇に分かれるぜ！ 第18話、投稿完了だ」

京谷「今回は俺か……。ていうか、興輝や暁葉の方が空気じゃねえの？」

c・m・「基本このコーナーは出番のない奴からランダムに選出（アマダくじで決定）されるから批判は受け付けないわ」

京谷「あっそ……。まあ来ないに越した事は無いんだよな、空気扱いだし」

c・m・「そう落ちこまないで。ちゃんと出番はあるから」

京谷「まあ良いか。ところで、今回は前・後編に分けたが、これはどうしてだ？」

c・m・「やつぱ決戦前の大舞台だし、各々の心境を確認しておきたいじゃない。それとまあA'sに繋げるためにはやてちゃんを登場させたかったから」

京谷「成程。ところで今回、直也がアロンドイトを受け取った訳だけど、これは最初から決めてたわけ？」

c・m・「ええ。彼がアロンドイトを手にするのは御剣さんとコンビを組ませようと思った時点で決めてたわ。

ところで京谷君。ブリテンが崩壊した理由って知ってる？」

京谷「あれだろ？アーサー王は王として妃が必要だからって理由だけで妻を娶ったけど、道具としてしか見てくれなかったお姫様は傷ついて、ランスロットと浮気して崩壊……さて！強烈に嫌な予感が漂うんですけど！！？」

c・m・「H A H A H A！恋に波乱はつきものさ！……って言うのは冗談よ。色恋沙汰関連であの剣を持たせたわけじゃないから安心して頂戴」

京谷「既に三角関係を作ると断言してる作者に、安心して言うっても無理だな。

けど、直也ってかなり活躍してないか？ 出番が多すぎる気がするんだが」

c・m・「ごめんなさい。彼は動かしやす過ぎるので、つい出番を多く取ってしまいました。

ちゃんと他の主人公や作者の出番も多く取りますので、どうかご安心ください」

京谷「しっかり配分を考えろよ。草葉の陰でレインシアが泣いてるぞ」

c・m・「安心して！彼女は次回に大イベントを用意するから！」

京谷「……後ろに置かれているロリコン認定証は突っ込んだら負けだろうな、多分」

c・m・「ここからは読者様のお礼に移らせて頂きます。

Kyoさま、神崎はやてさま、Haggalazさま。ご感想

を頂き、ありがとうございます」

京谷「ところで、最後に訊きたいんだけど、Hagalaさま達は善の反対は善だっていつてたけど、これは意識して書いたのか？」

c・m・「ええ。管理局はアンチが多いし、その理由も確かにあるけど、全部が全部そうという訳ではないもの。

警察というのは確かに嫌われる傾向にあるけど、それでも彼らは役目を果たすべく頑張っている。

上がダメでも、交番のお巡りさんは殆ど積極的に働いているでしょう?」

京谷「確かに。政治家の殆どが腐っていても、下で苦労している人間は少なからずいるのと同じようなもんか」

c・m・「そういうこと。けど、正義の反対は別の正義……この台詞、35歳のサラリーマンが言うからこそ重みがあるわ」

京谷「平和に生きているからこそ、そこから見える物がある。深く考えさせられるな。流石、野原一家の大黒柱」

c・m・「さて、今日はこの辺りで、失礼致します」

一旦高町家に帰った後、自分の装備を確認する。

といつても、持つて行く物はカードデッキとドラグバイザーぐらいの物だから、特に問題は無いだろう。

問題があるとすれば、それは精神的な物の筈だから。

「何だ？ 悩んでんのか？」

「マクスか……何か用？」

暗に近づいてくれるな、といった口調になってしまったが、そうでもしなければ耐えきれない。

緊張の糸が張り詰めているのは判っているが、だとしてももう少し言い様があるだろうに……。

「自己嫌悪は後にしとけ。今一番大変なのは、あの嬢ちゃんなんだからな」

「……判ってるよ」

そう。言われなくても判っている。これはなのはの物語だ。

だからこそ彼女自身が決着をつけ、僕はイレギュラーとして、イレギュラーの相手をしなくちゃいけない。

紫の騎士。

ヴェノム。

一つとして安易な道が無い事も、自分が活躍を出来ていない事も判っている。

だけだ。

「僕は、僕の出来る事をしなくちゃいけないって判るから」

その決意を 鈍らせたくは無い。

「だから終始張り詰めておくってか？ 止めとけ止めとけ。

お前じゃ気が持たねえよ。しっかり休んでおくか、嬢ちゃんの横に居てやることだ」

「うん……そうだね」

そう言われた後に、なのはの居るリビングに向かおうとすると、玄関の呼び鈴が鳴った。

「あ。はい！」

ベルの音と共に玄関を出ると、そこには一台の車と、よく知る人たちの姿があった。

「久しぶりね。龍也君」

「千草さん……何で」

「一体、どうして……」。

「どうして此処にって言いたいんでしょう？ こんな事を頼むのも差し出がましいのだけど貴方達に協力して欲しい事があるの」

「えっと……何をすれば良いんですか？」

思わず訊いてしまった。本来ならフェイト達の陣営に居る筈の女性である以上、ここで頼みごとを訊くなぞ正気の沙汰ではない。ましてや。

「何でアルフが……」

「事情は説明するわ……といっても、大体の事は判ると思うけど。案内して欲しいの。時空管理局へ」

そうして僕達はアースラへと連絡を取った。これから先の事を、何となく予想出来ていたから。

S i d e - o u t

時空航空艦アースラ。その艦内にあつて、東 興輝と槇野来栖は、自室に籠もっていた。

とはいえ、パソコンに向かったりするのでもなければ身体を休めようとしている訳でもない。

彼ら二人は、気分を上げるために自分達が着る服を選んでいた。

「やっぱこれか？」

「まあ、それが一番良いですかねえ」

興輝の言葉に槇野はやんわりとした口調で答える。無論それは興味が無いと言うのではなく、純粹にそれを着たいという意味表示だ。槇野が身に纏うのは、漆黒の軍服。かつては髑髏の帝国と称され、欧州を包む炎と称された部隊の制服。

アルマゲインSS。一般にナチス親衛隊と称される者たちの服である。

「けど良いのかねえ……俺達ナチじゃねえし、こんなの着ててよ？」
「まあ、部隊や身分を示す物は外してますし、問題ないでしょう。君のユーゲントの制服も同様にね」

そう。彼らの制服には本来ある筈の物が無い。

肩章、襟章、勲章、党員バッジ、腕章、カフタイトル、ベルトのバックルや帽子にある鉤十字のマーク、シエプロン、儀礼用の短剣、サーベル……。

それらを彼らの着ている服は徹底的に廃していた。当然と言えば当然である。

彼らに国家や民族に対する意識などは無いのだし、そうした物を背負って戦う様な人間でもない。

あくまで彼らは彼らの良心に従っているだけなのだから。

『二人とも、お客さんが来てるみたいだから、今すぐ会議室に来てくれる？』

無線によるエイミイの呼びかけに、二人はネクタイを締め直して部屋を出た。

やるべき事は一つだと、そう自分たちに言い聞かせて。

「大体判ったわ。つまりフェイトちゃんは自身の母親、プレシア・テスタロッサに無理やりジュエルシードを集めさせられているってことね」

「そう言う事になるわね。まあ、だから私が仲介人としてここに居るのだけだ。

私が頼みたいのは、首謀者の手によって今回の事件に関わる事になった人達を無罪か、出来るだけ穏便な形で済ませて欲しいと言う事。できそう？」

千草の問いに、リンディは難しいわね、と答える。
だが、それに対してクロノの方は穏やかな表情で答えた。

「多少の罪を背負う事にはなりますが、今回の件をフェイトという少女の言動や、なのはの証言、貴女とアルフから聞いた情報を照らし合わせても矛盾はありません。」

状況も特殊ですし、彼女が自らの意志で次元犯罪に関わっている訳ではない事ははっきりしています。

あとは上層部にどのように伝えるかが問題ですが、それはこちらで何とかしますよ。」

「ありがとうございます。優しいのね。クロノ君は」

「いえ。司法取引というのは基本的に有効ですからね。貴女の証言だけでも、かなり優位に状況を進められますよ。」

さて、と話を変えるべくリンディは立ち上がる。顔こそ見せているものの、まだ自己紹介を済ませていない者が居るからだ。

「ところで、貴方はどういう関わりがあつてここに来たの？」

「そういえば、お兄ちゃん友達つて聞いてましたけど、ひよつとして直也さんも魔導師なんですか？」

「違うよ。なのはさん。俺は少し気がかりな事があつてね。」

例の紫の騎士達と色々話さなくてはいけない事があるんだ。君とフェイトさんの関係のようなものかな？」

「まあ、各自積もる話もあるでしょうし、ここで解散にしましょうか？」

本当は水無月さん達も来る予定だったんだけど、今手が離せないらしいから」

そうして各々は席を立つ。すべき事は、それぞれにあるのだから。

会議が終了する頃合いを見計らって、水無月珠樹は暁葉、フィオナと共にリンディの居る執務室に来ていた。

無論。この面子に限って世間話やら茶の飲み合いを使用などという平和な話は無く、ある交渉事を持ちかける為だ。

「つまり、貴方達は武装局員と共に首謀者を叩く役に回りたいと？」「不服ですか？　そもそも他の方は貴女達に非協力的ですし、私達の実力は話した通りです。どのような状況であっても、傷つく心配の無い人間には打って付けの仕事だと思えますが？」

確かにその通りではある。ここに来たメンバーはあくまでも協力体制こそ取っている物の、不都合があれば何時でも抜け出すという条件の下で集まっているのだ。

最悪、いざという時に動かない可能性も充分にあった。

「良いでしょう。しかし、今回の任務は非常に危険な物になります。貴方達はそれで良いのですか？」

「構いませんよ。あと、こちらの使う部屋を転移ゲートの傍にして頂けますか？」

有事の際には、すぐに動きたいので

「ごめんなさいね……私達大人が力不足なばかりに、貴方達に重荷を背負わせてしまつて」

「持ちつ持たれつですよ。世界はそうして回って行くのですから」

あくまでもにこやかな笑顔で、彼らは執務室を後にする。

執務室を出た後、水無月珠樹の口元は、三日月のように歪んでいた。

会議の終了と共に北澤直也は廊下で二人に呼びとめられた。

東 興輝と槇野来栖に。尤も、その理由は判っていたのだろう。

二人に対して、北澤直也は口を開く。

「先程はすまなかった。君達の服装がつい目についてしまつて」

「あー……やっぱ判るよな。ナチが嫌いなのは、万国共通だし」

興輝の発言は、確かに一般論からしてみれば正しい物であった。ただ、ろつ。

だが北澤直也はそうした枠内の人間ではない。彼は武家の人間であり、護国に対しての誇りを抱く人間なのだから。

「いや。もし君達が正式な服装をしていたら斬り伏せていた」

「おいおい……冗談だろ？」

だが、そう言う北澤直也の表情は真剣そのものだ。ともすれば、今この場でさえ容赦なく斬ると言う様に。

「その重みを君達は知っているだろう？ だから身分を証明する物を外したのではないのか？」

「そりゃあな。俺達は民族とか国とかを背負つてる訳じゃないし」

そう。北澤直也が重要視しているのはそこだ。かつての大戦で多

くの兵はその為に戦った。例え歴史が彼らを悪と称そうとも、戦い抜いた彼らに敬意を払わなくてはならない。

人でなしの部隊。世界の敵。

たとえそう言われ続けようと、如何に残虐行為を行ったとしても、それはあくまで一部であり大多数は祖国と家族の為に戦った。

語られぬ歴史の内側を知り、北澤直也自身も曾祖父から護国の剣としての思想を叩き込まれたからこそ、その服の重みを知っている。だからこそ、一言だけ問わなくてはいけない事がある。

「その髑髏」

「ん？ ああ、これか？ これ部隊とか関係ないから付けてたんだが……」

「その髑髏に誓えるかと聞いた。それはな、骨となっても戦うという意味だ」

兵士として全てを賭ける。己の全てを灰と帰して尚、戦い続けるという覚悟。

民族も国も、この二人には関係ない。だが、その髑髏を着けるのであれば、戦い抜かなくてはならない。

良心に従うなら良心に。信念に生きるなら信念に。

その髑髏を付ける以上、捻じ曲げてはくれるなど、言葉より雄弁に双眸が語る。

「そんなの決まってるんだろ？ 何のためにここに居ると思ってんだよ？」

だが、その瞳に動じることなく興輝は不遜に口を開く。

覚悟など、ここに来た時から出来ていると。

「そうだったな。君が悪徳高き殺戮部隊アインザツクルッペンとなるか、それとも誉れ高

き第1SS装甲師団ライプシュタンダーテ・SS・アドルフ・ヒトラーとなるか。

願わくば、君達の道が後者である事を願っている」

「願わなくて良いっつーの。じゃあな、お前は気難しい奴だけど、悪い奴じゃねえみたいだから何かあつたら言えよ」

「感謝する。有事には呼んでくれ。微力ではあるが、何時でも手を貸そう。Sieg Heil」

日本語訛りの無い発音で締めくくると、北澤直也は去って行った。

「……おつかねえな」

「どうですかね……私としては、老人を相手にしているような感じでしたよ」

「つーか固い。戦前の人間みたいな雰囲気だったぞ？」

その言葉は遠からず確信をついていたのだが、この二人はそれに気付いてはいないだろう。

北澤直也という存在は、酷く歪な物だと言う事に。

尤も、そんな事はこの二人には関係ない。彼が立ち去った後、興輝のポケットから携帯の着メロ　ガンダムWのOPテーマ　が流れると、先程までの疑問も何処かへ行ってしまった。

「おや。私はお邪魔なようですので失礼しますよ」

うるせえ、という興輝の言葉を気にも留めず、部屋へとにこやかな笑みを浮かべながら戻る榎野から視線を外すと、興輝は通話ボタンを押す。

『もしもし、あの興輝君だよな？』

「電話する度にその台詞言うなよ……つか、俺はずか以外に番号

教えてないし」

ついでに言えば槇野にも教えていない。あの男に関しては念話で充分だからだ。

「それで、どうしたんだ？ ジュエルシードはもう集まったし、普通の生活に戻っても、」

『うん……その事なんだけど、私、他に手伝える事って無いかな？』

何を馬鹿な、と興輝は思う。もう充分に彼女は手伝ってくれた。

今更こんな世界に足を踏み入れる必要はないと、そう言おうとした所で、

『私……頼りないって思われてるのは判ってる。こんな事をするんじゃないくて、普通に生活して欲しいって思われてる事も。』

けど、なのはちゃんや龍也君が頑張ってる、それを見て見ぬ振りをするのは違うと思うから。私は私にしか無い力があって、友達が困っているなら、この力を使いたいのに！』

本来なら、その言葉を訊いても止めるべきだと言うのは判っている。

この物語に、本来彼女は深く関わるべきではないのだから。

けれど、どうしても二の句を告げられない。止めると、来るなどという言葉も、どうしても言う事が出来ない。

彼女に平穏な世界で生きて欲しいと思うのと同じほど、興輝は彼女の想いを大切にしたいと思っているから。

「……今からそっちに行く。着替えとか用意しとけ。」

多分、明日には全部終えなくちゃならないからな」

『う、うん！ ありがとう！』

すずかの感謝の言葉と共に通話を切る。結局自分は、彼女の意志を尊重した。

悩んでは居るものの、それが間違っているとも思っていない。いざとなればここに残して、自分だけでプレシアの下に乗り込めばいいのだから。

「さて。槇野に頼まねえとな」

自分にはスキマ生成などという能力は無い。一々槇野に頼むのは面倒だという気持ちがあったが、移動手段としては便利のため、背に腹は代えられないのだ。

“まったく……どうしてこう、あいつには甘いのかねえ、俺は”

内心そう不貞腐れながらも、彼は軽い足取りで、部屋へと戻って行った。

S i d e - R y u y a K a n z a k i

会議の終わった後、昼時という事で、僕はなのはと食事を摂ることにした。

バイキング形式だったのでそれぞれ選び、対面になる様に座って食事を摂るも、お互いあまり箸は進まなかった。

気まずい……。話さなくてはならない事は多くあると言いつのに、言葉が出て来ない。

「あの……」

お互いが同時に顔を上げる。気まずさがさらに増すが、ここでお互い譲り合っても良い事にはならないのが目に見えているので、こちらから話を切りだす事にした。

「さつきフェイトさんの事をアルフさんから聞いたんだけどさ……なのはは、どうしたいの？」

それは僕自身が迷っているからこそこの問い。自分でする事は判つていても、なのはが戦うなら、という後押しがあつて目的を果たそうとする後ろ向きな考えから出た問い。

「……わたし、フェイトちゃんを助けたい。アルフさんの想いも、千草さんの優しさも、天宮さんや、京谷君の信念も、大切なモノだつて判るから。」

それに フェイトちゃんの悲しい顔は、私にとつても悲しいし、友達になりたいと思うから。

だから わたしは助けたい」
「……そうだね。僕も戦うよ、理不尽に虐げられる必要なんで、何処にもないんだから」

僕に出来る事なんて、それ位しかないんだから。

「ねえ……龍也君は、この事件が解決したらどうするの？」

それは……。

「色々、考えなくちゃいけないと思う。なのはの家にならずと居させて貰つのも悪いし、住める場所ぐらい考えなくちゃいけないからさ」「寂しくなるね」

「同じ街に住むんだし、会おうと思えば何時だって会えるよ。
それに、住む場所を決めるまでは、なのはの家に居る事になると
思うから」

「そっか。うん、そうだね！」

嬉しそうなのはの表情に、少し胸が痛くなる。

僕は、僕がしっかりしていれば、君はこの事件に巻き込まれる事
はなかった筈なんだから。

S i d e - o u t

誰も居ない空き部屋。アースラの居住スペースの一室にマクスと
レインシアの姿があった。

本来別々の部屋だった二人だが、会議が終わった後、レインシア
が唐突にマクスに自分の部屋に来るよう呼びかけたのだ。

もう数分になるだろうか？ 部屋に入ったマクスに対し、レイン
シアは俯いたままだった。

だがマクスは思う。以前にもこういう事はあったのだ。

あの温泉旅行の時も、こうしてレインシアは俯いたままだった。

「なあ姫さん。そろそろ聞いていいか？ どうして俺を呼んだんだ
？」

椅子はレインシアが使っていた為、簡易式のベッドに腰掛けてい
たマクスが問う。

それはマクスからすれば当然の問いだろう。レインシアが理由も
なく呼び出すような性格ではないこと位、これまでの付き合いの中
で理解しているのだから。

「マクスは……戦いに行くんですよね？」

「ああ。京谷との決着も残ってるしな。それに、ヴェノムの野郎との因縁もある。」

あいつがこの件に関わっているのは間違いねえからな」

レインシアは、その言葉に俯いたまま、スカートの裾を握りしめる。

「帰って……くれますよね？」

「当たり前だろう？ 俺を誰だと思ってるんだ？」

けれど、それでも彼女の震えは止まらない。そうではない、言いたいのはそういう事ではないのだと、静かに耐える様に震える身を押し立て、椅子から立ち上がる。

「違うんです……私はマクスが……、マクスが」

“遠くに行ってしまったいそうで……その気持ちを、上手く言葉に出来なくて”

だからこそ、レインシアはマクスに抱きついた。

その気持ちを確かにする為に。

「姫さ……、」

言葉を遮る。言葉で伝えられないなら、言葉で気付いて貰えないなら、こつするしかない。

“ごめんなさい……私は臆病だから、こんな形でしか、伝えきれないから。”

貴方に、気付いて貰えないから”

唇を離す。ゆっくりと、その余韻が名残惜しいから。

「ずるいのは、はしたないのは判っています……けど、怖かったです」

“貴方は……渡り鳥のような人だから。全てが終わったら、私の元から離れてしまいそうで、それが嫌で、貴方の気持ちも考えずに、こんな事をしてしまった”

けれど、それでも言いたかった。伝えたかった。全てが終わってしまう前に。

例えば自分から離れる事になったとしても、この気持ちを伝えておきたかった。

「我が儘なのは判っています。私が何も出来ない事も……けど、私は、私は……！」

だから、今この場で全てを伝えよう。簡単に単純で自分勝手な本音を。

「離れたくない……ずっと、傍に居たいです」

零れ落ちる雫。掠れる様な声で呟く泣訴を受け止めると、マクスはレインシアを抱きとめた。

「ありがとうよ……姫さんには、何度も助けられた」

かつての過去。マクス＝トレンジアが王子であった頃、マクス＝G＝ベルネールであった頃の罪を打ち明けた時、彼女は言った。幸せになる権利はあるのだと。普通に生きる事は許されるのだと言っ事を。

その言葉でどれ程救われただろうか？ どれ程、己が人間であることを実感できたであろうか？

「何も出来ない事なんかない」

あの時から、ずっと救われ続けていたのだから。

「悪かったな……気付いてやれなくて」

だからこそ、マクスは強く抱きとめる。これまでの清算。こんなにも近くに居ながらも、その気持ちに気付かずにいる自分。の間抜けさを償うために。

「マクス」

鳶色の瞳から滲む涙を、マクスは片手で拭くと、そっと唇を寄せる。

明日は、勝たなくてはならない。この少女の前では、己は最強であり続けなければならないのだから。

019 決戦の前日 後編(後書き)

c・m・「少女の告白は勝利をもたらすか!? 第19話の終了だ!
今回は出番はあったが特別に出演させるぜ!

おめでとうマクス! 君が本作品初キッスを成就させた男だ
!!! 憎いねペド野郎!!!」

マクス「おい待て!! その発言は色々問題だろうが!!!」

c・m・「最後自分からキスした奴が何言ってるのよ。本当なら司
会担当のレインシアちゃんが真ッ赤になってどっかに行っちゃった
んだから、あんたが変わりに解説しなさい。

今回は渡す物もあるんだから」

マクス「……まさか、それは神崎に送った!?!」

c・m・「おめでとう! ロリに告白されてキッスまでしたロリコ
ンが!!! 貴様にはロリコン認定証『初段』を送ってくれるわ!!!
メダル付きでなア!!!!!!」

マクス「待て!!! 俺は姫さん個人に告白したんであって、そっち
の趣味はねえ!!!!!!」

c・m・「貴方はもう上級者よ! 隠す必要はないわ!!!」

マクス「ふざけんな

!!!!!!」

c・m・「さて、ロリコンの発言は華麗にスルーするとして、次回

からついに決戦に移らせて頂きます。

何？ どうせ引き分けにして有耶無耶にするんだろ？ ですけど？

シヤラップ！！ 今回は別よ！！ 今この場で誓うわ！！
私はこの戦いに、引き分けという結末を送らせない事を！！ ここに完全なる決着を付けさせる事を宣誓する！！」

マクス「……そうかよ、勝手にしてくれ」

c・m「不貞腐れんなロリコン。どの道このコーナー終わるまで帰れないんだから仕事しなさい」

マクス「ち。つーかよ、直也の出番削れ。あいつ多すぎだろ」

c・m「今回のはどうしても入れておきたかったのよ。彼はかつての大戦の経験者である曾祖父から忠義とか護国について躰けられてて敏感なの。」

だから笑う男さんのグループが、ナチの服を着ると決まった時点で今回の事は織り込み済みだったわ」

マクス「成程な……しかし納得いかねえ。どうせ出番が多いならギヤグ路線で出せよ」

c・m「つまりロリコン扱いされた捌け口が欲しい訳ね……。しょうがないわね。御剣さんには悪いけど、前回のボツシーンを公開するわ」

x x x

病院での一幕。直也の退院時。

「傷の具合はどうだ」

「大丈夫ですよ。もうこうして動けまっ……!？」

北澤直也が一步を踏み出そうとした瞬間、前のめりに崩れ落ちそうになるも、間一髪で御剣が受け止めた

「見た事か。もう少し休んでおけ」

「すみません。ご迷惑をおかけしてしまつて」

申し訳なさそうに俯く直也に対し、御剣はベッドに移動させると、額に手を当てながら答えた。

「私が好きで心配している事だ。気にするな。」

それに、君は私にとつても替えの無い大切な存在なのでな」

その瞬間、病室の入り口で花瓶の割れる音が聞こえた。

振り返ると、そこには顔を赤くしたはやての姿が………

「あ、あの……わたし、ロビーで待つてるんでホンマお邪魔して済みませんでした」

そそくさと退出するはやて。

その後、この病院で看護婦が二人を見ると顔を赤くして去って行くという事が何度も起きたのだが、それは余談である。

はやてルート崩壊につき、ボツ決定。

×××

マクス「ルート崩壊とは……まさかここまで悲惨とはな」

c・m「そして御剣さんは直也くん攻略ルートを開拓と……まあボツだから関係ないけどね」

さて、ここからは読者様のお礼に移らせて頂きます。

Kyoさま、神崎はやてさま、Hagailazさま。ご感想を頂き、ありがとうございます。

次回はついに決戦の為、お見逃し無く!!」

マクス「さて……今日は俺も疲れたんで、この辺りで失礼させて貰う。またな……」

c・m「ノリ悪いわね……」

020 ホワイト・オア・ブラック

未だ日の昇らぬ時刻。暗黒にたゆたう海上に、京谷と恭介の姿はあつた。

「アルフは？」

「管理局に残った方が無難だからな。事前に向こうに居座るように言っておいた」

あくまでも事務的な口調で問う京谷に、恭介も同じように事務的な口調で答える。

いかに自分達が最強に等しい力を持つと、それはあくまでも借り物。

元より普通の暮らしを営んでいた者に、緊張もするなというのは土台無理からぬ話である。

だが、それでも二人の決意は変わらない。

フェイトとアルフを助ける。その為に自分達はここに居るのだから。

「とんだ三文芝居だな」

「だが、悪くもない。最後まで踊り続けよう」

皆が皆、指を指して笑うが良い。バカな奴も居たものだと、呆れて転げまわるが良い。

今この時だけは、全ての矛先が自分達に向く。

例え道化と蔑まれ様とも、それは自分達が望んだ事なのだから。

日の出は近い。あの日が世界を照らし、高く輝く時が決戦の合図となる。

さあ 道化の如く踊り狂おう。自分達は、悪役なのだから。

そして、アースラの艦内、転移用のゲートの前でマクス達は言葉を交わす。

今回出るのは、高町なのは、神崎龍也、マクス＝トレンジアの三人であり、残りはアースラで待機した方が良いと判断した為である。

「なのは、気を付けてね」

「頑張つてね、なのはちゃん」

「うん。アリサちゃん、すずかちゃん、ありがとう」

笑顔で言葉を交わす、すずかとアリサ。ここに彼女達が居るのは、すずかが興輝に連れて来られた事と、鮫島のデバイスの調整を見る為にアリサが付いて来た為である。

そして。

「やはり、私も行った方が……」

「いや、今回は戦闘の規模がでかくなる。姫さんは残ってくれ」

「やはり……頼りないですか？」

流石に今の言葉は失敗だったと感じたのだろう。女性陣の視線の痛さに耐えかねたのか、咳払いしつつ頭に手を置いた。

「ここで見てくれりゃあ良い。姫さんが見てる間は、俺は最強で居られるからな」

あまりにも不器用で、何よりも不格好な信頼表現。だが、それで充分だ。元よりこういふ男だという事は、レインシアは誰よりも知っているのだから。

「ちゃんと、帰って下さいね」

その言葉に、笑顔で背を向ける。もう言葉は必要ない。その言葉がある限り、負ける気はしないのだから。

故に、ここに決着をつけよう。

白と黒の魔導師は互いの信念を。
最強を冠する少年と戦士は、その意志を。
その紡ぎ手は未来の結末の為に。

望むモノ。己の願い信じる全てを賭けて、ここに両者は向かい合う。

「フェイト……もうやめよう。あんな女の言う事を聞いたって、不幸になるだけだよ。」

お願い……今なら助かる。京谷も、恭介も皆……」

だから、一緒に行こうと。フェイト・テスタロッサの使い魔は、その瞳に涙を溜める。

そして、その主が示したのは、突き付けた杖だった。

「ごめんね、アルフ。けど、わたしは止まれないの」

己には何もいらぬ。例え自分の使い魔だろうと、愛する母の為なら棄てられる。

今は遠い母との記憶。蒼天の下、見渡す限りの草原で共に花冠を作っていた。

今は遠いあの日の笑顔。それを、己は取り戻す。

たとえ記憶の中で自分がアリシアと。違う名で呼ばれていたとしても、それは些細な物ではない。

プレシア・テストロッサが、フェイト・テストロッサを娘と呼ぶのなら、自分にもまた、あの遠い母の笑顔を受け止める資格を持つという事なのだから。

逃げ出す事は出来ない。

それは母を一人にするという事だから。

棄て去る事は出来ない。

それは母を苦しめるから。

「逃げれば良いって訳じゃない。棄てて何かが変わる訳じゃないよね」

高町なのはには、その想いが判る。

何処か遠く、悲しい瞳。己が誰よりも必要とされたい思つ心を、彼女は誰よりも知っているから。

「わたし達は、お互いの想いをぶつけ合う事しか出来ないけど、それでも！

フェイトちゃんが止まれないなら、わたしが止める！」

そうする事が、フェイト・テストロツサを唯一開放する手段だから。
5。

ここに黒白の魔導師はぶつかり合う。

己の信念を、その魔法にぶつけて。

「始まったな」
「そうだな」

言葉と共に、両雄は駆ける。

片や二次性徴も終えぬ少年。片や十代後半の猛々しい青年。
体格のみで見るとならば両雄の差は歴然で在り、然して決着もまた
一瞬と見えた。

そう。この二人がただの人間であつたならば。

「シィ……ッ！」

青年、マクス「トレンジアの両刃の長剣が振るわれる度、この空間の
大気が震動した。

剣が振り下ろされれば煉瓦敷きの地面は斬り裂かれ、海はモーセ
の如く二つに割れる。

剣が横薙ぎに払われれば、風圧によって木々が吹き飛ばす。

正に天災。人智を超えた存在を、災害でなければ何と例えれば良い
というのか？

それを形容できる者など、この戦いを見た者には居はしまい。
もしそれを可能とするならば、それと同等の存在。すなわち

「やってくれる……!!」

この目の前の少年を置いて、他にはいまい。

「l i c l a c l a l a c l i l a c」
リック・ラク・ラ・ラック・ライラック

紡がれる呪文の解除キー。かの伝説の真祖の吸血鬼のキーを呟くと、瞬時にバックステップで距離を取る。

「Septemdecim spiritus glaciale
s coeuntes inimicum concidant.
(氷の精霊八十頭。集い来たりて敵を切り裂け)」

それはあくまでも呪文としては初級のもの。汎用性こそ高いものの、一撃一撃はライフル弾が精々だろう。

だが、京谷が構成する矢の総数は八十。例え物理・魔術的防御を施そうと、その全てを埒外の魔力で紡がれば話は別。

文字通りに対象を蜂の巣に変える氷の矢は、対象の防御を切り裂いて突き進む。

逃れようと矢は追尾し、弾こうとも剣では足りぬ。

マクス「トレンジアの命運さえ、この状況下では危ぶまれよう。

そう。彼が防護に徹するというなら。

「天の威光よ、我が力となりて降り注げ！」

祝詞と共に滞空する無数の光球。それらは確実に一球一球が致死量の雷電でありながらも、一切の容赦の欠片は無い。

当然だ。気を許せば氷の矢は確実にマクスを槍袵にするのだから。

「SAGITTA MAGICA SERIES GLACIAL
IS! 『魔法の射手・連弾・氷の八十矢!』」
「シュトゥルムヴェイン!」

氷槍と光球。ぶつかり合う魔弾は互いに相殺し、撒き上がる粉塵は両者の視界を遮る。

だがそれも、この両者に限っては関係ない。再度、仕切り直しだと言わんばかりに振るわれたマクスの長剣は漆黒の影に封じられ、弾かれる。

「なに……!?!」

それは果たしてどう形容すべきなのか? 氷上京谷の背後には、全長三メートルはあろうかという影法師が存在していた。

あまりにも奇怪。あまりにも不気味。敢えて表現するなら道化と呼ぶのが相応しいが、全身を覆うローブといい、表情の無い無貌の仮面といい、あまりにも不気味さが際立つ代物だ。

「近接戦でお前に勝てないのは、この前の戦いで理解したんでな」
「ヘッ! だからお人形の力になろうってか?」

口調こそ横柄な物であったが、マクス自身あの人形? が見かけ倒しではない事は見れば判る。

京谷の背に立ち、京谷自身を護る様に懐に入れる影は、彼の作った使い魔であると同時に彼自身の影でもある。

マクスは知らない。これこそが影を操る魔術、『操影術』の接近戦最終奥義。

名を

「『シュトゥルム・ニグレイディニス
黒衣の夜想曲』」

瞬間、京谷は駆けた。魔術による肉体強化による疾走は通常の疾走さえ弾丸かと見紛うような速度を生み出す。

しかしマクスは動じない。如何に素早かろうと目の前の相手が素人である事は百も承知。

先刻の戦いから武器術に関してはある程度扱える事は判っていたが、今回の動きを見るにそれも何らかの能力であると推察した。

あれに自分^{オリジナル}だけの技はない。

であるならば恐るるに足りぬ。あれが如何なる力を持つと、益暗である以上はこちらの勝利は揺るがない。

背後に回ると同時の一閃。確実に死角から攻めた一撃は影を粉碎し、その背に刃を通す。

否。通す筈だった。

「な……」

驚きは当然だ。背後に立つ人形から伸びる影の紐。それらが折り重なって楯となり、マクスにとって必殺足る一撃を容易く止めたのだから。

「てめえ！」

怒りもあらわに押し切るべく追撃をかけようとするも、即座にその場からマクスは離脱する。

斬撃を遮った紐。それはただの紐に非ず。その先端は鋭利なる穂先であり、撓る全体は生ける触手。

大蛇の如くのたうつ漆黒の槍はマクスへと狙いを定め、殺到する。

「ちいッ」

自動攻撃と防御の両立。

例えば距離を取ろうと影の槍は相手を追い詰めて串刺し、仮に懐に飛び込めたとしても防御が働く。

攻防一体の究極形。近接戦闘最強というだけの事はある。

だが、ここで勝敗が決まると軽んじる程、氷上京谷は樂觀視などしていない。

自ら距離を詰め、拳を揮うと背後の影はその動きに合わせて、拳をマクスに叩きつけた。

「グッ」

当然だ。この使い魔は術者の影。その動きに合わせた行動をとるのは至極当然のことである。

ならばどうするか？ マクスには空は飛べず、遠距離の攻撃も出来はするが、それは相手の専売特許。

自らが離れるなど愚の骨頂と言えるだろう。

故に詰める。己は剣士。距離を詰め、一撃一撃に全力を込める。何度も、何度も。

剣撃は一撃一撃が必殺にして必滅。常人であるならば風圧だけでも弾け飛び、掠れるだけで肉体が千切れ飛ぶ。

何度でも、何百でも、何千でも。

繰り返し繰り返し繰り返し。

気の遠くなるような攻撃の中で、ある筈の無い隙を見出す。

他者から見ればそれは愚策。明らかに無駄ともとれる苦肉の策。

だがこうするより他にない。そして、この相手にこそ、その作は有効だった。

“クソつたれ……離れねえ気が”

相手が距離を取るならば遠距離からの砲撃で決着はつく。如何な

る速度を持つとも、広範囲の呪文はこの街全体を飲み込めるだけの威力と質量を備えている。

だが、こつも近づかれれば話は変わる。如何に自動で防御できるとはいえ、魔力による制御はこちらで行っているのだ。

無詠唱呪文では決め手としては薄いし、何より目の前の相手に専念しなければならぬ中で、意識を外すのは愚策と言える。

故に手詰まり。負けもしなければ勝ちもしない。完全な均衡状態に持ち込まれた。

手に汗を握る。背筋の冷たさを肌に感じる。

上空には戦う少女。未だフェイト・テストロッサの方が優勢ではある物の、油断をすれば覆される戦局である事は目に見えていた。

“落ち付け……上の戦いの趨勢は関係ない。この場で重要なのは、俺が全てを終わらせるだけだ”

だから何も問題は無いと、目の前の相手に意識を向け続ける。否、向き続けている筈だった。

「決着だ」

静かに、何時の間にかマクス・トレンジアは氷上京谷の懐に入る。如何に冷静さを取り繕おうと、所詮は素人。一度意識が離れれば、達人がそれを見逃す筈もなく、

「悪いな……」

その一瞬に、全てを終わらせるのは当然である。

「ヴェルセルク神龍剣！」

長剣に神気が満ちる。輝ける光は膨張し、辺りを覆う程に膨れ上がる。

全力にして全開。手加減の出来る相手ではない以上、こうするより他にはない。

爆砕。文字通り、そう表現するしかない一撃によって京谷は海中へと沈み、衝撃によって水柱が辺りを覆った。

「テメエみてえな奴ばっかじゃ、俺も最強では居続けられねえんだろっが」

その結末を、海中へと沈む京谷を見ながら、マクスは笑う。

「それでもよ　あの姫さんの前じゃ、俺は最強でなきゃならねえんだよ」

何処か遠くを見つめる様に空を見上げ、神崎龍也の方へと加勢すべく背を向ける。

だが気付かない。この海辺を覆う水柱が、未だ下らぬという事実

に。
「それはつまり、姫さんとやらが見ていなければ、お前は最強じゃないって事だろ？」

そして、マクスは聞いた。自身に敗北をもたらす者。
純然たる力によって屈服させる最強の存在。その声を。

ブラック・オア・ホワイト
「決着だ」

振り向く事など出来はしない。完全なる勝利の一瞬。その一秒にも満たぬ余韻の中で油断しない者など常識では考えられず、その一

瞬を付け狙った京谷は、右手をマクスの背に当てていたのだから。

「Dextra emittam. (右腕解放) 『JOISTE MPESTAS FULGURIENS』 (『雷の暴風』)」

放たれるのは暴風と雷。全てを焼き払い、山さえも消し飛ばす暴力の具現が、右腕より解き放たれた。

音も光さえも飲み込む一撃。常人であれば塵も残らぬ一撃だが、その心配を京谷はしていない。

「女神ヒロインの加護……成程、確かに主人公には必須の条件だな」

攻撃が決まる瞬間、マクス「トレンジアは光に包まれていたのだから。」

「ち。花を持たせてやるか……」

僅かに零れた言葉と共に、氷上京谷は身を崩れさせ、海へと落ちる。

見方によれば、最後の一撃と共に力尽きたとも見れなくはない。何より、上での決着はついた。フェイト・テストロッサが海に落ちようとしているなら、自分は彼女を助けなくてはならないのだから。

スターライトブレイカー。高町なのはの持つ最大の砲撃魔法。非殺傷設定にこそなっってはいるものの、純粹な破壊力のみで見る

ならば『雷の暴風』にさえ引けを取らぬ一撃を受け、フェイト・テスタロッサは海へと沈む。

故に、ここに勝者は決定した。

マクスと京谷の戦いはあくまでも個人的な物であり、ジュエルシードを手にする権利は、二人の少女の決着が条件なのだから。

「フェイトちゃん!!」

思わず海へと飛び込もうとするも、すぐに高町なのははそれが不要だと判った。

意識を失ったフェイトを、京谷が抱きしめているのが判ったから。そして、ここからでは聞こえないものの、京谷が呟いた言葉も、口の動きを見れば判る。

微かな微笑みを浮かべ、慈しむように彼は言ったのだ。

頑張ったな、フェイト。

その言葉に、なのはは微笑む。フェイトにも、大切だと思ってくれる人がいるという事に。

彼女は決して一人ではないという事実。

そして、ジュエルシードを手にしようとした所で、

「動くな!!」

瞬間、辺りは紫の騎士に囲まれた。

一体いつからそこに居たのか？ 全員の首元に穂先を突き付け、

彼らはジュエルシードを目の前から掻っ攫う。

「ご苦労だった。妙な真似はするなと言っておく。先の戦いで满身創痕になっているだろうからな。貴様ら全員は僕一人でも片が着く」

杖を構えようとした瞬間にリーダー格の男が言葉を紡ぐ。
だが、何事にも例外はある。未だ無傷な人間、神崎龍也は拘束を振りきり、なのはを助けるべく駆けだす。だが。

「動くなつて言われたらどうが」

横合いから恭介が殴り、意識を刈り取ると、問題ないと紫の騎士に手を振った。

騎士にしてみても長居をする気は無かったのだろう。ジュエルシードを手にするや否や、彼らはこの場から転移した。

「ク、ソ……！」

何のためにここまで付いて来たのかと、神崎龍也は自分の失態に歯噛みする。

彼らを相手にする事こそが自分の本来の役割だったのに、と。

突然の事態になのはが困惑しかけるも、すぐさまリンディから通信が入った。

『転移した騎士たちの座標は特定出来たわ。貴方達はアースラに来て頂戴。』

その二人もよ。フェイトちゃんを治療したいでしょう？ 悪い様にはしないわ』

その言葉に京谷は頭を振ると、なのはにフェイトを手渡した。

「黒幕がはい判りましたと言うつても思ってたか？」

その言葉は横柄に。自分はあくまでも、管理局とプレシアから敵

対されなければならない。

だが、それも徒労に終わった。

『アルフさんから事情は聞いてるわ。お芝居はそれ位にしてくれる
』？』

「あの野郎……あれだけ喋るなって言ったのに」

これまでの苦勞が水の泡だと言わんばかりに肩を竦めると、リン
デイの指示に従う様に、転移陣の中へと入る。

「悪いな、殴って」

「悪者になる予定だったから、やったんでしょう？」

その通り、と恭介は答える。

ともあれ、予定が変わってしまった以上はどうしようもない。

ジュエルシードの回収に協力し、少しでもフェイト達の待遇を良
くして貰う事を画策しつつ、京谷達はアースラへと向かった。

020 ホワイト・オア・ブラック（後書き）

c・m・「死闘は決着。後味最悪！！ 第20話の終了です！」

御剣「そしてやはり私が登場。残念だったなマクス。お前の敗北はブルーレイで録画済みだ」

c・m・「（ネタにされたのがよっぽど嫌だったのね……………）」

ちなみに京谷君が作品のタイトルとは逆に『ブラック・オア・ホワイト決着だ』って言うてるのは、なのはちゃんよりフェイトちゃんが大切だからブラックが先に来たという理由から。

隠れた所に見える愛に是非ニヤニヤして欲しい」

御剣「愛も行きすぎるとストーカーになってしまっがな。しかし良いところ無いな、神崎さん」

c・m・「確かに最近ヘタレ臭がするようになる位まで良いところ無いわね。」

もういつそ、愛称はヘタレでも良いんじゃないかと思うんだけど……………て言うのは嘘よ。物語上ちゃんと活躍させるのでご安心を」

御剣「そろそろラストパートか。他の連中の活躍にも期待したいな」

c・m・「ちなみに次回か次々回には水玉様活躍予定。一つ言っておじつ。ごめんなさいと」

御剣「まさか……………本作品であれを解禁すると言うのか!？」

c・m・「ええ。『なるつ』では色々制限がかかるから今まで抑えてただけど、本来私は強烈なバイオレンスシーンを書くからね。ギリギリまでやるわ」

御剣「……投稿停止には気を付けるよ」

c・m・「問題があるようなら修正するから安心しなさい。さて、ここからは読者様のお礼に移らせて頂きます。

Kyoさま、神崎はやてさま、Haggaiさま。ご感想を頂き、ありがとうございます」

御剣「それでは今日はこの辺りで失礼させて貰う。次回もよろしく」

021 勝利を我らに与え給え

紫の騎士たちが転移した後、艦内には矢継ぎ早に指示が出された。

「リンディ提督！ 座標特定完了しました！」

「武装局員に通達！ プレシア・テストロツサ及び騎士たちの拘束を！ 水無月君、行ける！？」

『何時でも構いませんよ。既にゲートについていますから』

念話によつて送られてきた声に頷くと、すぐに出動要請を出す。

後は彼らに任せるだけだと言つた様にデスクに座ると、モニター越しに顛末を見守つた。

艦内に着いた京谷達は一先ず手錠をかけられ、コントロールルームへと案内された。

そこに居るのは、あの決闘では居なかつた者たち。この世界に来た者と、この世界に存在していた者たちが、京谷達を見た。

ある者は同情するように、ある者は納得がいかない様に、それぞれの感情の折り混ざつた視線を一瞥すると、京谷と恭介は前に出た。

「悪い様にはしない、って事だつたけどよ。フェイトの手錠は外してくれ。」

流石に罪人扱いは酷いだろう？」

「ごめんなさい。そうしないと、納得できない人たちも居るの。」

私はリンディ・ハラオウン。このアースラの責任者よ。貴方達は

？」

「氷上京谷」

「天宮恭介」

挨拶には興味は無いと言った様にそっけなく答え、モニターを見る。

おそらくはプレシア・テストロツサを捕縛する為に用意されたのだろう。

エントランスに到達した武装局員と紫の騎士が交戦し、そして

「あれヤバいんじゃないか？」

「そんな……」

武装局員は、呆気ない程に敗北した。

設置されたトラップ。こちらの兵数を圧倒的に上回る騎士と、魔導によって構築された機械の兵士、『傀儡兵』によって。

「局員たちの送還は！？」

「駄目です！ 受け付けません！」

そして、画面に砂嵐が奔ると同時に切り替わる。

そこに映るのは

「フェイト、ちゃん……？」

その光景に、なのはは目を見開く。未だ黙し、一言も発しないままに画面を見続けた少女と、目の前の少女を見比べてしまう程、お互いは瓜二つと言ってよかった。

「え　　？」

そして、フェイト自身その光景には理解出来なideいた。何時も怒らせてばかりだった母親。

プレシア・テストロッサは、これまで自分が見たどの表情にもない顔で、巨大な培養液の中で眠る少女を見つめていた。

それは哀しみ。フェイトの知る怒りの表情から来る顔ではなく、真に誰かを慈しむ表情だった。

「やっと揃ったわ、アリシア。二十一個のジュエルシード。

もう苦悩の日々はお終い。管理局によって失われた貴女を、私は取り戻して見せる。

ねえ、聞いて居るんでしょう？　時空管理局。

永かった暗鬱の時間、永遠にさえ感じられた苦悩。貴方達を殺しても殺し足りないと感じていたけど、それももう良いわ。この子は帰ってくる。

次元の狭間、アルハザードへの道は開く。貴方達を怨むのも、この子の身代わりの人形を娘扱いするのも、もう疲れたの。」

暗く、あまりにも無機質な独白に、アースラに居たメンバーは固まる。

『人形』『娘扱い』。その言葉の意味を、ここに居た全員は正しく理解した。

そしてプレシア・テストロッサが、何を望んでいるのかも。

「聞いてるんでしょう？　フェイト。貴女にアリシアの記憶を上げたのに、そっくりなのは見た目だけ。

役立たずでちっとも使えない。私のお人形」

「それが……それが答えか！？　プレシア……！」

京谷は叫ぶ。これを許容できるのか？ 自分の娘を、最初から娘と思わず、使えるか使えないかだけで考え続けた。

それがお前の答えだと言うのか、と京谷は拳を握りしめる。

「プレシア・テストロツサは、以前ミッドチルダの中央技術開発局に勤めていたんだけど、その時の事故で娘を無くしていたの。

その後は使い魔を越える人造生命、死者蘇生の技術の研究を伝えた。その時のプロジェクト名は『F・A・T・E』。

協力機関は、管理局内の事故や次元犯罪者によって身内の命を奪われた、次元犯罪者の排斥運動を掲げ、非公式・非合法に犯罪者や組織、さらには違法行為をしていた管理局員を駆除していた組織、『ガルフ』。

貴女の下に居る騎士たちがそうなんでしょう？」

「そうよ、坊や。そして良く調べたわね、小娘。時空管理局も、それ位普段から些細なことにも全てを擲てればいいのに。本当、貴方達は嫌いよ」

静かに、だがしっかりと呪詛の言葉を吐き捨てながら、プレシア・テストロツサは、アリシアの入ったケースに手を当てた。

「それに、失ったモノの代えは効かない。

アリシアはもつと優しく笑ってくれた。

アリシアは時々我が儘も言ったけど、私の言う事をとても良く聞いてくれた。

アリシアは　いつでも私に優しくかった」

「最低よ……アンタ。この子は、アンタの為に戦ってたじゃない！
何で、何でそれを判ってあげないのよ！！」

アリサは叫ぶ。その声を震わせ、語気を荒げて、ここに居るならば今すぐにも殴りたいと言う様に。

「その子が偽物だからよ。せつかく上げたアリシアの記憶も、貴女じゃ駄目だった。」

アリシアを蘇らせる為に、私が慰みに使うお人形。

だから、貴女はもう要らない。何処へなりとも、消えなさい！！」

「あ、ああ、あ……………」

がちがちと手が震える。もう止めて、聞きたくない、そう両手で耳を塞ごうとするも、手錠の所為で塞げない。

「良い事教えてあげるわ、フェイト。貴女を作ってからずっと、私は貴女が大嫌いだっただのよ！！」

そして、その言葉と共にフェイトは崩れ落ちた。彼女にとっての世界が母ならば、母の否定する言葉こそが、彼女を崩壊させる銃爪なのだから。

「フェイト……………」

崩れ落ちる彼女を両手に抱きとめ、氷上京谷は未だ哄笑し続けるプレシアを見据えた。

「おい管理局……俺があの子をぶっ飛ばす。その代わりに、フェイトの処遇には出来る限り協力しろ」

「良いわ。局員の人命も大切だし、こちらで最大限の努力をする」

「待って下さい。僕も行きます」

そして、龍也のその言葉に続く様に、ここに居るメンバーの戦力になる者たちが挙手した。しかし。

「あら……直也君は？」

「そういえば、興輝君達も居ない」

「それに、すずかも……」

まさか、と。ここに居る全員が画面を見つめる。

未だ壊れていないモニターの映像。城と形容するに相応しきアジトの城門に、バイクに跨る彼らの姿が映っていた。

時間は画面が砂嵐になった直後、武装局員が全滅した時刻にまで遡る。

あまりにも呆気ない程に武装局員は地に伏せ、紫の騎士たちはため息交じりに彼らを牢獄に閉じ込めるべく動こうとしていた。

何も彼らの命を取るつもりはない。彼らは当然の如くに仕事をこなし、愛すべき者たちに日々の安らぎを与えるために奮闘している事は、彼ら『ガルフ』のメンバーにも判っていた。

「二、三日は動けんだろうが、非殺傷設定だからな。取り敢えずは大人しく、」

「マルコー！ 離れるー！！」

同志である騎士の言葉も空しく、マルコーの命運はそこで尽きた。フルフェイスの兜ごと頭蓋は砕け、脳漿と眼球が零れ出ると、辺りを紅く染め上げた。

びちゃびちゃと、バケツをひっくり返したような紅い液体と、ぐちゃぐちゃに潰れた脳が当たりに飛び散る。

「モニターの破壊は御苦労でした。おかげでこちらも遣り易くなりましたよ」

先の一撃で倒れた筈の子供たち三人は、何事も無かったかのように立ち上がる。

後ろに居る男女はともかく、先頭に立つ少年ははっきり言って異様だ。

炎髪蒼眼。この世の物ではありえぬ容貌を持つ少年は、三日月の如くに口元を歪め、既に原形を留めぬマルコーの顔を挽肉になるまで踏み潰した。

「貴様は……」

かつて、その少年を見た少女、セレノIIアイヴィーは知っている。目の前の少年の能力、そして、これから起こりえる絶望を。

『散開しろ！ 狙うのは奴ではなくその周り、あの炎髪の少年には決して直接攻撃するな！』

『副隊長、あの少年は一体』

瞬間、念話の通信は途絶えた。運が悪かったとしか言いようがないだろう。

暁葉の魔法によって作られた光の剣に、その身体を刺し貫かれ、そこから男は真上に斬り裂かれた。

『……ブラウナー』

あまりにも見るに堪えぬその惨状。まるで魚の開きか何かのように二つに分かれた身体から血が飛沫、零れる臓腑が身体にかかる。

あまりにも生暖かい。あまりにも冷たい。シャワーのように降りかかる血も、倒れる様に寄りかかる体の半分も、鎧越しにセレノに伝わる。

今、邪魔だと言つかのように投げつけられた同胞の身体を彼女は抱きとめ、すぐさま各員に伝える。

非殺傷設定の解除。この少年たちを、ここで討てと。

そして、北澤直也は興輝達とコントロールルームを出た。

「どうした？ 急に抜け出して」

興輝の疑問も尤もだ。あの画面が砂嵐に変わる直前、この少年は顔を変えた。

表情にあるのは、焦りと怒り。決して許されぬと言った顔で、北澤直也は俯いていたが、すぐさま興輝と槇野に頭を下げた。

「どうかご助力を！ 自分をあの屋敷に送って頂きたいのです！」
「……事情があるようですね」

思い詰めた表情から、唯事ではないと察したのだろう。事情を訊く槇野から、北澤直也は全てを伝える。

かつて自分が倒れた事。その時の傷の犯人を紫の騎士に押し付けた事。

そして、紫の騎士は悪人ではないと言う事を、掻い摘んで説明した。

「成程……そして不幸にも、我々の中には悪人が紛れ込んでいたとあの墮天使、よくもまあ、とんでもない奴を来させてくれたものです」

「一緒に戦ってくれとは言わない。あの場所に送ってくれば、後はこちらで何とかする」

普通に考えれば、それは当然のことだろう。自分の身勝手に覇者を巻き添えにする必要など、一体何処にあると言っのか？

だが知らない。目の前に居るこの二人は、何処まで行っても善人だと言っ事を。

「興輝君、君は前になんて言いましたっけ？」

「協力する、だろ？ 第一こんな美味しい見せ場に一人で行く気かよ？」

「良いのか……君たちには、何も帰って来ないというのに」

何の利益も無く、賛辞も無いままに死地へと行くなど、自分の様な馬鹿位だと、そう北澤直也は考えていた。だが。

「それは貴方も同じ事でしょう？ さて、そろそろ行きましょう。

水無月さんの能力が判った今、長居をしている余裕はありませんからね」

槇野は呟くと、スキマ生成によってプレシアの屋敷、『時の庭園』への道を繋ぐ。

「向こうにすぐに飛んで行ければ良いんですが、虚数空間がある所で転移する訳にはいきませんからね。

スタートラインは城門からですが、宜しいでしょうか？」

「十分に過ぎます」

「なあ、お前の武器って刀だけか？ それじゃ時間がかかるだろ？ 槇野、お前の能力で良い奴があつただろ？ 出してやれよ」

やれやれと言ったように、槇野は指を鳴らす。

『武装具現化』。神性を持つ魔法具から現代兵器に至るまで、さまざまな武装を出す能力。

東 興輝にも同様の事が可能だが、武装の範囲では槇野の方が上である。

「好きな物を持って行って構いませんよ。

ついでに私達の武器も選んでください。服装にあつた奴を。出来るだけ登場は格好良くしたいですから。多少威力が低くても、魔力で強化すれば何とかかなりますしね」

お安い御用だと呟き、北澤直也は武装を選出する。

「親衛隊ならシュマイザーにパンツァーファウスト……いや、派手に行くならあれがあつたか」

言葉と共に口元を釣り上げる。せっかく協力してくれるなら、とことんやってやること。

「槇野さん、バイクの運転は心得が御有りで？」

荒れ果てた城門、辺りを囲む夥しい傀儡兵を前にして、彼ら四人

は怯む事無く疾走する。

城門に響く轟音^{エクスート}。現代においては決して見る事の叶わぬ、攻撃性を持たせた独特のフォルム。

第二次世界大戦、ドイツの軍人たちは中世騎士の軍馬と同じく、それに跨り戦場を駆けた。

Z? nd app KS750。彼らの乗る鋼鉄の騎馬は、六十年近い眠りから覚めた歓喜に、その身を震わせる。

その用途は斥候、諜報、そして 電撃戦。

その轟音を前に、気付かぬ者など居はしない。言葉を紡がぬ機械の兵は、視線だけで静かに問う。

『何者か』と。故に、彼らは口元を歪め、意気揚々と語りだす。

「我ら、^{ヴァルハラ}魔城より溢れ出た^{カッツゲルッペン}死の兵士」

故に止まらず、死して進み続ける者。

「この道を推し通る事を否とするならば、俺達の首級を上げて見せな」

永劫戦う戦奴、不死なる兵を殺せるならば。

「 共に、^{トテンタンツ}死の舞踏を踊り狂おう」

「え、えつと……」

唯一状況について行けないのか、興輝と共に槇野の横に備え付けられたサイドカーの中で、月村すずかが口上に悩むと、三人は嘖き出した。

「やっぱり、こういうのは似合いませんね」

「誰だよ、これやるうなんて言った奴」

「格好良く行きたいと仰ったのは、お二人では？」

そりゃそうだ、と顔を見合わせて笑うと、槇野と直也はアクセルを上げる。

「詳しくは判りませんが、玉座の間は出来るだけ階段を使わない方向にあるかと。」

この城の動力源は、恐らく上の階にある筈ですの

「助力、感謝する。君達の道に勝利があらん事を。勝利万歳」

「勝利万歳。頑張れよ、直也」

そうして最後、城門に辿りつくと同時に、魔力によって強化されたパンツァーフアウストによって扉が破られると、それぞれの場所へと散って行く。

お互いの顔が見えなくなる直前、三人は同時に唱和した。

「勝利を我らに与え給え！！」

「さて、俺達は各個撃破……他の連中が来るまで暴れさせて貰うか」
「ふふ……乗っていますね興輝君。いつそのこと九歳ではなく十四歳だったら良かったのに」

「……中二つて言いたいのかよ、お前」

げんなりした表情の興輝の横で、すずかは二人のやり取りを見て

クスクスと笑う。

「けど、なのはちゃん達が通り易いようにしないといけないからね」

そして、彼女の肌はより白く、その眼は紅く輝く。

「貴方達程度に、私の世界は見せられない」

それは彼女の矜持。この程度の雑魚を相手に、夜の世界は必要ない。

「怨敵よ、朽ち果てなさい」

それこそが我が殺意と知れ。

瞬間、回廊を埋め尽くす傀儡兵は、すずかの身から放たれた棒杭に刺し貫かれると、魔力を吸われ、灰と化す。

その命を、魔力を吸うたびに彼女の力は強くなる。

「人形にしては美味しいですね。乾くまで絞り取ってあげる」

何と言う妖艶さ、なんと蠱惑的な凶か。彼女を知る者が見れば、そのあまりの艶かしさに卒倒さえする事だろう。

「興輝君……見惚れてないで、さっさと倒しなさい。早くしないとペド野郎と呼びますよ」

「まずお前からぶち抜くぞ」

言葉と共に、両者の銃口が互いに向きあうと、銃爪を引きあう。一見すれば同士討ちとも取れる光景。だがその後方。お互いに空

から迫る傀儡兵に、シュマイザーによる鉛の洗礼を浴びせた。

魔力によって物理強化された弾丸の三十二連射。如何に強固な防御を誇る傀儡兵であろうと、これは防げない。

「見栄えは良いが、弾に魔力を込めるのが面倒だな」
「では切り替えますか」

言葉と共にシュマイザーを投げ捨て、武装を変える。

手持ちの武装はビームライフル。本来はガンダムに搭載されている為、かなりの大型になる筈だが、個人携行を可能にするまで縮小されたものである。

「便利なもんだな!!」

「流石にあんな大型兵器に乗って行動は出来ませんからねえ!!」

魔力によって肉体を強化し、反動を完全に殺した上で四方から迫りくる傀儡兵を撃ち落とす。

光線による銃弾。一面を輝かせるバレット・ダンス。

一対二挺の銃口は、光線の雨を降らせ続けた。

ギアを入れ、アクセルを全開に回す。

エンジンの焼けつく匂いがする。景色が矢の如くに飛んで行く。夥しい兵を轢き殺し、残骸となった彼らに振り返る事も無く、北澤直也は庭園を駆ける。

間に合えと。

今度こそはと決意を固め、北澤直也は突き進む。

限界など、知った事か。止まる事など出来はしない。

先にあるモノを掴み取れ。

この手は、あまりにも短いから。

永劫に走り続ける。

この足は、あまりにも遅いから。

自分は誰も救えない。救えた験など一度もない。

ソレは当然。彼はそう決められた存在だったから。

「だが、今は違う……」

自分は運命には縛られない。そんなモノはこの世界には無い。

だからこそ、己は走り続けるのだ。

たった一人でも、零さない為に。

しかし、今の君では間に合わない。宿業を超えるには、まだ早いのである

頭に聞こえた声を振り切る様に、彼はスロットルを全開にした。

そこには地獄があった。

エントランスに積もる山は、かつて人であったモノ。

満ちる臭気。鉄と油の混じる匂いは空間を包み、一度歩けば床に広がる血が跳ねた。

そして　　今、セレノの最後の部下が、崩れ落ちた。

『副隊長……逃げて、』

末期の念話も、最後まで届かない。全身の毛孔から噴き出た血は鎧の内側から染み渡り、糸の切れた人形のように彼の身体は崩れ落ちた。

「あ……………」

かちやり、と乾いた音を立て、彼のロケットが開く。

そこに写るのは彼の家族。彼が愛していた、ささやかな幸福の形。それさえも、少年は土足で踏み躪る。

壊れたロケットは血の池に沈み、写真から笑顔は消えてしまった。

「何故、こんな事をする…………？」

満身創痍となった身体。最早己の命運は変わらない。だからこそ、セレノは問う。私達が何をしたのかと。

ささやかな幸福を、何故お前たちは踏みにじるのか、と。

その発言を前に、水無月珠樹は笑っていた。

「楽しめるからに決まってるだろう。他に理由なぞ居るか」

ああ、つまりはそういう事。己の快樂の為ならば、彼は何であるかと踏みにじる。

ささやかな幸福も、流した涙も、この少年にとって、全ては等しく自らに捧げられる供物なのだ。

ならば

「そうか……」

手にした矢を引き絞る。狙いは眼球。あれの反射がどこまで有効かは知らないが、散って逝った同胞たちの為にも、一矢報いなければならぬ。

未練はある。悔いも残る。

だけど、それでも自分だけが助かりたいと思う程、セレノアイヴィーは人間を止めてはいない。

折れた足に魔力を流して立ち上がり、外れた肩を気にも留めず、鎧の中、微かに涙を滲ませながら、彼女は弦を引く。

“ さようなら、父さん。次は、私も蘇らせてね ”

最期に、もう一度だけ、失った両親と二人目の父を想いながら瞳を閉じる。

どうせ終わるのなら、せめて大切な人たちの笑顔だけを見たいから。

けれど、彼女は何もしていない。彼女の幸運は、ここでは終わらない。

爆炎と共に、エントランスに鋼鉄の魔獣が躍り出る。

東 興輝に手渡された最後のパンツァーファウストでドアを破り、北澤直也は突き進む。

止まる必要など何処にもない。最後まで派手に行けばいい。

アクセルは全開。既に無人となった車体は、問答無用で水無月珠樹へと突っ込んだ。

加えて、

「逝け、糞餓鬼……………！！」

手にした拳銃の銃爪を引く。魔力によって強化されたワルサーP38の9ミリ軍用弾はエンジンに着火。オレンジ色の爆炎がエントランスを埋め尽くす。

普通ならこれで終わり。アクション映画であれば悪役は吹き飛んでエンドロールが流れる結末。

だが、

「テメエが逝けやア

！！！！」

爆炎の中、原形を留めぬ鉄塊となったバイクを片手で振り上げ、勢いよく投げ返す。

ソレは正に悪鬼の技。

音速を超える鉄塊はソニックブームを引き起こし、微塵に砕けて散弾の如くに北澤直也に迫る。

普通ならここで終わり。殺意と共に放たれた弾丸ライナーは、台風の時と同じく北澤直也を肉塊に変える。

“ 四間……………届くか！？ ”

されど彼は以前までの彼ではない。肉体限界という枷は消え、本来の人間が持つポテンシャルに引き上げられた肉体は、奥義に届かぬまでも近い形を作り上げる。

身に迫る鉄塊が触れる刹那、北澤直也はその全てを躲し切る。

だが、

「こいつ……………！」

「保険てのは常にかけてくモンなんだよ」

既にセレノの矢は放たれていた。当然だ。
先の爆風で手元が狂ったとしても何ら不思議はなく、放たれた矢のベクトルを水無月が制御していたとしても、それは至極当然のこと。

迫りくる矢は彼女の頭蓋に。

その手は、あまりにも短いから

微かに脳裏に絶望がよぎる。

その足は、あまりにも遅いから。

だから彼は、誰も救えた事が無かったのだ。

021 勝利を我らに与え給え(後書き)

c・m・「絶望の道に救いはあるか!? 第21話の終了だ!」

御剣「何という地獄……助からなかったら周りが引くぞ」

c・m・「次回、水玉チーム本格活躍! ご期待下さい!!」

御剣「流すのか!?!」

c・m・「だから次回に期待しなさいと言うのに。何か質問は?」

御剣「……まあ、待てと言うなら待つが。

ツェンダップにパンツアー、シュマイザーにワルサー……今回
回はナチ回か?」

c・m・「ごめんなさい。Diesの曲をかけながら書いてたら、
何時の間にかこんな感じになっちゃったのよ」

御剣「しかし、さすがが強いな……というか、笑う男様たちが完全
に喰われている」

c・m・「うーん……本当はもっと活躍させる予定だったんだけど、
実在する銃ならともかくガンダム系の武装ってアクションをさせる
と、そこまで燃えないのよ。」

普通の銃なら駆け引きとかあるけど、あれはすぐに決着がつ
くし、アクションを入れる暇が無いから難しいの。

連射性もそんなに無いし、速さの無いアクション程盛り上が
りには欠けるから」

御剣「確かに、ロボット系の銃は動きに欠けるからな」

C・M・「さて、ここからは読者様のお礼に移らせて頂きます。

神崎はやてさま、Haggalazさま、水玉さま。ご感想を
頂き、ありがとうございます。

次回、ついに戦いの時は来るわ!!」

御剣「それでは、この辺りで失礼させていただきます」

振るわれる一刃は不可視にして魔技。

如何なる相手であれ、ましてや目の前に立つ素人の子供の首を刎ねるなど、北澤直也には造作もない。

だが……彼の表情は絶望に染まっていた。

本当は違った。この破魔刀を使う事で矢を無効化し、この少女を担いで逃げるつもりだった。

けれど結果はこれだ。己の刃は矢には間に合わず、水無月の首へと狙いを定めた。

かつて幾百と繰り返した行為。

己の意識の外から飛来する矢を叩き落とす『矢止め』は、北澤直也が一度として失敗した事の無い業であった。

そう。失敗などした事は無かった。

例え千度繰り返し返そうと、同時に幾本の鎌が迫ろうと、たちどころに斬って捨てる。

それだけの事が可能であり、現に北澤直也は銃弾さえ見切れる自信もあった。

だが、その平時には当然の如く成功する行為を、北澤直也は失敗した。

それは狙い澄ましたかのように。あと一瞬振るうのが早ければと、そう思わざるを得ない状況。

万分の一秒にも等しい衝突の食い違い。

何が悪かったのか？ 血の池で足元が狂ったのか、爆発の閃光で視界に誤差が生まれたのか？ それとも動きすぎる身体がタイムイングを狂わせたのか？

いずれにせよ矢は無効化出来ない。ベクトル変換の能力をここで打ち消しても、慣性の法則に従って矢は少女を貫いてしまう。

そう……いつだってそうだった。北澤直也は誰も救えない。

誰かを救えた験など無い。

積み重ねたのは死体の山。被害者を死なせ、加害者を殺し、結局は死と暴力を前提として終わらせる結末。

この手はあまりにも短すぎた。

この足はあまりにも遅すぎた。

結局……物語だの運命だのは関係なかった。

北澤直也とは、誰かを傷つける事でしか生きられない存在なのだと、そう理解し、瞳を閉じた。

恐らくは一瞬、肉を裂く感触と共に全てを終わらせ、己も此処で自害しようとして、そう決意した。

だが、首を刎ねる感触は未だない。いや、手の内に感触も残らぬ様な斬首は初めてではないのだ。

結末は変わらぬだろうが、確認はしておこうと目を開ける。

そして、その瞳に映る事実には、北澤直也は愕然とした。

黒と紫が入り混じった髪と、右目から頬にかけて斬り裂かれた疵を持つ長身の男。

あろうことか、その男は間に割って入る様に、北澤直也と水無月珠樹の中間に立っていた。

その右手には、セレノの放った矢。

そして左手には、北澤直也の刀があった。

“ 莫迦な…… ”

人差し指と中指。そこに挟み込むように防がれた刀は、未だピクリとも動かない。

防げるはずはない。例え如何なる相手であろうとも、打刀を手にした自身の刃を防ぐなど、冗談を通り越している。

普通に考えれば自意識過剰とも取れるだろう。だが、北澤直也は

自惚れからそう言った事を考えてはいない。

有り得ないのだ。試合であれば寸止めも出来る。薄皮一枚を残して斬る事も造作もない。

だが、殺す剣は自分の意志では止められない。

それは初めて刀を手にした時から、終ぞ北澤直也が克服できなかった事。

己の意志で刀を制御できぬが故に、二流と断ぜられた自身の腕前。

それを　この男は止めたのだ。

「貴方は……」

知っていた。この男が誰なのかは、アースラ内での報告で耳にしていた。

それでも、本当にこの男がそうなのか？　と北澤直也は疑わずには居られなかった。

犯した罪も、今日の前に立つ男の雰囲気も、彼が耳にし、目に通した書類の人物像とは、あまりにもかけ離れていた。

だが、その疑問を口にするより先に、男は口を開く。

「そのこの騎士を連れて出る。今の貴様では、その騎士は生かし切れん」

有無を言わさぬ口調だが、その言葉は北澤直也が真に理解出来る一言だった。

己は何も、誰も救えない。故に、この少女を助けたいなら、誰かの手を借りるしかないのだと。

「……感謝します」

微かに、目の前の元凶から目を逸らさぬ様、気を配りながら北澤直也は頭を下げる。

「その必要はない……全ては決まっていた事だ」

それ以上話す事は無いと言う様に、男は北澤直也から視線を外す。遠のく直也と、彼に担がれるセレノの気配が消えて行くのを感じながら、男は前を見た。

「テメエ……人の獲物搔つ攫うたア、覚悟出来てンだろつなア」

まんまと逃がす羽目になったが、水無月珠樹はその理由に苦しんでいた。

この男が邪魔立てする事は目に見えていた。だからこそ、水無月珠樹は二人が動けば即座に頭部を砕く筈だったのに。

何故、自分は何も出来なかったのか？ 気付けば水無月珠樹の前から、二人の姿は完全に消えていたのだ。

「吠えるな愚物」

侮蔑も露わに、だが貴様ら程度は齒牙にもかけぬといった口調で言い放つ男を前に、水無月珠樹は口元を歪めた。

「上等だ……力見るや、“元”管理局のエースさんよオ……………」

地を踏み砕き、カタパルトの射出の如く疾駆する水無月珠樹。

ここに 最凶と最強のカードが決定した。

振るわれるのは掌低ではなく鉤爪。

努力も技巧も何もない単純な一撃はしかし、確實なる絶命をもたらす魔手でもある。

ベクトル変換。

質量や形状などを一切問わず、あらゆるベクトルを変換する能力は、力の伝わる向きさえも変えてしまう。

故に水無月珠樹にとって、僅かさえも触れればその瞬間に勝利は決まる。

触れた者のベクトルを変化させ、敵自身の自滅と崩壊を引き起こさせてしまえばいい。

その手に触れた瞬間、毛細血管の血液は逆流し、運動を司る電気信号は壊滅する。

水無月珠樹は、そうして多くの人間を屠殺してきたのだから。

「クタバレ

!!!」

突き出される右腕がバトオの顔面に迫る刹那、

「fire（焰よ）」

呟かれる祝詞。ただ一言、その言葉と共に相手を睨むと、蒼炎の火柱が地より上がる。

蒼き焰は対象を個体から液体、そして気体へと変えて蒸発させるプロセスを一秒と満たず完成させた。

彼の魔力変換資質は『炎』。あまりにも有り触れ、才気の無い万人でも持つものであるが故に、突き詰めれば深奥へと辿りつく資質

でもある。

されど、その焔の中にあつて水無月珠樹は火傷一つない。ベクトル変換の理論は防御にも適用される。反射の鎧を纏った今、彼を傷付けられる者など何人にも存在しない。

にやつく顔。歪んだ口元から犬歯を覗かせ、歪な笑みを悪魔は零す。

逃げ惑え。それが責様に残された道だ。

そう瞳で語った事を理解したのか、バトオは地を蹴り、後方に下がる。

バトオの顔に焦りは無い。周囲と自身が放った焔を確認し、短く問う。

「その能力、反射だな」

「御名答。少し戦っただけでそこまで判れば上等だ。頭が働きや判んだろ？ 逃げ続けてんじゃネエよ！ テメエは今から挽肉ミンチにされんだからなア！」

地を蹴り、紅い水柱を上げながら悪魔は迫る。如何にエントランズが広かるうとも、攻撃が通じない以上男には逃げるしか道は無く、やがて掴まり命を散らす。

この空間は、水無月珠樹の領地であり屠殺場なのだ。
だが、

「もういい」

「ア？」

男はこの状況下にあつて、つまらなさげに呟くと迫りくる悪魔に自ら歩み寄り、軽く肩を叩く。

瞬間、水無月珠樹は地に叩きつけられた。

「げっ　　ごぼ、つづあア!!?」

床にあるのは自らが殺してきた者たちの血。立ち上がる事の出来ぬ激痛に、悪魔は両手足をばたつかせながら、脛程の嵩も無い血の池に溺れていた。

「貴様の反射の理論は判った。構築に必要なのは俺達の使う魔法と同じ演算。」

自然摂理や物理作用をプログラム化し、それを任意に書き換え、書き加えたり消去したりすることで、作用に変える技法。

……それをデバイスを使って行うのか、『魔術回路』のように己が内によって行つかの違いだ。種が割ればどうという事は無い」
下らん、と吐き捨てるように、水無月珠樹を蹴り飛ばす。
バトオの説明の間、体力が回復したのだろう。ゆったりと、だが、しっかりとした足取りで水無月珠樹は立ち上がる。

「それが……どうしたってんだよオ……………!!」

接近戦は不利と悟ったのだろう。エントランスにある支柱の一本を片手で薙り取り、槍投げの要領で投げつけると同時、このエントランス一帯の風を操る。

空気の圧縮。厳密に言えば空気中にある『原子』を『陽イオン』と『電子』に強引に分解させ、俗にいうプラズマ体を発生させた。槍を躲すも、魔術で防ぐも良し。万が一このプラズマ体を防がれたとしても、脱出の準備ぐらいは可能になる。

三重の策。先の発言とは違い、その内心は未だ強かな計算に満ち

ていた。

だが、理解出来ているのだろうか？ 自分の反射の壁を破られたと言ふ事は、

「無駄だ」

自分の操る全ての現象を、悉く砕かれると言ふ事を。

「な……」

支柱はあらぬ方へと飛んで行き、プラズマは一瞬で分解される。

「別段驚く事ではあるまい？ 貴様の能力は演算による構築。

ならばその全ての計算式を逆算し、こちらの手で作りがえれば良い」

そう。この時まで水無月珠樹という存在は、ベリアエル・バトオという存在を理解出来てはいなかったのだろう。

管理局伝説のエースであったと言ふ事は、管理局内において、最高の演算能力を持つと言ふ事を。

「クソ、クソ、クソ……！ 上等だ、手ずから引き裂いて磨り潰してやらアー！」

迷いの無い突貫はその実、不安の裏返しに等しい。

此処で引けば追い詰められ、防御に回る事も赦されない。

ならばただこの身の全てを攻撃に回す。己を砲弾とし、一撃を以て決着をつける。

それ以外に生き残る方法が無い事を、水無月珠樹は正しく理解した。

そこまで理解して尚、

「愚策」

この男の 足元にも及ばない。

当然だ。水無月珠樹には恐れがあった。反射は効かない。自分の身は安全ではない。

己こそが絶対の安全圏に立っていたからこそ、これまでの彼は迷いの無い攻勢に出る事が出来たのだ。

「 づ、ア!!!?!? 」

自身の身を護っていた反射の壁さえ、ここに来て完全に消えた。

「 ……ここまで馬鹿の一つ覚えとはな。演算を組み直し、より複雑にしておけば俺の一撃を一度は防ぐ事も可能だろう？ ああ、それとも出来なかったのか？ 」

その能力は与えられただけのモノか？ 」

言い返す事など出来ないし、事実男の言う事は正しい。

水無月珠樹にとって、この能力は単に与えられただけの物であり、自分はそれを遊興の道具として用いただけ。

元より水無月珠樹には、そんな複雑な演算など、土台不可能なことである。

『一方通行』とは、学園都市最高の頭脳の持ち主が使うモノ。この男が扱うこと自体、宝の持ち腐れというモノだ。

「沈黙は肯定……」

下らないと、そう思いながら片足を上げる。

「ヒィ……………」

反射の鎧の無い今、水無月珠樹は姿通りの子供でしかない。

そして彼の口から零れてた悲鳴は、より一層男の顔を不快に歪めた。

所詮は力に溺れた者。与えられただけの能力に酔い、威張るだけの狐。

その正体を知ったが故に、あまりにも無慈悲に、間違いなく常人であれば即死であろう一撃を見舞う。

ただ踵で踏みつけると言う行為は、その実、これ以上ないと言っている暴力行為であり止めとして正解と言える手段である。

「じつ、はア　　がぼ……………」

啞血するごと、己が殺した者の血を呑んで噎せ返る。

今度こそ立ち上がれない。水無月珠樹は、ここで倒れた。

完全に意識を失った水無月珠樹を、まるでサッカーボールか何かのように蹴り飛ばす。

ベキベキと辛うじて残った肋が、今度こそ完膚無きまでに砕ける。

数メートルをノーバウンドで吹き飛び、その後は地面を二、三度跳ねると、ピクリとも動く事は無くなった。

所詮殺人を遊興としてしか取れず、血に愉悦を求めるものなど、悪としては三流。

下の下ですら比ぶる価値も無ければ、美学を説く必要さえもない。故に男の行為は明快であり、一切の慈悲すらも与えられる事は無かった。

「さて……貴様らはどうする？」

視線の先には、二人の男女。冥利暁葉とシェリスの二人に、男は問う。

「どうもごうも無い。元々俺達はただ行動する分に都合が良いから一緒に居ただけだ。

仇を討ちたいとは思わないな」

それは紛れもない本心だ。元より彼らの仲はそれ程友好的という訳ではない。

単にたまたま初めて出会い、自分達の事を一番に知っていた人物だったから共に行動していたと言うだけ。

例え目の前で死んだとしても二人からすれば、ああ、そうか。程度にしか感じない。

「そうか。ところで、何故俺がここに未だ居ると思う？」

その問いを訊いた瞬間、冥利暁葉は身構えた。

その言葉だけで説明は充分。ベリアエル・バトオは、ここに居る全員を抹殺すると語ったのだ。

「闇夜に光し暁の明星、其は全てを照らす希望の輝き。運命貫きし星の鼓動！」

手に収束する光、顕現するのは黄金の剣。

魔法使いを自称する暁葉の手によって作られたのは、疑似的な聖

剣。

その威力はオリジナルには劣るものの、紛れもなく信頼に足る一撃である。

「エクスカリバー！」

絶叫と共に放たれる一撃。かの騎士王の聖剣を模倣した光条は、地に溜まった紅の雫を蒸発させながら男に迫る。

男の左手に握るのは、ダインスレイフ。北欧神話に於いてデンマーク王ホグニが用い、一度抜けば血を吸うまで鞘に戻らぬと言われた魔剣。

無論それはコピーでさえ無いだろう。魔導師が持つ杖に神秘は宿らず、魔法というモノも科学に近い一つの技術体系だ。

そう　　彼が魔導師であるならば。

「……その程度で聖剣の名を騙るか」

真横一文字に長剣を奔らせる。ただそれだけ。その一挙動で、聖剣の贋作は霧消した。

「な!?!」

「術式の構成が甘すぎる。神秘や剣その物の概念を置き去りにし、威力のみを頼りにした魔術。」

ゲーム感覚だな。実に下らん。魔道に身を置くのであれば、一から勉強をし直す事だ」

「ッ……!!」

その言葉に内心歯噛みしながら、冥利暁葉は地を蹴った。

己にも魔法使いとしての矜持がある。だが、それと命を天秤にかけるならば後者を取る。

魔法が効かなかった事は痛かったが、この相手に通用しない事が判っただけでも良しとすべきだ。

「なら、見せてやる」

顕現するは、死の瞳。例え如何なるモノであろうとも、その瞳がある限り、死は必ず訪れる。

「これが、モノを殺すと言う事。生きているなら、俺は神さえ殺して見せる」

謳う様に言葉が零れる。魔法が使えぬ以上は手刀によって切り裂くしかないが、線をなぞれば熟した果実の如く相手を断てる。

「バロールの瞳……『直視の魔眼』だな」
「!?!」

その言葉に瞠目する。何故それを知っているのか？ この男は一体何者なのか？

その疑問を考えるより先に、身体を動かす。肩口から心臓を走る線。そこをなぞるだけで、この男の身は斬り裂かれ、絶命するだろう。

「たわけ」

そう。線をなぞる事が出来たなら。

「がッ!?!」

手刀を奔らせようとした瞬間、首元を掴まれ、宙に片腕で釣り上

げられる。

魔力によるものではない、純粹な握力と膂力。元より子供である暁葉では決して振りほどけぬ力である。

「く、このおツ……！！」

狙いは手首。そこに走る死の線をなぞる事で脱出を図ろうとするも、それを見越していた男は暁葉を放り投げた。

これが魔眼の弱点。如何に死を具現化しようとも、睨んだだけでは効力を発揮しない。

その魔眼が完全に効力を発揮するには、捉えた線をなぞり、点を穿つ必要がある。

後方に飛び、片膝をつきながら喉元を抑える暁葉に変わり、前衛にファイオナが出る。

「よくも暁葉を……！！」

それは真実彼女の本心。大切なモノを傷付けられた純粹な怒り。だが、それを下らないと、男は肩を落とす。

「何故、その心を殺した者に向けられなかった？」

間合いを詰め、腕を振るうファイオナ。

一撃で星さえも砕く手刀はしかし、

「兇戯」

この男の片腕に、あっさりと防がれた。

有り得ない。この身は世界の守護者。契約が切れぬ限りは真実不死であり、己は他の触覚でしかない守護者ではなく、世界と同等の

力を持つ存在だと言うのに。

「何故……」

「簡単だ。貴様にはこの世界を護る意思が無い」

それこそが唯一無二の真実であり、貴様が勝てぬ全てだと、男は語る。

「この世界。星と言い換えてもいいが、これに感情はなく、何よりも矛盾を嫌い、美しくあろうとする。

矛盾を嫌うために異界を修正するなどの干渉を行い、美しくあろうとするために自己を脅かすものを粛清する」

そう　　自己を脅かす者へ粛清を行うのだ。

例えば彼女が一撃で星を砕ける力を持つと設定されていたとする。だが、彼女を生かしているのは世界であり、例え同等の力を持つとも物事の順序、優先権は彼女を生み出した星にある。

守護者の存在意義は、星という親を傷付ける者への制裁。

守護者である彼女自身が、自分の親の事も考えずに行動を起こしたならば、親はどう思うだろうか？

「もう説明はいらん。貴様は親を殺そうとした。

……いや、そこまで大層な事は考えていなかっただろうな。精々その小僧が何よりも大事だと、そう思ったのだろう？　ともすれば次元震さえ引き起こしても構わぬと言うようにな」

事実である。元よりこの少女にとって冥利暁葉以上に大切な物など無い。だが、一つの疑問が残る。

今までの自分は、例えそうであっても力を失う事は無かった。

だと言つのに……。何故？ とフィオナは思う。

だが、その答えも明確だった。彼女はこの星の守護者ではない。ここが次元の狭間にある城だとか、そういった問題とは根本的に違う。

彼女は、墮天使によつてこの世界に連れて来られただけ。いわばこの世界とは何の関わりもないゲスト。

世界の守護者という身分さえ、お飾り程度の意味しかない。確かに世界は協力もしよう。例え余所様の子供であれ、子供である以上は家に招き入れ、食事ぐらいは与えてやる。

しかし、その子供が仮とはいえ親を殺そうとするなら話は別だ。抹消しようとするまではいかぬものの、危険な凶器を親が取り上げるのは自明の理である。

そして、彼女の世界ではそういった諸問題が赦されていたと言う事も大きな理由である。

たとえどんな矛盾を抱えようとも、それは『紡ぎ手』の意志によつて構築された世界。

『登場人物』に矛盾があろうとも、書き手がそれを許容するならば、世界は問題なく回り続ける。

されど、ここは彼女の世界に非ず。

魔道も科学も、物事に於いてさえも、より高度になるにつれ、ルールは厳しくなっていく。

玩具の車からネジが一本取れた程度ではどうという事は無い。だがこれがF1カーならばどうだろう？

何事においても理論というモノは存在し、その枠組みから外れたモノは土台から崩壊する。

今の彼女は土台から崩壊し、スクラップとなりかけたF1カーに等しかった。

「まあ、それも悪くない。どうしても良い親より想い人を取る姿勢は人間であれば好ましくさえ感じよう。だがな」

瞬間、ごきりと頸椎の砕ける音が響いた。

「貴様は殺した……ただ自らが気に入らぬと、自らより下等だと決めつけ、紫かれらの騎士達を殺した。

人を愛する事が出来るというのに、自分の意志で決められるというのに、貴様は有象無象は関係ないという理由でだ」

砕けた首からよりベキベキという音が響き、血の泡を吐く少女を床に叩きつけた。

「あ、あああああああああああああああああああああああ
!!!!!!!!!!!!!!」

瞬間、暁葉が叫ぶ。天を引き裂くような慟哭と共に魔眼を開放し、男の点……死、そのモノを貫かんと貫手を奔らせる。

「ああ……貴様への制裁がまだだったか」

そして、身体に貫手が迫る刹那、

「Time(時よ)」

冥利暁葉は空中で硬直した。

「貴様自身ではなく、貴様の周囲の時を止めただけだ。今から俺の言う事は理解できるだろう。」

神を殺すと言ったな。馬鹿が。貴様程度の存在が、あれを殺すなどおこがましい。

何より、貴様の瞳は死を理解して視ているか？ いや、違うな。ゆつくりと、上から下まで冥利曉葉眺め、その両の目に指を這わす。

「一秒ごとの崩壊が見えるか？ 崩れ落ちる世界が映るか？ 終わりの音は響いているか？ 心は砕けてしまいそうか？

無いのだろう？ どれも」

がっかりだと、そういうように肩を竦めた。

「貴様は死に酔っているだけだ。

自分は殺人しか能が無い。殺人でしか己を許容するモノが無い。だから人を殺すのだろうか？ その嘆きを聴きたくないと、善悪の理解が出来る身でありながら、貴様は死に酔いしれ、依存した」

だからこそ、お前は死を理解せずとも視えるのだと、男は吐き捨てるように告げていた。

「あの『反射』使いの方がまだ救いがある。なにせ墮ちれば良いだけだからな。

貴様は諦めているのだろうか？ 正義に憧れようと正義になれず、その道に絶望したからこそ自己を正当化しようとした。

三下が……所詮貴様は蝙蝠だ。

他者を、正義を行おうとするモノを偽善者と決めつけ、心のどこかで己を正当化する。

そうしなければ進めないのだろうか？ ダークヒーロー気取りの自己中心主義者が！」

怒りも露わにバトオは暁葉を蹴り飛ばす。血飛沫を上げ、壁に激突したまま硬直する暁葉を一瞥し、パチン！と指を鳴らす。瞬間、先程まで硬直していた暁葉は重力に従って床に落ちる。

「お前は……」

何なんだと、そう言った思いを込めて、暁葉は睨む。だが、男はまだ判らないのか？と呆れ交じりに呟いた。

「不出来とはいえ魔を扱うのならば、理解出来ていると思ったのだがな。」

師に恵まれなかったか、それとも中途半端に関わりのある世界から来たのか。

どちらにせよ滑稽だ。無知蒙昧も過ぎる。

俺は 『魔法使い』だ」

気付く事ならいつでも出来た。

『魔術回路』という専門用語。

フィオナの正体の看破と世界のルール。

何よりも『直視の魔眼』を知っている事。

ベリアエル・バトオは魔導師ではない。彼は『魔法使い』。

『世界の真理』 『アカシックレコード』 『神の座』 『根源の渦』 『
「
」。

言い方は問題ではない。そこには世界の全てがあり、あらゆる真実の眠る場所。

見方によっては、プレシア・テストロツサが死者蘇生を求めるアルハザードも、その存在に近いと言えよう。

そして、彼はそこで手にしたのだ。時間操作。『時の支配』という、一つの深奥を。

一般に『魔術師』と『魔法使い』は異なる。

前者は科学技術によって可能な物を魔術によって扱う者を指し、後者は科学技術によって再現不可能な者を指す。

例えば都市一つを消し飛ばすのに魔法を使おうと、ミサイルを使おうと、都市一つを吹き飛ばすという結果は変わらない。これが魔術だ。

むしろコストという面を考えれば、魔術より科学の方が安上がりになる。

だが、魔法使いはこの理を覆す。

『死者の蘇生』。

『時間の停滞』。

人の身であれば不可能であり、故に奇跡と称される御業。

技術の発達によって管理局は『他次元世界への移動』という魔法の一つを完成させ、これを魔術に引き摺り降ろしたが、残る四つは未だ不動の地位を保っている。

故に、冥利暁葉は理解した。あれが自分とは異なる意味で『魔法使い』を名乗る事も、両者の間にある絶対的な力量差も。

「それが、どうした……………!!」

その全てを理解して、彼はただ走りだす。決して勝てはしないだろう。

だが、目の前でフィオナを倒された。戦う理由など、それ一つで充分だ。

「良い啖呵だ。が、主人公を気取るには罪を重ねすぎたな」

何時までも軌跡が残る様な、美しい銀の閃光。
それは背後まで駆け抜けた、冥利暁葉の眼を斬り裂いていた。
迸る絶叫。斬り裂かれた両目から文字通り血の涙を流し、冥利暁葉は地へ身を投げた。

「死を理解するのにそれは邪魔だ。余計な目玉など棄ててしまえ。

そうすれば、本当に神を殺せるかも知れんぞ？」

尤も、その眼が殺せるのは人間の限界までだが、と男は告げ、血で満たされた床を弄ると、一つのロケットを拾い上げた。

もう写真に、家族の姿は写らない。多くの血を吸った紙は、判別を不可能なモノにしていた。
だというのに。

「落し物だ。次は無くさない様にしておけ」

既に原形を留めぬ騎士の一人の前に、男はそれを置いた。当てずっぽう等では断じてない。現に男は慈しむような瞳で全員を見渡し、静かに口を開く。

「貴公らの嘆き、真に胸を打つ。故に誓おう。

俺は

「

言葉は誰の耳にも届く事無く、風に流れて消えて行く。
男はその後、何を言うでもなくその場から立ち去った。

022 魔法使い（後書き）

c・m・「読者諸君！ ご希望通りに『チーム水玉』はブツ殺した！！ 第22話、バイオレンスにプレゼンツ！」

御剣「今日も地獄ロードまっしぐらだな……そして直也、お前は何でアロンドイトを使わなかった」

c・m・「まあ反射の能力は知ってたし、下手に他の武装を使うと危ないと思ったんでしょうね。」

けど安心して！ 直也君の中での好感度ランキングは現在貴方がダントツでトップだから！

美少女ゲームで言えばあと一回の個別イベントで攻略可能よ！！」

御剣「待て！？ 何故男が攻略対象になっている！？」

c・m・「さて何か質問はある？」

御剣「……流したな。まあ良い。先にはやてをクリアすればすむ。」

今回はバトオ無双か……正体が型月系『魔法使い』というのは決まっていたのか？」

c・m・「これは私のオリジナル設定です。時間操作なんてものに魔法だし、こう圧倒的な実力を持つには型月の魔法使いはトップクラスだから」

御剣「しかし、水玉様ご一行は悲惨だな」

c・m・「私からすれば殺人が楽しいなんて言ってるのは甘ちゃんよ。」

本当にそういうモノを見てしまえば、二度とそんな事は言えない。これは実際に紛争地帯に行つて経験したからこそ、私は言い切れるわ」

御剣「現実はいくらも悲惨にして恐ろしい……戦場を誉れとした時代は、当の昔に終わっているのだな」

c・m・「ええ。けれど、前線に立つ者にとって、そうした者も無いと生きていけないのよ。」

どんなにつらくたって、誇りが無ければ人殺しと同じだもの」

御剣「人は重いな」

c・m・「そうね。ああ、あと御剣さんとこのHagalaさまや水玉様は戦場で人殺しが当然とかつて言ってるけど、あの人たちは『ハーグ陸戦協定』っていうものは知らないのかしら?」

御剣「いや、一般人は知る必要はないだろう。しかし、戦場では凄惨な殺しは無いのか?」

c・m・「あるにはあるけど、現代戦では殆ど無いわ。」

現役で戦場に立つ兵士ですら人を殺すのは全体の一割で、どんなに多くても二割が限度。

戦闘機とかでも相手のコクピットから顔が見えればトリガーは引けなくなるし、多くの兵士はPTSDや精神障害に悩まされる。

よく小説では殺す覚悟や殺される覚悟なんて言ってるけど、私からすればこれ程安っぽくて馬鹿な台詞は無いわ」

御剣「相手も同じ人間だから……当然と言えば当然か」

c・m・「そういうこと。戦場に立つのは兵器でも、やられ役のキヤラクターでもなく人間。これは絶対に覚えておいて欲しいわ」

c・m・「さて、ここからは読者様のお礼に移らせて頂きます。

水玉さま、神崎はやてさま、笑う男さま、Haggalanzaさま、tesさま。ご感想を頂き、ありがとうございます。

というか、tesさま、誠に恐縮でございます」

御剣「他の借者様の手前、抜いた発言は素直に喜びきれないか」

c・m・「すっごく嬉しいんだけど……ところで、BLの件はど
うする?」

御剣「……それをやると、歯止めが効かなくなるのでは……」

c・m・「ラブシーンまで行っちゃっ?」

御剣「ヤメロ……!!!!!!」

c・m・「さて、今日はこの辺りで、失礼致します」

御剣「流すな

「!!!!!!」

023 想いの正体 願いの代償

ジュエルシードを意図的に暴走させる事で引き起こされた次元震。ともすれば一時間と持たず次元断層を引き起こすであろう影響と衝撃は、アースラにまで伝わっていた。

「潮時だな……」

「ああ……行かないとね」

果たしてそれは誰の会話だったのか？ 誰からともなく口にされた言葉は真実、ここに集った者達の本音だったのだらう。

「私も出ます。出撃したい者は、各自ゲートに集結して下さい」

リンディの言葉を皮切りに、各々がモニタールームを退出し、転移ゲートへと向かっていく。

その中であって、最後に部屋を出ようとした高町なのはを、クロノは呼びとめた。

「君は、あの子に付いて上げてくれ」

「けど、わたしも……！」

力になりたいと、その声を上げる少女に、クロノは頭を振った。

「もういい……もう戦う必要なんてないんだ」

「わたしが……弱いから？ ジュエルシードを持って行かれちゃうくらい頼りないから、クロノ君は止めるの？」

「違う……！」

思わず声を大にして叫ぶ。びくりと怯えた顔で見つめるのは、
我に返って頭を下げた。

「違うんだ……皆、これまで君を頼り過ぎただけだ」

フェイト・テストロッサと面識があったから。

この土地に以前から住んでいたから。

たまたま魔法の才能に溢れていたから。

ここに居る殆どの者が、高町なのはの気持ちを度外視していた。

たまたま彼女が舞台の中心でスポットライトを浴びていたから。

だから彼女に全てを押し付けた。

あくまでもそれが、高町なのはの意志だと言う様に。それを尊重する為に自分達は協力しているのだと、手前勝手な言い草で、本来関わってはいけない人間をこんな場所に連れだした。

クロノ・ハラウンもまた、その内の一人。

高町なのはを迷わせまいとする一方、彼女が動けなくなるのではないかと危惧し、敢えてプレシア・テストロッサの情報をギリギリまで伏せた。

……結局自分も管理局の人間。公と私であれば公を取る、あまりにもつまらない存在だった。

だが、それでもクロノは、これ以上この少女を関らせたくは無いと願う。

何故なら

「君の居場所は、ここじゃないだろう？」

暖かな陽だまり。日のあたる場所こそが、彼女の居場所なればこそ。

「お願いだ。フェイト・テストロッサの傍に付いて上げてくれ。」

僕では、あの子の友達になれない。その役目は君だけの物だ」

その役目を与える事こそ、彼女を唯一、この戦場の連鎖から解放する手段だから。

「わたしの、役目……？」

「ああ、僕や皆には真似できない、君だけの役目だ」

ぎゅっと、スカートが皺になる程に手で押さえ、なのはは頷いた。

「判った。それがわたしにしか出来ないなら、わたしがやる！」

わたしはフェイトちゃんと　友達に、なりたいから」

見せる笑顔は日向のよう。

“やはりこの子は、こんな場所には似合わない”

そんな事を思いながら、クロノは頷く。

「そうか……きつとなれる。君が彼女を友達と思うなら」

自分は彼女とは別の道を行かなくてはならない。自動ドアを抜け、振り向く事さえ無くクロノは転移ゲートへと駆けだした。

“過去を変える事は出来ない……失った命を取り戻せば、過ぎた時間が戻ってくるでも思っているのか!?”

そんな事は認めない。どれ程つらい過去だろうと、どれ程理不尽な結末だろうと、人はそれを背負わなくては嘘だ。

それが独善だと言う事も、欺瞞だと言う事も判っている。けれど、それでも止めたいと願うから。その欲望の為に、より多くの人間がプレシア・テスタロッサと同じ涙を流す事が判るから。

“それに……これ以上進めば、あの子はいずれ管理局員になってしまふ”

それはそれで良いのかもしれない。高町なのはがその道を行くなら、それも一つの選択と言える。

魔法の才気に溢れ、正しい道を歩み続ける少女。彼女が呟いた言葉は、今もこの胸に残っている。

『逃げれば良いって訳じゃない。棄てて何かが変わる訳じゃないよね』

その背中を、その意志を、クロノは何よりも美しいと感じた。過去を捨てれば良い訳じゃない。過ちから目を逸らして、何かが変わる筈がない。

『わたし達は、お互いの想いをぶつけ合う事しか出来ないけど、それでも！』

フェイトちゃんが止まれないなら、わたしが止める！』

そう力強く立つ彼女こそが、何よりも貴く感じられた。

“けど……それは違う”

自分の憧憬に、彼女を引き摺り込む事は出来ない

あの場所には、あの位置には、クロノ自身が立たなくてはならない場所だから。

間違いを正し、過ちを止め、迷う者の道標となる事。
それこそが時空管理局執務官である、クロノ・ハラオウンの役目
なのだから。

そして、どれ程走ったのか？ クロノの目の前には、一人の少年
が立っていた。

「なのはは……？」

「いや、彼女は来ない。フェイトの傍に居る」

そうか、と神崎龍也は呟く。どこか寂しそうで、どこかホッとし
たような表情で。

「不安か？」

「まさか……僕は、今までなのはに頼りつきりだった」

神崎龍也は思う。

自分は今まで、高町なのはを護りたいと思っていた。待ち受ける
困難。あの始まりの日、ユーノ・スクライアに出会わなければ……
いや、そもそも自分に力があれば、高町なのははこの事件に関わる
事無く、平穏無事に暮らして行けた筈なのに。

結局、運命は変えられなかった……だからこそ、彼女の隣に立
とうとした。

路傍の石でしかない自分とは違う、正真正銘の主人公。
その輝きを護って行きたかった。

けれど、いざ進めばそれは変わった。自分は彼女の傍に立って居
ただけ。

フェイト・テストロッサを助けようとした時も、ジュエルシード

を回収した時も、自分は常に活躍出来ず、何も出来ずにいた。

詰まる所、神崎龍也は高町なのはの傍に居ただけだ。無力にして愚か。

誰もが羨む様な力を持っているくせに、多くを護れる力を持っているくせに。

たったひとりの、女の子さえ護れない。

「だから、戦うんだ。もう、なのはが戦う必要なんてない」

それは先程、クロノが言った言葉。

この二人は同じモノを見て、同じ事を感じ、同じ決意を持っている。

高町なのはを、日常に帰したい。

「何でだろうな？ 君とは会って間もないのに、どうしてか仲良くなれそうにない」

「僕だって同じだよ。ホント……何でだろうな？」

今はまだお互いに判らない、その想いの正体を抱えて、二人はゲートに向かって行った。

時の庭園の一角。駆動炉と玉座の間へと別れる通路の中央に、彼らの姿があった。

「予想以上に多いなオイ！ こいつらは精々七十から八十体が限度だと思つてたんだがよ！ その辺どうだ槇野！！」

「大方紫の騎士連中を足に使つてる間にオートで製造しまくつたんでしよう！

魔力に関してもジュエルシード一つ分で事は足りません！ 何せ一個で次元震を引き起こせるんですから！！」

興輝の言葉に半ば投げやりになりながら、槇野は返す。

ここに来て彼らが放つたレーザーによる弾幕は千を超え、オーバーヒートを引き起こしたライフルを幾つ投げ捨てたかは判らない。

積み上げた機械の屍は万を超え、地に吞まれて消えて行く。

それがどういう仕掛けかは、既に二人には判っていた。すなわち。

「自己修復機能。この城を崩壊させ魔力炉を潰さない限り、玩具の兵隊はやってきますね」

「なら潰しに行くか？ 問題の解決にはならないぞ」

そう。この物語の幕を引くのは主人公の役割。間男が相手をするのは、三下かイレギュラーで充分だ。他人の花道を歩く程、無粋極まるモノはない。

加えて、逃げようと思えばいつでも逃げられる。だがここに北澤直也はまだやってきていない。

こちらに連れてくよう頼み、武器を借り受けたと言う時点で、あれに特殊な能力が無いが、戦闘には一切使えないと言う事が判る。

「さっさとお姫様救いませ、こつちもいい加減疲れんだよ！！」

レーザーライフルの二挺持ち。「冗談を通り越して笑えてくる銃火器のセオリーを完全に無視した戦いはしかし、

「オールヒット。実にお見事ですな」

その全弾が、必殺にして必中だった。

「どうよ」

月村すずかの賛辞に、片手を上げてガッツポーズを取りながら、残った片手で撃ち落とす。

問答無用の曲撃ち。これ程の絶技、映画でさえお目にはかかれまい。

だが。

「きゃあ！」

突然の声に、意識をそちらに向ける。月村すずかの足元、丁度真下に来る形で、一振りの槍が突きだしていた。

「何でもアリかよ!？」

こうなればなる様になるしかない。機械の翼を纏い、地面すれすれを飛びながら、興輝は間一髪のところまで月村すずかを抱きとめた。

「怪我ないか!？」

「ええ、遅いですね。これが終わったら　　しっかりと礼をしてあげますね」

蟲惑的な視線と動作で、すずかは興輝の頬に指を這わす。

「……むしろお前が元に戻った時が大変だな」

「いちやつくのは後にして下さい！　一撃で仕留められるとは言え、

地上を押さえられたのはきついですよ!!」

そんな事は判っている。現にすずかの射出した二メートル近い杭の総数は現時点で百を超え、彼女を抱えた手とは別の手で興輝は蛍光色のレーザーを撃ち出す。

だがそれでも。

「多すぎだろ!!」

仮に自分達だけで飛び続けるか、ここが平地であれば問題無かつただろう。

だが傀儡兵の異常さは底を知らない。奴らは一撃で倒される事を覚えた。

極端に能力を下げ、軍隊アリの如く手数で攻める。質で決して勝てないなら、物量差で決めればいい。

限られた空間であればある程効果を発揮する。

実に憎らしく、効果的だ。これ程の知能、高度なAIを積めるプレシアの優秀さに興輝と楨野は舌を巻きつつ、レーザーを乱射する。武装を変える暇さえも与えない。たとえ高出力の武装を出したとしても、庭園そのものを崩壊させる訳にはいかない。

ギリ貧に追い込まれた事を自覚した時、それは起きた。

「おいおい、もう少し気張れ」

振るわれるのは長剣の一閃。ただその風圧だけで傀儡兵は粉微塵に吹き飛び、瓦礫の山を築くと同時、

「修復するなら、出来なくしてやれば良い」

大気を凍らせる吹雪が、辺りを包み込む。

「テムエと共闘する事になるとはな」
「お互い様だ」

氷上京谷とマクス＝トレンジア。最強の名を冠する二人が背中を合わせ

「這い出てくるなら、出て来れなくしてやる！ アイアン・グラビレイ！」

周囲一帯における重力変化。意図的にマクス達を外して行ったそれは、這い出る傀儡兵を立体から平面に変わるまで押し潰し、空を駆ける者たちを例外なく叩き落とす。

「そう言う君は脇が甘い！」

《Stinger Snipe》

ストレンジデバイス『S2U』から放たれた蒼光の魔力弾は、尾を引きながら側面の傀儡兵たちのコアを貫き、彼らの出現の要因になる支柱など、庭園を崩壊しない程度に破壊し、一掃した所で霧消する。

クロノ・ハラウンと神崎龍也も又、互いに背中を預けていた。

「実に素晴らしい。というか、狙いすぎててムカつきますね」
「隠れて見てたんじゃねえだろうな、こいつら……」
「いえいえ。貴方達が扉をこじ開けてくれたおかげで、予想より早く到達できましたよ」

その言葉に全員が振り向く。

はためかせるのは燕尾服。この場においてすら優雅さを忘れず、服装はおるか髪の乱れさえ無い少年が、東 興輝を背後から狙う傀儡兵を粉々に砕いた。

「真つ直ぐで在るが故に周りが見えなくなる。若さゆえかもしれないが、せんが、落ち着く事も必要ですよ」

「……齢に関しては貴方より上の人は多分いないと思うぞ、鮫島さん」

興輝の言葉に、幼い顔立ちをした鮫島は、呵呵と笑う。

「さて。ここから先が分水嶺です。

上は駆動炉。真つ直ぐ進めば玉座の間。ここで遊撃を務めるといふ事も出来ませんが、如何に？」

槇野の言葉に一同は顔を見合わせると、それぞれが頷く。

「僕とクロノは駆動炉を叩く。マクスは、」

「俺は遊撃だ。お前らも良いか？」

「ああ。俺と槇野は続ける。それじゃ、龍也とクロノは駆動炉。

マクス、鮫島さん、槇野、すずか、俺は遊撃。

玉座の間は……」

「俺が行く」

興輝の言葉に京谷は前に進み出る。これは最初から決まっていた事だ。

フェイト・テストロッサの為に戦う。その為に憎まれ役を引き受ける事は。

「よし、じゃあ行くぞ。これが終わったら、パーっとやりたいし」
「興輝君。それは死亡フラグですよ」

槇野の言葉に一同は笑うと、ここに居る全員が拳を打ちつけ合いながら、それぞれの場所に散って行く。

「戻るぞ、全員で」

誰からともなく呟いた言葉に、全員が頷いた。

それぞれが戦うべき道を駆け抜けてゆく中、高町なのはは未だココロの壊れた少女、フェイト・テストロッサの手を握る。

医務室のモニターに映るのは、戦場を駆ける戦士達。彼らが何を想い、何のために戦っているのかは判らない。

だが、それでもこれだけは判る。彼らは、悲劇にしない為に戦い続けているのだと。

そして、自分もまた、あの場所に赴きたいと。

握りしめた手の力が、自然と強くなる。その手を感じてか、フェイトは僅かに首を向け、言葉を零した。

「わたしが生きていたと思ったのは、母さんに認めて欲しかったから。」

どんなに足りないと言われても、どんなに酷い事をされても笑って欲しかった。

あんなにはつきりと棄てられた今でも、わたし、まだ何処かで縋りついでる」

それは、なのはに聞かせたかった訳ではないのだろう。

下らない自分の独白。自分という存在が持てなかった少女の、意味を為さない告白だった。

ふいに、画面が切り替わる。戦場を駆けるのは、自分たちと齡の変わらない少年。

日本人離れた金褐色の髪と黄金の瞳を持った少年は傀儡兵を悉く薙ぎ倒し、その速度を落とさぬまま奥へと突き進んでいった。

フェイトは思う。初めて真っ直ぐに自分を見つめてくれた少年。

何よりも自分の事を考え、どんな時でも一緒に居てくれた少年。

彼は何故、こんな自分と一緒に居たのだろうか？

母の事で喧嘩別れをして、もう二度と会う事はないと思っていたのに、彼は常に自分を助けた。

フェイトがいま手を握っている少女に負けた時も、あの少年は自分を受け止めた。

フェイトが母に棄てられた時も、あの少年は傍に居た。

それがどうしてかは判らない。けれど……。

「わたしは……このまま終わりたくない。

棄てれば良い訳でも、逃げれば良い訳でもないから」

上体を起こし、そう教えてくれた少女へと向き直る。

「なら　一緒に行く？　わたしも、このまま終わりたくないかない。

想いが壊れても、願いが遠くても、ずっと……傍にあった優しさを伝えてくれた心があって、貴女の笑顔を待ってる人がいるから」

その言葉に、フェイトは涙を流しながら頷く。

「わたし達の全ては、まだ始まっても居ないから」

手に握るのは暖かな想いと、自分達の魔法の力。

「レイジングハート」

「バルディッシュ」

互いに杖を掲げ持ち、想いを力に変えて行く。これが始まり。

黒の少女は、本当の自分を探す為に。

白の少女は、悲劇で終わらせない為に。

「セットアップ！」

さあ、今こそ駆けよう。自分達を助けてくれた人たちが待つ場所へ。

そして。二人の少女が辿りつくより早く、ここに異色のカードが実現しようとしていた。

「プレシア・テストロッサね」

「貴女は……？」

思わずプレシアが呟くのも、無理からぬことだろう。

戦場にはあまりにも相応しくない出で立ち。床を反響させる靴音は革のローファー。

薄手のスラックスにスーツを纏い、肩まで届く黒髪をつなじの辺

りで結わえた姿は、一目見ればキャリアウーマンか何かと見紛う。だが違う。プレシアの目の前に立つ女性は、そんな生易しい物ではない。

「貴女に 引導を渡しに来たの」

スーツ姿の女性。宮本千草は、そう言い渡した。

一方、一機の傀儡兵を付ける事もなく、紫の騎士隊長グラフィィ
「アルトレイは駆動炉の中心に佇んでいた。

彼の仲間や副隊長が現在どのような状況下にあるのかは身を持って知っている。

送られた通信。彼らの断末魔は、グラフィィの鼓膜に焼き付いて離れない。

だが、それでも彼はここを離れない。

それが自分の役割であり、唯一つの目的であればこそ、ここを離れる訳にはいかなかった。

プレシア・テスタロッサの研究によって、記憶を抽出する事は可能になった。

既にジュエルシードの搜索以前に死亡した隊員も含め、メンバー全員のDNAマップと記憶は保存済みだ。

だからといって死んで良い理由にはならないが、この目的が達成されれば、今回の次元震で犠牲となった者達も含め 悪人は別だが 一人も余す事もなく蘇らせる。

誰一人として零さない。理不尽な結末など、ここで終わりにして見せるとグラフィィは手にしたランスを握りしめ、甲冑の下でその

表情を決意で固める。

今日の前に立つ、二人の少年。彼らを打ち倒す為に。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。次元管理法違反により、貴方を逮捕させて貰う」

この状況下にあつて形式を護るクロノに、グラフィーはお固い事だ、と抑揚の無い声で呟く。

手にするのはベルカ式、量産型アームデバイス『クラウン』。それこそが彼が命を預けるに足る武装であり、管理局時代から彼が使つて来た唯一無二の相棒でもある。

574

「久しいな。とはいつても、君との直接的な面識はないが……」
「やはり貴方でしたか。“元”時空管理局武装局員・一等空尉、教導官……グラフィー」アルトレイ殿」

クロノにとって、目の前の人物は言伝である程度には聞いていた。自身の父の先輩であり、陸戦訓練においては手も足も出なかつたと、リンディはクロノに言っていた。

そして、彼が何故管理局を抜けたのかも。

「貴方は、今でも追い続けているのですか？」

「ここまで来るのに、四十年かけた。あの日……管理局上層部の役員が、僕や多くの者たちを苦しめた時から。

クロノ。君も来ないか？ 君にも判るだろう。家族を理不尽に奪

われ、苦痛に苛まれ続ける日々が。もう誰も苦しまなくて済むんだ」

始まりは四十年前。とある次元犯罪者のテロ行為によって、グラファイリアルトレイの家族は巻き込まれた。

テロリストの名目は次元犯罪者として捕まった仲間の開放。

これに関しては特に珍しい事ではなく、事件は直に解決の兆しを見せる筈だった。

あの日。上層部の役員が自らの保身の為に不正に彼らを逮捕し、その証拠をテロが管理局に突き付けるまでは。

不正を行った役員は一方的に交渉を決裂。私兵として飼っていた非正規の武装隊員を送り、テロリストと共に民間人を抹殺。

一時は公にはテロリストの自爆行為と報道され、真実は一時の間、闇に紛れた。三ヶ月後にこの役員の不正が発覚し、逮捕されるまで。

真相が発覚し、管理局からは遺族に謝罪と賠償金が支払われたものの、それが当人にとって救いとなったかどうかは語るまでもない。彼らはその憎しみと怒りを募らせ、やがて自分達の手で罪人を裁く断罪者となった。

それが非公式集団『ガルフ』の始まり。

グラファイリアルトレイを隊長とし、管理局内で教導官を務め続けながら、組織を拡大させるまで息を潜め続けた。

失った者の哀しみ。やり場のない怒りを糧にメンバーは戦いの教えを請い、グラファイリアルトレイの指導の下、数年後はメンバー全員が第一線で戦えるまでの実力を身に付けた。

そして、彼らは行動に移す。不正を働いた管理局上層部。

多くの命を弄ぶ次元犯罪者達を闇から闇に葬り去り、葬った者た

ちの財源を糧に、成長を続けて行った。

組織が体裁を為し、独立した機関を取れるようになった時、グラフィアー・アルトレイは管理局を退職。

表向きには家族を失った重みに耐え切れなくなったのだらうと同僚達は囁いた。

それが、この人物の作った機関。失った者たちを取り戻す為の組織。『ガルフ』の全容である。

長い様でその実短かった騎士の少女の話聞き終え、北澤直也は静かに口を開く。

「君も……その一人、か」

「私は飛行機事故で両親を亡くし、グラフィアー隊長に引き取られた。私だけじゃない。『ガルフ』のメンバーは全員そう。誰もが理不尽に大切なモノを奪われ続けた。貴方になら判るでしょう？」

貴方は私達と同じ眼をしている。理不尽に奪われ、苦しみ続けているなら手を貸して。

貴方の望みは叶う。もう誰も苦しまなくて済むのよ？」

それは、グラフィアー・アルトレイがクロノ・ハラオウンに問うた内容。

今まさに失った者は、己と同じ境遇にある者へと声をかける。

共に、この苦痛を終わらせよう。

そして、互いの位置を知らぬ場所で、全く同時にクロノと直也は

口を開く。

「「済まないが、その願いには賛同できない」」

「「な……」」

その答えが予想外だったのか？ グラフィーとセレノは、同時に愕然とした。

「君は、何故手を伸ばせば届く距離にある物を掴まない。

もう誰も苦しむ事は無いんだぞ？」

「貴方は……何かを失った事が無いの？ 私の見立て違いだったから、否定するの？」

それは奪われた者の疑問。間違いなく自分達と同じである筈の存在が、自分達を否定しようとする事実には彼らは戸惑い、言葉を投げる。

だが、クロノと直也は首を振ってそれを否定した。

失ったモノ。この手から零してしまったモノは確かにあるのだと、それを理解した上で、二人は拒んだ。

「失った命を取り戻して、無くしてしまった過去を取り戻せると思っっているのか？」

たとえ取り戻したとしても、何もかもが戻る訳ではないとクロノは語り、

「……人はいつか死んでしまう。それを覆す事は、誰にも出来ない。もしそれを行えば、全てが壊れてしまう」

北澤直也は、戻らぬ事こそが当然なのだと語った。

「それは詭弁だ。失った時間を戻す事は出来なくとも、新たな時間を紡ぐ事は出来る」

「確かに寿命はある。だけど、病気や事故、殺人でまだ終わっていない命が尽きる事を、納得する事は出来ない！」

出来ないと諦める事。この手から完全に手放してしまう事こそが、全てを棄ててしまう事だと二人の騎士は問い質す。

「……全ての命が自由に蘇る事が出来た時、その先にある物が見えないのか？」

「例え全てを蘇らせ、その技術が普及したならば、今度こそ人は人としての全てを剥奪される」

もし全ての命が死を失ったとして、権力者がそれを手に入れた時、果たして何が起こるか？ それを想像する事は難くない。

ある者は兵士として。ある者は奴隷として。

彼らが望んだ物とは別の、全く歪んだ形でその願いは叶ってしまった。

例え何千という命が消え、何万という人間が絶望を抱こうと、彼らに一切の救いは無くなる。

『死んでも蘇らせればいい』

『命は砂の一粒より軽い』

そう思う人間が出てくる事は、誰にでも想像する事が出来るだろう。

だからこそ、クロノ・ハラウンも北澤直也も、それを認めない。失った者の重み。その大切さを何よりも知っているからこそ、その重みを軽くしたくはないと願っている。

「確かに、そうなれば良いと思った事は何度もある。暖かな陽だまりは、誰だって手にしたいから」

「失ったモノを取り戻す。俺も、その手段があれば間違いなく手を伸ばすだろう」

例え何を失うとしても、それが自分の中にある物だけならば、彼らは全てを棄てても構わない。

だけど、これは違うから。何かを犠牲にしてしまうモノだから。

「次元震の発生。このままでは多くの人たちが犠牲になる」

「仮に死者蘇生を口外しなかったとしても、その方法を手に入れた代償は、どうすれば良い？」

犠牲者を見捨てる事は出来ない。けれど、技術が流出すれば悪用する人間が出る。

これがもし、たった一度きりの奇跡ならば、直也もクロノも何も言わない。

涙を流して拍手をし、その肩を叩いてやる位はしてやる。

けれど、世界はそんなに優しくはない。誰もが理不尽と不平等の上に立ち、ありきたりな奇跡なんて望めない事は、誰だって判っているから。

「僕は、奇跡と引き換えの絶望の世界は望めない」

「悲劇のない道など、何処にもないんだ」

そうして、クロノと直也は真っ直ぐに見つめる。これが、自分の答えだと言う様に。

「交渉は、決裂だ」

023 想いの正体 願いの代償（後書き）

c・m・「失った者は戻らない……思い出の中で微笑むからこそ美しい。これが作者の持論です。」

第23話、投稿完了です」

御剣「……代償なしに願いは叶わず、代償があるが故に手に出来ない。」

奇跡とは遠い故に奇跡と呼ぶ……か」

c・m・「さて、しんみりしちゃったから読者様の質問に移りましようか。」

まずは神崎さまから。活躍の機会がありますのでご安心を。

ちなみにコンビの相手はクロノ君です」

御剣「意外と息が合っているな……恋敵同士だというのに」

c・m・「そこがポイント。こいつ気に入らないけど同じ女を好きになった奴同士、戦ってみるか的な感じ」

御剣「最終的にいがみ合いになりそうだがな」

c・m・「そこはまあ、お互い紳士なコンビを心がけて頂くと言う事で。なのは嬢が着た瞬間瓦解しそうなコンビですが。」

あ、ちなみにバトオはあくまでも敵です。仲間には絶対になりません」

御剣「そして次の質問は、うちの作者からだ……」

c・m・「BLはネタのみという事でタグに付けました。これでじやんじやんやれます」

御剣「……受けと攻めの話があっただが」

c・m・「直也君が受けに決まってるでしょ。身長160の合法シヨタよ。筋肉はすごいけど。」

実は逆三角形な体型。腕とかすごいわよ。腹筋はチヨコレー
トの板みたいになってるし、胸も下手な女の子よりある（胸筋が凄
いともいう）から」

御剣「……さて！ 顔は女みたいだというのに何故そんな筋肉質な
んだ!？」

c・m・「はあ？ 彼は魔力なんて持ってないのよ？ あれだけ高
い運動能力がモヤシ体型で出せるわけがないでしょうが」

御剣「……確かにそうだが、そこは手心を」

c・m・「加える訳ないでしょ。まあ肌は白魚の様だし、黒髪サラ
サラヘヤーを存分に堪能しなさい。」

服来てる時は着やせしてるし、サイズが合わないせいでダボ
ダボの服を普段から着てるから、女性がワイシャツで手の部分を隠
してる感じが味わえるわよ」

御剣「……男相手に味わいたくはないがな」

c・m・「そう？ まあそれはさておき、ここからは読者様のお礼
に移らせて頂きます。」

水玉さま、神崎はやてさま、Hagailazさま、久住祐治

さま。ご感想を頂き、ありがとうございます。

久住祐治様、大変お久しぶりだったのでお会いできて嬉しかったです。

これからも本作品を宜しくお願い致します」

御剣「さて、今日はこの辺りで、失礼致します」

024 両者の差

「そうか……ならば」

「そう……それなら」

グラフィィーとセレノ。両者は異なる位置にありながらも同質の言葉を紡ぐ。

「ここで死ね」

「ここで死になさい」

クロノと直也も身構える。これから始める戦い。

決して報われない、あまりにも悲しい戦いの為に。

そして、両者の決着はあまりにも呆気なかった。

からん、と。グラフィィーの手からデバイスが滑り落ちる。何故？

と、自分が何をされたのか、まるで判らないと言っ様。

実力で言うならば、こと陸戦に限れば軍配が上がるなどという表現では足りぬ程に両者の間には開きがあった。

クロノ・ハラウンがグラフィィー、アルトレイに勝ちたいのであれば、初めから空中に居なければならぬ。

自身の尊敬する父ですら手も足も出なかつた存在に陸戦で勝利を収めるなど、本来であれば有り得ない筈なのだ。

だがそれも当然の事。

グラフィイー＝アルトレイには迷いがあった。

彼はあまりにも優しいから。誰もが犠牲にならない道を選ぼうとしたが故にここまで来たから。

そんな彼が、犠牲になる道だったと言う事を知ってしまったえば、もう動けなくなるのは当たり前だ。

求める物は陽だまり。誰もが笑顔で日々を過ごす事が彼の望みであって、血だまりの地獄を生み出す事は望んでいなかったのだから。だから、勝敗の差があるとすればそれだけ。

グラフィイー＝アルトレイは迷い、クロノ・ハラオウンは迷わなかった。

残酷だと思う。やるせないと思う。

何十年という月日をかけ、絶望の淵に立っていた多くの人間に活路を与え、誰も苦しまないように進んで来た人間を、再び絶望の淵に送り込む。

それはなんて独善。

正義という名の断罪者は、時として人を苦しめる。

それでも、クロノは迷わない。ここで止めなくては何十、何百倍もの絶望が後に待つ。

流した涙以上の苦しみを、多くの人間に背負わせてしまう。

だから、ここで終わり。

自らが裁いた人間の絶望も、憎しみも、全て受け止めて進んで行く。

それが時空管理局執務官である、クロノ・ハラオウンの役目なのだから。

「グラフィイー＝アルトレイ。貴方を逮捕する」

その言葉が、全ての幕を下ろすと言外に告げていた。

そして、両者の決着はあまりにも呆気なかった。
口元から零れ落ちる紅い雫。だがそれを遥かに上回るであろう液体が、腹部から溢れだしていた。

「どっして……」

判らない。まず間違いなく躲せた筈だ。北澤直也の動体視力は確認している。

感情に任せた突貫など、彼からすれば赤子の手を捻るより容易く御せた筈なのに。

腹部に刺さったデバイスを引き抜くと、それがどうしても判らないと言う様に、自分がしてしまった事に耐えられないと言う様に、セレノ・アイヴィーは地面に膝を付く。

非殺傷設定は解除されたまま。放っておけば確実に失血死を引き起こす傷を受けて尚、北澤直也は口を開く。

「……きつと。俺も諦め切れなかったと思うからだ」

その言葉に、自らの罪悪感に崩れ落ちた少女は顔を上げる。

「どっして？」と、貴方は正しい言葉を口にした筈なのに、と。

「確かに先程俺が言った言葉は正しいのだろう」

ここから先の絶望を考えれば、正論と呼べるのだろう。けれど。

「俺が当事者ではないからだ」

悲劇など山のように経験した。無数の屍山血河を踏み越えた。一度として救いはなく、この手で掬おうとしたものは、指先から零れるか、強く握りしめてしまいが故に壊れて行く。

だからこそ、北澤直也は迷ってしまふ。

自分があんな正論という、正しさという暴力で雲を掴むかのような、霞みを掴むかのような手を叩き落とした。

すぐそこまで来た、それこそ自分とは及びもつかぬ信念を以て突き進んだ少女を、正義という在り来たりな剣で斬り裂いた。

全ては己が当事者ではないから。だから。

「君を傷付けた。君の信念を穢し、君の望みを砕こうとした」

傍観者が賢者ぶり、救いの道を足元から崩した。

その行為を赦してくれとは言わない。口で謝罪をしようとも、北澤直也は行動でセレノ・アイヴイーを止めにかかる。

酷く矛盾した、あまりにも独善的な行為。エゴという言葉では足りぬ狂った価値観。

自らが当事者ではないからという理由だけで、北澤直也は拒絶した。

「この傷は、罰だ。君達の信念を、想いを穢した愚者への罰だ」

この傷を以て、零れ落ちた愛を拾おうとした者たちへの敬意とする。

「すまない」

それでも俺は、君を止めると。そう揺るがぬ声で、直也は告げた。

「あ……」

果たしてそれは、いつ以来であったらう？ 誰かが抱きとめる。誰かが己を包んでくれる。

その暖かさ。氷の様に閉ざされた日々を過ごした彼女にとって、その暖かさの最後が何時だったかを覚えている。

あの墜落事故…… 逞しい父と、優しい母が、死して尚を己を抱きとめ、暖かな笑顔のまま逝ったあの日。

「俺を怨め。憎み赦すな」

君の望みを砕く代わり、君の全てを受け入れよう。

「憎悪も殺意も、その全てを向けて構わない」

彼は救えないから。この手で掬おうとしたモノを、壊し続けてしまっから。

「諦めろというのは虫が良いと思う。振り切り求めても構わない」

それもまた一つの選択。少年を殺し置き去り、真に救いたい者を取り戻す事も又正しい道だ。

「酷い人…… 邪魔をすると言っておきながら、いざ選ぶのは相手任せという訳ですか？」

涙交じりの言葉は酷く渴いていたが、同時に軽い物だった。こんな風に、笑顔を見せる日が来れたのは、もう随分と遠い日だった。

「……私は、諦め切れない。けれど、私の様な人をもう見たくない」
その鬨ぎ合い。あの時ああしておけば良かったと、そう思う分水嶺は今ここで。

けれど、どちらを選んでも結局後悔し続けるだろう。
どちらを選んだとしても、自責の念を背負い続ける。そして、もし己の願いを叶えたならば、少女は少女が愛した者たちにも、同じ苦しみを背負わせる。

自分達が蘇ったせいで、多くの者を苦しめた、と。
尤も、結果はどうなるかは判らない。世界の裏の絶望に目を伏せて、目に見える陽だまりだけを愛し続けることだってできるだろう。
端的に言うならば、戦争や紛争が代表例だ。

世界の裏側でどんなに悲劇が起ころうと自分たちには関係ないし、そちらに意識を向けなければ平和で幸福な世界のまま人生を謳歌できる。

けれど……その原因が自分になれば……。……。
その罪を、愛した者に背負わせられるのか？ 生きて欲しいという我が儘で、今も愛する輝きに泥を塗るのか？

そんなものは、救いではない。ただの自己愛だ。

彼らと共に居る自分が幸せになりたいだけ。共に居る事で幸せを噛み締めたいだけ。

“ごめんなさい。父さん、母さん。貴方達の娘は最低で、生き返らせる事も、信念を貫く事も出来なかった”

そして、もう一人の父にも、彼女は心の中で謝罪する。

『ごめんなさい、私は進めない。だって、この道が不幸になると知

ってしまったから』

さよなら、と。念話を通じて、短い言葉をもう一人の父へと向ける。

そして、彼女のもう一人の父は、掠れる様な声で応えた。

『好きに、しろ……君を罪人にするつもりはなかったし、好都合だ……別の幸せを掴め、我が愛児』

それが窮地だと判っていた。助けなくてはならないという想いもあつた。

けれど、それでももう一人の父は言った。罪人にはしないと、別の幸せを掴めと。

だから。最後の最後で、少女は少年に呪いを告げる。

「なら……私を連れて行きなさい。ここでは無い何処か。

其処で……私に別の幸せを送る事。それが、私から救いを奪った貴方への罰です」

それは、少年にとって果たせぬ罰。自らの手から救いたいと願う者を零してしまう存在に、幸せを与えるなどという事は出来る筈もない。だが。

「……約束しよう。この身は、我が生は貴女に捧ぐと」

己の全てを以て、その誓約に判を押そう。

元より穢れた身でしかないが、そう誓えと言われれば魂をも捧ぐ。出来ないなどは決して言わない。

打ち砕いた希望以下の物さえ捧げずして、どの口が諦めるなどとほざくのか。

故に渡そう。己の全てを。この身が擦り切れ、摩耗し、朽ち果て、魂さえ滅されるその日まで、文字通り『全て』捧げよう。

少年は失った。愛も、歓喜も、希望も、かつて過ごした友との日々も……！

故にこの身には何も無い。与えられる物など欠片ほどにしか存在しない。

ああ、だからこそ全てを捧げるしかないのだ。

この決定に不満はない。この決定に後悔はない。

少年は『死神』。愛した者も憎き者も、皆すべからく死を与える殺戮者なれば。

己の全てを捧げるといふ選択こそが、北澤直也に出来る全てなのだから。

「もう、良いですか？」

そうして、突如現れた声に振り替える。

其処に立つ青年、槇野来栖は目の前の惨状を呆れ顔で見つめ、次いで言葉を直也へと放つ。

「偽善者この上ない選択です。どちらも選べないから傷を受け、結局救いたいと願う少女さえ不幸にする」

有り体に聞けば否定の言。だが槇野の顔は予想以上に軽く晴れた物だった。

「ですが、過去という縛鎖からヒロインを引き剥がす言としては及

第点です。

精々幸せを探してあげなさい。門出位は見送りましょう」

指を鳴らすと同時に現れる『スキマ』。其処が繋がるのは……。

「其処の少女を管理局員に見つけさせては犯罪者扱いですのでね。一先ず地球に行って貰います。場所は貴方が望む場所を想い浮かべなさい。

そうすれば、私の知らない場所でも辿りつけます」

「……感謝する。この恩は、いつか必ず」

「期待せず待っていますよ。それと、大丈夫ですか？ 今にも死にそうですけど」

腹部から背中にかけて染み渡った血を横目に、槇野は問いを投げた。傍から見ても重傷。

よくもまあ死ななかつた物だと呆れ半分賛辞半分で問いを投げた。

「……際どいが慣れているのでな。後三分は猶予がある」

その生命力に驚嘆さえ覚えながら、しかし次の瞬間に槇野は絶句する。未だシヨックからか血に両膝を付いたままの少女。

彼女を片手で担ぎあげ、北澤直也は歩を進める。当然、そんな事をすれば傷口は開く。先程際どいと言っておきながら、文字通り寿命を削るなど馬鹿を通り越している。

いや、紛れもない馬鹿なのだろうと槇野は納得した。

「『馬鹿に付ける薬はない』……誰かさんに送っていやりたい言葉ですよ」

「自覚はある」

有った上でこうしている。己の全てを捧ぐと決めた。魂さえも糧とすると誓いを立てた。

故にこうする。自身の命など、この少女を前にして二束三文の価値もない。

その価値観。異常性を言葉にする事は出来ない。ごく当たり前に、それがこの少年にとって当然なのだ。槇野は理解し、その答えを呑みこんだ。

北澤直也は、壊れてしまった存在なのだ。

自己への価値を認めぬ者、己の存在を躊躇なく切り捨てられる者。誰よりも他者を憐れむが故に自らを省みぬ愚者。それこそが北澤直也の正体。壊れた人形にして道化なのだ。

「……君に忠告を。自らの幸せも探さない。でなくば、君は其処の少女も救えなくなるのだからね」

「進言、痛み入る」

その言葉を残し、北澤直也は戦場を去る。もうここから先に彼の舞台はない。

これより先の舞台を彩るのは、白と黒の少女を想う者たちの舞台で、あればこそ。

「興輝君。我々も雑兵を片付け次第帰りますよ。ここに留まった所で、これ以上活躍するのは無粋という物ですから」

『了解。つーか、今回とことんわき役だったな、俺ら』

「それは次の機会にしましょう。少なくとも他人の恋愛譚に割って入る程KYではないでしょう？ 今の内に傷の一つでも負ってずかさんに介抱して貰う算段でも立てていなさい。

でない、全てが終わって帰ってくる人たちの惚気姿を延々と見

ながらハンカチ噛み締める羽目になりますよ?」

『それはそれで惚気終わった後の奴らを弄りまくれそうだがな。まあいい、取り敢えず、すぐかとはまだそういう関係じゃねえし、片付いたらパーティの準備でもしとくよ』

「まだ、ねえ……」

「なんだ?」

先の言にニヤニヤとした口調で槇野は呟き、その語尾の跳ね上がり具合に興輝は不機嫌な声で問う。

「いえいえ。前から言っておきたかった事がありました。余計な御世話かもしれませんが、生まれてこのかた恋人の居ない身として、一つ意地悪を。」

まあ何が言いたいかというと、これからのあなたにピッタリの言葉を送りましょう。

くたばれリア充候補、精々幸せになりやがれペド野郎」

『なッ……手前!!』

一方的に念話を切り、槇野は正面を見据えた。

無論ここは通過点。これより先に続く道には、真の敵が待ち受ける。

「ですが、この門を開けるのは私の役目ではない」

嗚呼見せてくれ、そして切り拓いてくれ。ここを通る者。第一部の主人公よ。

君らは愛を勝ち取れるか? 己の全てを賭けて、過去という縛鎖を解き放ち、小さき少女を救えるか?

ああ……実に見者だ。作家であった頃はその結末を己が内包していた。紡ぐ全てが既知であり、未知という物などどこにもなかった。ここから先は判らない。だからこそ強く思う。願い、届いて欲し

いと切に祈る。

「君達に勝利を

ジークハイル
勝利万歳」

まだ見ぬ主人公に向け、榎野来栖は激励を送る。彼もまた、この戦場から消えて行った。

ここより先は、主人公こそが紡ぐ物語なのだという様に。

024 両者の差（後書き）

c・m・「復ッ活……！！ といいたいところですが、散々お待ちせして済みませんでした。

第24話、投稿完了です」

御剣「ハイテンションかと思いきや下降していくテンション。

まあ良い。ともかく投稿は完了した訳か」

c・m・「ええ。今回は直也君とクロノ君の対比。そしてなのはちやんやフェイトちゃんに関わった人達への転換期としての物語ね。

ちなみに笑う男様チームや直也君はここで退場。所謂後日談辺りの出番でしょうね」

御剣「直也に関しては出番が多すぎたからな。笑う男様チームもA'sからメインを張るから丁度良いと言えば丁度良いのか」

c・m・「そして御剣さんの出番もね。嗚呼……早く御剣さんとヒロインとのラブロマンスが書きたい」

御剣「そうか……ようやく私もはやてとの掛け合いが」

c・m・「え……？ あ、ああそうね。はやてちゃんとの、ね」

御剣「何故どもる……まさか」

c・m・「ごめんなさい。ちょっと直也君の好感度がA'sから半

端無くなりそうなの。こう他のキャラなら一つのイベントで2とか3プラスされるけど、直也君の場合好感度が+68とかがザラで…」

御剣「……何故!？」

c・m・「いや、大丈夫! まだ次回の分もかけてないから、多分大丈夫だと思う!!」

御剣「ふざけるな……!!」

c・m・「まあA'sの話はこれ位にしておくとして、更新をお待ちして頂いた皆様、長くお待たせしてしまい、誠に申し訳ありませんでした。」

これから頑張っていこうと思いますが、色々と私生活で忙しくなりそうなので、更新は遅くなりそうです。

この場を借りてお詫び申し上げます」

御剣「……あ、そうだな。私からも言わせてくれ、すまないと」

c・m・「それでは皆様、また次回、お会いしましょう」

御剣「……しまった!! 流された!？」

025 善と悪の舞台

そして。第一部の主人公が相まみえるより早く、ここに異色のカードが実現する。

庭園の最奥。枯れ果てた茨の森で少女の残滓に縋る魔女。

それを前に、妙齢の女性は一步前へと進み出た。

戦場にはあまりにも相応しくない出で立ち。床を反響させる靴音は革のローファー。

薄手のスラックスとスーツを纏い、肩まで届く黒髪をうなじの辺りで結わえた姿は、一目見ればキャリアウーマンか何かと見紛う。

だが違う。プレシアの目の前に立つ女性は、そんな生易しい物ではない。

「貴女に 引導を渡しに来たの」

スーツ姿の女性。宮本千草は、そう言い渡した。

「そう……一応訊いておくわ。貴女、管理局員？」

「いいえ。私は公務でここに来た訳でも、貴女の野望を止めたい訳でもない」

それでも、と。宮本千草は一步前に進み出る。さらに一步、より前へ。流れる様な動作は疾走でさえ無く、華やかな舞台へ進むかのように。

「別段、私と貴女の間になんか関係がある訳でもないし、説教をするような立場でもない」

だって、これは黒と白の少女の物語。その苦悩、立ち向かった困

難と危機の日々は間違いなく彼女たちの物だから。

「けど、ね……女としてどうしても赦せなかったの」

これは単なる八つ当たり。確かに愚かで莫迦で、これが物語であれば知ったような口をたたくなど、多くの読者は憤慨しよう。

母でもなく、女としても未熟な身の上。愛どころか恋さえした事のない女が何を騙るのかと。けれど。

「貴女は……あの子の母親でしょう?」

あの子は愛していた。自分の身が擦り切れ、摩耗し、ココロさえ砕けそうになりながら。

それでも耐えた。愛し続けた。

「それが、その果てに貴女はあの子を棄てるのッ!？」

最後まで信じてくれた少女を！ 最後まで愛しいと、貴女を想い続けた娘を！

過去という名の縛鎖で縛って、下らない自慰の玩具にする事が、貴女にとってのあの子の全てのなのかと。

「違うなら、」

「違うわい。あの子は私の玩具。アリシアを蘇生させる間の代替」

それはアースラでの通信の際と同じ答え。本当は違って欲しいという願いさえ、今この場で打ち砕かれた。

「……そう」

ああ、ならば。

「死ねない程度に痛めつけてあげる」

その痛みの中で、自分のしてきた事を悔えと。宮本千草は、己の拳を振り上げた。

そして、異色のカードが対決をする頃、クロノ・ハラオウンは捕縛したグラファイアへと視線を向けていた。

「もう、いいかな……」

「ああ……。しかし、君は良いのか？」

戦場を離れた者への別離。本来であれば時空管理法違反の罪で捕えるべき存在を、クロノは深追いはしないという理由で見逃し、あまつさえ別れの言葉があれば告げろといったのだ。

「僕達の目的は次元震発生の阻止だ。ただでさえ武装局員の安否も判らないのに、これ以上余計な所に人員を割けない」

これは大局を見据えた行動。故に其処に私情はなく、自分は義務を果たしているだけに過ぎないと、そうクロノは言外に告げた。

それに……。この後も『ガルフ』の残党が存在すれば管理局から追われるだろうが、彼らは仲間内でしか素性が割れていない。

どの道捕えられない以上、責任はリーダーであるグラファイアに行

く。今生の別れとなるなら、別離の言葉ぐらいかけさせるのが人情というものだ。

「貴方は自白する様な人間でも無いだろうしね」

当然だとばかりにグラフィィは応え、次いで動力炉の方へと首を向けた。

「早くしろ。君の捕縛術式は大したものだが、こつも長引かされてはまた狙いかねん。」

「僕自身、自分の往生際の悪さは知っているのでね」

判ったと、その言葉にクロノと龍也は揃って動力炉を撃破しようとした所で、

「やれやれ。主演の上がつていない舞台で幕を下ろすのは、些か性急という物ですよ？」

イレギュラー。本来登場する筈のない物語の『悪』が其処に立つ。

「なッ!?!」

「にい!?!」

驚愕と困惑。突如放たれた衝撃にクロノ達は吹き飛び、グラフィィは突如現れた魔方陣へと吸い込まれた。

異常極まる衝撃。一撃で吹き飛ばされたクロノは昏倒し気絶するも、神崎龍也は何とか持ちこたえた。

いや、それは決して偶然などではない。この相手は狙ってそれを行ったのだと、神崎龍也は誰よりも理解出来る。

「そうか……お前か」

黒のローブに全身を包み、仮面を付けて正体を隠し、声さえ魔術によって組み替えられているその存在。

明らかかな不審者であり、未知の敵と考えてもおかしくない存在を、しかし神崎龍也は知っている。

何故なら、それは自分が描いたものだから。血と狂気に酔いしれる存在。他者の絶望を是とし、それを自らの快楽へと変える者。忌わしき悪性。絶望こそを愛と考える背徳者。

「ヴェノム」

『毒』の銘を冠せし、その男の名を神崎龍也は口にした。

「これはこれは。我が『紡ぎ手』にして創造主。お会いできて恐悦至極」

「お前が何でこの世界に居るのかはどうでも良い。けど、どうして此処に来た？」

順当に考えれば、悪として倒される運命を用意した作者への復讐と考えるのが妥当。

だが違う。仮にも神崎龍也はこの男を真の『悪』として描いた。確かに狂ってしよう。利己的かつ打算的であり、度し難い程に救いのない悪人だろう。

だが、だからこそ自らを生み出した者への復讐などという詰まらぬ瑣事に目を向ける事など無い。

生み出されたならばそれで良し。滅ぶというならそれも一興。ならばこそ大胆不敵に踊って見せると。

己こそが悪の華であるという自負心をこの男は持っている。

故に、ここで神崎龍也の目の前に現れた理由はそれ以外であり……。

「悪役が舞台上上がる理由など一つでしょう？」

それとも、私がマクスと戦う以外の選択を放棄している？

笑止！ 貴方こそ理解しているでしょう！ 私の銘を私の意義を

！ 私があるべき存在の選択を！」

この身は『毒』。撒き散らし腐敗させ、全てを崩す事にある。

恐れて騒いで苦しみ悶える。恐怖劇は幕を開けたぞ。

打倒しろ。己が『悪』であるのなら、それと敵対するお前は何かと、そう神崎龍也にヴェノムは問う。

「……そう。そうだよね」

曲がりなりにも自分はそういう風に描いたのだ。主人公と敵対する為の悪。

狂気と恐怖の上に立つ絶対悪の存在を。

ならば、それを描いてしまった自分にこそ責任がある。生み出されただけの存在に罪はなく、それが犯した罪は等しく生み出した者が取らねばならない。

存在しなければ良かったなどと、生み出した者が言う資格はないのだから。

「僕はどうしようもない位の臆病者で」

主人公には決してなれなくて。

「だから、その輝きを護りたいと思って」

結果、輝きに依存するだけで。

「それでも」

戦いたいと願うなら。

「あの子の傍に、居たいから」

だからこそ、その輝きに負けぬように。

「お前を 倒そう」

手にした獅王雷牙の切先を向け、決意という名の闘志を燃やす。

この身は灼熱にして迅雷。あらゆるモノを溶かす『毒』も、我が身を無にする事は出来はしない。

「 素晴らしい」

そして、その決意にこそ賛辞を送る。

ああ、これだと。こうでなくては始まらない。舞台は大詰め、荘厳な音色を響かせよう。

神力剣 この世界の魔法ではなく、あくまでもヴェノム本来の持つ力を手にする。

その切先はあくまで地に。うなる大蛇の如き刀身は低く、いかなる時も相手を喰らうと言つように。

「ならば、ここで死ぬことも厭わないのでしょうか？」

その覚悟無くして、私の前に立つ事は許さぬと。そう言外に言い渡すヴェノムに神崎龍也は不退転の決意で返す。

「お前が何者であつたとしても、僕は決して引かない」

ここで逃げてしまえば、二度とあの輝きの隣には立てないから。もう一度、先程と同じ決意を口にする。

「お前を　　倒そう」

言葉と共に、両者は駆ける。ここに、善と悪の対決が始まった。

からんと、乾いた音を立てて杖が床を滑る。中央には口内から血を零し、両膝を付いた魔女の姿と、それを仁王に立った状態で見下ろすスーツの女性。

勝敗など問うまでもない。余りにも呆気なく、そして簡潔に決着は着いた。

「殺さないの……？」

「ええ。貴女には、謝って欲しい子が居るもの」

それが誰かは、訊かなくても判るでしょう？　と宮本千草は罅割れた支柱に背を預けながら言葉を投げる。

「私が手を下すのはここまで。後は若い子に任せるわ」

ポケットから缶コーヒーを取りだし、プルタブを開ける。本来であれば仕事終わりに飲む物だが、どうも癖になってしまったらしい。

「私が……あの子に謝る？ ふふ、言ったで、しょう。私にとってあの子は人形。」

話す事は、何も無いわ」

「そういうのは、この子と面と向かって言いなさい」

そう言っつて千草は指で自分の横を指す。庭園の最奥。この枯れ果てた広間に立つ、黒の少女を。

「母さん……」

一体何から話すべきなのか。何を伝えればいいのか。そんな事を迷いながら、黒の少女、フェイトはここまで来た。

その答えを。自分の本当に伝えたい事を、打ち明ける為に。

「何をしに来たの？ 消えなさい、もう貴女に用はないわ」

それは明らかに決別の言葉。この上ない拒絶。だが、それでもフェイトは立ち止まらない。彼女は、それでも願ってここに来たから。

「貴女に言いたい事があつてきました。わたしは」

たとえ。

「わたしは、アリシア・テストロツサではありません。貴女の、ただの人形なのかもしれません。」

「ただ。わたしは、フェイト・テストロッサは貴女に生み出して貰って、育てて貰った貴女の娘です」

「たとえこの言葉を拒絶されても、全ての想いはこの胸にある。どれ程拒絶されても、どれ程否定されても、それだけは紛う事の無い真実だからと。そう告げた。」

「あ、はははははは！！ だから何？ 今更貴女を娘と思えというの？」

「貴女が、そう望むなら。それを望むなら、わたしは、世界中の誰からも、どんな出来事からも貴女を護る」

「言葉は誓いに。」

「わたしが、貴女の娘だからじゃない。貴女が、わたしの母さんだから！」

「差し出すその手は、一人の母を救うために。フェイト・テストロッサが、プレシア・テストロッサという母親を、過去という鎖から解き放つ為に。けれど。」

「……………下らないわ」

「……………え？」

「その手も、声も。呪縛に繋がれた母には届かない。」

「私は向かう……………アルハザードへ！ そして全てを取り戻す！ 過去も、未来も、たった一つの幸福も！！！」

足場が崩れる。この庭園も、己も、全てを崩そうとした所で

「下らん。貴様の望む真実なぞ、絶望の坩堝に過ぎん」

魔女の狂気さえ打ち消すかのような声が、庭園に響いた。

「な……」

床の亀裂はもう広がらない。庭園の崩壊も止まった。当然だ。この空間そのものの『時』を、この声の主は止めたのだから。

「貴方は」

「まさか!？」

「嘘……」

その驚きは三者三様。この場に居た男を除く全ては一樣に驚きを見せた。当然だ、その男こそ管理局伝説のエースにして魔法使い。そして第一級指名手配犯。名を

「……ベリアエル・バトオ……」

先程の争いが琐事か前座とさえ言える程の絶望が、今日の前に立っていた。

「……そう在り来たりな反応をされても困るがね。お前達に用はない」

言つて、バトオは歩を進める。フェイトや千草に一瞥さえくれず、プレシアにさえ視線を合わせない。

当然だ。何故ならこの男が用のあるのは。

「あ、アアアアアアアアアアアアアアアアアア……………」
「……………」

絶叫が迸る。プレシアの叫びと同時に、フェイトと千草が駆けた。

「許さない、決して許さない!!」

確かにアリシアは死に、『ガルフ』は壊滅した。だが、彼女が母と信じた人の夢は本物であり、娘を想う愛も真実だった。

決して叶えられない夢だったからこそ、誰よりも強く手を伸ばしていたのに。

「どうして、貴方が出てくるの!？」

その理由が判らないとばかりに、フェイトは叫ぶ。しかし。

「亡骸に囚われるが故に、本質が見えていなかったからだ」

それが全てだという様に、バトオはフェイトを一蹴する。そう、文字通りの一蹴だ。

蹴り飛ばされたフェイトは広間の壁際まで吹き飛ばされ、意識を昏倒し、残った千草にバトオは視線を向ける。

「眠れ、女。貴様の出る幕はここではない」

繰り出される右の拳。常人には捉えられぬその一撃で決着は着くと、そうバトオは高を括り、

「それは、こっちの台詞よ」

それを受け流しながら左背足による上段回し蹴りを、千草は叩き込んだ。

「な!？」

バリアジャケットと障壁に防護されていた筈のバトオ身体が傾ぎ、足元が床から離れる。

同時。

「ハッ!!」

まるで教本か何かで見る様な正拳突きが、バトオの水月に突き刺さった。

「ぐッ……」

一メートル以上は確実に飛ばされ、バトオは理解出来ないと言ったように正面を見やる。

そこには『息吹き』というある武術独特の呼吸法を行う女性が一
人。

「そう言えば、貴方とは初対面だったわね……まあ、私の能力は誰にも伝えてなかったけど」

それは別にどうでも良いか。と千草は微かに膝を落としたバトオに『残心の構え』で待つ。

宮本千草の能力。それは

「言っておくけど、私に魔法や超能力は効かないの。だから」

『異能無効化』。たとえ魔であれ科学であれ、それが超上の業である限り打ち消す能力。

本来防御一辺倒な能力はしかし。

「貴方、喧嘩の心得はお有り？」

この宮本千草のみは例外。

拳を、脚を、肘を、五体を武器化する事に半生をかけた彼女にとって、異能に頼る他の『紡ぎ手』とは一線を画する。

「……戦士と言う事か。流派は？」

「空手よ。私が学んだ流派は、空手に流派が無いのを信条としててね。名乗る必要もないから、そう覚えてくれればいいわ」

貴方は？ と問う千草に、バトオは含んだ笑みを漏らす。こんなのは久しぶりだと、そういう様に。

「ベルカ古流武術『聖王流』」

「え？」

千草がその言葉に疑問を抱いた僅かな空隙。その一瞬にバトオは一足飛びで踏み込む。

先程とは明らかに違う練度。地を滑るかのような踏み込みと共に放たれた拳は顎を掠めようとするも、辛うじてスウエーで躲し、その反動を利用した踏み込みで人中を狙う。

本来の空手には有り得ぬ、ボクサーを思わせるフットワークと顔面への直接攻撃。

伝統を重んじる空手家が見れば言語道断と蔑む一撃はしかし、正

確無比に捉える。

「ちィ！」

「シャ……ッ」

しかし、その一撃さえバトオは躲す。肩の動きと反動。それらを予測したうえで紙一重で拳が当たらない位置へと重心を移動し、拳より間合いの広い蹴りで側頭部を狙い撃つ。

当然防御……はせずに膝を抜いて腰を落とし、左足刀で千草は未だ地に残るバトオの軸足の膝を砕きにかかる。
だが。

「くッ」

「惜しかったな」

上段の回し蹴りからの踵落とし。丁度千草が腰を落とした瞬間に頭上に来た片足を落としたのだろう。

両腕を頭上で交差させ、踵落としをブロックしつつ、膝を砕こうとした足刀の軌道を修正。

両の鞞丸を潰す勢いで金的を蹴り上げるも、脚が鞞丸に触れる直前にバツク転で離脱される。

「感動的な強さだ。女……いや、ここまでやり合えた以上、貴公の名前を聞いておこう」

「宮本千草よ。大人しくしなさい。今なら股間にぶら下がった役立たずなモノを二つとも潰す程度にしてあげるわよ」

男にとっての死刑宣告にも等しい言葉を真顔で吐きつつ、しかし、抜かりなく隙がないかを探す。

はつきり言って、宮本千草は弱くない。瓦を十五枚は破壊できる

し、瓶斬りも出来る。

過去の対戦で男相手にカップ

股間に付けるプロテクター

こと辜丸を潰した事もある。

攻撃力には絶対の自負があり、速さや技術にも自信はある。

なら何が問題なのか？ 決まっている。要はその全てにおいてベリアエル・バトオが宮本千草の上を行っているというだけに過ぎない。

無論の事ではあるが結果は最悪。この相手に隙はなかった。

ならば、出来る事は一つだけだと、ゆっくりと互いに円を描くように間合いを詰める。

「セイツ……！！」

狙いは眼球。眼突きと呼ばれる空手道における禁じ手。

限りなく間合いを詰めたこの状態で、全霊を込めた拳速を以てすれば確実に躲せず、眼底には届かずともその眼を抉り取る事は確実に可能だと、そう信じ技を放った所で、

「見事」

己の左膝を、完膚無きまでに足刀で砕かれた。

「な……」

「惜しかった。あと半歩、それだけで勝敗は変わった。

誇っていい、貴公の強さ。真に続けていたいと感じられる時だった」

その賛辞と共に、バトオは千草を蹴り飛ばす。フェイト・テストロツサと同じく、殺さぬ程度に、しかし絶対に自分の邪魔を出来ぬ強さで。

「さて……貴公はどうする？」

そして、バトオは自らが心を砕いた魔女に問う。

「俺が憎いか？ 幸福を奪った世界が憎いか？ ならばどうする？ 狂い切った世界の終着へ目指し、全てを覆すか？ それともここで全てを終わらせたいか？」

返答はない。魔女はただ虚ろな瞳で娘の亡骸を見続けている。

「良いだろう。貴公には資格がある」

そして、バトオはプレシアの首に手をかける。その娘と同様に、自らの手で首をもぎ取るうとし、

「させん……！」

紫電を纏った紫の騎士に、それを阻まれた。

「『ガルフ』か……何の用だ、と聞くのは野暮か」

「お前に娘や妹を奪われた者は多いぞ？ 忘れたとは言わせん」

『ガルフ』のリーダー、グラフィール・アルトレイの言葉にバトオはふむ、と顎に手を当てる。

「忘れてはいない。確かにお前達の中で五名、こちらが奪った肉親が居る。」

「謝罪が必要か？」

「お前の魂でな

！

「!!」

繰り出される槍の一撃。紫電を纏い、粉塵を巻き上げながら進むそれはさながら電光。

魔力を刃とする事で放つ必殺の刺突を、しかしバトオは虚空より顕れた長剣で受け流す。

「ふむ……動きが鈍いが、その傷は管理局によるものか？」

「さあな、生憎……気付いたらこちらに飛ばされていたのでな!!」

距離を取ったバトオに対し、先程と同様の刺突。バカの一つ覚えかと思われたその技はしかし。

「甘い!」

「……ッ!?!」

秒間二十三手。繰り出される刺突は神速。その全てに必殺の威力を持たせながらも、機銃掃射さながらの連撃。

たとえ陸戦のエキスパートであろうとも、これを受けたならば槍袂となることは必定である。

「流石だな、隊長」

その刺突の暴風。バルカン砲にも似た速度の連撃を、さながらバレエダンサーのようにバトオは回避する。

この程度で打ち倒せる相手とはグラフィィも考えていない。この相手は仮にも伝説。

己の見ていない技も、過去に聞いた技も弁えた上でこちらの全力で迎え撃つ。

反撃などさせない。今は防御のみに専念しているあの長剣が攻勢

に回った時こそ、グラフィイーが死ぬ時なのだから。

己の間合いと相手の剣の間合い。その両方が離れた瞬間、グラフィイーはデバイスに魔力を込める。

「スラストバルカン！」

《Thrust balkan》

本来であれば届かぬ間合い。広間の端から端までの距離は優に三十メートルを超えるも、繰り出される突きと共に放たれた無数の魔力刃はバトオの足を一瞬でこそあるモノの確実に止める。

無論、これは単なる足止め。バリアジャケット単体で防げるものではないが、障壁を張れば片手間で防げる程度の威力。

だがそれで良い。それで充分。

この離れた間合いに両者を置き、必殺の一撃を与える事こそグラフィイーの目的だったのだから。

故に。

「追い詰めたぞ、伝説

！！！！」

《Thrust shoot》

ここに全霊を込めた一撃を。突き出す腕が裂ける事も、砕けるデバイスも意に帰さない。

奪われた者への鎮魂を。流した涙に餞別を。その憎しみに活路を。所詮過去を振り返る事でしか、零したモノへ報いる手段がないとしても。

「それでも、僕らは進まなくてはならなかった」

愛した者へ、無くしてしまったモノを取り戻す事が、再び持てる

全てを分け与えたかったからこそ。

「何故、死んだ者に逢いたいと思う？」

この胸にある愛を捧げたかったからこそ。

「伝え切れなかった事が　　在るからだ。お前には、」

奪うだけの貴様には

「　　決して……判らんだろうがな」

皮肉交じりのその言葉。返される事など期待していなかったその言葉を。

「……いや」

グラフィীরの放った閃光に包まれながらも、返されたのは果たして気のせいだったのか？

いずれにせよ、文字通り自らの全てを賭けた一撃を放った以上、グラフィীরに後はない。

魔女を守護する騎士は、その結果を見届ける暇さえ無く、地に崩れ落ちた。

「見事……誉れある魔女の騎士。貴公にも資格ありと認めよう」

ささやかな眩きは、誰の耳にも届いてしまい。むしろあれだけの一撃。自らの全てを賭けたグラフィーの一撃を受けてなお無傷の状態で立つバトオの存在こそ異常と呼べる物だった。

「さて……魔女よ、先の宣誓通り貴公に、」

「させない!!」

プレシアに手を伸ばそうとする刹那、金色の刃が彼女を庇うように間に入り、黒の少女は立ちはだかる。

「何故邪魔をする？ 魔女は君を愛さん。それは、」

「判ってる！ それでも、わたしは護る!! だって、たった一人の」

その決意を言い終わる前にバトオはフェイトを床に叩きつけた。

容赦も呵責もないその一撃。無慈悲極まりない暴力に、フェイトはただ地に伏せる。

「母への愛、か……その決意は買うがね。今の君では足りんよ。力なき理想など子の思い描く夢物語に過ぎん。墮弱だな少女よ。

尤も 俺は嫌いではないがね。さらばだ」

振り上げられる剣。その一撃は痛みさえ無く少女の首を胴から切り離し、鮮血を以て悲劇を彩る。

そして少女は……。

「じゅん……母さん。護れなかった」

最後まで、愛しい母を忘れなかった。そして

「だめ……」

その絶望からの声こそが、魔女を呪縛から解き放つ物なればこそ。

「逃げて……フェイト

！……！」

この刹那の声こそが、母に届く希望の差し手になる。

その愛、その覚悟、全てが愛しく美しい。彼女こそ物語を紡ぐ紛う事なきヒロインであればこそ

「まったく……一人で話がしたいからって先に通したら、足止め喰らっちゃまった」

「愚痴は後にしとけ。主人公なら、どうするか判ってるだろう？」

この窮地に遭って、救いの手が差し伸べられない事など無い……！

「てめえ……フェイトを、よくも傷付けたな」

響く声は殺意と共に。氷上京谷はバトオの長剣を『エクセキューシヨナーソード (ENSIS EXSEQUENS)』で受け止め。

「しかも……千草さん達まで傷付けた」

天宮恭介は、寶貝『番天印』を向ける。

「おまけに親子の対面に水差して」

「拳句に殺そうとまでしてくれな」

恐れも不安もなく、ただ嚇怒の念を以て、二人は伝説に挑む。

「 「ぶっ飛ばすぞ、この野郎!!」 「

これ以上言葉など必要ない。ここに 最強のタッグと伝説との戦いが始まった。

025 善と悪の舞台（後書き）

c・m・「ついに最終決戦へ！ 第25話、投稿完了です」

マクス「無い無い無い 出番がな〜い」

c・m・「すみません。突然の出演にマクスさんが壊れたようです」

マクス「うるせえよ……つかヴェノムの相手俺じゃねえのか？」

c・m・「他にボスキャラ居ないんだから仕方ないでしょ。舞台裏でお姫様と遊んでなさい。ロリコン」

マクス「久しぶりに出番があると思ったら毒舌トークかよ!？」

c・m・「それがこのコーナーの宿命ゆえ」

マクス「もういい……もう疲れた」

c・m・「泣いても疲れてもここにパトラッシュは居ないわよ？

まあそれはさておき、ここからは読者様のお礼に移らせて頂きます。

Kyoさま、神崎はやてさま、笑う男さま、久住祐治さま。

ご感想を頂き、ありがとうございます。

これからも本作品を宜しくお願い致します」

マクス「次回はいよいよ最終決戦か……」

c・m・「ええ。一話で書き切れる自信がないから下手をすると二話になるかもしれないけどね。」

ちなみに戦闘の終盤（ヒロイン登場位？）に水城奈々の『p ray』をかけながら読むのを勧めする、とだけ言っておくわ」

マクス「そうか……しかし今回は伏線の嵐だったな」

c・m・「ちゃんと回収するわよ。読者の皆様には色々予想してほしい所ね」

マクス「……伏線のスルーされない事を祈ろう」

c・m・「さて、それでは今日はこの辺りで。失礼致します」

026 その力は誰の為に

「く　　ッ」

苦し紛れに放たれた一刀と共に発生する暴風。実力の片鱗さえ見せていない筈のヴェノムに対し、神崎龍也は未だ有効打を与えていない。

それは決して神崎龍也が弱いと言う訳ではない。振るわれる度に発する斬風は床へ亀裂を奔らせ、支柱は飴細工か何かのように脆く碎ける。

余波でさえそれであるのだから、もし一撃を入れられれば間違いなく致命傷となるだろう。

そう。一撃さえ入れられるなら。

「どうしました？　動きが鈍っていますよ」

「うるさいっ……！！」

当たらぬ一撃に意味など無い。これまで繰り出した攻撃はその悉くを躲され、或いは叩き落とされる。

現に。

“ 近距離が駄目なら……！！ ”

「魔人剣！」

遠距離から放たれる斬撃。地を這うように進むそれは事もなげにヴェノムの剣で防がれる。

“ っっっでー！”

「ラウザルク！」

呪文の発言と共に地を駆ける。先のような遠距離攻撃ではなく、あくまで身体能力の底上げの呪文。
だが。

“クロックアップと併用すれば、ヴェノムでも反応しきれない！”

その速度は正しく神速。降り注ぐ雨粒の一滴一滴さえ視認を可能とする一種の時間遅延化との併用。
加えて。

“取った。真後ろ！”

急加速からの消失に加え、視界の及ばぬ背後への攻撃。この一瞬、この一手に限っては、攻撃を甘んじて受けなくてはならない。

「チエックメイトだ……ヴェノム」

その一撃一撃が致命傷となる剣の五月雨に業火を纏わせる奥義。名を『殺劇舞荒剣』。荒れ狂う焰は一撃でさえ受ければ無事では済まず、その剣戟は死の舞を思わせる。

傷口は業火によって焼き爛れ、飛び散る血飛沫は熱風によって地に落ちるより先に蒸発した。

文字通りの必殺。これを受けてなお立ち上がるのであれば、それは真正の怪物に他ならず

「……惜し、かったですねえ」

この相手は、正しく真正の怪物であった。

「ッッ　　は……!?!」

ノーモーションで放たれた蹴りによって壁に叩きつけられ、神崎龍也は思わず喀血する。

「やって、くれる……バリアジャケットと防御術式が無ければ私とて無事では済まなかった」

だが、それでもヴェノムは健在。多少の傷を受けてはいるものの、勝負ありとは言い難い。むしろ……。

「少々、嘗め過ぎていたようですね」

最悪の結果である。これを相手にするならばあくまでも油断させておく必要があった。

狂気と殺意に満ちた相手は確実に遊ぶ。だからこそ其処に付け入る隙があったと言っのに……。

「来なさい……とは言いませんよ?」

撓る刃。大蛇を思わせる刀身が、今まさに神崎龍也に迫る。

“く、そ……!!”

その一撃を回避するも、斬撃の跡を見て愕然とする。

「溶けて……いる?」

そう。溶けているのだ。斬撃ではなく溶解。毒の銘を冠する以上、その属性を持つているのは当然の帰結。しかし。

「貴方がやってくる前から術の研究をしていたのでね。貴方の知り得ている事が全てと思っでは困ります」

研鑽を怠るのは愚者であり、衰退する者。如何に狂っようとも、戦士としての心得を忘れる程、ヴェノムは墮落していない。

「さて、私が避けてばかりでは不公平ですね」

口元が三日月のように裂けると共に、毒蛇の剣が迫りくる。

絶望的な状況。この少年の戦いに、未だ勝利の女神が訪れる気配はなかった。

「つつ……オラァ!!」

振るわれる一刀。あらゆるモノを個体から液体、気体へと相転移させる断罪の剣を、氷上京谷は放つ。

「速いが素人だな。動きが単調だぞ？」

そして、一度触れば終わる剣を一切の恐怖心も無く躲すのはかつての伝説。

悪夢としか言いようがない。如何に剣の道において氷上京谷が素人とはいえ、剣戟の速度は音速を超えている。

それこそ積み上げた技巧さえ一瞬に無に帰す程の一撃。にもかかわらず、ベリアエル・バトオはまるで生徒に語る教師のように助言としか思えぬ発言をしていた。

「そう余裕ぶつてられるか？」

バトオが後方へ飛び退くと同時、『番天』という文字の押印がバトオを覆う。その数、実に二百。

四肢の末端から全身に至るまで示された押印は、たとえバトオが移動したとしても付いてくる。その意味は

「無駄だ、絶対に逃がさん」

瞬間、無数の光弾が放たれると共に、『番天』の押印へと寸分違わず向かっていく。

押印の役割はロックオン。たとえどれ程逃げようとも、死を宣告する押印が捕えている限り、捕捉者は無数の光弾に撃ち落とされる。

その永久追尾の攻撃こそ、『番天印』の能力である。
だが。

「捕捉されると言う事は、確実にその位置に向かうと言う事だ」

その言葉が示す通り、バトオの身体に光弾が触れる直前に地から火柱が上がり、光弾の全てを焰が絡め取る。

「この野郎！！」

「なら……遊びは無しだ！！」

言葉と共に恭介は『番天印』を消す。代わりに彼の背後より顕れ

るのは漆黒の球体。それは如何なる工程によつて作られた物なのか。元はバスケットボールを二回りほど大きくしたような球体は徐々に分裂し、大小様々な球体が広間を漂う。

誰が知ろう。それは『封神演義』において崑崙山の教主、元始天尊の用いたという伝説の宝貝であることを。

「逃げるのが上手くても、こればかりは防げんぞ」

名を『盤古幡』。その真価、かつての伝説を、現代に生きる伝説は身を以て味わう事になる。

「ぐ、あ……………ツ!?!」

瞬間、バトオの片膝が地を付き、彼の足場を中心に広間に亀裂が奔っていく。

「おいおい、まだ動くのかよ……………百倍の重力だぞ?」

その能力は重力操作。使い手が限界を超えぬ限り、無限に負荷を掛け続けられる宝貝である。

「……………なり振りを構わん、と言う訳ではないのだな」

だが、その一撃を受けて尚バトオは健在であり、状況を分析する程の余裕を見せた。

本来であればより強大な一撃を用いる事も出来る。それを行わないのはこの宝貝の能力がフェイトや千草に及ばぬよう、コントロールする為の措置であり、

「他者を巻き込まぬその信念は、敬服に値しよう」

だが、とバトオはつまらなさげに見つめ、

「余力を残して勝てる程、俺は甘くはない」

その言葉の通り、この重圧を加えた術者、すなわち恭介のもとに迫る。

「そう来るのは、」

判っていたとばかりに腕を突き出すと同時に、彼の両腕に填められた銅の輪が射出される。

寶貝『乾坤圈』。あくまでも銅製の輪を直線的に飛ばすという単純な攻撃。

だが、その一撃は城壁はおろか山をも崩すと言われる破城鎚。亜音速を超えて放たれたソレは互いが密着する程の至近距離。如何な手段を用いようとも完全に躲す事は不可能であり、

「Time (時よ)」

必中を予感した一撃を防がれた時こそが、最大の間を生む。

「な……」

いや、天宮恭介に非など無い。元より放った筈の寶貝が完全に止まっている事も、己が指一本動かせぬ事態にある事も、全てが常軌を逸しているのだから。

まるで、時間が止まったかのように。

容赦など微塵もない。懐に飛び込んだ状態のまま振るわれた剣は、乾坤圏ごと恭介を斬り裂く。

「この……よくも!!」

仮にも仲間を地に伏せられた事に対する激昂と共に振るわれる断罪の剣は音速さえも置き去りにしてバトオへ迫る。

これ以上ない出鱈目。反則と言う反則を限りなく使った一撃はしかし。

「Time (時よ)」

それ以上の反則によって、覆された。

結果は言うまでもない。既に同じ手によって、地に伏せた者が居るのだから。

絶え間なく続く猛攻に、網の目を掻い潜ると言う表現では追いつかぬ様な危うさで、床を、壁を、天井を。まるでピンボールのように跳ねまわりながらも、紙一重で回避し続ける。

防御は不可。たかが一撃とて侮ってはならない。あれが毒である以上、掠っただけでも致命傷になるのは眼に見えている。

触れれば終わり、止まっても終わる。その恐怖に打ち克つために、打開策を練らねばならない。

“落ち付け……まだ手はある!”

ベルトのバックルに備え付けられたカードデッキからカードを引き抜き、ドラグバイザーにセットする。

《ADVENT》

ドラグバイザーから響く電子音と共に、その場に異形が顕れる。それは紅き龍の化身。現実には決して見る事の叶わぬ幻想の存在は、しかしどこか機械の様な無機質さを思わせた。

こちらは決して近づけず、かといって回避し続けるしかないならば、手は一つしかない。すなわち遠距離攻撃。

「行け！！」

号令一喝、その言葉と共に紅き龍は炎弾を放つ。その熱量、全てを焼き溶かす炎は必殺といかぬまでも相応の傷を与えるであろうし、仮にヴェノムの攻撃を受けたとしても一撃二撃で斃れる事はあるまいと、そう考えていた。

故に。

「吠えるな、蜥蜴」

その炎さえ断ち斬る毒の刃など、想像だにしていなかった。

ありえないと、そう龍也が感じる間もなく紅き龍は毒に溶かされ、全身を朽ちさせる。

腐敗などと言う言葉では追いつかない。文字通り溶解し、この世から幻想に姿を引き返す龍を、神崎龍也はただ見送るしかない。

その異常、その強さ、全てが受け止めきれぬと感じながらも、次の一手を講じるべくカードを引き抜き、

「 させると思いますか？」

それを差し込もうとした瞬間、ヴェノムの剣がカードを斬り裂く。
同時、

「 が づッ……ア」

全身のバネを利用した足刀が、龍也の肋に叩きこまれた。

起き上がる事など出来ない。胸骨が砕けた今、単純な呼吸さえ苦痛であり、意識を失わなかったこと自体が奇跡と言える一撃だったのだから。

「 ……ア」

手にした刀を蹴り飛ばされ、仰向けになるよう足で転がされた後、カードデッキやドラグバイザーさえ残らず壊された。

これ程の優位、これ程の実力差に在ってなお敵の反撃を削ぐその徹底主義。

格が違う、実力が違う、何より積み上げた経験が違う。

たかだか力を手にした程度で自惚れるなど、そう告げる深紅の瞳を、しかし神崎龍也はただ睨み返す事しか出来ない。

“ どうしてだよ……何で、僕は勝てない！？ いつも、どうしていつも負けてばかりなんだ！？”

それが君の宿業だからだ。『紡ぎ手』

“ なん…だ、この、声は”

代償なしに望みが叶うと思っていたか？ 君たち全員とは

いかんが、一部の者には全員が願いを叶える為に何らかの代償を支払っている。

如何に君達が墮天使のお墨付きを貰っているとはいえ、望みを成就させるならそれなりの代償は必要だ。故に、君の代償は

思わず耳を塞ぎそうになる。決して動かせない手を、もがく様に耳にやろうとし、

『勝利する事が出来ない』だよ

「ア……アア」

聴きたくなかった。たとえそれが真実であつたとしても、その答えだけは今は受け入れたく無かった。
何故なら。

「 龍也君！！」

己が護りたいと思っていた少女が、この窮地に駆け付けていたのだから。

S i d e - R y u y a K a n z a k i

「どっして……」

如何して来てしまうのか？ 君が来ては何の意味もなく、ただこの絶望的な状況を、さらなる絶望に追いやるだけなのに。

けれど。

「もう、良いよ……」

その疑問を、涙を浮かべながら、なのはは返す。

「龍也君が強いのは判ってる。わたしの為に頑張ってくれてるのも、大切な人たちの為だっていうのも。」

「だけど、それじゃ苦しいだけだよ。天宮さんも、京谷君も、マクスさんも、レインシアちゃんも、槇野さんも、興輝君も、直也さんも、千草さんも……皆、優しすぎるもん。」

「どうして皆、こんなに頑張れるの？ わたしや、ユーノ君やフェイトちゃんが子供だから？ けど、龍也君だって同じ位でしょ？」

「だったら、と。憧れていた少女は、何よりも強い瞳で僕を見つめ、
「だったら 一人で背負わないで。わたしだって、戦える！
皆の力になれるんだよ！」

決意と覚悟。余りにも純粹すぎて、眼が潰れてしまいそうになる輝き。

決して自分が持つて居なかったからこそ、憧れてやまなかった存在。

ああ、けれど違うんだ。

「……違うよ。僕は、そんな物語の主人公みたいに、純粹じゃないんだ」

僕は皆を護りたかったからなんて、そんな主人公みたいに大それた願いは持っていなかった。

口に出さなくてもそういう建前を何処かに見せて、戦っていただけだった。

だって、僕は、僕の願いは……。

「なのはが……好きだから。それだけなんだ」

それが迷いの無い自分の本音。他の誰でも無い、君の為にこそ、この力を使ったかった。

嗚呼……なんて自己中心的で、独りよがりな想い。

主人公がどうとか、世界がどうとか、そんな大きな物じゃなくて、もっと小さくて、眼に見える輝きを自分のモノにしたいと。

そんな下らない独占欲の為に死地に赴いて、皆に迷惑をかけていた。

「ずっと……ずっと前から好きだった」

君に出会う前から。この事件な起きる前から。何の力も持たなかったときから、君が好きで仕方無かった。

その輝きを追いかけて、手に出来ると思って頑張つて、そんな本心を隠し続けてきた。

「だから　だから、なのはが気に病む事なんて無いんだ」

あまりにも押し付けがましい、愚かな男の告白。

物語のフィナーレを彩る様な、舞台の終曲を奏でる様な、そんな素敵な物じゃない。

ただ一人の男の独白。だから、返事も何も必要無い。

ああ　今、僕はようやく口に出れた。この本音を、胸に抱える想いの全てを。

だから……。

「そうだよ……戦う理由なんて、それっきりだったんだ」

拳に力を込め、ゆっくりと立ち上がる。

自分の後ろには好きな娘が居て、目の前には倒すべき敵が居る。

はは……これじゃあ僕は、主人公みたいじゃないか。

きつと、僕は負けてしまう。あの頭に響いて来た得体の知れない声の言う通り、きつと誰よりも勝利に遠い。

けれど、それでも自分は追い求めよう。その勝利を、目の前にある輝きを。

もう言い訳はしない。例え勝てないとしても、自分は

「お前を、倒す……！！！」

宣誓と共に駆けだす。走ろうとして前に出した足は歩くより遅く、握った筈の拳はだらりと下を向いている。

だけど、それでも進むんだ。自分には、護りたい者があったから。その答えを見つけたから。

瞬間。

ならば、その決意を糧に宿業を超えろ

パリン！ と。硝子の砕けるような音が、空間に響いた。

氷上京谷と天宮恭介。大地にただ身を投げ、起き上がる事も出来ずに荒い呼吸を繰り返すだけの二人に割って入る様に、二人の女性が前に出る。

片や、金砂の髪を二房に結んだ少女。

片や、スーツ姿の妙齡の女性。

どちらも共に満身創痍。起き上がることさえ困難な状況下にもかかわらず、その背に一片の後悔も感じ取れない。

だってもう充分だ。もうこれ以上ない位助けてもらった。

何の繋がりもない、ただ共に行動していたと言っただけの、それだけの関係。

だからもう充分。勇気を貰った。決意を貰った。

自分の為に誰かが戦ってくれたという事。その事実が、二人の女性には有ったから。

「もう充分だよ、京谷」

「ありがとう、天宮さん」

だから、この時はただ感謝を。たとえここで負けるとしても、せめてお礼ぐらい言わなければ、死んでも死にきれないと思うから。

ああ、だって言うのに

「……勝手に、終わらせんな」

「そういう、BAD ENDは……認めないからな」

「」「びびりして……」「」

何で立ってしまおうのか？

「もう良い。これはわたしと母さんの問題で、京谷は巻き込まれただけ。」

「こんな……こんな場所に居たって、わたしと一緒に居たって不幸になるだけだよ……！」

その言葉、その疑問に、しかし京谷は片膝を付きながらも立ち上がり、ゆっくりと口を開く。

「……なんかじゃない」

その声はか細かった。何を言っているのか判らない位に小さかった。けれど、それでもフェイトの耳に届いていた。

「え……」

「不幸なんかじゃねえ……！！！」

決して不幸ではないと、むしろ自分は満ちていると、そう語るように、京谷は口から血の泡を零し、震える足で立ち上がる。

「嘘だよ……だって、ボロボロなんだよ……そんなに傷だらけになつて、何の得にもならないのに。」

わたし……母さんの為になるなら、京谷だって見捨てるかもしれないんだよ？

酷い事も、言ったんだよ？　なのに、何で……」

震える声。瞳から溢れそうになる雫を、京谷はそつと指で掬う。

「泣くなよ……見たくないんだよ、そんな顔」

「だから……何で」

そんなに優しくするの、と。そう言いかけた時、その唇を塞がれた。

「んツ!？」

抱き寄せられている。心臓の鼓動も、肌の温もりも、その全てをお互いが感じていた。

触れ合うだけの、本当に優しい口付けは、一秒にも満たなかっただろう。けれど、今この時だけはそれが永遠に感じられた。

まるで、時が止まったかのように。

「こづいう……事だからだ」

言って、何処か恥ずかしげに氷上京谷は背中を向ける。後ろからでも、赤くなっているのが判る。

だって耳が真っ赤なのだ。覗きこんだらどうなるかは想像に難くない。

「お前の為なら……どんな奴だって、どんな出来事からだって護つてやる」

君が望むのなら、この身は君を護る楯となるう。

君が望むのなら、この身は君を護る剣となるう。

君が望んでくれるなら

「どんなに辛くても、お前と共に居る事、それが幸せだ」

だから、と。その一言を振り絞る為に力を入れて。

「好きだ、フェイト」

ここに偽りの無い本音を。不器用で、どうしようもない位行き当たりばったりで、けれど何よりも素敵な愛の告白。

その答えは

「あり、がと……ありがとう、京谷」

誰よりも真っ直ぐな想いは、純粋な少女に受け入れられた。

そして 氷上京谷はここに誓う。

この身は彼女を護る楯となり、彼女を護る剣となることを。ならば。

「よう、伝説。さっきはよくもやってくれたな」

ここに、誓いを果たそう。

氷上京谷は、フェイト・テストロッサの恋人なのだから。

不器用な少年と、あどけない少女の恋愛譚を、彼らは少し離れて見つめていた。

誰よりも真っ直ぐで行き当たりばったりで、この上なく純粋な一つの恋を。

「羨ましいな……」

天宮恭介の言葉に宮本千草は相槌を打つ。

「そうね。私達は大人だから、あんな風に正直にはなれないもの」

「あー……しつかし、これから参戦するのもなあ……。入り辛いつて言うか、なんか愛の力で戦うのに一人身の男が入るっていうのも」

目の前でラブシーンを見せつけられたからか、それでも向こうには聞こえないよう配慮しつつ恭介が愚痴を零すのを、千草はクスクスと笑いながら見つめる。

「あら？　愛があれば戦えるの？」

「そうだな。少なくとも勝った後でご褒美ぐらい期待しないとやってられないって言うか……。けど相手が」

「じゃあ、これで良いかしら？」

そつと、頬に唇をあてる。何が起きたか判らなそうに見つめる恭介に対し、千草は人差し指を唇にあてて、

「アルフには内緒よ？　あの子、貴方に気があるみたいだから」

そんな言葉を口にした。

「それで、元気出た？」

「あ……はい！　充分です！」

何処までも明るい、まるで死地に行くのではなく、待ちに待った遠足に向かう小学生の様な足取りで戦いに臨む恭介の姿を、千草は

背に預けた壁からずると斃れるように座り込んで見据えていた。

“ ああ……失敗したなあ ”

キスなど生まれてこのかた一度もしていないと言うのに、こんなムードもへつたくれも無く、ましてや好きかどうかという問題以前の相手にするなど、これまでの彼女の人生からすれば有り得ない。

ああ、全身がだるいし熱い。きつと戦闘のダメージのせいだろう。そう考える事にして、宮本千草は深いため息を付いた。

「それで、貴公らの選択は変わらんのかね？」

未だ目の前に君臨する絶対者。地に堕ちた伝説はその威圧感もそのままに、目の前に立ちただかる二人を見る。

「ここで逃げたら男じゃねえだろ」

「それ以前に、選択肢なんざ他に無いんだよ」

その決意。怒りではなく護るモノの為に戦おうとする信念を前に、バトオは微かに目を細め、

「……実に眩しい。貴公らの愛の誓い、その信念を言祝ごう。

ならばどうする？ 『悪役』はここに居る。倒すべき敵は目の前だぞ」

身構える伝説。先程までの様に構えらしい構えを見せなかった存

在が、今この二人を前に身構えている。

「当然!!」

「ぶっ飛ばす!!」

突き進む二つの影。床を砕き、彗星のごとく突き進む二人を前に、バトオは必殺の祝詞を紡ぐ。

「 Time (時よ)」

あらゆるモノを止める絶対の術。未知の領域に踏み込んだ魔法使いは、今己の最大の反則を用い。

「時よ止まれ ザ・ワールド!!」

それに匹敵する反則を、ほぼ同時に用いた。

「な……」

バトオが瞠目するのも当然だろう。決して破られぬ術。真理の扉を開けた者にしか扱えぬ反則を今二人は用いているのだ。

これが反則で無くて何だと言う。出鱈目でなくて何だと言う。

だが、バトオは即座に理解する。魔術とはすなわち超上のであり霊的な点に重きを置く。

故に見える。捉えられる。目の前に相対する二名。その背後に立つ、異形の存在を。

それをこの二人が操っているのだという事も。

名をスタンド。術者の手によって作られるその存在は、ある一定の能力を用いらせる。

すなわち 時の停滞。奇しくもベリアエル・バトオと同様の

紫電一閃。文字通り自身を稲妻と化した京谷の拳が、今バトオを捉えていた。

「グツ……！？」

秒速一五〇キロメートル。不可視の雷撃は今質量を持った存在としてバトオの肩を、脚を、胸を、その存在の悉くを滅多打ちにする。加えて。

「俺を忘れるなよ」

いまその雷さえも上回る巨大な質量が、バトオの双肩にのしかかる。

「耐えろよ京谷。この相手には加減が出来ん」

勝手にしろ、と。一秒にも満たぬ程の念話を聞きとめ、恭介は口角を歪める。

この男はここで倒す。自らが信じるもの、護るべき存在があるのだから。

「盤古幡、最大出力」

空間が歪む、かつて無い程の質量に、世界が軋んでいる。

「重力兆倍………！！」

重力の『場』が歪み、ブラックホールとさえ化した空間。フェイトや千草さえ巻き込むのではと危惧された一撃はしかし。

「まったく……少しは加減ぐらいして欲しいもんだな」
「そう思うならもっと早く連れて来て下さい」

レインシア＝リ＝グランヴァールの障壁によって、事なきを得た。

「マクス。彼女達を一カ所へ。流石にこれ以上あの戦いの余波を凌ぎ切るのは難しいので」

「へいへいっと。じゃあな京谷、お前は勝てるよ」

その不器用な激励に、微かに笑ったように見えたのは果たして気のせいだったのか。

少なくとも、最早別次元とも呼べる戦いにある彼らを見届ける事はマクスやレインシアには出来ない。

だが、

「……勝てるよ。わたしが、信じてるから」

そのフェイト・テストロッサの言葉を契機に、徐々に雷が伝説を押しに行く。

勝利の女神が居る限り、主人公は負けはしないのだから。

硝子の碎けるような音と共に、神崎龍也にも異変が起きる。

「え……?」

「莫迦な……」

砕けた装備が戻っていく。それらは黄金の輝きを放って、神崎龍也へと集っていく。

何と言つご都合主義。これ以上ない位の反則に、敵も味方も立ち止まる。

だが重要なのはそこではない。

本来ではあり得ぬ事象。決して起こり得ない事柄。巨大な壁の様に立ち並ぶカードの列は、さながらドミノを思わせる。

「光の……扉」

だが、神崎龍也は意識とは別にソレを理解した。これは壁では無く扉。一列に並ぶカード。本来破壊された筈の物は、己の駆ける道を紡いだものなのだ。

何故こんな物が出来たのか？ 何故この状況でここまで運命に愛されているのか？

それを問う様な事は今はしない。

何故なら……。

「おのれ……!!」

振われる毒蛇の剣。全てを溶かす背徳の牙は、自らの勝利を盤石にする為に襲いかかり、

「させない!!」

剣が神崎龍也を貫く直前、ヴェノムの肉体を深緑の鎖と桜色の魔法陣が拘束する。

バインドの二重拘束。如何にヴェノムと言えどAAA+ランクによる拘束には数秒の時を要する。

そして。

「アアアアアアアアアアアアアア……………!!!」

その数秒の時間、神崎龍也は全力で扉を駆け抜ける。

決して勝てない。それが力を得る為の代償だと謎の声は言った。

だが、それが一体どうした。いま、ここに居るのは神崎龍也だけではない。

「行って、龍也君！」

“行くさ。少し位、カツコつきたいしね”

彼が好きだと語った少女と、

「はやく……………しろ！」

“判ってる。クロノこそ、倒れないでよ”

彼と背を合わせて戦った少年。

その二人が今の自分を支えている。

そして

龍也の後ろ、潜り抜けようとするその背に寄り添うように、紅き龍が顕れる。

“ああ……………君も居たのか”

後ろを振り返る事も無く、その存在を肌で感じ取りながら、ドラグレッダーの爆炎に身を任す。

弾丸のような勢いで射出される自身の肉体。光のカードをゲートのように潜る度、獅王雷牙の刀身に炎のような魔力のオーラが宿り、その力を何倍にも増幅する。

負ける筈がない。負けていい筈がない。何故なら神崎龍也は、ここに居る仲間の想いを背負っているから。彼らが、背を押してくれているから。

だから今は、ただ前を向こう。信じてくれる者の為に。

《FINAL DIMENSION ATTACK》

ドラグバイザーから響く電子音。そうか、これはそういう技なのかと理解するより先に、神崎龍也は獅王雷牙を振りかぶる。

「
ホワイト・オア・ブラック
決着だ！！」

そして、神崎龍也とほぼ同時に京谷達の戦いも終局に突入する。

「時よ！ (Time)」
「時よ……！！」

両者の実力は現状、ほぼ伯仲。ならばこの時を超えた先こそが戦いの勝利であり、

「Accelerator！（加速しろ！）」
「止まれ……！！」

信じがたい事に、両者の力は拮抗していた。

そう、拮抗なのだ。二人掛かりでの時の停滞。早回りする時計の歯車を止めるには、二人掛かりで無ければままならない。

すなわち。

「貴公ら二人、いずれか片方が果てれば決する事になるな」

「それが……！」

「どうした……！」

そんな事は判っている。目の前の敵が出鱈目の存在であり、二人掛かりでようやく相手になると言うことぐらい。

「良い目だ。その瞳に灯す焰は愛故に。

美しいな　　貴公らは俺に何を見せる？　何を以て終局とする？」

その答えは自分たちの勝利を！　それ以外に何も無い。それ以外の結末など認めない。

戦い戦い戦い………そして全てを終わらせる。だって。

彼女達は信じてるから。見守ってくれているから。

だから言える。断言していい。この物語は、この舞台は……！！

「俺達が、幕を引く！」

重力操作による異界の創造。あらゆるモノを呑みこむブラックホールは、時の停滞とは別の法則によってバトオを拘束し、

「ここで消える……悪役。いま幕を引いてやる」

迸る雷。具現化し、形成されるソレを氷上京谷は掲げ持つ。

魔神さえも一撃で屠る必殺の槍。その銘を

「

s

.

-

)

雷神槍『巨神ころし』」

呟きと共に、槍が放たれる。最大最強。文字通りの全力で無ければ、この相手は倒せないのだから。そうしなければ、愛した者の小さな笑顔さえ護れなくなってしまっ
うから。

「「
ブラック・オア・ホワイト
決着だ!!!」」

黄金の炎と雷。全てを呑みこむ剣と槍。

異なる場所、同じ時間にそれぞれの敵を討つべく必殺の一撃を繰り出す。

ホワイト・オア・ブラック
ただ決着を。
ブラック・オア・ホワイト
ただ決着を。

それぞれが想う女性を胸に、それぞれが己の全てを賭す。

胸を張って、彼女達の元へ行く為に。護るべき者を護る為に、

「僕達の!」
「俺達の」

想いを力に変えて、彼らはいま物語の第一部に幕を下ろす。

「「「勝ちだアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」」」

時の庭園に満ちる黄金。ここに、死闘の終曲は終わりを告げるの
だった。

026 その力は誰の為に（後書き）

c・m・「死闘決着！ 第26話、ようやく投稿完了です！！」

レインシア「そして待望の告白TIME 恋する女の子も良いですけど二次創作では男性からの告白ってすくないですもんね」

c・m・「うん やっぱり男共にもたまには恋で悩んで貰わないとね」

レインシア「ところで……キスの相手はKyoさまで良かったんですか？

こう言うては何ですけど、あの人サボリ気質のニート候補で変態入ってますけど」

c・m・「さらっと凄い毒舌っぷりね……まあ今回は頑張るご褒美と言う事で、私的にはノーカウントにするかどうかは悩みどころ。

むしろ私の事より京谷君と神崎さまを見て欲しい」

レインシア「どっちもストレートでしたね。京谷君はどんな時でも守る騎士タイプ。

うちの作者は本音暴露系でカッコ良くないけど友情と愛情の入り混じった現代っ子的な？」

c・m・「そのあたりは読者のご想像にお任せします。恋や想いの形は星の数だけあるんだし。

………相手が鈍感で伝わらないってのは腹立つけど」

レインシア「まあ……私も恋の相手では苦勞する事が多いですから
良いんですけどね」

c.m.「そしてさらっと惚気るのね……まあ良いわ。

ここからは読者様のお礼に移らせて頂きます。

神崎はやてさま、笑う男さま。ご感想を頂き、ありがとうございます。
ございました。

これからも本作品を宜しくお願い致します」

レインシア「戦いは終わり、残るもあと僅かですね……」

c.m.「ええ。長かった無印編もあと僅か！ 何とか今月中に終
わらせた所ね」

レインシア「それではまた次回、お会いしましょう！」

「終わったのか……な？」

既に原形を留めぬ程破壊され尽くした動力炉。砕けた床に広がる虚数空間の海に落ちていったヴェノムを見届け、僕は後ろへと振り返る。

「あの……なのは、僕は」

何を言えば良いのか。ようやく終わった筈なのに、もう危機は去った筈なのに、気持ちの整理だけがつかない。

「龍也君……あの、上手く言えないけど」

戸惑いがちな言葉。何を言われるのか内心不安になりながら、それでも背筋を伸ばして、真っ直ぐなのはを見る。

「龍也君、いつもわたしと居てくれて、助けてくれたよね？」

そんな事は無い。何時だって、どんなときだって、助けてくれたのは君だった。

「僕だって同じだよ。ずっと君を見てて、君に憧れてた。

君が居たから、ここまで来れたんだ。だって、」

ずっと傍に居てくれたから。

「背中がとても、暖かかった」

そして、お互いが全く同じ言葉を呟く。きっとその事を伝えたくて、上手く形に出来なくて、けど、ようやく……。

「まずい、二人とも！ 急いで脱出しないと庭園が崩れるぞ！！」

……唐突に、それはもう本当にこれでもかと言うぐらいムカつくんだが、クロノが邪魔してくれやがった。

空気読めよこの野郎、と視線で話すもクロノはスルー。

そればかりか……。

「あッ……！！？」

「大丈夫か？ 早く出た方がいいな」

何でそう美味しいとこ持っていこうとするんだよ！ 僕に何か恨みでもあるのか！？

などと、この時は納得いかないとはかりに思っていたんだが……。

「それじゃあ龍也、僕は武装局員の安否を確認しないとイケないから、彼女を頼む」

と、なのはを押しつけてきたのでワザとではない……のか？ それどころかこつちを気遣ってるみたいだし、実は良い奴？

……そう考えると何だかさっきまで恨みがましい視線を向けてたのが申し訳なく、

「……今日は君に譲るけど、負ける気はないからな」

すれ違う直前、なのはに聞こえないような小声で宣戦布告してきやがった！！？

つまりあれか……気遣ってたのは僕じゃなくてなのはの方で、今回は僕が活躍したから仕方ないって事で……。

じゃあさっきの空気が読めなかったんじゃない？読んで上で！？
クソ……なら。

「渡す気は、無いからな」

言いつつなのは抱きしめると共に、クロノにしか見えない位置で口元を釣り上げる。

「……せいぜい愛想を尽かされないようにしておけ」

苛立ち交じりに溜め息を漏らし、クロノがこの場を去るのを見送った。

「りゅ、龍也君。ちょっと恥ずかしいんだけど。それとさっきの会話ってどんな意図が」

「……何でも無い」

そう、何でも無いんだ。僕がこれから、なのはの傍に居続ける限りは。

「帰ろう、なのは」

S i d e - o u t

全てが失われた場所。枯れ果てた茨さえ塵と消えた庭園の中央に、魔女は両膝を着いて俯いている。

「終わったわ……もう、何もかも」

その言葉に、どれだけの悔恨が含まれているのか、それをこの場に居る者は理解できない。ただ一つ判る事。それは魔女の追い求めた幻想ねがいが、この時を以て砕けたと言うだけ。けれど。

「そうね。確かに貴女の幻想ねがいは崩れちゃったけど、娘を助けたい気持ちが残っていたなら、貴女はまだ母親よ？」

言って、宮本千草は手を差し伸べる。

「まだ間に合う。きっと何度でもやり直せる」

想い出は優しく、つい甘えたくなるけれど、それでも戻らない時だから。

その刹那を愛しているのなら。

「作って行きましょう？ 新しい想い出を」

差し出した一つの手。女性にしては大きな千草の手の横で、もう一つの手が差し出される。

「母さん……」

「フエイト……」

何を言えば良いのか、お互いが悩みながら、結局黙って差し出された手を掴む事しか出来なかった。

けれど、それで充分。プレシア・テストロッサは、フエイト・テ

スタロツサを娘と認めた。

その事実があるのなら。それだけでフェイトは救われたのだ。そして

「ありがとう、フェイト。私の二人目の娘、アリシアの妹……。

貴女は人形なんかじゃない。悩んで傷付いて、そして男の子を好きになって……すぐに私の手を離して大きくなっていくんでしょね」

その言葉に、どれ程の想いが集っていたのだろうか？

もうここに魔女は居ない。この庭園に居るのは、かつての暖かな母親なのだから。

「そんな事無い。わたしは、母さんの手を離したりしない」

「嬉しいわ。……京谷、私が言える事ではないけど、フェイトを泣かせちゃ駄目よ」

「ああ……判ってる。誓ったからな、護って見せるって」

プレシアの笑顔に戸惑いながらも、はにかんだ笑みを見せて京谷も手を差し出す。

きつとここから変えていける。何もかもが変わっていく。

これは本来の物語ではない。目指す場所はハッピーエンド、誰もが望む結末こそ、この物語には相応しい。

なのに……。

「なら、お別れをしなくちゃね。フェイトには、こんなに沢山の人が付いてるんだから」

どうして、そんな事を言うのだろう？

「待ちなさい！ 貴女、何を!?」

「気付いているでしょう？ 次元犯罪は重罪。数百年の幽閉か、下手をすれば死刑は確定」

「まさか……母さん!?」

何が言いたいのかを気付いたのだろう。フェイトがプレシアの元に駆け寄ろうとするとするも、電撃によって弾かれる。

「ごめんなさい……結局傷付けてばかりだったわね、フェイト。

けどこれで終わり。原因も責任も全て私で、死人に口は無いのだから全て改竄すれば良い……といっても、ガルフの人たちと手を組んだ事以外は私の責任なのだけど」

自嘲気味な笑み。末期の言葉としてはこれ以上ない儂さを見せる母親の足元を中心に、庭園に亀裂が奔っていく。

「さよなら……愛しい私の娘。本当は、最後までいい」

この手で抱いてあげたかったと、そう言い残してプレシアは虚数空間に堕ちて行く。

打つ手が無い。宮本千草は防御一辺倒の能力ではあるし、京谷も恭介も能力こそあれど虚数空間に飛び込めば使用できなくなるのではと、フェイトが引きとめる。

絶望が満ちる。もはや助からないのかと思われたその時……。

「抱きとめたい者が見つかったなら、最後まで抱いている」

言葉と共に手が伸びる。雷をものともせず、紫の甲冑に包まれた騎士は、いまプレシアの手を取った。

「貴方……」

「さよならだ……プレシア。幻想とはいえ、君と見れた夢は楽しかった」

そう言っつて、プレシアを引き上げると共にフェイト達へと向かって投げる。

多少強引ではあったが、これ以外に方法は無かった。何故なら……。

「死人に口なし、か……確かにその通りだ。魔女を誑かした悪の騎士は、闇に吞まれて消えて行くのが相応しい」

微笑みを浮かべ、グラフィールアルトレイは落ちて行く。

最後に見たその姿は、正しく魔女を護る高潔な騎士の姿だった。

「グラフィール……」

「あのバカ野郎……」

悪態を付く京谷を責める者は誰もいない。少なくともこの場に居る全員が、やるせない気持ちで埋まっていた。

問答無用のハッピーエンド。ただそれだけを目指していたのに。

……どうして、目の前で消えてしまうのか。

「力を貰って……何でも出来る気がしてたのに」

「結局、どこまで行っても人間は人間、か……」

その手から零れてしまうもの、予期せず無くしてしまうもの。それらはきつと突然で、どんな力を持っていても抗えない事もある。けれど。

「行こう。ここで誰かが欠けたら、死んだあいつが本当の莫迦になる」

恭介の言葉に一同が頷く。遣る瀬無い気持ちで埋まりながら、全員がこの場を後にしようとし、

「あ……」

ぐらりと、プレシアの身体が崩れる。決して先程の様な自殺ではない。

ただ彼女を蝕んできた病が、ここに来て事態を悪化させたに過ぎない。

全員に走る緊張、またか、また失うのかと全員が手を伸ばそうとし。

「あぶねえな……周りを見るよ」

唐突に、プレシアの身体が地を離れる。

彼女の手を掴む少年の背には機械の翼。まるで天使のようで、けれど明らかに人工の物であるその存在に、誰もが目を奪われる。

「興輝!？」

「嘘!？」

一体今までどこに居たのかとか、月村すずかはどうしたのかといった声が飛び交うも、興輝は落ち付けと言わんばかりに溜め息を付

く。

「貴方、どうして……」

それはプレシアにとっても予想外だったのだろう。見ず知らずの人間が、このタイミングで自分を助けるなど出来過ぎとしか言いようがない。

「BAD ENDは嫌いなんだよ。」

……それに、身内が死んだり死なせたりするようなのは俺だけで充分だ」

そう言っただけで興輝は安全な床にプレシアを下ろす。

「槇野には止められたが、嫌な予感があったからな……生存者探しのついでだよ。」

さっさと帰ろうぜ。つうか、出口が無くなったから槇野なしじゃどの道帰れねえんだ」

先導するように興輝は進む。その背は確かに頼りがいがあったのだから、誰もが首を傾げていた。

「ヒソヒソ、なあ、タイミングが良すぎねえか？」

「ヒソヒソ、大方、俺達が活躍の場を取ったのが気に入らなかったんだろ？」

「……聞こえてるぞ、手前にヒソヒソって付いたら聞こえないと思っただけじゃねえだろうな？」

間の抜けた笑いが辺りに響く。全てを救えたわけでは無かったけれど、自分達がやってきた事には意味があったのだと、そう誰もが

感じながら、崩れ落ちる庭園を後にした。

「結局……管理局の武装局員は全滅。しかもそれをやったのは敵性勢力ではなく現地での協力者だというのだから笑えないな」

「ガルフも事実上は壊滅……ベリアエル・バトオなんていう大物が現れた事も含めて、今回の事件の特殊性が伺えるわね」

エイミイの持って来た砂糖入りの緑茶を口に含ませながら、リンデイ・ハラオウンはクロノと共に今回の事件のレポートに目を通す。『G事件』。正式名ガルフ事件として今回の事件は持ち上げられ、プレシアやフェイトは彼らに協力を強要させられた、という内容である。

「……真実はその殆どが闇の中、か」

「……仕方ないわ。今回の件は謎が多すぎる。貴方や龍也君が相手をした仮面の男も含め、煮え切らない事が多すぎるもの」

そう。問題はまだ残っている。

ベリアエル・バトオと仮面の男との関係性。そして、この二人は本当に死んだのか？

一体何の目的で現れたのか、はっきり言って不明瞭な点が多すぎる。

「プレシアやガルフの共犯……だったら判りやすかったんだけどね」

リンデイの言う事も尤もだろう。目的が明確であれば対策も出来

る所だが、前触れ無く現れて問題だけを起こして行く、などと言うのはあまりにも性質が悪い。

「其処については考えても憶測の域は出ません。

むしろ、今回の件で称賛すべきは天宮恭介と氷上京谷の二名、ならびに協力者一同でしょう」

「管理局が何年も追ってきた……いえ、実質災害か何かの様に放置していた存在を打倒したのだから当然と言えばそうね。

生死が確定していないから賞金は出せないけど、あの二人が管理局に囑託魔導師として協力してくれば言う事はないわ」

今回の事件で最も重要なのはそこだ。あの伝説のエースを打倒した存在。

それだけでも嫌と言うほど注目は集まるし、ただでさえ人員に難のある管理局からすれば喉から手が出るほど欲しい逸材と言える。

「実質、今回の事件でプレシア、フェイト両名が被害者と言う事で裁判にかけられることなく重要参考人扱いで書類送検。

ペナルティは管理局への従事と半年間の保護観察、上の方も下手に幽閉するより利用した方が良いと言うのは判ってるみたいね」

「どちらかと言えば、プレシア・テストロッサを意図的に法廷に出したくないのが本音の様ですが」

……吐き捨てる様に呟くクロノに、リンディも内心穏やかとは言えない面持ちになる。

そもそも今回の事件の発端はアリシア・テストロッサの死亡が原因となっているが、その原因の一端は管理局にある。

「上からの圧力と過密なスケジュール。あの研究による事故は管理局の暗部と言ったところですね」

「ええ。クロノ、私は貴方に立派な執務官……いえ、後の管理局の双肩を担う存在になって欲しいと思ってるわ。でない……」

「判っています。こんな悲劇は、何度も繰り返してはいけません。理不尽な犠牲なんて誰も望んだりしませんから」

よろしい、と。リンディは頷き、通信用のカードを手渡す。

「これは？」

「なのはさん達とはちゃんと話が出来ないうままだったでしょう？」

少し位なら、提督権限でお喋りも許します。それにフェイトさん達の事も伝えてあげないとね」

「……ありがとうございます。艦長」

「良いのよ。息子の恋路も気になるしね」

おどけた様な口調のリンディに、クロノは否定しながらも通信のためのモニタールームへと向かっていくのだった。

「もう報告は終わりか？」

「ああ。君達に關しても、以前話した通り管理局への従事活動と半年の保護觀察でほぼ決定だ。あのバトオを倒したとなれば当然だけどね」

「煽ってたって何も出ないぞ。それより、何時になるんだ？」

内心待ちきれない、と言った所なのだろう。京谷の質問に、クロノはやれやれと溜め息を零す。

「恋人想いなのは良いけど、あくまでも顔を会わせるだけで、其処まで時間は取れないぞ?」

「良いんだよ。結局事件が終わってから、バラバラになったからな。興輝と来栖は海鳴市のバカでかい屋敷に。直也は途中退場で会わず仕舞い。」

龍也達はなのはの家で居候継続で、鮫島さんは相変わらず。

千草さんも例のアパートに帰ったきりだ。ホント、忙しい事この上ないな」

あの事件が終わり、本来なら今回の協力者全員に表彰を、という形になる筈だったが、神崎龍也やプレシア、宮本千草など、負傷や病を原因に大量の治療者が出た事。

さらに今回の事件での殉死者の多さから、遺族への対応などに追われた為、結局流れ解散と言った形になってしまったのだ。

「仕方ない、で片付けるには問題が山積みだけどね。ま、こっちはこっちで何とかするさ」

「助かる。お前が居なきゃ、フェイトは牢屋にぶち込まれてたかも知れないからな」

「護送室と言ってくれ。それに君達に逃げる意思はないし、逃げようと思えばいつでも逃げられる。」

閉じ込めるだけ無駄だし、一応功労者だからね。それ位はするさ」

だからといって終始いちゃつくのは勘弁して欲しいが、と釘を刺す。

「それがさー……プレシアが厳しいんだよ。娘と近づきすぎるとか節度を持てとか。」

フェイト第一なのは良いけど親馬鹿すぎなんだよ。本人の前じゃ何話していいか判らなそうに借りてきた猫状態の癖に。」

ホントはもつところ……お前なら判るだろ？」
「へえ？ もつところ……何かしら？」

瞬間、京谷に電流が奔る。主に物理的な意味で。

「……もう体調は良いのか？」

「ええ。恭介さんが持って来てくれた薬、すごいわね。
エリクサーって名前に恥じない逸品だわ。今度解析させて貰おう
と思ってるの。さすがに本物のエリクサーなんてある筈ないんだけ
ど」

それは本物のエリクサーです、とは口が裂けても言えない京谷で
あった。

「そうか……それじゃあ、俺はこれで」

「待ちなさい。まだ話は終わっていませんよ」

首根っこ掴まれながらずるずると引き摺られる最強の能力者。
これでバトオを倒したと言っのだから信じがたい。

「まあ……あれだ。頑張ってくれ」

「ちよ、クロノ！？ 待て、俺を助ける

……！」

そんなやり取りをほのぼのとした眼で見送りながら、クロノは通
信を行う為にモニタールームへと移動するのだった。

「……ふうん。つまりあんたは、正義感に駆られた訳じゃ無くてキスされて嬉しかったから頑張ったって事」

「すみませんアルフさん！ 何故に俺は冷たい床で拘束魔法をかけられながら正座させられているのでしょうか！？」

アースラ内の一角。誰もいないモニタールームで、椅子に座りながら腕と脚を組んで汚物を見る様な眼でアルフは恭介を見ていた。

“ああ……でも何故かこの冷たい目で見られるのが堪らなく……いや、待つんだ俺！

新しい世界への扉を開くのはちよつと不味い！ こんなんじゃ次に会った時に思いつきり幻滅！？”

「グボハ……！！？」

「いま……何を考えてたんだい？」

「すみませんごめんなさい何で怒ってんのか判ないけど取り敢えず土下座で許して」

「……プライド無いのかい、あんた」

そんなもん生まれてから二秒でドブに捨てましたが何か？ と言いたい所だったが、ソレを言うとは蹴られそうなので取り敢えず自重する恭介であった。

「それにしても……幾らフェイトの頼みとはいえ、何だってあの女に薬なんか渡したんだい？」

「いや……やっぱ年上のお姉さんの喜ぶ顔と言うのは極上でして……ギヤアアアアアアアアアア！？」

「ざけんじゃないよ、あんな胸の垂れ下がりがけたババアの何が良いんだい！？」

そんなに年増が好きか！？ あたしより年増の方が魅力的なのがこの野郎……！」

“ 嗚呼…… やめて蹴らないで！ 新しい世界が、世界の扉が目の前に……！！ ”

「す、すみません！ けどプレシアさんはまだ垂れ下がって無いっすよ？」

あの露出度の高い服とかマジで……ごめんなさいすみません流石にこれ以上は死んじやいます……！」

「はあ……何だか怒るのが馬鹿らしくなってきたよ」

ため息と共に肩を落とす。流石にこれ以上は不毛だと思ったのだろう。

馬鹿馬鹿しいとばかりに退出しようとし。

「あ。でもアルフも凄い魅力的だと思うぞ？」

その一言で、ぴたりと足を止めるのだった。

「あたし『も』？」

「いや、違う！ 変な意味じゃなくて野性的な魅力と言うか、いやこれも待て、誉めてるようで犬だって言ってるようなもんだし、取り敢えず待て……！」

ぐい、と思い切り胸倉を掴まれる。死ぬか、ここで死ぬか俺！？ と内心チビリそうになるのを必死に堪える。

「それで……その、あたしはアンタから見てホントに魅力的なのかい？」

「え？ いや……はい。魅力的ですし、充分好みですけど？」

年上系だから、と言つのは言わないでおいた。

「ふうん……そっか。じゃあ、目え閉じな！」

溢れる魔力！ 振り上げられる握り拳！！

やはりこの状況下で逃げ延びるのは不可能だったのだと、死を覚悟した囚人のようにゆっくりと目を閉じ

左の頬に、柔らかい感触が伝わった。

「……こつち側は、まだなんだろ？」

「え……？」

二の句を告げる暇も無くアルフはモニタールームから退出する。呆然としながらも、一人残された恭介は余韻の残る頬に手を当て、前に千草から言われた事を思い出す。

『アルフには内緒よ？ あの子、貴方に気があるみたいだから』

“つ……つまりこれがラブコメ王道のボーイミーツーガール!?”

来たのか!? 遂にモテ期がこの俺にも!!!?”

「あ、恭介こんな所に居たのか？ アースラの女性職員一同からの伝言なんだけど……」

「おうクロノ、何でも来い！ いまの俺は最高にハイって奴だ!! 神様さえぶっ飛ばせるZE」

“来た！ まさか管理局の女性陣も俺を……”

「殴られる時の声が気持ち悪い。発言が気持ち悪い。ついでに視線が気持ち悪い。」

後やっぱり声が気持ち悪い。

と、散々な言われようなんだが……」

“……すみませんごめんなさい調子に乗ってました皆さんと同じ地面を歩いてすみません”

天宮恭介十九歳、この時点で自分の人生と行動を深く考え直すのだった。

「う……ん？」

まどろみの中、何処かまだ夢見心地に近かった高町なのはの意識を、携帯の着信音が呼び覚ます。

件名は『时空管理局』……何と言うか、これ以上ない程に判り易いが、今の彼女にとって重要なのは何故自分の携帯の番号を知っているのかというよりも、何故電話がかかったのが重要なだろう。跳ね起きる様にベッドから身を起こし、すぐさま通話ボタンを押す。

「あ、はい！なのはです！」

『夜分に済まない。フェイト達の事で、幾つか伝えたい事があったんだが、ひよっとしてもう寝るところだったかな？』

「ううん。気にしないで！それより、フェイトちゃん達は……」

『その件に関しては心配ない。フェイト達は後日、本局に移動。事

情聴取を受けるが重い罪にはならない。それと、ここからが重要な
んだがフェイト達が君に会いたいそうなんだ。

勿論、今回協力してくれた人たちも同様に会いに行ければいいん
だが、流石にそこまでの時間は取れないからね。

だから彼らには、また別の機会を設けるとして、今は君とフェイ
トが話をする機会を設けようと思っている』

「本当!？」

なのはにとつてそれは間違いなく吉報と言えるだろう。今回協力
してくれた者に会えないのは残念だが、これからの事を考えれば早
いうちにフェイトに会っておきたかったのは紛れもない本心なのだ
から。

『ああ。じゃあ明日の十三時、海鳴臨海公園で。それと……』
「?」

僅かな間、それに対しなのはが疑問を抱くより先に、咳くような
声量で声が届く。

『今回の件で、君には色々と教えられたし、迷惑もかけた。

その……ありがとう』

「うん!」

頷きと共に通話を切り、一階へと降りる。

本来ならもう寝る時間だが、今ならまだ起きている筈だ。

「龍也君、さつきクロノ君から電話がかかってきたの! それでね、
明日フェイトちゃん達に会えるんだって!」

「そっか……ようやく一段落、かな? 桃子さん達にも、」

「あら? ようやく解決したのね。あの青い宝石の事」

話を聞きつけてか、水仕事を終えた桃子や夜間トレーニングを終えた高町家一同が戻ってきた。

と、同時再び携帯から着信音が流れる。

「メール？」

画面を開いて中を覗き込む。差出人は『時空管理局』ではなく、『クロノ・ハラオウン』となっており、添付けデータとして音楽が送られてきただけだった。

「なのは、聴いてみたら？」

姉である美由希の言葉に頷きながら、再生ボタンを押す。携帯独特の着信メロディではあったが、その音は穏やかで、何処か物憂げなものだった。

「ピアノ協奏曲第1番第2楽章……シヨパンね」

「お母さん、知ってるの？」

曲に詳しいのはこの中で母である桃子だけだったのだろう。全員注目が集まる中、桃子は言うべきかどうか悩み、口を開く。

「それはね、シヨパンが初恋の人に贈った曲なのよ……だからつまり、そういう意図があるのかなって」

「ええっ!？」

桃子の言葉に驚きを禁じ得なかったのだろう。

耳まで赤くなるのはを余所に、神崎龍也は内心苛立ちが募っていた。

「憎い演出だな……」

「ああ、そう言えば龍也君はこの間からなのはと随分親しくなっていたな」

士郎の言葉にびくりと龍也となのはが震える。

「ひょっとして……三角関係？」

「美由希、そこはあまり訊いてやるな。なのはが困ってるぞ」

何とも言えない空気の中、夜が更けて行く。

ただ、姉である美由希が九歳の妹に恋愛で先を越された事に対する悲壮感を置き去りにしたままで。

「うう……結局あんまり寝られなかった」

「何だかんだで質問攻めだったもんね、昨日」

なのはの言葉に、龍也が相槌を打つようにしながら項垂れる。

確かに気まずい雰囲気ではあったものの、そこは勝手知ったる家族の仲。まして娘妹に居候が告白して、しかも三角関係？ のような形になればそれは興味も湧くと言つものである。

「来たようだね……って、どうした？ 寝不足か？」

「お前のメールの所為でな」

「まさか……見たのか？」

「僕だけじゃなくて高町家一同が、だ。お陰で根掘り葉掘り聞かれ

たよ。

「なのなんかあんまり寝れなかったって……」
「りゅ、龍也君！ わたしは気にしてないから」

喧嘩腰になりかけた龍也を慌てて止める。

流石にせつかくの話の席に喧嘩は拙いと思つたのだろう。一先ず矛を収める気になったものの、未だ視線はクロノを赦していない。

「すまない……君を困惑させてしまったようだ。」

「けど、これだけは知って欲しい。僕は冗談や遊びであんな事をした訳じゃない」

「え……えっと」

「いや、無理に応えなくて良い。余り時間も無いしね。」

僕達は向こうに居るから、二人で話すと良い」

「いや、無理に応えなくて良い。余り時間も無いしね。」

僕達は向こうに居るから、二人で話すと良い」

女。
そう言つて、クロノ達は席を外す。公園の橋に残るのは二人の少女。

彼女たちを見ながら、神崎龍也とクロノ・ハラオウンはベンチに腰掛ける。

「それで、お前は本気なんだな」

「ああ、君には先を越されたようだが、お影で胸のわだかまりの正体に気付いたよ。」

僕は彼女……なのはに惹かれて、いやきつと魅かれていた。
情けない話だ。追い越されてからでしか、気持ちに確証が持てないなんて」

おそらくそれは、ライバルという形が明確に現れる事では気付かなかったのだろう。

これは本来の道筋ではない。クロノ・ハラウンが愛するのはエイミだった筈であり、その流れは神崎龍也という存在によって大きく変わってしまったのだ。

けれど

「後悔でもしてるのか？ 先に告白された相手を口説くのは気が引けるって？」

「まさか」

後悔があるならあんな真似は最初からすまい。クロノにとってその想いは真実であり、だからこそ真面目で気恥ずかしがり屋な彼らしい告白だったと言える。

「渡す気はない……そう君は言ったな」

「……せいぜい愛想を尽かされないようにしておけ、と言われたな」

互いに笑みが零れる。ああ、これはきつと同じ事を考えているなとお互いが思いながら、然しお互いを認めようとはしなかった。現に。

「その言葉、そのまま返すよ」

ここまで同じ思考でありながら、結局は争う事になるのだから。

「若えな」

「ま、俺たちからすりゃ関係ないけどな」

そんな青春真っ盛りなやり取りを横目に京谷とマクスはココアな
んぞ飲みながら一息ついていた。

「それで？ テメエはこれからどうすんだ？」

「あ……取り敢えず訊かれた事話して、その後は地獄の十五町目
ぐらい闊歩する予定。」

つか、それ位しねえとフェイトまで巻き込まれっからな。

あいつは出来る限りここから先の人生楽しんで貰いたいし」

「そいつは殊勝な心がけた。惚れた女を護りたいなら当然だがな」

そりやどうも、とベンチを立ち上がり、空き缶をゴミ箱へ放り込
む。

橋の上、それぞれの少年が愛する少女が、涙と共に抱き合ってい
る。

交換されるお互いのリボン。髪を下ろした彼女達は、普段とはま
た違った美しさがある。

「じゃ、そろそろ行くかな、待たせるのも悪い」

「京谷！」

呼び止めるその声は、これまでの中で一番大きく、そしてどこか
愁いを持っていた。

「帰れよ。次は」
「次も俺が勝つ」

それでこそだ、とお互いが笑い、拳を打ちつけ合う。
きつとまた会える。この物語は、まだ続いていくのだから。

そして、別れの時。抱き合う二人の少女の元に、少女を愛した少年が駆け付ける。

最後、光に包まれるフェイトに、なのはは笑顔で手を振った。

「また……また会おうね！」
「うん……また会おう。会いたくなったら、名前を呼んで。
そのときはわたしもなのはの名前を呼ぶから」

別れは辛く、その一日一日は想いが募っていく。
けれど、だからこそ……離れているからこそ、お互いが大切なのだと気づけるのだろう。

その哀しみこそ、後の幸福な日々の証となって行くのだから。
だから、お互いが笑顔で手を振るのだ。この別れを、大切な想い出にする為に。

「大丈夫か、フェイト」

「うん。京谷が居るから」

その寂しげな横顔は、確かに涙に濡れていて、けれど笑顔のまま
で。

そんなフェイトの肩を、京谷はそっと抱きとめる。

「無理すんな……俺じゃ、高町なのは代わりになれないのは判
てる」

友の隙間を、恋人が埋める事は出来ない。だってそれは間違いな
く別物で、高町なのは明けた穴は、高町なのはでしか埋まらない
から。

「だから、良いんだ。泣くのを我慢するのも、嘘の笑顔を作るのも、
自分を誤魔化す事も、もうしなくて良いんだ」

護るとは、愛するとはそういう事。空いた穴を埋められないなら、
その横で支える事こそ、護ると誓った京谷の務めだ。

「ありがとう、京谷」

願わくば、二人の道に幸あらん事を。これから続く、障害を乗り
越えられるように。

誰も居なくなつた公園。広がり続ける蒼穹の空と、春の息吹を運
ぶ潮風に髪をなびかせて、高町なのはは淡く微笑む。

「なのは」
「うん！」

かけられた声。あの戦いで自分を好きだと言った少年に、彼女はくるりと向き直る。

繋がった手は固く。決して解ける事が無い様に。恋や愛を知るにはまだ幼い少女と、そんな少女の手を取る少年。

たとえこれから先、どんな困難があっても、この手を離さない様に。

そう願いながら、二人はこの場を後にした。

おや？ それで物語が終わると思ったのかね？
実におめでたい。そして愛らしい。ああ、まるで溶けかけたお菓
子の家だ。

実に甘美で……そして、

なんと砕きがいのある事か！

始まりは終わった。故、ここからは時間を少し巻き戻そう。
なに、物語は変わらんよ。ただ物語を観覧する諸君らに語られな
かった事実を伝えたいだけだ。

そう例えば彼ら。

「オイ……くたばってんなら置いてくぜ」

「黙れ……それより暁葉は」

「眼はやられたが、線で捉えられるから問題ないよ」

血溜まりに沈んだ三名の幼子は、如何なる奇跡かあの魔法使いを
相手取り、生還を果たしていた。

とはいえ……。

「クソが……血流をベクトル操作してから代謝を促進させなきゃ、
泥の棺桶に直行だ。そっちは」

「私は腐っても守護者なので……首が？がれようが時間があれば
治る。とはいえ、まだ完全ではないが」

「俺も眼が見えないだけだからな。他の傷はそこまで深くない」

それぞれの現状を確認し合い、一先ずは動力室へと向かう。

「シエリス。テメエはまず動力を回復させる。転送用ポートの一つは有る筈だ。」

強引にこじ開けて無人世界にでも脱出すンぞ」

「顎で使ってくれるな。何なら暁葉だけ連れて置いて行っても良いのだぞ？」

「アホが。あのクソ野郎ブツ殺すのに戦力がイるだろう。」

「テメエがやられツぱなしで終わるンぞ、天地がひっくり返ツても有り得ねエよ。」

「そうだろう暁葉」

「ああ……不本意だがまだ付き合ってやるよ。どの道管理局連中からは逃げる必要があるからな」

それで良いと、ここから先こそ俺達の舞台だと言う様に水無月珠樹は手を広げる。

「さアて……課題も見つかつた事だし、まずは手頃な原住生物から実験だな」

その笑みは悪魔の様に。広がる手は抱きとめた者を粉々にしたがるように。

悪辣に、愉快に。背徳的な笑みを浮かばせて、水無月珠樹は呟く。

「リベンジ復讐だ、クソ野郎」

これより先、彼らが表舞台上上がるのは、第二部の終焉からである。

時空管理局本部。将官にのみ与えられる特別室の一室で、男は手渡された書類に目を通す。

「成程、私が負傷で現場を離れた時にそんな事が……君には迷惑をかけましたね、リンディ提督」

「いえ、中将の復帰は大変喜ばしく思っています。あのバトオと相見え、生還したばかりか、これ程までに早い復帰は現場で指揮・行動する局員の励みになるでしょう」

リンディの弁に世辞は無い。それどころか彼女は目の前の存在に絶対の信頼を置いている。

だからこそ、本来顎で使える局員では無く自ら復帰した中将に書類を送ったのだ。

「しかし、まさか中将と同名の次元犯罪者とは……この仮面の男、早急に素性を確認する必要があるそうですね」

「その必要はないでしょう。バトオならいざ知らず、あの現場から生きて戻れるとは思えません。それより、時の庭園は本当に倒壊したのですか？」

「……申し訳ありません。次元震の余波の為早急に現場を離れる必要があり、戻った時には影も形も」

自らの失態だと恥じるリンディ。そんな彼女を労う様にヴェノムは椅子から立ち上がる。

「いえ。君は部下の安全を最優先としたのです。その行為は英雄的

だ。

君の様な存在こそ、時空管理局の鏡と言えるでしょう」

「恐縮です。それでは、私はこれで。ヴェノム中将」

静かな足取りで退出するリンディを見送り、再び一人となった特別室で紛れもないG事件の主犯の一人にしてマクス・トレンジアの仇敵、ヴェノムは口元を歪ませながらポケットから青い宝石を取りだす。

「ふふ……信頼と憧憬。人の目を欺くにはこれ以上ない物ですね」

全二十一個。その全てのジュエルシードは書類の上ではこの世界から姿を消した。

その全てが、最悪と言っていていい存在に流れた事を誰も知らないまま。

「さあ、せいぜい楽しく狂おしく踊って下さい。『紡ぎ手』の皆さん」

そして。全てが終わった場所。虚数空間へと身を投げた魔女の騎士は、全ての真実をその目で見据える。

「まさか……そんな、こんな事が、こんな物が真実なのか!? なら……」

自分たちのしてきた事は、彼らがこれからする事は一体何なのか

と、狂ったようにグラフィィー・アルトレイは激昂し、

「故に全てを壊すのだ。貴公にもその一助を担って貰う。誇り高き魔女の騎士、グラフィィー・アルトレイ」

「そうか……貴様の目的は、」

声が途切れる。血飛沫を上げながらグラフィィーの首が宙を舞う。

「真実を語るには早い。故に、貴公は其処で見ているが良からう。

貴公には資格がある。本来なら魔女にも来て貰いたかったが、貴公が死ぬ事でレールが切り替わった以上欲はかけんのでな」

そして、ベリアエル・バトオは剣を収めると共に踵を返す。

「せいぜい楽しく狂おしく踊るが良い。『紡ぎ手』の諸君」

終末は今はずいぶん遠く、しかし確実に訪れるのだから。

物語を紡ぐもの 第一部 了。

c・m・「ついに序章の幕は下りた！ 第27話にして無印編堂々の完結ですー！」

レインシア「エピローグ……そこはかたなく甘い恋物語回 三角な関係も程良ければスパイスに。

……と思ったら最後の最後で悪役が全部持って行きましたねこの野郎」

c・m・「甘い蜜の後に苦いお茶。それはそれでお腹いっぱいになりそうよね」

レインシア「なりません……ていうか絶対毒入りですよそのお茶、カップが溶けてます。

こつ言っでは何ですけど、色々台無しです。ていうか水玉さんのチーム思いつきり敵ポジじゃないですか」

c・m・「エピローグって言えば後日談だし、やっぱり書かなきゃうそでしょ」

レインシア「なら……何で私の出番が無いんですか！？ 最後の最後なんかマクスと京谷じゃないですか！？」

ようやく前回活躍できると思ったら避難要因で、今回なんか私の名前が一文字も有りませんー！」

c・m・「だからここに登場してるんじゃない。有る意味凄く美味

しいわよ」

レインシア「要りません！ どうせ下らない談話しかないんですからA'sから活躍予定の眼鏡の骨董屋店主と直也さんが薔薇の花でも咲かせてれば良いんです！！」

c.m.「……けど、直也君はA'sからウザキャラになるわよ。思わず死ねと叫びたくなるぐらいの」

レインシア「それがどうしたっていうんですか！？

第一部位しか活躍の見込みの無い私が既に空気と化してるんですよ！？

むしろウザくなる分登場も多くなるじゃないですか！

「！

c.m.「……確かに、そうね」

レインシア「もう良いです！ 御剣×直也でもマクス×京谷でも好きに書いて下さい！」

c.m.「あくまでBLはネタだけなんだけど……まあいいわ。

さて、ここからは読者様のお礼に移らせて頂きます。

久住祐治さま、Kyoさま、神崎はやてさま、Hagalia
zさま。「」感想を頂き、ありがとうございました」

レインシア「Hagaliazさまに関しましては、ザ・ワールドに関する報告ありがとうございます」

c.m.「一応ジョジョは第三部まで読破していたのですが、何分学生の頃から呼んでいなかったのが仇になってしまった様です。

今後はこう言った事が無い様、気を付けて行きたいと思っています
「います」

レインシア「それではまた次回、お会いしましょう!!」

c・m・「……ところでジョジョでは第二部のシュトロハイムが好きな私は異端なのだろうか？」

レインシア「……随分と変わった男性の趣味ですね」

番外編 愛しの魔王さま

さて、皆さんどうもこんにちは、神崎龍也です。

G事件も終わり、なのはとの関係も良好……なのですが。

「そついえばさ、なのは、最近龍也と仲良いよね」

キタ！ 流石アリサさん、なのはの事をよく判ってらっしやる！
どうしよう！？ ここは告白した事を暴露してライバルが増える
のを……。

「そ、それはそうだよ！ だって龍也君は大切なお友達だもん！！」

………そつか、そうだよね。所詮僕の片
思いだもんね。

一体何を良い気になっていたのか、こっちが告白したつきりで
切返事も貰ってないのに。

ふ、ふふふ。いいさ、みんな僕を笑えばいいさ。非モテな一人相
撲の道化っぷりを指を指して笑いやがれこの野郎！！

か、勘違いしないでよね！ 眼から流れてるのはただの汗なんだ
からー！！

「ちょっと、龍也気持ち悪いわよ」

……やめて！ もう僕のライフポイントはゼロよ！

「龍也君、ひよっとして何処が悪いの？」

今度こそ、僕は今日一日生死の境を彷徨った（精神的な意味で）。

……あれから数日が経った。幸いにも恋のライバルになる様な奴は現れず、高町家の皆さんとトレーニングに参加する事で好感度を家族単位で上げているんだけど、なんか違う。

そう。例えるならゲームで言うところの幼馴染ポジション！

しかしこの配役は想い人の近くに居られる半面、学校のアイドルとか落下型ヒロインによつて横から掠め取られる確率が大なのである。

早い話、距離が近いのに手の届かないポジションなのだ。

「はあ……」

思わずため息が零れる。恋の悩みなんて大抵は相談してもからかわれるだけだし、なのはみみたいな御淑やかで芯の通った女性なんてそうは……。

「あれ？ どうしたんですか？ 龍也さん」

……そうだ！ 何故気付かなかったんだよ、御淑やかで芯の通った女性なら居るじゃないか！

確かに主人公属性が無くて空気っぷりを発揮してるけど、彼女にならー！！

「……今、そこはかたく悪意のある心象を感じ取ったのですが？」
「いえ、気のせいです。気のせいですからデバイスを向けないで下

さいお願いします!!」

そうして僕はズボンに黄色い染みが出来るのを必死に耐えながら事情を説明する。

「成程……そういう事でしたか。気持は判りますよ。

私もマクスの鈍感さには散々悩んでいますから。けど、一応訊きたいんですけどまだ答えは返って無いんですよね？」

下手に行動に出なくても今の関係が続いているなら」

「けど……それでも僕はなのはが好きなんです。

抑えるべきなのは判ってます……けど!!」

「……そうですか。では、古風になってしまいますが、こんなのはどうでしょう?」

そうして僕は、レインシアさんに言われた事を決行する為に買い物に出かけるのだった。

そうして僕は、目的の物を買ってきた。

とはいえ高町家では見られてしまう可能性も捨てきれない為、人の居ない時間帯を見計らって図書館を訪れた。

何処かで会った事のある様な眼鏡の男性が『アーサー王伝説』と彼女の為の手料理』の本を読んでいたが気にしないでおく。

あと、何故か直也さんが『家族で楽しいお料理講座』を読んでいたのも見なかった事にする。

さて、今机の上には大量の詩集と可愛らしい便箋。そしてページ

ユと緑の枠に彩られた小さな紙がある。

もう判って頂けただろう。想いを伝える至高の一手！ ラブレタ

ー！

今時は携帯だろ？ ラブメール流行ってんじゃん、などと言ってくれるんじゃない？

何時になろうと貰って嬉しい物って言うのは有るんだよ！ 形として残っていて何度も思わず読み返したくなるもんなんだよ！

……僕は貰った事無いから判ないけどね！！

あれ？ また眼から汗が出てきたよ？

まあいい。今日の僕は一味違う事を見せてやる！！

さて、第一印象が肝心だ。第一文は印象に残るようにしないと。よし！

『Dear 愛しの魔王様』

あれ？ おかしいな、どうしてこうなった。

とにかく、修正は後にして続きを……。

『はじめて貴女を見た時、僕の心はアクセルシューターで撃ち抜かれた様な衝撃を受け……』

いや、いやいや、これは違うだろー！！

『それから目を追うごとに、ホーミングし続ける弾幕は避けようとするほど迫ってきて、僕の心はバインドで拘束されるような錯覚を……』

ちよつとまで……！！

『ああ……貴女のゼロ距離ディバインバスターの様な瞳が眩しい。その笑顔は正に非殺傷設定のくせしてKill them allする様なスターライトブレイカー……』

こ、これは……！？

『もう誤魔化す事はできません。眼を閉じるたび浮かぶ貴女の姿は、背後に燃え上がる灼熱の炎と凍りつかせる視線……まさに魔王！！』

何故ペンが止まらない！？

『君のその杖で、情け容赦ない外道な一撃で僕は骨の髄まで貴女への隷属という名の愛を誓ったのです！』

ねえよ！！ どんな愛だそれは！？

『魔王様、貴女の砲撃^{ファイ}を受ける準備は二十四時間何時でもウェルカムです！

君の砲撃^{キモテ}を受け取る事、それが僕の貴女に対する恐怖^{アイ}なのだから』

ふざけんな

！！！！！！

なんじゃこりゃあ！？ ノリで書いたってこんな出来ねえよ、つうか死ぬわ！！

幾ら墮天使お墨付きのチート能力だったって限度があるわこの野郎！！

ともかくこんなのはボツだ。それ以前に見られても殺される……。

少なくとも彼は、この時幸せだったのだろう。無数に追尾する桜色の光弾が目の前に現れるまでは。

「何い……!!?」

「あ、マクス!! 逃げるぞ!!」

「は、何で俺が……って言ってる場合じゃねえか!!」

どういった理由かを聞くより先に逃げる必要があるか感じたのだろう。取り敢えず迫る光弾から全力で離れるべく元来た道を逆方向に疾走する。

「おい!? 何であの嬢ちゃんあんなに黒くなってんだ!?!」

「それには長くて深い事情があるんだよ! マクスこそどうしたんだ!?!」

「俺は翠屋を手伝ってたんだよ!! クソ、何としてもこのシュークリームを姫さんに届けなきゃならねえって言うのに!!」

あ。死亡フラグ踏んだ。

「さよならマクス。お前は良い奴だった。そのシュークリームは責任をもって届けるよ」

「テメエ何言つて……馬鹿な!?! 何故俺の方に光弾が……ギャアアアアアアアアアアアア!!?!」

マクス……君の犠牲は無駄にはしないからな。

さて、ともかくこれで弾幕の永久追尾は避けられ、

「逃がさないよ?」

バインドだと!?!

「魔王様、貴女の砲撃アイを受ける準備は二十四時間何時でもウエルカムです！」

君の砲撃キモテを受け取る事、それが僕の貴女に対する恐怖アイなのだから
「！」

あんな事、書くんじゃない……。

この日。

今度こそ、僕は今日一日生死の境を彷徨った（肉体的な意味で）。

一方、アースラ艦内。

「あれ？ クロノ君何してるの？」

「やはり、魔王という単語は外さないとな」

追い抜かれたが故に間違いに気付く。意外とクロノのポジションが一番おいしいと言う事に、果たして誰が気付くのか？

番外編 愛しの魔王さま（後書き）

c・m・「色んな意味でごめんなさい」

レインシア「番外編……海鳴市は今日も地獄です」

c・m・「好感度を上げようと下手にイベントを起こせばこうなるという良い見本。」

選択肢選びは慎重にしましょう」

レインシア「地獄以外の何物でもないですね」

c・m・「今回はあんまり話す事も無いから、読者様のお礼に移らせて貰うわね。」

久住祐治さま、Kyoさま、神崎はやてさま。ご感想を頂き、ありがとうございます」

レインシア「第一部終了のおまけエピソードが終わり、次回は第一部のキャラ紹介に移りたいと思います」

c・m・「1割の真面目と9割のおふざけキャラ紹介。」

ぶっちゃんけ、期待しなくて良いZE」

レインシア「それではまた次回、お会いしましょう!」

登場人物紹介 無印編 アルフを書き忘れてたので追加（前書き）

今回は第一部に登場した主人公&作者・敵キャラ勢と原作キャラの紹介を“1割真面目と9割の馬鹿”でお届けする特別コーナーです。

なので、別に見なくても本編に影響は有りません。

また、本編の真面目な雰囲気を大事にしたい方は見ない方が良くもしません。

尚、作者さまやオリジナル敵キャラ以外の元の作品の有るキャラの設定は、各作品に飛んでみて頂ければ幸いです。

初期設定に関しては、他の作者さまから送られてきた設定をそのまま転載している為、本編とは違う可能性があります。

それでも良い方は、どうぞ〜

登場人物紹介 無印編 アルフを書き忘れてたので追加

神崎はやてチーム

かんだぎしゅうや
神崎龍也

初期設定

年齢：10

髪：黒の短髪

瞳の色：黒

服装：鋼の錬金術師のエドの赤い奴の下の黒一式に、マントのフロントロールを覚えた後のガツシュのマント。

能力：テイルズ系の剣技と金色のガツシュの術。

そして以下の装備品による能力行使。

武器：妖刀・獅王雷牙

名前：クロックアップ

作品：仮面ライダーカブト

概要：目にも留まらぬ超高速を可能にする。その速度は、降り注ぐ雨粒がゆっくりと落下していくのが見えるほど。

名前：ドラグレツダー

作品：仮面ライダー龍騎

概要：紅く、蛇タイプの龍の形をしたモンスター。カード『アドベント』の効果で召喚され、戦闘において援護を行う。

名前：アドベントカード

作品：仮面ライダー龍騎

概要：種類によって様々な効果を発揮するカード。ドラグバイザー（ドラグレッダーの頭を模った形で、左腕に装着する）にベントイン（装填し読み込ませること。そのとき、カードそれぞれの種類の音声が出る）することで発動する。

そして本編へ……

と……ここまでが神崎はやて様から送られてきた設定なのだが、オリジナル技や細かな者も含めればA4用紙20枚分になると言う事をここで愚痴っておく。

その量の多さに作者は金色のガッシュを全巻買いこみ、夜中にYoutubeで仮面ライダーシリーズを延々と見続ける事になり、挙句オリジナル技を書く為にノイローゼ気味になりながらキーボードをクラッシュしかけるのだった！！

……いや、マジで。

まあ、そんな事ばかり言っても仕方ないので、ここからは初期設定から離れて本編での説明を。

別名『ヘタレ』『のび太二号』『ザコチート』

本編における初期登場人物にして、なのはがヒロインという優れたポジションに関わらず何故かヘタれる。そしてよく負ける。

一般人がチート能力を貰ったりすると活躍する事が多いが、そもそも能力だけもらっても精神的にアレじゃん………というのをガチで体現した人物。

『スペック 強さ』の究極の体現であり、そういった意味では作者

自身のお気に入りに。

ただしTV版碇シンジ的ヘタレ体質の持ち主なので使いどころが難しい。

スパロボ仕様になってくれないものだろうか……いや、無理だな。だつてのび太だし。

何故のび太二号かというと、その注文の多さと、ヘタレっぷり。そしてヒロインが主役で恋のライバルがエリートというポジションからであつて、サボり癖があるからではない。

つまり『ドラえもん』風に言うならば。

のび太 神崎龍也

しずか 高町なのは

出来過 クロノ・ハラオウン

ドラえもん c.m.

という構図がここに完成するのだつた！！

まあ、あれだね。精神的成長はA's以降に期待と言つ事で読者諸君は温かい目で見護つて欲しい。出番があればだか。

x

マクス＝トレンジア (本名マクス＝G＝ベルネール)

『SPIRITUAL ARMS』の主人公。原作のあるキャラはそつちに行けば事足りるのでここでは説明を割愛する。

別名『最強(元)』『最強の鈍感ロリコン』

本来であれば反則級の化物なのだが、能力無尽蔵使用や歩く戦略兵器な連中が跋扈する本作では輝きどころが少ないのが難点。

氷上京谷と何度も戦い、その都度ライバル的な立ち位置に立ったかと思いきや有効打を一撃も与えられないまま敗退した悲運のキャラ。

とはいえ、これはマクスが弱い訳ではなく、この作品内における隠しパラメーターの一つとして、攻略キャラへのLove度が高ければ高い程力を発揮できると言うどうしようもない馬鹿設定が隠されていたため。

まあ、要するに彼女の前でカッコつけた奴と、彼女の為に魔王ルート選択した奴との差が戦いに現れたと言うだけであんまりスペックとか関係なかったりする。

……ホント、どうしようもねえな、この作品。

けどまあ、それを差し置いて活躍出来なかったのは、こいつの必殺技がまだ『SPIRITUAL ARMS』本編に出てきていないのが最大の要因。

だから神崎はやてさん、『SPIRITUAL ARMS』の新作を頼む。

×

レインシアリングランヴァール

登場作品：『SPIRITUAL ARMS』

装備：ミッドチルダ式デバイス・サルワートイオー

デバイスの能力は転移・防御・回復と言った補助中心。

英語ではなく日本で喋ってくれる親切設計だが、初登場以来声を聞いてない。

実は引っ込み思案キャラなのか？

別名『空気姫』『（非）合法ロリ』『日陰お嬢』『あとがきの看板娘』

ピンクの服着たお姫様だけど、赤い帽子を被った髭親父の知り合いで無ければ巨大な亀に連れ去られたりもしない。

むしろ本物のお姫様なんだし、誘拐とかされたら出番も増えるんじゃない？ と思われるかもしれないが、ロリコンは主役組だけで満杯なので勘弁して欲しい。

その出番の無さは本編随一であり、作者に関しては『あれ？ この子何て名前だったっけ？』とメモ帳を何度も確認する始末。

まさに報われないロリツ子。いっそのこと他のキャラと三角関係にでも発展すれば出番が有ったのかもしれないが、本人が一途な事が災いして出番が尽く消えて行くのだった。

彼女が活躍する場面を見るには霊視能力によって行間を睨むか読者の妄想でカバーして貰うしかない。

あとがきの恋愛トークで最も輝くキャラ。

しかしそのコーナーもA'sからの女性チート主人公によって退場の可能性があるとか無いとか。

……レインシア、強く生きる。

x x x

K Y O チーム

天宮恭介

初期設定

年齢：19

黒い髪に赤い目。少し長めのサラサラヘア。身長は175センチ。
手。

発言はもっぱら突っ込み。基本的に京谷に引っ張られる形で。

基本京谷と同じ能力だが、京谷以上にチート。

服装は、全身黒一色。黒いジャケツト。黒いジーンズ。黒いコート。

魔力は京谷と同じくだが、量は神の域。

基本作者は冷静です。『いや。普通ここは慌てるだろう！』といった状況でも冷静です。あとは、ちゃんと空気読めます。一人称は『俺』

能力その一・異能（神聖）の力を持つ道具なら何でも作り出せる
『宝具生成』

能力その二・全ての世界の魔法を使える『異能再現』

能力その三・全ての世界の機械を自由に出せる『機械天使』（例・ガンダム）

基本能力・次元転移。空間移動。

京谷との共通点・身体能力MAX。ガンダールヴ効果付属。IQ2

00。正義感溢れている。

そして本編へ……

別名『二ト候補』『最強のどM』『サボリ魔』『変態という名の紳士』『残念美形』

初期に送られてきた設定とはかなりズレまくった人物の内の一人。最早設定内のシリアス空気など影も形も残ってない。

正義感にあふれてんのに何でサボリ魔？と思われるかもしれないが、物語中盤に入ってからあんまり表に出さないで欲しい、という要望があり、プロットを書き直したと言っ過去がある。

蛇足ではあるが、無印編において北澤直也の出番が妙に多かったのは、天宮恭介の出番を穴埋めするために起こった事であり、本来であれば彼の出番が最も多い筈だった。

……本当ならもっとカツコイイ奴になる筈だったのに、何時の間にか変態紳士設定の入ってしまったキャラ。ビジュアル的には美形なのに……。

しかし何故か一部にはモテる。何だかんだで愛されていると言う事だろうか？

どうでもいいけどIQ200は学歴詐称だろ？と馬鹿をやらせた責任転嫁してみる。

Kyoさま、ごめんなさい。

x

氷上京谷

登場作品：『魔法少女リリカルなのは』 転生した主人公は最強の設定を使う』

『魔法少女リリカルなのはStrikers』最強の魔導師は転生者』

別名『最強のロリコン』『歩く反則』『チート乱舞』

もう何も言う必要はないと言い切れる反則キャラ。お前一人でリなのこの事件全部解決できんだろ？ と言いたいところだが、この作品に出て来る連中は敵もチートなので、こいつ一人じゃ手が足りないのが実情。

『物語を紡ぐもの』は相変わらず地獄だZE

化物揃いの連中にあってトップクラスの性能を持ち、その力は『011 月下の惨劇』の神崎龍也との戦闘シーンを倒す瞬間以外全カッタさせる程。

断じて作者の手抜きではない。

x x x

H a g a l a z チーム

御剣 仁
みつるぎ ひとし

登場作品：『とある最強系主人公達の放蕩記』

本来なら無印編ではなくA's編での紹介になるのだが、無印編でも出番があったのでこちらにも記載。

別名『乙女ゲー攻略キャラ』『BLタグを作った原因』『攻め専門』

長身眼鏡で筋肉ありと、ビジュアル的にも乙女ゲーの攻略キャラになってそうな感じだなとイラスト見て思ってしまった。Haga Iazさまごめんなさい。

乙女ゲーでは4番目ぐらいに攻略されそう。

『モテる男はつらい』というのを皮肉ではなくガチで体現したキャラ。

その吸引力に男女問わず惚れこんでしまい、北澤直也とはNGコーナーでBLモードに走りまくる。

しかし、恐ろしい事実を敢えて語るなら、北澤直也が御剣 仁に手を出すというより、大概のNGコーナーでBLな行動かまして誤解を生んでいるのは御剣 仁だったりする。

まあ、それはともかく、この男の好感度の稼ぎっぷりは半端ではなく、本来なら一つのイベントに好感度が+1〜2のところを、この男は+5ぐらい稼いでしまうのである。

そりゃ絶対惚れるわ。

ちなみに北澤直也は本来攻略対象キャラではないのだが(男だし)、どういう訳か一つのイベントに好感度が+28とか上がる謎現象が起きている。バグか？

(ちなみに好感度150で個別ルートに突入します)

はやて頑張れ、超頑張れ。

x x x

笑う男子チーム

槇野 来栖まきの くろすけ

初期設定

年齢 16

身長 168cm

瞳 黒

髪の色 ブラウン

魔力値 EX

一人称は「私」。

性格は、爽やかな笑顔で酷いことを言うような奴だが、根は良い。ハルヒの小泉君的な口調。同年代には君付けが多い（女子は全員さん付）

特技は情報収集、それによるコネの獲得。料理は壊滅的に酷い。

趣味 ガンプラ作り アニメ鑑賞 ゲーム

基本的服装 11eyesの皐月君の私服みたいな感じ。

因みに、声優は小安武人です。（何のことだよ）

スキル：次元倉庫

無限の時間と無限の広さを誇る。基本は他の作者様への贈り物を閉まっている。念じれば出てくる。

武器具現化（チート版）

武器や兵器であれば何でも良い。チートな物まで（例 F
ateのエクスカリバー 天元突破グレンラガン等）可能。

『スキマ生成』。空間の境界に裂け目を作り、離れた場所を繋げる能力。

それは時として場所のみならず、夢と現実の境界さえ繋げる能力を持つが、今回は前者を目的として使用した。

姿形を変化させる変身能力持ち。

そして本編へ……

別名『空氣候補』『コスプレイヤー』

珍しく初期設定から殆ど変化の無い人物。どうでも良いけどハルヒの古泉を小泉と間違えて書いてきた設定を送られて混乱してしまったと言つ過去がある為、悔しいので誤字のまま掲載する。

古泉君口調との事だが別にBLキャラという訳ではないらしい……
ち。惜しい。

きっと一人でいる時はおいしくカレーを作る歌を歌っていると作者は信じて疑わない。

けど出来る上がるカレーはド下手とか……何それ萌える。食べたくないけど。

本作においてナチス親衛隊（アルマゲイネSS）の制服を着用していたが、実際の所ナチスや親衛隊についての知識はなく、単純にカッコいいからという理由で着ていた為、別にナチ親派という訳で

はない。(東 興輝も同様)。

蛇足ではあるが、日本ではナチのコスプレは禁止らしい。まあ、そりゃそうか。

無印では空気候補だったがA'sでは活躍予定の為、期待して欲しい人物。

x

東 興輝

登場作品：『魔導戦士リリカルガンダム』

『魔導戦士リリカルガンダムA's』

別名『炭酸の抜けたサイダー』

最早別名からして意味不明。無印ではそこまで活躍出来なかったけど、これから日の眼を見ると信じたい。

別名が何でこんなに意味不明なのかというと、登場作品通りのキヤラにするとトリガーハッピーっぷりを遺憾なく発揮し、周りから空気読めと虚数空間に蹴り落とされそうになる為に自重したら、弾け度合いが足りなくなったから。

というか、テンションを落とした瞬間に京谷との書き分けが難しくなってしまった為、出来るだけ分けて書く様にしている、というのはここだけの秘密である。

A'sから本格的に活躍予定。

×××

水玉チーム

水無月珠樹

初期設定

人間。無印時9歳。3月8日生まれ。身長128cm。炎髪の口
ングで蒼眼。言葉づかいは丁寧で一人称は私だが、切れると一方通
行の様な口調になる。二人称は貴方。

性格は飄々としていて道化っぽい。毒舌。よく他人にちょっかい
を出す。善人ではなくむしろ悪人。自分が楽しければ他はどうでも
いい。

だから面白そうなら敵でも見逃したりする。特にスカリエツテイ
の様な性格の人間や、からかいがいのある人間が大好物。

但し、気に食わなかったり、面白そうでも自分の気に入った人を
傷付ける奴はぶっ殺す。また、偽善者や、理想論、正義といった物
を掲げる人間は嫌い。好きになったり、気に入った人間にはわりと
尽くすタイプ。

若干殺人が好き。

ステータスは魔導師ランクでSSS（実際は魔導師では無いが）

能力は一方通行
アクセラレータ

そして本編へ……

別名『外道殺人鬼』『悪魔小僧』『ザ・かませ犬』『StSまで
空気予定』

力を唐突に手にした人間は、それを使ったがり、失敗するという
のを体現した人物。

他の登場人物と比べて能力の指定が少なく、非常に動かしやすい
キャラだったが、性格面などの問題から感想でさえ非難を受ける形
になってしまった。

しかし、の作品はあくまでも直接書いているのは水玉様でなくc・
m・であるため、むしろ原因はこちらにある。

業深きはあくまで作者。

本編において管理局員は見殺しにするわ、騎士の少女に濡れ衣着
せるわ、強盗殺人はやらかすわと、数々のドン引きする所業を作者
がやらせた。(ここ重要)

が。悪というものは勝手に栄えて勝手に滅ぶものらしく、突然乱
入された魔法使い(童貞的な意味ではない)に存在全否定された揚
句にフルボッコにされた。

だが敢えて補足をするなら水玉チームの行動に一切のミスはなく、
あそこでバトオが出てきたこと自体がイレギュラーと言える為、運
が悪かったと言うほかない。

次の出番があればぜひ頑張っしてほしい。当分出番はないが。

x

冥利曉葉

登場作品：『魔法少女リリカルなのは ANCIENT MAG
I C I A N
』

別名『被害者属性』 『ポニテ男子』 『眼球スライス』

まあ、一杯やるつや。

思わずそんな事さえ言いたくなるぐらいの被害者。

一応とはいえフェイト助けたり協力したりと頑張ってたのに、
んで赤の他人のボスキャラにここまで言われんにゃならんのと
言いたくなるぐらい説教喰らった拳句に眼球ぶつた切られた人。

こやつのが敗因は組んだ奴が最悪だった事の一点に尽きるだろう。
取り敢えず強く生きる。

x

シエリス

登場作品：『魔法少女リリカルなのは ANCIENT MAG
I C I A N
』

別名『被害者属性二号』 『ゴスロリ乙女』 『ロリババア』 『ツン
ヤン』

水玉チームの被害者二人目。パーティメンバーの選択は重要よ！
今すぐ酒場に行って来なさい！ 仲間のレベルは1だけど。

殺戮チームの紅一点。ゴスロリ服はロリコンな主人公組に大変人気なようです。

どうもありがとうございます……とロリコン主人公組は言っていたとかいないとか。

幼女キラーに首をボツキボキ。よく生きてたもんだと不思議に思う反面、この程度で死ぬようならこの先きついよな、と仲間は無痴を零しているとかいないとか。

男の為の一途さが自分の首を絞めてしまったキャラ。愛故に強くなるのが人なら彼女は真逆のベクトルを向いていたと言っても良いだろう。

世界の力を借りる、という特性は実は本作の月村すずかと同様だが、すずかは力を借りるたびに、世界にお願いしているので『世界お父さん』はご満悦。

すずかには特別サービスで力の割増もしてるんだけど、シエリスに関しては『守護者だから寄越せ』みたいな感じになってるので『世界お父さん』は渋々手渡してるだけなので、現段階の精度的には月村すずかに軍配があるとか。

あれ？ ちょっと待て！ 何気にすずかかってチート組より強くないか！？

x x x

c・m・チーム

宮本千草

年齢：二十後半……知ったものは撲殺

服装：スーツ（下はスカートではなくスラックス）

身長：170センチ後半……知った者は撲殺。

備考：普段髪を後ろに結わえている。化粧は薄くしかなし、髪も染めない。

能力：異能無効化

性格はお節介焼きで普段は冷静と言った所。

別名『撲殺熟女』『武道バカ』『嫁ぎ遅れ』『恋愛処女』『BB』
A

上の別名を口にした奴。正拳突き入れてやるから前に出る。

言うまでも無いが作者本人です。一人さびしく酒やブラックコーヒーを飲んでる嫁ぎ遅れ。

しかも強い酒じゃないと全然酔えないので性質が悪い。最近はいウイスキーに嵌まっているとかいないとか。

初期設定なんてものは欠片も無く、本人をそのまま作品にトレースするだけで殆ど終わってしまった。実に手抜き感が現れている。

本作においては何かと他のキャラや主人公組にお節介を焼き続け、美味しいとこだけ出演している。

……ろくな女じゃねえな、ホント。

x

北澤直也

登場作品『僕は勇者なんかじゃない』

装備：ミッドチルダ式練習用デバイス・マルコキアス。

能力的には空を飛んだり、簡易なバリアジャケットの形成だけで目立ったものは特にならない。あくまでも練習機。

ボイスは英語だけど声は落ち着いた感じの女性で主思い。そんな彼女の行動に直也は道具として扱う事を戸惑っているようです。

アロンドイト (F a t e Z e r o)

別名『隠れ外道』『受け専門』『御剣の嫁(仮)』

あーはいはい、良い人ぶってんじゃねえよこの野郎。

本作において出演数の多さと他のキャラとの交流の多さから、こいつが主人公？ みたいに見られてるけど大間違い。

実際のところタイプこそ違えど水玉チームを超える外道。

その証拠に『008 邂逅』『死神』と『剣軍師団』では敵かどうかも判らないヴェノムに対して情報を聞きだした瞬間に首を刎ねようとするし、

『021 勝利を我らに与え給え』でも救出のためとはいえ、見た目子供な水玉様にバイク突っ込ませた拳句に爆破してぶっ殺そうとするし、

自分が敵と判断した時には躊躇なく殺そうとする殺人マシンっぷりは本作随一の外道と言って差し支えない存在。

A's編ではその辺りの外道っぷりが遺憾なく発揮される予定。

読者諸君には死ねと叫ばれそう。

本編でバイクに銃弾当てて爆破してるけど、軍用バイクは防弾加工されてるから無理だろ、と突っ込まれる事を覚悟していたのに何故かツツコミが無かった。

ちなみに考えていた言い訳は『アクション映画使用です』。うん。実に苦しい。

あと誤解が多いようなので言っておくが、この男のスペックは主人公組の中で最弱である。

理由としては剣士として優れていてもt単位の物を持ち上げたりレーザーやら空間攻撃やらも出す連中とは比べ物にならない事や、刀以外の攻撃（徒手空拳や暗器）が殆ど役に立たない事が挙げられる。

こいつが強く見えるのはあくまでも、勝てる様な時にしか戦おうとしなかったり、初めから策を練っているからそう見えるに過ぎないのである。

要するに、本作における最弱キャラ。
何でもありの力比べだと確実に負ける。

（原作キャラ紹介）

高町なのは

『喫茶翠屋の白い天使』……今や懐かしいとら八の少女は、杖を

手にした瞬間に魔王への道を歩むのだった!!

最早見る影さえ無い少女。なのちゃん？　さんを付けるよデコ野郎!!

『管理局の白い悪魔』とかどんな悪夢だよ。

第一期に砲撃かまして闇の片鱗を見せつけ、後に『悪魔』次に『魔王』へとクラスチェンジする奇跡の存在。

一体何が彼女を変えたのか……うん、ユーノとの出会いだな。

取り敢えずフェレット。死んで来い。

×

フェイト・テストロッサ

別名『露出狂(仮)』『クーツン』

知ってるかい？　リリカルなのは元の『リリカルおもちゃ箱』での君のポジションはクロノ君だったんだぜ。

最初はクールなツンキャラ。しかし終盤直前に見せるデレの破壊力は異常。

しかし何より凄いのは露出度の高い戦闘服!!

そのバリアジャケットのデザインに京谷君は大変満足なようです。

×

月村すずか

別名『(元)日陰お嬢』

やあ。お嬢ちゃん。君を見ていると毛虫とか持って行きたくなっちゃうぜ。

そんな事を考えているクラスの男子が過去に居たが、それは淡い恋心の裏返し。

しかし横に居たアリサに精神的攻撃を加えられまくった拳句にクラスで浮いてしまい灰色の青春を過ごしてしまうのだった。

という過去がクラスの男子に有ったとか無かったとか。

影キャラなんて言わせない！ 中二全開な作者の妄想と悪ノリによつて稀代のパワーアップを果たした、なのは世界の影……もとい日常キャラ。

中二度の高ければ高い程力を発揮するDies irae世界のベイ中尉の能力と『世界お父さん』のバックアップによつてチート主人公組さえチビる凶悪キャラへ変貌。

弱点である炎や銀の攻撃さえ無ければマクスや京谷さえ苦戦するチートである事を読者の皆さんは覚えておいて欲しい。

まあ日常キャラなんで活躍する機会は滅多にないが。

ちなみに日陰お嬢の称号はレインシアに笑顔で手渡したとか。意外と黒キャラなのかも知れない。

×

アリサ・バニングス

別名『ツンデレ』『釘宮ボイス』

ツンデレの黄金律は9：1。異論など一切認めない。

なのはやすすずかと言った親友や鮫島に対してはとことんデレるも、主人公組には凄まじいまでのツンで対応されてしまう。

わたしをデレさせたい？ ならその三倍の萌えを持ってくることね。と叫んでいるとかいないとか。

ちなみに北澤直也は原作の影響か彼女に対して絶対服従の姿勢を取っているらしい。

釘宮ボイスマジばねえ。

×

クロノ・ハラオウン

別名『不遇キャラ』 『主人公降格』 『エリートヒロインという名の噛ませ犬』 『中二』

色々な意味で強く生きる。

二次創作においては何故かアンチから叩かれまくる不遇の少年。しかもその理由の殆どが取ってつけた様な因縁だから性質が悪い。管理局の執務官にして空戦ランクAAA+という事もあってか、大概のオリ主の踏み台にされる彼の姿は涙なしには語れない。

つつか、世のオリ主達に言いたい、お前らも大概空気読めてねえよ、と。

しかしこの作品に限ってはそんな事はしないしさせない。

だって作者は『リリカルおもちゃ箱』から知っているから。

取り敢えずクロノ君批判してる奴は一度でいいからやってみろ。見方がマジで変わるぞ。

しかし最も泣けるのはリリカルなのは劇場版。スタッフ爆発しろ

！！ クロノ君の活躍期待したらカットしまくってんじゃねえか！
！（血涙）

中二病を標準装備とする本作においてガチで14歳な存在。
きつと後々チート主人公も驚く必殺技を……開発しているかどうか
は誰も知らない。

×

高町一家（恭也・美由希・士郎・桃子）

別名『最強一族』

いや、何て言うかね。こいつらにベルカ式デバイス持たせたと
どうなるんだろうとか思う訳ですよ。

特に恭也と美由希……お前ら化けもん過ぎ。OVAのあれとか、
もろクロツクアップじゃん……。

なのは戦いに連れだす前にお前ら動けよ。模造刀でドラム缶ぶつ
た切るとかどんだけだ。

結論。高町家一族はガチで魔物です。

×

プレシア・テストロッサ

別名『露出狂（真）』『SMマニア』

撓る鞭が聞こえます。やめて、フェイトちゃんを叩かないで！！
変態達が画面の前でハアハアしてるから！！

『哀しい涙はいらぬ』という本作のテーマに合わせるべくプレシ
ア救済エンドで幕を下ろした第一部。

優しいからこそ狂った彼女には是非幸せになって欲しい。

あれ？ おかしいな。なんかすごい真面目に締めたぞ？

×

アルフ

別名『過激なツンデレ』

わんわんお！ わんわんお！

最初はやな奴かと思いきや、主想いの素敵な女性。時折見せる優
しさは男ならぐっとくるモノがあるんじゃない？ と読者諸君に尋
ねてみたい。

いつのまにか天宮恭介に惚れる形になったが、今後どうなるかは
判らない。

……ていうかあれだ、男の趣味が判らない。

×

ユーノ・スクライア

別名『キング・オブ・エア』 『もう淫獣ですらない』

ヒロインと初めて接触したキャラ、という最大のアドバンテージ
を取られた存在。

物語が進むにつれて……どころか序盤の説明以来姿が消えてしまったのに誰も突っ込む事無く姿を消した不遇の存在。

そんな彼は自分の出番を取った神崎龍也に復讐の炎を燃やしているとかいないとか。

×

リンディ・ハラオウン

別名『眼に毒』

いやー……まさかとは思ってたけどアニメでもやるとは思わなかったわ、妖精コス。

つつか誰得だよ！？ 自分の年齢考えろ！！

×

エイミイ

別名『オペ子』

オペレーターガール。それ以外の何物でもない。

え？ クロノの未来の嫁？ H A H A H A ! 何を言っているんだい？ 味噌汁で顔を洗って出直して来たまえ。クロノの嫁になど死んでもさせない。

ドラマCD叩き割ったあの頃の記憶も忘れない。

まあ便利な言葉で締めよう。スタッフ爆発しろ！！

(敵キャラ紹介)

ヴェノム

登場作品：『SPIRITUAL ARMS』

別名『悪の中間管理職』

お約束の王道。序盤で力を見せつけたのに中盤で負け越し、最後は主人公の新必殺技の餌食になる所など正に戦隊物の王道シチュ。

中間管理職の悲哀が切ない。

哀しくも立派な悪の王道、これぞ悪役を地で行くキャラ。

作者的に滅茶苦茶お気に入り。

悪の美学？ ハッ！ 悪なんて自分の好きな事をやるから悪なんだよ！ 美学だの一流だの言い訳作ってんじゃねえ！

引かぬ、媚びぬ、省みぬ！ それが悪の生きざまよ！

そんな彼も場面は大事にするらしく、神崎龍也の告白タイムでは茶々を入れる事無く待ってくれた所から察するに、実はすごく空気の読めるキャラである事を読者の皆さんはお気付きか？

ちよつとした秘密：実は本作に来てから開発した外道級の必殺技を二つほど残しているらしい。

×××

組織名：ガルフ（神崎はやて様考案）

初期設定

リーダー：グラフィール＝アルトレイ

特徴：紫色の騎士甲冑

戦闘様式の特徴：基本、組織の構成員は槍の量産型アームドデバイス、ホーンを装備している（幹部は別）。

デバイスのリミッターを解除することで、通常時の限界以上に全ての能力を向上させる（ガンダム00のトランザムのような感じ。一般構成員では一回、幹部クラスで3回、グラフィールは5回、一回の戦闘で使用できる）。

目的：構成員は皆事故等で家族を失ったものばかりで、失った家族を生き返らせることを至上の目的としている。目的のためなら自らが傷つくこともいとわない。

術式：ベルカ式

髪：金髪のシヨート

瞳の色：金

性格：クール。

備考：小さい頃、次元犯罪者に家族を皆殺しにされ、家族を生き

返らせるためガルフを設立。

魔力光：赤紫

デバイス：アームドデバイスで、名は『クラウン』。一般構成員用の槍型デバイスと似ているが、出力などは段違い。バリアジャケットは赤紫メインで黒のラインが入った騎士甲冑。

技：？ 刺突閃：魔力を魔力刃に集中して放つ必殺の突き。

？ 刺突連閃：刺突閃を連続で繰り出す。

？ スラストシュート：突きの勢いで魔力刃を飛ばす。威力はア
クセルシューター数発を楽に吹き飛ばせるほど。

？ スラストバルカン：スラストシュートの連打版。一突きで複
数のスラストシュートを打ち出す。手数が多い代わりに個々の威力
は低下している。

そして本編へ……

別名『魔女の騎士』

終始、シリアスを貫き通し、おふざけ9割のこのコーナーでさえ
真面目に書かざるを得ない存在。

その悲痛にして鮮烈な生き方は涙なしには語れない。

願わくば、この物語が終わるまで忘れないで上げて欲しいキャラ

×

セレノ＝アイヴィー

初期設定

性別：女

術式：ミッド

髪：赤のロング

瞳：オレンジ

性格：クールでややつんとしている。一人称は私。

備考：小さい頃飛行機の墜落事故で両親を亡くした。グラフィイの副官。

魔力光：朱

デバイス：通常時はロケット、戦闘時は弓になるアームドデバイス『ミュラン』。魔力の矢を打ち出すことが出来、滅多に使われないが反った部分は魔力刃を展開して接近戦用武器として使用できる。

技：？ジャッジメントボウ：強大なエネルギーの魔力矢を放つ。

？アローレイン：凄まじい数の矢を一度に放つ。

そして本編へ……

別名『ツンデレ』『泣き虫』

なんだろう……すずかとはまた違った意味で虐めたくなるんだが。

本作において16〜17歳？ 何て言われてるけど実年齢は15歳。三年前はランドセル。

うん。ロリコンな主人公組に実に受けそうな年齢です。

スリーサイズは記載されてないけど作者は貧乳と信じて疑わない。

普段は真面目な委員長キャラ。だけど打たれ弱くてつい泣いちゃう……その泣き顔はガチ萌え必至。

そりゃあ、水玉様も泣かせたくなるってもんですよ。

最終的に北澤直也と一緒に地球に行く事になったが、今後どうなるかは未定。

けど付いて行ったのが北澤直也なだけに不安が倍増。
幸せになれるかどうかが激しく不安。

取り敢えず、将来巨乳になる事だけは絶対にはないとっておく。

×××

ベリアエル・バトオ（27）（Kyoさま考案）

御剣 仁同様、現段階では出すべきでは無いが、第一部のラスボスなので記載。

初期設定

身長183センチ。黒いジーパン。紫色のシャツと赤黒く変色した白いジャケット。

一人称・俺

性格・殺人狂（幼女ばかりを狙う）

能力・魔力変換資質『炎』・時間操作

ステータス・身体能力はほぼMAX。守護騎士を全員素手で圧倒できる。ランクSSS

容姿・黒と紫色が混じった髪。右目に切り傷。

行動原理・人の泣き叫ぶ声を聞くのがたまらなく好き（特に幼女）
デバイス・非人格型アームドデバイス【ダーインスイレフ】。形
は細身の西洋剣。両刃。

そして本編へ……

別名『チート重ねがけ』『ザ・ワールド強化版』『幼女キラー』

『魔法使い（童貞的な意味ではない）』

最早ふざけんなと言いたくなるチート性能にも関わらず、作者が
悪ノリをかましてさらにチートを重ねがけした究極の反則。

具体的には時間操作が出来る、という初期設定を良い事に『型月』
最強格の称号である『魔法使い』設定を加え、さらに守護騎士を素
手で倒せる、という設定を誇大解釈して『ベルカ古流武術』『聖王流』
』とかいう訳のわからん武術を習得するに至った悪夢のチート。

しかもその過去や行動原理までも弄り、最早初期設定の殺人狂や
幼女の泣き顔見るのが楽しいとかいう設定を、数百光年の彼方にす
っ飛ばした存在。

初期設定を骨と皮だけ残し、アレンジという名の魔改造で肉付け
してしまった反則。

はつきり言おう。どないせえっちゅうねん、こんな化物。

本作における究極の謎キャラ。発言の一つ一つに伏線の隠れる物
語の主犯格。

読者諸君が伏線をスルーしていない事を切に願うばかりである。

どうでも良いけど、お前絶対童貞だろ。

まだ日の昇るには些か早い時刻。私はソファから見を起こし、ベツドの方を見る。

良かった……と、言うほど楽観できる状態ではなかったが、それでも昨日に比べれば回復した方だろう。

「……う」

「気が付いたかね？」

状況が飲み込めていないのだろう。ベッドから上体を起こして辺りを見回す直也に対し、私は電灯を点けて意識を覚醒させてやる。

「気分はどうか？ いや……優れないとは思うが、肉体的にはほぼ回復していると筈だか？」

「……手間をおかけしてしまい、面目次第も御座いません。

差し支え無ければ、何日程経っているかお聞きしても？」

「一晩だ。君の傷からすれば早い方だな。

右脇腹から背にかけての刃による刺し傷。背骨を傷付けていなかったとはいえ、失血とショックによって死ななかつたのは運が良かった……という訳ではない」

言いつつ、ガラスのテーブルに置かれた血の附着した布を見やる。まったく、何処の任侠映画だ。

「腹部にサラシを撒いて内臓を圧迫し、出血と臓器が体外に出るのを防ぐ……確かに防弾ジャケットなど連中には無意味である以上、こうした措置は正しいが、正気とは思えんな」

「こうなる事を予想していたのか？　と言外に尋ねるも、直也はまさか、と肩を竦める。

「首を刎ねられても文句は言えませんでした。腹を刺されたただけは御釣りがきます」

「それは、そこで寝ている少女と関係があるのかな？」

ベッドの横、今もすやすやと寝息を立てている赤毛の少女を一瞥すると、直也は、ええ、と頷いた。

「彼女の望みを諦めて貰う為……そして、これからも自分は彼女に尽くす義務がある」

「私の記憶違いで無ければ、彼女は君と初めて会ったビルで見かけた紫の騎士の少女だろう……まあいい。事件は解決したのだろう？　君が意識を失っている間、事の顛末は彼女から訊いた。墮天使の連れてきた連中がほぼ集結している以上、奴らなど烏合の衆に過ぎんだろうからな」

問題は敵のイレギュラーがどうなったかだが、その辺りに私が関与する必要はない。

少なくともプレシア・テストロツサの目論見が成功したならば、それだけで次元震の発生は必至。

にも拘らず何の音沙汰も無いという事は、同時にその目論見の失敗を意味する事に直結するのだから。

「申し訳ありません……事件の全てを見届けることは、」

「それに関しては心配ない。私達が無事である事が何よりの証拠だ。それよりせつかくだ。ここで朝食を摂ると良い。まあ、その後で仕事はして貰うがね」

笑みを浮かべるこちらに、喜んで、と応えるとベッドから立ち上がる。

「本調子ではないだろう？ 横になっている事を勧めるか？」

「手伝わせて下さい。ここまでして貰ってまだ動かない、というのは流石に申し訳ありません」

「そうか、では頼む」

意外と頑固なのだ、と思いつつ指示を出す。せつかくだ、出来るだけ凝ったものを作ってみよう。

「ん……あ」

「目が覚めたか。じきに食事ができる、顔を洗ってくると良い」

エプロンに身を包んだ直也に対し、少女は未だに夢でも見ているかのように呆けていた。

信じられない、と言った所なのだろう。浅く見積もっても全治数ヶ月と言ったところの少年が、事もあるうちに一晩で回復しているのだから無理はない。

「だから言っただろう。私に任せれば医者などいらんとね。

いや、それにしても昨日の君の慌てぶりといったらなかつたな。直也にも見せてやりたかつたぞ」

くくく、と意地悪げに笑って見せる。

「な！？ 確かに助けて頂いた事は感謝しますが、ここでそれと言いますか！？」

「そういつてくれるな。信用できなかったのは当然として、胡散臭いと言われれば私とて良い気ははせん。君の片足も治してやったのだから、多少の嫌味ぐらい目を瞑って貰いたいな」

こちらの言い分に対し、仕方ありませんね、と少女は押し黙る。うむ、訊き分けが良いのは良い事だ。

「さて、食事がてら今後の話がしたいのでな。一先ず席についてくれ」

食事を盛りつけた皿をテーブルの上に置き、それぞれの席に着く。

「……まずは正式な自己紹介と行こうか。私はこのビルで古美術商をしている者で、御剣 仁という。君は、」

「セレノ＝アイヴイーです。この度の救助、誠に感謝しています」

「礼には及ばん。何より魚心あれば水心ありだ」

「というと？」

「なに、そこまで無理難題を言うつもりはない。先にも言ったが、私は古美術商を営んでいてね。尤も、その彼が何度も倒れてしまふ為、あまり進んでいないのだから」

ちらりと直也の方に視線を向けると、面目ないと頭を下げる。

「つまり、私にここで働いて欲しいと？」

「そういう事だ。無論、給金は出さずし休暇や勤務時間も要相談だ。

悪い話ではないと思うが？」

「良いでしょう。元より根無し草の身です。むしろ働き口を用意してくれる、というのは私としても望ましい」

契約成立だな。さて、後は……。

「一つ聞きたいのだが、住居の当ては有るのかね？」

この国では身分を証明する物が無ければ住めないが、という事を念頭に置いて話す。

「そうですね。確かに、こちらに住み込む訳にも……」

「それなら俺の所に来るのはどうか？ 一軒家だが、少々広すぎる。」

一人増えるぐらいという事はない」

その問題に口を開いたのは先程まで口を挟む事の無かった直也だ。

「え？」

「確かに一人暮らしの異性の家に転がり込む事に不安を覚えるのは判るが、こちらはそういった事はしない。万が一そうなれば射殺しても構わない」

「あ、いえ。私としても贅沢は言えませんし、貴方が構わないと言うのでしたら、」

「北澤直也だ。そう言えば正式な自己紹介はまだだった。好きなように呼んでくれ」

「それでは……直也と。ご厚意に甘えさせて頂く形になりますが……」

「こちらは君に対する責任がある。この程度の事で恩を売る気はない」

これで一応、この少女の問題は解決した訳か。しかし……。

「責任とは穏やかではないな」

思った事を口にする。これで顔が赤くなるようなら確定だったのだが、どうやら二人を見る限りそういう訳ではないらしい。

「ええ。先の一件で色々とありまして」

「すまない。今の発言は軽率だった」

あまり話したい事ではなかったのだろう。素直に頭を下げるこちらに、直也は構いませんよ、と笑顔で返す。

気が緩んでいたとしか言いようがない………今後はああいった言は慎むようにしなくてはな。

「御剣さん、これはどちらに？」

「その花瓶はバニングス家が購入済みだ。正午に使用人が取りに来るらしいから、セレノに対応させてくれ」

了解しました、と直也がすんなりと花瓶を運ぶ。かなりの重さと大きさの筈だが、慣れた手つきで運んでいる所を察するに、全く問題はないだろう。

何より、刀剣の手入れに詳しいと言うのが有り難い。日本刀など、こまめに手入れを施さなくてはならない物でも私以上の効率で作業を進めてくれるのだ。

「随分と手早いな」

「実家でもこういった物は扱っていませんので」

言いつつも手は全く休んでいない。刀身を手入れするだけでなく、目釘を外して柄を取り、銘のある物はメモを取って品書と目録に筆を入れていく。かなりの達筆だ。

一方セレノはというと……。

「御剣さん、開店時から今月までの売り上げは全てこちらの帳簿に。それから先程月村様からお電話がありました、後日指定した刀剣を何本か見せて欲しいとの依頼がありました」

経理と電話対応に非常に強く、作業効率もかなり良いときている。はつきり言って、このまま二人に任せたりでは私の仕事が無くなってしまう。

「二人とも、少し休んでくれて良い。残りは私がやろう」

「しかし、まだ三時間程しか……」

三時間まったく手を休まず、常人の数倍のペースでやるのは異常だと思わんのか……。

「元々店自体は道楽の様なものなのでね。働かねば人間が腐る、という私個人の方針に過ぎん。」

それにこちらにも予定があるのでな、どの道午後は閉店だ。手持無沙汰なら茶でも淹れてくれればいい」

さて、そうは言ったものの殆ど後回しにしている仕事だけが残ってしまった。倉庫の中でも確認しておくか……。

この後、この二人が務めるようになってから店の売り上げが三割増しになったり、美人の看板娘がいると言う話を聞きつけた若い客が集まったりと、本格的に古美術店として有名になって行くのは激しく余談である。

そして御剣 仁が倉庫の整理をしている頃、海鳴駅前に一組の男女の姿があった。

美男美女……などという在り来たりな言葉を用いるには、些かちぐはぐな一組の男女。

青年の方は百七十程ある身長に黒髪黒目の典型的な日本人であり、ワックスか何かを使っているのか、ショートカットの髪をツンツンとさせている典型的な若者だったが、中々に精悍な顔立ちである。

確かにそれなりに良い顔立ちではあったが、むしろそんな青年でさえ横に居るのが釣り合わない、と言える程少女の方は際立っていた。

年齢や背格好に関しては青年と同じほどだが、だからこそ行き交う人々は思わず二人を見比べてしまう。

腰まで届くような長い銀髪に、瑪瑙を思わせる様な透き通った黒瞳。

何よりその肌は一切の化粧をしていないと言つのに、テレビや雑誌で見るとのモデルより白く、染み一つないときている。

異性どころか同性でさえ振り向く美女……いや、彼女の年ごろを考えれば美少女と評するのが相応しい少女が隣に居るのだ。

周りの男性が妬ましく感じたり、女性が不釣り合いだと感じるのも無理からぬことである。

尤も、

「いや〜。さつきから伝わってくる視線が熱いね〜」

あっちの女の子なんか可愛いし、食べちゃいたいぐらい」

「そりゃ良いにゃー。俺としても桜と他の女性とのラブシーンは萌えるっつーか、そういうイベントの一つも無けりゃ詰まんないからにゃー」

この二人に関しては、お互いにそういった関係ではない事は重々承知しているのだが。

ところで、と。独特の語尾を付けている青年が桜と呼んだ少女へと向く。

「ホントに連中と関わらなくて良かったのか。無印の物語は五月末で終了、昨日は軽い地震があつたじゃん？ つまり、」

「私の見せ場が一つ減っただけよ。それに、あいつらの能力も海鳴市で派手に暴れてくれたから大体把握してる。

何より、私達があの子達に協力する為には、あの可愛い魔法少女達に顔を知られちゃ困るもの」

そんな事判つてる癖にと、おどけた調子で言う桜。

恋人であつたなら思わず赤面でもしそうなものだが、男はそりゃそうだ、と肩を竦めただけだった。

「さて、まずは図書館に……つと、とと」

通行人の邪魔にならないよう道の端を歩いていたのが災いしたのだろう。石畳の足元に爪先が引つ掛かり、前のめりにつんのめる。

“ あっちゃー……取り敢えず受け身とんないと。けど受け身とかどうやるんだっけ？”

地面に倒れる数秒、取り敢えず顔はガードしないと、などと考えていると、柔らかい物に包まれる感触が広がった。

「大丈夫？」

「あ……」

そこで桜は自分が長身の女性に抱きかかえられている事にようやく気付く。

外見年齢は二十代前半か丁度と言った所だろうか？　だが、その年の女性にしては落ち着いた雰囲気を持っていた為、見た目とは年齢が違うのかもしれない、と桜は考える。

「ひよつとして、何処か打った？　立てないなら手を貸すけど……」

「あ！　いえ、大丈夫です。お姉さんは！？」

「私は鍛えてるから平気よ。それより、貴女こそ大丈夫？　妙に力が入って無い様だけど」

“そりやさつきから身長差の所為で胸に顔を埋める感じになっちゃってるし、何よりいい匂いだし……”　って、流石にこれ以上引っ付いたら不味いか”

「あ、あの！　本当に大丈夫ですから！　それじゃ、御手間を取らせまし、」

「あ。ちよつと待って」

慌てて去ろうとする桜を、髪を後ろで結わったスーツ姿の女性は引きとめる。

ひよつとして勧誘か何かかな、と考えていた桜だったが、女性がバッグから小さな箱を取り出すと、ポンと試供品を配る様な気軽さ

で手渡された。

手渡されたのは、たとえ男であったとしても知っているであろうブランドのロゴの入った箱。

「これ……口紅？　っていうか、シャネルじゃないですか!？」

『シャネル　アクア　ルミエール』。上品な色合いと塗り心地の瑞々しさから人気があり、価格も二千円台と手の出しやすい品である。

「先日仕事で貰ったんだけど、私にはあまり似合わないから。」

それに、そんなに可愛いのお化粧の一つもしないと勿体ないわよ。あ。ひよっとして、使い方が判らないとか?」

「あ……はい、すみません」

「謝らなくて良いわ。そうね、少し時間はある?」

スーツ姿の女性に尋ねられるが、本格的に勧誘ではないかとますます疑いを濃くする。

「……こんな事言うのは何ですけど、ひよっとして何かの勧誘ですか?」

その言葉に、きょとんとした顔を女性は向けると、次第に気まずそうな顔になった。

「ああ、ごめんなさい。確かに図々しかったわね。けど、安心して。すぐに済むから」

言葉と共に近くのベンチに桜を座らせ、ポケットミラーで桜自身の口紅が見える様に映しながらリップブラシで下地を整え、軽くルージュを引く。

薄紅色のルージュは、彼女の肌によく映えていた。

「うん。ばっちり」

「ほえー……」

化粧一つで女性の顔は九割は変わる、というのが、確かにその通りだと桜は鏡で実感した。

「まあ、初めから口紅を使おうとはせずに、最初はリップペンシルやブラシで練習したり、それ以前に化粧下地なんかもしないといけないから、そういうのはお店に行けば教えてくれる筈よ」

「あの……お姉さんって化粧品会社の人とか？」

思わずそう言わずにはいられない程動作も手早かつたし、かなり慣れていると感じた為の発言だったが、女性はそれをすぐさま否定した。

「私は……そうね。記者のようなものだと思ってくれて良いわ。要るなら名刺も渡すけど？」

そういつて渡された名刺は、確かに出版関係ところのものだった。

「何か難しそう」

「国外の政治とか堅苦しいものばかりだからね。それだけじゃなくて色んな所も回るんだけど……って、いけない。つい話過ぎちゃったわね」

「あ、お姉さん名前！」

その場を去ろうとする女性に対し、桜は大声で名前を尋ねと、女性はくるりと振り向いてにこやかに口を開く。

「千草　　宮本千草よ。名刺にも書いてるでしょう？
縁があったら、また逢いましょう」

スーツ姿の女性、宮本千草は今度こそ去っていく。
人混みに消えるその足取りを、桜はぼんやりと見つめていた。

「やばい……お姉さまと呼びたい」
「男装の麗人って感じだったにゃー……」

しばらく立ち止まっていた二人だったが、よし、という掛け声と共に本来行くべきだった筈の道筋へと向き直る。

「それじゃ行きますか、風芽丘図書館へ！」
これから先、困難の待ち受ける少女の元へ。

VOL2 001 Prologue (後書き)

c・m・「第二部・序章、投稿完了！ ようやく待ちに待った久住さんと桜ちゃんの登場です！」

レインシア「ふ、ふふふ……あの女ですか？

あの女が…私から『あとがきの看板娘』という唯一の出番を奪う女なんですか！？」

c・m・「ちょっと……怖いわよレインシアちゃん」

レインシア「ふざけないで下さい！

ただでさえ空気がこのコーナーを失ったら何が残るっていうんですか！？」

c・m・「いや……出番はあるわよ、多分」

レインシア「多分！？ 多分って何ですか！？ 向こうはA'sの主役候補でこっちは告白という見せ場の終わったキャラなんですよ！？

はっきり言って絶望しか有りません！！」

c・m・「大丈夫よ……多分。いざとなったら桜ちゃんとの百合シーンで出番水増ししてあげるから」

レインシア「要りません！ 『空気姫』から『百合姫』のジョブチエンジなんて嫌です！！」

c・m・「名前だけなら可愛いんだけどね……『百合姫』。

さて、ここからは読者様のお礼に移らせて頂きます。

久住祐治さま、神崎はやてさま、DDDさま。ご感想を頂き、ありがとうございます

レインシア「うちの作者である神崎はやて様に関しては、新装備に
関しては『一応』問題ないのでご安心を」

c・m・「ラブレターに関しては、あれはおまけシナリオなので問
題ないです」

レインシア「まあ、どっちにしろ付き合えるかどうかは判らないん
ですけどね」

c・m・「不安にさせる様な事言わない！……それではまた次回、
お会いしましょう！」

002 求めた陽だまり

「あかん……早う来すぎてもうた」

穏やかな陽気の差し込む図書館の中、少女はそう一人ごちる。

現在の時刻は正午を回った辺りであり、それも平日ときているのだ。当然図書館には司書以外の人気などあるうはずも無く、少女はため息交じりに取り敢えず本を探す事にした。

“判つてた……筈なんやけどなあ”

約束では今日は正午まで仕事があるから午後に会おう、という事になつていたのだ。

当然、向こうも昼食を済ませてから来る事を念頭に置いている。にも拘らず少女が図書館に早く来てしまったのは、彼女にとってこの図書館で過ごした一月が、あまりにも心地良かったからだろう。

“家族……か”

図書館の窓から見える、子供と手を繋いで歩く親子を見ながら、少女はぼんやりと思う。

自分にとって、もう慣れた筈だった。失つてからの時間の方が長かった彼女にとって、一人でいる事には何の疑問を持つ事も無かったから。

けれど。

“御剣さんは……どう思つとるんやろう”

あの日、今日と同じような春の日差しの差し込む陽気に出逢った

一人の男性。

背格好や見た目からして大学生かと思ったが、何でも古美術商を営んでいるとの事だった。

尤も、彼女と会った時には、まだ開業前との事だったらしいが。

“今日は……前に病院で会った人も連れてくるって言うとな”

今月の半ば、彼女を病院に送り届けた際に御剣 仁がついでだからと見舞いに行った少年。

身近に読書家がいなかったからと、話し相手になってくれる事をあの時は喜んでくれていた。

嬉しい変化だと思う。一人でいるだけだった少女にとって、その暖かさが増える事は何よりも喜ばしい事で……だからこそ。

“言えへんよな……家族になって欲しいなんて”

その望みが図々しいとは理解している。その温かみが増える事は贅沢だと判っている。

それでも

“なんで……期待してまうんやろうなあ……”

きっと甘えているからだ。御剣 仁という男性を中心に集まる陽だまり。

其処があまりにも温かいからこそ、彼女はつい甘えてしまう。

一緒に居たいと。願わくば家族という替えがたい存在であって欲しいと。

「あれ？」

思わず、涙が零れた。きつと暖かい日差しのせいだろう。時間が時間なだけに、つい欠伸をしてしまったのかもしれない。

そう考える事にして、彼女はいつものように本を探す事にした。

そして時間は過ぎ、午後一時を回った頃だろうか。

何冊かの本を読み終え、棚に戻そうとしたのだが、上の方にあった本だった為か思うように入らない。

何時もなら見知った男性が何食わぬ顔で戻してくれるのだが、その彼も今日はまだ来ていないのだ。

これ以上無理に入れようとして本を痛ませるのは忍びないと考え、受付の人に渡そうとした所で。

「この棚で大丈夫？」

「え？」

突然の出来事に、少女の思考が一瞬空白になる。

おそらくはそう。今笑顔を向けてきた女性が、あまりにも美人だったからだろう。

腰まで届く銀髪は日の光を浴びて貴金属のように輝き、白い肌や桜貝の様な爪はアクセサリーで身を飾る女性とは比べ物にならない程に美しい。

たとえどんな宝石さえ、彼女が身に着けた所で見劣りするのではないか。そんな印象さえ思わせるほど、女性は際立っていた。

「あ、……ありがとうございます」

“ 凄い美人さんやな……どっかのモデルさんやるか？”

「いいて、いいて。それよりさ、貴女一人なの？ お名前は？」

「いえ、ここには午後に会う約束をしとる人が居って……それと、名前は八神はやて言います。お姉さんは？」

「私は霧河・アリステイナ・桜っていうの。桜かアリスって呼んでね！」

語尾を跳ねあげながら、桜ははやてに笑顔で対応する。

“ 社交的な人やなあ……、奥に居るのは彼氏さんやるか？”

さつきから桜を見ている青年について、そう思った通りに質問すると、桜はそれを笑って否定した。

「あはは！ あいつと私はそんなんじゃないって。

まあ、何て言うのかな……腐れ縁って言うか、切っても切れない関係って言うか」

「幼馴染……みたいなもんですか？」

「ま、そんなとこにしとこっかな。おーい、見てないでこっちに来てよ」

図書館にも関わらずぶんぶんと手を振って青年を呼ぶ桜に対し、青年は肩を竦めつつも言われた通りにやってきた。

「図書館では静かにするのがマナーなんだがにやー。お嬢ちゃんも相手が年上だからって言うても、正しいと思った事は言っても良いんだぞ？」

「それなら何で見て見ぬ振りとかするかなあ」

「いやいや。流石に男が急にそんな事したら、ナンパと勘違いされかねないからにゃー」。

司書の方を呼んでも良かったんだが、桜に先を越させてしまったかな。だから、そんなに拗ねないで欲しいじゃん」

「別に拗ねてないわよ。それより、自己紹介ぐらいしたら？」

「おっと失礼。俺は久住祐治って言ってもんじゃん。

桜とは……まあ、腐れ縁みたいなもんだと思ってくれれば良い」

その台詞に、はやては思わず噴出しかける。

「あれ？　なんかツボに入る様な事言っただかにゃ〜？」

「すみません。だって、二人とも同じような事言っもんやから、ついで」

ああ成程、と桜と祐治は納得する。確かにここまで息が合っていれば付き合いが長いと言うのも頷けるし、それ以上の関係ではないかと考えるのも当然だろう。

「ま。俺達に関して言えば、そういう関係になるのは有り得ないんだけどにゃー」。

それより、ほれ」

軽口を言いながら、一番上にあった本を祐治ははやてに手渡す。

「え？　これ……」

「いや、さっき本を仕舞おうとしてた時にこの本の方を向いてたじゃない？

だから次に読もうとしてたのが、これかと思ったんだが……ひよつとして見間違いだっただかにゃー？」

「あ、いえ。そうですね」

「眼だけは良いからにゃー。それより、はやてちゃんだったっけ？ 君は、」

「はやて、待たせた」

久住祐治の声を遮る様に、凜とした声が図書館に響く。

身長は百八十といった所だろうか？ 肩甲骨あたりまで伸びた髪と、銀縁の眼鏡をかけた男性だ。前髪を伸ばしている為か、右目にも髪がかかっている、全体的に黒を基調としたイメージが浮かぶ。その男性の方へはやては顔を向けると、親しみの籠った声をかける。

「御剣さん！」

「その様子だと、待たせてしまったようだな。昨日言っていた二人も連れてきた。

一人は以前病院で会ったから面識があると思うが、うちで働いている北澤直也だ。

そしてこちらが」

「今日付けで御剣さんの元で働く事になった、セレノ「アイヴィー」です。

はやてさんの事は、ここに来るまでに御剣さんから聞いています」

“うわー……外人さんかー、綺麗ななー……けど”

「あの、ちょっと聴きたいんですけど、ひょっとしてセレノさんて御剣さんの」

知らず零れ出た言葉。はやて自身何を思ってそう言ったのかは判らなかつたが、セレノは一拍の間もなく否定する。

「違います。御剣さんとはあくまでも勤務上の上司と部下の間柄であって、特別な事は何も。むしろ……」

微かな空白。ほんの少し視線を彷徨させたが、その先に誰が映ったかはやては目ざとく見出した。

「いえ、何でもありません。ともかく、私と彼は何の関係もありません。私がここに来たのは、御剣さんが貴女の話を楽しそうにするのを訊いて興味が湧いただけです」

どこかにやりとした笑みでセレノは御剣を見る。

それを内心先程の意趣返しか、と理解しつつ表面上は流したように冷静な顔つきのまま、御剣ははやてへの後方に立つ桜と祐治へと向ける。

「それで、君達は一体？」

「それはこつちとしても訊きたいにやー。見たところ保護者って訳でもなさそうじゃん？」

「そうだな……私ははやての友人だよ。君達は、」

「あ、あの。祐治さんと桜さんは、わたしが本を仕舞うのを手伝ってくれたんです」

この図書館内に満ち掛けた気まずい空気を感じ取ったのだろう。はやては二人の間に入ると、図書館に漂う粘着いた空気はすぐさま霧消した。

「すまない。君達の事を誤解していたらしい。私は御剣 仁という者だ」

「お相子だからにやー。別に気にする必要はないじゃん。俺は久住

祐治っていうもんだ。それでこっちは、」

「霧河・アリスティナ・桜よ。アリスか桜って呼んでくれて構わないわ」

そうしてこの場に居るものが全員、握手や挨拶を済ませ、一先ずはお互いの事を確認し合うと、全員がはやての方を向く。

「すまない、少し彼らと話がある。はやてには悪いが、しばらくセレノと待って貰えるかな？」

「あ、はい」

「助かる。出来るだけすぐに戻る」

言って、御剣は桜達と共に一旦外へと出る。これから先に待つ、一つの困難を打開する為に。

「で？ セレノちゃんを残して来たって事は、あの子はこっちと何の関わりも無いって事？」

「魔導師ではあるがな。だが、あの墮天使に呼ばれた訳ではない事は確かだ」

それぞれが自販機で手頃な飲み物を口にしながら、お互いの情報を確認し合う。

「要するにだ。この中で『作者』は俺一人。桜と直也、仁は『住人』って事で良いのにかー？」

「纏めるとそうなる。しかし奇縁だな。正直……連中を敵に回すの

は私だけだと思っていた」

御剣の独白に、桜はまさか、と口にする。

「女の子の泣き顔なんか見たくないもの。それに、ヴォルケンリッター守護騎士は可愛い子揃いだしね」

楽しそうに笑う桜に対し、御剣と祐治はやれやれと肩を竦めるも、直也だけは不思議そうに顎に手を当てて考えていた。

「お？ どうした直也。名前呼びは慣れ慣れしかつたかにやー？」

「いえ。そうではなく、これまでの貴方方の発言から察するに、はやてさんを何らかの外敵から守護しようと言う意図が見て取れるのですが、詳しい話を伺っても？」

「うにゃ？ ひょっとして、直也は知らない？」

「うーん……どうやらそうみたいだが。取り敢えず訊きたいんだが、はやての病気についてどう思う？」

祐治の質問に対し、眉間に皺を寄せ、苦虫を噛み潰したような表情になる。

「あれを病気とは呼ぶには、些か無理があるかと。」

恐らくは四肢麻痺の運動障害……一般的に言えば下半身不随。大腿の部分は服に隠れていても動いているのが判ることから、正確には膝から下。

脊髄損傷かとも思いましたが、上体に運動障害が見られない所や骨に異常が無い所を見るに、末梢神経に異常があるか、何か別の要因があるといったところかと」

ただ、と直也はその先を濁らせながら呟く。

「カルテを見ていないのではつきりませんが、はやてさんの症状はおかしい。

自分は数日前の彼女しか見ていないので判りませんが、若干大腿部の動きが鈍くなっている。

この手の麻痺で一般的な物は『多発性神経炎』というもので、爪先から上体にかけて麻痺が進行していくものです。

ですが、これに関しては運動障害の麻痺ではなく感覚障害の麻痺の筈。

しかもこの症状の原因は糖尿病やアルコール……九歳児の原因とは言い難いですし、悪性腫瘍や全身性血管炎の症状も見られない。

つまり……、どうしました？ 難しい顔をして

首を傾げる直也に対し、全員の意見を代弁するように桜が手を上げる。

「あー……つまり、普通の病気とは違うって事？」

「はい。原因不明の症状、というのは医学の世界において珍しくありませんが、自分が知る限りの知識では、はやてさんの症状は一般的なものと異なるかと」

成程、と全員が納得しつつ、御剣が直也に口を開く。

「君がはやての症状に関して十二分に理解している事は判った。

それを踏まえて、君に頼みたい事がある。はやての病気は既存の医学では治せない。

だから

「治す方法があり、それに協力して欲しい……という訳ですね。

そして先の会話から察するに、はやてさんの症状は第三者の人為的な物だと」

そういう事だ、と。御剣は頷く。

「勿論、これは私と君との関わり合いにも、仕事上の事にも関係の無い話だ。断って貰っても構わない」

それは本心で言っている事なのだろう。たとえ北澤直也が抜けたとしても、自分さえいれば問題はない。

少なくとも、管理局やその他の問題に関しても全て一人で片をつけられる自信が御剣 仁にはあるのだから。
けれど。

「頭をお下げ下さい。御剣さんからは、自分の様な者に幾度となく助力して頂いている。

これまでの恩を返すのみならず、八神はやてという少女を救う事が出来るのでしたら、自分は地獄への進軍も厭いません」

恩義に報いること。主と見定めた者の役に立つ事。時代錯誤な思想ではあれど、その忠誠こそ北澤直也にとっての名誉なればこそ。

「自分は 貴方の部下なのですから」

ただ静かに。胸に手を当て、頭を下げる。そして

「今はまだ行動を起こす時ではないが、詳しくは追って説明する」

その返答こそ、北澤直也の求めたものだった。

「了解致しました」

恭しく臣下の礼を取る直也に、祐治と桜は決まりだな、と頷いた。

「じゃ、さっさと戻りましょっか。女の子を待たせるのは男として減点よ」

そう言っつていち早く図書館へと戻る桜に、御剣と直也は肩を竦める。

「まったく……女性にああ言われては、本当に男として減点だな」
「ええ、まったくです」

苦笑交じりに、しかしどこか楽しげに戻ろうとする二人。
しかしそんな彼らに、久住祐治は後ろからとんでもない爆弾を投下する。

「いや、今は完璧に女だけど、あいつ元は男だぞ」

瞬間、二人の時間が完璧に止まった。

「な……」
「……ん、だと？」

最早身体が砂か氷になったのではないかと思う程に固まった二人に、祐治は悪戯げに笑う。

「そんな顔しなくても良いんじゃないかじゃー。今は完全に女なんだし、それに桜は百合趣味だから男に惚れる事はないから安心じゃん」

言いつつ楽しそうに図書館に帰る祐治。

結局。二人が元に戻ったのは、それから数分が経過してからだった。

002 求めた陽だまり（後書き）

c・m・「意外な言葉にコード・スリープ。最後の最後に爆弾投下しつつ第二話、投稿完了です」

レインシア「そして世にはこんな言葉があります。

『こんなに可愛い子が女の子の筈がない』と……」

c・m・「まあ、肉体的にも女性だし、今は心も女性だから問題ないんだけどね」

レインシア「いや、色々問題あると思うんですけど」

c・m・「まあ、桜ちゃんの話はそれ位にしておいて……H a g g a
I a zさまの感想についてなんだけど、確かにアリね」

レインシア「学園モノですか。乙女ゲーの定番ですけど、やるんですか？」

c・m・「いや、BLじゃなくて本当に番外編で学園モノをやってみようかなと。」

当分先になるけど」

レインシア「良いですね。副会長が御剣さんなら、会長ははやてちゃんですか？」

c・m・「もち。そして学校の不良グループは水玉さんのチームに

やって貰いましょう。

『ヤベエ！ あの燃え頭つて履履狩学園の水無月じゃね！？』
……って、他校の不良から怖がられてたり」

レインシア「それだと、不良のトップは誰に？」

c・m・「決まってるじゃない。勿論彼女よ。

『誰だあの女？』 『バカ野郎！！ なのはさんだよ、履履狩
学園の魔王だぞ！』」

レインシア「うわあ……」

c・m・「ちなみに裏番長は貴女だから」

レインシア「いやあ

！……！？」

c・m・「ま、ネタはこの辺りにして、そろそろ読者様のお礼に移
らせて頂きます。

久住祐治さま、神崎はやてさま、H a g a l a zさま、水玉
さま。ご感想を頂き、ありがとうございました」

レインシア「それではまた次回、お会いしましょう！！」

レインシア「……所で、マクスはどうなるんです？」

c・m・「え？ 彼は用務員よ。花壇の手入れしてるの。麦わら帽
被って」

レインシア」……色々な意味です」いい設定ですね」

003 他者という鏡 新たな家族

「なあ……良かったんですか？ 付いて行かんで」

御剣 仁達の消えた図書館。先程までの喧噪が、嘘か夢であったかのようにがらりとした図書館の中で、はやてはセレノへと質問を向ける。

「いえ。私としても、ここに居る方が気楽ですから」

それは事実本心なのだろう。セレノからは御剣や直也が居た時の緊張はない。

まるで授業参観に来た保護者を見る生徒のようだったのに対し、今の彼女は確かに肩の力が抜けていた。

「直也さんと……何かあったん？」

踏み込み過ぎた質問だとは思う。会って初日の、それも年上の女性に対する質問としては、はやての問いは失礼だと感じるものだろう。

だが、思わずそう問わずにはいられなかった理由も確かにあるのだ。

「言っておきますが……貴女のような子の思う事とは違うと思えますよ？」

「いえ。そんなとは違うんです。わたし、まだそういうのはよう判らへんのんですけど、多分セレノさんは、そういうのと違うのは判りますから」

まだ幼くとも色恋の眼かどうか、同じ女としてならば一目瞭然というものだ。

はやてにとつて問わずにいられなかったのは、セレノ自身が何かを悩んでいたと感じたからに他ならない。

「わたし、判らんことばかりで、セレノさんと比べたら全然子供ですけど、それでもそんな顔されたら力になりたいと思ってまうんです。

いらんお節介や言う事は判つとりますけど、わたしに出来る事があれば……ううん、話してくれるだけでええんです。

胸に抱えたまんまやったら、ずっと重いまんまやから」

はやては気付いていない。その思いが、自分自身に戻る物だと言う事を。

自分もまた同じ悩みを持っているが故に、セレノという少女の悩みが判るのだと言う事を。

「貴女は、見た目よりずっと大人なのね」

そうして、胸にため込んだ物を吐きだすように、セレノは深いため息を零すと、静かに呟いた。

「私は……何を望んで良いのか判らないの。

貴女より小さかった時に色んなものを無くして、この年になるまで、無くしたモノを取り戻そうとして……けど、最後の最後で全部駄目になっちゃった」

何所か自嘲する様な声。今は遠い眼差しは、過去の自分を見ているのか。それと先程までいた少年を見据えているのかは、はやてには判らない。

「私から全て奪ったのは彼。けど正しいのも彼だった」

失った者は還らない。零したモノは拾えない。そんなのは判った。それでも諦めきれなかった。

だからこそ、それを乗り越えるために戦ってきて。けれど最後には全て壊された。

そして、北澤直也は言ったのだ。

『俺を怨め。憎み赦すな』

怨める筈がない。憎める筈がない。

望みを奪われた事は赦せなくとも、北澤直也は幾度もセレノニアイヴィーの窮地に駆けつけた。彼がいなければ自分が望みを叶える暇もなく、あの日斃れた仲間と同じように、冷たい床に骸を晒していた筈なのに。

「本当に馬鹿馬鹿しい。これまでの全部を奪って、何も無くなった人間に怨めだなんて」

何もかもを失ってしまって、何処にも行けなくなってしまって、だからあの時、セレノは言ったのだ。

「だから私はお願いしたの」

……連れ出して欲しいと。別の幸せを送ってほしいと。

「馬鹿ね　私が幸せと思える事は、私自身にしか判らないのに」

セレノは掠れる様な声で零しながら、視線を天井に移した。

「なのに……何でかしら。彼は首を縦に振ったわ」

『……約束しよう。この身は、我が生は貴女に捧ぐと』

まるで絵本の騎士だ。そういう性格なのかどうかは知らないが、あれは酷く古典的なのだ。

……生まれる時代を、間違えてしまったかのように。

「きつと……私は嬉しかったのだと思う。けど、だからかもしれない。」

私は彼と、どういう距離を持つべきなのか。それがどうしても判らない」

込めるべき親しみ。望むべき願い。その形だけが、どうしても掴めない。

「つまり、恋なんとちゃう？」

「……初めに言ったでしょう。それは違つと。」

貴女も、それを理解していたから私の話を聞こうとしたのではないのですか？」

やはり夢見がちな子供だったかと、セレノは肩を落としかけ、

「けど、今の話聞いたつたら、なんや直也さんに受け容れられたいって思つとる様な……せやつたら、家族になつて欲しいとか？ お兄さんとか、弟とか」

「家族、か……」

成程、とセレノは納得する。家族を失った身からすれば、あの時包まれた温かみは確かに家族を思い返しての物だったし、近付きたいと願う気持ちも家族として接したいと思えば理解出来る。

「……ありがとう。貴女に話して良かったわ。私はセレノ。そのままで呼んでくれて構わないわ」

「はい！ じゃあ、わたしの事もはやてって呼んで下さい」

「ええ。それと、別に敬語じゃなくても良いわ」

お互いにこやかに言葉を交わしながら、徐々に親睦を深めて行く。

まだ、はやては知らない。気付いていない。セレノに投げ掛けた一言一言が、自分自身に返る物だと言う事を。

その悩みへの回答こそ、自己への言い訳であると言う事を。

「お待ちせう！ ごめんね、はやてちゃん」

「待たせてすまないにやー、はやて」

笑顔で戻ると共に弾む様な声をかける桜と祐治、しかしその一方で、何処か煮え切らない顔つきをした御剣と直也の姿があった。

「あれ？ 御剣さん、どないしたん？」

「そう言えば、直也もぎこちないですね」

体調が悪いのかと感じたのだろう。心配そうな声を駆けるセレノとはやてに対し、二人は乾いた笑みを浮かべていた。

「あ、いや。何でもない」
「右に同じく」

そういう二人だが、声には覇気がない。何とというか、まるで真冬の枯れ木のような印象さえ抱いてしまう。

が、それ以上にセレノとはやては微かにちらちらと映る視線の先を見て取る。

二名の男の先には、美しい髪をなびかせて祐治と談笑している桜の姿。

「……ひょっとして、御剣さんて桜さんが好みなん？」

何気なく、だが何処か棘のある口調で訊ねる。

「な!?!」

「え?」

半分以上は軽い気持ちだったのに対し、そこまで驚いたような反応を返されるとは、はやて自身思っていなかった。

「すみません……幾らなんでも、唐突過ぎました」

もしかや本気なのか、と、そうであったならば軽率な発言だったと俯くはやて。

しかし御剣としてはそれは大きな、あまりにも大きすぎる誤解である。

「違う! 確かに彼女は一般的に見れば九割の人間が振り向くかもしれんが、私の好みでは……」

「え〜？ ひつどいなあ、さつきからチラチラ見てたじゃん？ 私でよかつたら、見てくれて良いよん」

「クツ、さては祐治が真実を告げたのは貴様の案か！？」

「ええい、そんなつぶらな瞳で見られるな！ ともかく私は貴様に対して興味など欠片も無い！！」

「うう…… 会って間もない男性にここまで言われるなんて。

私ってそんなに魅力ないのかなあ……」

めそめそしながらセレノに抱きつく桜。 それを見て、はやては真面目に否定する。

「そんな事あらへん！ 桜さん凄い綺麗やで！ っていうか、御剣さん、幾らなんでも言い過ぎや！」

「見損ないましたよ、御剣さん」

女性陣からの非難を一身に受け、砂のようにばらばらと御剣の身体が風化していくも、寸での所で北澤直也がフォローに入る。

「そう言わないで頂きたい。御剣さんも、はやてさんの言葉に動揺していただけであって、桜さんを貶めたい訳ではないのです」

そう言っつて事態を收拾しようとするも、セレノが静かに、それは冷気のように冷え冷えとした声で問う。

「そういえば、直也も桜に対して視線を送っていましたね？」

「いや、それは……」

「いや〜 モテるって罪よね〜」

あ。いま空間に亀裂が奔った。

「成程。つまりその男二名は、桜の身体を舐め回すように見た拳句、責任から逃れようと必死になっていると、そういう事ですか？」

ますます眉の険しくなる女性陣。そんな二人の影でクスクスと笑う小悪魔まじくが一人。

“うふふ……本当にモテるって辛いわね。けど、こんな可愛い子達を置いて知らんぷりしてるんだから、これ位はしないとね”

結局、どんな弁解も言い訳にしか聞こえなくなり、図書館を出て暫らくするまでの御剣と直也の株はとことん落ちる事になるのだった。

ちなみに。

「あのオトコ女……いつか泣かす」

この日を境に、この二人に妙な連帯感が生まれ、後々非常に息の合った主従になる事は、激しく余談である。

時刻は過ぎ、夕刻に差し掛かった頃、はやての提案で皆で食事しようという事になり、スーパーで非常に賑やかな買い物を楽しんだ後、それぞれが厨房に立っていた。

「やっぱ冬といったら鍋よね。豚も安かったし、白菜も半額だし」
「桜の作る料理は上手いからにゃー。はやても期待して良いじゃん」

そう言つて鍋物使用する野菜を切り、テーブルの上にガスコンロをセツトする祐治と桜。

しかしこれだけでは寂しいし、人数も多いからという理由で御剣と直也が後ろで魚を捌いていた。

「鰯は粗を煮物にして、良い所は照り焼きにしましょう。」

鱈は処理しておきましたので、御剣さんは照り焼きをお願いします」

「判つた。はやて、生姜を取ってくれるか。臭みを消すのに良い」

「あ、ちよつと待つて下さい。いま出汁が取れるんで」

「直也、この瓶は？」

「それはみりんだ。煮物にも照り焼きにも使えるが、今はまだいい。セレノは使えそうな食器を出して貰えるか？」

慌しくも何処か暖かい場所。ここに居る誰もが、こういつた日々を過ごしたいと願わずにはいられない平穩を、はやてには何時までも続けて欲しいと切に願いながら、笑顔と共に一日を終えた。

そうして何日か経ち、六月三日。

この日　はやては非日常つねめいと出会つた。

八神はやての誕生日の前日。彼らはいつも通りのように図書館へと集まり、談笑を終え、スーパーに寄り、食事を作る。

それは数日だけとはいえ、毎日のようにやってきた行為。はやてにも、御剣にも、ここに居る誰もがそれを当たり前のように行い、これからも続けて行きたいと望んだ道。

退屈であるが故に代え難い平穩。どれ程特別でありたいと願っても、最後にはより縋る日常。

その一つ一つを、はやても、彼らも嘔み締めながら何食わぬ笑顔で今日を過ごす。

セレノとはやてを除いた全員が今日この日を以て、非日常うふじょうへと臨む為に。

「すみません。つい楽しゅうて、長い事引きとめてしもて」

「いや、我々も充分過ぎる程楽しんだのでな、はやてが気に病む事ではない」

「そうそう。祐治なんかご飯三杯もお代わりして、夜食まで作っちゃったんだし」

桜の言葉に、どつと笑いが巻き起こる。ああ、こついつのは良いな、と誰もが思っていたのだろう。

午後十一時五十五分。残り五分で一日が終えようとしている所で、御剣達ははやてに別れの挨拶をし、一旦外へと出る。

「? どうしたのです。普段でしたら各自解散するでしょうに」

セレノの疑問に、一同は顎に手を当てて首をひねる。勿論演技ではないが、全員の顔つきがあまりにも真剣であった為、セレノは彼らを疑うより先に、何かあったのではないかという疑問を感じ取った。

「時刻は？」

「十一時五十九分。微細だけど魔力を感じるにやー」

まさか自分を追ってきたのでは、と身構えるセレノだったが、御剣はそれを違うと否定する。

「いや。この流れは、はやての」

そして、はやての自宅から店頭とは明らかに違った光彩が漏れ出すと共に甲高い悲鳴が響く。

「クソ！」

先陣を切ったのは御剣、次いで直也だ。幸いな事にまだ鍵はかかっていなかったらしく、靴を脱ぐ間も惜しいとばかりに駆けこむ。

少女とはいえ、女性の寝室に入る事への抵抗はあったが、有事という事で自分達に言い訳をしながら踏み込む。

瞬間。

「ッ」

それは芸術と呼んでも差し支えぬであろう程の、美しい銀の軌跡。しかし、目の前に迫る危険以上に、その太刀筋を魅せる女性に斬られる者は目を奪われかねないだろう。

ポニーテールに纏められた髪は紫苑。開かれた瞳は鷹のような鋭さで在りながら、しかし女性としての美しさは損なわない。

異性であれば、否、たとえ同性であったとしても、この女性に斬られたならば文句は言えぬのではないかと感じてしまう女性の剣。

それを、完璧に出遅れた桜の刀が受け止めた。

「うわっと！ あっぶな……」

間の抜けた、それこそ緊張感の欠片も無い声それに対して女性が目を見開きかけるも、すぐさま後方の赤毛の少女に合図を送る。

「あいよつと。覚醒していきなりあたしらの主を狙うたあ、抜け目のねえ連中だぜっ……と！」

振り下ろされる鉄槌。魔力の唸りを周囲に感じ取らせる程の一撃を放つ少女に対し、セレノの矢がそれを防ぐ。

「室内ではお静かに」

おそらくは互いに小手調べだったのだろう。完全に伯仲する両者に対し、流れを優位にすべく褐色の大男の拳が唸る。

「引け、ヴィータ」

この距離において弓は無意味。そもそも接近戦において自らを凌ぐのは世にそうはいないという自負を込めて放たれた拳は、確かに不可視にして暴虐の一撃となるだろう。

尤も。

「はいはい。ちょっと待って貰えるかにゃー？」

その拳を、祐治は手にした西洋剣で叩き落としていたが。

「皆下がって！ とにかく、ここじゃ拙いわ！」

おそらくは後方支援が担当なのだろう。他の三人と比べ、明らかに戦士系とは言い難い金髪の女性が指揮を取ろうとした所で、

「少し待て。君達と争う気はない。直也、はやての症状は？」

「呼吸、脈ともに安定。瞳孔もしっかりしています。」

おそらくはショックによる気絶ですので、すぐに目を覚ますでしょう」

両目に光を当てていたペンライトのスイッチを切り、脈を図る為に首筋に当てていた指を離すと、直也はそう断言した。

「飲み物でも作って待つとしよう。君達も、話したい事があるだろうからな」

そうして、実に呆気なく　　とはいえ、闖入者を訝しむ眼で四人の騎士？　は見ていたが　　一先ず台所に集まる事になるのだった。

「それで、お前たちは一体何者だ。身のこなしといい、只者ではあるまい。」

我らの主に徒為す者ならば、

「だーかーらー！　敵じゃなくて、はやてちゃんのお友達なんだってばー！」

眼が覚めたら、はやてちゃんに訊いてくれれば済むからさ。そんな警戒しないでよ」

机をバンバンと叩きながら涙目で応える桜。どうもポニーテールの女性に睨まれるのが辛いらしい。

一方。

「だが、一般人という事はあるまい。そこの二人の剣。ベルカのものだな」

「ああ。俺と桜のデバイスは確かにベルカ式だにゃー。ただ、あんた達のと違って非殺傷設定が付いてるから、近代ベルカ式ってことになるんだけどな」

祐治に関しては、あくまで飄々とした姿勢を取りつつ、律義に質問に応えていたりした。

「で？ お前のはあたしらのと違うな。ミッドチルダ式……っっていうのか？」

「ええ。過去、貴方達ベルカ式と勢力を二分化した魔法体系。私の養父も、貴方達と同じタイプのデバイスを使ってたわ」

「ふうん。ま、一対一ならベルカの騎士に負けはねえけどな」

「戦い方次第でしょう？ 貴女程度なら私でも勝てる」

「あんだとお！！」

他に二組と比べ、険悪な状況にあるセレノと赤毛の少女。

どうやらこの二人はお互い馬が合わないらしく、というより、祐治と桜が友好的過ぎるのだが、今にも一触発発とばかりに立ちあがるうとし。

「飲み物はどうか？ 気分が落ち着く」

ことりと、静かな動作で直也がマグカップを置いた。

「飲んでくれ。不味ければ淹れ直す」

その言葉に渋々と両者は口を運ぶと、途端に明るい顔になる。

「美味しい。ミルクケーキね」

「甘い」

「バナラエツセンスと蜂蜜があつたからな。買ってきて正解だった。桜さん達もどうぞ」

「お　気が利くー！」

「これは好感的にポイント高いんじゃないかにゃー」

そんなふざけた事を言いながら口を運ぶ二人。味にも問題はなかつたらしく、すぐさまおかわりを要求してきた。無論。

「……あたしも」

「すぐにお持ちします」

その中には先程までいがみ合っていた赤毛の少女もいたりする。

「……慣れているな」

「躰は餌付けから始めるものですので」

と、北澤直也は他の人に聞こえないよう御剣と言葉を交わしていたりする。

ちなみに御剣が飲んでるのはコーヒード。彼だけ一から豆を挽いた物を持ってくるあたり、主に対する特別ぶりが伺える。

「さて様子を見てきたが、そろそろはやてが起きる。

その前に、君達の事を訊かせて貰えないかね。流石に我々ばかりが状況を提供するだけでは、話が遅々として進まんなのでね」

御剣の言葉に、ポニーテールの女性は良いだろうと口を開く。

「我らは闇の書の収集を行い、主を護る守護騎士。夜天の主の元に集いし雲、ヴォルケンリッター」

「えーと。つまり夜天の主がはやてちゃん、貴方達は闇の書っていつものを收拾するための……って、セレノちゃん。どうしたの？」

本来この場におけるイレギュラーにして部外者ともいえる少女、セレノ。

彼女はポニーテールの少女の発言を聞いた瞬間、厄介な事になったと頭を抱えた。

「『闇の書』ね……私の元居た所でも、貴方達の事はよく聞いたわ。というより、貴方達が原因で私と同様に組織に入った人もかなりいるのだけど……」

そう言って、セレノは話す。闇の書の在り方と真実。かつて自分が他の団員から教わった、知識の全てを。

「闇の書……管理局において第一級指定ロストログアに認定された禁忌の存在であり、データベースには『闇の書（Buch der Dunkelheit）』と登録されてるけど、本来の固有名は『夜天の魔導書』」。

転生機能と無限再生機能を持ち、主と共に旅を行い、各地の偉大な魔導師の技術を収集し、そして研究するために作られた収集蓄積型の巨大ストレージデバイス」

けれど、とセレノは何処か恨みがましい声で説明を続ける

「歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変……というより改悪ね。それが個人によるものか集団によるものかは判らないけど、結果

として効率よく破壊の力を使う為の『闇の書』へと変化した。

その改悪によって旅をする機能が転生機能に、復元機能が無限再生機能へと変化してしまった。

この機能のお陰で、闇の書の完全破壊は不可能。しかも持ち主以外によるシステムへのアクセスを認めない。

無理に外部から操作しようとする、持ち主を呑み込んで転生。だからプログラムの停止や改変ができないので完成前の封印も不可能。

完成後は、持ち主が闇の書の意志であるマスタープログラム管制人格と融合することで、巨大ストレージデバイス『闇の書』に蓄えられた膨大な魔力データの魔力を行使できるの。

当然蒐集した対象の魔法も使え、莫大な魔力がある分オリジナルを上回る威力を生み出す可能性もあるし、勿論サポートも闇の書の意志が行ってくれるわ。

ただし所有者に選ばれても、蒐集によって魔導書を完成させた後に管制プログラム・防御プログラム双方の認証を受けなければ管理者権限を得られないし、機能の全てを使用することはできない。

そして自律思考を持たない防御プログラムの破損によって、この認証が正常になされず幾度も暴走を起こしてるわ。

……要するに、究極の欠陥兵器なのよ。使用者もその周りに居る人間も闇の書の暴走に巻き込まれて死んで、闇の書自身は壊れても勝手に戻って勝手に新しい主を探す。

害悪以外の何物でもない死の魔導書。それが闇の書の正体よ」

そこで、とセレノは言う。それは極めて冷淡に。そして誰よりも真面目に。

「私はここで貴方達を抹殺し、闇の書を破壊する事を勧めるわ。

そうすれば、少なくともはやてちゃんの命は助かる。けど……」

「それは事態の解決にはならないんじゃないかやー。」

仮にここで騎士さん全員ぶつ殺して、闇の書をびりびりつと破った所でまた別の子が犠牲になるんだろ？

それじゃセレノの知り合いよろしく、泣いちゃう人たちが出るんじゃないかじゃー？」

そうね。とセレノは俯く。しかしそれ以外に方法がないのも事実である為、八方塞である事に変わりはない。

だが。

「いや。手はある」

そんな事を、御剣は言つてのけた。

「そうね。何とかなるんじゃない？」

そして、それに同意するように桜も残ったミルクケーキを啜りながら楽観的な発言をする。

尤も、そんな楽天的な事態ではないのは守護騎士としても理解している。だからこそ半ば激昂するように問うた。

「一体どうしろというのだ!!」

「そりゃあれだにゃー。まずは闇の書を蒐集する」

「それは無駄ではないのか？」

「話は最後まで聞いて欲しいにゃー。多少強引になっちまうが、その後はやてに闇の書の改修をして貰うじゃん」

出来るものなのか、と一同が目を向けるも祐治はあくまで飄々とした様子で、さあ？ と両手を上げる。

「完全覚醒状態でマスターって認めて貰えばいけるだろうにゃー。」

まあ、問題は暴走した時だが、ここに居る連中は人外魔境つついか、もはや人間じゃねーつつつか、ぶっちゃけ剣と槍の時代にやってきたモビルスーツみたいな連中だから問題なし」

私はただの魔導師だぞ、とセレノが愚痴を零したのは流された。

「つまり……我らの主を助けるのに協力して貰える、と？」

「そゆこと！ ねえ〜……さっきからずっと話してるのに名前とか聞いてないんだけど、教えてよー」

空気をぶち壊すような発言だが、場を和ませるのには充分だったのだろう。

何より両者にとって、救う為の道筋が出来たというのは互いの心境からすれば非常に喜ばしい事態といえる。

「じゃ、自己紹介と……」

「待て、はやてが起きた」

御剣の言葉に、一同が振り向く。

「あれ？ 御剣さん、さっき帰ったんや……って、夢や無かった！？」

どうやら、突然現れた守護騎士の面々を悪夢か何かとでも勘違いしていたのだろう。

取り敢えずどう説明したものかと、それぞれが頭を悩ませるのだった。

結局、一同がはやてに話したのは、この世には魔法というものがあり、はやてには生まれながらの才能がある事。

そして、その才能が原因となり、『闇の書』の主に選ばれた事。守護騎士は、闇の書の主を護る為の存在である、といった事だ。

無論、はやてにはそれ以外の事実は告げていない。闇の書が欠陥を持った悪夢の存在である事も、その障がいの原因が闇の書にあるという事も。

闇の書の真の名が 夜天の書である事も。

「うーん……それ、ほんまなん？」

「信じがたいのは尤もだが、全て事実だ。現に彼ら守護騎士はこうして存在し、私を含めた彼らも、『魔法使い』ではないものの魔導に傾倒している」

「せやったら、あれかな！ 箒に乗って空飛んだり、呪文唱えたら火をおこしたりも出来るん？」

目をキラキラさせながら尋ねる所は、やはり子供といった所だろう。

そんなはやての期待に肩を竦めつつも、御剣は口を開く。

「飛行に関しては術式にもよるが、少なくとも今のはやてには使えんよ。

才能云々の問題ではなく、体力的にな。尤も、ここに居る全員にはそれが可能だろうし、火どころか水や雷もお手の物だ。

ただ……下手をすれば災害になる危険性があるが」

その言葉に一同が苦い顔をする。ここに居るのは幸か不幸か力の

強すぎる存在ばかりなのだ。尤も、殆どの属性を手軽に扱うと言うのは、この中では御剣ぐらいのものだろうが。

「そら、おっかないなあ……」

「なに。力など所詮使い方次第だ。豪雨で街を呑み込むか、干ばつ地帯に雨を降らすかはそのもの個人の意志だろう？ 少なくとも、無暗やたらに力を振りかざす者はここには居らんよ。

それより重要なのは……これまでの話を理解して貰えたかどうかなのだが」

流石にここまで説明して何も判りませんでは困る。少なくとも、彼ら守護騎士や魔法の存在を認めて貰うぐらいはしなければ、一向に話が進まないのだ。

「あんま詳しい事は判らんけど、わたしが判るのは一つやな。

闇の書の主として守護騎士皆の衣食住、きつちり皆の面倒見なあかん言う事や。幸い住むところあるし、料理は得意や」

はやての言葉に全員が黙り、そして同時に思った。

……八神はやては、実はかなりの大物なのではなからうかと。

「あはははははは！ そりゃあ良い。お前ら良い主を持ったにや！ 会ってそうそう生活の面倒を見るなんざ、大人だって言い切れるもんじゃないぜ」

爆笑する祐治に対し、一同は一瞬苦い顔をしかけるも、それが悪意によるものではなく、はやてを称賛するものだと言ったのだろう。それぞれがくすくすと笑いながら、目を合わせる。

「そうねー。あ、生活面は私達もサポートするわよ。」

流石に九歳の女の子に家事全部やらせる程、落ちぶれてないし、お金も余ってるから」

「そうだな、私も店は開ける時の方が少ないし、守護騎士の面々も暫くは生活に不慣れな点が出るだろうから、出来るだけ会いに来るとしよう」

桜と御剣の言に対し、はやては感謝しつつも、はたと思い返す。

「けど、御剣さんはともかくとして、桜さんや祐治さんとかは学校の方は良えの？」

「俺と桜は色々あって学校には行ってないんだにゃー。ま、行くこうと思えば編入手続き取って何時でも通えるし」

「じゃあ、セレノさんと直也さんは？」

「私は御剣さんの元で務めさせて頂いて、そちらの心配は何も」

「俺は休学扱いだよ。はやてさんは通っているから知っていると思うが、一応海鳴大学病院の生徒という事になる」

尤も、そこに入るまではそこより上の大学だったのだが。

「医大生やったんですか……なんか以外やな」

「何だと思っていたのかな？」

「……怒りません？」

場合によるが、と言いたい所だったが、それを言わずに先を促す。

「その……てつきり中学生かと」

「……………」

瞬間、辺りが爆笑の渦に包まれた。

「あははははははははは

!!!!」

「ちょ、祐治笑い過ぎだつて……けど大学生にもなつて中学生に間
違われるつて、ぶぶ」

「二人とも、そんなに笑つてやる事はあるまい。如何に背丈が低く
童顔とはいえ……しかし、中学生とはな。以前聞いた話では十九と
の事だつたが」

笑つてやるなど言いつつ、当の御剣さえ笑っているのだから話に
ならない。

結局。笑いが収まるまで直也はただ黙殺するだけだった。

そして。ひとしきり笑いが終わった後、これ以上ない程に気まず
い空間が辺りを包む。

「ねえ……機嫌直してよー」

「何の事ですか？ 桜さん」

非常に、これまで見た事も無い様なスマイルに半ば引きつつ……
というより涙目になりながら桜が他の面々に振り替える。

「……ちょっと、どうすんのよ。あれすごく怖い！ ていうか恐い
！ もうなにがなんだか判らない位怖いんですけど……」
「……ちょっと笑い過ぎたにゃー。誰か生贄になつて貰うしかない
んじゃない」

「……その場合は適任は君だな。あの中で一番大声で笑っていたぞ」

「……やっぱ、素直に謝るのが一番やないかな？」

一同が小声で相談しつつ、ちらちらと様子を窺う。付き合いこそ短かったが故に笑顔を見る機会が少なかったものの、流石にあそこまで満面の笑みを見せる直也など誰もが初めてなのだ。

おそらく、宮本千草がこの場に居たらこういった事だろう。

取り敢えず諦めろ、と。

しかし、その空気を壊したのはあるう事が直情的に思えた赤毛の少女だった。

「なあ、別に若く見られたって良いんじゃないか？」

「え？」

「あたしらは……ほら、ずっと色んな主に仕えてて変わんねーままだったけどよ。それでも見てくれがどうだからって、お前自身が変わる訳じゃねえだろ？」

「そうか……そうだな。ありがとう。……そう言えば、まだ自己紹介して貰っていなかったね」

「鉄槌の騎士、ヴィータだ。あ、言っとくけどガキ扱いすんなよ、見た目こんなでもお前よりずっと年上だからな」

その言葉に直也は思わず破顔する。先程まで見た目は関係ないと言っていたが、成程、確かにそれはヴィータ自身にも言えることである。

「北澤直也と申します。先程の言葉は肝に銘じておきます、ヴィータさん」

怒りは通り過ぎ、場は和んだかに見えた空間。しかし。

「うーん……ひょっとして直也つてば判つてて怒つてたのかしら？
きゃ、何人もの女の子を敢えて引き込ませようとするなんて！
しかも今度はあんな見た目うら若い子まで」

この空間に、再び亀裂を奔らせる小悪魔^{オウゴウマ}。

「成程……つまりーから十まで計算づくだったと。

小奇麗な顔をしています、逆に性質が悪いですね。ああいう女性
の敵はここいらで心臓を射抜いておきましょうか？」

「止める、話が進まん！！」

そうこうしている内に時間が過ぎ、気付けば午前一時。

「さて……いい加減話を進めさせて貰う。ここまでの事を踏まえた
上で、君達は八神家に住み、我々は君達が生活に慣れるまで協力す
ると、異論は？」

「ありません。元より我々は、主はやてを護る為に在るのだから」

守護騎士全員の意志を代弁するようにシグナムは述べる。

そして御剣達もよし、と頷いた。

「では夜も遅いので、最後に時自己紹介をして解散としよう。私は

御剣 仁という」

「^{ウォルケンリッター}守護騎士が将、剣の騎士シグナム」

「へえ、シグナムか……良い名前！ 私は霧河・アリスティナ・

桜。アリスか桜って呼んでね、シグナム！」

「あらあら、シグナムったら随分懐かれたわね。私は守護騎士ヴォルケンリッターの参謀、湖の騎士シヤマルといます」

「こりやまた随分美人の参謀さんだにやー。俺は久住祐治ってもんだ。呼び方は好きにしていぜ」

ヴォルケンリッター「守護騎士、鉄槌の騎士ヴィータだ」

「つまり平って事かしら」

「あんだとお!?!」

「二人とも、落ち着いてくれ。というよりセレノ、そう突っかかる事はないだろう」

自分は北澤直也。呼び方は祐治さん同様、好きにして頂いて構わない」

ヴォルケンリッター「守護騎士、盾の守護獣ザファイラ」

そして、一同が目を向ける。この場における主役、これから先に続く困難の物語……その主人公ヒロインへ。

「は、恥ずかしいから、そんな見んといて……」。

わたし、八神はやて言います。守護騎士の皆、御剣さん、桜さん、祐治さん、直也さん、これからよろしゅうお願いします」

そうして、物語は幕を開ける。日常から非日常へ。確かな安息の裏に険しい試練を隠しながら、第二部の物語は、ここに幕を開けるのだった。

003 他者という鏡 新たな家族（後書き）

c・m・「色んな意味でようやく始まりました、第三話、投稿完了です」

レインシア「ていうか、あれですね。セレノさんって恋愛感情は本当に持ってないんですか？」

c・m・「それはこの話のタイトルとはやての心境から察して欲しい所ね。」

それ以上に問題なのが直也君を兄にするか弟にするかだけど、それは別として、桜ちゃんが小悪魔すぎだZE」

レインシア「いかにもって感じのムードメーカーですよ。居るだけで周りが楽しくなりそうです」

c・m・「まあ、その桜ちゃんのせいで御剣さんや直也君に対する女性陣の好感度が下がってるんだけどね」

レインシア「所で今回はNGシーンがあるとのことですけど？」

c・m・「いや、今回誤字が出まくっちゃってさー……その時思ったのよ。」

あれ？ これネタに出来るんじゃないかね？って」

レインシア「身も蓋も無いですが、取り敢えず見て行きましょうか」

c・m・「もち。それじゃあ、NGシーン集、スタート」

×××

冒頭シーン。

「なあ……良かったん？ 付いて行かんで」

御剣 仁達の消えた図書館。先程までの喧噪が、嘘か夢であったかのようにがらりとした図書館の中で、はやてはセレノへと質問を向ける。

「いえ。私としても、ここに居る方が気楽ですから」

それは事実本心なのだろう。セレノからは、御剣直也が居た時の緊張はない。

「アア……そういえば昨日結婚したんやったっけ」

「……悪夢よ」

×

それからちよつと後。

「馬鹿ね 私幸せと思える事は、私自身にしか判らないのに」

セレノは掠れる様な声で零しながら、視線を天井に移した。

「エビ天か？」

「あげませんよ？」

×

図書館を出た所

「あのオトコ女……いつか泣かす」

この日を境に、この二人に妙な連帯感が生まれ、後々非常に息の合った主従になる事は、激しく余談である。

ピロリン 御剣 仁に対する八神はやての好感度が2下がった。
セレノに対する好感度が4下がった。

北澤直也の好感度が58上がった。

北澤直也の個別ルートに入りました。

×

八神家、突入時

「ッ」

それは芸術と呼んでも差し支えぬであろう程の、美しい銀の軌跡。しかし、目の前に迫る危険以上に、その太刀筋を魅せる女性に斬られる者は目を奪われかねないだろう。

ポニーテールに纏められた髪は紫苑。開かれた瞳は鷹のような鋭さで在りながら、しかし女性としての美しさは損なわれない。

異性であれば、否、たとえ同性であったとしても、この女性に斬られたならば文句は言えぬのではないかと感じてしまう女性の剣。

それを、完璧に出遅れた桜の刀が受け止ようとし……

「あ。ヤベ、ミスった」

ざっくりと、ドリフのコントよろしく頭に剣が突き刺さった。

「医者

！？」

x

そのすぐ後。

「あいよつと。覚醒していきなりあたしらの主を狙うたあ、抜け目のねえ連中だぜつ……と！」

振り下ろされる鉄槌。魔力の唸りを周囲に感じ取らせる程の一撃を放つ少女に対し、セレノの矢がそれを防ぐ。

「室内ではお静かに」

「あ

「え？」

弾かれ、くるくると回転する矢。それはどういった奇跡か、八神はやてに突き刺さってしまった。

「はやて

！……！……！？」

x

守護騎士との会話シーン。

「飲んでくれ。不味ければ淹れ直す」

その言葉に渋々と両者は口を運ぶと……途端にヴィータの顔つきが変わった。

「このあたしに、こんな不味い茶をだすとはどういう事だ!!」
「も、申し訳ありませんでした、今すぐ淹れ直します!!」

北澤直也のお茶は大変不味かったようです。

x

守護騎士との会話シーン TAKE 2

他に二組と比べ、険悪な状況にあるセレノと赤毛の少女。

どうやらこの二人はお互い馬が合わないらしく、というより、
祐治と桜が友好的過ぎるのだが、今にも一触発とばかりに立ち
あがるうとし。

「飲み物はどうか？ セレノが君にと頼んで来たのでね」

「あたしに？」

途端に明るい顔になるヴィータ、そこへ。

「これが北澤直也から貴女への挑戦状だそうよ!!」

何故かセレノがヴィータの顔にミルクセーキをぶっかけた。

「この野郎……表出るや童顔野郎!！」

ピロリン 北澤直也によるヴィータルートが消滅しました。特殊条件が達成された為、新ルートととして、久住祐治による桜ルートが追加されました。

×××

レインシア「カオスすぎる……」

c・m「前半は誤字が生んだ産物。後半はおふざけNG。続くかどうかは作者次第です」

レインシア「続かない事を祈りましょう……」

c・m「今日のネタはこの辺りにして、そろそろ読者様のお礼に移らせて頂きます。

久住祐治さま、神崎はやてさま、Haggaiさま。ご感想を頂き、ありがとうございます」

レインシア「それではまた次回、お会いしましょう!！」

「さて。方針が決まったのは良い事だが、何もいきなり余所に行つて回収する必要はないよにゃ〜?」

守護騎士の面々が八神家の厄介になると決定した翌日　というより、決定してから一夜を迎えただけなので実質今日なのだ。御剣達が夜にならなければ来れないと言う事から、一先ず桜と祐治が玄関に来ていた。

とはいえ、家の中に入らないのには事情がある。

「とどうと?」

「つまり、私達のリンカーコアから魔力を抜いちゃえば良いって事。幸い私達は魔力資質が高いし、一気に全部抜かずに献血みたいに身体に影響がない分だけ回収すれば問題ないわ」

「しかし、一度收拾を行った者からは二度と回収が出来ない。これは魔導師であれ生物であれ例外が無いのだ。できれば……」

「全部頂戴って事? シグナムの頼みは聞いてあげたいけど、うーん……どうする?」

「取り敢えずお試して事で良いんじゃないかにゃー? 数が少なすぎたらその分働いて貰うって事で」

あくまで協力して貰っている立場である以上、これ以上の無理を言つべきではないと判断したのだらう。

仕方ない、と肩を落とし、横に居たシャマルに回収を行つて貰う。

「それじゃ、力を抜いて下さい」

「OK！ 何時でも来て！」

と、余裕ぶっこいていたのだったが……。

「うげ！？ 気持ち悪い……」

「そこらへんは我慢だにゃー。しかし何だ、これって何か猟奇殺人の現場みたいじゃん？」

祐治がそう言いだすのも無理からぬことだろう。魔力を取り出す為とはいえ、胸から腕が生えるなど真つ当な神経であれば直視したくない場面である。

「まさかここまで南斗水鳥拳を使いこなしているとは……もうお前に教える事は何もない」

「は、はあ？」

「シヤマル、これはギャグだから本気にしないで良いにゃー。それより、ページは何枚貯まったかにゃ？」

そう言いつつ確認すると、凄まじい勢いで文字が書き込まれていた。そのページの総数。

「すごい……片手間で四十頁、これなら今後の収集も相当楽になりますよ！」

「駄目……嫁入り前に胸を弄られるなんて、もうお嫁にいけない……」

「……シヤマルちゃん、責任とってくれる？」

「ええ！？」

「そういうジョークは笑えないにゃー……というか、口説くなら誠意を持たなきゃ駄目だぜ？」

「判ってるって。ちよっとからかっただけじゃない」

そう言いつつも、桜の眼は笑っていない。おそらく、先程の言葉をだしにセクハラの一つでもかまそうと企んでいたのかもしれない。

「じゃあ、次は祐治さんをお願いして良いですか？」

「OKOK。ドンと来るじゃん」

言いつつ両手を広げる祐治。先程に比べ、若干抜く量を多くした為か彼は五十頁も集まった。

「けた外れだな……」

「うげええええええ……」

「ちよ、汚いわよ祐治!？」

どうやら身体は無事だったものの、不快感は相当だったらしい。地面に両手を付いて戻そうとする祐治を桜は強引に首根っこ捕まえて引き揚げ、トイレに投げ込んだ。

「やっぱ十頁の差はでかかって事かしら？ 気をつけないとはやてちゃん家が危ないわね……」

主に衛生面において。

「あれ？ 桜さん来とったん？ シグナム、お客さんを外で待たせたらあかんえ」

「申し訳ありません、主はやて。罰は何なりと」

「うっん、判ったらええって。それより、もうすぐ食事ができるから皆で食べよな？」

桜さんも一緒にどうや？」

「それじゃ、お言葉に甘えてっと。おじゃましまーす!」

声を弾ませ、八神家の敷居をまたぐ桜と、その邪気の無さにどこか穏やかな心地になるシグナム達。

きつと、これからもこうであれば良いのにとお互いが思いながら食卓に向かうのだった。

一方。

「おーい……その穏やかな生活の犠牲になってる自分の事を忘れな
いで欲しいにやー……」

遠くで聞こえる祐治の主張に、耳を貸す者はいなかった。

「え？ 騎士甲冑？」

「はい。我らは武器を持っていますが、甲冑は主より賜わらなくてはなりません」

食事を終え、これから衣類等に関してこれからどうするかを相談し始めた際、シグナムが唐突に口を開く。

今のはやての生活が生活なだけに、本来であれば其処まで急ぐ必要はないと考えるのが普通だろうが、生憎とそうは言っていられない。

闇の書は一定の期間魔力が補充されなければ、主のリンカーコアから魔力を奪う。

八神はやての足が不自由であるのもそれが原因であり、一刻も早い収集が必要と言えたが故の提案である。

「自分の魔力で作りますから、形状をイメージして下さい」

「そっか……せやけど、わたしは皆を戦わせたりせえへんから……」

シヤマルの言葉に、はやては悩む。彼女からすれば、シグナム達を戦わせようという考えそのものが無いのだ。

平和な国と時代に生き、安息を求める少女にとってそれは当然と言えばそれまでの事である。

「あ。服で良えか？ 騎士らしい服」

「はい。構いません」

「じゃ、シグナム達の洋服探しが終わったら資料集めに行く？」

桜の提案に、はやてはそやね、と笑顔で応える。今のシグナム達の服はジャージであり、これは間に合わせの為という理由で桜と祐治が用意したものだ。

勿論サイズを図ってから洋服を持ってくる、という事も出来たのだが。

「やっぱ、こつこつのは楽しまなきゃね」

「……桜、取り敢えず涎を拭くじゃん」

そんな会話が、影で交わされていた事は誰も気付かなかった。

「ねえねえ、シグナム〜！ 次はこれ着てみてー！」

「桜。別に私は下着などどれでも……」

「駄目よ、女の子ならこつこついうとこに気をつけなきゃー！」

終始押し気味の桜の言葉に困った顔をするも、シグナムも満更ではないらしい。

やはり女性陣にとって買い物というものは非常に心地の良い時間であると同時に娯楽として申し分ない位置に在るのだろうと、久住祐治は両手いっぱい袋を持って考える。

「ま。男が俺しか居ないって時点で判ってたんだけどにゃー……」

シグナムやシャマルの色んな服が見られると興味本位で付いて行った祐治だったが、それは間違いだったと考えるべきだろう。

中途半端な気持ちで女性の買い物に付き合った場合、男に待つのは退屈と肉体労働だと言うのが相場である。

「……しかもいきなり下着売り場とか、俺が入れないじゃん」

現段階において祐治が持っているのは当面の食材であり、洋服類は一切ない。

つまり。これからさらに、そして本格的に荷物の量が増えると言っ事である。

「ザフィーラは犬形態だから洋服の心配が要らないんだよにゃー……」

お陰で男物の洋服さえ見る事が出来ないまま立ち呆けを喰らう羽目になっている。しかも。

「うわ！ シャマル大つきい！ これだと形が崩れない様にするにはデコルテブラかな？ けど私としては、こっちのシエルフカッ プブラとか露出度の高い奴着けて欲しいんだけどな……」

“うおお！？ 専門用語ばっかで何か判らないけど、すげー気になるにゃー！！”

と、下着売り場に視線を向ける訳にも向かず声だけ聴いている祐治に対し、桜はというと。

“くっくっく……声だけで悶々としているようね祐治。暫くそこでお預け喰らった犬みたいにしていなさい。シグナム達の身体は私が存分に堪能しておくわ”

……などと心の中で考えていたりする。

「さあて……ヴィータちゃんはこっちのベビードールに行ってみる？」

「えー？ いや、あたしはいいつてー！！」

「そうね……まずはトップじゃなくてボトムからよねえ　じゃ、タンガから行ってみましようか？」

桜が手に持っているタンガとは前面部分が小さいだけでなくバツクやサイドが細く構成された下着であり、ブラジルサンバを源流とした下着でもある。

外見年齢が八歳の少女に着せる様な下着では断じてない。しかも黒。

「そんなもん恥ずかしくて着れるか

！……！

「あ！？ コラ逃げるな

！……！

そして店内で始まる壮絶な追い駆けっこ。ちなみにこのせいで彼女達は店員とはやてからたつぷり絞られる事になり、ヴィータの下着は桜の希望でボトム柄がオレンジのストライプになった事を除けば普通の下着に落ち付いた。

「ち。Ｔバックも用意してたのに……」

「桜も懲りねーにゃー……」

場所は変わり婦人服売り場。

「ねえ？ 祐治はシグナムに着せるならチャイナ服とタイトスカ―トどっちが好み？」

「シャマルでも良いけど」

「要するに脚を見たいだけじゃねーのかにゃ？ それ」

祐治のツッコミに対し、桜はそんなものは前提条件よ、と応える。

「けど、どっちかっていうとシャマルはお尻を強調させたいのよね

……」

「素直にカジユアル系じゃ駄目なのかにゃ……」

ちなみに祐治の発言に関しては、はやてがしっかりと訊いており、予防策としてシグナム達の服を一通り買い込んでいたりする。

「ところで、どうしてヴィータの名前は拳がって無いのかにゃ？」

さつきまで真っ先に追い詰めてたくせに、と祐治が零すも、桜は不敵な　　というより不気味な笑いを零す。

「ふっふっふ……私があんな完成度の高いロリッ子を放っておくとも思っただの？」

「思わないにゃ」

だって変態モード入ってるし、という発言は心の中に飲み込んだ。

「見なさい！　これが私の求めたヴィータ専用衣装よ！」

そう言っただけで試着室の扉を勢いよく開けると、中には赤と黒のゴスロリファッションに身を固めたヴィータの姿があった。

「……いいけど、これってバリアジャケットの時と大差ないんじゃないかじゃ？」

周りに聞こえないよう小声で話す祐治に対し、桜は勝ち誇った笑みを浮かべる。

「ふ。そう思うのが素人の浅はかさ。良い？　私はヴィータの服は通常より少しサイズを大きめにしたのよ。主に胸の部分を」

「つまり？」

「上から覗けば見える。そしてスカートも膝から上しかないミニスカバージョン！　これが萌えずにいられるか！！」

そう言いつつ桜は次の衣装のセットに取りかかる。要は他の者に似合っているかどうかの判断だけをさせ、反対票が出る前に買ってしまうおうという魂胆である。

「次はこれよ!」

またしても開けられる扉。今度も赤であることは変わりないが、その衣装ははやてや祐治にも見覚えのある物である。

俗に言うアリスファッション。不思議の国のアリスの衣装は現在でもスタイルを選ばない点や可愛さなどから一定の評価を受けているが、やはりヴィータの様な少女にこそ似合う衣装といえるだろう。

「流石に赤が置いてあるとは思わなかったけど、最近のデパートは侮れないわ」

「……むしろどういう客層を想定しているのにかー……?」

婦人服で一通りの買い物を終えた後、一同はおもちゃ店へと立ち寄った。

「ここは?」

「良えから良えから。こういうところに、それっぽい材料があるもんやで?」

ここに来るまでに話の上がっていた騎士甲冑。その構想の為に、やはりここに足を運び、様々な物を物色する。

やはり手っ取り早いのはゲームのキャラクターだろうかと考えていたが、はたと後ろを見やると、そこにはぬいぐるみコーナーで『のろいうさぎ』を見つめるヴィータの姿があった。

「ふっふっふ……ついに来たわ。私のヴィータ攻略イベント!こ

ここでぬいぐるみを買って好感度を一気にup!!」

「……はやてのフラグ折るのは止めた方が良いんじゃないかじゃー……」

そんな事は知らねえとばかりに店員に尋ねる桜。しかし桜に対し、店員は苦い顔をする。

「申し訳ありません。実はあのぬいぐるみは先程最後の一個が売れてしましまして、あそこにあるのは予約の為の見本品なのです……」
「……なんですと?」

馬鹿な!?! という表情で完璧な固まる桜。それははやてにとっても同じだったらしく、残念な顔つきになっていた。

「あの……無理や判ってるんですけど、何とかありません?」
「本当に申し訳ありません。ご予約して頂ければ一週間以内にご自宅にお届けする事が出来るのですが……」

そこまで言っつて、店員がそういえば、と手をたたく。

「先日こちらのぬいぐるみの新商品が届いております、サイズこそ小さいですが、類似品が御座います」
「ほんまですか!?!」

顔を明るくするはやて。しばらくして店員の持って来たぬいぐるみは確かにストラップ程のサイズだったが、素材は同じだしデザインも変わらない。

「こちらの商品は二種類ありまして、色違いとなっておりますが、どちらに致しますか?」

桜とはやては笑い合つと、同時に応える。

「「それ、両方下さい!」「」

そうして一通りの買い物も終わり、帰路に着くはやて達。

茜色となった夕陽に、一日が終わってしまおうとしている事への未練をそれぞれが感じながら、しかし楽しかった時間を過ごした彼女達の胸には充実感が広がっていた。

「ヴィータ! もう袋から出しても良えで!」

はやての言葉に、ヴィータは紙袋の中から二つのストラップを取り出す。

そこには首についたリボンと眼の色こそ違えど、それ以外は全く同じ二つの兎があった。

「はやて、桜! ありがと!」

顔を綻ばせるヴィータに、二人はどう致しまして、と笑顔を向ける。

「大事にしてね、ヴィータ」

「うん!」

桜の言葉に語尾を弾ませながら駆け寄るヴィータ。

そんな彼女に対し、桜の口元は完璧に緩みきっていた。

「ああ……！ たまんねえぜこの笑顔！ 思わず襲いたくなっちゃいそう……！」

「それは色々洒落にならないにや……」

そして夜。

食事の為の準備を終え、御剣達の到着をはやて達は待っていた。守護騎士たちの服装は今日デパートで買ってきたものであり、あらゆる種のお披露目会としての役割も果たしていた。

ちなみにヴィータの服装はストラップを買ってくれた桜のお礼も兼ねてか、例のミニスカゴスロリファッションである。

「あ、来たみたいやで！」

「それじゃあ私が出るわね」

呼び鈴の音に全員の視線が玄関に向く。ヴィータが自分の買った服を着てくれた事が大変嬉しかったのか、喜んで扉を開ける桜。

現れた御剣達は、それぞれが手にプレゼント用に梱包された袋を携えていた。

「あれ？ 何かあったの？」

「ん？ はやてから訊いていないのか？ 今日は彼女の誕生日だろ
う」

御剣の言葉に、桜と祐治はしまった！ と顔に手を当てる。

確かに闇の書の覚醒がはやての誕生日である以上、この日にプレゼントを用意するのは当然のことである。

「さて、まずはパーティの準備をしましょうか」

言いつつセレノは食事をよけながらスペースを作り、中央にワンホールのケーキを置く。

「既製品でも良かったのですが、今回は私の手作りです。味見もしていますので、食べられないという心配はありません」

「セレノちゃんのケーキ!？」

思わず身を乗り出す桜に、行儀が悪いですよ、とセレノが窘める。

「ちゃんと食えんのかあ？」

「要らないなら食べなくても良いのですよ、ヴィータ」

「こんな日まで喧嘩をする事はないだろう……ヴィータも、そんな事ばかり言っているのではプレゼントは渡せませんよ？」

「え？ あたし？」

直也の言葉に、はやてじゃないのか？ とヴィータは疑問に思うもすぐさま直也は口を開く。

「はやてさんにプレゼントを手渡すのは、御剣さんの役目ですので。ヴィータさんだけでなく、シグナム達も今日から本格的に八神家に住む事になりますし、一緒に頑張っていく事になりますから。いわば、親睦の証といったところででしょうか」

「シヤマルには私からスカーフを。シグナムとザフィーラには、御剣さんからお守り代わりのタリスマンだそうです」

「わあ……」

「これは見事な」
「有り難く頂戴する」

プレゼントを手渡され、三者三様の感謝を述べられる。

「なあ、あたしは？」

「その前に約束です。いきなり仲良く……というのは無理でしょうが、セレノと出来るだけ喧嘩をしない様にして欲しい。約束、できますか？」

「……わかった。約束する」

しおらしくなったヴィータに、直也はよし、と頷いて袋からプレゼントを取り出す。

なんだか賤の厳しいお父さんと、お転婆な娘の様だと二人を除く全員が感じつつも、袋に入ったプレゼントの方に注目を寄せる。

それは

「……これ」

「気に入らなかったでしょうか？ 御剣さんの仕事が終わった後、急いで買いに行ったのですが……」

『のろいさぎ』『のぬいぐるみ。』

今日売り切れたと店員の言っていた品であり、ヴィータの欲しかった品でもある。

「ううん！ ありがとう、直也！……」

「喜んで頂けた様で何よりです」

嬉しそうにするヴィータの頭を撫でる為に視線を落とし、そこで直也はすぐさま顔を横に向ける。

微かではあったものの、その横顔には焦りと緊張が見えていた。

「……直也。何ですか、その反応は」

「いや。何でも無い」

訝しむようなセレノの問いに対し、ヴィータの頭を撫でながら平時に見せる完璧なポーカーフェイスで対応する直也。

しかし、その真実を知っている存在が、いま悪鬼の如き顔をしながら立ち上がる。

「ふ、ふふふふふふ………よくも私の綿密に積み上げたヴィータちゃん攻略フラグをへし折ってくれやがったなペド野郎。

しかもさらりとラッキースケベイベントまで発生させるとは、何と言う上条属性！ テメエだけは生かしちゃおけねえ！ 我がハレム計画成就の為、今すぐ刀の錆になりやがれい！！」

キエ

！！ と怪鳥の如き雄叫びを上げながら突

撃する桜と、止めに入る守護騎士たち。

そんな彼らを見ながら、はやてと御剣は苦笑する。

「騒がしい事だな」

「ほんま。けど、賑やかなんは良えな」

きっと、これからもこんなふう日々を過ごせたら幸せなのだと、そんな事を考えながら、御剣ははやてに向き直る。

「ハッピーバースデー、はやて」

言葉と共に御剣がはやての髪を静かに撫で、そつと髪留めを付ける。

雪と桜をあしらったその髪留めには嫌味な派手さはなく、実に彼女に似合っていた。

「何で雪と桜？」

「季節の移り変わり……といった所だな。これから先、何年経っても共に季節を越えられるように……という意味らしい」

何処かプロポーズめいた気恥ずかしさもあつてか、視線を逸らす御剣に、はやては微笑みながら髪留めを触る。

「ありがとうな、御剣さん……わたし、大切にやるから」

親愛の籠ったその言葉に、御剣は、ああ、と返す。

願わくば。その笑顔が永遠であつて欲しいと。

護り続けて行きたいと切に願いながら。

004 八神家の一日 買い物編（後書き）

c・m・「八神家日常編その1は無事？ 閉幕。第4話、投稿完了です」

レインシア「桜さん……なにやってんですか？」

c・m・「……彼女の事は置いておきましょう。

というか、一体どうして直也君は着々とヴィータちゃんの好感度を上げているのかしら？」

レインシア「今はお父さんと娘みたいな感じだから良いですけど、その内誤解されて後ろから刺されそうですね」

c・m・「ま。それはそれで男冥利に尽きそうよね。その内警察に通報されそうなのが怖いけど」

レインシア「所で今回はNGシーンはあるのですか？」

c・m・「いや、流石に今回はギャグ中心だったから無いわ。むしろあれはシリアス場面に使うべきだと思ってるの
場を和ませる意味も込めてね」

レインシア「むしろ貴女がシリアスを書くとは絶望しかないのですが……」

c・m・「失礼ね、そんな事無いわよ。ただ敵が強すぎるだけで。

さて、そろそろ読者様のお礼に移りましょうか。

久住祐治さま、Hagailiazさま。ご感想を頂き、ありがとうございます。

御剣の宝具に関しては後々使って行こうと思います。Hagailiazさま、ありがとうございます」

レインシア「それではまた次回、お会いしましょう」

レインシア「……所で、御剣さんはツンデレですか？」

c・m・「彼？ ガチでツンデレよ」

「あづい〜……………」

「熱いじゃあ……………」

見渡す限りの砂浜に広がる青い空。もう皆さんの判りですね！
そうです、我々は今海に、

「桜、現実逃避したい気持ちは判るが、今日の前に広がってるのは
地の果てまで続く砂で、海とか水なんてもんは塵気楼でしか味わえ
ないじゃ……………」

「うっ……………夢すら見れねえと言うのか!？」

ガッテム！ と膝を着いて両手を上げつつ叫ぶ桜。そんなシユー
ルな光景を、背後のシグナムと御剣が呆れた顔で見つめていた。

「さて、我々は別行動で収集を行うか？」

「そうもいかん。御剣達がリンカーコアを回収してくれるなら話は
早いが、生憎と守護騎士は私しかない」

そうだな……………と御剣は溜め息を零す。そもそも蒐集は桜と祐治の
二人の協力で九十頁も集まっており、本来であればここまで急ピツ
チで進める必要はなかった筈だった。

「それがまさか……………あの二人がここまで使えなかったなんて……………
……………」

愚痴を零す桜に、御剣が苦い顔を……というより握りしめた拳から血を流すくらい精神に傷を負わされる事となった。そもそも事の顛末は、今日の午前に遡る。

「さうて！ それじゃあ御剣さん、ちゃっちやと提供しちやって！ こう献血で二リットルぐらい血液を抜く勢いで！」

別にそれ位どうって事ないでしょ？ と笑顔で問う桜。

大方の者はここで気付くだろうが、言うまでも無く闇の書の頁確保の為に魔力を寄越せ、というものである。だが。

「言いづらいが、生憎と私は魔導師ではないのでな。リンカーコアは持っていない」

などと、絶望的な事をのたまいやがった。

「えっと……私の聴き間違いかしら？ 取り敢えずもう一度言ってくれる？」

「というかケチってないで出せやコラ」

頬にぺちぺちとデバイスの刃を押しあてる。しかしそんな事をした所で無いものは無いと御剣は両手を上げる。

「うわ……使えねえ……」

《仕方ありませんよマスター。幾らチートって言ったって向き不向

きはあるんでしようし。

けど見た目インテリ系のくせして魔力空っぽとか……ふふ」

主が主ならばデバイスもデバイスなのか。これ以上ない位可愛い日本語ボイスに強烈な毒舌っぷりをかます桜のデバイス。

ちなみに名前は『白亜』^{はくあ}というらしい。

「……御剣さん、堪えて下さい。こめかみの血管が今にも破裂しそうです」

両肩を押さえながら御剣を押し留める直也。そんな彼に、桜はじやあ直也がやって、と頼む。

「元よりそのつもりだ。しかし、何故お二人は魔力の全てを抜かなかった？」

話を聞く限り、君達なら二人で三分の一は稼げただろう？」

「あ……そうしたいのは山々だったんだけど、闇の書って魔力を吸収した奴の能力とか魔法を使っちゃうのよ」

つまり、祐治や桜の魔力を完全に与えては二人の能力と力を併せ持つ化け物が誕生してしまう、という事である。

「そうなると、もう誰も手が付けられなくなっちゃう……という程でも無いけど、かなり厄介になっちゃうからにやー」。

けど、直也は別だぜ？ 仁に魔力の期待が出来ない以上、あんたには気張って貰わなくちゃならないじゃん」

「了解した……幸い俺は飛行以外の魔法は門外漢だ。魔力を抜かれても支障はない」

「じゃ、全部貰っておくって事で。シャマル、頼んだぜ？」

祐治の合図と共に、シャマルの手が直也の胸を貫通する。そこに在るのは淡い輝き。魔力の源泉たるリンカーコア。

「おお！　なんか大きそうな予感！　シャマル、遠慮なく抜いちゃって！！」

ひよつとして半分ぐらい行くんじゃない！？」

桜の言葉にシャマルも気を引き締め、リンカーコアが砕けるのではというぐらい力を込める。

文字通り全てを吸い尽くす勢いで吸収をはじめ、闇の書の頁を開いた所で、

「え？」

シャマルの間の抜けた声が響く。どさりと床に崩れ落ちるまで回収した北澤直也の頁。

その総数、実に。

「四頁……？」

ひよつとしたら後ろの頁に文字が浮かび上がってるんじゃない？

と淡い期待を込めるも、やはり四頁しかない。

ちなみに魔導師の中でも膨大な魔力量を誇ると言われる高町なのは（魔導師ランクAAA）が約二十頁。大型の魔法生物が二、三頁。

結論を言おう。

「……使えねえ」

「……使えねえにゃー」

そうは言っても北澤直也の魔導師としてのランクは『A - 』であり、これは管理局の一般的な武装局員より高い。

ちなみに時の庭園の傀儡兵も同ランクである……うむ。やはり微妙というか、主人公組の一員のくせしてやられ役と同列とはこれ如何に？

「……すみません。無理して貰ってこう言つのもなんですが……その、やはり微妙というか」

居心地悪げに言葉を濁すシャル。やはり彼女からしても最初の二人のインパクトが大きかっただけに、期待もそれに比例していた為、落胆せざるを得ない。

尤も……当の北澤直也本人は完全に意識を手放していたのだが。

「セレノ……直也を客室のソファーに運んでやってくれ。さて、これから」

「取り敢えず蒐集しなきゃ不味いっしょ」

そして、冒頭に戻る。

「いやー……しかし、あそこまでしょぼいとはね。ていうか何？直也ってホントに戦えんの？」

激しく不安なんですけど？ と後ろを振り返る桜に、御剣は肩を竦ませる。

「さてな……正直なところ、私も一度しか直也が戦う場面を見ていないので何とも言えん」

つまり良く言えば未知数、悪く言えば本当に雑魚の可能性があると云う事である。

「全員の能力把握も含め、模擬戦の一つでもやっておくか？」

そう提案するシグナムに、桜達一同は賛成する。流石にお互いがお互いの能力を知らない、というのでは連携の仕様がななし、背を預ける上でも不安である。

「では、今日は私に任せて貰おうか。力の一つでも見せねば連携の仕様も無いし、何より無能の汚名は雪がせて貰いたいのでな」

言いつつ砂漠のど真ん中を一人悠々と進む御剣。その背は不気味な程に笑っていた。

「あー……なんかヤバいスイッチ押しちゃった？」

などという桜の声が聞こえているのかいないのか。ともあれ、たった一人、しかも丸腰で砂漠のど真ん中に立つ御剣を飛んで火に入る夏の虫とばかりに四方を巨大な魔獣が囲む。

「火に飛び込んだのは私か君らか……だが、私を火の粉と言うには少々きついぞ？」

無論、そうは言った所で魔獣は言葉など理解はすまい。爪を、牙を、触手を、尾を、それぞれが狩猟における己の武器を一斉に振りかざし、

「『グレイブニル魔狼縛りし魔法の紐』」

言葉と共に、魔獣達の時が止まる。

虚空より顕れる無数の紐。それは御剣の身を残り数センチという所まで爪牙を突きつけた魔獣達を完全に拘束し、地へとその身を叩きつける。

『グレイブニル魔狼縛りし魔法の紐』。かつて世界を食らうとされた魔狼・フェンリルをラグナロクまで繋ぎ止めた魔法の紐であり魔獣、怪獣の類に限れば例外なく縛り付けられる能力を持つ。

「ではシグナム、リンカーコアの回収を頼む」

「あ、ああ！」

余りの手際の良さに思わず見惚れていたシグナムではあったが、急いで御剣の元に駆け寄る。

一方。桜と祐治はというと。

「宝具かよ……そりゃ魔力とか要らないわよねー……」

「この世界に来てる奴ってチート過ぎだにゃー……」

とはいえ御剣の収穫は大きく、一度に十頁近い蒐集が行えたのはかなり幸先の良い出だしと言える。

「さあって！ 私達も嘗められないように頑張りますか！」

「応！」

……そう。出だしは良かったのだ。あくまで出だしは。

「……ねえ。何で一匹も魔獣が出て来ない訳？」

「「「……」」」

桜の言葉に気まずい沈黙が下りる。どうやら先程の御剣の手際の良さに大小関わらず砂漠の魔獣が完璧にビビったらしく、三時間延々とほっつき歩いてても一匹も現れない始末であった。

「……もう帰らない？」

これ以上歩いた所で無駄だと言うのは桜以外も気付いていたのだろう。幸いこれで丁度百頁になった所だし、当分は心配あるまい、と踵を返した所でふと目の前に有る物を見やる。

「ねえ？ 眼がおかしくなったのかしら？ 私の目の前に森が見えるんだけど」

「森っつーか密林だにゃー……前も後ろも考えずに歩いてたら、こんなところに来ちまったわけか」

祐治が顎に手を当てて考える。乗るか反るか。頁は十分に稼いでいるし、疲労もある。

しかし延々と砂ばかり見ていたし、影に入ると言う意味でも森という存在は捨てがたい。

何より頁を稼ぐ作業を続ける上で砂漠より楽な場所があるなら、そちらで行動したいと言う欲求がある。

結論。

「ちょっとだけ見て行って、頁稼げそんな奴がいたら次からここに来ないかにゃー？」

祐治の提案に反対票は無し。シグナムですらこの時は賛成した。
……この時は、ね。

「無理！ 無理だから！ 割に合わない事この上ないってのー！！」
「流石に軍隊アリの如く来られんのは勘弁だにゃー……………」
「……如何に主はやての為とはいえ、次からは場所を選びたいな」
「……私としても、ここは引かせて貰う」

結論から言えば、大失敗にして大敗北である。
理由はというと、確かに森の中は過ごしやすかった。それどころか未知の果物やオアシスっぽい場所もあり、あれ？ ここって天国じゃね？ と誰もが思っていた。
そう……奴らに出会うまでは。

「魔力による気配遮断に隠密行動、……そして至る所に仕掛けられたトラップに絶妙な連携。敵ながらやってくれる」

思わず顎に手を当てて唸る御剣。

確かに連中は単体であれば脅威でも何でも無い。魔力は全て気配を遮断する為に使われている為、物理的な防御は固い鱗の様な皮膚しかないし、攻撃に関しても爪や牙だけだ。

だが、奴らの最大の武器はその賢さにあるのだろう。
このこと密林に入った御剣達に対し、落とし穴のトラップによ

る洗礼を浴びせ、木に登っていた所を見つけたかと思いきや、それは罠で堰き止めていた川を放流させて水洗便所よろしく御剣達を押し流す。

そして何より鬱陶しいのは……。

「大体なんであいつら一回攻撃したら逃げんのよ!!」

背後からの奇襲と一撃離脱。確かに力の弱い単体でも、それを徹底すれば反撃される可能性は少なくなるし、何より負けない。

「しかもようやく一匹仕留めたと思ったら半頁どころか三分の一頁……おまけに仲間がやられたら群で襲ってくるとか、本気で割に合わないにゃー……」

もう二度とこの森には近付くまいと彼らは心に誓いつつ、心身ともに擦り切れながら、八神家へと帰るのだった。

「ふいー……やっぱりはやての家は天国だにゃー……」

「ホントよねー。あ、ご飯お代わりして良い?」

「遠慮せんと一杯食べてな。ところで御剣さんら、ほんまにどないしたん? なんやすごいボロボロやけど?」

はやての言葉に一同の箸が止まる。中でもシグナムに至ってはせつかくはやてに用意して貰った騎士甲冑が一日で汚れる事になった不手際を恥じてか、目を伏せて申し訳ありません、と延々と呟き続けた程である。

「……なに。大自然の脅威を肌で味わっただけだ」

詰まる所、今回の一件はその一言に集約されるのだろう。御剣の言葉に、ハイキングか何かでもしたのかと考えながら、はやては桜のご飯を多めによそう。

「そういえば。直也さんどないしたんやろ？ 今日急に倒れとったみたいで、さっきセレノさんが起こしに行っとなったけど」

「あ……」

誰からともなく口を開く。そう言えば、午前中に倒れていたのをセレノに任せっきりだった。

「しょうがないな……私が見に行っただけ」

「そのままどうフラグをぶち壊してやるうかとか、考えてないよにやー？」

「……じゃあ、行ってくるわ」

「おiiiiiiii!？」

祐治のツッコミなど一切知らねえとばかりに駆けだす桜。この場にいた男性陣が激しく不安になったのは、言うまでも無い事である。

「気分はどうですか……といった所で、まだ目覚めていないでしょうが」

さらりと、セレノの手が直也の髪を撫でる。

それは親愛の証なのか、それとも体調を気遣ってなのか。どちらにせよ、今この場で考えたとしても意味は無い。何故なら。

「あれから考えていました。私が貴方に何を望むべきなのか」

きっとそれは、あの図書館で教えられた時から変わらない。セレノが失ったモノが家族であるならば、求めるものも家族であるのは当然だから。

けれど。

「どうしてでしょうね？ 私は未だに判らない」

本当にそれで良いのか？ 何か気付いていない事があるのではないか？

そんな事を考えつつも、しかしこのままでは駄目だと言う感情も確かにあるのだ。

望めばいい。ただ一言告げれば、北澤直也はそれに全てを賭けるだろう。

だから。

「けど……それでも貴方が叶えてくれるなら、」

一つだけ。願い事をしよう。

「私の家族に なってくれますか？」

言った。口にした。まだ眼が醒めていない事は判っている。だが、そうして口に出す事で、それが己の望みだと自分に言い聞かせる事が出来た。

だからもう一度言えば良い。北澤直也が目を覚ました時、もう一度同じように、

「それは……父としてか？ 兄妹としてか？」

……言えば、と考えた所で思考が空白になる。

「……起きて、いたのですか？」

何処から訊いていた？ と暗に投げかけるセレノに、直也は家族になって欲しいと言う所からだと言げる。

「……別段セレノが妹でなくとも良い。年齢はどうあれ、姉になるうと妹になるうと俺は構わない。好きにしてくれればいい」

「……………くっくッ」

追い打ちだ。いつその事直也自身がそういつた事を決めてしまえば、貴方がそういうなら、で気まずい空気を終わらせられたものを、よりもよってこんな時まで権限がセレノにあると言い張るのである。

おそらく、じゃあ母親で。とセレノが冗談で言ったとしてもOKを出すに違いない。

「……別に。貴方が兄であろうと弟であろうと私にとっての立場が変わる物ではありません」

「セレノがそうありたいのなら、異存はない。要件はそれだけか？」

「はやてが呼んでいますよ？ 御剣さん達も蒐集から戻っています。彼らの冒険譚を着に食事と行きましょう」

そう言って笑うセレノに直也も笑い返すと、強引にソファから身

を起こされる。

「それじゃあ行きましようか、兄さん」

「なんだ。結局君が妹になるのか？」

「歳で決めただけです」

言いつつもどこか楽しげに食卓へと向かおうとし、

「ちょっと待った

！」

！

ドアを蹴り破るかのような勢いで部屋へと転がり込む桜に、両者の眼が点になった。

「直也………！ あんた本気でハーレム作ろうとか思ってたんじゃないわよね！」

「グイーちゃんに続いてセレノちゃんとか妹萌か！？ そんなに年下が好みかこの野郎！！」

マシンガントークに思わず両耳を塞ぎかける二名。しかし次からそうも言っていられない爆弾発言を桜はかます。曰く。

「私の事は遊びだったの！？ 初めて図書館で会った時はあんなに情熱的だったのに！」

何のために今日お風呂まで済ませたと思ってるのよ！！」

などと。とんでもねえ爆弾を放ちやがった。

ちなみに風呂に入ったのは砂や泥まみれになったからであって、断じて大人な事情がある訳ではない。

「兄さん……？ どう言う事ですか？」

ジト目で見詰めるセレノ。それに対して慌てふためく北澤直也を想像しながら、桜は内心大笑いをしそうになり、

「ひどい誤解だな桜。セレノは俺の妹であって、そういった関係ではない」

「へ？」

瞬間、桜の時間が止まった。

「ちよ、兄さん!？」

「セレノ。悪いが二人だけで話したい事がある。はやてさん達の所へは先に行つて貰えるか？」

「……!！」

思いがけぬ真摯な口調に、セレノは何が何だか分からないまま食卓へと走り去る。

それを見送つた後、直也は扉を閉めた。

「……で？ 今のは私に対する意趣返しって事？」

計画が失敗に終わった為か、居心地悪げに両腕を組む桜。そんな彼女の足を、直也は片足で払った。

「え!？ あ、きゃあ！」

どさり、と桜がソファへと倒れ込む。おそらくは狙つての事だろう。彼女の両腕はまるで万歳をするかのような状態で片手で押えられ、残る手は頬に当てられている。

「ちょ、ちょっと待った！ 私が男だって判ってんでしょ？」「今は女だろう。それに、男はあのように叫んだりはせん」

くい、と顎を持ちあげる。馬乗りになった状態では上手く抵抗出来ないのか、桜はもそもそと身をよじるしか出来無くなっていった。

「……………ていうか、マジ？」

流石に冗談だよな？ と淡い期待を込めていたが、直也はまさか、と返す。

「女の方から誘われておきながら、それを断る程朴念仁でも無ければ、男を棄てている訳でもない。」

……………それより、力は抜いたほうが良い」

「え、きゃう……………あ」

首筋に噴きかかる息。かすかな吐息さえ大きく響く密室で、口を耳元に近づける。

「俺の女になれ 桜」

ただ静かに、しかし一切の拒絶など認めないと言つように直也は囁いた。

あと一秒。それこそ数ミリしか無い間隔で触れ合おうとする唇。

「……………ッ」

思わず目を閉じる桜だったが、あと一步、否、半步という所で直

也が桜から離れる。

「……あ」

同時、部屋の戸を開ける音が響いた。

「なんだ桜？ 飯食ってすぐ寝るとか太る元だぜ？ ていうか、直也。起きてたのか。」

さつきセレノが顔真つ赤にしながら下に降りてたけど、セクハラでもしちまつたかにゃー？」

「まさか。桜さんがあまりにからかうので、合わせただけに過ぎません」

そりゃご愁傷様だ、と祐治と共に下に降りようとする直也だったが、部屋を出る直前直前に桜に告げる。

「次にからかうなら、それなりに覚悟はしておけ。それと」

そこまで言っただけを置く。一体何を言うのかと桜が訝しんだ所で、

「……そんなに物欲しそうな眼をしてくれるな。歯止めが利かなくなる」

「な！？ 待ちなさい！！」

思わず叫んだものの、直也に関しては口元を歪めたまま、聞く耳持たんと言つように悠々と立ち去るのだった。

ばたんと、締まる戸。

瞬間、

「ふっざけんな、こん畜生！ 泣かす、絶対泣かしてやる……

！！

覚えてる覚えてやがれつうか忘れんじゃねーぞあの野郎！ 乙女の純情弄んだ報い、きっちり払って貰うからね

……………

「……………」

八神家に響き渡る絶叫。

ちなみにこの声を聞き咎めたはやてやヴィータ、セレノが直也に詰め寄る形となり、結果的に復讐が果たされた事を、今の桜は知る由も無かった。

c・m・「えー……色々ありましたが、蒐集第一回目にして第5話投稿完了です」

レインシア「直也さん、流石にやり過ぎじゃ……本気でベッドシーンに突入しかけてましたよね、あれ」

c・m・「……私としてもやり過ぎたわ。

けどまあ、直也君のDSな一面も書けたから良しとしましょう……何て言えるわけねえ。久住様、本気で申し訳ありませんでした。そして桜ちゃんごめんなさい」

レインシア「けど俺の女発言って本気だったんですか？ 遊びにしたりはやり過ぎだと思っんですけど」

c・m・「久住さんが来なくてやることやってたら本気で嫁にしようとしてたかもね。一応責任取るタイプだし。

押し倒すのはやり過ぎだけど、絶対に泣かすって言う目的達成の意味もあつたんじゃない？」

レインシア「見てる方は心臓止まりかけましたよ……」

c・m・「ま。男はみんな狼って事で。さて、そろそろ読者様のお礼に移りましょう。」

久住祐治さま、Hagailazさま、神崎はやてさま。ご感想を頂き、ありがとうございます」

レインシア「それではまた次回、お会いしましょう」

レインシア「……所で、桜さんルートってあるんですか？」

c.m.「彼女は主人公だから、二週目から攻略可能なヒロイン……
つまり、攻略不可能キャラよ」

006 そうだ。模擬戦をしよう

「そうだ。模擬戦をしよう」

前回の……というより第一回目にして幸先の悪かった蒐集から数日、せっかく皆で集まったんだし、はやてちゃんと一緒にお買い物でも、と楽しく考えていた矢先に誰かが言った。

が。その事に反対する者はいない。お互いの実力を知る事は悪い事ではないし、蒐集作業を行う上で個々人の実力以上に、互いのチームワークが重要視されるのは目に見えていた。

今回はシャマルの手によって管理外世界 勿論無人の に送って貰った上で模擬戦を行い、時間があるようなら各自で蒐集を行おうと言うものである。

ちなみにシャマルはと言うと、お留守番。流石にはやてを一人置いて行くのは拙いと言う一同の決定であり、異論を唱えるものは一人としていなかった。

そして

「それじゃあ、第一回・チート共の模擬戦祭りを開催しようと思いまーす!」

パフパフ、と百円均一で買った玩具を鳴らしながら桜がばんざーいと両手を上げる。

が、そんな桜のテンションに対し、一同の士気は駄々下がりであった。理由は……。

「ペンペン草の一つもねえ……つつか、幾らなんでも廃墟すぎだろ」
思わず愚痴を零すヴィータだったが、無理からぬことだろう。少なくとも、ヴィータの発言はこの場に居た全員の意志を代弁した様な物だった。

管理外世界の一つ。進み過ぎた文明故に滅びの道を辿った一つの世界。人間としての業の深さをここまで味わえる世界も、そうは無いだろう。

「唯一の救いは、汚染物質や毒素の無い世界だった事だな。我々の活動にも支障はない」

御剣の言葉に、一同は助かったとばかりに胸を撫で下ろす。無論、シヤマルとてそういった事はちゃんと調べているのだが、やはり実際に目に見してみると不安と言うものは襲ってくるものであるからだ。

「しかし、倒壊したビル以外は砂場か……」

「おまけに空は暗雲。ラスボスかなんか出て来そうな雰囲気だっつーのに、ここまで生物の気配がないとはにゃー……ぶっっちゃけ、ゴジラみたいなのが出て来たら戦う予定だったのに」

シグナムの言葉に、祐治が肩を竦ませながら応える。この世界は本当に無人……いや、無生物なのだ。

小型のモノや微生物ぐらゐは居るかもしれないが、彼らの外敵になる様な存在や魔力の蒐集を行えるような存在は一匹たりとていない。

「ま、その方がやり易いっしょ！ じゃ、さっさとくじ引いてよー。せっかくこの為に用意したんだからさ！」

桜が側面を丸くくり抜いた段ボール箱を出す。どうやらここに手を突っ込んで、同じ色だった奴と戦い合えと言つ事らしい。

……用意周到すぎである。

結果。

『ヴァイタvsセレノ』

『御剣 仁vs久住祐治』

『霧河・A・桜vs北澤直也』

『シグナムvsザフィーラ』

「……まあ、俺とか桜とかセレノとかは良いけどにゃー……流石にシグナムとザフィーラは不味くないかにゃ？」

顔見知りだし、という祐治の発言に、直也は問題ないでしょうと応える。

「今回はあくまで、それぞれの手の内を明かすのが目的です。それとも、他に戦いたい方が？」

「……目ざといにゃー。ちっと連戦になっちまうが、シグナム、付き合つて貰えないかにゃ？」

「私か？ 構わんが、」

「あー……！ 祐治、あんた『付き合つてくれ』発言にOKさせる為に言つたでしょー！！」

「……桜。そういう冗談はやめて欲しいじゃん。シグナムもそんな目で見てくれんな」

俺はそんな気は無いと叫ぶ祐治。一方、それではザフィーラはどうするのかわかるといふ事だが……。

「自分が相手を。無論、桜さんの相手もします」

と。北澤直也が二戦する事で落ち着き、一同は開けた場所に移るのだった。

第一回戦『ヴィータvsセレノ』

「まさか貴女と当たるとは、これも運命か何かでしょうか？」

「女同士で何言ってるやがる。それより、覚悟は出来てんだろっな？」

互いに犬猿の仲と自覚のある両者。そんな二人を遠巻きに見つめるギャラリイはというと……。

「……一体何があので二人をあそこまで拒絶させ合っただ？」

「さあ？ 片や冷静で片や熱血系っ！以外、特に反発し合っような事は無い筈なんだがにゃー……」

まったく謎だ、と御剣と祐治が首を傾げる。ともあれ、奇妙な関係な両者の戦いが始まるのだった。

「行くよ、グラフ・アイゼン」

《Jawohl（了解）》

「久々の空気ね、来ますよ。ミュラン」

《All right（承りました）》

距離を詰めようと駆け抜けるヴィータと、それを狙い撃つべく弦

を引くせしめ。

鉄槌と弓。両者の獲物を見るならば、その時点で互いの対策を立てるのは基本。

ならば。

“来る……！！”

矢を番えた瞬間に弓兵の動作は終了する。何より、模擬戦が始まった時点で両者の距離に開きがある以上、セレノが先手を取るのは必至。

故に、ヴィータが取るべき選択も決まっている。

“やはり防御魔法を準備していましたか”

そう来る事は判っていたとばかりに、セレノはほくそ笑む。

防御魔法には受け止めるバリア系、弾いて逸らすシールド系、身に纏って自身を護るフィールド系の三種が最前線に立つ戦士の基礎防御法。

そして、この場合最も適切なのは……。

“シールド系とフィールド系の複合……尤も、後者はバリアジャケツトですが”

第一射はあくまで予想の確認。そして矢は後方に流されたことから、結果は必ずシールド系。ならば。

“残念ですが、貴女に手の内を見せる間など必要ありません”

番えられる矢。先程とは違い、引き絞りながらも即座に発射しないことから、ヴィータは威力を込めているのだらうと考えた。

“バリア系の準備は終えてんぜ！”

狙いは互いに一撃必殺。手の内を見せる必要など何処にもないと、本来の目的を忘れているのは両者共に同じらしい。

尤も。

「貴女と私の狙いは別なですよ。ヴィータ」

まるで相手の心を見透かしたかのような発言。それに対して若干顔を強張らせるヴィータだったが、もう遅い。

既にヴィータの鉄槌、グラーフ・アイゼンは射程内に入ると同時に振りかぶられている。今更動作を変える事など出来ない。

「……ッ!？」

距離を見余った。否、セレノがそうさせたのだ。第一射と同時に重心を移動する事で距離を開け、目測と自身の位置を若干ながらズレさせる。加えて。

「口は閉じていなさい。砂が入りますよ？」

瞬間。矢はヴィータの足元に放たれた。

鉄槌がむなしく空を切り、土砂が舞い上がる。

完全に視界から消えたセレノを捉えるべく、ヴィータは鉄槌を三百六十度、丁度自身を軸に独楽のように一回転させる形で撒き上げる砂を吹き飛ばした。

だが。

“居ない……!?”

何処にもいない。見渡す限りの地平。こちらを捉える直也や桜の姿こそあれど、肝心のセレノの姿は何処にもない。

「はっ……!?”

上を見る。その時点で経過した時は二秒ほど。しかし前線で戦う事を想定した戦士にとって、二秒という時間はあまりにも長く、それは普段後方支援を基本とするセレノにとっても例外ではない。

《Arrow Rain》

デバイスの音声と共に、引き絞られた弓より手を離すセレノ。その技名に相応しく、無数の矢が上空より降り注ぐのだった。

「終わりですか？」

再び舞い上がった土煙で相手が見えなくなったが、外したという感覚は無い。

おそらくは全弾命中。模擬戦と言う事や、これから蒐集も行うと言う事から、矢の威力や本数は減らしているものの、わざと外してやるほど甘くは無い。

何より、確実に中てられる獲物をわざと外すなど、弓兵として恥すべき行為である。

そして。

「テートリヒ・シュラーケ!!」

「甘い！」

敵の戦闘不能を確認しない程、戦士として甘い訳でもない。打ち下ろされる鉄槌をバリアで受け止めるセレノ。だが、途端、彼女の顔は険しいものになる。

“ 弾かれる……！！ ”

恐らく、命中・防御に関わらず対象を破壊する技だろう。T?d l i c h s c h l a g (痛烈な一撃)とは言い得て妙である。だが。

“ 接近戦が苦手だと言った覚えはありませんよ？ ”

弾かれると同時に都合三射の矢を放ち、魔力によって構成された弦を消す。

弓のグリップから弦にかけての位置 アーチエリーにおけるリム に刃を展開させると、一気にウィータとの間合いを詰めた。

「……！？」

「遅い！！」

弓と鉄槌。本来であればどちらが接近戦において勝るのかは明白な武器でありながら、両者は拮抗していた。

その原因は、鏑競り合う両者の得物の位置にある。片や全力で相手を出来る刃。片やヘッドではなく、その付け根の柄に当たる位置で矢を受け止めなくてはならない鎚。

得物の時点で明暗を分けるであろう両者の実力を伯仲とさせる要因は、その実セレノが己の分を弁えているからだ。

元よりベルカの騎士は一對一に特化した存在。それを相手取るに

は正攻法では不可能。

ならばどうする？ どうすれば勝てる？ 策を巡らすのは、幼いながらかつて『ガルフ』の副官として立ったが故の経験則であり、その経験が今の彼女をベルカの騎士であるヴィータと互角に向かい合える要因となっていた。

「すげえよ……おめえ。正直嘗めてた」

そして。ヴィータはセレノに惜しみの無い賛辞を送る。見かけはどうあれ己より幼く、そして一対一でベルカの騎士をここまで追い詰めるその技量。

もし人間として、同じ時間と日々を過ごしていたならば、確実にセレノはヴィータを超えていただろう。しかし。

「こっから先は、出し惜しみは無しだ」

しまった、とセレノは思う。ベルカの騎士における特有の戦法。儀式によって圧縮した魔力を弾丸としてデバイスに組み込む事で瞬間的に爆発的破壊力を得る『カートリッジシステム』。

それを、この相手は一度でも使ったか？

「
」

距離を取ろうと、先程まで優勢であった筈の接近を自ら離す。あれに接近は駄目だ。

あの騎士に本領を發揮させてはならないと、セレノは理性より先に本能で理解した。
だが。

「さっきの言葉を返すぜ。遅えよ、セレノ」

葉莢が排出され、デバイスが組変わる。情けも容赦もなく、鉄槌の騎士は己が銘に相応しき一撃を放つのだった。

「終わったか……」

「凄まじい一撃でした。魔導師や騎士と言うものは実に恐ろしい」

御剣の言葉に、直也が相槌を打つように感想を漏らす。

セレノに関しては、恐らく大事には至らないだろう。完全に当たる瞬間、ヴィータが鎚を振り抜かずには止めたのが救いだった。

「さて。次は私と……」

「俺だにゃー。ま、次も有るんで手を抜いてくれるとありがたいんだが」

「本気かね？」

「いんや。言ってみただけじゃん」

第二回戦『御剣 仁 vs 久住祐治』

軽口を言い合いながら、お互いが中央へと進み出る。

未だ徒手空拳の御剣に対し、祐治は既に得物を手にしていた。

黒い、柄から刀身まで一色に染め上げられた長身両刃の西洋剣を地に突き立てると、静かに御剣を見据えた。

「俺のデバイス、『黒狼』だ。ま、お手柔らかに頼むじゃん」
《宜しく願います》

「そういえば、君のデバイスを紹介されるのは初めてだな。肩肘を張らずとも、崩して構わんよ」

《そうですね。では》

デバイスから親しみを持った声が消える。途端、

「《ここで倒れる、御剣 仁》」

デバイスと主の声が重なりと同時に、漆黒の剣が奔る。距離にして二十メートル。それを一足飛びで、久住祐治は踏み込んだ。

「……ちい！」

普段のとぼけた言動から完璧にしてやられた。あれはこと戦闘に限っては、普段とはまるで違う。既に戦士としての空気に切り替わっている。

指を弾くと共に御剣の背後に現れる無数の剣。その全てが無銘でこそあれど、稀代の逸品である事は変わらない。

剣が射出される。音速を超えて迫る銀の閃光。一撃一撃が必殺の弾丸である剣を前に久住祐治は笑っていた。

“甘いね、仁。俺を止めるのに、宝具ぐらい出してくれると思ってたんだが”

斬、という太刀音が響く。御剣の背中を黒の刃が斬りつけていた。

「なッ……!？」

思わず背を庇いながら距離を取る御剣に対し、祐治は僅かに肩を竦めつつ説明する。

「今のが俺の技の一つ、『影音』だ。

相手の影を切りつけるように一瞬で横をすり抜けて、背後から斬りつける技なんだが、障壁なんかを張ってる場合は阻まれやすいから不意打ち専用ってとこだ」

「……先程の踏み込みも、それによるものか？」

感心したように問う御剣に対し、祐治は頭を掻きながら、ちょっと違うな」と訂正を入れる。

「こいつはスピードもあるんだが、魔力を纏って光の屈折率を変動させて迷彩効果を得てんだ。

言うなれば、攻撃するまでずっと透明になっている、と言ったところか。

けど見切んのは止めとけ。こいつは常に屈折率を変動させてるからコンマ一秒ごとに違う計算を行わなきゃならない。

視認できないスピードと併用してしか出来ない故に奇襲技。ま、俺が説明しちまった時点で対策されちゃうから、もう使えないけどな」

親しみを込めた様な笑みとは裏腹に、祐治の内心は冷え切っていた。

「ところで。何で俺が模擬戦とはいえ、勝負も終わって無いのにペラペラ喋ってるか、仁、お前判るか？」

これが最後通牒。ここまで来て判らないのであれば、次は本気で仕留めると暗に告げる。
だが。

「己の勝利の確信かね？」

御剣は見余った。なまじ己が強大であるが故に危険性に気付かない。常に自身こそが上だと言うその不遜。

強者であり王者であるが故の立ち位置は、祐治の神経を逆撫でて余りある。

「そうかい」

ならば、その過信を根こそぎ奪う所からだ。

「見せてやれ、黒狼」

《OKバディ、ホットなチャチャを躍らせてやらア！！》

黒狼から分離する二つの刃。それは地に落ちる事無く滞空し、御剣 仁へと差し迫る。

「……………！！」

『無影双刃』。切り離された刃を魔力による遠隔操作する単純な物だが、その速度と威力……何より主の意思のままに動く精密性こそ最大の武器。

たとえ御剣 仁が防御を固めようと、この刃に触ればタダでは済まない。

《Let's dance!》

デバイスの叫びと共に御剣の身体を狙う。

片や地を滑る様に横薙ぎに足を。

片やそれを避ける事を見こして飛んだ所へ胴を。

まるで御剣自身が望んでブレイクダンスを踊っているかのように、
二つの刃は誘導する。

が。それで満足など祐治も黒狼もしない。

何故なら……。

「あんだ、この中で自分が一番強いって思っただろう？」

《自分には敵わないと思っただろう？》

かちやり、と。刃の失った切先を御剣に向ける。アームド・デバ
イス『黒狼』はただの剣に非ず。その真価は魔導師としての杖にし
て久住祐治と言う使い手の特性を最大限発揮する為にある。

「俺達を嘗めたな、骨董品屋」

ファイア！ の掛け声と共に剣の先端より覗く銃口から射出され
る魔力弾。

属性は『氷』、用途は『凍結』にして対象の『拘束』。

避ける事を目的とする今の御剣にとって、その選択は限りなく正
解だ。

だが忘れてはいないだろうか？ 久住祐治が反則とさえ言える使
い手であると同時に、御剣 仁もまた稀代の反則であると言う事を。

「成程。確かに私は君達を過小評価していた」

縛鎖によって捕えられた二つの刃。久住祐治が対象の拘束を狙っ
たように、御剣 仁もまた、相手こそ違えど対象の拘束を狙ってい

た。そして。

「君ならこれ位防げるだろう。無論、無事で済みます気などないがね」

それこそが、君達に対する誠意だと言うように、御剣 仁は黄金の剣を振りかぶる。

『勝利すべき黄金の剣』。魔術師マーリンの導きにより選定の岩から抜かれた王の象徴にして王を選定する剣。

威力こそ約束された勝利の剣に劣るものの、宝具としての格は随一であり、その一撃は確かに御剣 仁の信頼に足る品である。

黄金の光が、空間を埋め尽くす。剣は、振り下ろされたのだ。

久住祐治の背後のビルが剣の余波によって消滅し、脚元の砂場さえどろりと溶けていた。

全員が祐治は無事なのかと彼の立っていた方を見やり、そして驚愕する。あれ程の一撃、必殺たる黄金の輝きをその身に受けたにも関わらず

久住祐治は右手を掲げた状態で悠然と立っていた。

「……言った筈だがな」

《俺達を嘗めるなっ》

馬鹿な、と。御剣も含め、この場に居た全員がそう思っていたに違いない。

「『ドレイナイト』……俺は生物だろうが無機物だろうが、魔力だろうが捕食出来る。ああそれから」

喰わずに飲みこんだままの魔力は、そのまま返す事も出来るんだぜ？ と口元を三日月に裂けさせながら、久住祐治は笑っていた。

「『狼牙』……魔力で形成された刃を飛ばす技だが、さっきの魔力も合わせたらどうなるかな？」

返答など聴く必要は無い。既にひきつった御剣の顔を見ただけで、祐治の笑みは絶頂に達していた。

「莫迦が。俺を仕留めたけりゃ、最初から聖剣を抜きゃあ良かったんだ」

結局、御剣 仁の敗因はそこに尽きた。最初から対等な相手として久住祐治見ていれば結果は違ったものを、下らない過信が敗因へと繋がったのだ。

もう御剣に打つ手は無い。先程使った剣以上の宝具は確かにあるが、それには今以上の溜めが要り、それを赦す程久住祐治は甘くない。

「ここで倒れな、御剣 仁」

振り抜かれる黒狼。先程の御剣 仁と同じく、久住祐治もまた、一切の容赦なくデバイスを振り下ろすのだった。

ぐるん、と肩に担いでいた自らのデバイスを一回転させて黒漆の塗られた鞘に収めると、片膝を着く御剣に一瞥もくれることなく久住祐治は桜達の元に戻った。

「ふう……やっぱ、こういうのは俺のキャラじゃないにやー」

「いやもうキャラが違うとか、そういう問題じゃなくて思いつきり別人だから」

周りとかドン引きだし、という桜の言葉ににやはは、とふざけた笑いを零す。

「ま。仁に関しちゃうこっちの攻撃を喰らう直前に楯を出してたから問題ないじゃん。ところで、次桜じゃなかったっけ？」

久住の疑問に、桜はふっふっふ……と不気味かつ凶悪な笑みを覗かせるのだった。

第三回戦 『霧河・A・桜 vs 北澤直也』

「来たぜ来たぜこの野郎。乙女の純情踏みにじった拳句に放置たあ、死んで詫びるやつーか死ね!!」

犬歯を剥き出しにしながら狂ったように噛む桜に、一同は完全に引いていた。

「……おい、直也。桜に何したんだ？」

「……兄さん、もし認知しなくてはならない様な事があるならして

下さい。

流石に私もあの空気は……」

ヴィータやセレノに見ても、流石にあれは怖いのだろう。ガクガクと抱き合う様に震えているが、肝心の直也はどうしたものか？ などと余裕ぶっこいていた。

「それは放置された事に対してか？ であれば今度食事にでも」

「殺す………！！ キルキルキルキルキルキルキルkill

kill kill kill！！！！

殺^{シヤ}

！！！！

」！

最早火に油どころかガソリン撒いた揚句にダイナマイトを放り投げ、直也の発言。

無論、桜の怒りのボルテージは天井知らずだった。

と言うか既に堪忍袋の緒どころか袋の横にドでかい穴が開いていた。

「殺して殺^ヤ………！！」

フシャー！！ とキレた猫の如き叫びを上げながらデバイスを振り回して突貫する桜。

無論、怒りにまかせた一撃などどうという事は無いとばかりに北澤直也は紙一重で躲し、

思いつきり、吹っ飛んだ。

“ 何い！？ ”

剣筋は見切ったし完璧に避けた。ただ北澤直也がこうなったのは斬撃の余波による暴風で吹き飛んだだけである。

ちなみに地面の方はと言うと、ぱっくりと裂けていた。そりゃあもう、最初からそこが崖であったのではないかと思う程に。

「あちゃー……桜の奴キレてんな。ありゃコード五十本は繋いでんぞ？」

聴きなれない祐治の発言に対し、セレノ達はコード？ と首を傾げた。

「『ワールドリンク』……文字通り、世界とリンクする力じゃん。

桜は接続を千本のコードに定義づけしてて、一本でも繋がっていると魔力値がEXランクになる。

ついでに言やあ、完全に切ってもSSランク……ぶっちゃけ原則だにゃー。

千本全部繋げちまうと、力を軽く振っただけで次元断層が起きる危険性があるから全部繋げる事はないけど、それでも今の桜は全世界の千分の五十だからにゃー……。

世界そのものに繋がっているから、魔法を使用した後の魔力を即座に回収して使用できる。要するに無尽蔵の魔力って訳」

「……」

祐治の説明に、この場に居た全員が口をあぐりと開けていた。が、御剣だけは何処か納得がいかないのか、顎に手を当てて唸っている。

「しかし、この星に生物と呼べる生物はいまい。如何に世界と接続できると言っても、無理があるのではないか？」

「いんや。この世界だって生きている。星って言う一つの世界がな

どんなにボロボロになろうと、断末魔上げてのた打ち回ろうと、それでも世界って奴は生きている。

桜もそれが判ってんのさ。だから生きてるモンとして星に頼んでんのさ。“あなたはまだ死んでないでしょ？”ってな。

死人に鞭打つ様な行為だが、それでも自分が死んでないって判ってる奴がいる事が星にとっても嬉しいんだろうさ」

だから星も手を貸してんだよ、と祐治は区切り、戦いを見やる。相も変わらず桜はがむしゃらに刀を揮っているが、その顔は何処か生き生きとしていた。

「ほらほらどうしたの！？ もつと踊んなさい、つうか当たれ！ どうせ非殺傷設定なんだから死ぬより痛くったって死にゃしないわよ！ー！」

「ッ……く。マルコキアス、一旦空中に逃げる」

訊いてるのか？ と自らのデバイスに問う直也。しかしデバイスは無情にも言い放つ。

『Of course she's angry. Please experience the master die on course more.』

（彼女が怒るのは当然です。マスターは一度死ぬ以上を経験した方が良いかと）『

そう言えばあの時デバイスを身に着けたままだったと思い返し、次いでデバイスは使えないなと溜め息を零した。

というか、デバイスにさえ見捨てられた北澤直也に明日はあるのだろうか？

「死ねえ……！！！！」
「……………」

うん。明日は無いな。

取り敢えず回避し続ければ疲れるだろうし、その内飽きるだろうと考えて躲し続ける。

たとえ相手がどんな奴だろうと、速さだけは負けないと言う絶対の自負が北澤直也には有るのだ。尤も、彼が勝てるのはそれだけなので、逃げるしかないのだが。

ちなみにそんな直也に業を煮やしたのか、桜ではなく外野からヤジが飛ぶ。

「逃げてないでなんか出せー、本来の趣旨を忘れるなー」

実に気の無い祐治の叫び。それもその筈で、さつきから桜がお前等もなんか言え、と視線で恐喝……もとい訴えていた。

正に四面楚歌。出来れば北澤直也としては手の内は味方であろうと見せたくなかったのだが、仕方がないとばかりに桜に接近する。

「ふっふっふ！ 飛んで火に入る夏のウジ虫、チェスト

！！！」

叫びと共に振り下ろされる一刀。不可視にして絶望的な一撃を、しかし直也は動じることなく見据えると、振り下ろされた桜の^{手首}を掴む。同時、

「あれ？」

勢いもそのままにすっ飛ぶ桜。おそらくは合気道か何かだろうと判断するも、現在進行形で彼方に飛んで……行く事は無く魔法によ

る制御で反転。

北澤直也にしてみればふざけんな！ と叫びたくなるような、それこそ武道の常識とか色んなものを置き去りにした桜の行為に、舌打ちすると、距離を取るべく後退する……つもりだったのだが。

じゃらり、と。なんか足に鏃の付いた白い鎖が巻きついていていた。

《はぐい。いい加減逃げられるとうざいので、ちゃっちゃと仕留められちゃって下さい。

ちなみにそれ、“光鎖”っていう私の拘束魔法です》

「ナイスよ白亜ー！」

人機一体。ここまでデバイスとフューチャー出来るのはそうはいないだろうと誰もが納得し、この場に居た全員が北澤直也に黙禱ないし十字を切った。

瞬間、もう本当に見事なまでにバツサリ斬られる直也。これで死なねえと言うのだからデバイスの凄まじさが判ると言うものである。尤も。

「負けたか。これまでの非礼は詫びさせて頂きます。桜さん」

完全に砂場に倒れた状態で、何処か清々しい面持ちで倒れる直也。しかし桜は、何言ってるの？ と実にこれ以上ない笑みを向ける。

「デバイスって良いわよね」 だって確実に死ぬだろこれ、って言う一撃でも死なないんだもん！」

最後のもん、の部分を可愛らしく跳ねあげながら、デバイスを構える。

「待て、ここで魔力を使つては蒐集に響くぞ？」

至極まっとうな事を言っているが、その間も自分がどう逃げるかの算段を立てている辺り黒いと言うか、北澤直也の往生際の悪さを実感できる。

しかし悲しいかな、世界と繋がつてる桜に魔力切れなんてもんは起こらねえのである。

「白亜、カートリッジロード」

《OKマスター、派手に行きましょう！》

排出される薬莢。本来一発も使う必要のないカートリッジを、ここに来て三発も消費する辺り　ちなみに最大装填数は六発　込められた怒りと憎しみのでかさが見える。

『光牙』……射程こそ短いものの魔力による白い斬撃を飛ばす技であり、その威力は最低でもSSS+……ちなみに上限なんてものは存在しない。

怒りの上限も存在しない。

ズバリ二人の本音を言うならば　、

「《くたばりやがれ　この野郎……！！》」

北澤直也の視界が白く染まる。最後に彼が見たのは、実にすつきりした少女の笑顔だったという。

「すつきりした」

言葉通りのすがすがしい声で戻る桜。一方、北澤直也はピクリとも動かず、ずるずると桜が足を掴んで引き摺っていた。
実にむじい。

「そ、そりゃあ良かったにや……所で次は俺と、」
「私だ……手早く始めよう」

すつきりしたと言いつつも、気絶した北澤直也をどこかかと殴る鈍い音を聞くのが怖いのか、祐治もシグナムもそそくさとその場を立ち去るのだった。

第四回戦・特別編『シグナムvs久住祐治』

「お前の手の内は先程拝見させて貰った。実に見事だったと言うほかない」

ヴォルケンリッター
「守護騎士の将に御褒め頂けるとは光栄だにやー。
けど、俺があんと戦いたかったのは技を見せ合う為じゃない」

言つて、祐治は剣を静かに構える。それは剣士としてあまりにも初々しいというか、はつきり言つて素人同然の構えだった。

「俺は剣なんて殆ど扱えない……技に頼りつきりなんだ。

だからシグナム、あんたの剣を見せてくれ」

「しかし、それではこの戦いの趣旨が、」

「勿論、シグナムは好きに技を使ってくれば良い。あんたはただ、俺の大雑把さつつーか、悪い所をじゃんじゃん指摘してくれば、その都度こっちで確認する」

それは剣の道を志す者からすればふざけるなど言いたくなる発言だろう。剣と言うものは一朝一夕で身に着くものではなく、長く、あるいはそれ相応の密度を持たせる事で伸ばして行くものだ。指摘をされたからと言って動きが身体に染み付く訳でもないし、むしろ悪い癖がつく可能性の方が高い。だが。

「まず剣は拳と拳を離して持つ所から」

シグナムはそれを是とした。基礎の基礎が出来ていないなら、身体に叩きこむのも悪くないと思つてのことである。

「踵を浮かせて、重心を爪先に。常に紙一枚が踵に入るのを意識して」

言われるがままに祐治は行つ。本来は手取り足取り行つものだが、口頭でも充分な程に祐治は対応した。実に筋が良い。

「脚は半歩開いて、バランスを崩さない様に、そうだ」

では、参ります。とその言葉と共に、シグナムは祐治の間に踏み込んだ。

「眼を閉じるな、絶対に開け続ける！」

「……ッ」

優れたボクサーなどは顔面を打たれても眼を開いたままだと言う。無論、その領域に達するには相応の訓練が必要であるが、ともあれ心構えが重要だと言う事だろう。

鏢競り合う祐治の剣を弾くと、肩口を狙って袈裟に斬り込む。

「私やお前の剣は撫で斬るのではなく砕くのが基本だ。力で劣るなら受け止めようとせず、躲す事を覚える」

ぎりぎりと押される祐治の黒狼。魔力的には勝っていても、角度や握刀によつて差が出るのは剣士として自明の理である。

このままでは不味いと剣を流そうとするも、そこに意識を集中しすぎた為か、水月に蹴りを見舞われる。

「剣士と言つても、騎士が格闘術に精通するのは当然のこと。

蹴り技は相手と距離を取つたり、先程のように使うのも良い」

二度目の踏み込み。今度は見切ると、魔力による身体的スペックが上回っている以上見れない筈はないと、シグナムの剣を躲そうとし、

「ぬわつと!?!」

自分の両足を、鞘で払われた。

首筋に突き付けられる刃に、降参だと両手を上げる。

「一つの事に意識を集中し過ぎるからだ。……尤も、剣が一朝一夕で身に着く物ではないと言つ事が判つただろう?」

「ああ……完敗だにやー……………」

がつくりと肩を落とす祐治であったが、当然だとシグナムは告げる。魔導師として優れているのは確かに祐治だろうし、技のぶつけ合いでは確実に負けるだろうが、だからと言ってそれが直接的に勝敗に繋がる訳ではない。

どれ程スペックが高かろうとも、基礎としての積み重ねがなくて

は戦士として二流に留まってしまうものである。

「さて、結局技は見せられなかったな。ザフィーラ、直也が起きるまで相手を頼む」

「うむ」

人間形態へと変わるザフィーラ。結局二人は直也が起きるまでの十分程、お互いの技を披露するのだった。

「う……」

「あ。起きたぜ」

直也が目を覚ました事を、ヴィータが一同に告げる。

「如何程まで寝ていましたか？」

「二十分といったところか……しかし、大丈夫か？」

思わず御剣が声をかけるのも無理は無い。片眼には青瘀ができているし、ところどころ擦り傷まみれだ。

せつかく良い顔立ちをしているも、色々と台無しである。

「……覚悟はしておりました。それより次は、」
「俺とだ」

ザフィーラが身を乗り出す。見れば彼も無傷と言う訳ではなく、所々に切り傷があったし、両手の手甲も罅が入っていた。

「大丈夫なのですか？」

「満身創痍と言うならお互い様だ。シグナムめ、顔見知りとはいえ……やっつけてくれる」

第五回戦・特別試合『ザフィーラvs北澤直也』

「もう既にこちらの技は皆に見せている。残るはお前だけだ」

「そうですか」

ザフィーラの言葉に、そっけなく返す。元より北澤直也は自分の技を見せる気などなかった。彼がここに居るのは、リンカーコアの蒐集を行うためであってそれ以外の目的など欠片も無いのだ。

だが、そもそも言うてはいられないだろう。既にザフィーラは身構え、周囲の注目は集まっている。

仕方がないと溜め息をつき、北澤直也は静かに目を閉じた。イメージするのは漆黒の魔剣。冷たさと悲しみを帯びた、あの剣を現実
に引き摺りだす。

「アロンドイト無毀なる湖光……自分の持つ剣の一振りです。そして、」

まるで槍投げか何かのような姿勢で剣を構える。否、事実彼は、
そう説明した通り魔剣を投擲した。

「ッ……！？」

ザフィーラからしても予想外だったのだろう。剣士が自らの剣を
手放すなど、冗談であっても笑えない。

シグナム辺りが相手なら激昂さえしただろう。しかし、投擲した魔剣は本来の用途ではないにも関わらず正確かつ無慈悲にザフィーラに迫る。

これは駄目だ。たとえバリアやシールドを用いようと、この魔剣の前には碎かれると本能で察し、紙一重の所で回避する。瞬間、

「な!？」

ザフィーラは、手首を握られた瞬間、地面に両膝を着いていた。

「成程。バリアジャケットと言う物は、打撃や斬撃にこそ強くとも、掴むことは可能なですね」

これは良い事を知ったとばかりに頷く直也と、彼の手を振りほどこうとするザフィーラ。

しかし悲しいかなザフィーラの身体はピクリとも動かず、そればかりか本人の意思に反して徐々に大地に身を預ける形になっていく。

「無駄です。例え貴方がどれ程強かろうと、自分が呼吸を読んでおりますので。」

これが自分の身に収めた術理の一つ、合気と言うものでして。相手の呼吸と自身の呼吸を合わせる事で、相手の力をこちらが制御することが可能です」

まるで人体の持つ反射に付け込むような技だと、ザフィーラは完全に地に倒れた状態と思う。

完璧に力が入らない。まるで自分が相手に身を任せているかのような脱力感に、ザフィーラは抵抗するも、かちやりと首筋に当てられた剣を直也が見える様に動かす。

「それとこの魔剣ですが、手元から離れても自分が念じれば戻ります」

よく出来ているでしょう？ と問う直也に、ザフィーラはあっさりと口を開く。

「……降参だ」

「あの野郎……私を押し倒した時にも、合気^{あれ}使いやがったな」

プライドもあつてか、誰にも聞こえないよう呟く桜。一応は全員が模擬戦を終えた事になる。

「では休憩を取った後、蒐集に向かうとしよう」

シグナムの言葉に一同は頷くのだった。

006 そつだ。模擬戦をしよう(後書き)

c・m・「時間はかかったけど、今回はいつもより多めです。模擬戦終了！ 第6話、ようやく投稿完了！」

レインシア「何ていうか色々意外でしたね、今回」

c・m・「……ふ。どうせみんな対戦票見て、

『あー、守護騎士ってやられ役に定評があるんだよな、特にヴィータ』とか。

『御剣相手じゃ祐治フルボッコか』とか思ってたんでしょ？

甘えよ。予想は斜め上空をホームランではなく、ファールでかつ飛ばしてこそSS書きの真髄よ」

レインシア「けど祐治さん洒落になってませんでしたね」

c・m・「久住さんが弱いなんて一度でも言った？ 普段ギャグに走る奴ほどハイスペックだったりするのよ。

……桜ちゃんは相変わらずだったけど」

レインシア「まあ、直也さんは自業自得ですしね……………最後に名誉挽回しましたけど」

c・m・「ま。彼は次か次の回ぐらいで本領発揮する予定。ちなみに神崎はやてさまの質問に応える形になるけど、直也君に関してはあの程度で黒いなんて言っではいけない。むしろ彼の真価は今後発揮されるわ」

レインシア「……すごい嫌な予感しかしないんですけど」

c・m・「ま。それは次の機会に回すとして、そろそろ読者様のお礼に移りましょう。」

久住祐治さま、Hagalaazさま、神崎はやてさま。ご感想を頂き、ありがとうございます」

レインシア「それではまた次回、お会いしましょう」

レインシア「……所で、何でもここまで遅れたんですか？」

c・m・「直也君のイラストで……筋肉をどう魅せるか悩んでいたの。肩とか上腕二等筋とか、あと背筋とか！」

レインシア「……筋肉、ですか？」

c・m・「それが彼の最大のアピールポイントだから。あと、日本刀とか」

レインシア「……顔は一分、武器に一日、身体（筋肉）に三週間つて、どんだけなんですか」

c・m・「筋肉命。それが絵描きとしての作者のポリシー」

007 蒐集作業 分担編(前書き)

今回はかなりバイオレンス仕様です。

「さて、取り敢えず何か出そうな場所に行ってみますか！」

意気揚々と進む桜に対し、一同はそうだな、と頷く。といってもここにいるメンバーは全員ではなく、桜を除けば御剣 仁とシグナムのみである。

模擬戦の終了後、時間もある事だしリンカーコアの蒐集をしよう、との話になり効率化を図る為にくじでメンバーを決定する事にした。結果。

A班：霧河・A・桜、御剣 仁、シグナム。

B班：セレノリアイヴィー、久住祐治、ヴィータ。

C班：北澤直也、ザフィーラ。

と、言う形に落ち着いた。

尤も、リンカーコアを摘出しなくてはならない為、各班に守護騎士を一名置き、重なった場合は入れ替える事が前提であった事。

また、北澤直也はどういった理由からか、ザフィーラのみと蒐集を行う事を希望した為、完全なくじ通りという訳ではないのだが。

「しっかしあれだね、今思うとシグナムって剣士としては最強なんじゃない？」

祐治なんかポコポコだったし、と笑う桜に、シグナムは苦笑を浮かべつつ首を横に振る。

「私は自身が最強だ、などと不遜な考えは持たない。」

それに、桜や祐治の様に能力に特化した存在が私にとっての脅威である以上、私の剣はまだ甘いのだ」

「殊勝だねー……あの剣を放り投げた最低男にも見習わせたいよ」

まだ怒っていたのか、と問う御剣に、桜は当然！ と声を上げた。

「しかし、直也の主である御剣の手前こう言っただけは何だが……私は彼を恐ろしいと時折感じる」

「えー？ 直也って弱々だったじゃん。そりゃ、ザフィーラには勝つたけどさー」

何処か不満そうな桜に対して、御剣もシグナムの言に思う所があったのか、静かに問う。

「何故そう思うのかね、シグナム」

「御剣も感じているのだな……端的に言うならば、直也からは血の匂いが感じられた。桜も祐治も御剣も……皆優れているし、直也より実力は上だろう。」

其処に疑いの余地は無い。だが、お前たちには一滴も血の臭いがしない。それを青いとは言わん。主はやての元に集う人間に血の匂いがしては敵わんし、何より殺さずとも強くなれると証明するその存在は素晴らしい。だが……」

「直也は違つと？」

御剣の言に、シグナムの顔が微かに俯く。おそらくはそこから先を言うべきか悩んでいるのだろう。

続ける、と促す御剣に、シグナムは重たそうに顔を上げた。

「直也は……奴は信用できない。」

グイータは奴に懐いている。私も付き合いが長いからな、あいつ

が悪人に入れ込むとは思えん。だが、あの模擬戦……剣を執った瞬間、確かに死臭が混じった。

あれは勝つ為に剣を執るのではなく、殺す為に剣を執る存在だ。私はそれが不安なのだ。あの男が主はやてを傷付けるのではと、そう思わずにはいられない」

微かに震える声は緊張からか。それとも仲間である筈の存在に不信感を抱く自らを恥じてかは判らない。

いずれにせよシグナムは北澤直也を信用しきれないのだろう。御剣は微かな溜息と共に、シグナムへと向き直る。

「その直也の事だがね。先日、はやての誕生日にヴィータにぬいぐるみを送ったろう?」

覚えているか? という御剣の問いに、シグナムは忘れる筈も無いと応える。

「あんなに嬉しそうなヴィータの顔は久しぶりだった。いや、それを言うなら主はやてと出逢ってから、あいつは幸せそうだった」

「あのぬいぐるみを買うのに、わざわざ隣町まで直也は出向いた。おもちゃ屋で売り切れだと聞かされてな。

他にも色々あったと言うのに、これが一番似合っていそうだったと言う理由でだ」

あの時の必死さといったら無かったよ、と思い返したように御剣は笑う。

「この前など必死になって料理雑誌を見ていたよ。

とはいえ……これははやての家に行くより前からだが、セレノには不味い食事を出したくないと零していた。料理はある程度は出来

る様だが、これまで自分の分しか作って来なかった為か、美味しい食事は作れないようだった。

私は直也とはそれ程長い付き合いではない……それこそ、会ってから過ごした時間など一月にも満たん。だが、一つ言える事があるなら、直也ははやてを傷付けたりはしないだろうさ。

以前……子の泣き顔などもう見たくないと、そう言っていたからな

「どういう事だ？」

「さて、な。私も詳しくは知らん。ただ一つ言えるのは、はやてを傷付ける事だけは無いと言う事だ。あの少年は、この上なく身内に甘いようだからな」

話はここまでだと区切り、目の前の生物を見やる。蛇だ。

体長は二十メートル程にもなるだろうか？　ここが沼地という事を考えれば納得はいくものの、流石にいざ目に見ればこれ程異様な存在も無いだろう。

「三頁分程か……ここからでは仕留める前に気付かれるが、さてどうしたのか……」

「そんなもん、こうすんのよッ！！」

横に居た桜が、ぶん！　とデバイスをぶん投げた。それはそれは見事なフォームで投げられたデバイスは見事蛇の首に命中し、一撃で沼地に沈めるのだった。

「イエーイ！　どうよ、御剣？　こうすりゃ一発よ！！」

ガッツポーズをとる桜に対し、御剣はこめかみに指を当てつつ、残る片手で倒れた蛇を指さす。

「ん？」

桜が視線で追った指の先には、今にもぶくぶくと沼地に沈む蛇とデバイス。

「しまった！？ 底なし沼！？」

ガツテム！！ と叫ぶ桜に、手伝わんぞ、と釘をさす御剣。しかし、この程度でめげる程桜のポジティブさは易くない。

「ならこうすりゃモーマンタイ！ チェスト
！」

地面に拳を叩き込んだかと思うと、地割れの如き亀裂が大地を奔り、沼地はモーゼの十戒の如く二つに裂けた。

「さーて。回収回収っ」と

思わずあんぐりと口をあける御剣とシグナム。何と言っか、色々
と出鱈目である。

「ともあれ、これで蒐集出来るな。桜、今そちらに、」
「ッ！？ シグナム！！」

御剣の叫びにシグナムが振り向く。しかし違う。すぐな無が振り
向いた後方に危険など無い。

危険があるのは彼女の足元。半径五メートルもの円形に生えそ
った牙が沼地より現れ、彼女を中心に口を閉じようとしていた。

「迂闊……！！」

すぐさま脱出しようとするも、もう遅い。時間にして刹那。一瞬にして巨大な顎はシグナムを呑み込もうとし、

「させるか

!!!!!!」

それを遙かに超える速度を以て、桜はシグナムを救出した。

既に彼女の身体は地上には無い。高度二十メートル。遙か上空へと跳躍した桜に抱きかかえられながら、何が起こったのか判らないといった表情で固まっている。

「うーん。前からお姫様だっこってやってみたかったのよねー！あ。けどシグナムにならされてみたいな。という訳で、帰ったらだっこしてね」

何が、という訳、なのか判らないが、その疑問を口にするより早く桜は凍える程に冷たい視線で眼下の存在を見やる。

巨大な口だけの生物。その顎であらゆる存在を呑み込む醜悪な生物を。

「よくも私の可愛くて大事なシグナムを食べようとしたわね？ 良いわ。蒐集もしないといけないから殺さないけど、きっちり償って貰いましょうか」

かつて北澤直也を捉えた時と同じ純白の縛鎖が口を閉じさせ、口だけの生物の全容を露わにさせる。

同時、手にした白亜の刀身が光に満ちる。吹き荒ぶのは白の魔力光。全身から溢れる夥しい魔力を前に、シグナムも思わず口をあける。

「 光牙」

静かに、空中より落下しつつ振り下ろされた一刀は、その静けさとは裏腹に、一撃で醜悪なる魔獣を鎮めるのだった。

「 済まない。助かった」

「 良いつて良いつて。蛇と合わせて一気に十三頁も集まったんだし、結果オーライじゃん！」

しかし、となおも食い下がるシグナムに、じゃあさ、と桜は笑う。

「 今夜一晩、付き合ってくれる？」

その言葉に水筒の水を口に含んでいた御剣が嘔き出す。

「 な、いや。流石にそれは」

狼狽するシグナムではあったが、桜は冗談よ、と笑う。

「 だってシグナムは私にとって大切なんだもん。」

私は引つ掻き廻してばっかだけどさ。大切な人を、無理やり自分の物になんてしたくないから」

だからね、と。そっとシグナムに近づくと、愛でる様に頬に手を当てて、

「 いまはこれで充分」

軽く、その頬に口づけた。

「待ってなさい！　いつかシグナムを本気で振り向かせてやるんだから！」

ビシイ！　とシグナムを指さすと、そのまま早足で去っていく桜。一方シグナムはというと、耳まで赤くなった状態で硬直していた。

「な、なな……」

「まあ……女性同士は何かと大変だろうが、私は無暗に口外する趣味は無いのでな」

安心してくれ、と肩を叩く御剣。結局今日一日、シグナムが平静になる事はなかった。

「しかし何だな。ベルカの騎士にここまでやり合えたのって、お前が初めてじゃね？」

「いえ、私などまだ未熟者です。ベルカの強さは養父より見知っていましたから。」

しかし、ベルカの騎士でありながら空戦適性があるとは珍しい……私の養父も含め、殆どが陸戦主体でした」

お互いに笑い合いつつ軽い足取りで進むヴィータとセレノ。その後方に、ぽつんと残る祐治の姿があった。

何というか、遠足で仲の良い子と別々になってしまったような、そんな空気を纏わせている。

「うん？ どうした、祐治」

「いや……なんつうか、会話に割り込めないうつていうか。蚊帳の外って感じがするんだがにゃー……」

「そう言えば、いつも桜さんに引っ張られていましたね」

確かに、とセレノの言にヴィータも納得する。

「振り回されてばっかだったけど、会えねーと何か空回りするっつーか、強烈なポケ担を無くした芸人の相方っつーか……そんな感じだにゃー……」

明るい感じで言いつつも、言葉には明らかに覇気が無い。

離れてこそ相手の大切さが判るとは良く言うが、今の祐治にとつては正にその心境なのだろう。

そんな祐治に、二人は首を傾げる。

「要するに、祐治さんは桜さんが好きなのですか？」

「は？」

「あ。そうなのか？」

気付かなかった、と呟くヴィータに、それ以外考えられないでしよつと返すセレノ。

しかし祐治にとって、その言葉はあまりにも衝撃的………というより否定しなくてはならない発言である。

「いやいや待て待て！？ 俺と桜はそんな関係じゃないじゃん！！ あいつとは兄妹っーか親子みたいなもんで、そう言う関係になる事は絶対無いんだにゃー！！」

「つまり幼馴染の様なものなのでしょう？ 距離が近すぎてはそう

らない。

「密林はこちらだな」

「ここには来るなど、散々他の者から忠告をされていた筈だがな」

それぞれが探索を行う事になり、北澤直也とザフィーラは前回御剣達が失敗したと言う密林の入口へと足を運んでいた。

尤も、先のザフィーラの発言通り、北澤直也はここに来る事を固く禁じられていた。

理由はというと……

『はあ？ あんたみたいに弱っちいのが、あんなところ行ってどうすんのよ？』

怪我したら危ないし、私達だって助けに行けないっしょ！』

と桜に言われ、

『流石にあそこは止めておけ。確かに環境は良いが、割に合わん』

と御剣に促され、

『ま。危険な事はしない方が良いにゃー。皆心配するし』

と祐治に肩を叩かれ、

『ザフィーラ、直也が危なくなったらすぐに引つ張って帰れ』

とシグナムから託児所に預けられる子供の様な扱いをされる事になった。

「別段シグナム達も悪意があった訳ではあるまい。お前に負けた俺が言つのもなんだが、あの四人ですら退却した密林だぞ」

そう意地を張るな、とのザフィーラの言葉に北澤直也は鼻を鳴らすと、背負ってきたリュックを下ろす。

「それは？」

「御剣さん達の話を知った上で、何の対策も無いままここに来たとしても？」

言いつつ中からガムテープを取り出すと、ジーンズの裾とブーツの境目に巻きつける事で密閉し、手にも革手袋を填めてから同等に巻きつける。

これによって衣類の中に泥や虫が潜り込むのを防ぐのである。

次いで全身に小型の虫よけスプレーを吹きかけ、獣状態のザフィーラにもかけてやる。

「臭うな」

「寄生虫に食い潰されたくなければ我慢しろ」

次いでリュックの中から剥き出しのナイフを取り出すと、あらかじめベルトに通しておいたシースに差し込む。

魔術によって作られたとか、名工に作られた一品物という訳ではなく、通販などで頼めばすぐに手に入るスウエーデン軍正式採用の

シースナイフだ。

それを予備も含め二本ほど携行すると、うち一本を手にしたまま密林へと先行する。

「その荷は持ち込まんのか？」

ザフィーラが言いたいのには入口に投棄したりリュックの事を言いたいのだろう。

しかし、その中にはもう必要なものは入っていないと言い、振り返る事無く先へと進む。おそらくは目印のつもりなのか、ごりごりと特定の樹木にナイフで斬り付けるのを、ザフィーラは不思議そうに見つめていた。

「何が臭う？」

「果実だ……かなり豊富だな。甘い臭気を発しすぎていて、それ以外の臭いが掴めん」

やはりか、と直也は納得したように頷くと、ザフィーラに人間形態になるよう指示を出す。

「ここでは獣である事は逆効果だ。利きすぎる鼻も麻痺しているだろうっ？」

ザフィーラは確かに、と頷くと言われるがまま人間形態になる。少し進んだ先に見えるのは、倒れた木の幹だ。かなりの時間が経過しているのか、幹には既に苔が生し、他の植物が倒木を呑み込む

形になっていた。

「迂回するか？」

「間違つても左右に進んでくれるなよ、落とし穴だ。それと微かに水のせせらぎが聞こえるが、音が不自然だ。おそろくだが、岩か何かで堰き止めている。土の湿り具合からしてここ以外の道を通れば確実に思ふ壺だ。」

鉄砲水を喰らいたく無ければ今居る位置から動くな」

狼を媒体とした守護獣であるザフィーラにしても、流水の音は確かに聞こえていた。だが、それが堰き止められている物かどうかは判別出来なかったのだろう。

ただの人間である直也にその事実を告げられた事に驚愕しつつも、大人しく今居る位置から動かないでおく。

瞬間、銀の閃光が首筋を掠める。

「……なにを」

「言われた通り動かなかったな。後ろを見る」

突然の事に怪訝な顔つきになるも、言われるがままに後方に振り替える。蛇だ。大きさこそ小さい物の、恐らくは毒を持っているのだろう。口元から零れた唾液らしきものが草を溶かしている。

尤も、今となつては危険は無い。既に蛇は頭部と胴の繋ぎ目を中心に、ナイフによって木に縫いとめられる形となっていた。

「ナイフは抜くな。この手の毒蛇は背から毒を吹きかけるものも居る」

その為に予備を用意したのか、と感心しつつ、ザフィーラは自身の中での直也の評価を改める。

午前に行った模擬戦の際に微かに感じた獣めいた臭気。殺意と呼ぶにはあまりにも淡泊な、それこそ相手をどうとも思わぬ冷静さも、このような危機察知能力による物ならばと納得出来る。が……それでも尋ねておくべき事はある。

「何故俺と組むのを選んだ？」

ザフィーラにとっての最大の疑問。何故北澤直也は自身を選んだのか？あの場にはヴィータやセレノといった、北澤直也と親密な存在は含まれていた。

それをわざわざくじに逆らってまで自身と組む要因が何処にある？むしろ、北澤直也に為す術無く破れた自分より、シグナムのように実力の高い剣士と組む方が明らかに戦力としても、相性としてもバランスが取れていた筈なのに、と。

「野性の嗅覚と本能に期待しただけだ」

が。返ってきた答えはあまりにも淡泊な物だった。無論、そんな事を真に受ける程ザフィーラは馬鹿でも楽道家でも無い。

「ふざけているのか？そもそもお前は何故模擬戦を二度行った？明らかに手の内を見せる事を渋っていたのはシグナムにもばれていたぞ？」

それは直也が信用しきれない、という事を暗に告げるものだったのだろう。

周囲を確認する作業を終え、北澤直也は静かに振り返る。

「手の内を見せる以上に、相方となる者の実力を知りたかった……
と言えば満足か？」

その発言に嘘は無いのだろう。少なくとも、ザフィーラは直也の眼をそう見て判断するも、ここで一番最初の疑問に戻る。

そもそも、何故自分が？ と。

「不服か？」

「少なくとも、最初の質問に応えていない時点だな」

言いたくない理由でもあるのか、と訝しむザフィーラに、大したことはない、と直也は返す。

「確かにヴィータとは親密ではある。が、それが背を預けられる相手と同義か問われれば否だ。あれは確かに目端が利くが、感情的かつ血が昇り易い。

セレノに関しても同様だ。確かに常日頃こそ冷静ではあれど、ヴィータと同じく意固地になり易い点があるからな。狭窄視野な者に背を預けるなど不安でしかない。

ではシグナムか？ 確かに彼女は守護騎士随一の剣士であり、歴戦の騎士だろう。

だが、それ故にあれと俺は相容れぬ。実力や能力ではなく、その思想がだ。有り体に言えば馬が合わん。これに関しては別段彼女に限った事ではないが、少なくとも守護騎士の中では際立っていたし、現にシグナムは俺を警戒していた。

俺の行動に、ではなく本能的な直感に従ってな。その点は俺も同じ……つまりは最初から選択肢には入っていなかった。

我が君である御剣 仁氏や桜、祐治は問題外だ。実力に開きがあり過ぎる上、あれらは能力の行使こそ最大の武器であり、裏を返せばそれ以外ない。

俺は最初から密林こそを狩場として準備をしてきたからな。今回に限って言わせて貰えれば、彼らは足手纏いだ。邪魔にしかならん」

以上の理由で、俺はお前を選んだと締め括る直也に、ザフィーラは険しい顔をする。

「辛辣だな。何より、自らの主を邪魔と言っか」

「適材適所だ。盲信は思考を曇らせる。たとえ主であることも、否、主であるからこそ俺は不敬と謗られようと最善を選ぶ。」

俺を己が身の可愛さで、主に要らぬ胡麻を磨って窮地に送る様な、不忠者と見てくれるな」

「……すまん」

確かに一理あると、自らの非をザフィーラは素直に詫びる。が、直也にしてみれば思った事を口にしただけで、癩に障ったと言う訳ではないのだろう。

「こちらが舌足らずだったただけだ。気にする事ではない」

すぐさま前へ向き直ると、ザフィーラに告げる。

「進むには幹を飛び越えるしかない……が、越えた先から三メートルは外して歩け。畏だ」

まったく何事も無く、それこそ一匹の外敵もないままに二時間ほど歩き続け、一旦戻るぞと北澤直也は踵を返す。

こうして密林を出るべくある程度歩いたのが二十分程。時折倒れた幹もかなりあった為に迂回する事になったが、ナイフをによって

斬り付けた幹を辿っていた為にすぐに出る事が出来るだろうとザフィーラは考えていたが、一向に出口が見えない。

「どういう事だ？ 印を辿っていた筈だろう？」

多少の迂回など問題となる筈がなかるう？ とザフィーラが問うも、北澤直也はその問いに首を横に振った。

「いや。嵌められた……尤も、正確に言えば乗ってやったが正しいが」

「なに？」

「俺達は確かに印を辿った。俺が付けた物とは別の印をな」

言つて、北澤直也は爪先で横一文字の傷の付いた木の根を蹴る。

「ナイフで斬るのと一緒に土を爪先で掘っておいた。が、掘った後も無ければ埋め直された跡がある訳でもない」

この意味が指す所は一つ。既に密林の支配者たちは北澤直也達の存在に気付き、手を打っていたと言つ事に他ならない。
すなわち。

「ここに俺達を埋める手筈なのだろう。だが、」

唐突に、微塵の容赦さえも無く直也はすぐ傍にある木に蹴りを叩き込む。

同時、何かが砕ける音が響いた。

「ピィ！ ギィ……！？」

何故ここが判つたのか？ おそらくはそんな事を考えているのだろう。……呼吸が消し切れていかなかったとも知らずに。

蹴り付けた生物は木の幹に背を押しつけられ、喉笛を足刀で潰される形となっていた。

まず第一に思うのは、小さい、という事だ。背丈は北澤直也の腰ほどしか無く、蹴りによつて抑えつけられている為か、脚が地に着かずばたばたと必死にもがいている。

次いで思うのは、その獣の特異さだろう。全身を覆う真緑の鱗。魔法を全て気配遮断に用いている為に、物理的な防御を上げるといふ進化を遂げたのか、まるで金属めいた硬さがあった。

体つきは人間に近く、手も足も指もある。鋭く伸びた爪に発達した犬歯、だがそれ以上に醜悪な顔つきだと直也は思う。

よくもまあ、ここまで醜くなれた物だと。おそらくは威嚇の意味も含めているのだろうが、見る分には堪えられる物ではない。

「そいつは幼態だな。情報では三分の一頁との事だったが、そいつを仕留めた所で一行にも満たんぞ？」

それ以上は哀れであるから離してやれ、と暗に告げていたのだろう。

既に北澤直也の抑えつけた獣人は口から泡を吐き、抵抗していた手足はだらりと力なく下げられている。

北澤直也はそれに対し、一旦足の力を緩め、

「ああ、それで？」

情け容赦なく、その首に再度足刀を叩き込んだ。

「な……」

ベキベキと言う脛骨の砕ける音。如何に全身を鱗で護られていようと、幼態である以上強度には難があり、武器の域に達した北澤直也の蹴りはそこまで生半可な物ではない。

歪に首が折れ曲がった獣人の頭部を掴むと、そのまま見通しの良い中央へと運ぶ。

そして。

「待て!!」

ザフィーラの声など届かない。虚空より顕われた魔剣で北澤直也は既に死した獣人の首を刎ねると、今度は足首を掴んで辺り一面に噴き出す血を撒き散らす。

「さて……一匹仕留めれば後は芋づると言う事だが、何匹集まるか」

あまりにも非道、余りにも下劣。

もし北澤直也が笑みを零していたなら、ザフィーラは襲いかかっていただろう。

赦せぬ仇敵として、血と苦痛を是とする存在として北澤直也を見だし、敵対した筈だ。

だが、北澤直也に感情の色は無い。まるでステーキを食べやすいよう切り分けるかのように、余りにも淡泊かつ無感動に解体という作業を進めた。

首から噴き出した血が止まれば四肢を？ぎ、見せつけるかのように明後日の方角へと投げ、胴をサッカーボールか何かのように蹴り飛ばす。

そして、その片手には未だ苦悶の表情を浮かべる生首が一つ。

「取り返しに来い。俺はここだ。貴様らの仇はここに居るぞ?」

呟く声に反応してか、四方と上空より殺到する獣人の群、その数、四十と六。

八つ裂きにしてやると、その手に持つ我が子を返せと襲い来る獣人は己が爪牙を以て北澤直也の喉笛を引き裂き、四肢を食い千切るうとし、

そのどれもが、北澤直也に触れる事無く動きを止める。

まるで一時停止をしたビデオだ。虚空に手を伸ばしたまま固まる彼らを前に、北澤直也はデバイスも無く空中に浮いていた。

否。直也は浮いているのではない。彼はただ、自らの手によって密林に張り巡らせた鋼系の上に立っているに過ぎず、未だ固まる獣人達もまた不可視の糸に囚われているに過ぎない。

この密林は既に獣人の巣に非ず。彼らを捕食する蜘蛛の巣と化している。

「さて、ザフィーラ。これだけ集まれば十頁以上にはなるだろう。手早く魔力を回収してくれ。まだ出てきていない獣も、」

その言葉を言い切るより早く、ザフィーラは拳を振り上げた。さしもの彼もここが限度だ。如何に志を同じくする仲間であろうとも、目の前の存在は決して許容できるものではない。

が、それを直也は身を捻るだけで躲す。

「拳を向ける相手を違えているようだが？ 獲物は拘束した。それとも襲い来るのが不安か？ なら」

「くい、と。手首を返すだけで、この場に居た獣人全ての腕が？ げた。」

「これで抵抗は出来ん。ああ、出血死の心配はいらん。心臓に近い位置から鋼糸で縛っている。万が一にも死ぬ事は無い」

裏を返すなら、魔力を奪うまで何があるかと死なせない、と言う事に他ならない。

何故だ、と、掠れる声は怒りによるものか、それともこの場で起きた惨劇に対する恐怖かは判らない。

「貴様は何故!？」

ここまでの事をするのかと、魔力を奪うだけで済んだ筈なのに、そう吠えるザフィーラに、北澤直也は肩を竦めることさえしない。

「八神はやてを助け、尚且つ守護騎士を現世に留める……その為にただけの事だ」

一体何の問題が？ と。本当に何故怒るのが判らないといったように首を傾げた。

「貴様がしたのは蒐集ではない、ただ殺戮を愉しんだに過ぎん!!」
「解せん。蒐集を効率的に進め、こちらは一切の手傷を負う事無く目的を達成する。」

現に俺も君もこうして無傷だろう。次の蒐集を行う問題は一切ない」

「貴様は……こんな事を続けると言うのか!？」

狂っている。獣とはいえ幼子を殺し、その亡骸さえ取り戻そうとする同族をもここまで傷付ける事に、何の感慨も湧かぬだ!?!
既にザフィーラは限界に達していた。これ以上この男が囀るなら息の根を止める事さえ厭わぬと、そんな感情さえ込み上げる程に。

だが。

「無論だ。どこぞの魔導師に狂わされた書に苛まれる少女が居て、それに縛られるお前達が居る限りな。」

その過程で何十何百の獣が死のうと知った事ではない。俺は俺が手を差し伸べたい者に差し伸べるだけだ」

その為ならどの様な汚濁であろうと、喜んで背負おうと。一片の迷いさえ無く言い切る直也に、ザフィーラは一瞬たじろぐ。

「貴様に恥は無いのか……主の名に泥を塗る愚拳を是とするのか？」

問い質す言葉は、祈りにも似た響きがあつたのだろう。仮にも忠義を抱く者であるならば、我々騎士と同じものであるならば、そこに思う所がある筈ではないのかと。

しかし。

「主と俺は関係ない。俺は主の為に رفتたのではなく、俺自身がそうする事を望んだまでだ。貴様ならば理解していると思つたのだが……、よもやあの夢見がちな少女や、絵本の騎士道を守る女剣士と同じとは」

期待はずれだと、そう言外に告げる直也に、ザフィーラは吠えた。

「貴様の行為そのものが、主の名に泥を塗るとは思わんのか!？」

「微塵にも。そも騎士と武士は根底からして違つ」

「名誉を、誇りを、忠義を泥に塗る事を是とする所がか!！」

「それが判つていないというのだ。そも何故騎士共は名誉や誇りと忠義を分ける？」

それこそが最も下らない所だと言つように、北澤直也はザフィーラに言い放つ。

「武士おれにとつての誇りや名誉こそすなわち『忠』だ。

『武士道』とは茎にして木の幹。民という根に支えられ、主という華を咲き誇らせんがために折れる事の赦されぬ一本の茎であり、大木の幹だ。

己の名誉だの誇りだのと……主への忠義を度外視して己を咲き誇らせようとすきまらのみちる『騎士道』とは相容れぬ。

判るか、守護騎士ヴォルケンリッター。主の為に泥さえ被れぬ騎士きこまらの安い忠義で、武士おの『忠』を計つてくれるな」

北澤直也の語る『忠道』こそ彼自身の誇りにして根底。

武家の家に生まれ、本家を継ぐ事になった彼が唯一語れる名誉だ。

「守護騎士われわれの忠義が……安いだど？」

「所詮、武士おれと同じ騎士ひじょうしであろうが。名誉だの誇りだのと、軽々しく戦場では使われるが、とどのつまり、土われわれは須らくそついうモノだ」

敵対するなら赤子でも殺せ。駐留したくば村を奪え。大局を動かすのに必要な犠牲や悲劇など幾らでもある。

その過程で誇りを見いだし、奪った村の民草や生き残った敵に温情を与えるか、流されるまま殺すかは分かれるが、一時的に奪う事は変わらない。

無論……奪う過程で村を護る人間を死なせる事も。

「貴様だけは牙が抜けていないと思つていた。あの小さな家で、唯一主の為に牙を研ぐ獣だと思つていた。だが」

胸倉を掴む。確かな怒気を滲ませて、ザフィーラの背を木の幹に

叩きつけた。

「ここに来るまでに何をしていた？ のこのこと文句を垂れながら付いて来るだけ、蒐集さえ行わぬ気が？」

「目前で獣が死なねば満足か？ 蒐集を行えば半日以上は動けぬ。他の獣が勝手に喰らうぞ？」

それは確かな事実。蒐集によって動けなくなった獣など、自然の中では餌に過ぎない。

殺さなければ良いなどというのは偽善か、後の事を考えない無意識の言い訳だ。

「俺は知人の飼い犬を散歩に連れてきた訳ではない。優しい飼い主と居れて楽しかったか？ 愛玩動物が望みか？」

餌を与えられ爪を切られ、牙を丸められて満足したか？

従者とはすなわち狗だ。主の為にただ動き、外敵の喉笛を喰らう走狗。

そこに無頼との差を付けるとすれば、名誉と誇りを以て狗であるうとする事だ。

ただ一振りの剣であれ。ただ一つの楯であれ。ただ一本の牙であれ。

命さえ擲てる駒であれ。

「……俺は」

“さあ、ここからが最も重要だ。ザフィーラ、君はここで何を願う？ 騎士と武士が同じだと言える点は一体何だ？”

北澤直也は言葉を待つ。その爪を研ぎ直せ。内の鎖を喰い千切れ。

主以外の何者にも、繋ぎ止められぬ存在たれ。

「ヴォルケンリッター
守護騎士、盾の守護獣ザフィーラ！」

主はやてに忠誠を誓う騎士だ！！」

そう。それこそ、その叫びこそ牙を再び蘇らせる。

使えぬ狗など必要ない。汚泥を嫌うは飼い犬のみ。ただ外敵を喰らい、口元を血肉で汚し、鬣を泥に塗れさせてこそ、士は真に価値ある存在となる。

忠誠あれ。主に栄光あれと、その言葉さえ確かならば我々は真の意味で『士』となる。

絵本の中で甘く持てはやされる騎士もどきでなく。

幼い少女にほだされた飼い犬でも無い。

「……そうだ、それで良い。俺達はそういう物だ、だが主の傍に侍る狗が盾を持つと言うのは如何なものか？」

君は主の危機に、ただ盾を構えて待ち続けるのかと、狂気に満ちた双眸が語る。

無論、その答えは否。己が主に徒為す者は、たとえ身内であろうと喰い殺そう。

名乗りは新たに。今己が求めているモノが何であるのかを、ザフィーラは真なる意味で理解した。

「……俺は『牙』だ。誰よりも速く敵を喰らい、誰よりも凄絶に敵を討ち、誰よりも重く主への忠を抱くモノ……！ 八神はやての……『牙』の騎士だ……！！」

それこそ最大の榮譽にして矜持だと。誇らしげに語るザフィーラ

に、北澤直也は歡喜を以て応えた。

「君に祝福を
主に爪牙を捧ぐ狂獸^{フエンリル}。」

まだ蒐集は終えていない。手早く済ませた上で次を探そう」

この森の生物が、最後の一滴まで魔力を差し出すまで。主の為に祝福を以て命を差し出せと、ザフィーラは呵責も容赦もないままに魔力を引き抜く。

ここに、狂信^{キヤウシン}を胸に宿した狂獸を修羅が祝福する。

この森に響く惨劇は、未だ終わらず。彼らが蒐集した頁は、四十に上るのだった。

c・m・「すみません……思いつきりバイオレンスになってしまいました。第7話、ようやく投稿完了です」

レインシア「もう完璧に悪魔でしたよね、直也さん」

c・m・「ぶつちやけ、今回は直也君の本性見せとザフィーラの魔改造がメインだったからね……後悔も反省もしてるわ。」

あと作者の考える武士道と騎士道の違いって言うのも出したかったし。

けどまあ、直也君の外道っぷりは後々濃くなってくからね……多分みんなドン引きするんじゃないかしら」

レインシア「既にドン引きです。あんまり暗くなるのは嫌なので話し変えますけど、祐治さん、完璧に弄られてましたね」

c・m・「久住さんは一度桜ちゃんと分けるとどうなるかはついやってみたいわ。」

……あの二人を書いていると、いつも思っちゃうのよね。YO
U！ 付き合っちゃいなYO！って」

レインシア「桜さんのキス回でもありましたね……」

c・m・「同性愛って書くと難しいのよね。作者と同じ性別だと特に」

レインシア「……普段は悪ノリのBLオンリーですからね」

c・m・「ま。それは次の機会に回すとして、そろそろ読者様のお礼に移りましょう。」

久住祐治さま、HagaIazさま、神崎はやてさま。ご感想を頂き、ありがとうございます。」

レインシア「それではここからは感想の質問コーナーへ移ります。

まずはじめに、セレノさんがトランザムしなかった件についてですが」

c・m・「出し惜しみしました。作者的にはあれを使うと非殺傷設定も吹っ飛ぶ仕様にしたかったので」

レインシア「では次に、御剣さんの出番はこれからあるのかという事ですが」

c・m・「次回がサービス回になるので、次々回当たりになると思っています。あくまで予定ですが」

レインシア「……同じような質問で、マクスにも活躍の機会があるのかという事です」

c・m・「次々回を待つて下さい。活躍できるかはともかく出演予定です。以上」

レインシア「それでは質問はこの辺りに。また次回、お会いしましょう」

008 海と温泉はサービス回 それが宇宙の真理(こんなタイトルでも謝らな

今回は前半ギャグ、後半シリアス、オチはバイオレンス仕様とな
っております。

唐突だが、夏が来た。

八神家パーティーが揃った時点で六月じゃねーかとか、まだ蒐集数えるほどしか行ってねーだろとか言われようが、夏な物は夏である。この時期になれば蚊が人間にステルスアタックを敢行し、蝉は海兵隊も真っ青になる程に朝から晩までラブコールを響かせ、喜び勇んでナンパに走ろうとした天宮恭介がアルフに首根っこ掴まれて管理局の仕事に連れてかれたりするのはどうでも良い。

ともかく夏だ。夏は来たのだ。

白い砂浜、青い海こそ夏の全て！ プールも良いがやはり自然というモノは素晴らしい。

そして開放的になる男女も素晴らしい。

各々が期待を胸に抱き、いま彼らは観光地へと着いたのだった。

「さあ！ やつてきましたー大イベント！ 開放的なお姉ちゃん達が、いま私を待っている！」

「桜。それは明らかに男の台詞だにゃー」

的確なツッコミではあったが、祐治自身楽しみではあるのである。う。

なにせ海だ。肌を灼焦がすような真夏の日差しでさえ歓迎できる程の楽しいひと時が待っている。

しかも今回は一泊二日。宿に至ってはケチな事はせずにプール付きの国際ホテルを予約済み。これが期待せずにいられる筈は無い。

既にホテルのロビーに集合した一同は、これから海へ行く事を心

待ちにしている者ばかりである。

「じゃ、さっさと更衣室で水着に着替えましょっか」

何！？ と桜の言葉に男勢が首を振り向く。

「ん？ どしたの？ そんなに私達が着替えるところ見たい？」

「そうではない。そうではないが……」

思わず言い淀む御剣に対し、女性陣には見えない角度で勝ち誇った笑みを見せる桜。

一方、祐治はというと。

「ぬおオオオオ！！ ふざけるな桜！！ 幾らお前が（今は）女だろうと、そればかりは断じて認めねえ！！ つうか俺も見たい！！」

と。心からの叫びをぶちまけて女性陣から白い目で見られた。

“くっくっく……正直者め。しかし今はそれが裏目に出たわね祐治。さあて、残るは最難関を潰すだけか”

この場における最難関とは言うまでもなく直也だ。何せこの男に余計な挑発をすればガチで返してくる事は目に見えている。ならばどうするか。他の奴に振れば良いのだ。

「そう言えばセレノちゃん、自分の水着持って無かったよね？」

「え？」

そう言えば、と一同は振り向く。守護騎士の面々はここに来るま

でデパートで用意したものの、セレノだけは中々決まらず 露
出の高い物を好まなかった為 結局買わずじまいだったのである。

「海に行くんだから水着くらい着ないとね。という訳で直也、選んであげたら？」

お兄さんなんだし、という桜の発言。しかし、それに対して直也は墓穴を掘ったな、と言わんばかりに口角を釣り上げた。

「そうだな。桜さん、セレノの水着と一緒に選んで貰えるかな。

流石に男では女性の水着は選びにくいし、シグナム達の水着を指定した君なら詳しいだろう？」

“そ、そう来やがったか、この野郎……！？”

わざわざ男性陣の意見を訊かない内 反対される事が目に見えていたから 買い込んだ事が裏目に出た。

「いや、そこはお兄さんらしく先導してあげたら……？ セレノちゃんも喜ぶって！」

「いえ。やはり近過ぎる距離より一歩離れてからの方が物事を見通せる物です。

女性代表としてお願いします」

実にすがすがしい笑顔で返す直也に、男性陣一同はそうだな、と納得する。

「では我々と女性陣は先に着替えを済ませておく。という事で良いな。

何。君達を置いて先に遊ぶなどという事はせんよ、場所はきちん

と取っておく」

言いつつ全員を先導する御剣。この後、桜は齒が砕ける程の齒軋りと共に血涙を流していたりするのは激しく余談である。

さあ夏だ。夏と言えば海だ。しかし海以上に水着だ。

何故夏はこつも開放的なのか？ 何故下着と同じほどの面積しかないのにいやらしく無く、かつ直視しても文句が言われないのだろう？

ビバ夏！ ビバ海！ 白い砂浜にさえ負けない白い肌！ この世に生きる男共にとつての憧れ。しかとその眼に猛暑の如く焼きつける！！

しなやかな身体に対して見せつけるような上半身の丘。

スタイルが良い程小ぶりの箸なのに、何故か大きさを感ずるヒツプと、それに食い込む赤い布。

挑戦的かつ刺激的なその姿。私を見れくれとばかりにさらけ出すその姿を、桜は目に焼き付け、

……思わず吐きかけた。

しなやかな身体に対して見せつけるような上半身の丘？ あの尻のように割れた胸筋と瘤のように盛り上がった上腕二等筋をそう呼ぶのか？

スタイルが良い程小ぶりの箸なのに、何故か大きさを感ずるヒツプ？ 鍛え過ぎて尻に力入れたら割り箸さえ砕けそうだZ E

それに食い込む赤い布？ 禪だろうがよ。そもそも御剣、テメエ

男でありながら黒いビキニパンツとはどういう了見だ。本気で割り箸割る気かよ？

挑戦的かつ刺激的なその姿。私を見れくれとばかりにさらけ出すその姿。

己の筋肉を誇示するかのように見せつける馬鹿男三名。

言うまでも無く御剣、直也、ザフィーラの三名が、このクソ暑い猛暑の温度をさらに暑くしていやがった。

一言言わせる。そのふざけたポーズを今すぐ止めると！ なにボディービルダーみたいなポーズ取ってんだ筋肉トリオ！！

「なに。異性の裸を楽しみにしていた桜に対する心ばかりの詫びだ」

さあ！ しかと焼きつけるとばかりに桜に対してポーズをとる馬鹿共。サンオイルでも塗っているのか、それとも汗のせいかは知らんがこの上なく光っていた。

照りつける日差しさえウターンする程に眩しい筋肉なんぞ毒以外の何物でもない。

「お願いしますごめんなさいもうしませんから止めて下さい！！」

半泣き……というよりガチ泣きに近い形で桜が土下座する。というか、流石にこれ以上やると、はやてや守護騎士といった女性陣さえ倒れかねない為に自重した。

尤も……祐治に関してはあまりの暑苦しさに失神しかけていたが。

「……さて。やる事はやったのでな。私は着替えてくる」

わざわざこの為だけに黒ビキニを用意する辺り徹底していると言えべきか。

ちなみに直也の赤フンはデフォで水着である。少しは自重しやが

れ。

さて。読者諸君、済まなかった。ここからは釣りでも男の筋肉でもなく、ちゃんとした女性の素肌を見せてやろう。

ちなみに水着指定は全て桜だ。水着を見る者は彼女への感謝を忘れぬ様土下座してから拝むように。

まずはヴィータ。元来八歳ほどの外見年齢から似合うモノを想像するとすれば答えは一つ。

スク水だ。もはやこれ以上ないだろうと言う少女とスク水のロボ。しかしそこに既定の品としてでなく敢えて赤をチョイスし、ネームを平仮名で『？いた』と記入する所が最大のアピールでありこだわりポイントというべきか。

敢えて言おう、このロリコン共め！！と。

続いてアピールするならば、やはり対極に位置するシグナムだろう。その高めと言える身長と比例するように……否！有り余るほどに発達した悩ましいバスト。

それを最大限にアピールすべく黒のビキニは実に映えていた。

何より、少しばかりサイズが小さかったのか、若干張り詰めた様な布地が肉に食い込んでより一層エロくなっていた。

そしてシャマルはというと、シグナムと同じくビキニであった物の、色は薄緑だ。

別段どうという様に見えないかもしれないが、それは誤り。何故なら今の彼女はエプロンを付けている！！

判るか男共よ。水着にエプロンというこの組み合わせの意味。露出が隠れている筈なのに見える以上にエロく艶かしいその姿、ある種シグナム以上の破壊力を秘めていると言っている。

そして、次に語るとすればセレノだろうが、やはり彼女は水着になるのに抵抗があったのか、ワンピース型の水色の着を身に纏い、腰にパレオを巻いていた。

何とも基本に忠実な事である。

「皆、よう似合うとるで」

そう言って笑うのははやてだ。彼女は足の麻痺がある為に泳げないので、白いワンピースを纏っている。

車いすに座っているせいで判り辛いのが、後ろ腰にある青いリボンが中々に服と合っていた。

……いたたまれなくなる。自分達のはしゃいでいる一方で、この車いすに座る少女は浜辺を歩く事さえ出来ないのだ。

「そないな顔せんで。せつかくの旅行なんやから皆楽しんでや」

とはいっても、流石に放っておくわけにもいかない。守護騎士などは言うに及ばず、祐治や直也に至っても遊ぶ気にはなれなかったが。

「じゃあさ！ 桜ちゃんが気に入るような物とか、皆で探してくるっていうのは？」

につこりと笑う桜の提案に、一同はぽかんと口を開ける。が、はやてにとってそれは嬉しい提案だったらしい。

「ええの？」

「ま、貝殻位しか無いでしょうけどね。じゃ、楽しみに待っててね
――！――」

言つや否や海へと駆けだす桜。どうやら本気で探すらしい。

「……やっぱ、桜って強いにゃー」
「そうだな」

祐治の言葉に、誰かが呟く。或いはそれが全員の想いだったのか、一同は笑いながら散り散りになって行くのだった。

真面目な展開から変わって申し訳ないが……海というモノは本来人を賑わし、魅了する物だ。

夏場と言えばカップルだろうが一人身だろうが開放的になってキヤッキヤうふふと行く物である。だが。

「何故だ!？」

桜は思わず叫んだ。誰よりも何よりも今日この日を楽しみにしていた。お姉ちゃんにサンオイル塗ったりしたかった。

こんがり日に焼けたお姉ちゃんの瑞々しい素肌を堪能したかった。発展途上の幼女が砂浜をかける所を見たかった。

総じて言うなら女性をたっぷり堪能したかった。

結論を言うならオヤジ全開かつ欲望にこの上なく忠実に突き進む筈だった。

なのに……!!

「お姉ちゃんが一人も居ない、だと……?」

「本気でそれ以外考えていなかったのか、君は……」

呆然自失となりながら両手両膝を砂浜に着ける桜。
普段敵だと嫌っている直也のツッコミさえ返さない所を見るに、
相当重症らしい。

「お姉ちゃんの居ない海なんて冬の日本海と同義よ」

「ここまで来るといつそ清々しいな」

呆れつつも視線を海辺に移す。観光客の居ない原因など誰の目にも明らかだ。

海にぶかぶかと浮きながら水面を切り裂くように進む複数の黒い三角形。

『JAWS』を彷彿とさせるその光景に、桜はぼつりと呟く。

「あの鯨……メスかしら？」

「……欲情するのは人間だけにしろ」

いい加減悔んでも仕方ないと思ったのか、それとも直也のツッコミが鬱陶しくなったのかは定かではないが、桜は立ち上がり、そこではたと思う。

そう言えば、先程からツッコミを担当しているこの男はどうして此処に居るのかと。

「ねえ直也、アンタ何で……って、なんじゃそりゃあ!？」

思わず叫ぶ桜だったが、致し方ない事だろう。自分の背丈より巨大な銚子を携えた禪一丁の男が、ねじり鉢巻きを頭に巻いて両手足にサラシなんぞ巻いていたのだ。

結論を言うならば、この男、間違いなく鯨を狩る気で居やがる。

「近場の漁師と交渉してきたら快く協力してくれた。楽しみにしている、今夜は鮫尽くしだ。奴の刺身は筋っぽいが中々に美味だぞ?」

口元を釣り上げながら鮫を見る直也に対し、桜は思った事をそのまま口にする。

「馬鹿じゃないの?」

馬鹿である。これ以上ない位馬鹿である。どうしようもない位馬鹿である。

頭のネジを戸棚に三年ほど放置して埃を被らせている位の馬鹿である。

「む……確かに見てくれは良く無いかもしれんが、解体すれば脂の乗った魚だぞ?」

フカヒレは仕込みをする時間が無いから売りつけるしかないが、刺身にするには人数分足りるし、エイ程臭みも無い」

そついう問題じゃねえ。そもそも鮫に喰われて終わると言う展開を想定していない時点で、馬鹿の極みである。

「死んでも骨は拾えないわよ」

骨ごと喰われるし、という桜の発言を無視しつつ、直也は獲物を見ると、手にした銚を高々と掲げ、

思いつ切り、鮫に向かってぶん投げた。

「はいいい!?!?」

桜の絶叫も無理からぬことである。軽く見積もって七十キロ以上ある銛を片手で持ち上げ、それを身体強化の一つもせず百メートル近い距離までぶん投げて命中させるなど人間の出来る事ではない。というか、素で人間を止めている。

「……やりすぎたか。肉片しか残っていないが……まあいい。血の匂いにつられて他の鮫が集まってきたしな」

そう言いながら躊躇なく海に飛び込む馬鹿。ここまで来たら自殺以外の何物でもねえのである。
案の定。

「クツ……集団で来るのは良しとして、水辺ではやはり鋼糸は満足に使えなかったか!？」

ええい、口を開くな鮫共！俺は確かに肉付きは良くとも、貴様らに喰わせる肉など無い！！
むしろ貴様らの肉を寄越せ！そのフカヒレと共に高値で売ってくれるわ!!！」

思いつきり追いかけられているくせに、狩る側の姿勢を崩さないのは狩人としてのプライド故か。
ともかく、桜の心に去来したのは一つである。

「……帰る」

今回の教訓は、馬鹿は死ぬまで馬鹿という事であった。

北澤直也がリアル『JAWS』を体験している頃、久住祐治はと
いうとシヤマルと共に買い物なんぞしていた。

「やっぱ夏つつたらスイカだよにゃー。スイカ割りのはやてにゃ出
来ねーが、皆と一緒に食べようじゃん！」

「ええ。楽しみですな」

言いつつ、両手いっぱいスイカを抱える二人。だが楽しそうな
祐治とは裏腹に、シヤマルの顔には何処か暗い影があった。

「ごめんなさい……貴方達を、巻きこんで」

「にゃ？」

道化めいた口調はわざとなのか、それとも真実そういう口調なの
かは判らない。

「元はと言えば、私達が原因で貴方達は蒐集をしています……本来
なら、はやてさんと楽しく海で遊んで、普段は食事を楽しんだり買
い物に出かけたり出来る筈なのに」

呟く言葉は韜晦ゆえか。自責の念から来るものか。

おそらくは両方だろうと納得しつつ、祐治は頭を振った。

「そいつは違うじゃん。あの日……つつても判ないだろうけど、
初めてはやてと図書館で会った時、もしはやてが普通の子だったら、
俺と桜は気にせず通り過ぎてた」

そもそも、関わるのが前提だった。この世界に来て、この世界

で生きるだけでなく、あくまでこの世界で起きる事件に関わると決めたからこそ、祐治は桜と共に図書館に赴いた。

特別であるから……一つの物語の中心であるからこそ、彼らは関わると決めたのだ。

「……俺は、ズルをしてる。俺だけじゃなく、桜も御剣もだ。

直也やセレノは……まあ成り行きみたいなものだが、それでもはやてが特別でなきゃ集まんなかった。最初から判ってたんだ。厄介な事になるって……」

だから、と祐治は一旦区切り、

「自分を腫れモンみたいに扱うなよ。そういうのは見てて辛いだけじゃん。」

……俺も桜も直也もセレノも御剣も、あんたらの事は大事に思ってたんだからよ」

そこまで言って、また無言になる。それが気まずさから来るものではないのだろう。

少なくとも、先程より肩の荷の降りた様な顔をシャマルはしていた。

そも、身を焦がす想いとは何に当て嵌まる？

愛か？ 憎しみか？ 歡喜か？ 苦悩か？

それとも、それら以外の……己の内を覗けぬ葛藤にあるのか。

少なくとも、はやてにはそれが判らない。

カモメの鳴く海原。波打ち際に引いては寄せる潮騒と風に当てられながら、少女は静かに吐息を零す。

この日まで様々な事があった。御剣 仁と出会い、直也を紹介され、一月後には図書館で桜達と出会い、誕生日には守護騎士の主となり……今は家族のように、否、事実家族として過ごしている。

これ以上ない幸福。家族も無く、常に一人で過ごしてきたはやくにとつて、今日までの日々は何よりも代えがたい幸福だ。

だからだろう。彼らに迷惑をかけるのは忍びないと思う自分も、また存在していた。

今日という日は楽しみだった。皆で一緒に旅行に行くなんて、これまでの人生には無かった事だ。

一人、あの図書館で過ごしていた日の自分からは想像も出来ない程満ち足りた日々。

けれど。自分は何も返せない。

皆が自分を慕い、共に幸福であろうとする事。それが何よりも温かいが故に、はやては悩んでしまう。

“わたし……御剣さんらに何も出来へんのかな……”

出来る事があるならしたい。恩というには大きすぎる日々に、何かを報いたいと切に願う。けれど、今の自分は重荷にしかならないのだろう。

せつかくの旅行さえ、自分の所為で哀しい顔をさせてしまう程に。

「どうしたのかね？ 随分萎れているようだが」

「御剣さん……」

ああ、これだ。と、はやては思う。

何時もそうだ。自分は何時だって、この男性に甘えさせられ続けている。

「……何でなん？」

言葉は 考えるより先に口に出た。

きつと、口にすれば崩れてしまいかもしれない関係。けれど、それ以上に気になるのだ。

「 どうして御剣さんは、わたしの傍に居てくれるん？」

御剣 仁という男性が、何を思って八神はやてという少女の元に居るのかを。

そして、御剣 仁にとってもその問いは意外だったのか。それとも何時か訊かれると知りながら、敢えて答えを避けていたのかは判らない。

ただ静かに。何も口に出来ぬまま、しばしはやてを見据える。
そうしてどれ程時間が過ぎたのか。やがて意を決したように、御剣は静かに口を開く。

「知っていたからだ」

その一言の意味を理解する事は容易だ。何故なら、そういう予感
はあったから。

「私は……君が闇の書に囚われていると知っていた。あの書が決して君を良い方向に導く物ではないと知り、君の身体が不自由である理由も知った上で君と関わった」

それは未来を知り、過去を知っているという究極のズル。

八神はやての孤独を知り、八神はやての危機を知るからこそ御剣
仁は八神はやてと共に過ごした。

「……なんや。やっぱり、そうやったんやね」

何処か諦めにも似た気持ちではやては呟く。だって、そうでなければおかしい。

そもそもきつかけは図書館で出逢っただけの些細な物で、ここま
で歳の離れた男性が自分に付き合うなら、それしかない。

つまり。御剣 仁は八神はやてに関わろうとしたのではなく

闇の書の主と関わる為に、今日まで過ごしてきたという事に
他ならない。

もし八神はやてが普通の少女だったなら、御剣 仁は手を差し伸
べたか？

もし八神はやてが普通の少女だったなら、御剣 仁は親身になっ
たか？

もし八神はやてが普通の少女だったなら、御剣 仁は今日まで一
緒に居たか？

答えは否。御剣 仁は物語のヒロインである八神はやてに関わ
ろうとしたのであり、少女である八神はやてに関わろうとしたのでは
ない。

だが、それを責める事をはやてはしない。だって判っていた。コ
ロコの何処かで気付いていた。

特別であるが故に自分の元に彼らは集まる。それを受け入れてい
たのは、他ならない自分だから。

ああ、けれど………

「……やっぱり、家族にはなれへんよね」

ただそれだけが、この仮初めの幸福の中での心残りだと。少女は
儂げに呟いた。

「……ッ」

そして、御剣 仁は思う。自分はこれまで、この少女に何を
やれたのかと。

蝶よ花よと愛でてはいた。共に過ごし日々を送り、少しでもこの
少女の心の空隙が埋まる様にと思ってきた。けれど。

御剣 仁は 何をこの少女に求めたのか？

仮初の平穏か？ 一時の安らぎか？ それとも恋慕でも抱いてい
たか？

いずれにせよ御剣は答えの無いままに日々を過ごし、少女に安息
を与える一方でココロの隙間を広げてきた。

不安というスキマ。誰もが持ち、膨らむ期待と同様に際限なく底
に広がり続けるスキマを。

それは捨て犬を飼い、理想的な環境を与えながら、犬の気持ちを
無視する様なものだろう。

そこがどんなに過ごしやすく、穏やかな物であろうとも犬の気持
ちを理解しなければ飼い主との距離は広がっていく。

嫌な例えかもしれないが、結果だけを見るならばそうなのだ。

ただ傍に居ただけ。抛り所を求めた少女が孤独から縋った場所は、
かくも不安定な土台の上にあったのだから。

だからこそ……御剣は言わなくてはならない。

「私は はやての家族にはなれない………」

己の胸の裡を、あるがままの本心を。

それは言うべき答えでは無かったのかもしれない。そもそも真実など口にせず、嘘を貫き通した方がまだ救いがあったかもしれない。少なくとも少女の希望を砕く様な真似をする事は無かった筈だ。

けれど。それでは駄目なのだ。

曖昧な言葉で場を濁し、愛でるだけで少女の心に触れようとせず、いまこの時さえ胸の内で涙を流す少女を、一体どうして欺瞞で誤魔化せると言うのか？

「初めは成り行きのような物だった……ただ図書館で偶然出逢っただけの君に、興味本位に近付いただけだった」

だが、それさえ偶然と呼べるかは今となっては怪しい。図書館など他にもある。会う事を回避しようと思うなら、幾らでもやりようはあった筈だ。

御剣にとって、おそらく初めから心の何処かで思っていた。

この少女を一目見たいと。逢って話をしてみたいと。そうして思っただのだ。

「……だが、私は思ってしまった。もっと話したい、もっと共に語らっていたいと」

儚くも優しく、穢れを知らないその存在。

誰よりも有り触れた悲劇の中心でありながら、決して崩れなかった少女。

孤独を知りながらも笑顔を絶やさないその在り方を、美しいと感じたのだ。

「そして、君を護りたいと思った」

刹那の輝きを愛でていたい。苦痛と絶望に淀む日々より、安らぎと幸福のある日常を共に過ごしたいと、そう御剣は願った。それはきつと 家族という形ではなく。

「君を護る、騎士になりたかった」

この儂い少女を護る形こそが 彼にとっての願いだったのだ。

「だから、もしはやてが赦してくれるなら」

こんな愚かな男を、まだ赦してくれると言うならば

「私を、はやての傍に居させて欲しい」

家族としてでなく、騎士として君の傍に居たいから。

返されるべき答えを待つ時間は長く、おそらくは三分にも満たなかったであろう時が、一時間にも二時間にも感じられた。

「……ええの？」

零れ落ちる言葉は、果たして彼に届いたのか？ 潮騒にかき消される程にか細い声は、今なお震える少女の口から零れた物だ。

「……わたし、何にも返せへん。御剣さんがわたしのために良うしてくれるのに、わたしは御剣さんに何も出来んのよ？」

護られる事はあっても、護る事は出来ない。

どれ程愛でられようとも己は重荷にしかならないと、そう告げる

少女の髪を御剣はそつと手梳す。

「君は……あの家で食事を作ってくれるだろう？」

皆と共に過ごした家で。騒がしい程賑やかなあの家で、君が迎えてくれるなら。

「私にとって……それは何よりも嬉しいのだよ、はやて」

まるで絵本の騎士のように。御剣 仁は八神はやてに微笑んだ。

日も暮れ、夕刻となった時刻。

御剣 仁と八神はやては何処か清々しい面持ちでホテルへと帰った。

既にメンバーは揃っている。セレノやヴィータ、桜やシグナムといった面々は貝殻の装飾をあしらった手作りの写真立てをはやてに見せて喜ばせ、祐治とシヤマルは買って来たスイカを皆に切り分けていた。

一応このホテルには近くに取ってきた海産物などを自分で調理して食べる場も設けられている為、どうせならと、そこで夕食を摂る事にしたのである。

「あれ？」

「ん？ どしたの、はやてちゃん？」

辺りを見渡すはやてに桜は問い、

「そういえば、直也さんは？」
「あ」

その言葉に、桜は完全に固まったのだった。

それは地獄だった。この上ない馬鹿と肉食生物の織り成す修羅道の具現だった。

彼を追い立てる鮫の総数は二十。その全てが今にも『テメエ、上手そうな肉ぶら下げてんじゃねーか』と牙を剥いて来ていたのである。

そんな彼らに対し、直也はというと……………

「死んでたまるかクソボケエ……………！！ こちとら狩り慣れしとんじやアアアア！！！」

キレていた。もうなんというか、逆切れに近い形で夕暮れの海より真っ赤な鮫の血を浴びて格闘していた。

アロンドイトやデバイスを使わないのは彼なりのプライドからかは知らんが、時速三十キロで動く複数の鮫を相手に鋸と素手で戦うのは化け物といって差し支えないだろう。

ついでに言いつつ……………

「ふん。塩の味しかせんか……………やはりフカヒレは仕込みが一番よ」

喰っていた。もう踊り食いとかそんなレベルで喰っていた。
弱肉強食万歳。これぞ生物の掟と言わんばかりの野性化である。
ちなみにザフィーラを助っ人に呼ぼうとしたが、彼は魚臭いのが
嫌という理由で去って行った。この都会っ子が……！！

「俺は負けん！ 負けんぞこの野郎！！」

大人しく御剣さんとはやて嬢に捧げられる刺身となれい！！」

この後、この近辺で半魚人が鮫の群を喰い散らかしていたとか、
あれは伝説のフィッシュヤーマンだとかいう都市伝説が生まれた事を、
今の北澤直也は知る由も無かった。

ちなみにその日に振る舞われた鮫は大変美味だったが、血まみれ
で銚を持った状態で近づく直也を、桜が魔獣と間違えて吹き飛ばし
たのは激しく余談である。

c・m・「色々カオスでしたが第8話、ようやく投稿完了です」

レインシア「直也さん……オチ担当ですか」

c・m・「ぶつちやけ、普段真面目になり過ぎてる節があるから、今回は殆どギャグに走らせたわ。けど、以外にギャグ路線でも行けるわね、彼。野性化してたけど」

レインシア「もうサバイバーですらないですね。ところで話し変えますけど、今回は祐治さん真面目でしたね」

c・m・「久住さんは今回はシリアスキャラ。こう……何て言うか、ギャップ萌えを狙ってみたり」

レインシア「そして御剣さん……真面目な空気をぶち壊して言わせて貰えるなら、ストーリーカーの真理ですよね、あれ」

c・m・「言っちゃ駄目！ せつかくここの一番の真面目イベントなのに！」

レインシア「……まあ良いでしょう。それと気になったんですが、御剣さんってロリコンですか？」

c・m・「この作品に出てくる連中は大概ロリコンよ。さて、そろそろ読者様のお礼に移りましょう。」

久住祐治さま、HagaIazさま、神崎はやてさま、KY
oさま。ご感想を頂き、ありがとうございます」

レインシア「今回は多数の誤字報告を頂き、誠にありがとうございました」

c.m.「次回はいよいよ無印編の主役どもが登場！ ついでにA
'sきつてのウザキャラも登場します」

レインシア「それでは今回はこの辺りに。また次回、お会いしまし
よう」

「おかえり、なのは。今日はどうだった？」

「おかえり、龍也君。まだまだ誘導弾のコントロールが甘いかな。レイジングハートは九十点だって言ってくれてたけど、もっと上手にならないとね」

「そっか。僕も頑張らないと、まだ全然恭也さん達には追いつけないし」

「基礎体力ならこの半年間で大分付いたろう？ マクスも付き合ってくれているんだ、積み重ねが重要だよ」

仰るとおりです、と恭也さんに返しながら、高町家の皆さんやマクス達と共に帰路に着く。

春先に起きたとある事件……本来であればP・T事件と称される筈であった『G事件』から半年以上経った。

お隣に住んでいる直也さんを除いて、あの時のメンバーとは殆ど顔を合わす事無く時間が過ぎてしまった。

代わりとっては何けど、新しい出会いがあったとすれば直也さんの家に同居しているセレノさんの存在だろう。

僕やなのはにだけはこっそり教えてくれたが、彼女はガルフの副官であったものの訳有って一緒に住む事になっただけらしい。

ちなみに時々ではある物の、なのはの魔法を見てくれて悪い所は矯正してくれている為、なのはにとっては頼れるお姉さんといった感じだ。

……ただ、何故か直也さんには内緒にと言われてしまったが。

「なのは、郵便が来てるぞ。差出人は、フェイト・テストロツサだ」
「ほんと！？　ありがとうお兄ちゃん」

ポストに投函された封筒をなのはが嬉しそうに受け取る。きつといつものビデオメールだろう。

あの事件が終わってから、半年以上になる文通。今度京谷達も一緒に遊びに来てくれると言う事らしいので、僕やマクスも楽しみにしている。

「あの野郎とももうじき会える訳か……楽しみだ」

……尤も。マクスにとっては違う意味で楽しみなのだろうけど。口元を釣り上げながら凶悪に笑うマクスに苦笑しつつ、レインシアさんがリズム良く包丁を叩いていた。

高町家に居候する中で、レインシアさんは住むだけでは悪い、ということまで料理を覚えたのだ。

流石に桃子さんは喫茶翠屋で働く前はホテルで料理を振舞っていただけに教えるのも上手く、最初は危なっかしかったレインシアさんも、今では太鼓判を押せるほどに料理が上手くなっていた。

「本当に楽しそうですね、マクス」

食卓に料理を並べつつレインシアさんが微笑む。彼女にとっても、京谷達と会えるのが嬉しいのだろう。

出された料理がいつもより若干手の込んでいる所からしても、それがはつきりと判る。

「皆、元気かな……」

朝のココアを飲みながら、僕はそんな事を呟くのだった。

神崎龍也達が食卓に集まると同時刻、時空管理局艦船アースラ艦内の食堂で京谷や恭介、フェイト、アルフ、プレシアといった面々がクロノと今後の身柄に関する報告を受けていた。

「君達は本日を以て、管理局からの保護観察処分ならば、管理局への従事から解放される事になる。一応、お疲れ様と言うべきかな？」
「うーん……けど、なんか実感湧かないっていうか、どうせ管理局には今後入るしなあ……」

「ぼやくなよ、京谷。それで俺や京谷は良いとして、アルフやフェイト達はどうするんだ？」

「わたしは……」

恭介の質問に対し、フェイト達は難しい顔をしていた。

確かに管理局の行動制限を少なくする為に囑託魔導師の試験を受け、通過したフェイトであった物の、ちなみに京谷と恭介は特例でパス。プレシアが凶行に走った原因が管理局にある以上、これ以上関わろうとするのが正しいかどうかの判断が付き辛い所だ。

逡巡するフェイトの顔を見て取ったのか、京谷が割って入る。

「急かすなよ恭介。俺達はともかく、フェイトにはこれから考えるだけの時間がたっぷりあるんだ」

せっかく従事活動から解放されたんだし、と告げる京谷に、フェイトはありがとう、と返す。

「それは良いんだけどさ、あたしらって今後の生活とかどうすりゃ良いの？」

アルフの質問は、ミッドチルダに住むのか地球の海鳴市に住むのか、と言う点についてだろう。当然、京谷達の答えは決まっている。

「海鳴市で良いんじゃないの？ その方がなのはや興輝達にも会えるし」

「フェイト達と以前住んでたマンションは、大所帯でも問題ない広さだったしな」

京谷達の提案にフェイト達はそうだね、と返す。反対票も無く、落ち着いて終われるかと思われたが……。

「そういえば、千草さん元気かな？」

フェイトの言葉に、恭介とプレシアがビクン！ と震えた。プレシアに関しては言うまでもなく、腹部に受けた衝撃が忘れられなかったのか、軽くお腹を押さえていた。

「あの一撃は……もう喰らいたくないわね」

お隣さんなの、というフェイトの言葉に、眩暈でもしたかのよう
に眉間を抑え始めた。

一方、恭介はと言うと。

「アルフさん……何か？」

「……顔がにやついてたよ？ 何か嬉しそうだったけど」

そんな事はありません、と机に頭を擦り付ける恭介に、一同はま

たか、と苦笑する。

要するに、今日もアースラは平和だと言う事だろう。

一通りの話を終えた後、フェイトは静かに自室に立てかけられた写真を眺めていた。

映っているのは、あの日アースラに集まった面々。何の恩賞も無いのに、それぞれが己の意志の元に集ったのだ。あの日の悲劇を食い止める為に。

そして、この写真を撮る為に、彼らはもう一度集まってくれた。

机の上や部屋には、それぞれの贈り物が所狭しと並べられている。槇野と興輝はティーカップとポットを。

アリサと鮫島、すずかはぬいぐるみを。

直也と千草は手編みの肩掛けと可愛い動物のクッションを。

マクスとレインシアは、ケーキ作りの本を。

龍也となのはは、すずか達や高町家の者と共に月に何度かのビデオメールを。

「楽しみだな……フェイト」

不意に呼びかけられた方をフェイトは見る。

京谷も楽しみなのだろう。その声色は、自然と心待ちにしているように感じられた。

「色々……あつたもんね」

この半年と言う時間は、フェイト達だけでなく京谷と恭介にとっても大きな期間だった。

管理局が彼らに依頼した任務は、そのどれもが危険極まりない物だったから。

第一級指定ロストログアの回収、各地で活動中の次元犯罪者の拿捕。

あのベリアエル・バトオを倒したという触れ込みは、彼らを表だつては称賛し、管理局内における優遇措置を行った物の、それ以上に従事活動と言う名目で苛烈な現場へ回す結果となつた。

無論、その事に京谷も恭介も反論などしない。

むしろ率先して危険な任に従事する代償として、プレシア、フェイト、アルフの三名を管理局の保護観察と従事活動から解放する事が前提だつたのだから。

結果は概ね成功。今後も京谷や恭介は管理局に残るものの、今以上に危険な現場に飛ばされる事もないだろうし、仕事もデスクワーク等を覚えて行く形になるだろう。

だが。

「ごめんね……京谷」

フェイトにとっては、それが申し訳なくてたまらない。かつての能力があるだけの素人だつた子供は、もう居ない。

この半年の間に京谷は実戦を学び、人の死を学んだ。無論、彼が現場に着いてからは敵味方を含め、一人も死者を出してはいない。

だが、彼が到着するまでに見た骸は、十や二十ではきかなかつた。時間と経験は人を変える。京谷や恭介が見せていた穏やかな顔は何処か影を落とし、その眼は初めて会つた頃よりも何処か鋭く、刃物を思わせるような印象へと変わってしまった。

俯きながら謝罪をするフェイトを、京谷はそつと後ろから抱きよせる。

「良いんだ……俺も恭介も、フェイト達が罪人のままなんて嫌だつたから」

だから良い。君には笑っていて欲しいと。それが救いだからと、抱き寄せる腕に力を込める。

「ありがとう……京谷」

「当たり前だろ、恋人……なんだから」

恥ずかしげに口にするその言葉に、フェイトも身を任せつつ、静かに笑うのだった。

海鳴市、市街地の上空。既に冬の夜となった寒空の下で、八歳ほどのおさげ髪の少女と、若い男が佇んでいた。

その顔にあるのは、微かな緊張からか。それとも、これから行う事に対する微かな罪悪感からかは判別できない。

ただ一つ判る事。それは、彼女達が既に意を決していると言う事に他ならない。

「見つかったか？」

「あとちよつと。けど、大きい魔力だからすぐわかる」

若い男の問いに、赤いおさげ髪の少女は応える。夜風になびく赤いゴシッククロリータを思わせるドレスは、実に彼女に映えていた。

「見つけた。『封時結界』展開」

鉄槌を思わせるような武骨なデバイスを揮うと同時、周囲から人の気配が徐々に消えて行く。

『封時結界』。通常空間から特定の空間を切りとり、時間信号をズラす魔法。

術者が許可した者と、結界内を視認・結界内に進入する魔法を持つ者以外には結界内で起こっていることの認識や内部への進入も出来ない。

今回結界が限定したのは高度な魔力を持つ個人ないし、一定以上の魔力を持つ者に限られる。すなわちそれは、彼女達が必然的に高い魔力を持つ者を狙っていると言う事に他ならない。

「さて、それじゃあ行くかな」

言葉と共に、少女は夜闇を駆け抜ける。既に非日常へと切り替わった世界の中で、非日常に踏み入れた者を探す為に。

夕食を終えた高町家の中で、その異変に最初に気付いたのは誰だったか。

少なくとも、遅かれ早かれ、それに魔道に通ずる者が気付かぬ事など無かったが。

「龍也君！」

「うん！」

なのはの声に龍也は頷く。既に装備は整えている。

おそらくは結界。今宵この街に何者かが魔法を使用した事は、明らかだ。

そして、その何者かが高町家に近付いて来ていると言う事も。

無人と化したオフィスビルの屋上。肌に突き刺さる様な夜風が吹き荒ぶそこに、神崎龍也と高町なのはは立っていた。

既に結界は街の全域を覆っている。その上で街の全貌を見渡すのであれば必然的に高所に陣取る事になり、街の中心に位置するビルを選ぶのは必然と言えた。

《B e c o m e s (来ます)》

デバイスの声に、二人は魔力反応のある方向へと振り向く。赤い、流星を思わせる誘導弾が、闇を切り裂く様に突き進む。

「なのは、下がって！」

叫びと共に、龍也は手にしたカードをドラグバイザーへとセットする。

《G U A R D V E N T》

電子音と共に現れたのは龍を模した様な小型の楯。されどこの楯にあるのは物理的な防御ばかりではない。

気流を操作し、竜巻による防御を発動。如何に誘導弾が凶悪な物とはいえ、防ぎ切れない事は無い。そう、それが一方から来るものであれば。

「龍也君！」

その叫びに、視線を後方に送る。迫り来る誘導弾は三発。楯による防御の無い後方から迫るそれを、なのはがカバーする事で何とか防ぐ。だが。

“くそ、重い……!?”

威力は想像以上だった。いや、恐らくこの攻撃そのものが、防御される事を念頭に置いた上で組み上げられた術式なのだろう。

このままでは弾き飛ばされることも覚悟した上で、龍也は誘導弾を受け流そうとし、

「惜しいけど、遅い!!」

なのは共々、防御の無い側面から撃ち抜かれた。

吹き飛ばされ、後方にある別のビルに突っ込む直前に、神崎龍也は凶行に走った相手を見る。暗雲を背に、こちらへ急降下する赤いおさげ髪の少女。

少女は泰然としたまま自分達を見ると、二人以上を相手にする事に分の悪さを感じたのか、即座に引き返して行った。

“クッソ……逃がすと思うなよ!”

自分だけならいざ知らず、なのはを傷付けられたまま引き下がる気は毛頭ない。

別の位置に待機する仲間に、龍也は少女の特徴を告げるのだった。

夜空を駆ける赤い少女。その顔は何処か焦りがある様でもあり、何処か楽しそうでもあった。

きつと彼女にとつては、焦り以上に帰路に立つ事と楽しみという物があるのだろう。

そう判断した上で、桃色のセーターを纏った少女は、自分より外見上は一つほど下の赤い少女に立ち塞がる。

「何だよ……?」

道を塞がれた事への苛立ちか、それとも帰りを邪魔された事に対してかは判らない。

ただ少女は眉間にしわを寄せながらも、一応は会話をするだけの余裕があるのか、問い質す。

「失礼。初対面の方にこう言うては何ですが、貴女が嬉しそうに帰る所を見て、私も苛立ちを隠せないのですよ」

デバイスを手に、レインシアは静かに告げる。一見穏やかそうなその顔には、確かな憎悪の念が見て取れる。

「訳判んねえな。お前にあたしが何かしたか?」

「いいえ。私には何も」

「ならどけよ。あたしは急いでんだ、早く帰ってえんだよ。……今日ブツ潰した奴らの報告もあるし」

その最後に付け加えた言葉に、レインシアは顔を強張らせると、静かに、そう、と呟いた。

「もう判りました。こちらの誤解という線はないのですね」
「は？」

言葉と共に、光の道が空を紡ぐ。

この半年間におけるレインシアの魔法の訓練が生んだ集大成。他者への攻撃を得手としない補助専門のデバイスにおいて、如何に仲間への重荷とならないか。

その問題に行きついた彼女が編み出した術式こそが、この『光の道』。

デバイスを使えぬ彼女の恋人を空へと誘う橋であり、それは本来今から十年後に、ある魔法少女が使う筈であったオリジナル魔法と同様の物である。

「……………ッ！」

既に戦闘は避けられぬと悟ったのだろう。ならば先手必勝、赤い少女は自らの鉄槌を模したデバイスを振り上げ。

「遅えぞ、嬢ちゃん」

己の背後に立つ、スーツ姿の男の剣を辛うじて受け止めた。

「があ……………!!?」

馬鹿な、と言いたげに少女は落下する。こと接近戦において、自分を上回る一撃を放てる者など数えるほどしか存在しない筈なのに、と。

だが、現実には男は単純な膂力は言うに及ばず、魔力的な要素においても赤い少女を上回っている。

吹き飛ばされた衝撃によって地上へと落ち、既に制御できる魔力さえ先程の防御に全て込めた。

満身創痍。手にしたデバイスは本体こそ無事であるものの、柄の部分は一度力を込めれば今にも砕けそうなほどに罅割れている。

「マクス、凶行に走ったとはいえ、女の子です。余り手荒な事は……」

「判ってる。少なくとも、姫さんが嫌う真似はしねえよ」

言いつつ、こちらに向かうマクス。地上へと落ちる少女に手を差し伸べようとしてか、その手を掴もうとし、

「マクス、下がって……！！」

「ッ……！！？」

言葉と共に後方に飛び退く。同時、朱い魔力光に包まれた無数の矢が、少女とマクスを引き離すように割って入る。

無論、その矢は牽制ばかりではない。無数の矢の内の幾本かは確実にマクスとレインシアを狙っており、レインシアが防御魔法を展開しなければ確実に射抜かれていただろう。

無数の矢によって巻き起こる土煙が晴れると同時に、マクスは地上を見やる。

最初に映ったのは漆黒。夜のしじまにたなびく黒衣は、魔鳥のはためきを思わせる。

オフィス街に連なる街灯の一本。そこに力無く身を預ける少女を抱き抱えながら立つ、コートに身を包んだ男の姿を。

「デメエは……」

何者だと、そう問うマクスに、男は視線だけを静かに向ける。フ

ードに隠れた顔は男の正体を告げさせず、僅かに覗く口元さえ、鬼を模した惣面によって隠れている。

やがて意識を取り戻したのか、掠れた声を出しながら男を見据える少女は、しかし確かな安堵感に包まれていた。

だが少女の安堵感とは裏腹に、男は確かに激昂していた。静かな視線は氷を思わせる程に冷たく、その佇まいは言い切れぬ威圧感を放っており、傍に居たレインシアなどは冷たい汗を滲ませていた。

「我が同輩の窮地に推参した。そこの若造、ならば小娘」

嚇怒の念を滲ませた男の声は、確かに精悍な物だったが、マイクが何かで通した様な不自然な響きがある。

おそらくは変声機が何かで声を変えているのだろうが、本来の声ならぬ音でさえ、男の存在感を伝えるには充分だった。

「貴様らの傷付けた同輩の髪の毛の一本は貴様らの四肢より重く、貴様らが傷付けた同輩の肌は貴様らの命より重い」

その意味を理解しているか？ と凍える程に玲瓏な響きで、男は問う。

無論、マクスとて男の異常性は十二分に伝わっている。あの男は先の言葉を比喻ではなく真実として伝えているのだろう。

ともすれば、己のみならずレインシアとて傷付ける事を厭っていない。

「そうかい……なら、テメエは俺が潰す」

マクスの響きに、ほう、と男は声を漏らす。それが気圧される事の無かったマクスへの贅辞なのか、それとも逃走しなかった馬鹿への失笑なのかは判らない。

尤も、男にとってはマクスの返答などどうでも良いのだろう。すぐさま現れた新手の褐色の大男に少女を預けると、虚空より顕れた漆黒の魔剣を左手に掲げる。

「参れ、蛮勇なる狂犬。我が剣で貴様の牙の冴えを見てくれる。

光栄に思えよ。その薄汚い血潮が、我が君と同輩への供物となるのだからな」

「ぬかせ。テメエが来い」

かちやりと、マクスが宝剣ヴァイスティンの切先を向ける。

同時、砲弾か何かのように疾駆する男を撃ち落とすべく、マクスは剣を奔らせる。如何な敵さえ一刀の下に斬り捨てて見せると振り抜いた剣は、しかし男の魔剣に肉薄する。

「……ッ！」

驚きは果たしてどちらの物だったのか？ 宝剣と魔剣がぶつかり

合い、共に火花を散らす。

擦れ合う金属音。事もなげにマクスの剣を受け流すと、男の魔剣は楕円を描く様に再び迫る。

それを、マクスは辛くも受け止めた。

そう辛くも、だ。確かに男には自分のような剛力は無い。だが、それを抑えて尚洗練された速さと技の冴えがある。

力はマクスが、速さは男が上。ならば競い合うべきは互いの術理。上段に構えるマクスと、下段に構える男。

互いの剣はここに、かつて無い宿敵を前に歓喜と畏怖の声を上げていた。

廃ビルの壁面に突っ込んだ神崎龍也は、その身をゆっくりと起こす。

“くそ、なのはと別の方向に弾かれた……”

おそらく、これが狙いだったのか。赤い少女の特性を理解するが故に、単身では危険だとビルから脱出を試みようとし、

「ばあ」

顔を覗きこむ女性を前に、後方へと飛び退いた。

「……ッ」

一体何時からそこに居たのか？ 腰まで届く銀髪と、瑪瑙を思わせる様に澄んだ黒瞳の女性は、不満そうな顔つきで龍也を見る。

「ちよつとちよつと……いきなりそれは無いんじゃない？ せつか

くこんなに可愛い美少女が起こしてあげたっていうのにさ」

「お前は……」

何者なんだと、そう問う龍也に、女性はあっさりと応える。

「敵だけど？」

その言葉に嘘は無いのだろう。まるで日本刀を思わせるデバイスを右手に提げている所からしても明らかだ。

それがただの日本刀では無いと言う事は、鏢と接するよつに搭載

されたカートリッジシステムが告げている。

「そっか……ならどけ。なのはが待ってるんだ」

その言葉に女性はますます機嫌を悪くしたように、眉間にしわを寄せた。

「そっか……つまり、あなたにとって私は通過点に過ぎない訳だ、ふうん」

「いい加減にしろよ、退かないなら力づくで、」

「来れば？ 敵だって言った筈だよ？ けどさ、」

遮る様な女性の声に、龍也もまた遮る様に獅王雷牙を奔らせる。
瞬間。

「私 超強いよ？」

腹部にめり込む一撃。それだけで、神崎龍也は地に崩れ落ちるのだった。

既に満身創痍といえる状態で、高町なのはは身を起こす。

「龍也君……大丈夫、かな？」

そっけな彼女こそ大丈夫ではないのだが、この程度でめげているようでは誰も助けられないと、そう不屈の精神を以て身を起こす。

その前方に。

「やー、お嬢ちゃん。お目覚めかにゃ〜?」

実に軽いノリで、一人の青年が佇んでいた。

「貴方は……?」

「俺かい? う〜ん、何つつか取り敢えずお嬢ちゃんの敵って事で
一つ。」

ま、先に手を出してきたのがどっちか考えりゃ、どっちが正しいかは明白なんだが……それでも俺は紳士に行きたいからな。お嬢ちゃんがかつちに関わらないのを約束してくれるなら……って言う訳にもいかないか。

お嬢ちゃんとはもかく、後ろのが許してくれなさそうだ」

その言葉に、なのはは背後に振り替える。か彼女を護る様に傍らに立つのは、彼女の待ち焦がれた友達フェイト・テストロッサと。

「判ってんじゃねえか。なら、どうするべきか判るよな」

氷上京谷が、間に入る様に立っていた。

「フェイト、なのはを頼む。こいつの相手は俺だ」

「判った。気を付けて」

両者が去るのを待ってから、ツンツン頭の青年はデバイスを手取る。

黒い、西洋剣を思わせる両刃の長剣を持つ青年を前に京谷は意外そうな顔をした。

「てつきり、逃げる奴は許さないのかと思っただがな」
「弱いもん虐めは趣味じゃないんでな。それより、あんたには本気^{マジ}で行かせて貰う」

言葉と共にデバイスが振り抜かれると同時に、京谷はそのビルから脱出した。

案の上だ。ただのデバイスの一振りですら倒壊するビルを見ながら、京谷は相手が別格の存在である事を悟り、懐から一艇の銃を抜く。

不吉を意味する『X I I I』の刻印。決して実用的ではないと思わせる様な黒い装飾銃を。

フエイトはなのはと会えるのを楽しみにしていた。皆が皆笑って迎えたいと思っていた。

「よくもブチ壊してくれたな……月並みだが言わせて貰う。『不吉を届けに来たぜ』」

言葉と共に、京谷は銃爪を絞る。管理局への従事活動。その折に非殺傷設定を持たない京谷に対し、管理局が希望通りの品を贈呈するとの言に、京谷は自身の見た目と合わせるべくこの銃のデザインを希望した。

尤も、性能までは同じではなく、オリハルコン製でも無ければレールガン撃てる訳でもない。

これはあくまでも京谷の純粹な魔力を銃弾ないし砲撃として打ち出す為の物であり、通常のデバイスとさして変わる点は無。

特筆すべき点を敢えて挙げるとすれば、京谷自身の魔力を以てしても破損しない頑強さと、瞬時に計算処理を行ってくれると言うところか。

たとえ如何な威力であろうと、如何な衝撃であろうと破損しない銃。

それこそがこの装飾銃の最大の特徴であり利点。星をも巻き込む一撃であるうと非殺傷に留めるだけでなく、威力は強大なまま破壊範囲を絞ることも可能な品だ。

よって、容赦など微塵もしない。

「さあて……くたばる事はまずないだろうが、これで済ますと思っ
なよ？」

一つの都市さえ容易に消し飛ばす砲撃を倒壊したビルに放ったのだ。既に敵はあの瓦礫共々沈んでいるだろうと、倒壊したビルに目を凝らし。

「中々だったが、俺に砲撃系は効かねえよ」

中空に佇む青年は、その右手を楯のように突き出したまま、静かに告げた。

「な……」

「そんなに驚くことねえだろ。そもそもあんた、そんな雑魚専門の武器で俺を止めれると思ったのか？俺は言ったよな、あんたには本気で行かせて貰うって」

瞬間、青年が消えると共に、背に熱い痛みが走る。それが長剣に斬られたと気付くには、一拍の時間を要し、

「嘗めたな、俺を」

その僅かな時間に、青年の蹴りは京谷の背に叩きこまれた。

振り返る事もなくフェイトとなのはは戦域からの離脱を試みる。

既にクロノ達も結界の解除に尽力しているし、何より敵は未知数だ。

一先ずなのはだけでもと、この場を離れようとした所で。

「何処へ行く気だ？」

唐突に、凜とした女性の声が背後から響いた。

思わず振り返る。年齢は十代の後半から二十代の前半といったところか。紫苑の髪をポニーテールに結った鷹のように鋭い瞳を持ったその女性は、まるで騎士の様な装束に身を包んでいた。

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

《Explosion!》

言葉と共にデバイスから排出される薬莢。それと共に騎士の剣より膨大な量の魔力が紡がれる。

「紫電一閃……!!」

放出される魔力と共に振るわれる一刃。かのスルトの持つ焰の剣の銘に相応しき灼熱が込められた一太刀は、フェイトの構築した防御結界を破壊するに留まらず、バルディッシュの柄さえ一刃の下に両断した。

「……ッ」

絶体絶命。スローモーションになる視界の中で、フェイトは目を

閉じようとし、

「そこまでにしなさい、小娘」

両者を分かつように、雷が降り注ぐ。

「なッ……………」

女騎士が驚愕するのも当然だろう。控えめに見てもオーバーシラ
ンクの魔力によって紡がれた一撃が、非殺傷設定を解除した状態で
降り注いだのだから。

「母、さん……………」

「下がっていなさいフェイト。この小娘の相手は私がするわ」

鞭に変化させたデバイスを撓らせつつ、プレシアはフェイトに微
笑むとゆっくりと、そして鬼女の面を覗かせながら女騎士を見やる。

「よくも私の娘とお友達を傷付けたわね。ベルカの骨董品の分際で
騎士を愚弄するか……………！！」

剣を構える女騎士の一喝を、プレシアは涼風の如く聞き流す。相
手が何者だろうと関係ないとするその佇まい。

多くの一流魔導師の中にあつて大魔導師と言わしめた稀代の魔女
は、今宵再び杖を執る。

そして。

「アルフ。飼い犬なら飼い犬らしく、主人の敵は噛みなさい」

「うっさい、鬼女！！」

その言葉と共に、アルフは騎士の背後から拳を振り上げる。
持ち前のパワーとバリアブレイクを兼ね合わせた一撃は、如何に
騎士が凄腕であろうと防ぎ切れるものではなく、

「脇が甘いぞ、シグナム」

唐突に、横から割って入った褐色の大男がアルフを蹴り飛ばした。

「ザフィーラか、ヴィータはどうした？」

「心配無い。他も到着済みだ」

そうか、とシグナムと呼ばれた女騎士はザフィーラと呼んだ大男
を一瞥すると、再びプレシアへと向き直る。

「まったく……使えない犬ね。でも良いわ、戦力分析には役に立つ
たもの」

「そう言わないで欲しいな、アルフもそれなりに頑張っているんだ
から」

「ッ……!!」

虚空より迫る二つの銅の輪が女騎士を捕える。宝貝『乾坤圈』。
城壁はおろか山をも崩すと言われる破城鎚は亜音速を超えて彼女に
迫る。

「嘗めるな……!!」

肉薄する剣と銅輪。かの伝説の宝貝さえ喰いとめるのは彼女の持
つ技量故か、それともベルカの騎士をして稀代の名剣と謳われたデ
バイス故か。

いずれにせよ女騎士の技量に舌を巻くと共に、恭介はプレシア共

々右手を上げる。

「腕は良いが、」

「そこまでよ」

天をも引き裂く雷が迸る。こと能力においては別格とされる魔女と紡ぎ手の一撃が、二人の騎士を捉えようとし、

「皆、下がれ」

信託の如く紡がれた声と共に夜闇を切り裂き、音速の三倍を超えて放たれた宝剣、魔剣がそれぞれの戦場に立つ者達の間へと割って入る。

「ッ」

息を飲んだのは、恐らくこの結界内に居た全ての者だろう。

さながら流星の如く尾を引きながらに飛来した稀代の剣軍は、両者の間に割って入るのみならず、大地を悉く灰燼へと変える。

その威力と、何より剣に込められた魔力は既存の魔法では及びもつかない。

確かに物理的な意味では、先の攻撃以上の物は出せる。だが、魔と魔のぶつかり合いにおいてのみ言えば、これらに匹敵する一撃を放てる魔導師は世界に五指と入らぬだろう。

格が違う。次元が違う。作られた概念、構成された武具の本質そのものが現代を生きる武具の一流を、三流にさえ貶める輝きを持っていた。

暗雲の切れ間に、月明かりが世界を照らす。

誰もが声の主を、この一撃を放った者を見るべく視線を上空へと移す。

西洋鎧を崩したような軽装。男の胸部と右手の肘から先、両足の腿から先のみを白銀の鎧に包む戦装束は華美にして流麗であり、誰の目からも洗練された物だと見て取れる。

黄金の月光を背に輝く、白銀の覇者。

人でありながら魔性の輝きを秘めた男は、全てを見下ろすように、遙か上空に仁王に立つ。

「同胞が世話になった。君達には初めて目にかかる者もいるだろうが、自己紹介は省かせて貰おう」

誰一人として声を上げない。精悍な男の声は、同時に魔笛の如き響きさえ含んでいた。

「未だ決着はつかず、双方ともに遺恨を残す者もいるだろうが、本来我々は君達への関与など望んではいない。否、いなかったと言っべきか」

その言葉に、再び恭介達は武器を身構える。相対するということならば相手になると、その決意を視線に込めながら。

「そう餌を前にした犬のように見てくれるな。我々は君達に借りがあり、君達は我々に遺恨がある。ならば、いずれ決着をつけねばならん」

それは宣戦布告。戦いの鐘を鳴り響かせる合図に他ならない。

「だが、我々が決着をつけるのは時期尚早だ。故、ここは引かせて貰う。ああ、それと……」

言葉と共に、戦地から離れていた高町なのはと、意識を失った神崎龍也の胸を、別の腕が貫いた。

それは物理的な物ではない。魔導師が持つ魔力の源、リンカーコアを抜く為の物であり、魔力を抜かれたとしても命に別状は無い。ただし、魔力を抜かれた者は長時間の昏倒を余儀なくされるが。

「君達の内、二名の魔力は貰っておこう。口惜しく、我々を救せぬと思うのなら、その憎悪を胸に刻め」

その怒りを、忘れるなと男は呟く。

「我々も君達を忘れない。君達が傷付けた同胞の傷は、君達全員の魔力で支払って貰う」

男が夜に溶けると同時、それぞれの戦場に立つ者らも、後を追うように離れて行く。

誰も追う事など出来ない。今はただ倒れた者たちを運ばねばならず、下手に血の昇った状態で動けば全滅の危機さえ有り得るのだから。

誰もが拳を握りしめ、きつく歯を噛み締める。

敵の居なくなつた闇の中で、彼らは応援が駆け付けるまでそうしているしかなかった。

009 邂逅 Side - A (後書き)

c・m・「H A H A H A！ A' s組の連中を活躍させたらラスボス&中ボス組になっちまったZE

……すんません、調子に乗り過ぎました。第9話投稿完了です」

興輝「……俺の出番」

c・m・「しかし、皆派手に登場してくれたわね」 ちなみに今回作者の一番のお気に入り台詞は、桜ちゃんの

『私 超強いよ?』

キヤー！ 素敵よ桜ちゃん！ そこに痺れる憧れるう！ 今ならキスしてあげても良い!-!」

興輝「俺の……出番」

c・m・「けどやっぱ、今回は色々と考えたけど、京谷君はもうちょっと活躍させたかったわ。トレインの装飾銃とか作者的にも好みだし。

あとはアルフと恭介さんの絡みとか、レインシアちゃんとマクスのコンビを際立たせるのも今後の課題ね」

興輝「……俺、の……出番……」

c・m・「しつつかし、御剣さんも派手に登場してくれたわ。ま、流石にA' sメインヒロインのお相手となれば格が変わるのも当然かしら? 今後の活躍が期待できそうね」

興輝「……俺……の、出……番……」

c・m・「ま。両陣営の活躍は今後のお楽しみという事で、そろそろ読者様のお礼に移ります。

久住祐治さま、Hagalaazさま、Kyoさま。」感想を頂き、ありがとうございました」

興輝「俺……ノ……出……番……」

c・m・「最後にHagalaazさまにお返しを。

そんなマーケティングで大丈夫か？ 一番良いのを頼む。個人的にはBLEモードで。

それでは皆様、また次回お会いしましょう、さようなら！

興輝「俺の出番をオオオオオオオオ……！！！」

！！！」

「ふいふ……疲れたあ……」

「ホントお疲れだったにゃー」

月日と言うものは早い物だと祐治は思う。ここまで魔法生物を狩り続けておいて管理局に発見されていないという事は計算してもいるが、運に依るところも大きい。

既に季節は冬。十二月に入ったところで蒐集は丁度四百頁を越えようとしている。

このペースでいけば、クリスマスイヴには間に合う筈だ。尤も、適度に闇の書の蒐集を行っている為、はやての症状はそこまで深刻な物ではなく問題なく生活を送っていた。

「ま。何にしても平和は良いよねー。あれ？　そう言えばヴィータちゃんは？」

「先程念話による連絡があった。大型の奴が現れたので、それを仕留めたらすぐ帰るそうだ」

辺りを見回して問う桜に御剣が軽く返す。

「そつか。じゃ、はやてちゃんに伝えないとね。食事は皆で摂った方が美味しいし」

まったくだ、と一同は笑い合う一方で直也は苦い顔をしていた。

「申し訳ないのですが、様子を見に行っても宜しいでしょうか？」

ヴィータを単独で行動させる事が不安だったのか、そう提言する

直也をセレノが止める。

「過保護も結構ですが、彼女も騎士です。大型とはいえ、魔法生物の一匹や二匹に後れを取る事はありませんよ」

セレノの発言に渋々引き下がる直也であったが、御剣も想う所があつたらしく、肩を持つように進言した。

「確かにそうかもしれんが、報告を受けた時から時間が経っているのも確かだ。

手間取っている可能性も捨てきれんからな」

「じゃ、皆で行きますか！」

桜が片手を上げて提案すると、一同はそうだなと笑い合う。何だかんだといつても、やはり心配ではあつたのだろう。

軽い足取りで向かおうとする全員。彼らはこの時まで、あくまで軽い気持ちだった。

そう。彼らの目の前に一人の男が現れるまでは。

ブラウンの髪が特徴的なその男は御剣達に一礼すると、静かに頭を上げた。

「何者かね？ 見た所魔導師かとお見受けするが」

「私は槇野来栖と言います。直也君は私と面識がありますので、敵ではないと言う事だけを踏まえて下さい」

本当か？ と問う御剣に対し、直也は小さく頷いた。

「槇野さん。何故、」

「今は世間話をしている暇は無いので端的に。我々と以前協力関係を結んだ者が、貴方方の仲間と敵対しています。場所は市街地オフイス街の、」

その言葉を完全に聞くより早く、北澤直也は空を駆けた。制止の声も耳に貸さず言われた方向に飛んで行った彼との距離は、既に一般人では視界に捉え切れない程に離れている。

「……全力疾走。それ以外に魔力の使い道がない以上、出し惜しみをする必要は無いか。」

さて、直也が疑う事無く向かったと言う事は、君の情報は信頼に値すると言う事だ。だが解せん、君は何故我々がここに居る事を知り、かつ我々にその事を告げた？」

御剣の疑問は当然である。一般人は当然として、魔導師であつてもバレル事の無いよう認識障害をかけて動いているのだ。

万が一にも、とは行かないまでも発見する事は相当に困難な筈である。

「街全体に熱源探索を施していますので。例え魔法でカバーしても問題ありませんよ。」

私の相方が屋敷で海鳴市全域を見張っています」

「このストーリーカーが。それで？ 何故告げたのかね？」

「一つは私が彼らとは面識がある為、直接対峙する訳にはいかなかった事。」

もう一つは、本来貴方方とは初期の頃より協力したかったのですが、八神家を監視している存在がいましたね。

その者らが監視を解くまで、接触を避ける必要がありました」

その話が本当であれば、今は監視の目は無いと言う事なのだろう。

僥倖だと思つ反面、監視の対象を考え、当然の結果に行きつく。

「時空管理局か」

「確証はありませんが、おそらく」

数瞬の間、顎に手を当てて考えていた御剣だったが、その発言が信用に足ると考えたのだろう。彼にしても心当たりがない訳ではない。

「判った。我々はヴィータを迎えに行く。君は、」

「私は一旦失礼させて頂きます。後日こちらの住所まで。心よりお待ちしています」

住所の書かれた名刺ほどのカードを投げると、闇に溶ける様に消えて行った。

「さて、それでは我々の仲間を傷付ける者に会いに行くとするか」

御剣の言葉に、一同は獰猛な笑みを覗かせるのだった。

夜空を駆ける赤い少女。その顔は何処か焦りがある様でもあり、何処か楽しそうでもあった。

きつと彼女にとっては、焦り以上に帰路に着く事への楽しみという物があるのだろう。

そんなヴィータを前に桃色のセーターを纏った少女は立ちふさが

「何だよ……?」

道を塞がれた事への苛立ちか、それとも帰りを邪魔された事に対してかは判らない。

ヴィータは眉間にしわを寄せながらも、一応は会話をするだけの余裕があるのか、問い質す。

「失礼。初対面の方にこう言うては何ですが、貴女が嬉しそうに帰る所を見て、私も苛立ちを隠せないのですよ」

デバイスを手に、桃色の少女は静かに告げる。一見穏やかそうなその顔には、確かな憎悪の念が見て取れる。

「訳判んねえな。お前にあたしが何かしたか?」

「いいえ。私には何も」

訳が判らない。ヴィータからしてみれば少女の言動は支離滅裂であり、事実ヴィータ自身には身に覚えが全くない。

「ならどけよ。あたしは急いでんだ、早く帰りてえんだよ。……今日ブツ潰した奴らの報告もあるし」

そうだ。自分はこの様な事をしている暇は無い。たとえどれ程魔力を持っていようと、人間は決して襲ってはならないと耳に蛸が出来る程聞かされているのだ。

もしここで少女を襲えば、まず間違いなく御剣や直也は怒るであらうし、はやてにも迷惑がかかる。それは何としても避けたかった。

「もう判りました。こちらの誤解という線はないのですね」

「は？」

言葉と共に、光の道が空を紡ぐ。

「……………ッ！」

約束を違える事は本意ではないが、既に戦闘は避けられぬと悟ったのだらう。

ならば先手必勝とばかりに、ヴィータは自らの鉄槌を模したデバイスを振り上げ。

「遅えぞ、嬢ちゃん」

己の背後に立つ、スーツ姿の男の剣を辛うじて受け止めた。

「があ……………!!!?」

馬鹿な、と言いたげにヴィータは落下する。こと接近戦において、自分を上回る一撃を放てる者など数えるほどしか存在しない筈なのに、と。

だが、現実には男は単純な膂力は言うに及ばず、魔力的な要素においてもヴィータを上回っている。

吹き飛ばされた衝撃によって地上へと落ち、既に制御できる魔力さえ先程の防御に全て込めた。

満身創痍。手にしたデバイスは本体こそ無事であるものの、柄の部分は一度力を込めれば今にも砕けそうなほどに罅割れている。

“ごめん……………グラフ・アイゼン”

絶望的な状況で、不甲斐無い己の所為で壊れかけた相棒に謝罪す

る。

そして、この場には居ない者達にも。

“ごめん……はやて、直也、セレノ、皆、あたし……”

ここで終わってしまうかもしれないと、彼女らからぬ思いが脳裏によぎる。

振動で脳が揺れたのか。白濁とした意識の中で、ヴィータは相手を見る。長身の男が迫る。

魔の手が己へと伸びて行く。そんな状況でありながら、ヴィータはぼんやりと思いだす。以前はやてが読んでくれた本。悪い剣士から少女を助ける騎士の話。

“……柄じゃねえって判ってるけどよ、あたしにも誰か手を差し伸べてくれる様な奴って、居るのかな？”

居る訳ねえよな、と自嘲気味に笑いながら、彼女は静かに目を閉じる。

直後、豪雨の如き無数の矢が降り注いだ。

S i d e - N a o y a K i t a z a w a

夜の街、無数の光が流星の如く後方へと流れていく。

今ならば戦闘機とまでは行かずとも、亜音速程度であれば十分に達している事だろう。

だが駄目だ。遅い、遅すぎる。槇野さんの話では既に戦闘が行われている筈。以前出会った者たちはそれこそ一騎当千と言っている能力を持った者たちだ。

如何にヴィータが騎士として優れていたとしても、彼らを相手にするには分が悪い。

何より、彼らは既に俺と面識がある。当然、俺が剣以外は使えない事も知っているだろう。あの中には千草さんも居たのだ。口外されていけないとは限らない。

「マルコキアス、バリアジャケットを形成！ 全身が隠れる物を頼む！」

《Please specific image . Within seconds a form . (イメージを具体的に。一秒以内に形成します)》

現れたのは全身を包む漆黒のコート。顔は当然フードに隠され、僅かに見えるであろう口元も、惣面を付ける事で隠し切る。

ようやくヴィータが見えたが、状況は最悪と言っていい。傷付けられ、無残にも地に落ちる彼女に全速力で向かい手を差し伸べるも、間に合わないと言う思いが脳裏をよぎる。

何故だ……？ あと一步、あとほんの少しの距離だというのに、何故この手は届かない……！？

絶望的とさえ言える光景。剣を手にした男の魔手がヴィータへと伸びて行く。

届け、届け……………！！！！

内より湧き上がる叫び。それが通じたのかどうかは判らない。少なくとも、神などと言う存在は自身にとって唾棄すべき存在であるものの、今この場で奇跡を起こしてくれた存在には間違いなく感謝すべきだろう。

朱い魔力光に包まれた無数の矢が、男とヴィータを引き離れたば

かりか、巻き上がった土煙が煙幕となつて辺りを覆う。

届かなかつた筈の手。なのに、今この腕の中には確かに少女の感触がある。その事実が余りにも嬉しく、それと同じほどに憎悪が裡より湧き上がる。

「だれ……だ？」

だが、そんな感情をヴィータに見せつける訳にはいかない。俺は静かに、それこそ相手には聞こえない程の小声で語りかける。

「遅くなりました……安心して眠って下さい。眼が覚めたら、いつものように暖かい飲み物を用意します」

「う、ん……けど、ごめん……はやてに迷惑……それに、直也にも」

言葉を言いきれず、ヴィータは意識を手放す。

大丈夫だ。俺やはやてさんは、決してヴィータを責めたりはしない。責めるべきは、今日の前に居る者たちだ。

怒りに身を任せる様な愚行はせず、俺は眼前の存在を見やる。恰幅の良い体付きをしたスーツ姿の男と、ヴィータとさして変わらぬあどけなさを持った少女。

彼らを知っている。あの事件に関わらず、俺と彼らは旧知の縁と言つていい。この半年間、短くも隣人として親しくしてきたし、悩みがあるのなら惜しむ事無く協力したいとも思っていた。

キリスト教の精神ではないが、俺は俺なりに隣人を愛するという考えがあつたし、彼らに向けた親しみも決して偽りではない。

今日、この日までは。

「テメエは……」

何者だと、マクス・トレンジアは俺に問う。その気迫、その圧力。身から滲み出る存在感は間違ひなく相手が場数を踏んだ猛者だと伝えてる。

手にした長剣は構えが無い様でその実、如何な奇襲にも対応し、見据える瞳は伏兵が居ないかを観察している。

俺と言う存在だけでなく周囲に気を配り、判断を見余らせんとするその判断力。全てが戦士としての格を告げる。

なればこそ、貴様を障害と認めよう。殺さずに済ませられぬ存在として相手取ろう。

「我が同輩の窮地に推参した。そこの若造、ならば小娘」

嚇怒の念を滲ませ、言い放つ。既にマルコキアスは状況を察してくれたらしく、声を変えてくれたようだ。本来の声ならぬ音は、夜の街に静かに響く。

「貴様らの傷付けた同輩の髪の毛の一本は貴様らの四肢より重く、貴様らが傷付けた同輩の肌は貴様らの命より重い」

決して脅しではない。俺は今、確かな敵として二人の前に立っている。

貴様が、貴様らが憎い。あの子が……ヴィータがお前達に何をした？ あれ程までに傷付き、声を上げる事さえ出来ぬ程の事をお前達にしたのか？

否、断じて否だ。ヴィータは感情的ではあるが根は優しく、何よりも、誰よりも無意味な犠牲を厭っていた。

「そつかい……なら、テメエは俺が潰す」

ほう……傍若無人とは正に貴様の事を言つのだらうよ、狂犬が。どうやって奴を八つ裂き、泣き喚かせて赦しを乞わそうかと考えていた時、ザフィーラが現れてくれたのは僥倖だった。

ヴィータが未だ腕の中に居る以上、怒りに身を任せる訳には行かない。

「遅くなった」

「ザフィーラ、ヴィータを頼む」

俺の言葉に二つ返事で了承するザフィーラにヴィータを預ける。気を失った彼女の髪をそつと撫で、俺は静かに誓う。

あのような男に、俺は断じて負けぬと。

ヴィータを抱えて飛んで行くザフィーラに対し、視線を向ける事無く確認すると、虚空より顕れた漆黒の魔剣を左手に提げる。

「参れ、蛮勇なる狂犬。我が剣で貴様の牙の冴えを見てくれる。

光栄に思えよ。その薄汚い血潮が、我が君と同輩への供物となるのだからな」

「ぬかせ。テメエが来い」

かちやりと、マクスが長剣の切先を向ける。良からう。貴様には俺の剣を見せてくれる。

精々牙が折れぬよう気を付けることだ……！！

全霊を以てした踏み込みと共に、左手の剣を奔らせる。狙いは首、一切の容赦も呵責もなく、その首を落とさんとした一刀は、しかし敵の長剣に肉薄する。

「……ッ！」

長剣と魔剣がぶつかり合い、共に火花を散らす。侮っていたつもりは毛頭ないが、まさかこれ程とは……なッ。

擦れ合う金属音。臂力は相手の方が上だったらしく、微かではあるが押されている。

己の力が相手より下だと判った今、力勝負に持ち込む必要は何処にもない。マクスの剣を巻き払うと共に、遠心力を利用して胴を狙いにかかる。

敵の剣は既にあらぬ方向へと流された。剣が胴を切り裂き、五臓六腑がアスファルトに零れ落ちる様が脳裏をよぎるも、しかし現実には俺の剣は寸での所で防がれる。

この男、純粹な剛力で強引にねじ込んだか！

確かに男には俺程の速さはない。が、その差さえ覆す程の剛力と、西洋剣特有の叩き切る剣技の冴えがある。

対してこちらは西洋剣に関しては、打刀ほど十全に扱えるとは言い切れぬ。

せめて槍があれば変わったのであろうが、無い物ねだりは出来ぬし、武器が悪かったなど言い訳とするには下の下だ。

力はマクスが圧倒的に、速さは俺が紙一重で上。ならば競い合うべきは互いの術理。

上段に構えるマクスと、下段に構える俺。

手の内は互いに読めている。マクスは己の剛力と武器の特性を最大限に活かした振り下ろし。

対してこちらは、踏み込みと技の出の速さを活かした刺突。

魔剣はここに、かつて無い宿敵を前に歓喜と畏怖の声を上げていた。

いま私はかつてない程に怒っている。気分は最低最悪で、お腹の中や頭にはドロドロとした殺意が湧き上がりそうだ。

遠目から確認したヴィータちゃんは、本当にひどい有様だった。声もあげられず、ただ不甲斐無さを恥じる様な眼をした女の子。

それを黙って見過ごせる程、私は決して優しくなんかない。そう、たとえ今ビルに突っ込んで怪我したガキが相手だとしても、私は情けなんかかけてやる気は無い。

「ばあ」

おふざけ半分で顔を覗きこむ私を目にした途端、ガキは後方へと飛び退いた。

「……ッ」

流石にこれはカチンとくる。会っていきなりそんな如何にも敵だ、なんて顔するかな、こいつは。

「ちよつとちよつと……いきなりそれは無いんじゃない？ せつかくこんなに可愛い美少女が起こしてあげたっていうのにさ」

「お前は……」

何者なんだと、そんな在り来たり過ぎて溜め息さえ出る問いかけに私はそっけなく返す。

「敵だけど？」

手にしたデバイスをちらつかせると、ガキは決意を固めた主人公みたいな顔つきでこっちを見やがった。

たく。悪役はアンタらの方でしょうが。何正義の味方ぶってんのよ。

「そうか……ならどけ。なのはが待ってるんだ」

「そっか……つまり、あなたにとって私は通過点に過ぎない訳だ、ふうん」

もういいや。今ではつきり決めた。その如何にも私より強いって言いたそうな発言は許せない。

「いい加減にしろよ、退かないなら力づくで、」

「来れば？ 敵だって言ったださだよ？ けどさ、」

私の声を遮るように、ガキは日本刀を奔らせる。けど、

「私 超強いよ？」

腹部にめり込む一撃。それだけで、ガキは地に崩れ落ちた。

弱い、弱過ぎる……もつと何か無いの？ その腰に付けた仮面ライダーグッズは玩具ですか？ トイザラスに売ってたんですか？ コスプレですかこの野郎。

まあ、そうは言ってもコード四百本は繋げて全力で峰打したら意識手放すのも無理無い訳なんだけど、どうせ戦うなら骨がある奴が良かったなあ、と愚痴を零しながら、取り敢えず倒れたガキを椅子代わりにしつつ戦局を見守るのだった。

市街地に来て思ったのは、俺がハズレを引いたって事だ。目の前には瓦礫を除け、埃を払いながら立ち上がる栗毛の少女。

はつきり言っただけの子を虐めるのは趣味じゃないし、相手が万全じゃないってんなら尚更。なので友好的に話しかける。

「やー、お嬢ちゃん。お目覚めかにや〜?」

「貴方は……?」

あ。やっぱり聞かれるよにや〜、そりゃ。

「俺かい? う〜ん、何つつか取り敢えずお嬢ちゃんの敵って事で一つ。」

ま、先に手を出してきたのがどっちか考えりゃ、どっちが正しいかは明白なんだが……それでも俺は紳士に行きたいからな。お嬢ちゃんがこっちに関わらないのを約束してくれるんなら……って言う訳にもいかないか。

お嬢ちゃんとはもかく、後ろのが許してくれなさそうだ」

言いつつ俺は後方を見据える。金砂の髪をツインテールに結んだ少女、フェイト・テストアロツサ。そして……

「判ってんじやねえか。なら、どうするべきか判るよな」

その横に、日本人離れた金褐色の髪と金の瞳を持った子供が一人。どうやらフェイトの知り合いっぽい。

「フェイト、なのはを頼む。こいつの相手は俺だ」

「判った。気を付けて」

良かった。どうやらなのは共々女の子達は離れてくれるっぽい。目の前のイレギュラー……つつか、どうせ作者が主人公組の奴なんだろっし、心おきなく相手ができそうだ。

女の子達が離れたのを確認してから『黒狼』を出すと、子供は意外そうな顔をした。

「てつきり、逃げる奴は許さないのかと思ったんだがな」

「弱いもん虐めは趣味じゃないんでな。それより、あんたには本気で行かせて貰う」

言葉と共に黒狼を振り抜くも、剣は空しく空を切る。斬撃の余波はビルを倒壊させ、粉微塵に前方の壁を吹き飛ばすも、無意味な破壊でしか無いのは明白だ。

「つつか、弁償とかどうしよう……」

自分でも緊張感の欠片もないと判っていても、そう思わずにはいられないのだが、そんな事も瑣事になる程物騒かつ凶悪な代物を子供は懐から一艇の銃を抜きやがった。

不吉を意味する『XIIII』の刻印。決して実用的ではないと思わせる様な黒い装飾銃。

おいおい……見た目トレインに似てるとは思ってたけど、得物までそれかよ。

「よくもブチ壊してくれたな……月並みだが言わせて貰う。『不吉を届けに来たぜ』」

言葉と共に、子供は銃爪を絞る。レールガン程度ならどうって事はないが、あの野郎スターライトブレイカークラスの一撃をぶっ放しやがった。

ま、そうは言っても……。

「中々だったが、俺に砲撃系は効かねえよ」

右手を楯のように突き出したまま、俺は静かに告げる。

「な……」

「そんなに驚くことねえだろ。そもそもあんた、そんな雑魚専門の武器で俺を止めれると思ったのか？ 俺は言ったよな、あんたには本気で行かせて貰^{マシ}うって」

……そう。あの一撃はどう見ても手加減したもんだっだし、以前市街地で暴れた時のこいつは斬魄刀やら魔法やらをぶっ放していた。要するに、こいつは手を抜きやがった。

「嘗めたな、俺を」

一足飛びで子供の間合いに入ると同時に、その背を斬り付け、止めとばかりに放った蹴りを背骨に叩きこむ。

ピンボールよろしく弾き飛ばされた相手は先程まで俺がいた倒壊したビルに突っ込み、ゆらりとその身を起き上がらせる。

「デメエ……」

「ちったあ良い目をするようになったな、小僧。手エ抜いてんじやねえよ。次はその頭トマトにするぞ」

「……上等だ」

空間が揺さぶる。大気を裂く様な魔力が練り上げられていくのを感じながら、俺は黒狼を強く握りしめる。

さあ、楽しく恐ろしい舞踏を始めよう。

「Let's dance!!」

Side - out

「何処へ行く気だ？」

手傷を負っている為だろう。戦線を離脱しようとする二人の少女に、シグナムは問う。

同朋を傷付けられた手前、逃がす気は無いが、かといって背後から不意打ちを行うというのは彼女の誇りに反する。

相手が武器を身構えたのを確認し、かつ手傷を負った者が距離を取ったのを確認してからデバイスを構えた。

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

《Explosion!》

言葉と共にデバイスから排出される葉莖。それと共にシグナムのデバイスから膨大な量の魔力が紡がれる。

「紫電一閃……!!」

放出される魔力と共に振るわれる一刀。かのスルトの持つ焰の剣の銘に相応しき灼熱が込められた一太刀は、金砂の髪の少女の構築した防御結界を破壊するに留まらず、デバイスの柄さえ一刀の下に両断した。

「……ッ」

他愛ない。思わずそう零してしまいかねない程、呆気なく着くかと思われた勝負はしかし、

「そこまでにしなさい、小娘」

仕切り直しだと言わんばかりに、両者の間に雷が降り注ぐ。

「なッ……」

シグナムが驚愕するのも当然だろう。控えめに見てもオーバーSランクの魔力によって紡がれた一撃が、非殺傷設定を解除した状態で降り注いだのだから。

「母、さん……………?」

「下がっていなさいフェイト。この小娘の相手は私がするわ」

鞭に変化させたデバイスを撓らせつつ現れた妙齢の女性は、少女に微笑むとゆつくりと、そして鬼女の面を覗かせながらシグナムを見やる。

「よくも私の娘とお友達を傷付けたわね。ベルカの骨董品の分際で騎士を愚弄するか……!!」

嚇怒の念を込めたシグナムの一喝を、妙齢の女性は涼風の如く聞き流す。相手が何者だろうと関係ないとするその佇まい。

魔導師として一流の魔力と威圧感を前に、シグナムは身構える。そして。

「アルフ。飼い犬なら飼い犬らしく、主人の敵は噛みなさい」

「うっさい、鬼女!!」

その言葉と共に、使い魔はシグナムの背後から拳を振り上げる。気配遮断か転移によるものか。いずれにせよ奇襲に対し迂闊と思う反面、防御や回避が間に合わない。一撃を受ける事を覚悟しつつ、体勢を立て直す事に専念した所で、

「脇が甘いぞ、シグナム」

唐突に、横から割って入ったザフィーラが使い魔を蹴り飛ばした。

「ザフィーラか、ヴィータはどうした？」

「心配無い。他も到着済みだ」

そうか、とシグナムはザフィーラを一瞥すると、再びプレシアへと向き直る。

「まったく……使えない犬ね。でも良いわ、戦力分析には役に立ったもの」

「そう言わないで欲しいな、アルフもそれなりに頑張っているんだから」

「ッ……!!」

虚空より迫る二つの銅の輪がシグナムを捕える。亜音速を超えて迫るそれは、確かに生半可な魔導師では防ぎようがあるまい。

だが侮るなかれ。彼女もまた騎士に相応しき実力を持つという事を。

「嘗めるな……!!」

肉薄する剣と銅輪。音速に迫り、山さえ打ち崩すかの如き破城鎚を喰いとめるのは彼女の持つ技量故か、それともベルカの騎士をして稀代の名剣と謳われたデバイス故か。

いずれにせよシグナムが胴の輪を食い止めることで手いっぱいとなっているのを見つつ、唐突に現れた男と妙齡の女性は右腕を掲げる。

「腕は良いが、」

「そこまでよ」

天をも引き裂く雷が迸る。こと能力においては別格と云っている二人の一撃が、シグナムとザフィーラを捉えようとし、

「皆、下がれ」

その声と共に夜闇を切り裂き、音速の三倍を超えて放たれた宝剣、魔剣がそれぞれの戦場に立つ者達の間へと割って入った。

S i d e - H i t o s i M i t s u r u g i

「ッ」

息をのんだのは、恐らくこの結界内に居た全ての者だろう。

さながら流星の如く尾を引きながらに飛来した稀代の剣軍は、いま各所で戦っている両者の間に割って入るのみならず、大地を悉く灰燼へと変える。

多少やり過ぎたかとも思ったが、これ以上派手に動き続けて応援でも呼ばれれば事が事だ。すでにヴィータを回収した以上、これ以

上この場に留まるのは得策ではない。

眼下には敵味方を問わず己を見上がる存在。それを見据えながら、私は静かに、だがはつきりと口を開く。

「同胞が世話になった。君達には初めて目にかかる者もいるだろうが、自己紹介は省かせて貰おう」

誰一人として声を上げない。僥倖だ。ここで勢いに任せて来られてはこちらとしても話が進まないのだ。

黙って貰えるというならこれ程有りがたい事は無い。

「未だ決着はつかず、双方ともに遺憾を残す者もいるだろうが、本来我々は君達への関与など望んではない。否、いなかったと言えるべきか」

その言葉に、敵は身構える。相対するというならば相手になると、その決意を視線に込めながら。

「そう餌を前にした犬のように見てくれるな。我々は君達に借りがあり、君達は我々に遺恨がある。ならば、いずれ決着をつけねばならん」

そう。決着はつけなくてはならない。相手にも何らかの事情があるのやもしれんが、私としても身内を痛めつけられて見逃してやれるほど寛大ではない。

「だが、我々が決着を付けるのは時期尚早だ。故、ここは引かせて貰う。ああ、それと……」

言葉と共に、戦地から離れているシャマルに念話を行う。既に抵

抗できない者が二人、彼らのリンカーコアを引き抜くよう合図した。

「君達の内、二名の魔力は貰っておこう。口惜しく、我々を救せぬと思うのなら、その憎悪を胸に刻め」

それこそが 未だ決着をつけられぬ者達を鎮める方法なのだから。

「我々も君達を忘れない。君達が傷付けた同胞の傷は、君達全員の魔力で支払って貰う」

言つべき事は言い、するべきことはした。ならば、後は各自に合図で合図を送るだけである。

『先程も言ったが、一旦引け。これ以上時間をかければ管理局の連中が来る』

了解、という各自の返答を訊くと共に念話を切り、即座に戦線を離脱した。

……まったく、クリスマスまでに終わればいいのだが。

010 邂逅 Side - B (後書き)

c . m . 「……すみません、バトオ描いてたら遅くなりましたが、第10話投稿完了です」

興輝「……俺の出番……はもういい。諦めた」

c . m . 「次か次の次にはあるわよ。多分。」

Side - B 別名御剣さんサイドでの進行だったりします。両陣営に主役が居ると二倍になってしまうというのがA'sの厄介な所ね。まあ、今回限りだとは思っけど」

興輝「ところで、今回はあるんだろ？ NG」

c . m . 「ええ。BLは無いから安心して良いわ」

興輝「そいじゃ、スタート」

x x x

「貴様ら家のモンになんしてくれとるんだニヤ……！！！」

「そ、そんな……！？ だって貴方達の方から襲ってきたんじゃないんですか……！！」

「やかましい、ヘタレは黙ってる……！！」

「ひでぶ……！！」

「龍也……！！」

「さあて……きっちり落とし前付けて貰うわよ。レインシアちゃん

だっけ？ 物が無いなら貴女の身体でも良いのよ？」

「や、止めて下さい！！！」

「桜のお嬢、どうか勘弁して下さい！！！」

「マクス、あんたが家のヴィータを傷付けたからこうなってんのよ？ 土下座してる暇があんならリンカーコア持っつきなさいよ。ほら、さっさと200ページ耳をそろえて払いなさい！！！」

「そ、そんな……200ページなんて今は無理です………」

「おやあ……なのはちゃん良い魔力してんじゃん。これなら200ページは行くわね」

「や、やめてえ……！！！」

「ち。俺が押さえておくからさっさと済ませろ」

「ナイスよ直也。ほら、さっさと出しなさい！！！」

「あつっ………」

「よし、そのこのヘタレからも回収しとくぞ。1頁だろつと無駄には……つて、これだけかよ、しけてやがる。

おい、次も来るから最低50頁用意しとけ！！ でなきや娘連れとくぞ！！！」

「わー 御剣つてば悪なんだから！！！」

×××

「すまねえレインシア……俺が不甲斐無いばかりに」

「それは言わない約束だよ、マクスおとつっあん」

興輝「……物の見事に893だな」

c.m.「いや、感想で散々ヤクザヤクザって言うからつい………」

……」

興輝「……しかし、こいつら、ノリノリである」

c・m・「さて、そろそろ読者様のお礼に移りましょう。

久住祐治さま、Hagailazさま、Kyoさま。ご感想を頂き、ありがとうございます。

前回からではありませんが、これからは一回一回感想返しをしていこうと思います」

興輝「何故これまでしなかったし」

c・m・「いや、一度違う方法をやっちゃうとそれについてい合わせちゃって……」

興輝「まあ良いけど、次はどうなるんだ？」

c・m・「うん。今回はもう一回絵を描く予定。ていつかもう描き始めてる」

興輝「俺か！？ 俺なのか！？」

c・m・「いえ。ヴェノムよ」

興輝「また悪役かよ！！」

c・m・「だって一人描いたら全員描かなくちゃいけないもの。それでは皆様、また次回お会いしましょう、さようなら！」

「結界は解除しようとしなくていい。それより、上からこちらの結界を上書きするようにしてくれ。」

僕は現場に向かう」

「判った。敵の撤退までに応援を呼ぶから！ それより敵の詳細は、
必要無い。少しばかり因縁のある相手なんだ」

言うや否や、クロノはモニタールームから転移魔法陣への移動を開始する。詳細など聞くまでもない。

何故なら、あの騎士たちはクロノにとっても知り得ている存在なのだから。

視界がぶれ、意識が白濁へと染まる。リンカーコアを引き抜かれた高町なのはを襲ったのは泥酔でもしたかのような酩酊感。

当然だ。魔力の源であるリンカーコアを強引な形で引き抜かれ、魔力のほぼ全てを絞り取られたのだ。たとえばなのはで無くとも失神は避けられず、意識を失った身体は虚空へと投げられる。

「なのは！」

安全圏まで退避していた事が油断に繋がったのだろう。即座に向かおうとするフェイトに割って入るように、黒い影が尾を引く。

フェイトは知っている。攻撃的とさえ言える黒のバリアジャケッ

トを纏うその人物。

十四という若輩に在りながら管理局執務官を務めるその少年を。

「クロノ……？」

「すまない。遅くなった」

意識を失ったなのはを抱きかかえながら謝罪するクロノ。しかしその顔には焦りは無く、どこか穏やかな物があった。

「どうして、そんなに冷静に……」

「魔力を抜かれているだけだからね。命に別状は無い。それが……彼らが行ってきた手段だ」

ぎり、と。言葉を呟くことに歯を噛み締める。先程までの穏やかさが嘘のように翳っていた。

「なのはは僕が運ぶ。フェイトは応援が到着するまで待機しててくれ」
「うん」

応援が駆け付けると共に、一先ず龍也となのはは治療に当たる為アースラに収容され、その後専門的な検査を受ける為に時空管理局本局へと移動することになった。

今頃京谷やマクス達は別室に待機しているか、龍也の見舞いにも行っているのだろうと考えながら、クロノは一室へと向かう。

どうやら会いたい人物の意識は回復してくれたらしく、黙って異

性の部屋を訪れる不安が解消されると共に、何処か遣る瀬無さを感じていた。

「すまない……せつかく皆と会える筈だったのに、こんな形になってしまった」

「あ、ううん。クロノ君のせいじゃないよ。それより、龍也君は、」

慌てて立ち上がるうとするも、まだ回復は完全には出来ていないのだろう。足元をふらつかせるのはを、クロノはそつと抱きとめる。

「まだ癒え切っていないだろう。リンカーコアから直接魔力を抜かれたんだ。暫くゆっくりすると良い」

「ありがとう、クロノ君」

気にするな、と言うクロノに対し、なのははくすりと笑う。

「クロノ君で、本当に優しいよね」

「な、なんだ藪から棒に」

「だって、今日も助けてくれたもん」

見られた事よりも、意識があつた事の方が驚きだった。あの状況下、リンカーコアを抜かれてすぐの状態で意識を保たせていたというその精神力には、さしものクロノも驚愕せざるを得ない。

尤も、それこそがこの少女の強さなのだという事もクロノは判っている。

何故なら、彼自身もまたその輝きに魅せられた一人。誰よりも日常に相応しい存在でありながら前を進もうとする不屈の心に惹かれ、それ故に日常に戻したいと願っていたのだ。

そう……願って、いたのだ……。

「クロノ君、フェイトちゃんの事も気にかけてくれてたし、それに龍也君も、」

「違う」

続く賛辞の言葉をクロノは遮る。

「誰にでも と、言う訳ではないさ」

もし本当に誰にでも優しくかったのなら、目の前の少女程優しくかったなら、あの時のクロノはなのではなく龍也の元に行っていた。彼女が彼女の一番傍にいる少年の話を笑顔でする時に、仮面めいた笑みを浮かべて道化のように立ち振舞ったりなど出来ない。

取り繕えば取り繕う程、内の傷が広がっていく。それが身勝手な独り善がりだと判っていて……けれど、独り善がりだからこそ、その自己嫌悪に苛まれる。

どうしようもない悪循環。それを理解しながら、高町なのはに逢いたいと考えてしまう。その歪さを噛み締めながら、クロノは決してその感情を表に出そうとはせずに立ち振る舞う。

「もう少し……休んでくれれば良い。僕は皆の所に行っている」

背に向けられる視線が突き刺さる。暖かな笑顔でさえ、今のクロノにとっては氷の剣も同然だった。

「クロノか。なのははどうだった？」

「もう少し休ませた方が良く。それより、バルディッシュとレイジングハートはどうなってる？」

「今は自動修復をかけてる所。これが済んだら再起動してオーバーホールかな」

なのはも当然魔法が使えないしね、とユーノが語る。それを横目に見ていたのは龍也だ。どうやら無理を押ししてここに来たらしい。

「それよりさ、あの連中って一体何者なんだい？ 使ってる魔法も変だったし」

「あれはベルカ式だよ、アルフ」

横にいた恭介がその問いに応える。

「『ベルカ式』。ミッド式と魔法体制を二分した魔法体系。遠距離、広範囲攻撃と言った点を度外視し対人戦闘に特化した術式だ。

優れた者は騎士と呼ばれるが、連中もそうだった手合いだろうな」
「だが、問題は何故騎士連中がなのは達を襲ったのかって事だろうか？ 魔力の蒐集にしたって、手際よく進めようと思えば出来たんじやねえか？」

マクスの疑問も尤もである。そもそもにして戦力の逐一投入という物は愚策に尽きるのだ。物事を手際よく進めたいなら、圧倒的戦力差で個人を叩き、蒐集と離脱を行えばこと足りた筈である。

「一対一の戦いに拘っていた……というのもあるんだろうけど、どうもキナ臭いな。」

それに連中の実力なら、魔法生物だけを狙っていても間に合った。なのはや龍也を襲うメリットってそんなにあるか？」

京谷の問いかけに多数は俯き、残りの少数　アルフやフェイトは首を傾げていた。

「ねえ京谷。そもそも何であの人たちは蒐集を行ったの？」

事情を知らぬ者からすれば、フェイトの疑問にも同意する所だろう。それを氷解させるべくプレシアは疑問に答えた。

「第一級搜索指定ロストロギア……『闇の書』。あれを復活させたがっている奴が出て来たという事よ」

そうしてプレシアは語る。闇の書の特性とその悲劇。かつて彼女と協力関係にあった『ガルフ』の面々も又、その悲劇的一幕に関わっていたのだから。

「成程……つまり魔力を喰うだけ喰って特性を自分の物にし、最後は全員あの世逝きか」

胸糞悪い、と吐きだすマクスではあったが彼の物言いを見咎める者は誰もいない。むしろそれに同調する者が大半だったと言っている。

「でも、それならどうしてあの人達は……？」

戦っているのかと、そう問うレインシアに大半の者は黙したまま

だ。彼らの多くはその事情を知っている。だがそれを言う訳にも行かない。

尤も、だからと言って自分たちの立場が変わる訳もないが。

「さあね。いずれにせよ連中は僕らを敵と見なしている、それになのはを傷付けられたのは事実だ」

「良く言ったぜ龍也。俺もあのコート of 剣士と決着はついてねえ。

京谷は、

「ツンツン頭の男だな。煮え湯を飲まされたままなのは良い気分じゃない」

「流れて行けば、俺はあの白銀の騎士か。アルフ達は」

「あたしはあの使い魔の大男。鬼女とフェイトは女騎士ってところかな」

敵とこちらの勢力図を鑑みれば妥当な線だろう。問題はなのはがしばらく魔法を使えないという点だが、彼女にはせめてゆっくりして貰いたいという事で落ち着いた。

「けど、きつと無理して走って行っちゃうんだろっけどね」

「なら君か僕で止めに入れば良い。出来なくとも手助けはできるさ」

君と僕ではなく君か僕、という発言に龍也は内心苦笑する。やはりどこまで行っても恋敵同士ではそこまで深い友情は築けない物らしい。

「そうだな。うん、それじゃあ、」

「あ。クロノ。さっき今回の件、正式にうちに担当になったって。

それから、グレாம்提督がお見えになってるよ」

唐突に訪れたエイミィに一同が振り向くも、当事者であるクロノ

は二つ返事で承した。

「判ったすぐ行く」

時空管理局本局の応接間に、男はソファに腰掛ける事もなく佇んでいた。

恰幅の良い体付きと老齡ながらに威厳と貫録を持ち合わせていながらも、どこか穏やかな物腰を背に見せるその男に、クロノは一礼した。

「お久しぶりです。提督」

「本当に久しぶりだな、クロノ」

誰あるうこの人物こそ、時空管理局顧問官ギル・グレアム。時空管理局歴戦の勇士にして過去、艦隊指揮官、後に執務艦長を務めたエリート中のエリートであり、かつて自身の指導教官であったクロノに取っても崇敬に値する存在である。

「提督、既に聞き及んでおられるかもしれませんが先程、自分達はロストログア『闇の書』の搜索捜査担当に決定しました」

「知っている。私がここに来たのもその件でね。出来得る限りの協力は惜しまないつもりだ。ああ、それと」

言葉と共に、グレアムは視線を応接間の入口へと移す。そこに訪れた男を、最上級の敬礼で迎える為に。

「こ、これはヴェノム中将。いらしていたのですか？」

「リンディ提督より、私と同名の次元犯罪者が出たと聞き及んでいましたね。」

その者を撤退させるに至った君には、是非話を伺いたかったのですよ」

確かな畏敬の念を以てクロノは相手を迎える。グラム提督も歴戦の勇士と呼ぶに相応しいものの、その彼をしてさえ目の前の人物には足元にも及ばないだろう。

時空管理局中将、ヴェノム。本来では艦隊指揮権を持つ身の上でありながら現場での行動を第一とし、過去幾度となく昇進を蹴りつつ事件解決を第一とした管理局の英雄。

周囲の声と上層部の決定によって中将に位置を宛がわれたものの、本来であれば司令官……所謂大将の地位に着いたとしても何ら遜色のない人物である。

「ではヴェノム中将。積もる話もあるでしょうから、私はこれで。」

クロノ。言えた義理ではないかもしれんが、無理はするなよ」

敬礼と共に去るグラムを横目に、さて、とヴェノムは向き直る。

「それで、君が倒したという男はどのような者だったのですか？」

「失礼ながら、自分だけの功績ではありません。いえ、自分などより他二名の現地協力者の功績の方が大きいのです」

齒噛みする様なクロノの言い分を労うように、ヴェノムはそっと両肩に手を置いた。

「それでも必要以上に一般人の介入を嫌い、事件解決に尽力した君の行動を私は買います。」

管理局に努めるのであれば、一般人を巻き込むべきではないとするその思想。リンディ提督と道は違えども、己の意志を貫こうとする君には実に好感を覚える」

「ありがとうございます」

感極まったようなクロノに対し、ヴェノムは柔らかな笑みを浮かべると、質問の答えを促した。

「本題に戻りますが、背丈などは中将とほぼ同一。デバイスではなく独自の魔法を用いていたことから、レアスキル所持者かと。ただ、顔の方は……」

「仮面で隠していたのでしょうか？ 仕方ありません。それに、今回来たのはそちらとは別件ですね。既に死んだ人間や解決した事件より、今日の前の窮地を見据えるべきです」

そこで、と。念を押す様な声でヴェノムはクロノに語る。

「今回の件は影ながらサポートさせて頂きます。アースラが改修で使えない以上、君やリンディ提督、スタッフや協力者は現地での行動が必要でしょうか？」

身分証明書等はこちらで全て手配させて貰いましたから、明日にでも現地での捜査や生活が可能です」

「そんな、宜しいのですか？」

「どの道こうなる事はリンディ提督も見越していましたからね
私の方が行動が早かったというだけの事。指して気にする事ではありません」

そこまで聞いて、クロノはこの相手に対し、更なる信頼を覚える一方で一つだけ訊かなければならない事が出来てしまった。

「何故、そこまでして下さるのですか？」

本来ならば好意ともとれるし、ヴェノム中將の経歴を鑑みればそれも納得できよう。

だが、それ以上の何かがあるのではないかとクロノは思わずにはいられない。何故なら長年執務官として様々な人種の者を見てきた観察眼が、この中將の内面を捉えていた。

この相手は、何か他の事情があるのではないかと。それが失礼極まりない考えだとは判っていたが、ここで戸惑う様な相手ではない事や、清廉潔白であるのなら包み隠さず打ち明けるだろうと予想しての発言だ。

驚異的という言葉にさえ収まらぬ観察眼。世が世なら、クロノはゲシユタポの執務官にさえなれただろう。尤も、彼のような人間がそのような場所に勤める事はまず無いであろうが。

「君の創る未来が見たい」

それは祝福をもたらす聖者の福音か。
はたまた魂を買い漁る悪魔の誘惑か。

その一言には神託にして背徳の響きを持っていた。

「君は過去に苦しみ、今を生き、再び過去へと向き直った。

君の選択を、ここから選ぶ道程を私に見せて欲しいのですよ」

何を望み、何を為し、何を以てこの結末を心に留めるのか。それこそを見たいのだと中將は静かに語る。

「君の道が、君自身が本当に望む形になって欲しいと心から思っていますよ。」

でなければ　　私は君に失望せざるを得なくなる」

最後まで言葉の意味が判らないと言ったように立ちつくすクロノを一瞥すると、笑みを浮かべながらヴェノム中將は立ち去る。

「君が行く道程と答えの在り処　　私は楽ませて貰いましょう」

その背は何処までも大きく、向かう者に立ち塞がる、難攻不落の城砦を思わせた。

目的を持った者の行動という物は早いものなのだと思崎龍也は思う。アースラの整備のため、現地である海鳴市に駐屯する事になったアースラスタッフは、高町なのはの保護を兼ねて高町家の近所であるマンションに司令部を置く事に決定。

顔合わせの為に司令部　　という名のマンションの一室　　に赴き、なのはと共に表向きは引越しの手伝いという形でやってきた。

「うわ、すごい！　ホントに近所だ！　フェイトちゃん！　ほら、あそこがわたしの家！」

「うん。わたしの家もここから見えるよ」

和気あいあいとベランダから街を眺める二人を微笑ましく見つつ、京谷や龍也は荷物運びを終えるとエイミィから出された紅茶を口にしていた。

「そっちは引越しとかは良いのか？」

「以前から使ってたマンションをそのまま使う形になったからな。部屋の掃除とかは千草さんが好意でやってくれてたし」

「いや、本当にありがとうございます」

深々と頭を下げる京谷と恭介に、淹れ立てのコーヒーを口にしつつ千草は微笑む。

「こつちから買って出たんだもの。気にする必要は無いわ。幸い、物という物も殆ど整頓されてたし」

「その節は……どうも」

が。そんな穏やかな空気とは裏腹に苦い顔をしているのはプレシアだ。どうも鉄槌の様な拳を腹部に叩きこまれたのは彼女にとってモトラウマらしく、千草に対して苦手意識があるらしい。

「いえ、こちらこそ。それより、アルフさんの姿が見えないようだけど」

「ここだよ！ 新形態、小犬フォーム！ どうだい恭介、可愛いだろ？」

「すまん。俺、京谷と違ってロリにはあんまり興味がない」

自信満々に告げるアルフに対して性癖を暴露する恭介。年上好きの彼にとってロリは対象外らしい。

が。その一言にブチ切れたのはアルフではなく、

「ちょっと待てこらア！ 俺がロリコンだと!？」

「京谷……貴方がそういう理由でフェイトに近づいたのなら交際を破棄して貰うしかないんだけど」

非常に白い、というより凍える様な眼で京谷を見据えるプレシア。

心なしか手にしていた鞭が撓っているのが凄く怖い。

「違います！ 俺は断じてそういう目でフェイトを見ていた訳じゃないんです！！」

半泣きになりながら土下座する京谷。如何に実力が上だろつと親に交際を拒否されちゃ堪ったもんじゃねえのである。

しかもロリコン容疑がかかっている事を、このままでは確実にフェイトに告げられる。京谷としては、それだけは何としても避けたかった。

「……まあ良いでしょう。取り敢えず今は信じて上げます。ただし、くれぐれもフェイトに変な気は起こさない様に」

肝に銘じておきます。とフローリングの床に額を擦り付ける。いちやつきたいのは山々だが、それは学校に行くまでの辛抱だと自分に言い聞かせていた。

聖祥小学校への転入はこちらに来てから済ませたばかり。おそらくは後日フェイト共に転入出来る筈だ。

『けど、京谷の実年齢を考えたら確実にロリコンだよな』

『手前……後で覚えてろよ』

そんな恨みがましい会話を念話でしつつ、インターホンの音に一同が振り返る。

「お客さんだよ。なのは、フェイト」

クロノの声にすぐさま返事を返すと、二人は慌しい足取りで玄関へと急いだ。当然、京谷達も後に続く。

「こんにちは」

「きたよー！」

「お久しぶりですな。皆さん」

玄関に立っていたのはさすがとアリサ、そして鯨島であるが、鯨島が纏っていたのはスーツではなく燕尾服だった。

「久しぶり。といっても、ビデオメールでは何度も会ってるよね」

「そうね。わたし達としては彼氏といちゃついているのが大半で砂糖を撒きたかったけど」

アリサの皮肉にフェイトは顔を赤らめ、京谷は苦笑する。が、二人は気付くべきだったのだろう。彼らの後ろに鬼の如き形相で仁王に立っている人物がいた事を。

「京谷……ビデオメールなんて私は訊いてなかったのだけど？」

鞭はこの場で見せるのは流石にまずいと思ったのだろう。だが、他の者には見えない角度で背骨にデバイスを当てているプレシアは見るからに殺る気満々だった。

「いやちょっと待って下さい！ これには海底のクレバス以上に深い事情があるのです！」

「それは是非聞きたいわね？ 私はフェイトに手を繋ぐ以上の事を禁じた筈だけど、何処まで行ったのかしら？」

ゴリゴリとデバイスの角で背を撫でる。声が若干色っぽいのが余計に怖い。この真性DSに今度こそ殺られるのではないかとかという恐怖と電流が背筋を駆け巡った直後、後ろから女王を超える魔王

の音が響いた。

「 プレシアさん。過保護なのも結構ですが、あんまり恋路を邪魔すると馬に蹴られちゃいますよ? 」

つう、とプレシアのこめかみから汗が流れる。この声を知っている。この声の主に味わった腹部の打撃がリフレインする。

「ち、千草さん……」

「お久しぶりね。皆、元気にしてた? 」

思いつきりビビるプレシアの声を無視しつつアリサ達に微笑む千草。プレシアにだけ見える角度で拳を固めているのが一層怖い。

「はい! 変わり栄えなく」

と。そんな裏でのやり取りを一切知る事無く満面の笑みで微笑むすずかに対し、千草は微笑み返すと、そっとプレシアの方に手を置いた。

「それじゃあ若い子は積もる話もあるでしょうし、私達はここで失礼しましょうか? 」

有無を言わず後ろに回ってプレシアの関節を極めると、そのまま表面上は穏やかな笑みを見せて連れ添うようにプレシアと共に玄関を後にした。

“ た、助かった…… ”

内心ハラハラではあっただけに、今回の千草の手助けは正に九死

に一生を得たという所だろう。

「ビデオメールで聞いてたけど……変われば変わるもんね」

「元が優しかったからあんな事になったただけだ。いわばあっちが本当の姿なんだろう。」

……過保護過ぎと言えはそうだけどな」

プレシア・テストロッサは誰よりも優しく、その優しさゆえに壊れてしまっただけ。

壊されたのが死による物なら、生の声に振り替えたのが今の彼女だ。きつと、彼女は二度と壊れない。

失った者は決して戻らなくとも、フェイト・テストロッサという娘が居る限り、彼女は母であり続けてくれるだろう。

「ふうん……まあ、良い傾向なんだし口出しする方が野暮よね。」

それより、これからどうする？」

「こっちは知り合いの引越しの手伝いに来ただけだしなあ……龍也、どっか良い場所あるか？」

「翠屋でお茶でも飲む？ 今ならマクス達も居る筈だけど」

龍也の意見に反対する者は無く、一同は翠屋に向かう。結局その日は、何事もなく一日が終わった。

そうして迎えた週明け。聖祥小学校特有の白い学生服を一分の隙もなく着こなし、フェイトは横に並び立つ少年と共に教室へと入った。

「失礼します、あの、フェイト・テスタロッサと言います。宜しく
願います」

「ぎこちないながらも、きちんと頭を下げる彼女への印象は一目で
真面目だと判る物だ。」

「横の少年はこんな所に来て緊張しないのだろうか、微かに顔を
覗き見るも、少年は背筋をピンと正し、何処に行っても恥ずかしく
ない一礼と共に名乗った。」

「本日より皆様と席を同じくする事になりました、鮫島と申します。
至らぬ所はあると思いますが、どうか宜しくお願い致します」

「恭しい動作と共に、学校指定の制服を礼服か何かの如くに着こん
だ少年……鮫島は、こうして聖祥小学校へと訪れた。」

「……一方。」

「よう。俺は今日ほど自分の不運を呪った事は無いんだが、どう思
う？」

「そいつは同意見だ。まさか顔見知りや顔見知りでも、男と一緒に
なるとは思わなかった」

「不機嫌そうな顔で並び立つ二人の少年は、さっさと終わらせるべ
く自己紹介を始めた。」

「氷上京谷と言います。今日から宜しく願います」

「右に同じく、東 興輝と言います。宜しく願います」

果たしてこれは何の因果か。本日漬けで編入した二人に待ち受けていたのは、意中の女性と切り離されるという結末だった。しかもクラスは一番遠い位置。ここまで来ると虐め以外の何物でもない。

“プレシアの奴……判っててやったな”

“槇野の野郎。やけにニヤついてたのはこういう理由か”

内心両者共にここに居ない者に毒づく。結局昼休みが来るまで適当に質問をやり過ぎつつ、二人は授業を真面目に言う得る振りをしながら念話を交わす。

『それで、急に編入してきた理由は？』

『フェイトがこっちに通う事になったからな。そのついでだ。そっちは？』

『俺は暇潰し兼すずかに会いに来たってところかな。何度か遊ぶ事はあったが、普段だと中々会う機会がない。この半年の間に編入の手続きとかを済ませて、ようやくここまで来たんだよ』

『そうか。まあそれは別に良いんだ。俺が言いたいのは“闇の書”の事でな。良かったら、手伝って欲しいんだが』

『それはどっちの側でだ？』

しばしの沈黙。全ての真実を知っているのなら、八神はやてに付くのが道理。

悲劇を回避したいのならそちらを最優先にすべきだが……。

『俺達の同類が既に向こうに付いてる。フェイトも傷を負った』

『殺される事がないんだから問題ない……って訳にも行かねえか。』

いいぜ、どの道あのうぜえ姉妹やジジイは気に食わねえし、どっち

に付いた所で結果は変わらなさそうだしな。

槇野にはこつちから言つといてやるよ』

助かる、という京谷の言葉と共に念話を切る。京谷は知らない。

このやり取りによって東 興輝の目的が概ね達成されたという事に。

「ふう……やっぱ好きな相手と食事が摂れるってのは良い事だよな」
「聞いてて恥ずかしくなるぐらいのリア充発言をありがとうよ。俺はまだ友達未満だ」

京谷の惚気に毒づきつつ屋上へ向かう興輝であったが、その顔はやはり明るい。何が悲しくて小学校をもう一度やり直しているのか
と言えば、その理由の半分はすずかに会う為だ。断じて自分の学力
が小学生並みだからという理由ではない。

意気揚々と扉を開け、女性陣の輪に加わろうとする二人の目に飛び
込んだできたのは、別世界の風景だった。

「お嬢様。お茶のお代わりは如何でしょう？」

「ありがとう。鮫島」

「わあ！ この料理鮫島さんが作ったんですか！？」

「すごく美味しい」

カフェがあった。もう何て言うか、ここでお茶会が開けるんじゃないかというぐらいのムードが漂うティーセットとテーブルであった。

「おや。京谷様に興輝様。お二人もこちらに？」

事もなげに言う鮫島であったが、学校指定の制服ではなく燕尾服を着こんでいる所からして気合の入りが違う。

「どうやらこの男、今のままでは運転手になれないという理由から執事兼お手伝いを買って出たらしい。」

「あ、ああ……これから食事なんだが、一緒に摂っても？」

「構いませんよ。私も丁度席を外す所でしたので」

「え。鮫島、行っちゃうの？」

「お嬢様と一緒に食事を取る訳にも行きませんので」

「良いわよ。別に」

「しかし、」

「いいから！ 傍にいなさい！」

そんなやり取りを横目にしつつ、京谷と興輝は顔を見合わせる。

「俺達、来ない方が良かったんじゃないか？」

「奇遇だな。俺もそう思った」

「そこ！ あんたらも良いから来なさい！！」

もう何て言うか、命令口調なのにデレとかどんだけだよと思いつつ、取り敢えず席に座る。

しかし鮫島の時と京谷達の時では明らかに口調の棘が違う。デレを見せるのは鮫島やなのは達だけで、その他の男勢にはツンで通すらしい。

「しかし、フェイトもすぐに打ち解けたみたいで良かったよ。正直、不安だった」

「わたしも京谷くらい堂々と出来れば良いんだけど」

「そう言えば、鮫島さんはどうして此処に？」

「旦那様よりアリサお嬢様のお世話を任せられて。年甲斐もなくこんな場所に来てしまいました」

そうは言いつつも鮫島の見た目はアリサ達と何ら変わりない。

服装さえ無ければ、むしろ自然と喋っていい程に学校の空気になじんでいた。

「興輝君は、どうして？」

「すずかに会いに来た」

横にいた京谷が思い切り噎せた。幾らなんでも直球すぎである。

「え、え？」

「以前学校でなら話が出来るって言ってたろ。別段小学校なんかもう来る必要は無いと思ってただけだな。暇だったから書類とか色々やって、編入試験受けて入ったんだよ」

暇だった、などという理由で済む筈もないのだが、どうやら話を聞く限りこの半年間他にする事が見当たらなかったらしい。

「その、ごめんなさい。無責任な事言っちゃって」

「好きで来たんだ。気にしなくて良い」

他にも理由があったが、そちらが達成されている以上、あとは本当に好きにするつもりだった。

興輝自身、これから忙しくなる為に会えなくなって行く事だろうが、それでもこの学校に居る間は日常を楽しむ事が出来る。

「それに、いい加減知り合いでいるより友達位にはなりたい」

「私は……友達だと思ってたよ？」

興輝からしてみれば何気なく呟いた言葉ではあったが、すずかには重く取られてしまったらしい。

そうだった。この少女はここに居る者たちの中でも特に穏やかで優しいのだと、それが判っていた筈なのに。どうしてそんな風に思っていたのか？

一体何時、友達ではないなどと思ってしまったのか。ただ出逢って、助けて、話をした程度の縁。けれど、この少女にとってそれは確かな想い出の一幕なのだという事にどうして気付けなかったのか。

「そっか。ごめん……それと、ありがとな」

不器用な謝罪。けれど、それでもこの少女は笑ってくれた。

それが嬉しく、そしてこの一時は楽しかった。非日常への憧れ、特別でありたいと願う事と同じほど……否。それ以上に、他者との会話には何処か弾む物がある。

それはきつと……遠い日の自分を思い出したくないからなのだろう。こうして心を赦せる人との会話が出来るといふ幸福を噛み締めながら、東 興輝は食事を摂る。

願わくば、これから先もこの幸福が壊れない事を祈りながら。それがあつた種の逃避だと知りながら、彼は日常を謳歌して行くのだつた。

011 活動方針 Side - A (後書き)

c・m・「無印サイド組、方針決定。第11話投稿完了です」

興輝「……ねえ、俺の出番あったよね？　なんでまたここ？」

c・m・「今回限りかと思ったら今回も有りましたよSide進行。きつとこれからも続くんじゃないかなろうか」

ま、それは良いとして、今回君がこちらに来たのは出番が少なめだったからおまけよ。取っときなさい」

興輝「……いらねえ。つか、今回言わせてくれ！　なんでヴェノムやバトオ描いてんだよ！？」

今回は俺だけじゃなくて他の方だって思ってたぞ！！」

桜「お願い！　是非私も描いて！！」

c・m・「あ。そういえば桜ちゃんも今日は出番なかったんだっけ」

興輝「出番が無いついでに抗議役としても来て貰った。条件は満たしている筈だ！

つか主人公がハブられるってどんだけだよ！！」

c・m・「そうねえ……あ。そう言えばさっき貴方達にメッセージが届いてたわよ？」

興輝「ファンレターか！？　見せてくれ！！」

桜「つい最近までA'sで空気だったアンタ宛てな訳ないでしょう

が！ 退きなさい！！」

c・m・「はいはい喧嘩しない。それじゃ、公開つと」

> i 1 9 6 1 9 — 2 4 3 5 <

桜&興輝「ブチィ……………！！」

c・m・「ああ……………二人の血管がリアルボルケイノ……………」

興輝「ふっざけんじゃねえぞゴルァ！！！！　つか嘗めとんのか！
！　列車砲ぶっ放すぞ！！！！」

桜「ていうか、あんな汗臭い男共より私の方が描きやすいわよ！！
そしてむかつく！！　無印に出演出来なかった事をこれ以上悔
んだ事はねえ！！」

興輝「おい直也、御剣、お前らもなんか言っつてやれ！！」

直也&御剣「……………」

興輝「……………おい。何でそんな俺達関係ないし、みたいな顔してんだ
？」

御剣「いや、私は元々原作でイラストは出来上がっていてね。それ
にこの物語の次の回に行くまでにc・m・氏が描き上げてくれるそ
うだ」

桜「ガツテム！！　裏切り者がここに居た！？」

桜「ふふふ……次は私かしら？ さて、ここからはHagallaz
さまへ、ちよつとした質問のお返しを」

c・m・「宝具が重複したりすると、世界の修正力は働きますか？
という事ですが、これはNoです。

理由としては、もしそれが起こるなら士郎君の『投影』なん
かは絶対に使えない筈ですので」

桜「それでは皆様、また次回お会いしましょう、さようなら！」

興輝「俺……扱い酷くね？」

京谷達との最悪と呼べる形での邂逅と衝突を終え、一先ずは八神家へと戻ってはやてを寝付かせた後、桜や守護騎士といった面々はリビングで各々がテーブルを囲んでいた。

「それで。一体全体どういうこと？」

「すまない……ヴィータが迷惑をかけた……」

桜の問いに守護騎士一同を代弁するようにシグナムは俯く。

「あ。いやヴィータちゃんを責めてる訳じゃないのよ」

「そうだけいシグナム。むしろヴィータは完全に被害者だ。」

感じ入るモノがあるとすれば、そうなるよう仕向けた相手とヴィータを傷付けた連中ぐらいじゃん」

そうだろ？ と祐治が御剣達に促す。彼らに關してもその意見は同様であつたらしく、このままでは終わらせられないという思いがひしひしと伝わっていた。

「ともあれ、こちらは未だ情報を掴み切れていない。例の男……槇野といったか。

彼が招待する先に出向くという形を取りたいが、異論は？」

ある筈が無い。各々が御剣の提案に賛同する形で拳手し、この場は一先ず解散となった。

「そう言えば、直也は？」

「先程ヴィータを診に二階に上がって行ったが」

「さもありなん、この一件で誰よりも怒りを抱いている人間を挙げるとするならば、間違いなく直也であり、その動機も明白だ。」

「しつつかし、あの男はどうしてヴィータちゃんにあそこまで構うのかねえ？」

「手にかかる子ほど可愛い物だと以前言っていたな。恋愛感情の類ではまずあるまいよ」

御剣の言に桜は納得とばかりに肩を竦める。とどのつまり、あの男は愛は愛でも親愛で動く人間なのだと実感した。

一階と比べて手入れに行き届いていない　というより、御剣達が来る前は放置に近かった　二階の一室で、直也は椅子に腰かけていた。

そして、一言二言ばかりの話を終わると、空になったマグカップを手に直也は足早に部屋を出る。

後には、どこか釈然としないままの赤毛の少女が残された。

海鳴市市街地。巨大なデパートやオフィスビルが立ち並ぶこの場

所に、御剣達は来ていた。

以前槇野に貰った紙を頼りにここまで来たものの、着いた場所は地下駐車場。何度確認しようとも場所はそこを示しており、最早疑いの余地は無い。

一体何故？ どうしてこんな場所を書き留めたのかという疑問を各々が思案するより早く、意中の人物は現れた。

「ようこそ皆さん。ここからは私が案内します」

こつこつと、地下に靴音を反響させながら訪れた槇野に一同が訝しむよりも先に、突如として現れた空間の切れ目に引き摺りこまれた。

「さて、出来れば説明をして貰いたいな」

「流石に監視の目があるとやりにくい物ですね。このような形を取ったことは大変申し訳なかったと思っています。」

さて。ようこそ皆様。私達の拠点にして牙城、紅魔館へ」

御剣を宥めつつ、恭しい動作で一礼する槇野。その手の示す先にある門前に、一同は目を丸くした。

桜辺りは紅魔館という名前に期待し、実際の紅魔館とは違う事に内心落胆していたものの、月村邸にさえ匹敵する敷地の規模等を考えれば充分過ぎる程の豪邸と言えよう。

「何で紅魔館なの？」

「屋根が紅いという理由で。本来ならば海鳴市に建てられる筈だっ

たのですが、まあ設定が強引でしたからね。離れ小島に丸ごと持って来られた、という訳です」

桜の問いに嬉しそうに返す槇野。ネーミングセンスはともかくとして、この邸は確かに一目置かれる物がある。

「確かに見事な邸だ。時間があれば案内をして貰いたいな」

「構いませんよ。ここまでの規模で客人が居なくては宝の持ち腐れという物ですから」

槇野曰く、一階から二階が玄関ホール、リビング、食堂、厨房、食料庫、トイレ、浴場。

興輝や槇野達の部屋や図書館と言った生活居住区。

三階が第二図書館やハーブや食料をメインとした第一温室庭園にパーティー用の屋上、プール。

そして、ここからが重要なのだが。

「地下一階が演習場になっておりまして、シャワールームも完備。さらに戦艦用ドック、MSドック、武器庫、射撃訓練場に作戦司令室、格納庫が。地下二階には危険物資保管庫、研究室、実験室が御座います」

「……戦争でも始める気かね？ それと、見た所中庭があるようだが？」

「中庭は鑑賞を目的とした第二温室庭園と戦艦出撃口、MS出撃口、野外演習・射撃訓練場となっています」

最早馬鹿げているとしか言いようがない。現実であれば国際条約を悉く無視する施設だ。

政府辺りにでも露見したら国際テロリストの温床と見なされても

文句は言えない設備である。

「……ここが発見される可能性は？」

「有り得ません。私自身、離島にこんな施設があるなどとは手帳を見るまで想像していませんでしたから」

登録どころか地図にさえない離島の邸。電子系の妨害か魔術的な要素かは判らないが、明確に邸の存在を知る者以外は無意識に避けてしまうというその特性。

「それに、仮にここが発見されたからどうだというのです？」

「ここは……それ程甘い場所ではありませんよ」

オートマシナリーデバイス……通称AMD。

『自立的に行動し、尚且つ侵入者を撤退させるシステムを作る』というコンセプトのもとに設計された迎撃システム。

自立行動のシステムには、トラスやビルゴなどに用いられた『モビルドールシステム』……通称MDを用いる事にした。

目標さえ決めてしまえば後は勝手に攻撃するというのがMDなのだが、それを逆手に取り、目標を攻撃しないようにし、目標以外を攻撃するというシステムに作り変えた。

登録したもの以外に対し攻撃を行い、撃退する特性。中枢は紅魔館の地下基地にあり、そこで各機の情報が収集されている。

成程、隠れ家にして拠点。そして向かう者を落とす牙城とするにはこれ以上ない代物である。
だが。

「私達は大丈夫だと？」

「流石に戦争をしている訳ではありませんのでね。客人が来ると判っていて、むざむざスイッチを入れたままにする馬鹿は居ないでし

よう」

確かにその通りである。もしそんな事をしでかすとしたら余程の馬鹿か、間の悪い奴だけである。

尤も。

「以前興輝君がかかったようですがね。まったく、あのときは大笑いさせて頂きましたよ」

「……ほう。人が居ない時にそういう事を抜かすのか、お前は」

噂をすれば、という奴だろう。眉間にしわを寄せながらやってきた興輝に対し、微かに肩を竦めるだけで槇野はやり過ぎた。

「紹介の手間が省けて何よりです。彼が、」

「東 興輝だ。直也は以前会ってるから良いが、自己紹介なら後にしてくれ。まだ三人程会ってない奴が居るんでな」

言つや否や、邸へと踵を返す興輝の後ろへと付いて行く一同。豪華な絨毯とソファのリビングに興輝が腰かけると、一同も促されるままに腰かけた。

「それで、彼女達の説明もして貰えるのかね？」

御剣の視線の先、丁度興輝の両脇に侍る形となっている二人の少女に一同が意識を向けた。

「その為に連れてきたからな。こいつらはユニゾンデバイス……って言えば判るか？」

『ユニゾンデバイス』。ベルカによって開発されたデバイスであり、

ミッドチルダ式のインテリジェントデバイスを極端化したもの。

姿と意志を与えられたデバイスが状況に合わせ、術者と『融合』し、魔力の管制・補助を行うこの形式では、他の形式のデバイスを遥かに凌駕する感応速度や魔力量を得ることができる。

しかし、融合適性を持つ者の少なさや術者に合わせた微調整・適合検査の手間、そして何よりデバイスが術者に乗っ取り、自律行動を始めてしまう『融合事故』の危険性・事故例により、製品化に至らなかったという負の側面を持つ。

それについて応えようと、興輝はその通りだと首肯する。

「私はユファイ！ 興輝のユニゾンデバイスでケンプファーになれます」

快活な声で語る青い軍服をやや着崩した感じで纏う、青い髪と瞳の少女。そして、

「私はティファ。興輝のユニゾンデバイスでガンダム・レオパルドになれます」

正確にはなれる、ではなく人間形態になっているだけですが、と緑の軍服を一分の隙もなく纏った緑髪と瞳を持つ少女、ティファは恭しく客人である御剣達に一礼する。

「ご丁寧にも。直也の反応を見るに、君達と直接顔を合わせたのは今回が初めてなのか？」

「ああ。俺や槇野でさえこいつらと初めて会ったのはここに来てからだからな」

どうも話を聞く限り、興輝達が訪れるまで邸の維持管理を行っていたらしく、最初の頃は彼女達に案内されながら慣れない生活を送

つていたらしい。

「ふむ……君達に関しては判ったが、三人なのだろう？ あと一人というのは何処に居るのかね？」

「こちらに」

唐突にリビングに響く声に一同が振り返る。黒い髪と瞳を持った少女は、何時からそこに居たのか、優雅な足取りで歩を進める。

凜とした動作や物腰には目を見張る物があるが、その視線は何処か鷹の様な鋭さを醸している。

侍のようだ、と。桜辺りならそう表現しそうなものであった。

「来栖のユニゾンデバイスを務めさせてもらっているノワールだ。

安直だが、私もその二人と同様MSになる……正確には戻る事が可能でな。ストライクノワールという」

「はいはい！ 質問があるんですけど！」

先程までおとなしかった桜が拳手すると、ノワールはどうぞ、と促す。

「ノワールちゃん達ってMSになるんだよね？ サイズとかどうなの？ やっぱ実物大？」

「いえ。私達はあくまでもユニゾンデバイスですので、使用者の体格に合わせたサイズになります」

「そりゃそっか。武装は？ やっぱユニゾンしてないと使えない？」

「そちらに関しては問題ありません。主からの魔力供給さえ有れば万全の状態で戦えます」

つまり、デバイスとして扱うより使い魔のように行動させた方が合理的、という事だ。

本人達もその事を理解しているらしく、演算能力を活かしてもっぱらサポートに回るつもりらしい。

「さて、これで三人か。自己紹介をしても」

「ええ。お願いします」

御剣の言葉に槇野が頷くと各自自己紹介を終え、取り敢えず紅茶を口にしながら今後の対策を話し合う。

「大方の予想は付いていると思うが……今後我々は管理局から敵勢力としてみなされる事になる」

「当然ですね。濡れ衣を着せられたとはいえ、今回の件に関しては向こうも全て熟知している訳ではないでしょう。

貴方を監視していた第三者が行動を起こしたことそのものが、我々を除く全ての者に事実を事実として残す事無く闇の中に消えてしまったのですから」

槇野の言は正しい。今回の件に関して、管理局は自らを被害者だと信じて疑わないだろうし、それこそが狙いだというならまんまと御剣達は策に嵌まった事になる。尤も。

「後悔はしていない。無論反省もな。我々が駆け付けねば、ヴィーダは連中の手に落ちていた」

今回の件で良い所探しをするなら詰まる所それ位のものだろう。魔法生物のリンカーコア蒐集を露見しないよう慎重に進めていたというのに、ここに来てまさかの問題に直面した。

次からの蒐集は困難なものになるだろうし、当然ペースも落とさざるを得ない。

「ヴィータさんの件に関しては確かにあの時の行動がベストと言わずともベターであったことは事実です。が、蒐集の方はどうなのです？」

「魔導師とこちら側の人間が一人。合わせて四十頁だ。四百に届いたよ」

裏を返せば、後二百頁以上残っているという事である。本来ならばクリスマスに間に合う様な物ではないが……。

「では私のリンカーコアから魔力を抜けばいいでしょう。興輝君、君は」

「協力するに決まってるんだろ？ 別に減るもんじゃねえしな。ああ、けど全部は持つていくなよ。ユファイ達の魔力も必要なんだ」

助かる、と御剣が告げると、横に居たシャマルが右腕を興輝の胸におく。ずぶずぶと埋もれる感覚はやはり心地の良い物ではないらしく、吐き気を催す様な顔つきになっていた。

「……きついな。早くしてくれ」

確かにこれの不快感は相当なものである事は、経験こそしていないものの幾人の反応を見ても明らかだ。

すぐに終わりますよ、と安心させる様な声と共に、シャマルは的確に二人分の魔力の回収を終えた。

「一人四十頁、……これで計四八六頁の蒐集が完了しましたね」

「残るは僅か……か。ま、連中に宣戦布告したんだし、残りは連中の魔力で代用させて貰うかじゃー」

おどけた口調の中に獰猛な笑みを覗かせつつ語る祐治に、桜はそ

うね、と同意する。

「次は雑魚が出ない事を祈るわ。流石に退屈だったし……。」

あ。女の子と対決するのは他やってくれる？ 私は女の子傷つけたくないし」

「シグナム達のサポートをして下さい。向こうは人数が多かったので」

シャマルの要望に、桜は二つ返事で引き受ける。

「私はプレシア・テストロツサの横に居た男の相手をさせて貰おう。奴は宝貝を用いていたからな。並の奴らでは相手になるまい。直也は、」

「マクス＝トレンジア……彼を殺します」

倒すでも勝つでもなく、殺す。おそらく本気でそう言っているのだろう。仮面の様に感情の無い顔から漏れる言葉は、背筋に冷たい汗を伝わせるものがあった。

「……穏やかじゃないにやー。桜、マクスとか言う奴の相手はお前が、」

「譲る気は無い。手を出すなら、」

「どつするのかしら？」

かちやりと、直也の頸筋に白亜が添えられる。非殺傷設定である為に殺される事は無い。

言つなれば問答無用で動きを止める、という事だろう。

「まあ待て。直也、君の怒りは尤もだが、だからと言って人死を出すのは感心しない。」

敵とはいえ、第三者が発見できればある程度の問題は解決できる」

或いはそれこそが御剣の狙いだろう。管理局が被害者という事で正統性を持たせるなら、自分達も第三者という黒幕を体よく利用する事で、罪の軽減を計る事が出来るのだから。

「自分は関わるな、と?」

「自己を抑えきれぬなら心配は無いがね。君は見かけによらず直情的な一面がある。

とはいえ……限られた戦力を減らすのは惜しい」

よってだ、と御剣はひらひらと古びた羊皮紙を見せつけた。

「これに署名をして貰おう。これに書かれた事は、たとえ君がどのような手段を用いたしても違約する事は出来ん。

試すようで悪いが、こうでもしなくては收拾がつかないのでね」

『セルフギアス・スクロール
自己強制証文』。

権謀術数入り乱れる魔術師の社会において、決して違約しようのない取り決めを結ぶときのみ用いられる、最も容赦ない呪術契約の一つにして原理上いかなる手段を用いても解除不可能な効力を持つ契約。

たとえ死亡しても署名した限り死後の魂すらも束縛されるといって、決して後戻りのきかない危険な術。

そのため、この証文を差し出した上での交渉は魔術師にとって最大限の譲歩を意味する。

書式は束縛術式であること、対象に戒律をかける旨、誓約の内容、戒律の発動条件を記し、宣誓者本人の血で署名をするというもの。

本来であれば一般的な文字で書かれておらず、余人には何ら意図の汲めない図版と記号の羅列に見える筈のだが、公平性と承認の

必要性も兼ねてこの場に居る全員に意味の伝わるように書かれていた。

『束縛術式：対象　　北澤直也』

北澤直也の魂が命ず：下記条件の成就を前提とし：誓約は戒律となりて例外なく対象を縛るもの也：

：誓約：

北澤直也に対し敵対せし組織ならび個人の殺傷：仲間への傷害・殺傷を「闇の書」の主、八神はやての束縛の解放まで禁則とする

なお、後者に関しては「闇の書」の解決後も継続とする』

成程。この書面に目を通す限り、何ら不備は無く、簡潔であるが故に解釈の差異によって抜け道を作ることとは不可能だ。

厳しいようではあるが、当然と言えば当然の措置だ。以前より北澤直也はシグナムより猜疑の念を向けられていたし、先程の過激な言動から野放しにして良い人間でない事は判っている。

飼犬は鎖に繋いでおく。それが最も的確かつ安全な措置である。

「何か質問はあるかね？」

「この書面を見る限り、自分は如何なる場合においても仲間への傷害を禁じる、という事ですが、万一仲間が敵に洗脳された場合、反撃する手段が無くなってしまいます。」

文面に『仲間への傷害・殺傷といった攻撃行為に晒された場合は例外とする』と添えて頂けますか？」

「直也じゃあるまいし、敵の手に落ちちゃう弱い奴なんている訳ないじゃん」

「……訂正を。文面に桜さんには攻撃を認めるよう書き添えして頂きたく、」

「喧嘩売ってんのかコラア……………！！！」

そんな寸劇に溜め息をつきつつも、御剣は良いだろう、と文に訂正を入れる。

「これで良いかね？」

「はい。問題ありません」

羊皮紙の傍らに置かれたアゾット剣で指を浅く切り、零れた血を羽ペンを用いてさらさらと署名する。

「契約は完了した。とはいえ、そう悲嘆したもので無い。

これで君はどのような攻撃を行おうと、敵に対しては非殺傷の攻撃となるのだからね」

そう。殺せぬとはそういう事だ。敵を斬りつけようと銃で撃とうと、北澤直也が手を下した相手は決して死なず、後遺症を残すこともない。

攻撃した本人にペナルティを加えるのではなく、攻撃そのものを非殺傷まで落とす。それが今回の契約において最大の効果であり、メリットである。

尤も、仲間への攻撃に関しては、強制的に動きを止めるという束縛があるが。

「さて、貴方は管理局の相手をして頂くとして……興輝君。君は聖祥小学校に編入して頂きます」

「スパイか。いいぜ、ついでにお前も協力してくれるって事にしてやるよ」

獅子心中の虫はこのことか。未だ公に敵として出回っていない以上、二人のスパイ活動は大いに賛同する所である。

「さて、今後の方針も纏まった事だし、お暇させて貰おうか」
「何時でも来て下さい。ここは拠点として最適ですから」

空き部屋もたくさんありますしね、とにこやかな笑みを浮かべる
槇野に、御剣達は軽く手を振って、『スキマ』を潜った。

「あ。申し訳ありません、槇野さんに渡さなくてはならない物があつたのを忘れていました」
「何かね？」

唐突に。それこそいざ帰ろうとした時に立ち止まる直也に御剣が
問うと、これです、と懐から一艇の拳銃を取り出す。

「ワルサーP38！？ 何でそんな物騒なもんを！？」
「以前管理局の事件に関わった際に借りたままでして」

祐治の驚きも尤もであるが、流石に銃は拙いと思つたのだろう。
駐車場に戻る直也を誰も気に留める事は無く、すぐに追いつくだろ
うと一同は踵を返した。

012 活動方針 Side - B (後書き)

c・m・「味方だと思ったら興輝君はスパイだったで御座る。第1話投稿完了」

マクス「……今回は俺か。懐かしいぜ、この空気の空気」

c・m・「ややこしい言い回しね。ま。今回はSide形式ではなく普通に進めるから出番もあるわよ。多分」

マクス「……そうか。つか、言わせてくれ。なんで御剣なんだよ、次は俺か桜じゃなかったのか!？」

c・m・「はあ? 何言ってるのこの甘党ニートが。パフェで顔を洗って出直してきなさい。」

御剣さんの後に、貴方が桜ちゃんを描くって言ったでしょうが

マクス「……そうかよ。つつか、今回何時もより少なくねえか?」

c・m・「活動方針って言っても、あんまり話す事は無かったからね。次に期待という事をお願い」

さて、そろそろ読者様のお礼に移りましょうか。

久住祐治さま、Hagailazさま、水玉さま、神崎はやて様、RYUZENさま。ご感想を頂き、ありがとうございます。

ていうか、どうしよう!? とんでもない大御所からお便り来ちゃったんですけど!？」

マクス「週間アクセス3万越え、お気に入り登録数約3千………
にじファンを代表する大物作家だな」

c・m・「やばい！ やばいっす！ テンションが上がりがりまくりで
す！ こんな駄作者の作品を読んでくれて、しかも感想までくれた
ことに感激です！」

マクス「嬉しいのは判るが、落ちつけ」

c・m・「そうね………それでは皆様、また次回お会いしましょう、
さようなら！」

「あんまり成果は出てないかな……けど、この春から随分笑うようになったわね。それに、足の麻痺も進んでないみたい。もう少しこの治療を続けてみましょうか」

「はい、お任せします」

「宜しく願います。石井先生」

海鳴大学病院の一室にて。八神はやての定期健診に付き添う形で御剣 仁はここに足を運んでいた。

最初の頃は訝しげに見られていたものの、北澤直也が入院をした際に見舞いに来るなど、何かと顔を出す事が多かったため、今ではすっかり常連の様な扱いを受けていた。

「パッチ・アダムスじゃないけど、御剣さん達はやてちゃんと過ごし始めてから、本当に快活になったわ。はやてちゃん、日常生活はどうです？」

「足の麻痺以外は健康そのものです」

「そうなんですよね……お辛いとは思いますが、私達も全力で取り組んでいます。今はなるべく、麻痺の進行を緩和させる方向で進めています。」

「とはいえ、以前と比べれば麻痺の進行は格段に遅くなっていますから、入院の必要はないでしょう」

精神面を良好な状態にすれば治癒力が上がり、投薬の量も少なくなるのは医学的な面からしても有効とされる。

実際の所、八神はやての麻痺は闇の書による副作用の為、定期的な魔力補充さえ行えば麻痺が進行する事はないのだが、常識的な点から考えれば精神状態が麻痺を抑えていると判断するのが当然であ

り、主治医である石井医師がそう判断したのも無理からぬことである。

「先生、はやてのことを、宜しく願います」

「こちらこそ」

だが、その取り組みが無駄であると知りながらも、御剣は誠実な言葉と共に頭を下げた。

医学で解決できない事は判っている。けれど、それでも八神はやての事を想い、この病を癒そうと取り組む姿勢は本物だ。

まして、親族でないにも拘らず唐突に現れた御剣を未だに信用してくれている点も考えれば、それだけでも頭が上がらないというものだろう。

お礼と共に退室し、はやての車椅子を押しながら病院を後にした。

「なあ、御剣さん。わたしが歩けるようになっても……皆、居てくれるかな？」

突然何を、とは言えない。それははやてからしてみれば当然の不安だろう。

皆が揃って、楽しんで。けれどその幸せは、果たしていつまで続くのか。

一年？ 一ヶ月？ それとも、この足の麻痺が治るまで？

漠然としたまま過ごす日々の中で、少しでも不安を遠ざけようと明るく振る舞うには、黄金の日々は長過ぎた。

全てが終わってしまった時。それはこの美しい日々の終焉となってしまうのではないかという恐怖からの言葉に、御剣は静かに応える。

「誰も居なくなったりはしない。はやての麻痺が治ること、この

日々は終わりはしない」

むしろ、そこから本当の日々が始まる。同じように歩き、同じように走り、同じような距離で日々を過ごす。

今ある物以上の幸福。それは決して贅沢な物ではなく、誰もが得て当然の権利のだと、そう御剣は語りかける。

「ほんまに？」

「無論だ。誰も失わない。何も無くならない。犠牲のない道など無いと人は言うがね。これは決して過ぎた望みではない。

君がこれまで手にする事の出来なかつた以上のモノと、これまで手にしてきたモノを失わせる様な事はしない」

確かな笑みは自信の証からか。その言葉に揺るぎはなく、何処までも真摯な物だった。

「ありがとう」

だからこそ、この少女もはつきりと笑顔を向けられるのだろう。まるでおとぎ話の中にしか登場しない騎士。決して自分を裏切らないであろう存在に。

そこは何処でも無い空間。ここは現実にはありえず、しかし確かな現実としてあるモノ。

この場所を敢えて例えるとすれば、それは

「貴方は？」

「失礼。私は槇野来栖と申します。突然の来訪をお許し下さい、お嬢さんロイライン」

「ここには誰も来られない筈。ここは」

「闇の書の中。貴女の内に潜り込んでしまった非礼を詫びねばならないのは当然ですが、それでも私は一目貴女に出会いたかった」

何故と。それを訊くより先にこの場に佇む女性は片腕を上げた。

「ここは主でない者の来るべき場所ではない。貴方がどのような存在であれ、ここに居続けるのならば貴方は敵でしか無い」

「……ならば。その力が向けられる前に、一つだけ答えて欲しい。

貴女は、何を成したい？ 貴女の望む事を教えて欲しい。

もしそれを応えてくれるなら」

私はそれを叶えようと。まるでおとぎ話のランプの精か何かのように、彼は言葉を紡いだ。

「私の……望みは」

言葉が形を成すより早く、充溢した魔力が空間を呑み込む。視界が白く染まる中、彼は静かに頷いた。

良いのか？ この道を進んで？

構わない。これが最良の選択だ。

君こそいいのか？ 穢れを引き受けるのは一人で足りるぞ？

ヒーロー気取りの連中と一緒にすんな。俺は止まる気はねえよ

ならば、ここに誓い合いますか？

誓おう。この手で幕を下ろすと。

誓うぜ。決して立ち止まらねえ事を

誓いましょう。必ず救って見せると

「プロージュイット」
「プロージュイット」
「乾杯」
「」

「どうだった？」

「完治！」

時空管理局本局内の医務室から出てきたのはは龍也達に対してガッツポーズを取ると、一同は胸を撫で下ろした。

「それで、レイジングハートとバルディッシュは？」

「今エイミーさんがメンテの作業をしてくれるから、もうちょっとかかると思う」

それじゃあ、一緒に取りに行こう。というフェイトの提案に、なのはは賛成！ と手を上げる。

それは新たな戦いの幕開け。
未だ力なき少女達が手にするのは新たな力か。それとも

「それで、レイジングハートとバルディッシュの調子は？」
「それが、エラーコードが消えなくて……」

どれどれ、とエイミィは画面に表示された項目に目を通す。

『エラーコードE203必要な部品が不足しています。
エラー解決のための部品、“CVK-792”を含むシステム
を組み込んで下さい』

「CVK-792……ベルカ式、カートリッジシステム」

正気ではない。元よりあれは扱いが難しく、ミッド式のインター
ジェントデバイスに組み込むには問題の多い部品なのだ。

だが、レイジングハートもバルディッシュもアクセスを受け付け
ようとはしない。

全ての項目をチェックし終えた後、新たな文字が画面へと浮かび
上がった。

『お願いします』と。

切実なその訴えにエイミィは腕を組み、そして頷いた。

そして。再戦の時は以外にも早く、否、早すぎたというべきだろう。

搜索対象となっっている相手の内、二名を円形に取り囲む形で待機する武装局員。彼らは決して近寄る事無く、あくまで結界の維持と強化に努めるつもりらしい。

そして、その渦中にある霧河・A・桜と久住祐治の二人はこの場を取り囲む彼らに対し、ため息交じりの悪態をついた。

「まったく……こんな下っ端だけなんて言められたもんよね。」

祐治、アンタ何秒でケリつけられる？」

「二秒つてとこかにゃー」

返す祐治の言葉に対し、桜は不敵な笑みを背中合わせの相棒に向けた。

「ふうん……なら、私と合わせれば一秒かしら？」

「なんだ。桜も戦うのか」

そうして二人はデバイスを構える。白と黒。相反する二色の剣をその手に掲げて。

「ゼロ秒で終わらせる」

剣を振り抜くと同時に巻き起こる衝撃破。それはさながら竜巻か何かのように空中に巻き起こり、自分達を取り囲んでいた武装局員を一人余さず吹き飛ばす。

「雑魚ね」

「雑魚だにゃ」

ため息交じりに二人は同じように剣を担ぐ。正直意味が判らない。自分達を止めるのに人海戦術を用いるなど、愚策以外の何物でもない。

それが通用するのは数で押せば何とかなる程に実力に開きが無い場合であつて、純然たる実力差をもつこの二人を前に、有象無象など徒勞でしか無い。

だが

「ッ……！！ 桜、逃げる！！」

言葉と共に祐治は未だに体勢の取れない桜を蹴り飛ばす。

彼らの頭上。既に夜闇に包まれ、星々の煌めく空は赤く染まり、業火の炎が地上を貫く槍となつて彼らを貫いた。

『エンシエントノヴァ』。古代より伝わりし浄化の炎は、今まさに硬直していた祐治へと直撃した。

「祐治！？」

安否を確かめるべく声を上げる桜であつたが、彼女も爆風で遙か遠方へと飛ばされている。ここから確かめるには、余りにも時間がかかり過ぎ、それを赦してくれる程、敵は甘くはない。

「前はやつてくれたね……と言っても、あれは授業料として受け取っておくよ。」

油断は死を招く。貴女にはとことん教えられた」

ばさりと、マントを揺らしながら神崎龍也は桜の元へと訪れた。その右手には獅王雷牙を。左手は既に術を構築済みなのか、淡く輝いたままである。

「退きなさい……雑魚の相手をしてる暇なんかないのよ」

「成程。貴女に取って、僕は通過点でしかない訳か」

それは前回の焼き増し。お互いの立場が完全に逆転したという点を除けば、正しく過去の再来だろう。

「粹がるのも大概にしなさい。ガキは帰っておねむの時間よ」

「そうか」

瞬間、天空より光の洗礼を受けた、七色に輝く聖なる剣が降り注ぐ。ここに来て遊びは一切ないのだろう。

既に手を抜いて良い相手ではないと判っている以上、全力を以て相手をする所存らしい。

「プリズムフラッシュャ!？」

驚愕に声を上げるも、立ち止まる暇はない。これが晶術である以上その特性は理解している。

この技は確かに厄介ではあるが、素早く前進すれば避けられない事はない。だが、それを読んでいたのは龍也もまた然り。

対策が取れているからこそ、敢えて次の手への布石が用意できる。

「ザケルガ!!」

「!?!」

前に出た瞬間を狙って正面より迫りくる雷撃の槍。それを身を捻

る事で躲しつつ、刀を振りかぶる。

この一撃で決める。白く輝く刀身より放たれる『光牙』の一撃は、何人を以てしても受け止められまいと、そう考えるに足る一撃であり

「甘い！」

その一撃が受け止められた事にこそ、桜は真に驚愕する。

紅い、竜の頭部を模したような小型の楯。そこから発生された竜巻が、彼女の剣を受け止めていた。

「『GUARD VENT』ようやくこのカードを使う事が出来た」

「……ライダーにテイルズにガツシユ。欲張りすぎじゃない？」

「貴女の相手をするには、まだ少な過ぎるくらいだよ……！」

語尾を跳ねあげると共に刀を弾くと、ガラ空きになった胴へと横薙ぎに獅王雷牙を奔らせる。

が、この程度でやられる程桜は抜けている訳ではない。間一髪のところ、獅王雷牙を受け止めると、そのまま罅迫り合いへと持ち込む事はせず、龍也を蹴り飛ばして距離を取る。

「やるじゃない……けど、アンタなんかには負けられない。可愛い女の子を傷付けた責任はきっちり取って貰うわよ？」

「それは……こっちの台詞だ　　……！」

互いの刀が吼え、暴威の嵐が空間を埋める。戦いの趨勢は未だ掴めず。決着は未だ遠い。

冷たい筈の夜風が、今や熱風もかくやという熱さを帯びる。それは風に当たる者が昂揚しているというだけでなく、現実的な熱を帯びているからだろう。

遙か遠方。少年と女性が刃を交わす度、暴威の夜風は耳朵を打ち、髪を掬う。

そんな中であって、二人の少女は手の内にあるデバイスを掲げ持つ。

「レイジングハート」

「バルディッシュュ！」

今回はただ倒れただけだった。何も出来ず、何も成しえなかった。だが今は違う。今度こそ戦うと。今度こそは一矢報いるのだと、二人の少女はその誓いと共に祝詞を紡ぐ。

「セツト」

「そこまでだ」

「な、きゃあ!?!」

「あつっ!?!」

その言葉が終わるより早く、二人の少女は横合いから弾き飛ばされた。

「戦地に来てから装備を整える………実に間の抜けた行動だ」

フェイトとなのは。二人を突き飛ばしたコートの男はその右手で待機状態の二つのデバイスを弄りながら嘲笑を込めた言葉を吐きだす。

「返して……」

「返して、下さい……!!」

「大事なものののか？」

哀訴共に立ち上がる二人の少女に、コートの男は間髪入れずに問う。

「はい……大事な、大事な友達なんです。だから！」

先程までの闘志はなく、今はただ目の前に起こっている事態を解決しようと、大切なパートナーを取り戻そうと、なのははただ頼み込む。

その言葉に何処か感じ入るモノがあったのか。男は静かにそうかと呟く。

その穏やかな口調。何処か親しみの籠った声の温度に、二人は返してくれるのではという期待を込めた瞳を向け、

「なら、こつだ」

次の瞬間、思い切り地面に叩きつけられた二機のデバイスが踵で踏み潰された。

「バルディッシュ!!」

「レイジングハート!!」

泣き叫びそうな声を押し留め、二人の少女は己のパートナーの名

を叫ぶも、男は心底下らないと言わんばかりに溜め息を零す。

「喚くな。まだ壊してはいない。」

それほどまでに大事なら、今からこちらが言う条件を管理局に吞ませるよう手伝って貰おう」

そんな言葉がすぐに返せる筈もない。既に二人の少女の顔は目に見えて焦燥しきっているし、自体が何処まで飲み込んでいるかも怪しいのだ。

だが、男にとって二人の心境など関係ない。返答を待つのは三秒まで。それ以上かかればデバイスを砕きにかかる。

「返答は？」

「わ、わかりました！！ わかりましたから……」

みしい、と。歪な音を立ててデバイスが軋みを上げる。

「わ、わか」

「二度も三度も言うな。先延ばしにする魂胆か？ いい加減に口を噤め。こちらの要求を飲めばそれで良い。」

ああ、それから、貴様らが一步でもこれ以上近づけば問答無用で砕きにかかる」

「わかりまし、」

「ふん」

びきり、と。フェイトが応答するより先にバルディッシュに亀裂が走る。

「そんな！？ どうして！？」

「誰がお前たち二人と言った？ いい加減に出てこい」

その言葉を皮切りに、コートの中の男の死角に入っていた者たちが現れる。

クロノ・ハラウンと東 興輝。成程、他は交戦中という事らしい。

「気配は魔術で遮断した筈だが？」

返答はない。ただクロノが言葉を発しただけでレイジングハートにも亀裂が走った。

「誰が貴様に発言を赦した？ 口を噤めと言っただろう」

「……ッ」

既に二人の少女は心が折れかけているのだろう。既にコートの男に逆らうという事が根底から欠落しているらしく、震える手をお互いが繋ぐ事で何とか均衡を保っていた。

「小僧どもが静かになった所で、こちらの要求を飲んで貰おうか。まずは結界の解除と局員の撤退。それから追跡をしない事だ。先の二つは三秒で済ませろ」

有無を言わさぬ口調。だが返答が無いとするや否や、デバイスを踏む足に力を込めると、びきびきと完全に碎けかねない音をデバイスが立てる。

「聞こえているのだろうか？ さっさと済ませろ。コレが壊れても斬り易い肉が二つある事を忘れるな」

微かにクロノの視線が動く。斬り易い二つの肉。その言葉が指し示すのはいうまでのなく無力と化した二人の少女だけである。

「その二人も妙な真似はしてくるなよ？ 貴様らが動くより俺の方が速い。試しても良いが、首が一つ落ちるぞ」

既に二人の少女の首に絡みついた糸を見せつける様に右手を掲げている。

おそらくは、突き飛ばした際に巻きつけたのだろう。

脅してはない事を理解すると、モニターから事態を見据えていたリンディは通信画面をコートの方へと向けた。

『時空管理局執務官、リンディ、』

「貴様の名に興味はない。既に三秒どころか一分以上経っている…

…これは、ペナルティが必要だと思わんか？ その栗毛の少女」

唐突に声をかけられて、なのははびくりと肩を震わせる。これから起こる事が、悪くない筈はない。だが、それでも逆らう事の出来ない無力さを噛み締めながら、静かに返す。

「はい……」

「壊すデバイスを貴様を選べ」

「え………？」

嘘であってほしい。聞き違いであってほしいと願いながら、彼女は再度口を開く。

「あ、あの……」

「選べと言った。そして管理局。先程から作業が進んでいないようだな、どうやらそんなにも幼子の血が見たいと見えるが……大儀の

為の犠牲か？ ならやむを得んな」

言つて、男はなのはに切先を向ける。それは寸止めなどという生易しい物ではなく、既に喉笛から血の雫が一滴刃筋を伝い、静かにコンクリの床を紅く塗る。

『待つて……待ちなさい！ 今局員を撤退させたわ！！ 京谷君達も退く様に伝えた！ あとはそこにいるクロノ達だけよ！！』
「そうか。約定通りデバイスを返そう」

その言葉に、安堵のため息が通信側からも伝わってくる。既に転送されるべく距離を取ったクロノ達ですら、微かに視線を緩めた程だ。だが。

「まずは一つ。後の一つを返すには先の要求だけでは足りんな」
『な……待ちなさい！ 貴方は返すと、』
「全て返すと誰が言った？ 一つの要求に一つと誰が決めた？ 俺が条件に出しているのはここにある二機とここに居る二人だ。
要求が飲めぬなら見殺しにすれば良かるう」

デバイスはあくまでも高町なのはとフェイト・テストロッサの無力化が目的。

管理局を相手にするカードはこの二人以外に抜きん出る者など無く、それ故にこの場面こそ絶好の使い道と言える。

「おっと。その栗毛の少女。デバイスは拾うなよ？ 壊れかけとはいえ起動ぐらひはするだろうからな。尤も、行えば横の少女の首を刎ねるが」

「判り、ました……」

「良い子だ。さて、次の要求だが、」

「その前に、要求を変更させて貰っても良いかしら？」

かつかつと。革のローファーが床の音を反響させる。そこに現れたスーツ姿の女性を見やると、男は残る一つ、バルディッシュ砕くべく足に力を込める。

「待ちなさい。貴方がそれをするのは勝手だけど、それ以上に私の口を止める方が魅力的だとは思わない？」

びっくりと。微かではあるものの、男の足から力が緩む。

「……………貴様。何を言っている？」

「さて、ね……………少なくとも、と……………止めておきましょう。私の提案は私が金輪際蒐集の邪魔をせず、貴方の目的が達成されるまで口を割らない」

「話にならん。貴様の首を刎ねれば終わる」

「私が家に戻って措置をしないと情報が全て横に流れるわよ？ それに、ここでののはちゃん達を殺さないでくれれば私は良いの。だって貴方には、」
「ザフィーラ」

男の呼応と共にザフィーラが背後より顕れる。どうやら初めから事態を見ていたらしく、万が一の状態に備えていたのか、既に臨戦態勢に入っていた。

「あの女と金髪の少女のリンカーコアを抜け」

「良いのか？」

「二度まで言わずな」

有無を言わせぬ口調で告げるや否や、ザフィーラはフェイトと干

草のリンカーコアを引き抜き、蒐集を終わらせる。

「ご苦労。さて、約束だ。受け取れ」

そして。全てが終わってから男は拾い上げたバルディッシュを投げた。

しかし、それは高町なのはにでも、気を失ったフェイトの方にも無く、ビルの屋上から投げ捨てる形で。

「あ……………！！？」

「青いな。交渉側が退路を確保しない筈が無かるう」

何処からか見ていたのだろう。唐突に現れ、バルディッシュを受け止めた京谷と、一瞬とはいえその行為に視線を外してしまったクロノが振り返った次の瞬間には、既に男の姿はない。

「クソ……ふざけやがって、ふざけやがって！！」

「あの男は、赦してはおけないな」

京谷はビルの壁面に拳を叩きつけ、クロノはただ拳を固く握りしめる。

ここには居ない相手。正攻法でなく、卑劣なやり口でこの場から逃げおおせた一人の男に。

「何の真似ですか？」

「気付いていないとも思ってたか？」

首筋に刃を突きつけられる形にも関わらず、飄々と問いを投げる直也に対し、シグナムは嚇怒の念を以て返す。

「恥知らずめ……お前は主の名誉に、騎士の誇りに泥を塗る気が！？」

「結果は上々だったでしょう？ あのまま交戦すれば泥沼は避けられません。敵の内二名のリンカーコアを取り、こちらは無傷で帰還を果たしました。」

名より実を取ったに過ぎません……何より、自分が彼女達を殺せぬのを貴女はご存じの筈」

隠しもしない舌打ちと共に、シグナムは突き付けた剣を退ける。だが、彼女の怒りがそれで収まる筈もなく、旧友足り得る筈のザフィーラにも向けられていた。

「ザフィーラ……あの場に居て何故止めなかった？」

「主はやてを一刻も早く解放する。その為に泥を被れるなら被るまでだ」

そこまで訊いて、シグナムは今度こそため息と共に踵を返した。

ザフィーラは確かに口数も多くな、読み辛い存在ではあるが、それ故に実直な騎士でもある。

その彼をしてそう言わしめるのなら、確かに一理はあるのだろうと剣を収めた。

……それが、シグナムにとって間違いだったと気付かされたのは、これより先の事である。

「御剣達には黙っておいてやる……今日は顔を出すな。貴様を斬り兼ねん」

言うだけ言って踵を返すシグナム。その気配が完全に消えた事を確認してから、直也はやれやれと首を鳴らす。

「しかし、あの女はお前の事を知っているようだったが、大丈夫なのか？」

「仮にばれたなら頃合いを見計らい、街を離れる。残りの頁を考えれば、一人抜けても問題あるまい。」

……尤も、あの女は口を割らんだろうが」

それは憶測ではあるが、同時に確信できる事でもある。もしばらしておきたいなら事前にばらして対策を取れば良い筈だ。

北澤直也という存在が何を得手とし、どういった行動を取るのか。それこそ周りの証言だけで見破るのは容易く、だからこそあの場にも現れたのだから。

にも拘らず、泳がせるといっものは……

「……結末を知っているから、か」

「なに？」

「何でもない。ザフィーラ、俺は戻る。今日の事は御剣さん達にこちらが陽動をしたとでも言っておいてくれ」

人気の無くなった市街地を、直也は一人去る。その口元は、微かな笑みを零していた。

013 交渉（後書き）

c・m・「外道！ 外道！ 外道！ 第13話投稿完了!!」

暁葉「……もうやだ。こいつ何かおかしい」

c・m・「そして初登場おめでとう。これで君も立派な空気よ」

暁葉「……うれしくない。ていうかさ、直也って外道過ぎると思うんだ」

c・m・「H A H A H A!! 戦いに油断は即刻デッドエンド!!
例えるなら変身ヒーローが決めポーズ取ってる時に地雷踏ませたり、変身中に攻撃したりすんのは当たり前!
弱肉強食こそ戦場のルール!!」

暁葉「……そして今回も短い。散々待たせてこれだけ？」

c・m・「ごめんなさい……久々だっただけに上手く描き切れなくて。

さて、そろそろ読者様のお礼に移りましょう。

久住祐治さま、Hagailazさま、水玉さま、神崎はやて様、RYUZENさま。ご感想を頂き、ありがとうございました」

暁葉「そして、ここからは重大な連絡があるらしいな」

c・m・「ええ。先日感想をくれたRYUZENさまからなんだけど、この方の作品『コードギアス 反逆しない軍人』のオリジナル主人公であるレナードを、この作品に出演させてほしいという依頼があったわ」

暁葉「…………締め切り当に打ち切ってるだろ。ていうか構成大丈夫なのか？」

c・m・「そうなのよね…………だから、ここからは読者の皆様の声から是非を聞きたいと思います。」

RYUZENさまのレナードを登場させても良い。或いは登場させるのはちょっと、といった感じに、感想の方へ書いて下さい。もし登場させても良いという声の方が多ければ出演させ、そうでないなら出演は不可という形を取りたいと思います」

暁葉「票割れは？」

c・m・「その場合は、再度集計を取ります。ちなみに構成に関してはA'sの出演は無理なので、おそらくStSから出演になりません」

暁葉「これを機に他にも主人公が集まったりは、」

c・m・「しません。というか、流石にあと一人か二人がねじ込むのは限界なのよ。作品的にも」

暁葉「だろっな」

c・m・「それでは、今日はこの辺りで。出来るだけ多くの意見をお待ちしています。それでは、失礼します」

014 偽物と本物

「撤退した？」

明らかに優勢とはいえなかった状況にも拘わらず、むしろ万全を期して挑んだ以上ここで決着をつけるものとはかり考えていただけに、先の敵の行動に疑問符を浮かべつつ、久住祐治は首を傾げる。だが周囲を見渡せど敵の姿は無く、気配さえ無い以上敵は本当に退いたらしい。

『久住君。敵は全て撤退しました。スキマを開きますので、一先ずこちらへ』

『ああ、判った……』

何処か釈然としない状況ではあったが、既に槇野によってスキマは開かれているし、ここは早いうちに逃げるべきだろう。

そう納得するや否や、祐治のみならず他の者達も一様にスキマへと飛び込んだ。

「それで、どういう事が説明して欲しいんだけど？」

決着をつけるどころか、中途半端な状態で相手が撤退したことに猜疑の念を隠せないのだろう。

遠方より事態を把握し、連絡を寄越した槇野に対し、桜のみならず他の者達も視線を向けた。

「皆さんの仰りたい事も判りますが……どうも遠方より見た限り、直也君が彼らと揉めていたようなのです。」

その当人の姿も今は判らず仕舞い……ザフィーラ君。貴方は彼と行動していた筈ですが、何か知っていませんか？」

「連中を二、三煽り、陽動を行った。直也は逃げ延びる自信があつての行動だろう」

予め考えていた内容をすらすらと語るザフィーラに対し、唯一事の真相を知るシグナム以外は皆同様の表情で沈黙した。

彼らの顔をかたどるのは、微かな疑念と不安。逃げきれないのでという不安もさることながら、これまで北澤直也が誰かと対立する所を見るのは片手の指で足り、その全てが実力の全てを晒していないのはこの場に居る誰もが理解している。

故に、ザフィーラに問うべき事は一つ。これだけは何としても訊いておかねばならぬというように。

「何故、君はここに居るのかね？」

御剣の問い。何故ザフィーラがここに居て北澤直也はここに居ないのか。もし先の発言通りなら、その場に居たザフィーラにも追撃の手が伸びている筈である。

「……直也は俺にも撤退を促した。足が遅いと言われたのでな。是非もない」

「四足獣である君をして鈍いと言わしめるか。成程、桜の時もそうだったが、逃げ足には自信があるらしい」

多少皮肉がこもっているのは、未だ納得がいかない為だろう。

とはいえ、これ以上言及した所で答えが変わる筈もない。御剣達

も含め、一同はこの場を解散するという形で事態を收拾する方向に纏めた。

「なのはちゃん大丈夫!？」
「わたしは……けど」

駆け寄るエイミーに対し、なのはは罅割れたデバイスを見せる。壊れぬよう、これ以上傷つかぬように包んだ手から見えた二機のデバイスが、後もう少しの負荷をかければ砕かれていた事だろう。

「ごめんね……せつかくこの子たちが、二人の為に新しい力を欲しがっていたのに。」

……それが、こんな形になるなんて
「エイミーさんのせいじゃないです。わたしが、わたし達がちゃんとしていれば……あの男の人の言うように、万全の状態で出なかつたから」

苦々しくも、失敗を失敗と受け止めるだけ精神面は回復できたのだろう。

何はともあれ、次に繋げようとするその意志にはエイミー達も感服せざるを得ない。

「なのはが気にする事じゃないだろ。あの野郎、人質なんて言う狡い真似してきやがって」

「そついきり立つなよ、京谷。あの野郎は俺が潰してやる」

そういうマクスではあったが、やはり決着をつけられなかった事は彼にとってもしこりとして残っているのだろう。

殊勝な口調ではあれど、その眼だけは笑っていない。

「ともかく、無事で良かったわ。それと、フェイトさんと千草さんは……」

リンディの言葉により沈鬱になる。あの場に居たフェイトと千草はリンカーコアを抜かれ、意識を失った状態なのだ。

「遅くなって申し訳ありません。二人とも眠っていますよ」

そして。そんな場の空気を見計らってか、一人の槇野来栖がひよっこりと顔を出す。

「あの……千草さんとフェイトちゃん、大丈夫ですよね？」

「ええ。魔力を抜かれただけです。皆さん、申し訳ありませんでした。」

本来ならいち早く駆け付ける筈だったのですが」

「興輝から訊いたよ。敵の妨害に遭ってたんだった？」

龍也の言葉に面目ないと頭を下げるも、皆は大して気になどしてない。

むしろ、状況も理解出来ないまま現場に来るように言われたにも拘わらず、冷静な対応を取ってくれたおかげで千草とフェイトを誰よりも早く医務室に送る事が出来たのだ。

彼の用いる『スキマ生成』は、こと移動手段としてはこれ以上ないサポートと言える。

「それで、なのは。千草さんは敵の誰かと知り合いだったんだよね

「多分、話の仕方からしてそうだと思う。けど、わたしとフェイトちゃんを助けるために喋らないって言ってたから」

龍也の問いに思い出すように言葉を返していくのはだったが、その言葉に槇野は顎に手を当てて考える。

「ふむ……何らかの魔術的な措置で口封じをされている訳でもありませんし、聞き出すという事も出来ませんが、千草さんと旧知の縁で、かつここに居ない人物と言え、聞くまでもなく絞れそうですね」

「北澤直也、か……………」

マクスがぼそりと呟く。確かに先の事件で宮本千草と浅からぬ縁があり、ここに来ていない人物と言えれば消去法で絞られる。しかしだ。

「けれど、旅館に行った時はなのはさん達に優しくかったですし、ここまでのをするようには思えませんでしたけど……………」

レインシアの疑問も一理ある。そもそもにして先の事件に無償で協力し、死に体の傷を負ったような人間だ。

何より彼は高町家との交流は長く、近頃は朝の挨拶だけでなく走り込み程度のトレーニングを付き合うようになっていたし、ご近所の清掃活動などにも積極的に参加していたりと、絵に描いた様な好青年ぶりを発揮している。

なにより、普段から親しくしている者が敵などという考えは持ちたくない。

「ですが、彼が怪しいというのも事実です。監視は私が行います。ここ数日中に彼に動きがあれば知らせ、映像媒体にも記録を残して

おきましよう。

プライバシーの侵害ではありませんし、犯罪である事は否めませんが、もしコートの男と同一時刻に二人いれば疑いは晴れます。

この所のペースを鑑みれば、近日中には現れるでしょう」

宜しいですか？ という声に異論はないとばかりに一同は頷いた。いや、中にはなのはやレインシアのように問題があるのでは、とたじろぐ者もいたが、今はそのような事を言っている場合ではない。

他の騎士達は真つ向から挑んでくるが、あのコートの男だけは初見の時の様な正攻法で挑むという事をする相手ではないし、目的のために手段を選ぶような存在ではないということは、先の件で重々承知していたためだ。

尤も、罪悪感が無いと言えば嘘になるため、もし潔白であったのなら謝罪をすべきだろうという意見にも全員が賛同したが。

「それにしても、どうも腑に落ちないんだよねえ」

先程まで会話に参加していなかったアルフが、首を傾げつつ一人ごちるのを恭介が問い質す。

「何がです？ アルフさん」

「いやさ。これまでの話を聞く限り、『闇の書』ってのは使い物にならない代物なんだろ？」

なのに、何だっただの騎士達はここまで躍起になって集めるんだいっ？」

事情を知っている者たちは黙る他ないが、少なくともクロノやリンディ達もその意見には同感だったらしく、確かに、と頷いた。

「おそらく協力者であろう者達はともかくとして、騎士の方は自ら

の意志で『闇の書』の完成を目指しているように思える」

「ん？ クロノ、それって何かおかしいの？」

「……あの騎士たち。『闇の書』の守護者の性質は人間や使い魔とは異なる。」

『闇の書』に合わせて、魔法技術で作られた疑似人格……主の命令を受けて行動する、ただそれだけのプログラムに過ぎない筈なんだ。現に、これまでに意思疎通の為の行為は確認されていても、感情を見せた例はない」

それこそが真実であり、あのような人間らしさこそが異常なのだ。そうクロノは静かに告げる。

「……フェイトのような、か？」

「違うわ！ フェイトさんは、生まれ方が少し違っていただけで、ちゃんと命を得て生み出されて人間よ」

「検査の結果でも、彼女は確かに人間として証明されている。興輝、妙な事を言っもんじゃない」

興輝の言葉に反駁するように、リンディとクロノは言い放つ。
フェイトは人間であり、彼らとは違うのだというその言葉。
だが、

「……作り物は、作り物なのか？」

重く、それでいて何処か苦しそうな声で興輝は問う。それはこの場に居た誰の物にでも無く、自身に向けた言葉として。

「……興輝君」

「わりい、槇野。俺はもう帰るわ」

俯き、誰に表情を見せる事もないまま、足早に興輝は去る。
微かに見えた口元。きつく喰い縛られた口の端からは、紅い雫が
滲んでいた。

「僕達は……彼を怒らせるような事を？」

「……他人には口に出出来ない悩みがあるだけです。今はそっとして
おいてあげて下さい」

物憂げな表情になるクロノを、槇野は諫める。

興輝の悩みは決して口にできる物ではないし、口にしてはならな
い悩みだ。

ならば、今すべきことは解決できない問題に悩む事より、目に見
える問題に取り組むべきだろう。

「とにかく今は情報が足りません。『闇の書』に関して、もう少し
詳しいデータが欲しいのですが……」

「確かに槇野さんの言う通りです。ユーノ、明日から少し頼みたい
願いがあある」

「ん？ 良いけど」

クロノの言葉に二つ返事です承するユーノ。

さて、と。息を零す。ここからが正念場だと。そう決意を新たに
しながら。

帰路に着くのは横。ただ俯いたままのその表情を見て取って、声を駆けようと何度か思い立ったが、肝心な所でどう声をかけていいのか判らずにいた。

情けないと思う。好きだと言っておきながら、護りたいと思いつながら、どうして何もしてやれないのかと、そう自身を叱咤するも、どうしても声をかける事を躊躇ってしまう。

やがて家の門が見えた。もうすぐそこまで迫った距離の中、最後まで声をかける事が出来なかったのはに声をかけたのは、ある意味最も事件の中心に居る人物だった。

「こんばんは。というべきかな？」

「……あ」

響く声は玲瓏。男性でありながら高く、それでいて何処か凄味の伝わる音を響かせる声音に、なのはは微かに肩を竦ませた。

「余計なお世話かもしれないが、こんな夜更けまで出歩くのは感心できないな。」

「……と。すまない。保護者でも無いのにずけずけとものを言ってしまう。その、原因である事は判っているが、出来れば怯えないでくれないか？」

「どうやらなのはが怯えているのは突然厳しい物言いをしたからだと、彼は思っているらしい。」

「だけどそれは違う。なのはが怯えているのは、貴方を何処かで疑っているからなのだ、そう言う事は憚られたが、伝えるにはあまりにも失礼が過ぎる。」

しばらくの無言。こちらが言いあぐねているのを見て取ったのか、直也さんは踵を返そうとし、

「待って……下さい」

微かに震える声で、なのはは彼を引きとめた。

「その……違うんです。今日は管理局の人たちのお仕事を手伝って、それで、恐い目にあって」
「そうか」

ぼん、と。肩に手を乗せて落ちつかせると、彼は手を離してから腰をかがめ、同じ目線になる。上から物を言うのではなく、あくまで同じ立場で話したいというように。

「怖い目に遭ったのだな？」

「はい」

「辛かったのだな？」

「はい」

「……なら、もう良いんじゃないか？」

「え？」

かけられた言葉が意外だったのか。眼を丸くするなのはに、彼は静かに語りかける。

「……君は確かに強くて、才能があるのかも知れない。けれど、君はまだ子供だ。

危険を冒してまで行動する必要なんてない。命にかかわる様な事なんて、する必要はないんだ。

泣く程怖くて、震えるほど辛いなら、無理をする事なんてない。

努力しなくちゃいけない日は人生の中であるけど、今がそうである必要なんてない。

君が進まなくても、君と同じように誰かの為に進もうとする人は他にも居る筈だよ？」

「……けど。本当に、余りにも優し過ぎる声でなのはに投げ掛ける。その言葉。その表情に偽りはないのだろうと。」

「……先ほどまで訊かされた疑惑の念など、今の彼を見た後では失笑に伏す程の重みしかないと言いつれてしまっただった。」

「……けど。わたしとまったく同じ人はいませんよね？」

「」

その言葉に、呆けたように直也さんは口を開けて固まった。

「心配してくれて、ありがとうございます。」

「……でも、わたしは動かなきゃ嘘なんだと思います。わたしが子供だとか大人だとかじゃなくて、わたしに出来て、わたしが動く事で誰かが助けられる事が出来るなら、それはわたしが動かなきゃいけないんじゃないかって、今の話を聞いてて思ったんです。」

「辛くて、怖くて……それでも、逃げだすのは嘘だと思うから！」

「だから、ありがとうございます！ と、屈託のない笑みを向けて、なのはは僕の手を引いた。」

「それじゃあ、失礼します！ 龍也君！ 帰って休んで、明日から頑張ろう！」

「つまずくのを慌てて耐えながら、必死になのはと一緒に走る。」

「あの、ありがとうございます!」

振り返りながらお礼を言って、その場を去る。最後に見た直也さんの表情は何処か固く、苦虫を噛んだように感じられた。

Side-out

高町なのはと神崎龍也が家の門を潜った後、北澤直也は電柱に寄りかかって溜め息を零す。

“妥協点を前に出せば、杖を手放すだろうと思ったが……逆効果だったか”

やはりあの程度では甘かったと、そう考えながら、彼もまた自宅の門を潜る。

「……忌々しい」

誰にも見せられぬであろう程に歪んだ貌は、嚇怒の念を湛えていた。

夜の帳が下り、月も星も雲に隠れ、丑三つ時さえ過ぎた夜更けでありながら、紅魔館のリビングには未だ微かではあるものの明かりが点けられていた。

一体どれくらいの間が経ったのか？　ただぼんやりとソファに身を預け、東　興輝は視線を虚空に彷徨わせていた時、毛布を持って佇む女性の姿が映った。

「まだ、起きていたんですか？」

「……ティファか。悪い」

言っつて、ソファから身を起こす。せつかく毛布を用意して貰った手前気が引けるが、これ以上情けない姿を見られたくないという思いも有ったのだろう。

眠くもないというのに欠伸などをしつつ、階段へ向かおうとするも、服の袖を掴まれた。

「そんな顔をしたまま去る程、私は頼りないですか？」

「……」

「話したくないのは判っています……けど、それでも貴方は私のマスターで、私は……ただのデバイスに過ぎないのかもしれないかもしれませんけど、」

「違う！！」

びっくりと、突然の剣幕に肩を竦めるティファに、興輝は再び顔を俯かせる。

「ごめん……悪かった」

いいえ、と。貴方は決して悪くないと。そう窺めるように告げるティファに、興輝は震える声で問う。

「なあ、ティファ　俺は、生きてるよな？」

俺もお前も、生きてるよな？」

震える声で、誰よりも強い力を持って、誰よりも確かな存在としてそこに居る筈の少年は、その姿そのままの幼い声音で問いかける。

「俺は……本当は怖い。つい最近まで現実だと思ってた日々が偽物で、死なせちまった妹も、彼女みたいな存在だった奴も、みんな作り物だって判って……………」。

俺は、今こうしている俺も本当に生きてるのか？ ひよっとしたらこれも、誰かの悪質な演出なんじゃないかって。

不安なんだよ！ 生きてるのに生きてないって言われるのが！

俺が……俺の人生が偽物だったみたいなのに、今生きてるのも、「それは……私にも判りません。けど、私は初めから偽物だと判っていましたよ？」

悲痛な叫び。自身の胸の内を抉りながら声に出す興輝の吐露に、ティファは考える間もない程すぐに返す。

「私は作り物で……呼吸をして、食事をして、それでも一部の人に生きているとは思われない存在で……………」。

私はそれを、当然のように受け入れていました」

「けど心はある！ 生きてるだろ!？」

そんな事は受け入れられない。もし生きていないというのなら、自分を心配してくれた心は、今見せている愁いの念は何なのかと。そう問う興輝に、彼女は静かに手を取って微笑みかける。

「それが、答えです」

「あ……………」

「私達は生きています。たとえこれが作られた物だとしても、敷かれ

たレールを歩いているだけだとしても、私達には心があってそれを忘れず抱いている」

だからこそ、自分は悔まない。このスタートからゴールまでの道のりを、ただ信じ続けて走り抜けると、そう告げた彼女に興輝は声を重ねる。

「そうだな……偽物でも構わない。もしこれが決められた道でも、誰かの、何かの意志だったとしても」

「ただ走り抜ければ良い。偽物だとしても、心が本物であるなら、それで良かったんだ」

ああ……ならば自分はこの道を

「決して止まったりはしない。偽物だったとしても、偽物のまま、偽物と呼ばれる者を助けて見せる」

ただひたすらに走り抜ける事を、それを果たして見せると。

そう少女の手を取って、少年は誓いを立てた。

「ありがとな……ティファ」

「いいえ。マスターが哀しいと、私まで悲しくなってしまうから」

だから、と。微笑みを向けて踵を返す少女は、静かに、それでいて何処かおどけた調子で続ける。

「ユフィも……あの子もマスターの事を大切に想っています。悩みがあるなら、あの子にも打ち明けて下さいね。あれで、彼女は一途

ですから」

そう言い残して、彼女は今度こそ、その場を去る。

凜とした姿勢で離れて行く彼女を見送ってから、興輝は気まずそうに頬を掻く。

「ああ、くそ。あんな顔反則だろ……」

多分これから寝ようとしても寝付けはすまい。暫くして、取り敢えずシャワーを浴びようと動き出す。

その動きは、普段より何処かぎくしゃくとしたものだった。

そうして彼は、再びその場へと歩を進める。これが決してやっつてはならない事だと。

もし次に行えば今度こそ消されてしまうかもしれないというのに、それでも彼はこの場所へと歩を進めたのだ。

ここは『彼女』の心。幾度の悪夢を過ぎ、幾度の絶望を進むしか無かった彼女のスキマ。

そこへ彼は入りこむ。開いてしまった穴。もう何者にも埋める事は出来ない様な、深すぎる心のスキマへ。

「夜分に失礼。……とはいえ、招かれざる客人だという事は理解していますか」

「ならば、何故来たのです？」

それが心底理解出来ないという風に告げる彼女は、それでも己が

役割を全うすべく右手を掲げる。

「単に話をしに来ただけです。そこに他意はありません」

馬鹿げているとしか言いようがない、ただ話がしたいというだけで、この男は自ら危険を顧みず行動しているのだから。

「……私にはその行為は無意味にしか思えない。どうやってここに来たのかという疑問より、貴方の異常さこそが気になる」
「そうですか。それは良かった」

一体何が良いというのだろう。呆れとも戸惑いとも判別の使えない表情のまま固まる彼女に、彼は微笑みながら応える。

「貴女は生きている。プログラムでも道具でも無く、確かな存在としてここに居る。」

心を持っているからこそ私の行動に疑念と猜疑を抱き、心があるからこそ表情が変わる。

それが　私にはとても嬉しいのですよ」

静かに。それでいて心から祝福する様な表情と声で彼は語ると、軽やかな足取りで踵を返す。

「今日はとても楽しかったですよ。願わくば……いえ、私は誓いましょう。いずれ、貴方をここから解き放つと」

決してこの約束は違えないと。

そう宣誓して、槇野来栖は此処を去る。その背を見る女性は、最後まで男の行動が理解出来なかった。

014 偽物と本物（後書き）

c・m・「外道っぷりが加速中な直也君。多分原作のグレアムを超えるウザさで第14話を進めて行くと」

暁葉「……腹黒すぎだろ。うちの作者も大概だけど、モラルはあったぞ」

c・m・「ま。彼は007を悪役にして三倍ぐらい煮詰めた様な真似を平気でするからね」。

悪は何を抱こうと他人に取って害でしかないなら、そこに貴賤はないというのが彼の持論。

殺し合いで民間人巻き込んだり、命乞いする人間殺すのも、人質取って殺すのも結局『殺人』でしか無いって割り切ってるタイプだし、そういう意味では水玉さんとは本気で仲が悪そう」

暁葉「……ま。第三者からすればどっちも性質が悪い存在でしか無いんだけどな。」

しかも両方ともゴキブリ並みにしぶといし……正に『害』虫」

c・m・「……そんな人と一緒に居るんだから、貴方も大変よね。ま、STSまで空気確定だから、暫くここで癒されてなさい」

暁葉「……嬉しくない。本気で嬉しくないから!!」

けど、今回直也の外道っぷりが目立って興輝や槇野が凄く綺麗に見えたんだけど」

c・m・「あの二人はA'sから輝かせる予定だったから。多分今回の最終決戦ではとことんやってくれる筈、多分」

暁葉「まあ……このまま行けば、少なくとも一名泥沼確定なのがい
るがな」

c・m・「あやつの相手はこの作品内において最も相応しいものに
やって貰う予定。

さて、そろそろ読者様のお礼に移りましょう。

久住祐治さま、Hagailazさま、水玉さま、神崎はやて
様、笑う男さま。ご感想を頂き、ありがとうございました」

暁葉「RYUZENさまの件は、正式に参戦という形で良いのか？」

c・m・「ええ。感想数的にそんなに多くは無かったけど、反対数
0だから、StSから正式な参戦という形で決定ね」

暁葉「色々大変そうだな」

c・m・「ま、その辺りは何とかするわ。それでは、今日はこの辺
りで。失礼します」

015 取るべき選択（前書き）

ようやく投稿完了。ご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした。

しかし、結局原因は判らずじまい……。

以前そのままではどうしても投稿できなかつたため、表現などに違和感を感じられるかもしれませんが、その点はご了承頂ければ幸いです。

015 取るべき選択

霜が降り、朝靄に包まれる早朝の住宅街。その一軒家のリビングで舟を漕ぐ女性に、彼女はそっと毛布をかける。

「……桜か。すまない」

「あらら……起こしちゃったか」

ゆっくりと眠らせようと思っていた筈が、まさかこんな形で裏目に出ると思ひもしなかったのだろう。

ばつが悪そうに頬を掻く桜に、シグナムは軽く微笑を浮かべる。

「いいさ。気持ちは受け取っておく」

「そうは言っけどさ……」

どれ程繕った所で、疲れという物は残る事を桜は知っている。疲れ知らずなどという言葉は、それを自覚していないものに過ぎず、ましてや迷いを持った者が全快出来る等とは露とも思っていない。

「抱え込まないですよ……私、そんなに頼りない？」

「……………」

違つと。本来なら否定すべき言葉を、しかしシグナムは口に出れない。今の自分がそれを言えば、間違いなく仲間たちの関係に亀裂が走る。

あと一步。あと一步で主である八神はやてを救済できるというこの時期にそれを行う事は、愚策であり愚拳でしかない。

だからここここでは語れない。ましてやそれが犬猿の仲と呼べる者であれば尚更だと、そう口を固く噤む。

だといつのに。

「肩、震えてるよ?」

ゆつたりと。後ろから首へ腕を巻きつかせながら桜は耳元に語りかける。

「ねえ? 前に言った事覚えてる? 私がシグナムの事が好きだって。あれ、冗談なんかじゃないよ」

おふざけでも一時の迷いでも無く、本当に好きなんだと。首に回す手に力を込めながら囁いた。

「身勝手だけどさ。好きな人が抱え込んで、悩んだままなのを見るのって辛いんだよ?」

どうしたら良いんだろうっていつつも考えて、打ち明けて欲しくても切り出せなくて、悩んでばかりで不安なんだ。

背負い込まないで 私、私が好きな人の為なら頑張れるから。

一人でなんでも抱え込まないで。私は 好きな人の笑顔が大好きだから」

口にする言葉は、それを言った本人でさえ火が点くほど恥ずかしいに違いない。今だって声は裏返りかけているし、手だって寒くもないのに震えている。

けれど。それでもここで自身の思いを伝えなくてはいけないという気持ちがあった。

シグナムは強い。気の遠くなるような長い時の中で、多くの不安と絶望、後悔と責務を騎士の将として一身に背負い、それを当然の義務のように受け入れている。

気高くも忠義に厚き騎士。

武門の道を歩む者にとつての理想の体現であろう存在。しかしその双肩はあまりに細く、その背はあまりに小さい。

そんな彼女を、騎士という枠に填まってしまった一人の女性を、誰が護ってやれるのだ？

一体誰が、彼女を一人の女性として愛してやれるのか。

その気高い姿の裏で、一人悩み続ける女性を護っていききたい。たとえそれが、己の様な男とも女ともつかぬような存在であったとしても、護って行きたいと思うから。

女の身体であるが故に、女としての葛藤を知った。

男の心であるが故に男として護り、愛したいと願った。

ちくはぐだとは思ふ。中途半端だと判っている。それでも護りたいと、愛したいと願うなら、この気高い騎士の重荷を共に背負いたいと思うなら、ここで自分の心をさらけ出さなければ、きっとこの騎士は応えてはくれない。

だから……想いを口にした。自分の想いを伝えて、自分の想いさえ利用して。

そうすることで、この騎士の手助けになればと考えたから。

「お願い　　答えて。そんな顔、見たくないよ」

無言の時。ただデジタル時計の数字が音もなく刻まれていくだけの空間の中で、シグナムは微かに口を開き、

「北澤直也には気を付ける」

ぼつりと、そんな事を呟いた。

「なんだ……そんな事」

「おふざけで言っているのではない。あの男は」

「判ってる。身内想いのシグナムがそんな顔するんだもん。きつと、あいつが何か信用できないって事は心に留めてとく」

それに、元から仲悪いしね。と、何処か冗談交じりに呟く言葉に、シグナムはくすりと微笑んだ。

だが、とも思う。どうして北澤直也は、桜に対してはあそこまで仲を拗れさせるのだろうか。

唐突に浮かんだ疑問。それは桜やシグナムにとっても理解出来ない事ではあったが、感情的な物だろうと早々に思考を切り上げた。

馬が合わないという言葉もある。きつとあの男の対応も、そういった感情からだろう。

快晴と言えば聞こえは良いものの、流石に冬の真つただ中にしてクリスマスを眼と鼻の先に控える十二月の風は冷たく、肌に刺さるものである。

そんな中に遭って、厚手のコートやジャケットに身を包む男女の姿は自然であり、さらに言えば暖房の利いた喫茶店で暖かな飲み物を注文するのもまた然りと云えた。

「……どうい風吹き廻しですか？ 仕事以外では、食材を買ってはやてさんの所に行くのが日課だったではありませんか」

湯気の立つココアの注がれたマグカップを両手で包むように持ちながら問う少女に対し、見た目だけは同年代な少年はアイスティー

を飲みながら別に、と軽く応える。

だが、それが本心でない事は少女には判っていた。手にしたマグカップを音を立ててテーブルに置くと、真剣な眼差しで問い詰める。あくまでも無言。声は出さず、ただ圧力だけで追い込もうとする少女に、少年は降参だとばかりに軽く両手を上げる。

尤も、動じた様子はないため、最初から応える気ではあったようだが。

「実は……もう君とは一緒に居られなさそうだ」

傍から見れば別れのシーンの様な口調であるが、少女に取って予期しなかった事態ではない。

「連中は、私を？」

「いや。セレノの事なら心配ない。初めから面は割れていないからな。

ただ……俺の事を知っている人間がいた。どう足掻いた所で知られ過ぎている以上、隠し通せる筈もなし、いずれバレる」

「だから……兄さんは離れると？」

「暫くは、はやてさんの所で世話になると良い。監視の目がこちらにある以上、君の事まで露見させる訳にはいかない」

ここに来た理由も、大衆環視の中ならば観察されていても下手は打てないという理由からだろう。

管理局との騒動から一夜を越す事無く帰省した北澤直也は、自宅で待っていたセレノにこれからは御剣の元に泊まる事、偶然を装ってデパート内の喫茶店で密会を行う事を指示し、手筈通りここまで来た。

二人は視線を極力合わす事無くカウンターで飲み物を口にしつつ、念話でなく小声で会話を済ませる。

後は時間をずらして立ち去れば良いだけだ。

「判っていますか……兄さんは、私にとって家族なんですよ？」

「判っているさ。君が必要なのは、家族の温もりなのだろう？」

流すように軽く答え、直也はアイスティーを飲み干す。

「心配はしなくて良い。だから、今は俺を信じて動いて欲しい」

「……はい」

信じて欲しい。思えばこれまで、北澤直也がセレノに対して何かを頼んだ事はなく、むしろ一人で物事を進めようとばかりしていた。だからだろう。家族として向き合って欲しいと願っているが、何処か距離を置いたままだった存在が、今こうして己に求めているという事実。

離れていた距離を近づけたいという一心が、セレノの判断の中で疑いという文字を消していた。

「次は向こうで会おう」

その言葉を置き去りにドアを開けて立ち去る直也を横目に見つつ、セレノもマグカップに口を付ける。

これから先にある不安と頼みにされるとい期待。それを纏めて飲み込むように、彼女はココアを飲み干した。

時空管理局本局の廊下を、クロノとユーノ、エイミィは闊歩する。

闇の書の事件において現場での捜査を行うべき彼らがここに居るのは、件のロストロギアにおける情報があまりにも少なく、クロノの伝手を辿って、本局に顔の利く者たちと面会する為である。

そして応接間ドアを潜り、件の人物たちとの対面を果たしたのだが……。

「リーゼ、久しぶりだ。クロノだ」

「わ〜お！ クロスケ、お久しぶり〜」

件の人物の片割れである筈の女性はクロノを見るなり抱き、いじりはじめた。

「ロツテ、離せコラ!？」

「何だとコラ。久しぶりに会った師匠に冷たいじゃんかよ！

……って、あれ？ なんか前と違ってオスの匂いがする」

「何だよオスって!？ アリア、これを何とかしてくれ!!」

助け船を出して欲しいと切願するクロノであったが、未だクロノから離れず匂いを嗅ぐ女性と髪形以外瓜二つと言って良い、アリアと呼ばれた女性は腰かけた椅子から立ち上がるも、その場を離れようとはせず、諦観を極め込んだように口だけを動かす。

「オスって言うのはアレじゃない？ 色気づいたとかそういうのでしょ。ま、クロノが男の子として成長したのは寂しくもあり嬉しくもあるけどね。

エイミィ、お久し」

「リーゼアリアもお久し。リーゼロツテは相変わらずだねえ」

「ま。我が双子ながら時々計りしれん所はあるねえ」

快活な片割れとは違い、アリアと呼ばれた女性はあくまでも冷静

なのだろう。

事態を動じもせず、慣れたように冷静に見据えると、ここに彼らが来た理由を問う。

「『闇の書』の搜索でしょ？ 自体は父様から伺ってる。出来る限り力になるよ」

「宜しく頼む」

出会いがしらの騒動も一先ず区切りをつけ、ソファに腰掛けながら互いの事情をかいつまんで説明する。

リーゼロットとリーゼアリアはグレアム提督の使い魔であり、その耳としっぽからも判るように素体は猫。

クロノ・ハラオウンの魔法と近接戦闘の師匠であり、魔法教育はアリアが、近接戦闘はロットテが担当していたという事らしい。

「二人には、駐屯地方面に来てくれると助かるんだが……今は仕事なんだろう？」

今回の頼みというのはそれとは別だね。彼なんだ
「喰って良いんか!？」

ネコ科動物特有のキラリとした瞳をユーノに向けるロットテ。なまじフェレットに化けられるだけに、ユーノは冷や汗をこめかみに浮かべるが、クロノは冗談はそれ位にしてくれ、と軽く流す。

「彼に……無限書庫での調べ物に協力してやって欲しいんだ」

無限書庫……時空管理局本局内にある、管理局が管理を受けている世界の書籍やデータが全て収められた超巨大データベースであり、言うなれば世界の記憶を収めた場所でもある。

……とは言え、あまりにも巨大であるが故の弊害として、中身の

ほぼ全てが未整理のままであるため、本来ならチームを組んで年単位での調査をする場所である。

「骨が折れるわよ？」

「過去の歴史調査は、僕らスクライア一族の本業ですから。検索魔法も用意してきましたし、大丈夫です」

「私もロツテも仕事があるし、ずつつて訳にも行かないけど、なるべく手伝うよ」

「可愛い愛弟子、クロスケの頼みだしね」

本来なら気恥ずかしさに顔を伏せる様な場面なのだろうが、手を貸してくれる事への純粹な喜びの方が大きいのだろう。

ありがとう、と呟くクロノに、二人は顔を見合わせて笑い合う。

その表情は、どこかぎこちなさを感じる物だった。

あの屋上での出来事。レイジングハートとバルディッシュが壊れてから数日。

完治したレイジングハートを手に、高町なのはは魔法の特訓に勤しんでいた。次は失敗しない。二度と同じ轍を踏んだりはしないと意気込みも新たに熱意を傾けるその姿に、誰もが言い知れぬ不安を感じていた。

このまま自分を顧みずに無理を重ねる事。その事に対して不安を抱えながらも、しかし決して特訓を止めようとは思わないのは。

それを危ういと。止めたいと間近で見ている龍也は思い、何度も声をかける。そう、今日も。

「なのは……無理し過ぎだよ」

「大丈夫！ 今日のもうこれで終わりにするから、ね！」

弾む様な口調で言われても、その笑み一つこぼさず集中している顔は痛ましい。

「……。駄目だ。今日はもう帰ろう？ エイミーさんの所にも、行かなきゃならないんだから」

『闇の書』の調査、無限書庫にユーノ・スクライアを送り届けるといふ仕事を終え、今日の午前中には海鳴市に戻ってくる筈だ。

何時敵が現れるとも知れない状況下で、こんな事を何時までも続けていい余裕はない筈だと。

そう……きつく言うべきだった。

「ごめん……けど、もう終わったから」

だから……今日も彼女は苦行を課す。自身の才には溺れず、積み上げて行く事を忘れず、着実に力を付けて行く。

その土台。積み重ね、築き上げた物を支える根底が、徐々に亀裂を走らせているとは気付かずに。

……敵との邂逅の時はすぐに訪れた。それも当然。追う者と追われる者の立場がはっきりしている以上、見つけ次第連絡が入るのは当然のことだ。

たとえばそれが、なのは達にとってベストコンディションとは言え

ない事態であろうと。

「艦長が本局に行ってる時に!？」

駐屯地で待機していたエイミーが忌々しげに吐露する。アースラの武装追加に伴った試験航行が行われ、その間、入れ違いに市内に戻ったエイミーが指揮代行を務める事となっていた。

「クロノ君も戻るまでに時間がかかりそうだし……龍也君達、頼める?」

「エイミーさん、わたしも」

「駄目よ」

戦力的な問題を鑑みれば、フェイトが動けない以上、なのはの攻撃は頼みたい所ではある。だが……それをを行う事は賛同できない。何故なら。

「またあのコートの不審者が出るかもしれない。そうしたら、今度こそ殺されちゃうかもしれないんだよ?」

「判ってます。今度はちゃんと武装した状態で行きますし、危なくなったら離れます! だから、お願いします!!」

必死に頼み込むなのはの姿に、このままでは埒が明かないと思っただろう。エイミーは判った、と頷くと、念を押すように人差し指を立てる。

「ただし、本当に危なくなったら……ううん、不利になっても逃げる事。

見つけたら絶対に近付かないで、他の人に任せる事。約束できる?」

「はい！」

「僕がなのはの傍にいます。それで、良いですか？」

「龍也君も、すぐに逃げて。それから、」

「俺達も当然出るぜ」

連絡を受けて控えていたマクス達が武装をした状態で答える。二度も同じ轍を踏まぬと考えているのは、なのはだけではないのだ。

「行こうぜ、龍也。あの野郎は俺が討ちとってやる」

「頼りにしてるよ……マクス」

もう二度とあんな失敗はしないと、そう心に留めながら、彼らは転移ゲートへと向かった。

そして、その報告を彼らも受けた。管理外世界の砂漠地帯と森林地帯の上空。そこに敵はいると。

「フェイト……」

力なくうなだれる娘に、プレシアはそっと頬を撫でる。その優しさ、温かさを感じながら、フェイトは同時にやり場のない戸惑いを感じていた。

「駄目。母さんは行かない方が良い」

おそらく敵の目的は魔力の蒐集。そして、同じ相手を狙っている

い所から察するに、次に狙われるのはこの母である可能性は高いのだ。

その発言を見越していたのか、プレシアはアルフの方へと向き直る。

「すぐに戻るわ。アルフ、貴女は足手纏いだから残っていなさい」

「頼まれたってあんたと一緒には行かないから安心しな」

辛辣な言葉と共に互いが視線を外す。

「だが、一緒には行かないという事は結局行く気なんだろう？ 俺としてもアルフが行くのは反対だ」

「なんだい恭介？ あんたもあたしが頼りないっての？」

「……連中は化物だ。並以上の奴ら、いや、化物でも危うい。正直、俺だって出来れば行きたくない」

「弱気だね。そんなんでも勝てると思うの？」

「勝ち負けが問題じゃない……闇の書の事件を解決できるかどうかなんだ」

「同じ事だろ？ と首を傾げるアルフ。しかしそうじゃないと京谷は恭介の後に続く形で頭を振った。

「憶測なんだが……連中も闇の書がどういふものかぐらい判ってる筈だ。

それでも戦おうとするのは、多分引けないものがあるからなんだと思う」

「京谷。貴方は自称自分の恋人が傷付けられてそんな事を言うの？」
「……交際は合意ですよ、プレシアさん。そりゃあ、憎い憎くない
で言えばやっぱり赦せないところもあるし、引けないのも判ってる。

けど、もし俺達と連中の立場が逆だったら、きっと俺達は今でも

連中と蒐集を行っていたんじゃないかって思うよ」

けれど、それでもやっぱりこちらも引けないと。そう京谷と恭介は告げる。

「俺達はフェイト達の味方であると決めた。龍也やマクスもなのは達の味方でいる事を『選んだ』」

「これが確実に正しいなんて言えないのはもう判っている。本来は話し合うべきだって言うのも」

それでも、と。傷付けられたくはないと。大事だと思っからこそ、善と善の乗った天秤を片方に傾けた。

愛、友情、信念、利害……お題目は何でも良い。

ただ確実に言えるのは、完璧な選択をしなかったというだけ。

「それでも俺達は　フェイト達の味方で居るんだ」

何故と問う事はしない。その想いも気持ちも、ここに居る者たちには伝わっているから。

「そして　それは相手も同じ筈だから」

だからこそ、全力で相手は向かってくるだろう。己が護りたい者救うべき者の為に戦う事。その為ならばどんなことでもする筈だ。

「だからアルフ。ここで待つて欲しいのは戦力的な問題だけじゃない。

アルフが護らなくちゃいけないのはフェイトだ……主の為に思うなら、彼女を一人にさせていで上げて欲しい」

「……結局、足手纏いだ、ってのは否定しないんだね」

肩を竦ませる恭介に、アルフは良いさ、と困ったように微笑んだ。

「確かにあたしはフェイトの使い魔であって、管理局の一員じゃない。
い。

……あたしはフェイトの傍に居るよ。ただし！」

大声にビクン！ と跳ねあがる恭介に、詰め寄ったアルフは人差し指を立てる。

「ちゃんと戻ってきなよ。それから、負けたら許さないから」

「……判っているさ」

彼女流の激励にガッツポーズを取りながらも、バリアジャケットによって変成させた黒のロングコートを羽織ると、その後には京谷とプレシアも続く。

すれ違ったままの敵。話し合えたなら、協力し合えたかもしれないな
かった存在と戦う為に。

「奴らはここに来ると思うか？」

「どうだかにゃ〜？ ま、気付かなくても来栖が意図的に流すだろうし、後は待つだけじゃん」

見渡す限り視界に広がり続ける砂漠。この無人世界に彼らが来たのは、闇の書の蒐集と言えはそうであり、そうでないとも言える。

「リンカーコアはあくまで連中の物を。管理局……ひいては我々と同様の者との決着はここで果たさなくてはならん。そう初めての邂逅で宣誓したのだからな」

「仁は律義だにや。俺は別にどっちでも良いんだが、奴らに関しては五分五分……最悪日和見で共倒れを狙われる事も考慮した方が良い」

奴ら……そう、御剣や祐治が待っているのは管理局の少女達でも、あの墮天使に呼ばれた面々でも無い。

「一応訊いておくが……直也には伝えていまいな？」

「あつたり前じゃん。もしかしたら俺らを嵌めた奴がこのこ現れるかもしれない、なんて言ってみる。」

術式で強制的に非殺傷になってるとはいえ、ややこしい事になるのは確実だからにや。

俺達の内、誰かが直也に気付かれずに拘束して自供を促す。その後はこつちも被害者だって立証出来りゃ、まあ事件解決後もある程度は融通がきく。そのためには、

「マクスIIトレンジアと北澤直也の両者を一騎打ちにさせ、戦いを長引かせる、か……」

初見での戦闘で決着がつかず、かつ無傷であった事を考えればそれなりに時間は稼げるだろう。

最悪、こちらを嵌めた者が現れなかった場合も考慮しておくべきだが、その時はその時で状況が悪化すれば撤収すれば問題ない。

「何にせよ、私達もこのまま固まっては総力戦になりかねんし、釣れる物も釣れん。」

連絡は私の方で回しておく、二人……最大でも三人以上で動かぬよう桜の方には念を押しておくれ」

判った、と祐治は頷き、その場を離れる。

そう。彼らはこの地で遺恨を断つのだ。

相容れぬ敵。立場の違いから異なった道を歩んだ存在と、決着をつける為に。

015 取るべき選択（後書き）

c・m・「次回はいよいよ主人公組の戦い！ 第15話は各々の状況確認です」

暁葉「……何だろう。戦いがメインになる筈なのに策謀の予感しかない」

c・m・「一名とんでもなくウザくなりそうな奴がいるからね。マクスには本気で頑張ってほしい」

暁葉「……まあ。俺は出番が無いんだけどな」

c・m・「大丈夫！ きつと、多分、おそらくSTSでは出番があるから！！」

暁葉「一つとして安心できない……」

c・m・「大丈夫。多分……多分活躍の機会はあるから！！」

……さて、そろそろ読者様のお礼に移りましょうか。

久住祐治さま、Hagailazさま、水玉さま、神崎はやて様、笑う男さま、RYUZENさま。ご感想を頂き、ありがとうございます！

暁葉「次回、いよいよガチバトル開始！」

c・m・「勝利の栄光は誰の手に？ それでは、今日はこの辺りで失礼します」

果て無く広がる蒼天の下、比喻ではなく肌を吐き焦がす灼熱を孕んだ熱風に舞い上がる砂塵が、相克する両者に割って入る。

片や白銀の戦装束を身に纏う長身の男、御剣 仁。

片や漆黒のコートを靡かせる瘦躯の男、天宮恭介。

両者がまともに対峙した事はない。彼らはただ遠方よりそれぞれの手札を知り、知った上で互いが互いの相手となる事を選んだに過ぎない。

この相手には、自分でなくてはならないのだと。

それは決して驕りではない。互いが互いに危険だと判ったが故の判断であり、それ故に両者は外気とは別の熱と寒さを肌を感じていた。

「自己紹介は、必要か？」

「何者であるかを論議する必要があるまい？ 私は君の敵であり、君は私の敵だ」

それこそが真実。それこそがこの場における全てなのだと言つて御剣に、恭介は静かに問う。

「寄り合う事は、出来ないのか？」

何を今更と一笑する様な問い。最早両者の溝は決定的であり、後戻りなど出来よう筈もない。
それでも。

「俺達とお前達が違うのは立場だけだ……悲劇なんて誰も望んじやない。今からでも、」

「ならば 何故あの子の元に来てやらなかった」

結局はそれが全てなのだ。もし彼らがすぐに八神はやての元に来てくれたなら。

彼女の苦痛を知り、悲劇を止めたいと願っていたのなら、どうして初めから来てくれなかったのか。

「あの子は孤独だった」

……涙さえ流さず、不幸を不幸と思わず日々を享受していた。

もし何もかもを敵に回しても、あの子の傍に居てやれる強さと優しさを持った者が一人でも多かったならば、もし君たち全員が初めから来てくれていたら、こんな事にはならなかった。

少なくとも、より早い段階で、平和的な解決が出来た筈だった。

だがそれは叶わぬ幻想だ。現実は今という敵対構造を作り、今も彼女は苦しんでいる。

「だから私は戦うしかない」

たとえ世界が敵であっても、彼女を守る騎士であると。

そう胸に誓ったのだから。

「だから私は、」

八神はやてを護る

「戦うと決めた」

騎士になるしかない。だから！！

「剣を執れ。お前と戦う為に、私はここに居るのだ!!」

もう交われない両者の道。だがそれは判っていた事だ。憎しみでなく、善悪でなく、ただ立場の違いによって剣を交わらせるしかない。

不毛だと、莫迦なことだと嗤えるのは愚者だけだ。

「判ったよ……」

互いが互いを正しいと知りながら、それでも戦う以外の道はない。護りたい者が居て、胸に秘めた想いがある。もし彼らを嗤うというのならば、それは決して赦される事ではないだろう。

「……考えてみれば、後戻りなんて出来る筈もない」

もしもつと早く八神はやてと出会っていたら……そんなIFは、少なくとも天宮恭介には有り得ない。

何故なら彼はその時、別の者を救う為に動いていた。一日でも一秒でも早く。

悲劇によって狂わされた道を進むしかなかった家族を自由の身にする為に動いていた。

そんな彼に『まだ救え』というのは不可能であり酷である。

だが、それでもと思うのだ。自分には無理だったとしても、もし動く事の出来る者が八神はやてに逢えていたなら、と。

誰か一人でも多く、八神はやての元に集まっていれば、確かにここまで事態にはならなかったのかもしれないのに。

だから彼は　　今を動く。

「俺達は進むだけだ。この戦いの結末がどうあっても、悲劇を砕き、奇跡を掴む」

道は違えど、目指す所が同じ。ならば、剣を執る事に迷いはない。

最早言葉はなく、ただ両者は己の全力をぶつけ合った。

「よう。ちったあマシになってきたか？」
「……………」

目の前に立つ少年、氷上京谷その問いには答ええない。ただ黙し、俯くその表情には微かな陰りが垣間見える。

「おいおい……困るじゃん。俺達は敵同士、憎み憎まれでやってきたじゃん。」

何だつてそんな面してんだ」

興が削がれると言わんばかりに軽薄な態度のまま肩を竦めるのは久住祐治だが、彼にしてもこの対応は予想外に尽きたのだろう。

先の発言通り、既に臨戦態勢を整えていたというのに、いざ始める段になってそんな顔をされては困る。

「やる気が無いならとつと帰った方がいいじゃん。生憎と俺はあんたらなんか心底どうでも良い。邪魔立てするなら容赦はしないが、そうじゃないならすっ込んでろ」

「……判ってるさ。けどよ、お前らが何をしたいのかは判ってるつもりだ、だから」

「『だから今更仲良くしましょう。僕達は手を取り合えるんです』？」

生憎だが、もうあんたらじゃ全部は救えない」

そこまで言つて、祐治はその表情を変える。何処までも重く、何処までも冷たいモノへ。飢えた獣の様な眼で、見た目だけは自分より遙かに小さい存在を捉える。

「あんたがウジウジするのは勝手だ。だがな、」

遙かな高空。大空へと佇んでいた両者は、既に額がぶつかる程度の距離に迫っていた。

「……ッ」

かちやりと、黒い刃の鍔元が喉元に当たる。刃を避ける暇もなく、両者の対決はここで終わるだろう。だが、

「言っただろう？ こっちにもこっちの事情があるんだよ。」

精々踊れ。あんたをぶつ飛ばすにしても、早すぎちゃ意味ねえんだよ」

言葉と共に蹴りを放つ。眼下に広がる砂塵へと、埋もれさせる事を前提にした容赦ない一撃はしかし。

“分身！？”

質量を伴わず、高速移動による残像で『そこに居る』かのように見せる技術。

その意味が指し示す事は一つ。

「お前に蹴られんのはもうこりこりなんだよ」

視界から消える程の移動速度に加え、魔力強化された全身のバネを乗せた一撃は、初戦での久住祐治の一撃と同等の威力を持って放たれる。

勢い良く大地に突き刺さり、水柱ならぬ砂柱を上げて大地に叩きつけられる祐治に、指で喉元を掻き切るポーズを取ると、傲岸不遜に言い放つ。

「いいぜ、お望みなら乗ってやる。そもそもお前らには借りがあるからな。」

話す気が無いなら、事情とやらを負かした後でたつぷり聴いてやる。

それでハッピーエンドにするのが目的なら全力で手助けしてやるよ！！！」

「そうかい……なら、取り敢えず俺にぶっ飛ばされる所から手伝え！！！！」

一足跳びによって上空へと戻る祐治に、京谷もまた己が得物を持って肉薄する。

彼が用いるは斬魄刀『斬月』。鞘も柄も鍔もはばきも無い、出刃包丁めいた形状の身の丈を優に超す巨大な刀身のみの刀。

本来ならばその巨大さゆえに刀に振り回されかねぬような代物を、己が手足のように操る。

「潰れる！！」

「吹き飛ばす！！」

同等の威力、同等の速度。伯仲する両者の剣戟は互いを吹き飛ばし、再びその距離を開かせる。

互いの顔にあるのは笑み。ここに、両者は真に好敵手として向き合った。

「……で。詰まる所、どうしてこんな組み合わせが成立するのかしら？」

「……俺がスパイだってこと忘れてねえよな。取り敢えず適当に相手してくれ。その内決着つけたように見せかけて離れるからよ」

納得がいかないとばかりに視線で不平を訴える桜に、興輝は念話で対応する。

『ならシグナムの相手でもしてなさいよ……こっちは向こうが心配でならないんだけど』

『俺が来た時点でシグナムはプレシアと力手合ってたんだよ。最悪捕まりそうな状況になったら手を打ってやる』

そこまで言われては仕方が無い。少なくとも彼らを嵌め、敵対構造を作った連中を誘き出すにはある程度の時間を稼ぐ必要がある。

その為には……。

『今は均衡を崩さない事だな……問題は裏事情を伝えてない守護騎士達だが、まあ数ではそっちで勝ってるし問題ねえだろ』

『ま、そっという事なら良いわ。見た目だけは派手に行きましようか』

言いつつ、桜は自身の身体を魔力で満たす。

『白光』。本来戦闘時に着用するバリアジャケットがないため、自身と同レベルかそれ以上の相手と対する場合はこの状態になる。

基本的に魔力切れは起こさず、スターライトブレイカーの直撃でも傷一つつかないようにコーティングされるため、今回の様な状況にはうつつつけの魔法と言えるだろう。

「始めましょうか。あんまり手間取らせないでよ!」

「こつちの台詞だ。すぐに終わらせてやる!」

あくまでも大声で、尚且つ大胆不敵に。目を欺くのなら演技は目立った方が都合が良い。

加えて。

『高みの見物と決め込んでいる連中の肝を冷やせれば、言う事無いわね』

『同感だ!』

未だ姿を見せぬ黒幕に対し、両者は黒い笑みを浮かべるのだった。

そして。彼らが善と善の対決だというのならば、この対決は一体何と称するべきか。

片や少女に見守られながら長剣を手にする巨躯の男。

片や全身を外套に包み、顔さえフードによって判別できない男。

日の差さぬ密林。暗く深い森で対峙する両者は、ただ無言でそれぞれの剣を突き付け合う。

宝剣と魔剣。それぞれの在り方を明確に示す得物を固く握りながら。

「二人掛かりではないのか？」

「テメエの相手は俺だ。姫さんに割って入られるつもりはねえよ」

その言葉にフードの男はくつくつと暗い笑みを発する。とはいえ、真に笑みを見せているかと問われれば否だろう。

口元や顔こそ見せていない物の、その声音は明らかに感情を欠いている。

「戦力にもならず、戦わせる気もない女子供を戦地に招く……」

「俺だけで充分なだけだ。一々下らねえ事を抜かすな」

たとえ他の者らがどのような形で向き合うにせよ、ことこの男に關してだけは共通する思いがあった。

猜疑と怨嗟。未だ正体を明かさぬ男の素性、もしやと考えている正解。

しかし、正しい筈の答えに対し、未だマクスを含めた管理局側の人間は答えに辿り着いてはいなかった。

何故なら、北澤直也は今も別の場所に居るのだから。

無言のまま、静かに男は魔剣を構える。

黙れと言われたから黙ったのではない。既に話し合う必要が無いと判断したがためにその思考を死合う物に切り替えたに過ぎず、これより先は血と鉄の領分と弁えるが故に。

「……………」

そして、それに呼応するようにマクスもまた宝剣を構える。
ただ静かに、されど苛烈な戦意を以って、両者は地を蹴った。

無窮にして蒼天の空を、幾条もの流星が駆ける。

宝具掃射。綺羅星の如く輝く殺意は今まさに敵対者を穿たんと攻め入るも、その悉くが軌道を変え、あらぬ方向へと飛び交っていく。それは狙いを外している訳でも、ましてや自然に起こった風向きに左右された訳でも無い。

天宮恭介の持つ一つの武具が、無数の武装の本領を發揮させずにいたのだ。

宝具『打神鞭』。風を操るといふ、魔法具としての定番とも言える能力を持つそれは、それ故に汎用性は高い。

風の刃によつて相手を切り刻む事も、竜巻を生む事も可能である。尤も、今回用いたのはそのような大掛かりな物ではなく、あくまでも直線状に向かう攻撃の軌道を変えらるというシンプルなものだ。

だが、如何に単純とはいえそれを啜う事など出来よう筈もない。最少の労力で最大限の効果を發揮するという面において、確かに恭介の『打神鞭』は成果を上げているのだから。

「だが、その程度の風では防げんよ」

これまでの様な直線的な軌道ではない。回転する刃は四方八方より恭介を取り囲み、今度こそ狙い過たず串刺し、切り刻まんと迫り、

「どうかな？」

両の手に持つ扇の衝撃波が、宝具の嵐を吹き飛ばした。

「『五火七禽扇』の衝撃波……成程、かの妲己の宝具ともなれば高々千年かそこいらの歴史を持っただけの武具では相手にならんか」

そも封神演義の世界は中国殷王朝末期……紀元前十一世紀頃にまで遡る。

永き歴史を積み重ねる事によって神秘はその位を上げるといふのならば、宝具は正に最高ランクの宝具と言えるだろう。

“しかし……重ねた歴史のみが全てという訳ではない”

武具その物の特性にして能力。如何に歴史の積み重ねによって強度、威力を増そうとも、武器そのものの格であれば他の宝具でも十全に渡り合う事は可能である。

故に御剣 仁は冷静に状況を分析し、敵戦力を考察する。

天宮恭介が主として用いるのは宝具……他に手札もあるだろうが、少なくとも信頼に足る武装として愛用しているのが事実である以上、今はそれに合った武装を選択すべきだと考える。

戦闘時における焦りなど有ってはならず、また軽拳な行動は慎むべきとするのが御剣のスタンスだ。

感じるな、考える。戦地にて戦士とはかくあれという見本のような思考を以って現状に対応し、己が手にすべき武装を定める。

右手には深紅の長槍。左手には流麗な長剣。それらを手にし、改めて目の前の敵を見据える。

「さて、千引きの岩を通る覚悟は有るか？」

千引きの岩　その別名は道反の大神にして、黄泉比良坂を塞

ぐ岩であるが、その口上に、恭介はそれがどうしたとばかりに首を鳴らす。

「生憎と、そんな覚悟は更紗無い」

「良く言った」

そこに地があるかのように空を駆ける御剣に、恭介は五火七禽扇を煽ぐ。岩を砕き、歴戦の仙人達でさえ吹き飛ばす衝撃波を前にしては如何に御剣 仁と言えど、ただでは済むまい。

だが、思考の想定は現実の状況によつて塗り潰される。突如展開された七枚の花弁による楯は衝撃波を無効化し、左の手に持つ剣は一刀の下に斬り裂かんと翻る。

「クソ……こんな筈では!？」

最早絶望しかない状況。確実に防げると確信していた一撃を無効化されたのでは、当然のごとく隙が生まれる。

「なんて言うと思ったかボケエ……!!」

筈であったが 御剣の長剣はそれを遥かに凌ぐ長剣によつて阻まれ、のみならずその身体を切り裂いた。

これぞ寶貝『青雲剣』。金鰲島に住まう妖怪仙人『魔家四将』が一人、魔礼青の用いる寶貝であり、その能力は一度振るえば同時に複数の刃が現れ、敵を切り裂くという特性を持つ。

厄介なのは目に見える斬撃が剣による直接的な攻撃のみであり、他の刃はその瞬間まで現れず、位置も確認はできないという事だ。

防ぐための一撃がよもや攻撃に繋がるとは思ってもみなかったのだらう。

己に優位な間合いを確保しようと後退するも、それを見計らった

かのように恭介は青雲剣による刺突を放つ。

「^{オイン}瘋ー!!」

掛け声と共に放たれた刺突は明らかに間合いの外。だが、それはあくまで実体のある剣のみであり、不可視の斬撃は御剣を槍袢にせんと穿たれる。

「これが……どうした!!」

されど、御剣とて先の攻防で青雲剣の間合いは充分に把握した。本来であれば僅かながらにも回避が可能であった斬撃を敢えて全て受けたのは、剣の効果範囲と正確な間合いを把握する為。

そして、届いた刺突の本数はゼロ。不可視の刃はその右手の槍によつて悉く無効化され、御剣に掠り傷さえ与える事無く虚空に掻き消える。

「そろそろ、こちらからも行かせて貰おう!!」

真紅の槍が、一条の光弾となつて奔る。回避はおろか目視さえ不可能と言える速度で放たれた投擲を防ぐのは、やはり寶貝でしかありえず、同時に槍の特性に気付いた恭介は敢えて両腕で首から上と心臓を守り、身を仰け反らす事で致命傷を避ける。

「ッ……!!」

「良い判断だ」

御剣の持つ深紅の長槍、その真名は『^{ゲイ・ジャルグ}破魔の紅薔薇』。

あらゆる魔術的防御、能力を打ち破る効果があり、物理的手段を持つてしか防ぐ事の出来ぬ魔槍。

この槍の存在は、天宮恭介の様な能力によって武装を用意する者にとつての天敵であり、だからこそ敢えて躲すという方法を用いた。間一髪とはこの事だろう。肩口は確かに抉られたが、自己再生^{リジエネーション}を行使すればものの数秒で傷は癒える。

だが あゝの剣を前に回復など何の意味がある？

天を突く様に高々と振り上げられる長剣は、それ以上の速度を持つて断頭台の如く刃が落ちる。

剣の銘は『大なる激情^{モル・アルタッハ}』。

ケルト神話の英雄、ディルムッド・オディナの持つ二振りの剣の一本であり、如何なる相手であろうとも、一刀の下に斬り伏せる能力を持つ。

先の破魔^{ゲイ・ジャルゲ}の紅薔薇もまたディルムッド・オディナの槍であり、この剣と槍を持つという戦闘スタイルもディルムッド・オディナ本人のものだ。

そう。御剣 仁はただ英霊の武装を扱う事が出来るだけではない。同化した英霊の技術を体得し、その後も使用可能とするその技術は、如何なる状態においても劣化しない、いわば術理に限定された降霊術。

そのスキルの名を『無窮の武練』。

本来であれば降霊術を駆使すれば、その際に降霊を行った英霊の人格や仕草、口調なども反映されるが、今回は御剣とディルムッド・オディナにそこまで口調等の差異が無かった事。

今回の対決に臨むにあたって事前に他の英霊のスキルを予め習得していた事が功を奏した。

もし天宮恭介が英霊そのものと対決しているという事を理解されてしまえば、そこから何らかの打開策を導かれかねなかったのだ。

英霊の能力を帯びるといふ事は利点ばかりでなく、同時に英霊の背景、伝説の因果を負う。

アイルランドの英霊、クーフリーンが『硬き稻妻』カランドボルグに対して逃れられぬ敗北を負うように……。

だが、運氣も含め、状況は御剣 仁に味方した。後は一振り。ただこの剣を振り降ろすだけで勝敗は決し、勝利をより盤石にする為に差嬢に力強く踏み

その瞬間、世界……の全てが変わっていた。

「……………」

驚愕は一瞬。むしろ今までこの手を使わなかった事に対して疑問を抱かなかつた事に、御剣は齒噛みする。

宝貝とは単に形を為した特殊な武具という訳ではない。

それそのものが固定化された神秘であり、人智を超えた産物。この空間そのものもまた天宮恭介の持つ宝貝に他ならない。

遙か彼方まで広がる暗黒の帳に浮かぶ無数の巨岩。この亜空間こそが疑似的な宇宙であり、満天の星から今御剣が踏みしめている足場まで、全てが天宮恭介の用意した世界。

群雄割拠が跋扈する封神演義において、指折りの力を持つ妖怪仙人の大幹部、『十天君』。

その内の一人、秦天君の『天絶陣』であろうと御剣は自前の知識から当たりを付ける。

であれば、取るべき対策も決まっております

「させるかよ」

その対策を見越していた天宮恭介によって、出鼻をくじかれる形となった。

「何故判った？　なんて言ってくれるなよ？」

空間……いや、世界そのものを断つ覇者の剣。そいつの存在は有名すぎる。お前が俺の宝具について知識を持つように、俺も宝具に關しての知識はある。

お前に『乖離劍^{エア}』は抜かせない」

言葉より先、空間から意中の品を引き出そうと瞬間には、炎の槍が御劍の手の甲を刺し貫いていた。

そも、あの剣を用いるには勝利^{カリバーン}すべき黄金の剣以上の溜めが要る。現状況を鑑みればむしろ抜こうとした事そのものが愚拳といって差し支えはない。

だが、御劍　仁には勝負を急がねばならない理由があった。

“ここでは外界との接触手段を持ってない……”

万が一にも仲間が窮地に陥れば駆け付ける事は不可能。仮にこの空間を破壊して脱出したとしても、その時には黒幕は既に行動を起こし、後の祭にさえなる可能性さえある。
故に、取るべき選択は一つだけ。

「……………悪いが、手段を選べなくなった」

空気が変わる。御劍　仁を取り巻く空間そのものが、圧力によって歪んでいく。

もう手段は問えない。一刻も早くこの場を脱し、真の目的を果たす。

その為にこそ、天宮恭介をここで倒す。

「吾請いしは原初の剣。原初の一、始まりの一、終わりの一、終末の一、終末の剣」

世界が歪む。現実を書き換え、自らをこの亜空間においてのみ絶対の覇者せしめる空間宝貝を用いながらも、いま相手が何をしているのかを本能で恭介は察した。

あれは駄目だ。いまあの男が為そうとしているのはこの世界を終わらせるものだ。

「させるか……………!!」

故に、天宮恭介はこの空間における最大の攻撃を行う。

メテオストライク
隕石攻撃。

果てに輝く綺羅星から間近に迫る巨岩まで、この宇宙に広がる全ての隕石が御剣という一個人を倒す為だけに殺意を向ける。

「其は堅牢なりし守護の剣。其は頑強なりし討ち手の剣。其は暴虐なりし霸王の剣。其は公正なりし賢王の剣」

……………だが通じない。これ程の異常、これ程の攻撃。星一つと言わずいくつもの世界をも破滅に呑みこむであろう暴虐の礫が、この相手には通じない。

今なお滔々と紡がれる詠唱。自身の勝利と敵の破滅を誓う魔性の言が、この世界に響き渡る。

それを邪魔立てする存在、有象無象の礫は悉く唯一無二の輝き、歴史に紡ぎ上げられた神秘に砕かれた。

「吾、座より請うは始原の一、終焉の一 出でよ、『剣軍師団』」

そうして顕れたのは、先程の言に比べ、余りにみすばらしい青銅の剣。

だが天宮恭介は理解してしまった、あれこそがこの世界に破滅を、
自分に敗北をもたらす物なのだ。

そうして彼は『天絶陣』^{このゼカイ}の終末^{おわり}を聴いた。

016 決闘 前編（後書き）

c・m・「滅茶苦茶遅れてしまい、本当に申し訳ありませんでした！！第16話、ようやく投稿です！！」

暁葉「……待たせ過ぎる。そして何より話が進まない」

c・m・「言わないで！！ だつてしょうがないじゃない！！ 主人公組同士の対決よ！？

対戦カードとか凄く考えたんだから！！」

暁葉「その結果がこれかよ……ていうか何？ これまだA's中盤だよな？ 物語的にはまだ折り返しもしてないよね？

なにメテオストライクかましてんの？ ドラクエの中ボスステージでゾーマさまと一騎打ちする位間違った光景が広がってるんですけど！？ 裏世界行く前に裏ボス出て来ちゃってんですけど！？」

c・m・「……銀魂の新八風のツツコミありがとう。見事にキャラが崩壊してるわね」

暁葉「俺のキャラってどんなだったっけ？」

c・m・「しばらく見なかったから、皆忘れてたりして……」

暁葉「やめる！！」

c・m・「大丈夫、多分ポニテ男子が好きな読者は覚えてくれてい

る筈!!

さて、ここからは感想をいただいた皆様のお礼に移ります。

RYUZENさま、久住祐治さま、笑う男さま、Hagail
azさま、水玉さま、神崎はやて様、Kyoさま、山田さま。ご感
想を頂き、ありがとうございました」

暁葉「しかし、最初からこんなに飛ばしていいのか？」

c・m「大丈夫だ、問題ない……なんて嘘です。多分今回の決着
に比べると、他の面々が見劣りする可能性が捨てきれません」

暁葉「ああ、やっぱり今回も駄目だったよ」

c・m「最後の最後でエルシャダイ……それでは、今日はこの辺
りで。失礼します」

次回は仕事の都合上何時になるか判りませんが、出来るだけ
頑張って書いて行きたいと思います」

017 決闘 後編

遙かな高空。一面を蒼で彩られた世界に、烈火の如き火花が散る。

「ちい!!」

「クツ!!」

片や漆黒の長剣。

片や巨大な大刀。

久住祐治と氷上京谷。彼らは今まさに己が剣を以て肉薄し、文字通りの意味で鎬を削るも、彼らは剣士ではない。否、それどころか戦士ですらないだろう。

確かに実戦の経験はある。場数もそれなりに多い。だが彼らは剣技や戦術においては素人。日々の努力を怠らず、最低限度のレベルには達している者の、だからと言って技術で競い合う様なタイプではない。

如何に相手の予想を上回り、自分にとって最も有利な展開に運べるか。

故に

「こづいつのはどづだ?」

晒めいた斬月の柄巻を解くと共に刀から手を離す。同時、

「この!!」

刀を飛ばす。まるで鎖分銅か何かの様に柄頭から伸びた晒を用いて振り回し、刀身を自在に操っている。

剣士としてはありえぬ戦法。だが氷上京谷は剣士でも戦士でもない。

そもそもにして能力以外の何かを持ち合わせている訳ではない。故に使える物は使う。出来る事は行う。

何故ならば彼にはそれしかなかった。どれ程強大な能力を持つと、どれ程自在に武器を操れようと、それは決して積み上げた物ではない。

何処までも不安定な土台。一步踏み外せば墮ちる脆い足場。

そんな中で氷上京谷がフェイト・テストロッサの為に戦うには、それ以外の術など無かった。

故に彼は願うのだ。愛する者よ、傷つくなかれ。その一念を以て戦いを完遂しよう。

「常識外れ……何て言っても始まらねえか。

そもそもその刀はそういう使い道もあつたしな」

故に対処法もある。久住祐治を狙うその一瞬。刀が己に対して最も迫る一瞬こそが、最大の好機となり得る。すなわち、

「ここだ……!!」

「!？」

刀が触れるかどうかの刹那、否、事実薄く首筋を斬られる感触。

この一瞬、この状況下では刀を引きこんで手元に手繰り寄せよ、久住祐治の剣が氷上京谷を切り裂くだろう。

そう。相手の剣が一振りであつたならば。

「霜天に座せ

氷輪丸!!」

斬魄刀は一人一振り。あらゆる武器を手にし、あらゆる魔道を用い、あらゆる能力を手にした氷上京谷にとって、そんなルールは存在しない。

創り上げるは氷水の龍。天候を支配し、あらゆるモノを氷結させる斬魄刀。

だが、

「喰われる」

右手を掲げる。まるで巨大な生物か何かは捕食するように、捕食者としての立場が逆転され、龍は右手に吞まれていった。

「こいつー!!」

「対策ぐらい立ててると思ったがな。俺に放出系は効かねえつてよ。まあだが、」

剣が振りかぶられる。収束する魔力。暴凶なる魔狼の牙たる漆黒の斬撃が、今まさに迫る。

「どの道チエックメイトだ」

「ああ、互いにな」

「!?!」

そう。久住祐治が決定的な隙を狙っていたように、氷上京谷もこの一瞬を待っていた。

この一瞬。遠距離を重視した攻防を展開すれば、确实死角足り得る懐に入る。

その瞬間、この刹那こそが全力の一撃を放てるのだと。

「捕まえたぜ、野狼」

突き付けるのはXIEIEIの装飾銃。初見の折と今回、どちらとも久住祐治は右手を掲げ、そして無効化した。

だが、この状況下。ここまで踏み込んだ状態であれば、たとえ露払いの為の銃と言えども間違いない効果はある。

「計画通り」

にやり、と不敵に口元を歪めるのを忌々しげに祐治は見据えた。銃爪が引かれ、剣が振り下ろされる。

直後、紅蓮の大輪が天を彩った。

深く重い密林。光の差さぬ場に相応しい者と、マクス＝トレンジアは対立していた。

「ハッ　　！！」

巨木の如き剛腕より振るわれる長剣の一閃。それを文字通り紙一重にて避けるコート男。

風圧等の対策を施されているバリアジャケットの為に影響はないが、それでも倒壊した木々や裂けた大地からその威力は推して知れよう。

マクス＝トレンジアを爆ぜ狂う暴威と称すならば、コート男は困程度。

この両雄の戦いは竜虎ではなく竜狼。

一撃一撃は重く、果てもなく、そして細緻にして豪快なる剣。それを前に相手取るは、己が役割と術理の程度……言つなれば身の程を知る者の剣。

「ぬ!？」

だが、その剣とて無意味ではない。大地を引き裂く一撃も、海を干上らせる様な能力も持たぬが故に、コートの男は術理を以て相手取る。

言葉など決して発しない。呼吸すらも読ませない。己が何をしたかを理解させる間もなく絶命させる塵殺の剣。

それを前に、マクスはただただ不敵に笑う。

「来な、若造」

応える様に奔る漆黒の魔剣。それをマクスは正面から受け、絡めると同時に足腰と膝のバネで相手の体勢を折り敷く。

日本刀はその刀の鋭さと比べ、耐久性は西洋の剣に大きく劣る。

故に日本剣術は相手の一撃を受けるのではなく躲す事を理想とするが、先に述べた通り西洋剣にはこの理屈は通用しない。

全身鎧の上からであっても相手を叩き潰す耐久性と重量。それこそが西洋剣における特徴であり、それを前提とした剣技こそ西洋剣の術理である。

躲す、或いは受け流すのではなく打ち合わせて体勢を崩す。マクス「トレンジアは知性無き獣ではない。百年余りにもなる長き研鑽と術理の豊富さによって培われたその存在は、間違いなく達人と呼んで差し支えぬだろう。」

そして、だからこそこのコートの男の特徴も読み取れた。

この相手は西洋剣を使い慣れていない。打ち合わせるのではなく確実に避けて斬ろうとするその姿勢。

鎧の上から叩き斬る、或いは隙間を狙う特性上、隙間を縫う為の突きや関節部、コメカミ等といった部分を狙う一撃では無く、身体の内側……動脈を常に狙う斬撃は、硬度に優れる長剣では無く、サーベルやシャムシールの様な斬撃に優れる曲刀を用いた刀法だ。すなわち。

「どうする……このままじゃジリ貧だぜ？」
「……………」

返す事は無くとも意志は読み取れる。この状況下、この戦局にあつて活路を見出せる方法が無ければコートの方は確実に倒れる。だというのに、

“二度も攻めるのか？”

既に一度目で体勢を崩されかけている。膝こそつく事はなかったが、抜けるのにはかなりの苦勞をした筈だ。なのに何故。

“畏、か”

通常ならばそうだろう。だが、例えそうであったとしても乗った上で打ち崩せるという自信がマクスにはある。故に受ける。

先は横薙ぎの一閃。今度は唐竹の一刀に対し、マクスは長い鍔で受け止めると共に刃を滑らせた。

西洋剣の特徴にして秘訣。それは耐久力だけでなく長い鍔と短い柄にある。

敵の大剣を受け止める長い鍔は衝撃を意図的に減じ、意図的に短くされた柄は体重がかからない分、手元で容易に回転させられる。

殺った。敵の剣は虚空を裂いて地へと向かい、マクスの刀身は敵の頭蓋を割らんと大上段からの一撃に入る。

微かにコートから覗く瞳は未だにマクスを捉えているが、それもすぐに視線を地に向かわせるだろう。

それは避けられぬ事象。ここから先、どのような術理を用いようと、コートの男の様な術理では防ぐ手立てはない。

だが。

「ほつ」

男は脇をすり抜ける。あの状況、あの体勢で防ぐのではなく『逃げ』を判断したのは指ものマクスも予想外だったと言わずにはおれまい。

だが、それは大上段の一撃を躲せたというだけ。背を向けた敵を振り返って斬るだけで、マクスは決着をつける。

故に、今度こそ仕留めると振り返ろうとした所で、剣を上段に担いだまま背を見せる敵を視界に収め、

「は、あ？」

脇下から零れる血に、視線を移す事になった。

勝者と敗者。その形は確かに先程まで決定した筈だった。

何と言う事はない。あの一瞬。マクスが手首を用いて剣を返すのを捉えた男は、それを正確に真似たのだ。

手首によって返された剣を上段に担ぐように運び、そのまま相手の脇に刃を当てて滑らせる事で斬り裂く。

人体急所として脇下が挙げられるのは、そこが血管・神経の溜まり場である為だ。

腋窩動脈、或いは腋窩神経を斬られればどうなるかは想像に容易い。

相手を追って振り向いた瞬間、腕が上がらず、いつの間にか腕全体が動かなくなったかと思えばショック死によって絶命する。

そう……絶命する筈だった。

「俺じゃなけりゃあ、テメエの勝ちだったな」

上がる筈の無い腕。振り下ろされる筈の無い剣が男を背後から強襲する。

「……………！？」

斬った感触が確實であった事が災いしたのだろう。いや、そもそもして確かに血は撒き散らされていたのだ。死んだかどうかを判断する必要性など何処にもなかった。

だというのに。

「生憎と俺は死に難くてな。完璧に殺したけりゃあ、首をぶった斬る位はするんだな」

マクスⅡトレンジアは言いつつ剣を担ぐ。何処までも平坦に。貴様では殺せぬと、そう言外に告げながら。

「どついで」

「事なのよ……………！？」

その事態にいち早く気付いたのは、どの主人公でも紡ぎ手でも無く、事情も知らぬ者たちだった。

すなわち、プレシア・テスタロッサとシグナム。

ある種因縁と言えば確かに因縁と呼べる対決であり、それ故に両者は苛烈な戦いを続けていた。

雷撃が天を裂き、灼熱の炎剣が大気を焦がす。

燃えて焦がれ轟き裂けよ。愛する娘を傷付けた魔将。気高き同胞を傷付けた魔女。

騎士としての誇りに賭けて。

母親としての意地を込めて。

「主の為に」

「娘の為に」

ただ我らの愛の為に。

「貴様らを決して赦しはしない!!!」

戦いは正に終局へ。ともすれば相打ちとなる筈であった趨勢はしかし。

「がつ!」

「な、に……?」

プレシアの背を貫き、背後から伸びる腕。仮面を被った長身の男は、果たして何処から現れたのか。いや、そもそも何者なのかさえ判らない。

だが、男は静かに握っていた手を開き、淡く輝くリンカーコアを見せつける。

「 さあ、奪え 」

どうしようもない悪魔の誘惑。果たしてここで乗ってもいいのか？ それをする事は騎士道に反する行為ではないのかとしばし考え、

「何を迷う、シグナム」

「ザフィーラ？」

唐突に、背後に立っていたザフィーラが、掠め取る様にリンカーコアを吸収した。

「こいつらが何者かなどどうでも良からう。目的を果たせ」

「しかし……………」

「どの道、選択肢など有るまい？ 主を想うのなら、ヴィータの方の加勢にでも行ってやれ。背後から狙われるようなら俺が喰いとめる」

“ 俺……………？ ”

その一人称に引っかけかかりを感じつつも、まず目の前のザフィーラが偽物などという事はありえない。

守護騎士という物は相互に繋がっている。真贋の違いなど目を瞑ろうとも判るのだ。

故に、一先ずはザフィーラの言う通り背を向ける。

シグナムが視界から遠のく頃、ザフィーラも仮面の男も、元の場所にはいなかった。

果てなき砂漠を荒野と呼ぶなら、今眼下に広がるのは営みと称するに足る景観だろう。

大地を二分する巨大な水脈、灰とも骨の粉末とも取れぬ乾いた砂塵でなく、青々と生い茂る密林は確かに命の息吹を感じ取れる。

その営みを目にしたながら、ヴィータは眼前の二人組と対峙する。

高町なのは。神崎龍也。

「お前ら……」

「また会ったな」

「出来れば、ちゃんとお話がしたいんだけど」

「は？」

「とぼけるなよ。最初に会った時、君が何をしたのか忘れてる訳じゃないだろ」

「寝ぼけんな。そんぐらい判ってら、あたしが、」

言いつつ、ヴィータはデバイスを構える。その瞳は嚇怒に燃え、同時にあの日、何も出来なかった自分を恥じて。

「テメエらにコテンパンにされた事位な!!」

「交渉の余地なしみたいだな!! 長く生き過ぎてポケでも進んだのか!!」

「待って、龍也君!!」

「なのはは下がって!!」

制止を振り切る様に龍也は跳び出す。

ただでさえ大ぶりなヴィータは、クロックアップを発動させた龍

也にとつて静止しているも同然。誰よりも速く、何よりも速く、己の一撃で決着をつける。

もう高町なのはを傷付けさせないと。もうあんな目に遭わせたくないのだと。

ただその一心が彼に戦闘という意思を持たせた。

カードをセットすると共に『FINAL VENT』という電子音が鳴り響く。

自身の背後、赤き竜の吐きだす炎弾の爆風によって推進力を得た蹴りがヴィータの腹部へと突き刺さる。

「吹き飛べ……………!!」

死なぬ程度の威力に抑えたとはいえ、砲弾の如き蹴りを受けて、人体が貫かれなかったのは幸いというべきだろう。

とはいえ、それでもヴィータにとってこの結果は無惨と言っていない。

何も出来ない。何も成し得ない。

「畜生……………」

意識が遠のく。無念と共に密林へと落ちるのを、彼女は受け入れる間もなかった。

『ヴィータ、返事をしろ！ ヴィータ!!』

念話で応答を求めるも、返事はない。

焦りと怒り、その二つに苛まれそうになるも、一刻も速く現地に向かうべきだと判断し、

『そういう訳には、行きません』
『な……』

朱色の一矢が、シグナムの頬を掠めた。

『何故だ……直也ならばいざ知らず、何故お前まで！』
『ああ……やはりそうだったんですね』

言葉と共に、赤毛の髪を靡かせた少女が現れる。

普段の騎士甲冑では無く、十五という年相応の出で立ち。だが、その瞳に宿るのは猜疑の念だった。

「何？」

「兄が打ち明けてくれた。貴女には信用されてない。

酷いものだ……普段から同輩だの何だのと言っておきながら、牽制していたというのが事実だったとは」

口調が変わる。先程まで見せていた親密な口調ではなく、騎士であつた頃の彼女の口調に。

「兄は思いつめた顔で言ってくれた。『こんな事を話せるのは、君しかない。信じて欲しい』女泣かせな文句だが、多少過激な行動を取れば猜疑の目を向けている人間の名を上げると踏んだのでな」

できれば信じたくはなかったが、と呟きつつ弦を絞る。

「待てセレノ！ お前はあの男に騙されている！ 私は牽制してな

どいない!!」

「ならば何故兄を敵視した？ あれ程まで貴方達が傷付けられた事を悔やんだ兄を。」

貴方達が居ない時も、貴方達の事を樂しげに話していた兄を。

貴方達の為に今も戦う兄を」

「……………」

確かに北澤直也はシグナムを敵視しているかと問われれば、思い悩む。

シグナムは北澤直也の暗い一面を知ってはいるものの、やり方が非道である事を除けば守護騎士に対して協力的だった。だが。

「お前がここに居る事が、その証明だ……と言っても聞かんだろうな」

「戯けた事を。兄はここに来る前に言った、信じて欲しいとな。

肉親を信じぬ者など、余程でも無くば居まい」

「悪いが、押し通らせて貰う!!」

「ぐ……………」

「まったく……………それでよく動く」

熱砂の地獄。白骨の如く乾いた砂上で、御剣 仁は両膝を着いていた。

当然だ。何故なら彼の両足は既にミイラの如く乾き飢えているのだから。

「まあ、これ以上は俺も手詰まりだ。試合に勝ったのはお前だが、勝負自体はドローだな」

確かに御剣 仁は間違えてなどいなかった。己が持てる至高の一振りをもて敵の宝貝を完膚無きまでに破壊し、のみならず、こと天宮恭介の『武器』による攻撃はその全てを無効化され続けている。『剣軍師団』。ヒトが手にした武器と言う概念の総体にして、過去、現在、未来の座に存在する武器の集合体。

これに傷付けられれば、世界における因子の一つである『武器』に否定されるため、相手は存在を保てなくなる。

ありとあらゆる概念・神秘を内包している為、この剣を防ぐ事はおろか、この剣が振られた時点で相手は切り裂かれているも同然である。

故に相手の攻撃とこの剣が克ち合った時、相手の攻撃はキャンセルされるといふ埒外な特性を持つ。だが。

「ダメージまでは無効化出来なかったらしいな」

天宮恭介。彼が用いた宝貝は何も『天絶陣』のみではない。

この広大な砂漠に溶け込む様に、彼の宝貝は最初から存在していた。

宝貝、『紅砂陣』。果てなき砂漠こそがこの宝貝の空間であり、空間内の砂を操り敵を埋没させる事も、砂の巨人を用いて圧殺させる事も可能だった。

尤も、天宮恭介はそのどちらも使用していない。彼が用いたのは『紅砂陣』という空間の特性。

この空間に閉じ込められた者はその肉体を風化させられ、やがては砂となって朽ちる。

御剣 仁に最初から術中に嵌まっていた事を悟られぬよう、風化の速度を弱め、天絶陣に移動・併合する事で意識を引きつけた時点

で天宮恭介の策は十中八九完成していた。

あそこで『天絶陣』によって倒されるならばそれで万々歳。仮に倒れなかったとしても、ダメージの蓄積だけは避けられず、余力を残させるような真似はしない。

「戦局に固執するあまり戦場を見余ったな。

とはいえ……まだ剣の力は完全に出し切っていないだろう？」

疑念は当然である。あの剣の攻撃を受けたが最後、天宮恭介は絶命していた。

彼が生きているのは、攻撃を宝貝のみに絞り、かつ出力を極限まで抑えた為だ。

その為、本来であればこの剣を用いた代償としての二十四時間の能力封印もまだ猶予がある。

「その剣を解除して魔力を回復に回すか、それとも治療用の宝具を用いるか、どちらにしても結果は一緒だが、巻き返すか？」

そう。結末は何も変わらない。たとえ御剣 仁が回復に専念したとしてもそれは敵に隙を見せる事になるし、離脱の為の空間転移も残す事を考えれば、天宮恭介に軍配が確実に上がる。

「……いや。口惜しくはあるが、ここは引かせて貰う」

「そうか、それで!？」

「どうした？」

「仮面の男が出た。ここから南西に一人と北西に一人……それと」

そうして息をのむ。そこから先は誰もが想像していなかったために。

「もう一人……同じ仮面の男が居やがる」

「どういう、」

「事なのよ………!!?」

時間は遡る。霧河・A・桜と東 興輝の対決。見た目こそ派手だが威力はそこまで高くない、演出効果を狙ったものだった。だが。

「コイツ!!」

「戦い方が違う!」

両者の間に入った仮面の男は、空間と空間を繋げる事によって、死角から攻撃を繰り出す。

半ばより断たれた腕は敵の背後に回って銃爪を引き、虚空から伸びた砲弾が二人を焦がす。加えて、

「まだるっこしい!! 一撃で決めるわよ!!」

「今は共闘させて貰うぜ!」

興輝と桜。ビームライフルと光刃が敵を捉え、完膚無きまでに粉砕しようとした所で、

「しま、」

「この、」

その一撃が、自分たちを焼き尽くす諸刃の剣となった。

空間の連結。まるで攻撃が反射したかのように二人の側面から現れた一撃は、蒼い空を灼熱で染める。

「残り二人……久住祐治と氷上京谷は、手を出すまでもなさそうだし、
そう言い残し、仮面の男は消えて行った。」

マクス「トレンジアの身体が崩れる。コートと男と鏝迫り合い、刹那とはいえ身体が硬直した瞬間を狙われたのだ。たとえ彼でなかったとしても、この結末は避けられなかっただろう。」

「不満か？ 己の手で幕を引けなかったのは」
「手段と目的を履き違える真似はせん。むしろこの結果は重畳だ、ザフィーラ」

彼らの正面に佇む仮面の男。その存在に問う為に。

「貴様が黒幕か？」
「……………」

レインシアのリンカーコアを引き抜き、こちらに受け取れと投げ掛ける男は、その問いに沈黙で返すと共に、握りしめたリンカーコアに力を込める。

「……………良いだろう。身の安全と引き換えだ」
「話が早い」

変声機か何かを用いているのだろう。独特の反響音から二人はそれを推察するも、敢えて問う真似はしなかった。

最早仮面の男の姿は何処にもない。ここにあるのは魔力切れで倒れたレインシアとマクス、そして……………。

「敗れたか、ヴィータ」

「気を失っているな。ザフィーラ、ヴィータの保護と退路の確保を。敵はこちらで対処する」

言うや否や、上空を見上げていた二人は即座に作業を分断する。

ザフィーラはヴィータを受け止めると同時に密林の中を通過して移動。

そして、残されたコート男は。

「逃げられると思うな……………!!」

「それは、どちらに對してだ？」

クロツクアップ…………それは通常に人間では視認さえまならず、使用者以外は事実上時を止めるに等しい加速装置。

だが。実に馬鹿馬鹿しい話ではあるが。もしそれよりも速く生身で動ける人間が存在するとしたら？

「嘘、でしょ？」

間違いなくクロツクアップは作動していた。だというのに何故コートの男はその剣を奔らせる事が出来たのか。能力や魔力で何かを増していた訳ではない。

そんな気配はなかったからこそ、神崎龍也は一撃で葬ろうとコートの男に一撃を浴びせようとしたのに。

「龍也く、」

そして、最悪の事態は起きた。決して出会ってはいけない存在。決して相対してはならないと言われた存在は、今まさに高町なのはを視界に捉える。

「貴様か」

「あ、ああ……」

声が震える。あの時の恐怖が、あの時の状況が、今まさに焼き廻しをされようとしている。

「なのは、逃げ、が!？」

「その助言は正しい。高町なのは、知人の忠告は聞き入れろ」

「龍也君を、どうする気ですか？」

「答える義務はない」

言いつつも踵で水月を踏みつけ、呼吸を麻痺させた所で首筋に一撃を見まい、意識を刈り取った。

「や、止めて下さい……!!」

「命令か……」

声が凍る。何処までも底冷えする様な冷淡な声音で、コートのは手にした魔剣を倒れたマクスの首筋に宛がう。

「リンカーコアを抜かれた者は便利だ。何をしようと起き上がれぬ。とはいえ、苦痛を声に出来ぬのは拍子ぬけだがな」

ザクン、と。マクスの片耳が静かに落ちる。

「ひッ」

「この程度では死なん、耳も繋がる」

「お願いします……やめて、やめ」

「下らん」

ダン！ と、一足飛びで踏み込むと共にデバイスを叩き落とし、
なのはの首筋に手をかける。

「涙を流して赦しを乞う……実に良心に響く行為だ。少女の涙は特
に。だが」

「ひ、ぎい」

「温情など乞うな。貴様が涙を流そうが、頼み込もうが知った事では
ない。

貴様に出来るのは一つ。俺を満足させる方法を考える事だ」

「なん、でもします……なんでも、しますから」

「何でも？」

その言葉を、コートの子は反芻する。

「何でも、何でも言ったか！？ クックククク………良いぞ！

その最も愚かしい言葉をよくぞ呟いた！！

どうせ見ているのだらう管理局！ 妙な真似はしてくれなよ、

一人でも近付けば、ここに居る者全員の首を飛ばす！！」

『待って、その子に何をする気！？』

割り込む様に入るエイミーからの通信。だが、それに返す事もな
くコートの子はバリアジャケットの一部を剣で破る。

「きゃあー!!」

『止めなさい!!』

「上着を破いた程度だろう。まだ何もしていないが？ それと……先程の発言は命令と受け取って差し支えないのか？」

『止め、』

「残念だ」

剣を振り下ろす。刃の付いていない部分での当身とはいえ、鉄塊で殴られた事を想像すれば十分目を背けたくなるような光景だろう。意識を取り戻した神崎龍也は、同時に吐瀉物を撒き散らしながら痙攣する。

「龍也君!」

「寝ろ」

起きたのもつかの間、再度意識を失わせ再び向きなおる。

とは言え、未だ一度として高町なのはから視線を外していないが。

「ひっ、えぐ、うっ」

嗚咽で泣き濡れる少女。その髪を引き千切りかねない勢いで引つ張ると、男はただ溜め息を零す。

「詰まらん……もういいぞ小娘、貴様以外の全員を殺す」

「や、やめて……もう泣きません。何でもします、良い子でいますから。わたし、良い子でいますから、だから」

「良い子が……確かに貴様には似合いだ。」

反吐が出る。貴様の様な人間が、このような場に足を運ぶのはな

髪から手を離す。男の声は今、確かに嚇怒と憤怒の念を湛えてい

た。

「魔導師として杖を執る事も、今後管理局へ接触する事も赦さん。二度とその青臭い面を見せるな」

『……それが、貴方の条件で良いのかしら？』

だとしたら破格の厚遇である。確かに高町なのはこの優れた魔導師を失う事は惜しいが、身の安全をそれだけで保証されるのは喜ばしい事ではあるし、何よりこの男に感知されない範囲で行動すればという甘い考えがエイミイには有った。だが。

「そう言えば高町なのは。翠屋に居た母親は元気か？」

その言葉に、今度こそ空間が凍った。この場で密かに意識を取り戻していた龍也も、モニター越しのエイミイも、高町なのはも、その言葉に意識を空白化させられた。

「父親と兄弟は早朝にジョギングを行い、私立聖祥大付属小学校に通う友人も居るそうだな。

確か……アリサ・バニングスと月村すずか、だったか？」

「あ、あ」

「ああ……しかし、こうもバラしてしまつてはマークされてしまうな。

それならこうしよう。君が一度でも管理局と接触し、今後魔導師として動くなら」

何処までも深く暗く、愉悦と殺意に滲んだ声で

「海鳴市に居る人間が、一日一人ずつ消えて行く」

017 決闘 後編（後書き）

c・m・「大変お待たせしてしまい、本当に申し訳ありませんでした！！ 第17話、ようやく投稿です！！」

暁葉「……………例によって待たせ過ぎだな。そして今回、ドン引きだ」

c・m・「もう主人公組の対決とかそつちのけで、色々無茶苦茶ね」

暁葉「直也……………ホントに何やってんの！？ ていうかうちの作者よ
り性質悪いよ！！」

あれもう完全なシリアルキラーだよ！！」

c・m・「……………やっぱり今回の話を書くにあたって読んだ『快樂殺人の真理』が不味かったのかしら」

暁葉「むしろそのチョイスにドン引きだ」

c・m・「まさに外道……………！！　そして言いたい。直也、手前は死ぬ！！！」

暁葉「うん。確かにあいつはもう色々駄目だ。死ね」

c・m・「さて、ここからは感想をいただいた皆様のお礼に移ります。

RYUZENさま、久住祐治さま、笑う男さま、Hagai
azさま、水玉さま、神崎はやて様、Kyoさま、沖縄の力さま、
ミストさま、エセハルト・フォン・ロリータグラムさま。ご感想を
頂き、ありがとうございます」

暁葉「しかし、何故ここまで遅れたし」

c・m。「リアルがあまりにも多忙だったから。て言うか下手した
ら、冬場辺りから半年位飛ばされて更新が出来なくなるかもしれな
いの……社会人は辛いわ」

暁葉「まとまった時間……それは学生とニートの特権か」

c・m。「次回も不定期になりそう……けどまだ全体の修正も終わ
っていないorz」

「づあ!!!??」

「ごっ!!!??」

互いが吹き飛ぶ。青を白の世界に染めて、互いが互いを弾き飛ばした。

目立った傷はない。そもそも攻撃は非殺傷なのだ。命に別条など有ろう筈もなく、戦いは真の意味で決着はついていない。

だが、互いに動けないという事になれば？

「あの野郎……」

「……同じ事を」

氷上京谷も、久住祐治も、極論を言えば同類だったという事だろう。

血を流す戦いなど馬鹿馬鹿しい。

護りたいモノを守るのに、血を流す意味など欠片もない。

血に染まった腕で誰を抱ける？ 他者に涙を流させる者が、どうして涙を拭える？

故に彼らはこれを望んだ。血にも染めず、傷を付けず、ただ無効化のみを行う。

怨みも嘆きもいらぬ。目指す場所は幸福な結末^{ハッピーエンド}、それ以外は必要ない。

氷上京谷は、フェイト・テストロッサとその周囲に居る者達の世界を守りたいと願い、

久住祐治は、霧河・A・桜やシャル達の未来が幸福であって欲しいと望んでいるから。

だからこそ……だからこそ！！

「ここで、倒れる訳には……！！！！」

片や漆黒の裝飾銃を。

片や漆黒の西洋剣を。

それぞれが互いの得物を手に、再び立ち上がるうとしたところで、

『二人とも、ここは引いて……！！』

「エイミー！？」

「誰だあんた？」

京谷にとつてこの通信は驚愕のものであつたし、祐治にとつてはそもそも敵に引けと言われて納得のできる物ではない。

だが、過去にもこう言う事は一度あつたのだ。

二度目の邂逅。彼らが何の前触れもなく唐突に矛を収めた事が。

『仮面の男に……プレシア・テストロツサさんが襲われたわ、それにまた、コートの方も』

「何やってたんだ！ 何のために……！」

『ごめんなさい……とにかく戻つて。今は体勢を立て直さないと、マクスさん達も』

“あいつらまでやられたつてののか？”

正攻法で挑んだにしては早すぎる……敵を過小評価していた訳ではないが、それでもコートの男の方には充分警戒していたというのに。

「判った……お前には恨みはねえが、つるむ奴は選んどけ」

「待て、それはどういう……」

「お仲間にも聴け」

祐治の制止を聴く事もなく、京谷はその場を去る。

何処までもきつく、奥歯を噛み締めたまま。

「それで？ 一体何を望んでこんな真似をした？」

全ての敵が撤退したのを確認した後、ザフィーラは最大の疑念を口にした。

「敵戦力を削ぐ、そんな事さえ判らんか？」

「ならば何故、あの少女のみに限定した？」

それこそが最大の疑問。北澤直也が先述した通りの理由で行動を起こしたのなら、管理局全体の介入を防ぐべく恐喝するのが正しい。

「だから、貴様らは無能なのだ」

だが、北澤直也はそれこそが無駄だと嘲った。

「全体を止める？ 馬鹿が……あの程度の恐喝で諦めるものか」

一つの団体を止めようと裏から手を回すでしょう。そうした先に待つのは、今度こそ完璧に、一切の過ちを犯す事無く裏から殲滅せ

んと迫る敵だ。

「闇の書の破壊規模を考へろ。あの矮小な市の、その上僅かな人命程度の犠牲、妥協の範囲内と判断するだろう」

故に確実に落とせる戦力から落とす。

情に厚く、そんな世の中の仕組みや計算などという言葉ではなく、善意に満ちた少女こそ脅迫するには最適と言えるのだ。

「俺は失敗などしていない……全て問題なく事態は運んだ」

脅迫はそれが真に有用な相手にこそ効果を発揮する。組織とはすべからく、多少の犠牲を是と考へる性質を少なからず孕む物。

そこに人としての情など求める事がそもそも筋違いという物だ。

「とはいえ、後はお前達次第だ……俺も殺される訳にはいかんなな」

「主には何と言っておけばいい？」

「シグナムは漏らすまい、あれはそういう女だ。以前同様、管理局に追われて行方を晦ましているとも言うっておけ。

仮にばらすようなら、その時は俺を見限って一人で務めを果たせば問題あるまい。番犬らしく主の敵を喰い殺せ」

「言われるまでもない。部外者でありながら助力して貰ったのだ。

文句を言う筋合いはない」

ではな、と。何食わぬ顔でザフィーラは背を向けた。

全てが終わり過ぎ去った場。最早管理局が離れ、自分達も又元の世界に戻るべく帰還を果たそうとした際、密林を抜けようとする北澤直也の肩をシグナムが掴む。

「ああ、やはりセレノでは無理でしたか。ですが、貴方が自分に猜疑の念を向けていたのは事実でしょう？」

「貴様……」

コメカミに青筋が浮かぶ。これ以上のたまえば剣を抜きかねぬ程、今の彼女は殺意を孕んでいた。

「お怒りはごもつとも。しかしお陰で話が円滑に進みました。

もう二度と、あの厄介な管理局の少女は出て来れませんし、頁も今回ではほぼ完璧に埋まりました、」

「もういい」

一閃。肩口より袈裟に斬られ、北澤直也は大地に転がった。

「……っ」

鮮血が溢れる。シグナムの様な古代ベルカ式のデバイスに非殺傷設定はない。

日本刀と比べれば明らかに切れ味の劣る剣であろうと、傷を負えば唯では済まされない。

「私が見ていないとでも思ったか？」

何処までも重く、何処までも苛烈な重圧。仲間としてでなく、北澤直也を赦すべからぬ敵として、烈火の将、シグナムは睥睨してい

た。

「今日という日こそ貴様が何者かを理解した。二度と私達の前に姿を見せるな、外道。」

その傷を忘れてくれるなよ……次は首を刎ねる」

脅してはない。これはいわば最後通牒。たとえ今は殺さずとも、次に相見えれば誰が擁護しようとも確実に息の根を止めるという殺意の宣誓。

それに対し、北澤直也はうつすらと笑みを零していた。

「感謝します……貴方の温情と行為に」

「まだ人の皮を被るか……ふん、それとも私に怒りを覚えさせる気か？」

確かにここで殺せばセレノは復讐に駆られるだろう。だが、この男は道化だ。そんな挑発に乗る様な馬鹿げた選択はない。

「孤独を生きる……誰も愛せぬ愚物」

次元空間航行艦船『アースラ』の会議室にて、一同は眉を寄せながら沈鬱な表情を浮かべていた。

神崎龍也は鼻が折れた以外は大した傷は無く、強引に戻して座っているが、それでも自分の不甲斐無さを恥じてか、視線を落として
いる。

実際、こちらの損害は大きかった。レインシアとマクス、プレシ

アはリンカーコアを抜かれ、特に興輝とプレシアに至っては第三勢力によって手傷を受けたのだ。

ここに生きて戻って来られたというだけでも僥倖というべきだろう。尤も。

「エイミィ……なのはさんは」

「意識が錯乱してしまいましたので……一室に送り届けました。鎮静剤を使う程ではありませんでしたが、暫くは一人にした方が良いかと」

起伏の無い、事務的な口調だったが、それだけで狼狽を隠せる筈もない。

そう、とリンディは応えると、話を進めるべく視線を一同へ移す。

「アースラが稼働中だったのが幸いしたわね。彼らとの初見の時よ、救援が早く済んだわ。エイミィ、第三勢力について教えてくれる？」

「皆が出動してすぐ、駐屯場の管制システムが、あらかたクラッキングでダウンしてしまって、指揮や連絡も一時的に……ごめんなさい、私の責任です」

肩を竦めるエイミィだったが、そんな彼女を窺める様に、会議室に同席していたリーゼロッテは声をかける。

「そんな事無いよ。エイミィがすぐシステムを復帰させたから、アースラに連絡が取れたんだし、仮面の男の映像だってちゃんと残せた」

「でもおかしいわね……向こうの機材は管理局で使っている物と同じシステムなのに、それを外部からクラッキング出来る人間なんて居るものなのかしら？」

「そうなんですよ！ 防壁も警報も全部素通りで、システムをダウ

ンさせるなんて……ユニットの組み換えだけじゃなくて、もつと強力なブロックも、」

「お待ち下さい。エイミィさんの懸念も尤もですが、内部犯の可能性は？」

「そんなの有り得ない!!」

激昂するようにリーゼロッテが立ちあがるも、先程まで黙っていた槇野来栖は涼しげな表情のままだ。

「可能性の話です。これまで相手は蒐集に全力を傾けてきたのですよ？　なのにそういつた真似をいきなりするという事は、内通者が、でなくば」

「組織立った第三勢力が動いたって事で良いのか？」

その通り、と興輝の問いに槇野は返す。

「……ここで仲間割れしてもしょうがないでしょう。それよりリンディ艦長、アースラの航行に問題はないんですよね？」

「ええ、アリア。皆さん、今後の事も考えて、予定より少し早いですが司令部をアースラに戻します。各院は所定の位置に、興輝君達は、」

「俺達も戻るさ……傷はそこまで深くないんだ。自分で治す」

「最後にひとつ……槇野来栖さん。北澤直也氏の監視結果は？」

「白です。ここ数日の記録映像もありますので、そちらで確認を、」
『大変です!!』

唐突に起きた通信に一同が振り向く。

「アレックス、どうしたの!？」

「先程、宮本千草さんが連れ去られました!!」

「な！？ 貴方達、何をしていたの！？」

「申し訳ありません……何時の間にかガスか何かで眠らされてしまったらしく、気付いた時には」

「まさか……口封じに？」

「やっぱり、そのキタザワ何とかって言うのが妥当なんじゃ」

「有り得ません。彼は先程までこちらが監視していました」

リーゼロッテの言葉を封殺しつつ、槇野は立ち上がる。

「こちらがデータです。音声と映像、それから通信機器の会話も拾っていますので。」

私は一足先に戻らせて頂きますよ。海鳴市から離れていなければ、発見も可能でしょうしね」

言うや否や、足早に槇野はその場を去り、会議は一先ず閉会となった。

誰も居ない、冷たい一室。

一切の明かりも介さないその部屋で、高町なのはは蹲る様にベッドの傍らで膝を抱え震えていた。

つい先程まで見た惨劇。あの狂気に満ちた恐怖が心臓を締め付ける。

今まで一度として受けた事の無かった理不尽な暴行。屈服させられ、追い詰められ、辱められた。

今までの中でも、傷を受けた事は何度もあった。辛い思いも、苦しい思いもしてきた。

だが、あれは違う。本当の意味での暴力。あんな人とは思えない所業など、彼女には理解出来る筈もない。

だが、それ以上に恐ろしいのは……。

「……電気は点けた方が良い。気持の上でも、明るさは必要だ」

パチンというスイッチの音に、なのははその肩を震わせる。

今日の前に居るのが誰かは判っている、その相手が優しい事も知っている。

だが、だけど。

「……わたしのせいで人が死んじゃう、わたし、わたし」

「もう良いんだ、なのは」

震える肩を抱き寄せて、クロノ・ハラオウンは呟いた。

「もう良い。君が泣く必要も、傷を負う必要も、何処にもないんだ」

温かなその手。年相応とは言い難い小さなその手が、細く華奢なその腕が、今は何処までも強く逞しい。

「わ、たし」

「君が民間協力者として今まで頑張ってくれて、本当に心強かった。だからもう充分なんだ……いや、君は本当はこんな世界に居ちゃいけない」

クロノ・ハラオウン達の立つ場所は、誰もが憧れる様な愛と勇気の広がる冒険譚では決してない。

「あの男の様な存在は……僕の住む世界の、ほんの一握りでしかない」

いんだ」

血と憎悪と涙の上に築かれ、猜疑と怨嗟と背徳にまみれた腐肉の世界。

他者の死と苦痛に愉悦を感じ、己の利潤に全てを注ぐ鬼畜共の跋扈する世界。

その世界に流れる涙を止める事こそ、時空管理局の務めだからこそ。

「君は 君の世界に帰るんだ」

「けど、クロノ君は？」

クロノ・ハラオウンはその世界に残ってしまふ。

こんな狂ってしまった世界に残って、誰かの涙を拭う為に傷ついで。

「クロノ君は、どうして」

そんなにも 強く在る事が出来るのか？

「それが管理局執務官だから……って、言うのが正しいんだろっけどね」

先程までの堅さはない。何処までも純朴な、年相応な少年の顔で、

「君が 好きだからかな」

微笑み交じりに、そんな事を呟いた。

「え？」

「よく言うだろ？ 好きな子の前でカッコつけたって……多分僕も、そんな気持ちなんだ」

その言葉に偽りはなくて。けれど龍也の手前、口に出せなくて。

「もうきつと、逢えないだろうから」

最後に、この心を伝えようと、彼は願った。

「だけど僕は生きて行く。君と会う事が出来なくても、君と君の世界を守るために」

それこそが、それだけが、クロノ・ハラオウンと高町なのはを繋ぐ絆だから。

「だから僕は……何を捨てても君を守る。君に、逢えて良かった……」

そうして静かに時が流れる。この時、この僅かな時間に彼は少しだけなのはを強く抱きしめると、静かに口を開いた。

「行こう、ゲートまで見送るよ」

「クロノ君、あの、」

「すまない、僕の我が儘に付き合わせてしまって」

返事は問わない。最早会えない身の上ならば、最後までその問いを聴く事はしない。

未練は残るだろう。それ以前に神崎龍也が傍にいる以上、自分は何処まで行っても脇役にしかなれないのは判っている。

けれど、それでも想いを伝えずにはいられなかった。

だから充分。たとえ届かなかったとしても、それが下らない自己満足でしかなかったとしても、クロノ・ハラオウンが高町なのは好きだという事には変わらないのだから。

だから彼は、こんな意地悪をするのだ。

……心の何処かで、自分の事を忘れないで欲しいという想いを込めて。

「それでエイミィ、詳しい事は判ったの？」

「判るのは、仮面の連中がかなりの使い手って事。二名に関しては、リンカーコアを抜き取っただけで帰って行っちゃったみたいなんだけど、興輝君とやり合ったのは別格だね」

通常、転移にしか用いない空間移動を敢えて戦術に組み込み、さらには質量兵器で敵である桜さえも落とすのだ。

「……これを見る限り、闇の書の蒐集組と組んでるって訳じゃないみたいだねえ、と。クロスケ、遅いよ」

「民間協力者を送り届けていたんだ。それで、詳しい情報は？」

「取り敢えず、相当の手練って事は確かかな……他の二名もこうだと、正直思いやられるよ。闇の書については？」

「ユーノが調べてくれたが、結局書物でも事前にプレシアが知っていた事以上の事は出て来なかった」

つまりは進展が無いという事だ。気の滅入る様な状況下、重苦しい場で、ロツテはポツリと漏らす。

「三人目、か……」

「ロツテ、何か心当たりが？」

「え？ ううん、何でもない」

エイミイの問いに、ロツテはとぼけた様に返す。

「一応、高町家近辺と海鳴市の調査を頼む。あのコートの男も気になるしな」

任せといて！ とエイミイが腕を上げる。

結局、その日は打ち合わせを済ませて解散という事になった。

「ぬオオオオオ！ 止めるシヨツカー！！ ぶっ飛ばすぞおおおお

！……！！」

「いや、そういうネタは良いですから……それで、本当にやるのですか？」

紅魔館内の一室、ベッドに寝そべる興輝に、槇野は静かに問う。

「後戻りは……出来ませんよ」

「たたく、せつかく気分を解そうっていうのに、乗り悪いな、槇野」

軽口を叩きつつも、今日の前に置かれている状況がどういうものか判っているのだろう。コメカミには微かに冷たい汗が浮かんでいる。が、それに対して当人は織り込み済みらしい。

「……今の俺じゃあ、連中には勝てそうにないんでな。さっさと始めてくれ」

判りました、という声と共に、無数の機材が運ばれる。直後、人ならぬ叫びが、室内に響き渡った。

S i d e - R y u y a K a n z a k i

日が完全に沈み、月明かりが空を照らす。

市街地から離れている為に、夜になれば静けさというよりも暗さによって不気味さの際立つ様な帰路にて、僕は静かに思う。

何も……出来なかったな。

なのはを傷付けない様に、今度こそはと勇んで戦えるつもりだった。

けれどそれは、何処までも逆効果だった。視界に入った時点で逃げるべきで、そんな事も考えずに馬鹿みたいに飛びだして、結局は、なのはを窮地に追いやった。

クロノにも……結果論だけど、助けられちゃったしな。

なのはの安否を気遣って部屋へと足を運んだ時、そこで聞いてしまった。

クロノがなのはを好きだという事、そして、なのはの様態を曲がりなりに安定させた事。

自分ももっと早く向かっていれば、という思いはない。

クロノがなのはの事をどう思っていたのかは知っていたし、あの状況で傷ついた自分が出て行った所で、余計に不安にさせるだけだという事も判っていた。

だからそう……今大事なのは、これ以上なのはを不安にさせない様にする事で。

「あ……直也、さん？」

だから……、今見えているのは最悪の結果で。

「しっかり……しっかりして下さい！」

悲痛な声で、なのはは叫ぶ。

「なんで……どうしてこんな」

玄関の前に倒れた直也さんは、その身体を赤く染めていた。

018 暗躍（後書き）

c・m・「権謀術数渦巻く地獄へようこそ！ 第18話、投稿完了
！！」

暁葉「……………今回もまたドン引きな展開。ていうか、なのは！ そいつ拾うな！ どうみても罠だろ！？」

c・m・「ねえ暁葉君、『まどか マギカ』って知ってる？」

暁葉「どうあがいても絶望……………！？」

c・m・「そんなネガティブな本編を吹き飛ばすべく、こんかいはNGシーンを用意しました。それでは、どうぞ」

NGシーン

なのは「しっかり……………しっかりして下さい！」

直也「う、うう……………助けてくれてありがとう。ねえ、なのはさん
なのは「は、はい！」

直也「僕と契約して、魔法少女になってよ！」

パァン！！

龍也「下がって、なのは！ そいつが黒幕だ！！」

直也「莫迦な！？ 何故俺が黒幕だと判った！？」

龍也「その台詞を吐く奴は100%右ストレートかましたくなる悪役なんだよオ！！」

直也「しまったアアアアア……………!？」

暁葉「直也……QBは色々アウト過ぎだ」

c・m・「その台詞を吐く奴は(r y)」

暁葉「馬鹿め。しかし今回のラストはマジでこんな感じだから困る」

c・m・「さて、腐れ外道談義はここまでにしておいて、ここからは感想をいただいた皆様のお礼に移ります。

RYUZENさま、久住祐治さま、笑う男さま、Hagai
azさま、水玉さま、神崎はやて様、Kyoさま。ご感想を頂き、
ありがとうございます」

暁葉「それでは今日はこの辺りで。失礼致します」

「良かった……気が付いたんですね」

部屋に立てかけられた時計の音と共に、北澤直也は眼を覚ます。自分の知る由もない部屋の内装。清潔感あふれるリビングの色合いは明るく、この家に住む者の心象を実によく表している。

「美由希さん……?」

「あ、今はじっとしていて下さい……両親は翠屋のお仕事で居ませんけど、恭ちゃんを呼んできますから」

とたとたと静かに、しかし手早くその場を離れた美由紀は、すぐさま家族を連れて戻ってきた。

「気分はどうかな?」

「御造作をおかけしてしまい、心苦しい限りですが……今日は何日かお聞きしても?」

ソファに寝そべる北澤直也に対し、恭也はメリークリスマス、と冗談交じりに告げた。

「二十五……それとも、」

「二十四日だ。直也……一体何があった?」

「……その件に関してなのですが、なのはさんは御在宅でしょうか?」

「やはり、なのはに關係が……?」

「いえ、出来れば彼女の耳には入れたくないのです。意識を失う直

前、彼女の狼狽する声が聞こえました。これ以上心配をかける訳には、

「……だとしたら、少しばかり遅かったな」

リビングの出入り口。そこでスカートをつまみながら見やる少女に、北澤直也は嘆息と共に身を起こす。

「今は動かない方が……」

「いえ。自分などより、なのはさんを気遣って下さい。

二日もの間、自分などに時間を割いて頂き、感謝に堪えません。このお礼は改めて」

「待って、待って下さい……」

それでは、と退出しようとした矢先、弱々しい手が北澤直也の袖を掴む。

「直也さん……どうしてそんな風になっちゃったんですか？ もし、わたしが原因なら」

「原因なら、君はどうする気だ？」

その言葉は予想していなかったのだろう。びくりと高町なのはは肩を震わせる。その声は冷たく、決して二の句など告げさせぬという強迫めいたものがあつた。

「赦さない？ 仕返しをする？ そんな感情で、死ぬかもしれない目に遭いに行くのか？」

「あ、あの……」

「前々から言おうと思っていたが……君は自分がどれだけ周りから愛されているのか判っているのか？」

傷付いてなど欲しくない。幸せになって欲しい。その願い、決して声に出さずとも思われているという事が本当に判っているのかと欲しい。

「良い子で……居て欲しいんだ」

『良い子』……その単語に、再度高町なのはは肩を竦める。

「……済まない、怖がらせる気はなかった」

そうして彼は立ち去る。やはり立ち止まるべきでは無かったと。この子に要らぬ重みを背負わせてしまったと心底後悔するように。

「通してくれ……二度も子供に地面を向かせる様な不作法者だ。ここには居座れん」

だが、それでも高町なのはは袖を離さない。これだけは、どうしても言っておかなければならないから。

「ごめんなさい……本当は、直也さんに謝らないといけないんです。わたし達、直也さんの事を疑って……その、随分前から、皆で直也さんを監視しようって決めて、ずっと」
「そうか……ならば、怒るべきなのだろうな」

言って、彼はその手をかざし、

「……ッ」

ぱちん、と。眼を瞑り、歯を食いしばる少女の前で指を鳴らす。

「俺を疑った事……それ相応の理由があったのだろう？」

日頃の行いが悪かったが故に疑われただけ……君に落ち度はない」

当たってなどいない。彼は指を弾くように見せかけただけで、その実鳴らしただけ。

実に滑稽な、子供騙しとしか言えないものだ。

「それでも己の身を恥じるなら……せめて顔を上げて欲しい。

子供が泣く所など、もう見たくないのぞな」

今度こそ、本当に彼は踵を返す。壁に掛けられた時計は午前九時。目的を果たしに行くまでに、最低でも二人は相手取らねばならないのだから。

北澤直也が立ち去った後、高町恭也は自室にてジャケットに袖を通す。

今日はクリスマス・イヴ。本来ならば喫茶翠屋は聖夜を過ごす者たちで溢れ、従業員にとつては稼ぎ時であると同時に地獄の一日であり戦場と呼べる日でもある。

だが、彼が向かうのはそこでは無い。高町恭也が向かわねばならないのは、真の意味での戦場だ。

「恭ちゃん……八景なんて持ってどうするの……？」

かつて父より譲渡された一対二刀の小太刀を差し、門を潜らんと

する彼は仕合に臨む士のそれだ。

その姿に何を感じ入ったのか、美由希は兄に静かに問う。

恭也は動じない。むしろ何処までも清々しく、いつもの兄らしい口調で、

「兄はこれから、サンタを護るために鬼退治に行かねばならぬ」

そんな、思わず嘖き出してしまうような冗談を口にした。

「お兄ちゃん！」

「いや、こうでも言わないと、お前が付いてくるって言い出しかねなかったからな。」

ほら、直也のことだ」

「うん……傷からして、西洋剣だよ。日本刀じゃ、ああまで大味な切り口にならない」

「ああ、それに死んでなかった事が知れたら、また狙ってくるかもしれない。用心するに越した事はないからな。美由希は、」

「判ってる……なのはのことは、ちゃんと見てるから」

その言葉こそ真に聞きたかったのだらう。高町恭也はゆっくりと頷き、

「メリークリスマス」

何処までも、祝福する様な声で自身の家族に背を向けた。

そしてすぐ、高町恭也は戸を叩く。そこは北澤直也の住む家であり、常識的に考えれば気まずさゆえに立ち去った怪我人に会いに行くなど馬鹿げていると言つて良い。

ただし……相手が歓迎していなければの話である。

「性急だな」

「その方が都合が良いだろう」

「勿論だ。詰まらぬ我が家だが、上がつてくれ」

玄関を開け、客人たる恭也を招く。

純和風の作りなのか。膝近くまである玄関口の段差を上がり、一本道の廊下を通る。左右の壁は人がすれ違つには半身になるしか無く、天井も恭也の頭一つ分程度の余裕しかない。

二階に続く階段や物置はリビングのある側……すなわち正面まで行かねば存在せず、縁側に出るにも、この細長い通路を必然的に通るしかないらしい。

「夜中には怪談話に出来そうだろうか？」

などと、北澤直也が冗談めかして言えば、

「実は後ろに居たりしてな」

と高町恭也がにやりと笑う。とても初めて上がる家とは思えぬ程脱力した雰囲気だ。

「ところで、通路に立てかけてある銃はどつにかならなかったのか……？」

「……実は知人から譲り受けたのだが、自分も扱いに困つて居てなモデルガンらしいのだが、貰った手前物置に放りこむ訳にも行かん

し、幸い客人の少なさもあって置いていたのだが、改めて見ると景観としては異様に尽きるな」

「変わった友人だな……」

「否定出来んな」

雑談交じりに長い廊下を渡り終え、開けたリビングへと出る。といつても、フローリングの床ではなく、畳の敷かれた客間であったが。

普段はここで食事を摂っているのか、長机には菓子置きと湯呑が置かれ、奥には台所もあった。

「先日京都の良い茶葉と干菓子が手に入ってな。気に入って貰えればいいのだが」

「いや。流石に怪我人にそこまでして貰うのは悪いし、今日来たのは先の話の続きを聞きたかったからだ」

北澤直也が言いかけた事。高町なのはには聞かせられないと言った敵の事を知ろうとしたからこそ、高町恭也はここに来た。そして……

「ああ、全て察しの通りだ。名探偵殿」

北澤直也の口元が弧を描く瞬間、ダン！！ という踏み込みと共に白銀が煌めいた。

御神流『虎切』。一刀における瞬速の抜刀術にして、その間合いの長大さ故、御神流の中でも遠距離用として用いられる技である。

だが、この技の真の恐ろしさはその斬撃の鋭さ。刃の無き模造刀としてドラム缶を輪切りにし、真剣を用いれば鉄さえ容易く断つ。

北澤直也が蹴り上げた檜木製の長机など、豆腐を斬るより容易く断てる。

だが……。

「骨肉は断てなんだな」

居合の死角たる相手の左側面へと回り込んだのだろう。如何に長大な間合いと斬撃を誇ろうと、小太刀の刃が届かねば意味など無い。

「訊かないのか……何処から気付いたのか？」
「種明かしに興味はない」

北澤直也を敵と見破った理由。それは剣士である恭也ならではの慧眼。すなわち、切り口が鮮やか過ぎるという事。

一切の防御も回避もせず、手心が加えられると判っているが故に木偶の棒となっていたかのような。斬られる為に用意された巻き藁の如きその太刀傷。

或いはこれが、高町なのはと神崎龍也に見られただけで、管理局に運ばれて居れば万事上手く行った事だろう。

だが、高町一家に見られた以上そうは行かない。

「それより……誰かに真実を告げたか？」

「信じたくは無かった……自分の眼が間違っていると思いたかった。こんな形で、剣を交えたくはなかった……！！」

友だと思っていた。共に練磨すべき剣士だと思っていた。だが、それは間違いだっただと。

何故なのだという想いと共に言葉を吐く。

「この半年……短くもお前を友と思っていた、なのに……！」
「成程。要は誰にも告げてはいないのだな」

その泣訴。友として信じていた者の言葉にさえ、彼は耳を貸さなかつた。

「……直也」

「煩わしい……鯉口を切った時から覚悟は出来ていように」

全てを決別するように。目の前の存在を唾棄するかのように、北澤直也は虚空より顕れた剣を抜く。

「それほどまでに覚悟が出来ぬなら、良い事を教えてやろう。」

俺はな、高町なのはを辱めてやった……嗚呼、実に耳触りの悪い声であつたよ。

赦してだの御免なさいだのと……初めから来なければ良い物をこのこ現れ、拳句何でもすると来た。滑稽極まる、被虐願望でもあるのか？」

その瞬間、高町恭也は変成した。人としてでなく剣士として。人を殺す一振りの剣として。

「御神不破流の前に立った事、不幸と思え」

御神不破流……それは人を護る正調の御神の剣士ではなく、他を殺す殺戮者の剣。

表の存在ではなく、裏として生きる外法の剣。

その技量は短機関銃を避け、弾丸さえ打ち落とす。数多くある剣術流派をして尚最強と言わしめる御神流を前に、北澤直也は如何なる剣を見せるのか。

「死合に臨むなど……その時点で誰しも不幸であろうぞ」

そして……ここに来て彼は構えて見せた。

剣道のそれとは比べ物にならぬ程、広く開けられた足幅と沈んだ腰。

一見八双の如き構えのようであれど、軽く延ばされた肘と、右の腕に密着するよう付けられた左の拳によって天高く屹立した刀身。

そのあまりにも有名すぎる構えと流派を、剣術を嗜む者で知らぬ者はいまい。

“ 自顕流 右蜻蛉か ”

初太刀のみを追求した狂気の剣を前に、高町恭也は右の手に提げた刀の鏗を静かに鳴らす。

完成された御神の剣士相手では、他の流派など言わずもがな、室内という限定された空間であれば、銃火器を装備した兵百人でさえ相手取るとされている。

そして、その最たる理由が御神流 奥義之歩法『神速』にある。

通常とは桁違いの速度で動く足捌きは、『縮地』に通ずる物があるが、この技の特色は周囲の動きを停滞化させる程の動体視力こそ、筆頭に挙げるべきだろう。

人間は五感で周囲の状況を判断する。だが、視覚が凄まじい集中力を発揮している場合には、脳が他の感覚を遮断し視覚にのみ全ての能力を注ぎ込む状態が起こる。

その時、通常では考えられないような視覚の能力が発揮され、本来見える筈のない速度でも認識できるようになるという。

所謂、野球のバッターが『ボールが止まって見える』と言う現象がこれであり、事故などによる死という緊急事態を察知すると、全ての感覚が視覚に集中され、見た物を通常の数十倍の速度で処理するようになる為に、スローモーションを見たような錯覚を抱く現象と同様の物である。

この通常時では発揮しえない能力を、極度の集中状態にすること

で強制的に發揮させるものこそが『神速』の正体。

当然、そのような感覚に身体が追いつく事はない訳だが、御神の剣士は潜在的にそれを引き揚げる。平時においては三割しか引き出せぬ肉体の限界を十割まで引き出す。事によって実現させる。

故に、高町恭也は対策を決めていた。自顕流はその威力の凄まじさ故に、対策として初太刀は外せと言う。

一撃必殺を念頭に置いた剣なればこそ、二の太刀に繋ぐ技が劣る。ましてや小太刀とは防御の剣。両者の相性は、それこそ最悪といつて差し支えぬだろう。

そして、恭也は駆ける。

如何な達人とて同門意外には破れぬとされる『神速』に、恭也は二重がけを行った。

人体と動体視力の倍加によつて生み出された『神速』は最早人の身に捉えられる事は敵わず、敵は全てを終えた後に死を感じ取る。

されど、恭也の真の技はそこに無い。計六の御神流奥義の内、彼が習得せし、三つの奥義。神速、虎切……そして、

小太刀二刀御神流 奥技之六 『薙旋』

それは正に死の斬風であり、芸術にまで昇華された銀の閃光だった。

未だ鞘より解き放たれる事の無かった一振り、恭也は右手にて抜き放つ。

一体何時持ち替えたのか。右の手に有った筈の刀は左へと持ち替えられ、頭上に掲げるが如く担がれた左手の一刀は、右蜻蛉の一撃を防ぐ楯であり、流すと同時に死を撒き散らす刃となる。

右の抜刀から始まる必殺の四連撃。

左の刃にて右蜻蛉を払うと同時、間髪入れずに二撃目を背後から

放ち、更に三、四撃目を別軌道で叩き込む。

同じ『神速』使い以外には見切る事はまず不可能の死の舞。都合三の斬撃は余すことなく北澤直也を切り刻み、達磨落としての如く胸が落ち……

……その勝利の方程式を幻視した瞬間、高町恭也の頭蓋は陥没した。

左手に掲げた刀は右蜻蛉の唐竹割を受け流し切れず、力負けした刀身の鐔は恭也自身の額にめり込む。

額が割れ、血が飛沫く。漆黒の剣はその勢いを衰えさせず、刀身を真つ二つにすると同時に頭蓋へ斬り込み、剣は魚を開くが如く、股下までするりと落ちる。

斬られたという事実さえ気付かず、高町恭也は絶命した。

“ハッ……！？”

そこで、高町恭也はようやく意識を取り戻す。

時間にして秒はおろか刹那より短き時。されど、高町恭也はこれから起こり得る勝敗を確かに幻視したのだ。

達人の立ち合いは数手先さえ予見する。今恭也には掠り傷一つさえ無い物の、このまま進めばどうなるのか、その末路を然と肌に感じ取った。

……そう。両者の相性は最悪なのだ。

小太刀とは防御の剣であり、御神流の『神速』は同門でなくば破れぬ技。

されど、例外はここに存在する。

思えば気付くべきだった。初手、奇襲も同然の『虎切』を、北澤

直也が如何にして防いだか。

重量二十キロを超える長机を、ボールを蹴り上げるが如く軽々と蹴り上げ、のみならずこの限定された空間で間合いの外へ逃れると言ふ事実。

時間にして刹那、鯉口を切った時点で蹴り上げ、刀身が鞘走った時点で間合いの外に逃れねば、回避など成功しない。

“この相手……俺の『神速』より、いや……よもやとは思うが、御神流よりも”

そう。こと四間という範囲に限り、彼を超える速度の持ち主など『紡ぎ手』はおるか『住人』にさせ存在しない。

誰よりも速く在る事。それこそが北澤直也の絶対の法。

そして、彼の業は別段速さに限った事では無い。御神の剣士が斬鉄や神速の技を心得ている様に、彼もまた同様の技を習得している。『矢止め』と『兜割り』。それは読んで字の如く、飛来する矢を落とす技と、兜を断つという単純な物でしか無い。

だが、その単純さこそ特筆すべき点なのだ。待ち構えて落とすのではなく、奇襲によって射られた矢を打ち落とす見切りと、鉄兜さえ断つ程の剛力と技。

そして、その二つの技を十全に引き出す自顕流。

未だ最奥たる『縮地法』には届かねど、右膝を壊した剣士を相手取るには充分と北澤直也は踏んだのだ。

呼吸を読まれれば終わる。剣士として息を吐き、力を出すその瞬間を狙われるのは致命傷でありながら、北澤直也は吐息を漏らす。

それは嘲笑であり、憫笑であつた。

来るならば来いと。この凍える様な真冬の入室で、彼は確かに熱を孕んだ吐息を漏らす。

“乗るな……”

当然見送る。むしろ見え透いた罠に熱を冷まされたと言って良い。踏み込めば斬られる。しかしこのまま待つていては千日手……いや、異常に気付けば確実に翠屋に居る父か神崎龍也に伝わる。

ことが露見し、包囲を待つという手もある。だが……。

“待て、何故物音がしない……？”

戸を閉めているとはいえ、聴覚などにおいても鍛えているのだ。人通りが多い方でないとはいえ、車の音一つ聞こえても良い筈。

“……屋敷その物が罠か”

そう考えれば納得がいく。だが、たととしても、それが何だと言う？ 虎穴に飛び込んだ以上、虎と会うのは必至。ましてや眼前の存在は虎ではなく鬼なのだ。

現状の装備を確認する。ジャケットの内に隠された小刀は六、両袖には飛針が十と六。

飛針にて射抜くか？ 否。腕をずらされれば心臓と喉元を防御される。

ならば狙いは眼球？ 否。片目ならばいざ知らず、両目に中る保証はない。何よりこの距離、仮に両の眼球を潰そうと、次の瞬間には斬られる。

小刀も同様の理由で使用は不可……ならば。

“『神速』を三重にかければ……相討ちには持ち込める可能性もある”

問題は、そこまでした所で相打ちに留まると言う事。

彼我の実力差は、既に先の幻視にて弁えている。正攻法では勝ち得ぬ。だが高町恭也は勝たねばならぬという想いがあった。

家族、恋人……愛する者が居るといふ事実。

それを弱さと断ずるのは真の強さを知らぬ者のみ。真に愛有らばこそ、人は活力を得る。死を超えるなど死を知らぬ愚かさには過ぎぬのだから。

故に、高町恭也は最後の暗器を手にとった。

鋼糸……本職の者ともなれば首さえ容易く跳ねる殺戮の利器。

高町恭也は対象を拘束させる程度だが、それで充分。一秒などとは言わぬ……一瞬、それこそ刹那でも時が止まるならば、その瞬間己の勝利は確定するのだから。

「……剣に身命を賭せなかつたか」

そして、それこそが最大の敗因だと気付いていたのだろうか？

鋼糸返し……鋼糸を以て戦いを制さんとした者は、己が鋼糸によってその身を束縛されたのだ。

「お前ならば……斬られても良いと思っていたのだがな」

北澤直也の右手は刀から離れ、銀の糸をその指に絡めている。既に右蜻蛉の構えはない。

乱雑に、力任せに、それこそ剣士らしからぬ大振りて剣を構え、

「六文銭は……不要だな」

一切の容赦なく、逆袈裟に斬り捨てた。

長い、不自然に長い廊下が軋むのを、玄関口より彼女は耳にして
いた。

御神流『心』……目を頼らず、音と気配によって相手の居場所を
知る技であり、彼女程の練達者となれば、戸を隔てていようと相
手がどのような構えを見せているかが読み取れる。

“微かな鏗鳴りと、柄巻きの軋み……軽い、同じ小太刀使い？”

本来ならば、彼女は戸を叩くべきではない。定時が回った時点で
父に連絡を入れ、家で待つのが正しい。だが……。

“私と恭ちゃん……二人なら勝てる！ それに、私は”

そこまで思っ、彼女は微かに俯く。気配は一つだけ。

そしてまだ見ぬこちらを窺うようにするという事は……と、最悪
の事態を想定する。

それでも。

“大丈夫。高町美由希の小太刀二刀は……恭ちゃん以外には……誰
にも、絶対負けないから”

既に高町なのはは翠屋に向かわせた。自分に出来るのは、ここか
ら兄を連れて戻るだけ。

呼吸を整え、ドアを蹴破ると共に『神速』の重ねがけを用いて廊
下を渡るうとし、

がちやりと、銃を向けられたという事に、顔を微かに歪ませた。

確かに御神流は室内であれば十火器で武装した兵百人とて相手取れる。

されど、完全無敵かつ万能な者など存在しない。銃は効かぬ？室内では無類の強さ？

成程、確かにそれは事実なのだろう。室内という空間を利用し、銃弾さえ見切れる技量は確かに脅威。

だが、だからといって銃弾に耐えられるような肉体を持っている訳でも、時を止められる訳でもない。

人である以上、決して避け得ぬ物はある。銃弾を避けると言うならば、避けられぬ状況を作れば良い。

銃弾を叩き落とすと言うならば、叩き落とせぬ数と範囲を用意すれば事足りる。

故にこの廊下には何も無い。故にこの廊下は狭い。

真つ直ぐに、一本道に。壁を壊す事も不可能ではないが、この幅では確実に肩が悶えて動きが鈍る。ならば後退か？否、それでは銃弾から逃れられぬ。

ならば勝利の鍵は前進のみであり、銃爪に指をかけるより速くその手を落とせば勝敗は決する。

銃と刀。一見すれば前者にこそ分があるように思えるが、これはあくまでも刀の間合いに銃を持つ者が存在しない事が前提である。

何故ならば刀とは構え、斬る事による二挙動。刺突であれば一挙動で動作を終えるのに対し、銃は構え、狙い、撃つという三挙動の工程を必要とする為だ。

西部劇の様な早撃ちでも行えば状況も変わるが、今回北澤直也は相手から見えている事を予見し、予め銃を床に置き、相手がドアを蹴破ると同時に蹴り上げ、手元に戻すという手を用いた。

致命的なロス。如何に段差があるとはいえ、この一瞬は互いの距離を肉薄する位置にまで縮めてしまう。

加えて、通常、銃弾を受けたとしても相手の動きは止まらない。

これは先進国の といっても、当時の西洋圏の話だが 部隊が密林の原住民と交戦した際に判った事例であるが、銃弾が身体を貫通して尚、原住民は槍で兵を貫き、部隊に甚大な損害を与えたという。

『神速』を用い、慣性に突き動かされた美由希を止めようとするならば、突撃銃や拳銃では無意味に尽き……

……そんな戦場の常識を忘れるほど、北澤直也は抜けていない。

『MPS AA-12』。米国にて開発されたAA-12 散弾銃に改良を重ねたドイツ製フルオート散弾銃。

先の原住民への対策として前線に配置されたのが、対象を後方へ吹き飛ばす散弾銃であり、その散弾銃における最凶、最悪の名を冠する物こそ、このAA-12に他ならない。

毎分三百五十発。特殊弾頭を用いれば〇・五インチもの鉄板を貫通する悪魔の武器を、たった一人の女性に叩き込む。

狙いなど必要ない。四方を粉碎し、その破壊力を見せつけた殺戮の礫は、うら若き女剣士を倒すには過剰しか言えぬほどだったから。

“ 実戦経験……その乏しさが敗因か ”

加えて言うならば、銃器の知識と認識が甘かったという事だろう。無理からぬことである。この日本において、一体何処の誰が平然と軍部ですら陸戦協定等で扱いに渋る銃を持っていると想像できるのか。

「……惜しかったな」

後一瞬。もし銃という物に臆せず、正しい認識さえ持っていたならば、勝敗は逆転していた。

冷静であろうとする意識が逆に身体を硬直させてしまった……結果を見れば慰めにもならぬ事だが、それでも床に伏す立場が逆転するという結末もあり得たのだ。

「……………」

僅かに、ほんの僅かの女性が動いた様に見えた。ただそれだけの理由。しかし、止めを刺すまでが戦場の勝敗を決するルールである。既に倒れた女性に、彼は残る全ての弾を叩き込んだ。

全てを終え、悠々と北澤直也は卓に着く。

そこに並ぶは、勝栗、打鮑、昆布、盃……四方膳と称され、合戦に赴く武将が食すものである。

そして卓の横、客間には毛布を頭から爪先までかけた男女が横臥していた。

それは彼なりの気遣いか、それとも気まぐれであったのか。床に伏した男女を横目に、口元を釣り上げて盃を煽る。

それは正しく鬼の笑み。紛う事無き剣鬼として、鬼は飲み干した盃を噛み砕く。

「黙って斬りかければ良い物を……………」

言葉と共に、縁側へと砕けた盃を投げる、同時、一閃。

それは大砲の如き突進であり、振るわれた拳は素手でありながらも桜の木による建材を砕き切る。

『徹』。表面ではなく内部に衝撃を加える技であり、これを受けれ

ば最期、人骨など蜘蛛の巣の如く碎けて息絶えよう。

「得物が無いなら言え」

だが、その一撃を難なく躲し、客間から石庭へと躍り出た北澤直也は、先程までと位置を逆転させた相手に小太刀を投げた。

「兄妹揃って寝かせてやったというのに、静かにしてやれんのか？」

返答は無数の飛針と小刀。都合二十にもなるそれらは北澤直也の背後にある壁に根元まで突き刺さり、松の木へと向かった小刀に至っては大木を貫通して壁にめり込む。

“高町士郎……高町家の家長にして、高町恭也の師”

眼前にて鬼面の如き相貌を向ける相手に、北澤直也は書類と照らし合わせるかのように事務的な確認を済ませる。

「北澤直也……お前が何を思って、こんな真似をしているのかは知らない」

それでも赦せぬと、自分の中で、決してしてはならない事をお前はしたのだと。憤怒に燃える瞳で高町士郎は語る。

「どんなお題目があろうと、どんな願いを持っていようとも」

ただ静かに。二刀の鞘をすらりと抜いて、

「俺が守っている相手に、危険をもたらした以上……俺の前に立った以上。」

俺は 誰であろうと、ブった斬る」

そうして彼は名乗る。父でなく、高町士郎でなく、御神不破流の剣士として。

「不破士郎は……お前を斬る」

「ならば、斬ってみろ」

この悪鬼を、この剣鬼を……昔語りの如くに！！

「この……宇川直也をな」

決して名乗る事のない名。名乗らぬと堅く決めた名を互いに名乗る。

昔語りの如く、不破士郎は鬼を退治せんがため。

昔語りの如く、清廉なる士を打ち倒さんがため。

剣士と剣鬼は、己が得物を構えた。

「……………！？」

まず始めに感じたのは驚愕。『神速』という体技の凄まじさも然る事ながら、同一の流派と言えども人が変われば威力も異なる。

不破士郎の十八番にして驚異の速度を誇る『虎切』。その斬撃はおろか、移動さえ宇川直也には微かにしか映らない。

それは高町恭也の『虎切』を見切り、間合いから難なく脱した彼にしてみればさぞ脅威に映った事だろう。

三重にかけられた『神速』もはや人間の赦される極限の絶技。たとえ最速の法を持つ北澤直也と言えど、止まる事など許されない。

避ける、避ける、避けて避けて避け続ける……！！

死の流星と化した不破士郎は銃弾さえ上回るのではという速度を持つが、何より恐るべきは古流特有の足捌きにある。

単純な速度だけでは無い。

視線ではなく意識の死角。呼吸や思考の微かな乱れ、空隙化した意識の虚に滑り込むことで敵を制すその技は、宇川直也も持ち得ており、それ故に性能に勝る神崎龍也さえ斬り捨てられた。

だが、この相手にそれは通じない。

如何に最速の法を持つとも、己の術理を一つ無に帰された様な物。

万能の術理など無い。それは宇川直也が先に相手取った二名の剣士に証明した事であり、彼自身にも当て嵌まるのだ。

「どうした……？ 俺の子を破った割、随分と臆病だな」
「抜かせ」

その徴発を確たる挑戦と受け取ったのだろう。斬撃の隙間を的確に縫い、漆黒の剣閃が刃を滑らせる。

「……！？」
「ふ……」

それは笑みだったのだろうか？ 真一文字に閉じられた口は、微

かに開いて吐息を漏らす。

「どうした……俺の剣を止めた割、随分と汗が冷たいが」
「抜かせ」

斬鉄さえ容易く可能にせしめる一撃を小太刀が止める。
同時、『轍』の技法を纏わせた刃が宙を薙ぐ。

“やはり打ち合わんか……”

虚空を斬るに留まった刃に、不破士郎は熟考する。『轍』を纏う
刀剣は防御の上から相手を崩す。

この技法を完璧に用いれば相手の攻撃をこちらが防御した上でも
それなりの効果を発揮するが、おそらく相手は二度とそのような真
似はすまい。

とは言え、それは当然の事だろう。本来の宇川直也の得物は打刀
折れず曲らずと称される日本刀だが、実際のところ、『折れるは
粗刀、曲るは良刀』というように、折れ、曲るのが刀の宿命。

切れ味こそ鋭くも、それは達人が扱えばの話。素人が扱えば刃が
曲り、構造上の弱点である峰を叩かれれば脆く折れる。

不破士郎が強度に勝る宇川直也の剣を防げているのは、『徹』の
応用と全身をバネに見立てて衝撃を緩和、吸収しているに過ぎない。
でなくば最初の一合で二刀の小太刀は碎けていた筈なのだから。

そして、宇川直也はそんな技法は持ち得ていない。
刀の脆さなど弁えているし、『受ける間があらば斬れ』というの
が剣術家の常識である。

それは無毀なる湖光という無双の宝剣を手にした今でも変わらな
い。

斬るか斬られるかの極限。間合いを読み、思考を読み、場を制し、
敵を制し、己を制する剣技こそ宇川直也の得意とする領分だから。

故に躲す。故に避ける。刃である以上、刃である以上は触れねばならぬ。

その身を斬り裂くに刃を突き立てねば始まらぬ。

それを臆病と、そう呼ぶ事など断じて出来ない。何故なら不破士郎と宇川直也の間合いは互いに触れ合っているのだから。

「ッ……………」

微かに漏れる吐息はどちらか。或いは両方だったのか。まるで演舞でも舞つかのように、互いの刃は触れ合わない。

刃は美しい双輪を描き、黒と銀の線が雪降る宙に彩られる。

ただし両者に遊びはない。狙いは常に互いに動脈。一寸でも斬り込めば白の毛布は赤となり、その身を野に晒す。

死の舞踏。そこに終止符を入れるべく、互いは遂に意を決した。

どちらからとなく互いに離れる。雪風よりなお冷たく殺意に凍える瞳を向け合うと、不破士郎は静かに告げる。

「いい加減にしたらどうだ……奇を銜うのも良いが、間抜けの首を落とすのは性に合わないんでな」

その言葉の意味する所、それを読みとれぬ程、宇川直也は益暗では無い。

貴様の真の得物を持ってという真意。

手を抜くなと告げる視線に、良いだろうと、言葉ではなく視線だけで応えた。

宇川直也の爪先が白砂利を蹴り上げる。初めからここが戦場になる事を予見していたのか。それとも使う気自体がなかったのか。

その七尺余りの手槍を右手に、彼はここに真の構えを見せた。

右手に槍を。左手に剣を。

北澤直也が亡き師を打倒せんと編み出し、宇川を継ぐに至った戦闘法。

それがどれ程常軌を逸するか、武に通じずとも判るだろう。

二刀流という物がある……これは宮本武蔵などが有名だが、あくまでこれは稽古法であって実戦向きではない。

必要とされる腕力の理想値と、常人の出せる腕力の閾値に落差が生じる為である。

元より日本刀とは両手剣。片手で扱おうにも、致命傷を負わせるまで斬り込めるものではないのだから。

だが、その不足を彼は補った。『兜割り』……鉄をも断つ剛腕を得たのはあくまでこの戦闘法を会得する為の過程に過ぎぬ。

模倣に全てを委ねた彼が唯一自ら編み出した物。

唯一無二の死神たらしめる得物を手にすると同時　不破士郎は極限の疾走を見せた。

白刃が視界を埋め尽くす。

『薙旋』による神速の四連撃に『轍』を重掛けする『雷轍』の複合。回避も防御も赦さぬ全方位連撃。御神流の最奥『閃』にこそ届かねど、紛う事無き死の剣舞。

されど、その全てを受け止めようとは宇川直也も思わない。

受け切れぬなら出がかりを潰せ。相手の一撃よりなお速く、己の一撃で潰さんと、彼は槍を奔らせる。

されど、その刺突は届かない……当然だ。片手の槍など曲芸同然。一度突けば長さ故に容易には引き戻せぬし、両の手より威力も速度

も劣るもの。

裡より潜り込まんとする不破士郎の斬撃が見える。死の息吹を耳元に感じる。その刹那に……

「乗ったな…… 不破士郎」

微かに。意識しなければ聞こえぬ程の音量で、勝利を宣告した。

「……………！？」

その言葉に不破士郎は気付く。己は敵の死角である懐に潜り込んだのではない。

敵にとつて格好の位置である間合いへ誘導されたのだと。

槍の狙いは喉仏、軽く頭を沈ませれば避けるには事足りる。だがその一瞬、その瞬間だけは速度が鈍る。それを見て取れぬほど、宇川直也は甘くない。

既に槍は手を離れ、剣を大上段へと持ち替えている。もしこれが沈むという動作ではなく、槍の外側へ回り込む動作であれば事態は逆転していた。

尤も、それが判っていたが故に、敢えて屈みやすい喉仏に的を絞ったのだが。

「シイ……！！」

だが、それでも不破士郎の腕は止まらない。後一步、否半歩……届け届けと、祈る様に刃を振り抜き……

「見事……と言う他なかつたな」

倒れた不破士郎に対し、宇川直也は静かに告げた。

ただし、彼とて無事では済まされない。あの直前、刃が届かぬと悟った際に不破士郎は自らの小太刀を飛ばし、宇川直也の脇腹を裂いた。

首一つとなつても喉元を食い千切らんとする猛禽の如きその執念こそ、剣鬼が贅辞を贈つた要因である。

「だが……」

嗚呼。だが、なのだ……やはり貴様は主役ではない。脇役らしく地を這えと、鬼は呵々と笑みを零す。

「……ここは寒い。子と仲良く寝かせてやろう……く、クククク」

そうして彼はやはり笑みを零す。何処までも、何処までも。狂ったように。狂う事を望む様に。

剣鬼は静かに、抑えきれぬ笑みを零すのだった。

019 剣士と剣鬼（後書き）

c・m・「戦闘民族高町家！ まさかの敗退！？ お待たせいたしました、第19話、投稿完了！！」

暁葉「……もうどうすんだよアイツ。手がつけらんねえじゃん」

c・m・「……ごめんなさい。正直やり過ぎたと反省してます」

暁葉「お前のせいで雪降る聖夜が大参事だよ！？ 収集つかねえよこれ！！」

c・m・「蒐集だけに？」

暁葉「上手い事言っただつもりか！？ それで済むと思ってんのか！？」

c・m・「いや、もう何か色々とごめんなさい」

暁葉「誰かこいつを止める……つか、どうやってあんなゲテモノ銃仕入れやがった」

c・m・「まあ、それは遠くない未来で判ります。さて、ここからは感想をいただいた皆様のお礼に移ります。

RYUZENさま、久住祐治さま、笑う男さま、Hagai
azさま、水玉さま、神崎はやて様、Kyoさま。いつもご感想を
頂き、ありがとうございます。

そして、あいでお様、出来得る限り速くしていこうと思いま

すので、これからも宜しくお願い致します」

暁葉「それでは今日はこの辺りで。失礼致します」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4064k/>

物語を紡ぐもの

2011年12月8日01時51分発行